

山ノ中遺跡

やまのなか
山ノ中遺跡

(鹿児島県鹿児島市)

2006年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島 I C～市来 I C間）の建設に伴って、平成6年度と平成7年度にかけて実施した鹿児島市西別府町に所在する山ノ中遺跡の発掘調査の記録です。

山ノ中遺跡は、急傾斜地内の小さな平坦地にあり、発掘調査によって縄文時代、古代から中・近世にわたる複合遺跡で、各時代の遺構や遺物が数多く発見されました。特に、約4,000年前の縄文時代後期前半の竪穴住居跡18軒が確認され、併せて、この時期の県内外各地域の土器が出土し、当時の文化や交流を解明するうえで貴重な資料と考えています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、鹿児島市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 上 今 常 雄

報告書抄録

書名	やまのなか 山ノ中遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XVI							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	103							
編著者名	東 和幸・関 明恵							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまのなか 山ノ中遺跡	鹿児島県 鹿児島市 西別府町 山ノ中	462012	0184	31° 35′ 45″	130° 29′ 16″	1994.4.25 ～1994.6.17 1995.6.25 ～1996.3.31	9,200m ²	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
やまのなか 山ノ中遺跡	集落跡	縄文時代 早期		下剝峯式土器				
		縄文時代 後期前半	竪穴住居跡・土坑・石組み炉	指宿式土器・南福寺式土器・山ノ中タイプの土器・磨消縄文の土器・松ノ木式類似土器・磨製石斧・石鏃・石皿・磨石・凹石・敲石・軽石加工品・円盤状土製加工品・木の実			この時期の竪穴住居跡がまとまって検出されたのは初めてである。	
		弥生時代 終末期		磨製石鏃・中津野式土器				
		古代前半		須恵器・土師器・墨書土器				
		中世		陶器・青磁・白磁・砥石・轆羽口・元豊通寶・洪武通寶			小田城主郭部が山頂にある。	
		近世以降	道跡	陶磁器・キセル・カンザシ				
調査概要		山ノ中遺跡は急傾斜地の狭い緩斜面にあり、縄文時代後期前半の竪穴住居18軒、石組み炉2基、土坑数基が検出され、およそ200年間の多彩な暮らしぶりが窺える。特に、土器型式は南九州の各地域の特徴をもつものの他に、東九州から四国地方にかけて分布の中心をもつ磨消縄文土器があり、各地の交流と土器の併行関係を示唆する資料を提供した。また、石器組成から狩猟よりも樹木伐採や植物加工に重きを置いた生活であったことを窺わせる。その他の時代には、短期間の生活痕跡しかみられなかった。						



第1図 山ノ中遺跡の位置

例 言

- 1 本報告書は、平成6年度・平成7年度に、鹿児島県立埋蔵文化財センターが建設省鹿児島国道工事事務所の受託事業として実施した「南九州西回り自動車道鹿児島道路建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査の組織は、「第Ⅱ章 調査の経緯」の中に記した。
- 3 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・写真図版の番号は一致する。
- 5 本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。
- 6 遺構・遺物の実測や製図は主として担当職員のもと臨時職員及び委託業者が行った。石器類の実測製図については、(株)パスコ及び九州文化財研究所に委託した。
- 7 本報告書に使用した写真図版のうち、遺構撮影は現場担当者が主に行い、遺物撮影については当センターの吉岡康弘が主に行った。
- 8 胎土分析及土器付着煤の年代測定については、清水芳裕先生と学術創成グループの方々に玉稿を賜った。なお、両報告とも写真や分析データもいただいたのであるが、割愛させていただいたこととお断りしておく。
- 9 炭化種子の一部については渡辺誠先生にご教示いただき、各種科学分析については(株)パレオ・ラボに依頼し、その分析結果を掲載した。
- 10 石器の分類及び石材鑑定は東が行ったものを、当センターの宮田栄二が確認した。
- 11 土師器及び須恵器の分類については東が行ったものを、当センターの中村和美が確認した。
- 12 鉄製品の保存処理及び赤色顔料の分析については、元当センター職員の大久保浩二が行った。
- 13 データの処理等については、当センターの内村光伸と馬籠亮道が行った。
- 14 遺構及び遺物の該当時期は、目次の各時期に合わせてあるが、レイアウト等の都合上必ずしもそうでない場合もある。記述及び表等で確認していただきたい。
- 15 出土した遺物は、報告書作成後、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。
- 16 本報告書の執筆・編集は、東和幸・関明恵が行った。各項目の執筆は、陶磁器関係を関明恵が行い、それ以外の文責は東である。

凡 例

- 1 調査時点での遺構名と本報告書での遺構名が変わったものについては、本文でも示してあるが、以下のとおりである。
2号土坑→15号住居跡 3号土坑→16号住居跡 4号土坑①→17号住居跡 4号土坑②→18号住居跡
- 2 調査時点での遺物取上番号と本報告書での遺物番号の対応は、各遺物観察表に示してある。ただし、複数点数が接合した場合、最後の遺物取上番号しか掲げず、出土状況図の中で接合線を用いて表示する。
- 3 調査日誌抄は、調査時点で認識していたことをそのまま書いているので、本文の内容と異なる部分もある。
- 4 各遺構については、方位、スケール、公共座標を表示し、断面図には絶対高を記す。
- 5 断面を切った部分は、▶ー、ー◀で示し、断面が複数ある断面の場合は、アルファベットを添えた。
- 6 遺構内で出土した遺物については、遺構図に図示しているものもあるが、図のスケールは不統一である。出土遺物の頁で、時代順あるいは種類ごとに載せてあるので、参照されたい。遺物番号と同じである。
- 7 各グリッド状況図での遺物ドットの種類は下記の通りである。

I類土器	●	石斧類	□
II類土器	▲	磨石・石皿類	◇
III類土器	■	石鏃・石匙	●
IV類土器	◆	その他の石器	▲
その他の縄文土器	○	弥生時代の遺物	■
円盤状土製加工品	△	古代以降の遺物	◆
- 8 遺物ドットに番号が入っていないものは、図化はしていないけれども器種が明らかな遺物である。特に磨消縄文土器（II類）を提示してある。
- 9 遺物及び遺構の中には、掲載した名称として確証の得られていないものもあるが、注意を喚起する意味で載せているものもある。その際は「？」を付けている。
- 10 遺物及び遺構の説明について、客観的な報告部分のみを本文に書いて、調査担当者の主観的な考え及び考察的な内容については後の章でまとめるのが一般的なのかもしれない。しかし、客観的な内容については図面及び表等で表現されていることもあり、考察するには短い内容であるものについて、本文中に主観的な記述をしてある。
- 11 本文中で参考にした文献については、斜体文字で示してある。
- 12 公共座標の数値は、座標系第II系の北緯33度・東経131度を基準にしてある。ただし、発掘調査時に現地で測り出したものではなく、工事杭の入った地形図とグリッド図を重ねて復元したものである。したがって、多少の誤差はあるものの±1 m以下の誤差にはおさまるものとする。

目 次

序 文

報告書抄録

例 言

凡 例

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至るまでの経過…………… 1

第 2 節 路線内遺跡の概要…………… 1

第 II 章 調査の経緯

第 1 節 調査の経過…………… 6

第 2 節 調査の組織…………… 6

第 3 節 調査の概要と調査経過…………… 8

第 III 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置と立地…………… 15

第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境…………… 15

第 IV 章 発掘調査の概要

第 1 節 発掘調査の方法…………… 22

第 2 節 遺跡の層位…………… 22

第 3 節 各グリッドの状況…………… 27

第 V 章 発掘調査の成果

第 1 節 縄文時代の成果

1. 縄文時代の検出遺構…………… 59

(1) 竪穴住居跡 (2) 土坑 (3) 炉跡

2. 縄文時代の出土遺物…………… 83

(1) 縄文土器

① I A 類 ② I B 類 ③ II 類 ④ III 類 ⑤ IV 類 ⑥ V 類 ⑦ 底部 ⑧ 下剥峯式土器

(2) 土製品及び木の実

① 円盤状土製加工品 ② 底部圧痕 ③ 底部白色付着物 ④ 木の实

(3) 縄文石器

① 石鏃 ② 石匙 ③ 剥片石器 ④ 石製垂飾品 ⑤ ノミ形磨製石器 ⑥ 磨製石斧 ⑦ 敲石

⑧ 磨石類 ⑨ 石皿 ⑩ 砥石 ⑪ 擦切石器 ⑫ 軽石製品

第 2 節 弥生時代の成果…………… 217

第 3 節 古代以降の成果

1. 検出遺構…………… 219

(1) 掘り込み (2) 道跡 (3) 山頂部周辺 (4) D5 区周辺

2. 出土遺物…………… 225

(1) 土師器

(2) 須恵器

(3)陶磁器	
(4)その他の遺物	
第VI章 分析同定	
(1)山ノ中遺跡における自然科学分析……………パレオ・ラボ…	238
①放射性炭素年代測定	
②山ノ中遺跡から出土した炭化種実	
③山ノ中遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定	
(2)胎土分析……………京都大学 清水芳裕…	247
(3)鹿児島県山ノ中遺跡の ^{14}C 年代測定 ……学術創成研究グループ…	248
第VII章 調査のまとめ……………	249

挿 図 目 次

第 1 図 山ノ中遺跡の位置	第 25 図 グリッド状況図 (10) H19区 …	38
第 2 図 南九州自動車道建設に伴う埋蔵 文化財発掘調査遺跡位置図 ……	第 26 図 グリッド状況図 (11) G19区 …	39
5	第 27 図 グリッド状況図 (12) F19区 …	40
第 3 図 年度ごとの調査位置図 ……	第 28 図 グリッド状況図 (13) E19区 …	41
9	第 29 図 グリッド状況図 (14) D19区 …	42
第 4 図 月ごとの調査位置図 (1) ……	第 30 図 北側土層断面図 (3)	
12	H・G・F・E-19区……………	43
第 5 図 月ごとの調査位置図 (2) ……	第 31 図 グリッド状況図 (15) H18区 …	44
13	第 32 図 グリッド状況図 (16) G18区 …	45
第 6 図 山ノ中遺跡の位置と4,000年前の 遺跡 ……	第 33 図 グリッド状況図 (17) F18区 …	46
16	第 34 図 グリッド状況図 (18) E18区 …	47
第 7 図 周辺遺跡地図 ……	第 35 図 グリッド状況図 (19) D18区 …	48
18	第 36 図 北側土層断面図 (4)	
第 8 図 周辺見取り図と字図 ……	G・F・E-18区 ……	49
20	第 37 図 グリッド状況図 (20) G17区 …	50
第 9 図 山ノ中遺跡地形図 ……	第 38 図 グリッド状況図 (21) F17区 …	51
21	第 39 図 グリッド状況図 (22) E17区 …	52
第 10 図 グリッド配置図 ……	第 40 図 北側土層断面図 (5)	
23	G・F-17区 ……	53
第 11 図 自動車道完成後の位置図 ……	第 41 図 グリッド状況図 (23) G16区 …	54
24	第 42 図 グリッド状況図 (24) F16区 …	55
第 12 図 基本土層図 ……	第 43 図 グリッド状況図 (25) H15区 …	56
25	第 44 図 グリッド状況図 (26) G15区 …	57
第 13 図 15区～21区の状況図 ……	第 45 図 北側土層断面図 (6)	
26	G・F-16・G15区 ……	58
第 14 図 グリッド状況図 (1) G21区 …	第 46 図 縄文時代後期前半遺構配置図 …	60
27	第 47 図 1号住居跡 ……	61
第 15 図 グリッド状況図 (2) F21区 …	第 48 図 2号住居跡 ……	62
28		
第 16 図 グリッド状況図 (3) E21区 …		
29		
第 17 図 グリッド状況図 (4) D21区 …		
30		
第 18 図 北側土層断面図 (1)		
G・F・E-21区 ……		
31		
第 19 図 グリッド状況図 (5) H20区 …		
32		
第 20 図 グリッド状況図 (6) G20区 …		
33		
第 21 図 グリッド状況図 (7) F20区 …		
34		
第 22 図 グリッド状況図 (8) E20区 …		
35		
第 23 図 グリッド状況図 (9) D20区 …		
36		
第 24 図 北側土層断面図 (2)		
H・G・F・E-20区……………		
37		

第 49 図	3 号住居跡	63	第 89 図	縄文土器 (22)	105
第 50 図	4 号住居跡	64	第 90 図	縄文土器 (23)	107
第 51 図	5 号住居跡	65	第 91 図	縄文土器 (24)	108
第 52 図	6 号住居跡	66	第 92 図	縄文土器 (25)	109
第 53 図	7 号住居跡	67	第 93 図	縄文土器 (26)	110
第 54 図	8 号住居跡	68	第 94 図	縄文土器 (27)	111
第 55 図	9 号住居跡	69	第 95 図	縄文土器 (28)	112
第 56 図	10号住居跡	70	第 96 図	縄文土器 (29)	113
第 57 図	11号住居跡	71	第 97 図	縄文土器 (30)	114
第 58 図	12号住居跡	72	第 98 図	縄文土器 (31)	115
第 59 図	13号住居跡	73	第 99 図	縄文土器 (32)	116
第 60 図	14号住居跡	74	第100図	縄文土器 (33)	117
第 61 図	15号住居跡	75	第101図	縄文土器 (34)	118
第 62 図	16号住居跡	76	第102図	縄文土器 (35)	119
第 63 図	17号住居跡	77	第103図	縄文土器 (36)	120
第 64 図	18号住居跡	78	第104図	縄文土器 (37)	121
第 65 図	土坑 (6・7・8・9・10号)	79	第105図	縄文土器 (38)	122
第 66 図	土坑 (11・12号)	80	第106図	縄文土器 (39)	123
第 67 図	炉跡	82	第107図	縄文土器 (40)	124
第 68 図	縄文土器 (1)	84	第108図	縄文土器 (41)	125
第 69 図	縄文土器 (2)	85	第109図	縄文土器 (42)	126
第 70 図	縄文土器 (3)	86	第110図	縄文土器 (43)	127
第 71 図	縄文土器 (4)	87	第111図	縄文土器 (44)	128
第 72 図	縄文土器 (5)	88	第112図	縄文土器 (45)	129
第 73 図	縄文土器 (6)	89	第113図	縄文土器 (46)	130
第 74 図	縄文土器 (7)	90	第114図	縄文土器 (47)	131
第 75 図	縄文土器 (8)	91	第115図	縄文土器 (48)	132
第 76 図	縄文土器 (9)	92	第116図	縄文土器 (49)	133
第 77 図	縄文土器 (10)	93	第117図	縄文土器 (50)	134
第 78 図	縄文土器 (11)	94	第118図	縄文土器 (51)	135
第 79 図	縄文土器 (12)	95	第119図	縄文土器 (52)	136
第 80 図	縄文土器 (13)	96	第120図	縄文土器 (53)	137
第 81 図	縄文土器 (14)	97	第121図	縄文土器 (54)	138
第 82 図	縄文土器 (15)	98	第122図	縄文土器 (55)	139
第 83 図	縄文土器 (16)	99	第123図	縄文土器 (56)	140
第 84 図	縄文土器 (17)	100	第124図	縄文土器 (57)	141
第 85 図	縄文土器 (18)	101	第125図	縄文土器 (58)	142
第 86 図	縄文土器 (19)	102	第126図	縄文土器 (59)	144
第 87 図	縄文土器 (20)	103	第127図	縄文土器 (60)	145
第 88 図	縄文土器 (21)	104	第128図	縄文土器 (61)	146

第129図	円盤状土製加工品（1）	154	第165図	石器（32）	196
第130図	円盤状土製加工品（2）	155	第166図	石器（33）	197
第131図	円盤状土製加工品（3）	156	第167図	石器（34）	198
第132図	円盤状土製加工品（4）	157	第168図	石器（35）	199
第133図	底部圧痕のいろいろ	161	第169図	石器（36）	200
第134図	石器（1）	165	第170図	石器（37）	201
第135図	石器（2）	166	第171図	石器（38）	202
第136図	石器（3）	167	第172図	石器（39）	203
第137図	石器（4）	168	第173図	石器（40）	204
第138図	石器（5）	168	第174図	石器（41）	205
第139図	石器（6）	169	第175図	石器（42）	206
第140図	石器（7）	170	第176図	石器（43）	207
第141図	石器（8）	171	第177図	石器（44）	208
第142図	石器（9）	172	第178図	石器（45）	209
第143図	石器（10）	173	第179図	石器（46）	210
第144図	石器（11）	174	第180図	石器（47）	211
第145図	石器（12）	175	第181図	弥生時代の遺物	218
第146図	石器（13）	176	第182図	古代以降の遺構	220
第147図	石器（14）	177	第183図	表土下の掘り込み	221
第148図	石器（15）	178	第184図	腐葉土除去後の道跡	222
第149図	石器（16）	179	第185図	小田城跡主郭部平面図	223
第150図	石器（17）	180	第186図	9区周辺の調査	224
第151図	石器（18）	181	第187図	G9区軽石集中部の位置	224
第152図	石器（19）	182	第188図	D5区周辺の調査	225
第153図	石器（20）	183	第189図	古代の遺物（1）	226
第154図	石器（21）	184	第190図	古代の遺物（2）	227
第155図	石器（22）	185	第191図	古代の遺物（3）	229
第156図	石器（23）	186	第192図	陶磁器（1）	231
第157図	石器（24）	187	第193図	陶磁器（2）	232
第158図	石器（25）	188	第194図	陶磁器（3）	233
第159図	石器（26）	189	第195図	中世以降の遺物（1）	235
第160図	石器（27）	190	第196図	中世以降の遺物（2）	237
第161図	石器（28）	191	第197図	山ノ中タイプの文様分布図	249
第162図	石器（29）	193	第198図	出土層位ごとの縄文土器	250
第163図	石器（30）	194	第199図	山ノ中遺跡で出土した 各地の土器	256
第164図	石器（31）	195			

表 目 次

表1	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	4
----	----------------------------	---

表 2 周辺遺跡地名表（1）	17	表12 円盤状土製加工品観察表（3）	160
表 3 周辺遺跡地名表（2）	19	表13 出土石器観察表（1）	212
表 4 出土土器観察表（1）	147	表14 出土石器観察表（2）	213
表 5 出土土器観察表（2）	148	表15 出土石器観察表（3）	214
表 6 出土土器観察表（3）	149	表16 出土石器観察表（4）	215
表 7 出土土器観察表（4）	150	表17 出土石器観察表（5）	216
表 8 出土土器観察表（5）	151	表18 弥生時代遺物観察表	217
表 9 出土土器観察表（6）	152	表19 古代遺物観察表	230
表10 円盤状土製加工品観察表（1）	158	表20 陶磁器観察表	234
表11 円盤状土製加工品観察表（2）	159	表21 その他の遺物観察表	236

写真図版目次

写真図版 1	257	写真図版25	281
写真図版 2	258	写真図版26	282
写真図版 3	259	写真図版27	283
写真図版 4	260	写真図版28	284
写真図版 5	261	写真図版29	285
写真図版 6	262	写真図版30	286
写真図版 7	263	写真図版31	287
写真図版 8	264	写真図版32	288
写真図版 9	265	写真図版33	289
写真図版10	266	写真図版34	290
写真図版11	267	写真図版35	291
写真図版12	268	写真図版36	292
写真図版13	269	写真図版37	293
写真図版14	270	写真図版38	294
写真図版15	271	写真図版39	295
写真図版16	272	写真図版40	296
写真図版17	273	写真図版41	297
写真図版18	274	写真図版42	298
写真図版19	275	写真図版43	299
写真図版20	276	写真図版44	300
写真図版21	277	写真図版45	301
写真図版22	278	写真図版46	302
写真図版23	279	写真図版47	303
写真図版24	280	写真図版48	304

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局(中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称)は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課(組織改革により平成8年度より文化財課に改称)に照会した。この計画に伴い、文化課が平成2年8月に鹿児島西IC～伊集院IC間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査及び本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成3年度から平成8年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内(鹿児島西IC～伊集院IC)の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 路線内遺跡の概要

- 1 山ノ中 鹿児島市西別府町山ノ中に所在し、標高100～133mの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で、縄文時代後期前半の竪穴住居跡18軒が検出された。出土土器は指宿式土器に先行する土器が主体となり、南福寺式土器や磨消縄文土器、それに指宿式土器が少量出土した。また、胎土や色調は南九州的であるものの高知県でみられる松ノ木式土器と共通の特徴をもつ土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他、弥生時代の磨製石鏃や終末期の中津野式土器、平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中・近世では道跡が検出され、陶磁器や古銭も出土した。本報告書で詳述する。
- 2 宮 尾 鹿児島市石谷町字宮尾に所在し、仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200mの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック1か所、縄文時代では早期の集石4基と平椀式・塞ノ神式・条痕文土器、石鏃・石匙・石皿などが出土したほか、後期と推定される落とし穴を主とする土坑101基が検出された。その他、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡1棟が焼土域7か所や土師器とともに検出された。平成15年度に報告書が刊行された。
- 3 仁田尾 鹿児島市石谷町字仁田尾・高塚に所在し、標高約190mのシラス台地上に立地する。調査面積は55,000㎡である。旧石器時代(ナイフ形石器文化・細石刃文化)、縄文時代(草創期～晩期)、平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43か所のブロック、56基の礫群と2万点を越える遺物が出土してい

る。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・搔器・削器・彫器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位から68か所のブロック、6基の礫群、16基の落とし穴と9万点を上回る遺物が出土した。縄文時代では、遺構が集石10基（早期4，前～後期6），土坑11基（早期7，晚期4），落とし穴2基（晚期）が検出され、また、アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曾畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式・市来式土器，（晚期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

- 4 西ノ原B 鹿児島市石谷町字西ノ原に所在し、仁田尾遺跡の隣接地で、小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約190mの痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は1,600㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群1基と14か所のブロックが検出され、ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は成川式土器であった。平成13年度に報告書が刊行された。

- 5 前山 鹿児島市石谷町字前山に所在し、標高約200mの台地北側に立地する。調査面積は9,600㎡である。遺跡は、A・B地区に分かれ、旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の二時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し、上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し、2基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が4基の礫群とともに出土した。縄文時代では、早期の吉田式土器と集石、前期の轟式土器が出土し、古墳時代では成川式土器が出土した。

- 6 杵堀 鹿児島市石谷町字杵堀に所在し、標高約195mのシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は5,900㎡である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが19か所検出され、遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石、晩期の土坑と溝状遺構が検出され、遺物は岩本式・前平式・平椀式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し、石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また、古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。平成13年度に報告書が刊行された。

- 7 前原 鹿児島市福山町字前原・鬼ヶ迫上に所在し、標高は約180mの舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は53,200㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが、主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構はA・B・Cの三地区に分けられる。（A）12基の竪穴住居跡が2支群に分かれ、連穴土坑を含む土坑約130基

と集石14基が、前平式・石坂式土器と共に検出された。(B) 竪穴住居跡13軒、連穴土坑35基、土坑45基、集石4基、祭祀遺構1基と幅1.5～2mの道跡2条が前平式・吉田式・石坂式土器と共に検出された。(C) 竪穴住居跡3軒、土坑131基、落とし穴1基が吉田式・石坂式土器と共に検出された。石器は、石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・軽石製品・石剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では、塞ノ神式土器が落とし穴2基、溝1条と共に出土し、押型文土器・手向山式土器も出土した。また、縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に、前期の曾畑式土器も少量出土した。

- 8 フミカキ 鹿児島市福山町字フミカキに所在し、標高約170mのシラス台地上に立地する。調査面積は7,200㎡で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑2基・集石10基が検出され、早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曾畑式・轟式土器、晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また、弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。平成15年度に報告書が刊行された。
- 9 山下堀頭 鹿児島市福山町字山下堀頭に所在し、シラス台地に囲まれた開析谷の標高約133mの台地裾部に立地する。調査面積は5,500㎡で、縄文時代前期の曾畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居が3軒検出され、遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し、周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が1基検出され、主体部からはなにも出土しなかったが、周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

※ 刊行報告書

『戸堀遺跡・西ノ原B遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(30) 2001.3

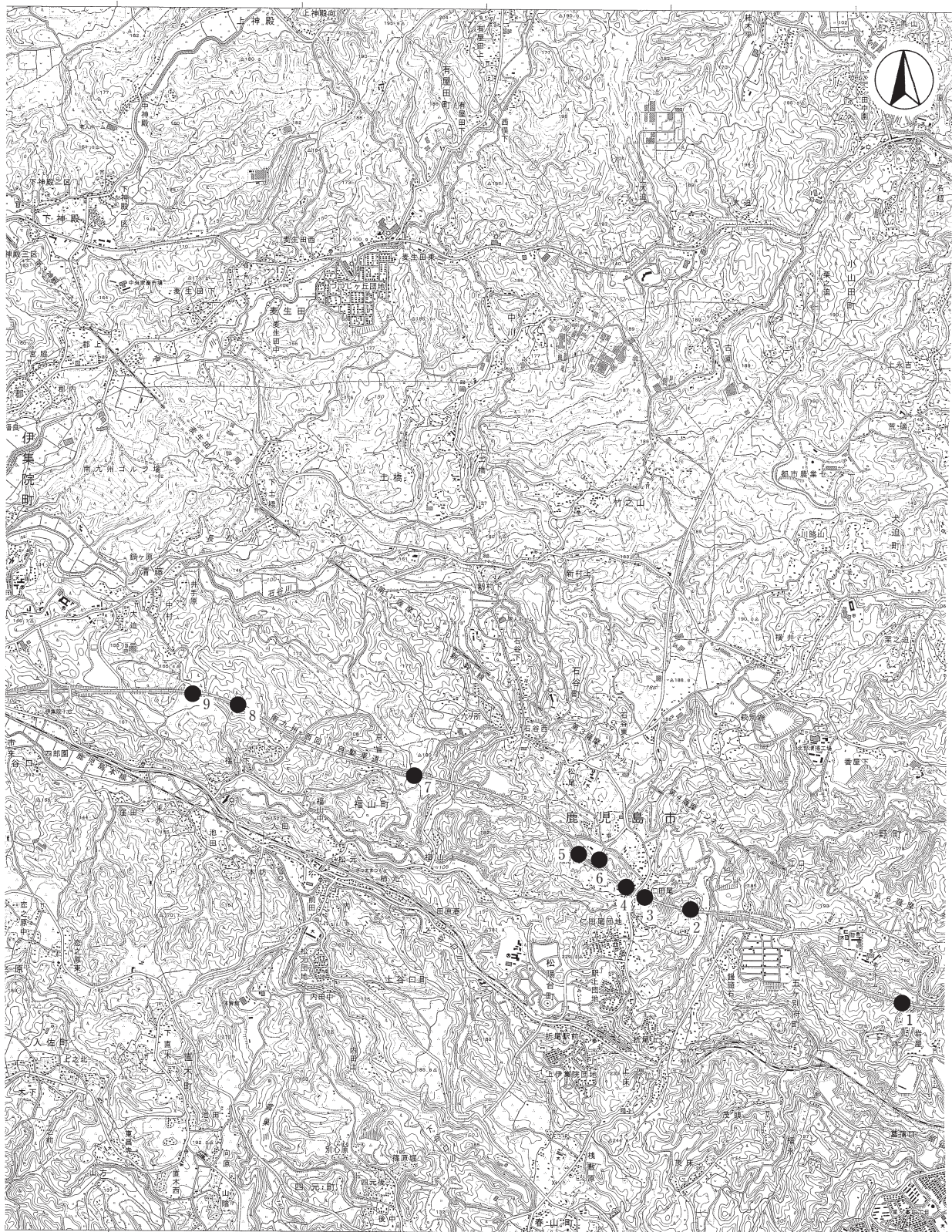
『宮尾遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(73) 2004.3

『フミカキ遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(74) 2004.3

『山下堀頭遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(95) 2005.3

表1 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表 (鹿児島西ⅠC～伊集院ⅠC)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	調査員	時 代	概 要
1	山ノ中	鹿児島市 西別府町	9,200	H6,4～6 H7,6 ～H8,3	東 菅牟田 西園	縄文 弥生 平安 中世 近代	住居跡・土坑・炉跡, 南福寺式・出水式・指宿式・ 山ノ中タイプ・磨消縄文・松ノ木式類似・下剝峯式 土器・石鏃・石匙・剝片石器・石核・玉類・ノミ形 磨製石器・磨製石斧・敲石・磨石・石皿・砥石・擦 切石器・軽石製品 中津野式土器 土坑, 須恵器・土師器 中世陶磁器・古銭 陶磁器・煙管・簪 (県埋文センター報告書103 本報告書)
2	宮尾	鹿児島市 石谷町	8,400	H5,12 ～H6,3 H8,4～9	牛ノ濱 東 繁昌 三垣	旧石器 縄文 奈良 ・平安	剝片・碎片 集石・陥し穴・土坑, 条痕文・塞ノ神式土器 掘立柱建物跡, 須恵器・土師器 (県埋文センター報告書73 2004年刊行)
3	仁田尾	鹿児島市 石谷町	55,000	H5,4 ～H6,3 H6,4 ～H7,3 H7,7 ～H8,3	池畑・宮田 今村・寺原 園田・前村 牛ノ濱 常田・繁昌 三垣	旧石器 縄文 古墳 ～平安	礫群, 陥し穴, ブロック ナイフ・尖頭器・台形石器・細石刃核・細石刃 掘立柱建物跡・溝・集石・陥し穴・土坑, 前平式・吉田式・轟式・曾畑式・黒川式土器 掘立柱建物跡・溝, 須恵器・土師器
4	西ノ原B	鹿児島市 石谷町	1,600	H6,10～11	牛ノ濱 園田	旧石器 古墳	礫群, ナイフ・三稜尖頭器・細石刃核・細石刃 成川式土器 (県埋文センター報告書30 2001年刊行)
5	前山	鹿児島市 石谷町	9,600	H7,5 ～H8,3 H8,4～9	鶴田 桑波田 橋口・元田	旧石器 縄文 古墳	台形様石器・ナイフ・剝片尖頭器・細石刃核 前平式・轟式土器 成川式土器
6	戸堀	鹿児島市 石谷町	5,900	H4,12 ～H5,3 H5,4～6	牛ノ濱 新町・元田	旧石器 縄文 平安	細石刃核・細石刃, 溝, 前平式・平楯式・轟式・黒 川式・石槍・砥石・青磁・須恵器・土師器・石鍋 (県埋文センター報告書30 2001年刊行)
7	前原	鹿児島市 福山町	53,200	H3,10 ～H5,11 H6,1 ～H8,10	牛ノ濱 新町・前迫 前村・元田 東・園田 菅牟田	旧石器 縄文	礫群, 台形石器・三稜尖頭器・細石刃 竪穴住居跡・道跡・連穴土坑・土坑・集石, 前平式・吉田式・石坂式・押型文・黒川式土器・石 槍・石皿・磨石・石鏃・石斧 (県埋文センター報告書 2007年刊行予定)
8	フミカキ	鹿児島市 福山町	7,200	H6,10 ～H7,3 H7,5～6	東 菅牟田 西園	縄文 平安	集石, 石坂式・押型文・黒川式土器 須恵器 (県埋文センター報告書74 2004年刊行)
9	山下堀頭	鹿児島市 福山町	5,500	H6,6～10	東 菅牟田	縄文 弥生 平安	曾畑式土器 住居跡, 鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓, 須恵器 (県埋文センター報告書92 2005年刊行)



- | | | |
|----------|-----------|----------|
| 1 山ノ中遺跡 | 2 宮尾遺跡 | 3 仁田尾遺跡 |
| 4 西ノ原B遺跡 | 5 前山遺跡 | 6 朽堀遺跡 |
| 7 前原遺跡 | 10 フミカキ遺跡 | 9 山下堀頭遺跡 |

0 1000 2000 m

第2図 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の経緯

第1節 調査の経過

前述したように、建設省（国土交通省）九州建設局は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画した。この計画に伴い、平成2年8月に鹿児島西インターチェンジと伊集院インターチェンジ間の埋蔵文化財に係わる分布調査が行われ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点がわかった。山ノ中遺跡の詳細分布調査は平成3年5月に行われ、曲輪や郭が良好に残る中世山城「小田城」の縄張りの範囲であることが判明し、発掘調査の対象とした。作業員を入れての本調査は、平成6年4月25日～6月27日及び平成7年6月26日～平成8年3月22日に実施した。なお、崖際で調査ができなかった部分は、急傾斜工事中の平成6年10月と11月に遺物だけを拾い上げ、現場での残務整理は平成8年3月31日までかかった。整理作業及び報告書刊行は、平成16年度・17年度に行った。

第2節 調査の組織

〔平成6年度〕

事業主体者：	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者：	鹿児島県教育委員会		
企画・調整：	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	内村 正弘
調査企画者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	川原 信義
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事 兼 調査課長	戸崎 勝洋
発掘調査担当：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	東 和幸
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	菅牟田 勉
調査事務担当：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 査	成尾 雅明
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 事	中村 和代

〔平成7年度〕

事業主体者：	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体者：	鹿児島県教育委員会		
企画・調整：	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	内村 正弘
調査企画者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	川原 信義
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事 兼 調査課長	戸崎 勝洋
発掘調査担当：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	東 和幸
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財調査員	西園 勝彦

調査事務担当：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	査	成尾 雅明
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	事	追立ひとみ
調査指導者：	鹿児島大学	助	手	本田 道輝
	九州大学	助	教 授	宮本 一夫
	国立奈良文化財研究所			玉田 芳英
	川内純心大学	教	授	下野 敏見
	鹿児島県文化財保護審議会	委	員	河口 貞徳
	鹿児島短期大学	学	長	三木 靖

〔平成16年度〕 整理・報告書作成作業

作成主体：	鹿児島県教育委員会			
作成責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	木原 俊孝
作成企画者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次	長	賞雅 彰
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課 長		新東 晃一
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課 長 補 佐		立神 次郎
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事		
		兼第三調査係長		牛ノ濱 修
作成担当者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事		東 和幸
作成事務担当者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	査	脇田 清幸
遺物指導者：	京都大学大学院文学研究科助教授			清水 芳裕

〔平成17年度〕 報告書作成作業

作成主体者：	鹿児島県教育委員会			
作成責任者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	上今 常雄
作成企画者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次	長	有川 昭人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次	長	新東 晃一
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 第 二 課 長		立神 次郎
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事		
		兼第二調査係長		牛ノ濱 修
作成担当者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事		東 和幸
作成事務担当者：	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	査	寄井田正秀
報告書作成検討委員会	平成17年12月27日	所長ほか	11名	
報告書作成指導委員会	平成17年12月21日	新東次長ほか	4名	
企画担当者：	前迫 亮一・西園 勝彦			
遺物指導者：	京都大学大学院文学研究科教授			泉 拓良

第3節 調査の概要と調査経過

1. 調査の概要

(1) 平成6年度の調査

初年度の調査は、南東側の急斜面部分の掘削工事に伴うものであり、グリッド番号19～21区を対象として発掘調査を行った。当初は、中世山城に伴う遺物包含層だけが存在するものと想定して4月25日から5月27日までの予定で調査に入ったが、掘り進めてゆくにつれて平安時代と縄文時代の遺物包含層も存在することがわかった。そのため、5月20日に埋文センター新東主任・建設省桜井係長・有迫組川畑氏を含めて協議を行い、E19・20区、F19区を残して6月3日まで延期することにした。さらに、H20区は包含層が厚く遺物の出土量も多いことから再協議し、調査区域を絞り込んで6月27日まで延期して発掘調査を実施した。最終的に縄文時代の包含層まで調査したのは、H・G・F-20区、G・F・E-21区の範囲にとどまった。なお、安全対策上調査期間内に発掘できなかったH20区の崖際については、掘削工事と平行しながら10月から11月にかけて5日間調査を行った。

発掘調査に際しては北側の迫田を借り受けプレハブを設置し、駐車場として川に覆鋼板を置いて対応した。また、現場への登り降りは、花園利弘氏宅の菜園をお借りして仮設階段を設けた。花園利弘・チエ子さんご夫妻には、毎日軒先を通らせていただいた上に、物心両面でご配慮いただいた。記して感謝申し上げる。お茶用や必要な水は、一人2本ずつペットボトルに入れて登ったが、15年前の1981年に実施された苦辛城跡の調査では一升瓶だったということを聞き時代の流れを感じた。トイレについては、簡単な小屋をつくって対応した。通常あるべきものがない状態での調査であったが、作業員さん達の知恵と工夫で乗り切ることができた。

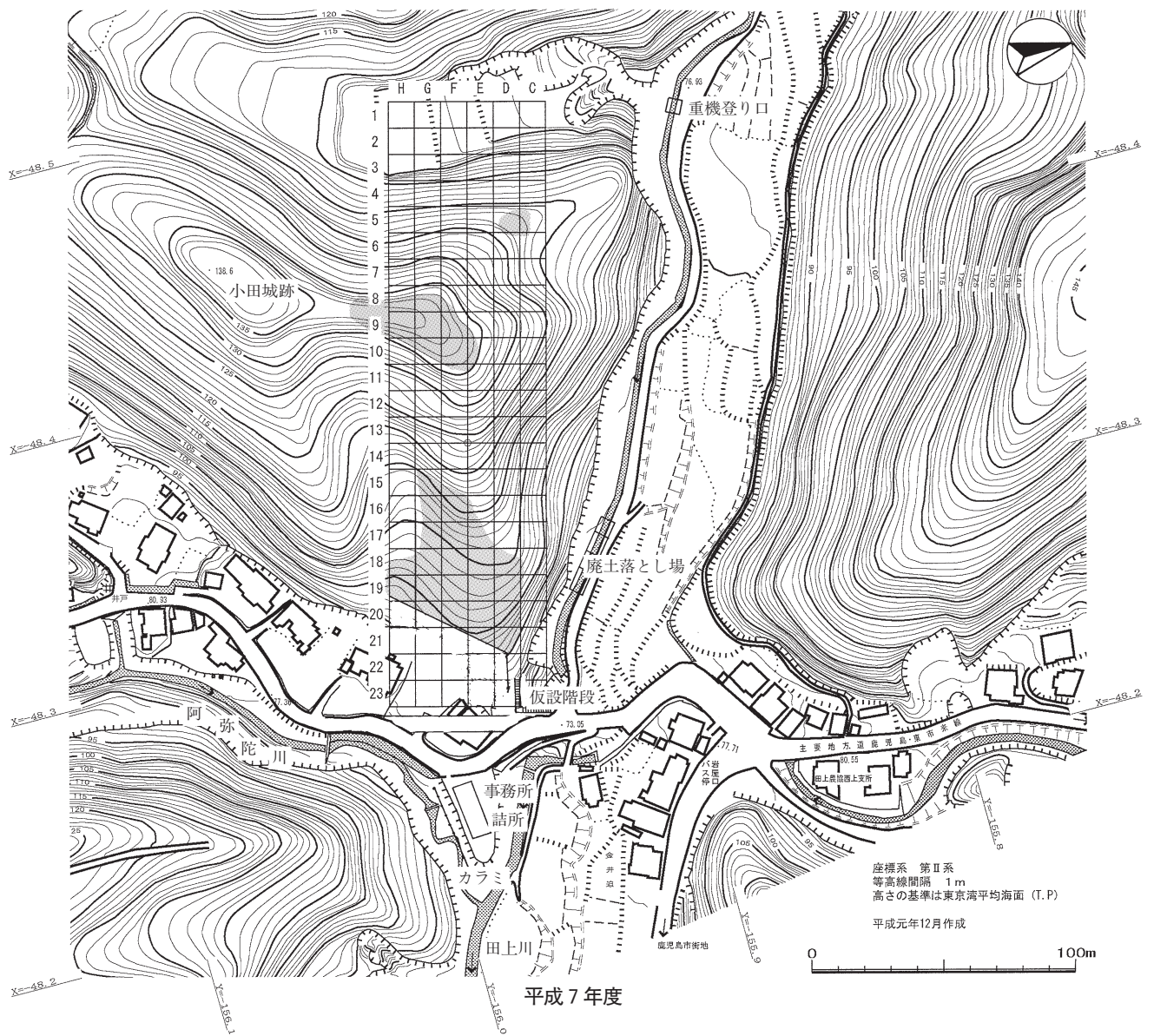
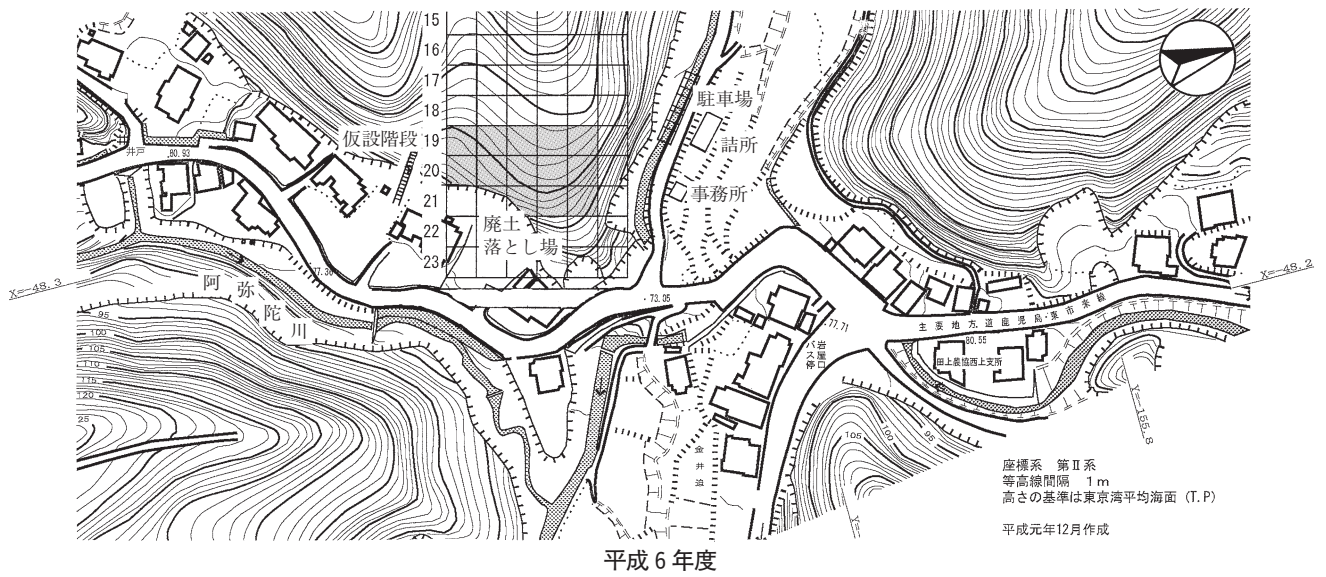
(2) 平成7年度の調査

平成7年度は、前年度に実施した発掘調査で、中世以外に、古代及び縄文時代の遺物包含層が存在することがわかっていたので、これらを含めて全面調査を実施した。

縄文時代の遺物包含層が広がる15区～20区の調査を主体とし、山頂部及び西側斜面の一部の調査も行った。廃土処理のため、小型の重機を入れて廃土を反転しようと計画していたが、予想以上に廃土量が多く、敷地内で対応できなくなった。協議して前年度駐車場としていた場所に覆鋼板を敷き、こちら側に廃土を落とすことによって解決を図った。また、9月からはアルミ製のベルトコンベアーを入れたことにより、作業の効率が高まった。それでも、重機が近づけない場所にある巨木の切り株については、人力で処理しなければならなかった。

プレハブおよび駐車場については、橋脚工事が終わった東側の敷地内に設けた。阿弥陀川がカーブする場所であり、増水の際は土砂を挟り取る恐れがあったので、護岸用として木杭と竹でカラミをつくって対応した。また、現場への登り降りは仮設階段を設置し、手づくりの階段も合わせて108段となった。重機は西側の傾斜面から足場をつくりながら登り、テントやトイレも運び上げることができ、前年度よりも居住性が高まった。





第3図 年度ごとの調査位置図

(3) 平成16年度の調査

県立埋蔵文化財センター内において、整理・報告書作成作業を実施した。

(4) 平成17年度の調査

県立埋蔵文化財センター内において、整理・報告書作成作業を実施し、平成18年3月に報告書を刊行した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄より略述する。

(1) 平成6年度の調査

4月

22日から調査開始。E19、E20、E21、F20区の表土剥ぎ。グリッド及び100.0m、102.0m、104.0mのレベル杭を設定。西別府町老人会会長 吉満武雄氏来跡。

5月

D・E・G(IIIb層)・H(II層)－19区、D・F(IIIb層)・G(IIIb層)・H(Ib層)－20区、D・E(縄文後期の層)・F(IIIb層)・G(II層)－21区の掘り下げ。磨製石斧(G19区、D・F・G－20区)、磨石(D21区)、青磁破片(E19区)、砥石(H20区)、鉄製品(G・H－19・20区)、石鏃(F21区)、元豊通宝(H20区)出土。G・H－19区：黒色腐植土掘り下げ。E・F・G・H－19・20区、E・F－21区：古道実測。16日 航空写真撮影。南日本新聞社 平峯幸児氏取材。西陵中学校2年 吉満良君、地元の新保信夫氏・中野市蔵氏来跡。

6月

H19区、G(IIIa～V層)・H(IIIb層)－20区、F(IIIa～IVb層)・E(III～IVb層上面)・G(III～V層上面)－21区掘り下げ。磨製石斧(H20区)、磨石(G・H－20区)、磨製石鏃(G21区)、石皿(G20区)出土。H20区：III層上面掘り込みの調査。E21区：縄文時代早期の下剥峯式土器出土。県文化課 立園多賀生課長、県文化財保護審議会委員 河口貞徳氏、黎明館 小池一徳氏、伊集院町在住 帖佐秀人氏来跡。27日調査終了。

10月

27～31日までH20区の工事立ち会いのため、フミカキ遺跡から数名移動。

11月

1日と11日にH20区の工事立ち会いを実施し、終了する。

(2) 平成7年度の調査

6月

26日から調査開始。26・28日 松元監督官来跡。
30日 道具等搬入。プレハブ下の阿弥陀川護岸のため、川の中でカラミづくり。仮設階段の延長をつくって、108段となる。伐採された木の片づけ。カブト虫の幼虫が大量に出土。



カラミが完成してパチリ

7 月

G15区, F16区 (Ⅲa層), G19区(Ⅱ～Ⅲa層), E・F(Ⅲa層)－20区, E・F(Ⅲ層)－21区, 雨水流路部分掘り下げ。石斧 (E・F－20・21区), 石皿 (E・F－20区) 出土。F20区: 配石写真撮影及び実測。G19区: 掘り込み検出。鹿児島大学学生 横手浩二郎氏・梶尾弘子氏・林麻穂氏, ラ・サール中 1 年 中村亮君, 武岡小 5 年 池畑里沙さん来跡。

8 月

G19区(Ⅲ層), E(Ⅲ層)・F(Ⅲ層)－20区, E21区(Ⅳb層), G9区(Ⅰ層)掘り下げ。廃土搬出用として水路部分に覆鋼板を設置。中種子町教育委員会 田平祐一郎氏長期研修。県立博物館 成尾英仁氏, 鹿児島短期大学学長 三木靖氏, 天理大学学生 八重樫ゆみこ氏, 鹿児島市在住 田中芳人氏, 池田高 3 年生 3 名, 鹿児島大学学生 床次孝子氏, 奈良大学学生 鷲尾史子氏, 筑波大学学生 徳田有希乃氏, 伊集院町在住 末永義弘氏, 関西大学学生 橋元氏・樋渡氏・坂元氏来跡。

9 月

F(Ⅲ層)・H(Ⅲ層)－19区, G20区(Ⅲ層), F17区(Ⅲ層), F16区, H・I・J(表土層)－8・9区掘り下げ。G19区: 垂飾品出土。21日 台風接近の為養生。共同通信社 瀬戸口昭氏, 別府大学 橘昌信教授, 加世田市教育委員会 上東克彦氏, 奈良大学学生 橋口亘氏来跡。

10月

F(Ⅲ層)・H(Ⅲ層)・E(Ⅲ層)－19区, F17区(Ⅲ層), G(Ⅱ・Ⅲ層)－16・15区掘り下げ。G19区: 船形軽石製品出土。4日 鹿児島短期大学 三木靖学長および日本史専攻生20名見学。松元町広報課 東妙子氏, 千葉県文化財センター 沖松信隆氏, 鹿児島市在住 雨宮瑞生氏, 県議会議員 上原一治氏, 鹿児島大学歯学部学生 我那覇生純氏来跡。



11月

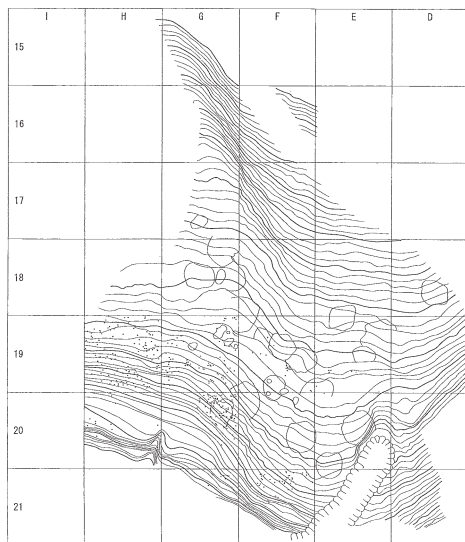
G15区(Ⅲ層), G(Ⅲ層)・F(Ⅲ層)・E(Ⅲ層)－16区, F(Ⅲ層)・G(Ⅲ層上面)・H(Ⅲ層)・E(Ⅲ層)－17区, H19区(Ⅲ層), F8区(Ⅰ層), F(Ⅰ層)・G9区(Ⅰ層), H18区(Ⅰb層), F(残っていた部分)－20・19区, E(Ⅲ層)・H(Ⅲ層)－19区, 掘り込み 3 掘り下げ。鹿児島大学 本田道輝氏現地指導。京都大学埋蔵文化財センター 千葉豊氏, 鹿児島市在住 砂田光紀氏来跡。

12月

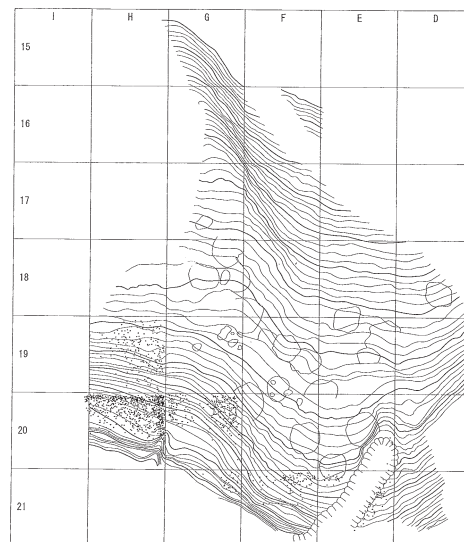
G(Ⅲ層)・H(Ⅲ層)－18区, H(Ⅲ層)・G(Ⅲ層)・F(Ⅲb層)・E(縄文遺構)－19区, G17区(Ⅲ層), F20区(土坑), 1～3号住居, F19区3・4・5号土坑掘り下げ。G18区: 天目茶碗・煙管・石鏃出土。H18区: 洪武通宝出土。G19区: 軽石製品出土。H19区: 石皿 2 個・石斧 4 本・擦切石器出土。國學院大學 加藤晋平教授, 東海学園女子短期大学 尾関清子教授, 鹿児島新報社 北ノ園記者来跡。

平成 8 年 1 月

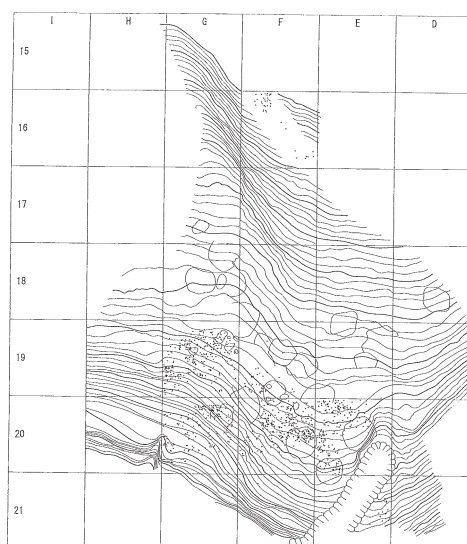
H(Ⅲ層)・G(Ⅲ層)－19区, H(Ⅲ層)・G(Ⅲ層)・F(Ⅰ～Ⅱ層)－18区, 各遺構, 1号・2号住居, 3号土坑掘り下げ。H18区: 一部磨製石鏃出土。H19区: 一部磨製石鏃, 軽石製品, 松ノ木式土



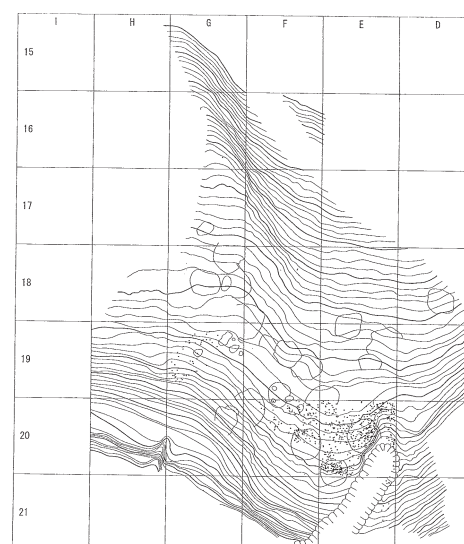
1994年 5 月



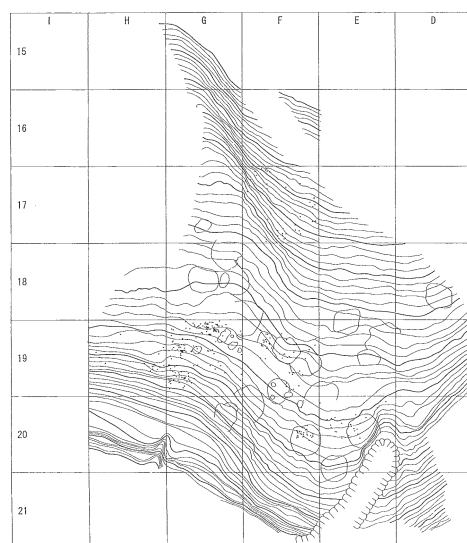
1994年 6 月



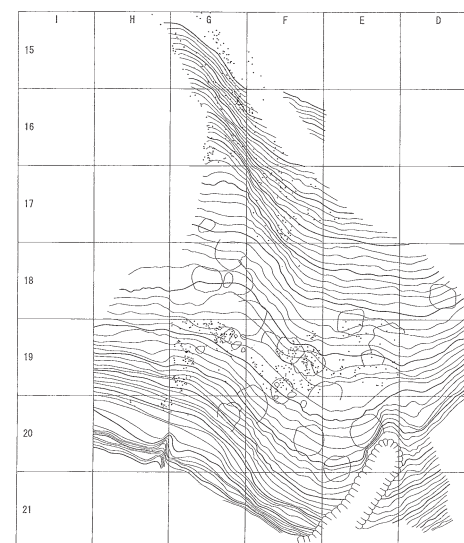
1995年 7 月



1995年 8 月

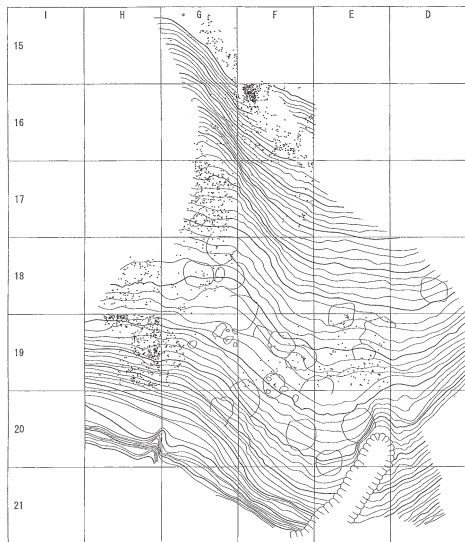


1995年 9 月

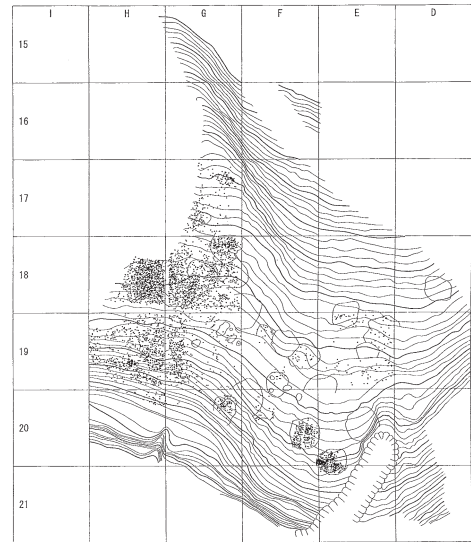


1995年10月

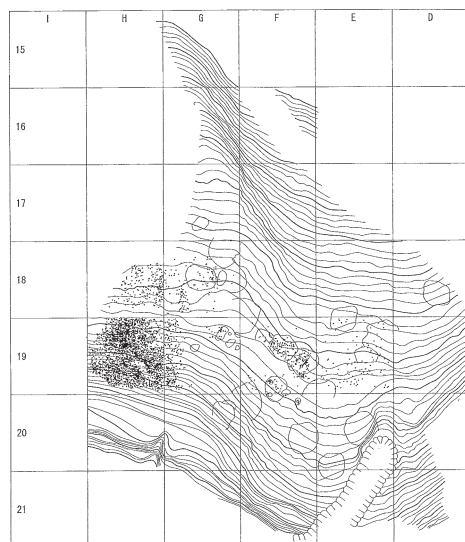
第 4 図 月ごとの調査位置図 (1)



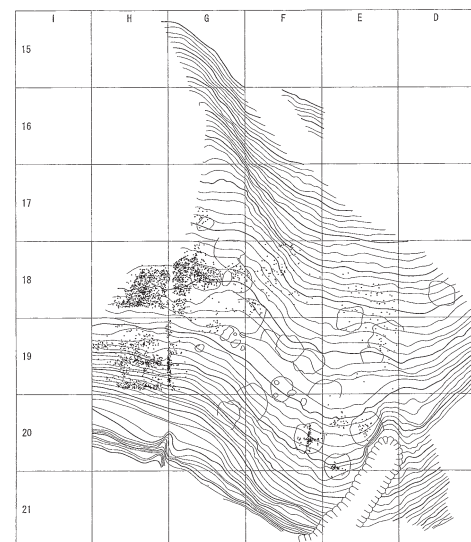
1995年11月



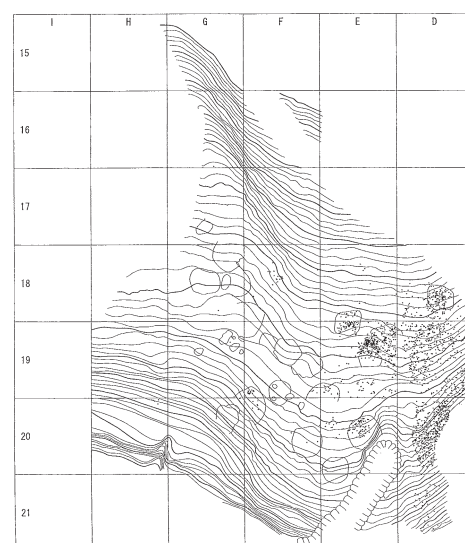
1995年12月



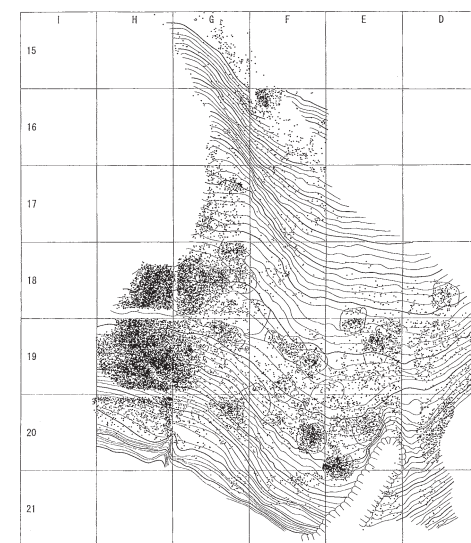
1996年 1 月



1996年 2 月



1996年 3 月



全体の遺物出土状況

第5図 月ごとの調査位置図（2）

器、土師器坏(完形品)、蛇紋岩製石斧、棒状石製品出土。G19区：石鏃、石製品出土。11日 九州大学助教授 宮本一夫氏現地指導。22日 国立奈良文化財研究所 玉田芳英氏現地指導。24日 川内純心大学 下野敏見氏現地指導。鹿児島大学教授 森脇広氏、九州大学助手 西健一郎氏、愛媛県在住 犬飼徹夫氏、大分県在住 今田秀樹氏来跡。

2月

積雪のため室内作業。H(Ⅲ層)・G(Ⅲ層)・E(Ⅲ層)－19区、F(Ⅲ層)・H(Ⅲ層)・E(Ⅲ層)－18区、各遺構、D19区(Ⅰ層)、5・6号住居掘り下げ。F18区：かんざし出土。G18区：6号住居、土坑1基検出。F20区：5号土坑に伴う土坑2基、石皿(欠損品)出土。E20区：土坑1基検出。H18区：石匙出土。E18区：集石検出。14日 航空写真撮影。7日 県文化財保護審議会委員 河口貞徳氏現地指導。金峰町教育委員会 宮下貴浩氏、岡山理科大学教授 小林博昭氏、鹿児島大学埋蔵文化財調査室 松永幸男氏・中村直子氏、岐阜県文化財保護センター 飯沼暢康氏・谷口和人氏・安江祥司氏来跡。

3月

D(Ⅲ層)・E(遺構)－19区、D20区(Ⅲ層)、D21区(Ⅲ層)、E・D－18区(Ⅲ層)掘り下げ。1日 航空写真撮影。13日 三木靖先生現地指導・講話。熊本県文化課 古城史雄氏、鹿児島大学教授 上村俊雄氏、ノートルダム清心女子大学 高橋護氏、鹿児島大学埋蔵文化財調査室 大西智和氏、熊本大学埋蔵文化財調査室 小畑弘己氏、熊本大学教授 木下尚子氏、鹿児島市教育委員会 出口浩氏、福岡県教育委員会 水ノ江和同氏、知覧町立小学生 上之真太郎君来跡。

山ノ中遺跡を訪ねて下さった方々の中には、他の遺跡で発掘作業に携わっていらっしゃる方々や県立埋蔵文化財センターの関係者も多かったが、割愛した。また、お名前を掲げた方々も一度だけでなく、何回も訪ねて下さった方もある。

平成6年度から平成7年度にかけては、同じメンバーで山ノ中遺跡→山下堀頭遺跡→フミカキ遺跡→山ノ中遺跡の順に調査を行った。山ノ中遺跡を調査していない期間にも、多くの方々がプレハブを訪ね出土遺物についてご教示下さった。特に松ノ木式類似土器の重要性については、奈良大学大学院生 三輪晃三さんから指摘していただき、その後高知県埋蔵文化財センター 前田光雄氏・出原恵三氏に確認していただいた。

なお、この期間中の平成7年1月17日未明に阪神淡路大震災が起き、山ノ中遺跡でお世話になった花園さん宅のお嬢さんが犠牲になられた。10月から花園チエ子さんに現場を手伝っていただくことになったのであるが、「発掘調査のお陰で、悲しみも忘れることができた。」というお話を伺った。このような契機もあり、私自身、兵庫県での復興調査に平成8年度の一年間参加することとなった。



縄文人の石斧と花園さん宅の鉄斧

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と立地

山ノ中遺跡の位置は、北緯31°35'45"、東経130°29'16"であり、地表面の標高は100m～133mである。世界及び西日本からみた山ノ中遺跡の位置は、第6図のとおりである。山ノ中遺跡で主体的に検出された縄文時代後期前半と併行する、約4,000年前の各地の遺跡も示してある。山ノ中遺跡が所在する鹿児島市西別府町は平野部と台地部の境にあり、開析された谷部に人家が点在している。台地部分はシラスを基盤とするもので、現在は西側に仁田尾団地、北側に武岡団地、南側に西陵団地が造成され、標高は120m～150mでほぼ一定している。山ノ中遺跡周辺は、これらの台地と平野部を結びつける交通の要衝となる場所でもある。台地部と平野部は段丘面をつくることなく急崖となり、約80mの比高差を測る。幾筋かの小河川が台地を開析し数条の小谷を形成しており、谷底部は迫田として利用され、急峻な尾根部分は照葉樹林や竹林として利用されている。

山ノ中遺跡がある尾根もこの様な地形の一つであり、二つの新川支流に挟まれた最も上流側に発達した尾根である。南側に位置する川は阿弥陀川と呼ばれている。南東側には田上川の本流が流れ、谷は比較的大きく、川に沿って道路が延び、人家が点在する。北側は川幅3m未満の小河川であるが、永い年月をかけてシラス台地を開析し、急崖を形成している。これらの状況は第9図を見ていただければ、一目瞭然であろう。周辺の台地上や眼下の交通路を見渡せる、この様な地形や地勢を利用して、山頂部には中世城郭が築かれ、現在も良好な状態で残っている。平安時代前半期も同様な理由で、山ノ中遺跡が利用されたと考えられる。縄文時代後期の遺構は南東に開けた陽当たりの良い場所にあり、急傾斜面にあってわずかに平坦な面を利用している。各地域の土器が出土している点は、錦江湾と東シナ海を結ぶ位置にあるということも無関係ではないと考える。

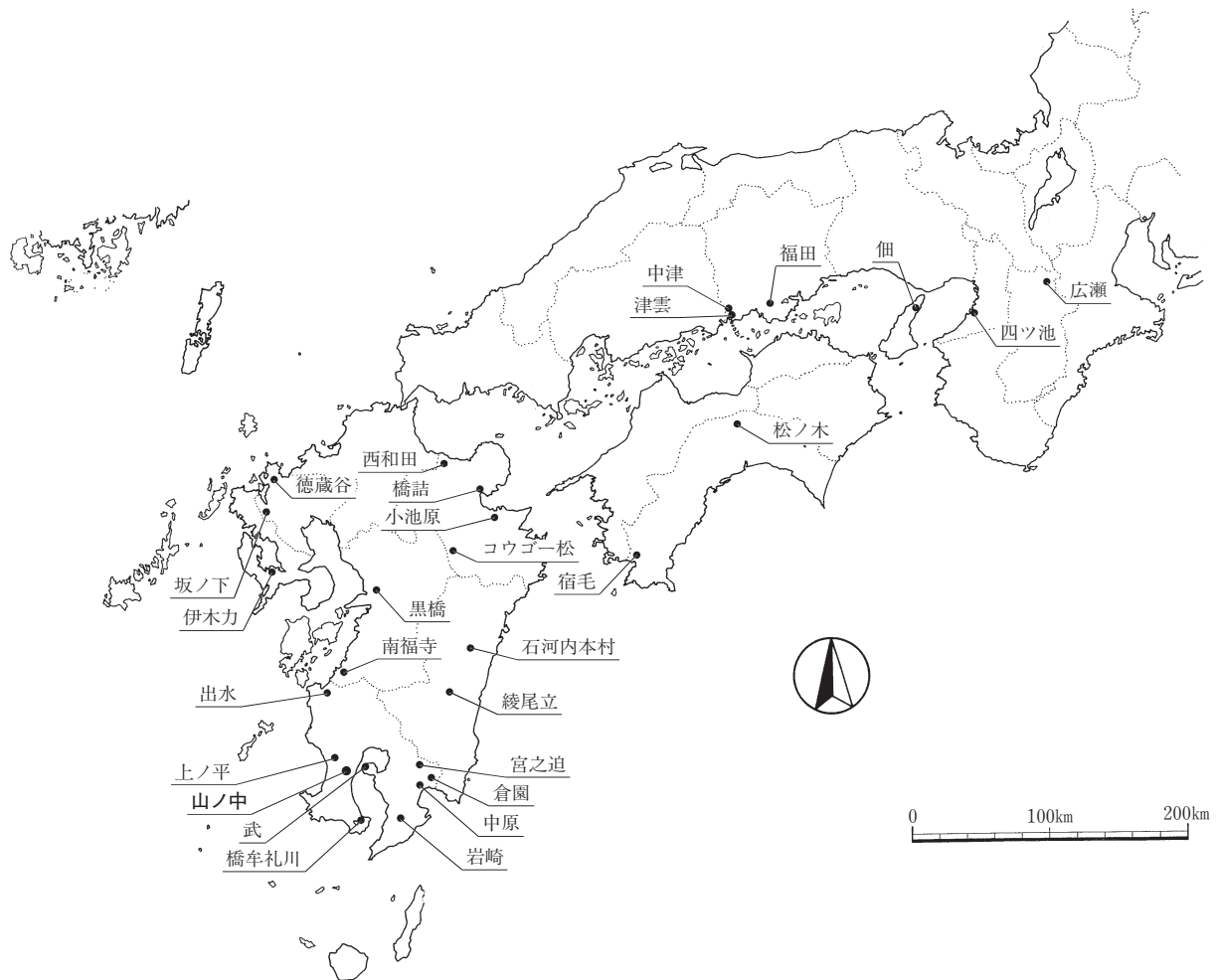
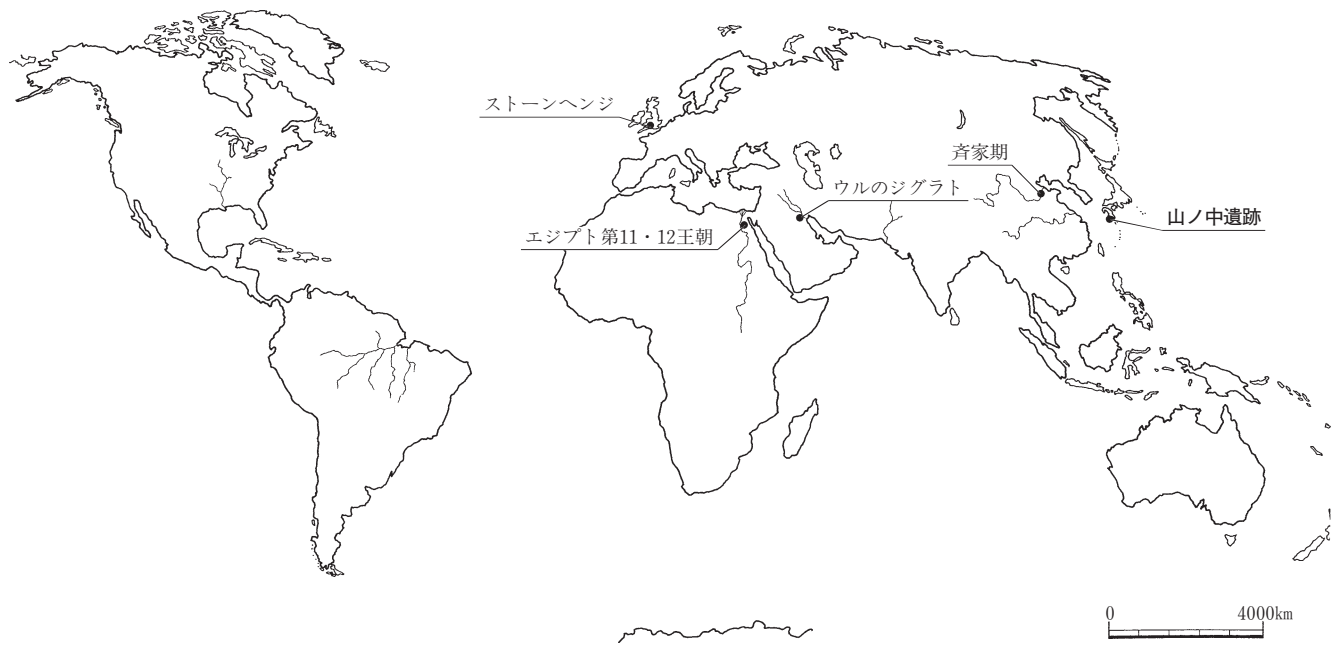
薩摩火山灰層が堆積した時点で地形的には現在と大差はなく、シラスが堆積した24,500年前から薩摩火山灰層の11,500年前の間に、谷部は大きく開析されたことが窺える。薩摩火山灰層堆積以降は谷部に腐植土が堆積していくが、遺物も一緒に埋まっていることから、人間の活動が腐植土の堆積を早めた一因と考えられる。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

前節で記したような地形であるため、表面採集により遺跡を探すことは難しく、山ノ中遺跡周辺には遺跡が少ない。近くでは、縄文時代後期前半の木ヶ暮遺跡と中世城館の一つである小田城跡が知られているだけである。

山ノ中遺跡から直線距離で1.8km離れた木ヶ暮遺跡は旧松元町境の饅頭石原にあり、昭和27年に河口貞徳先生と玉龍高校生によって発掘調査が行われた。その時の案内は、当時上伊集院中学校教諭だった中原尚文氏と松崎良博氏だったとのことである。木ヶ暮遺跡は21度の傾斜面にあり、腐植土の下で黄褐色土から指宿式土器が多量に出土したことは、山ノ中遺跡とよく似ている。

小田城については文献としての記録も少なく、詳しいことはわかっていない。西元肇氏が昭和60年(1985年)12月8日に調査した、「中世城館跡調査カード」が基本となっており、第8図上のような見取図が残っている。一説には、別府氏の居城であったとか芦屋左次衛門という人物が住んでい



第6図 山ノ中遺跡の位置と4,000年前の遺跡

たと、『西武田村誌』に出ているだけである。別府氏や芦屋氏がいつ頃の人物であったのかは、はっきりわからない。小田城跡から南東に600m離れた、現在鹿児島実業高校がある場所の隣に「別府ヶ平」という場所があり、小田城主の別府氏が戦死した古戦場跡であると伝えられている。別府氏は白馬に乗って戦死したため、この場所を白馬が通ってはいけないと言われ、中迫（字名）では白い家畜を飼うと災いがあると言われているそうである。さらに、小田城付近の農道を夜遅く通ると、白馬に乗った神様に会おうという伝説も残っている。白い動物に関する伝説は、県内の他地域でも知られており興味深い。周辺の字名は第8図下のとおりである。

山ノ中遺跡の2km北には江戸時代の街道である出水筋が、800m北には九州新幹線、さらに800m南にはJR九州鹿児島本線が通り、いつの時代にも重要な路線であったことがわかる。山ノ中遺跡を通る南九州西回り自動車道はもちろんのこと、主要地方道路鹿児島・東市来線も年々改良され、増々交通の重要性が高まっている。近くには池田学園や鹿児島実業高等学校も移転し、将来を担う若者達も育っており、人的な交流も進みつつある。主要道路や学校がつくられるということは、未来を見据えた要素がこの地にあったということであり、今後地域の歴史に書き加えられることとなるだろう。

山ノ中遺跡が所在する地域は、江戸時代後期の『天保郷帳』（1838年）には「西別府村」となっており、明治時代の『地方行政区画便覧』（1886年）では「西ノ別府村」とある。そして、1889年には武村、田上村を併せて「西武田村」となり、終戦後の1953年に鹿児島市に編入された。さらに、平成16年11月に松元町・喜入町・郡山町・吉田町・桜島町を併せて新しい鹿児島市が誕生し、市域が拡大した。

河口貞徳 1953 「南九州における縄文式文化の研究」『鹿児島県考古学会紀要』第三号 鹿児島県考古学会

鹿児島市教育委員会 1989 『鹿児島市中世城館跡』鹿児島市文化財調査報告書（6）

松元栄児 1929 『西武田村誌』 田上小学校

表2 周辺遺跡地名表（1）

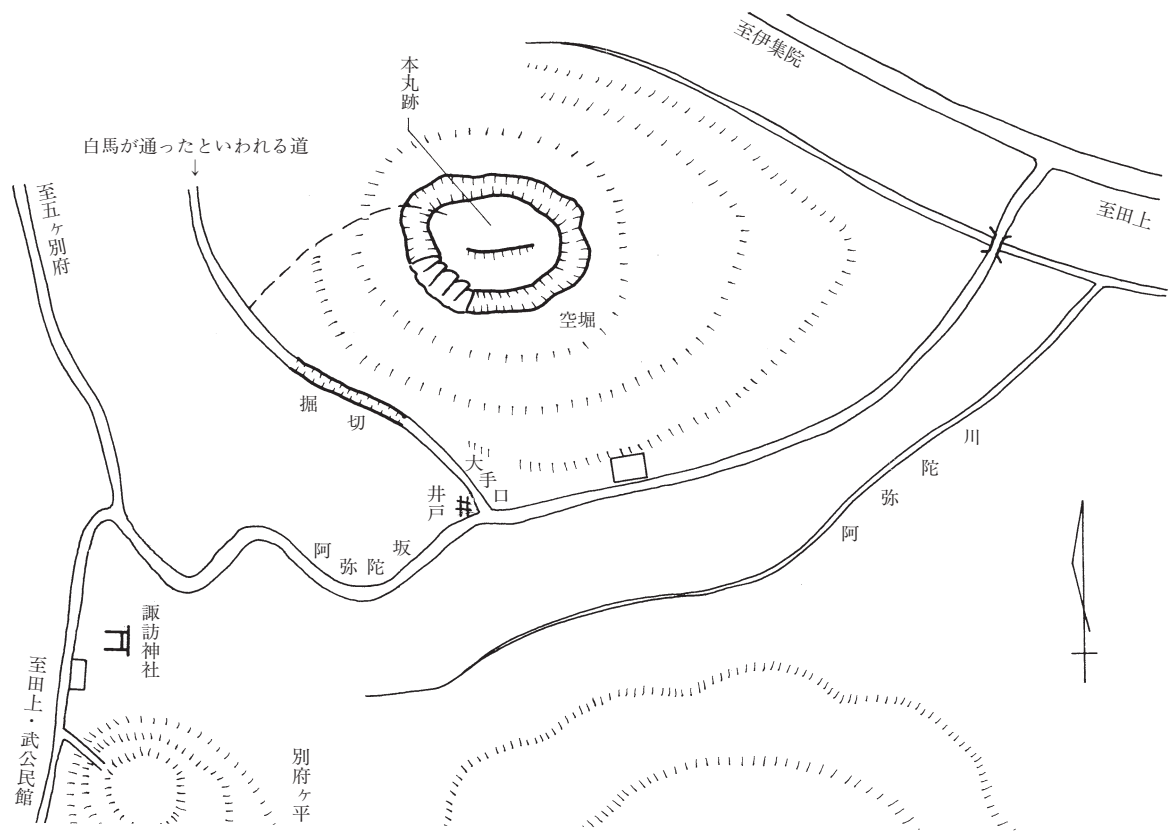
番 号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代	遺 物 等	備 考
1-4-0	上之原	鹿児島県鹿児島市山田町上之原	台地	縄文(早・後)、弥生	吉田式・前平式・市来式・石皿・石斧	河野治雄「谷山町における先史時代遺物の分布状況について」(「鹿児島県考古学会紀要」第3号)、消滅
1-6-0	伊佐之原	鹿児島県鹿児島市田上町天神ヶ瀬戸	台地	縄文(早)	前平式・局部磨製石斧	上田耕「薩摩半島の考古学(1)伊佐ノ原遺跡」(「鹿児島考古」第17号)、市埋文報(30)
1-8-0	塔之原	鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町塔之原	台地	縄文(早)、弥生	貝殻粒押型文・石斧	
1-13-0	三重野	鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町三重野	台地	縄文(後)、弥生～古墳	指宿式・石包丁状石器・石皿・成川式	
1-18-0	辺田	鹿児島県鹿児島市中山町辺田中山小裏	台地	縄文、古墳	石皿・磨製石斧	大正14年発掘調査、消滅
1-19-0	大窪	鹿児島県鹿児島市下福元町大久保	台地	縄文～古墳	石斧	河野治雄「谷山町における先史時代遺物の分布状況について」(「鹿児島県考古学会紀要」第3号)
1-20-0	玉里	鹿児島県鹿児島市玉里町(旧練兵場跡)	低地	弥生(前)	高橋Ⅰ式・石包丁	麻生孝行「有溝の石包丁」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)
1-21-0	薬師堂	鹿児島県鹿児島市上福元町薬師堂	低地	弥生(前)～古墳	高橋Ⅰ式・成川式(中津野式)・石斧・軽石製品・住居跡	河野治雄「谷山町薬師堂遺跡について」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)、消滅
1-22-0	一之宮	鹿児島県鹿児島市郡元二丁目一之宮神社境内	低地	弥生(中・後)～古墳、古代	一之宮式・石斧・石鏃・竪穴住居跡4基・軽石集積地	河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)
1-23-0	鹿大構内	鹿児島県鹿児島市郡元二丁目鹿大構内	低地	弥生～古墳	成川式・須恵器・木器・石器・住居跡多数	河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)、「鹿児島大学埋蔵文化財報告書」鹿大
1-24-0	菖蒲口	鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町菖蒲口	台地	弥生～古墳	成川式(中津野式・笹貫式)	河野治雄「薬師堂遺跡について」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)
1-26-0	笹貫	鹿児島県鹿児島市上福元町笹貫湯貫迫	台地	弥生～古墳	指宿式・松山式・市来式・草野式・骨角器・貝製品・石斧・軽石製品	河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」(「鹿児島県考古学会紀要」第2号)、消滅



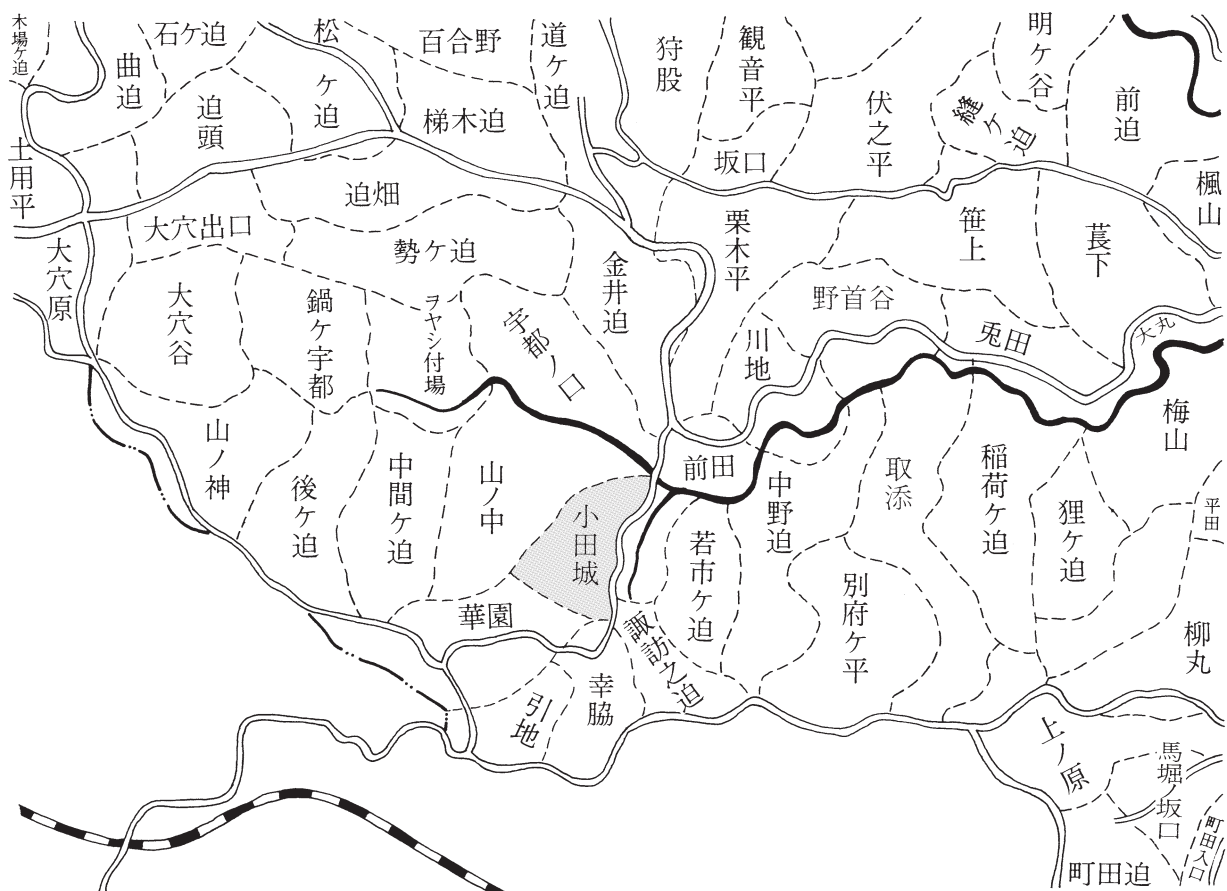
第7図 周辺遺跡地図

表3 周辺遺跡地名表（2）

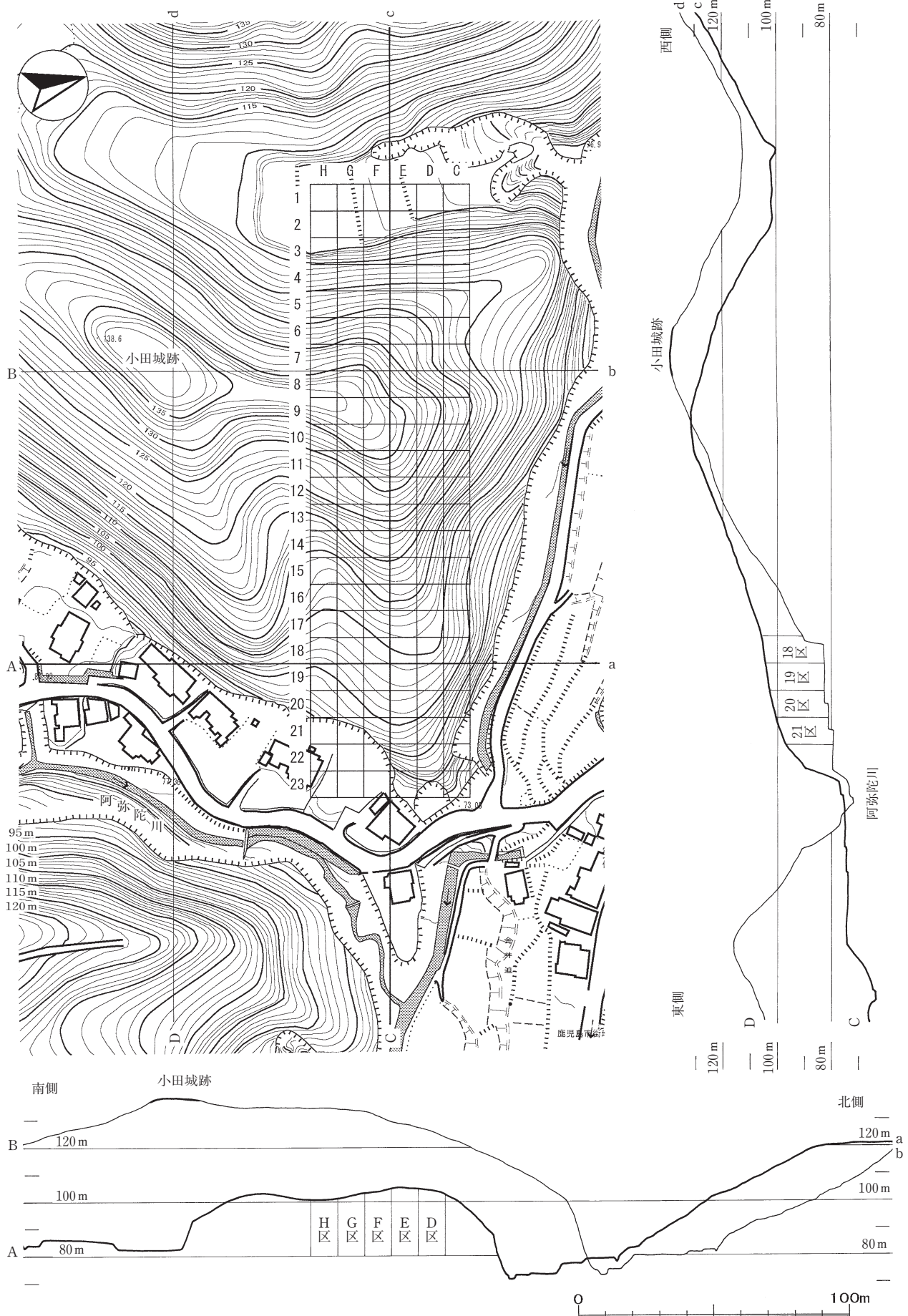
番 号	遺 跡 名	所 在 地	地形	時 代	遺 物 等	備 考
1-29-0	札下	鹿児島県鹿児島市山田町札下	台地	弥生～古墳	磨製石斧	
1-30-0	谷	鹿児島県鹿児島市山田町谷	台地	弥生～古墳	磨製石斧	
1-31-0	坂下	鹿児島県鹿児島市山田町坂下	台地	弥生～古墳	土器片	
1-32-0	波之平	鹿児島県鹿児島市上福元町高見波之平	台地	弥生～古墳	磨製石斧・土器片	
1-33-0	堂園	鹿児島県鹿児島市上福元町堂園	低地	弥生～古墳	土器片	
1-57-0	催馬楽城跡	鹿児島県鹿児島市坂元町矢上	丘陵	中世		消滅
1-60-0	伴掾館跡	鹿児島県鹿児島市伊敷町中福良	丘陵	平安，中世		
1-61-0	上山城跡	鹿児島県鹿児島市新照院町	丘陵	中世	土塁・空堀	
1-65-0	川口城跡	鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町川口	丘陵	中世		
1-66-0	椿城跡	鹿児島県鹿児島市中山町椿山	丘陵	中世		
1-67-0	原良営跡	鹿児島県鹿児島市原良町源六ヶ入口	丘陵	中世		
1-68-0	唐湊城跡	鹿児島県鹿児島市唐湊一丁目下方切	丘陵	中世		消滅
1-70-0	谷峰城跡	鹿児島県鹿児島市常盤町二ノ迫	丘陵	中世		
1-71-0	椿山城跡	鹿児島県鹿児島市上福元町竹迫	丘陵	中世		
1-72-0	波之平城跡	鹿児島県鹿児島市上福元町波之平	丘陵	中世		
1-73-0	茶磨埜跡	鹿児島県鹿児島市武3丁目三重尾崎	丘陵	中世		
1-74-0	苦辛城跡	鹿児島県鹿児島市皇徳寺台一丁目	丘陵	旧石器，縄文(早)，古 代，中世，近世		県埋文報(27)， 消滅
1-78-0	菊池城跡	鹿児島県鹿児島市上福元町見寄	丘陵	中世		市埋文報(17)， 消滅
1-79-0	御所ヶ原城跡	鹿児島県鹿児島市上福元町勘場	丘陵	中世		消滅
1-80-0	城ヶ原城跡	鹿児島県鹿児島市上福元町希望ヶ丘町	丘陵	中世		消滅
1-84-0	山ノ中	鹿児島県鹿児島市西別府町山ノ中	丘陵	縄文		本報告書
1-85-0	野元営跡	鹿児島県鹿児島市武町字城本	台地	中世		
1-107-0	甲突川川底	鹿児島県鹿児島市永吉町	川底	縄文～古墳，近世～現 代	縄文土器・成川式	市埋文報(19)， 消滅
1-108-0	横井竹之山	鹿児島県鹿児島市犬迫町横井竹之山	台地	旧石器，縄文(早・前)	細石核・細石刃・土器片	市埋文報(10)
1-109-0	川路山	鹿児島県鹿児島市犬迫町川路山	台地	縄文(早)，古墳	石坂式？	
1-110-0	炭床南	鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町炭床	台地	縄文	土器片・石斧・石皿・石鎌	
1-111-0	大川内	鹿児島県鹿児島市山田町大川内	低地	弥生～古墳	磨製石斧・土器片	
1-112-0	後庵	鹿児島県鹿児島市西別府町後庵	低地	古墳	成川式	消滅
1-113-0	原田久保	鹿児島県鹿児島市宇宿町原田久保	低地	縄文，古墳	指宿式・市来式・成川式	平成12年度 調査
1-114-0	脇田亀ヶ原	鹿児島県鹿児島市宇宿町鹿大医学部校内	台地	縄文～古墳		
1-115-0	魚見ヶ原	鹿児島県鹿児島市魚見町旧樟南高グラウンド	台地	弥生～古墳		県教委調査
1-116-0	高見	鹿児島県鹿児島市上福元町高見	丘陵	古墳		
1-117-0	小田城跡	鹿児島県鹿児島市西別府町小田城	台地	中世		山ノ中含む
1-118-0	掃除山	鹿児島県鹿児島市下福元町掃除山	丘陵	縄文(草)	細石核・細石刃・隆帯文土器	市埋文報(12)， 消滅
1-129-0	武	鹿児島県鹿児島市武一丁目	低地	弥生，古墳，中世	弥生土器・成川式・土師器	
1-130-0	尾崎	鹿児島県鹿児島市西別府町尾崎	台地			
1-133-0	夏蔭城跡	鹿児島県鹿児島市草牟田町夏蔭	丘陵	中世～近代		消滅
1-139-0	刑務所跡	鹿児島県鹿児島市永吉町鹿児島アリーナ内	低地	古墳		消滅
1-140-0	堀ノ内	鹿児島県鹿児島市田上町堀ノ内	低地	古墳		消滅
1-141-0	亀ヶ原	鹿児島県鹿児島市魚見町東谷山小周辺	台地	弥生～古墳		
1-147-0	広坂下北	鹿児島県鹿児島市小野町西之谷	台地	縄文～古墳		旧名「西之谷」
1-157-0	玉里邸跡	鹿児島県鹿児島市玉里町		近世		
1-158-0	共研公園	鹿児島県鹿児島市中央町		弥生，平安	弥生土器・土師器坏・碗一括・ 釉瓦	市埋文報(39)
①	寿国寺跡	鹿児島県鹿児島市武二丁目	台地	江戸	陶磁器・木製品・土製品・金 属製品	県セ埋文報 (40)
30-77	瀬戸頭C	鹿児島県日置郡伊集院町竹之山		旧石器，縄文		平成8年県道 分布調査
31-32	内迫平	鹿児島県日置郡松元町直木内迫平別心原	台地	古墳		平成3年度分 布調査



西元肇氏による小田城跡周辺の見取図



第8図 周辺見取り図と字図（『鹿児島市中世城館跡』を改変）



第9図 山ノ中遺跡地形図

第Ⅳ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

調査は腐葉土を除去した後、道跡による硬化した面や段落ちを記録するとともに高低差20cm間隔のコンタ図をつくることから始めた。次に表土層から山鍬やネジリ鎌を使って層ごとに掘り下げ、遺物の検出には竹ベラや竹串を用いた。樹木の根が深くまで入っており、チェーンソーや剪定バサミで切りながらの作業となった。土器の口縁部や底部など特徴のあるものや石器については、番号を付けて平板で取り上げた。また、各層の上面で精査し、遺構検出を行った。初年度の廃土は、一輪車を使ってF21区から東側の急斜面に落とすので、安全対策のため命綱を巻いての作業となった。包含層を掘り下げる際はグリッド内をさらに2m四方に区分けし、いわゆるメッシュ掘りやマンション掘りの方法で行った。これは、斜面がきついのでなるべく平坦面を確保したかったことと、雨水対策のためである。調査前年が「鹿児島8・6大水害」の年で自然の怖さを実感したこともあり、同じ様な災害を出さないためになるべく一ヶ所に雨水が集中しないよう配慮した。山ノ中遺跡は、中世山城の一つである小田城跡の城域内に所在し、標高100m～133mの急峻な地形の場所に位置する。グリッドの設定は工事用センター杭No.475を起点とし、東側の杭No.480と直線を結んで10m四方の方眼を囲み、調査区全体がカバーできる様に第10図のとおりグリッド番号を振った。グリッド名は北から南へA・B・C……とし、西から東へ1・2・3……とした。起点の杭No.475はE区とF区及び13区と14区を分けることになる。グリッド杭を打ち込んだ平成6年当時は、未だ光波測量機器がなくトランシットとメジャーによる測量であったが、杭同士レベル差を求めた上で斜距離を測り出すことによって、かなりの高低差にもかかわらず最小の誤差にとどめた。



1人1区画のマンション掘り

第2節 遺跡の層位

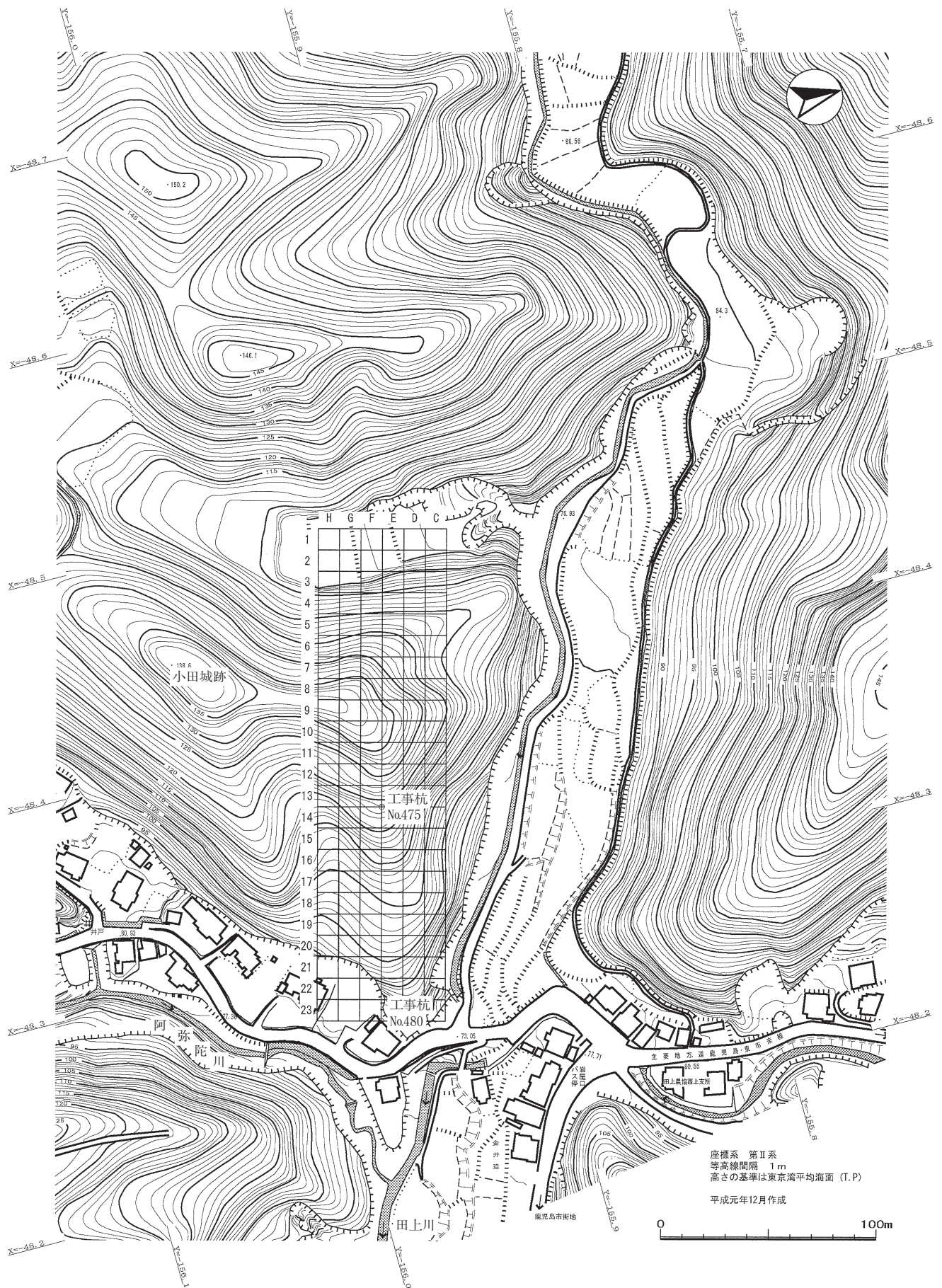
山ノ中遺跡の層序および遺物包含層・年代・文化などの関係は下記のとおりである。他の遺跡と異なり、急斜面であるため地層の堆積状況は芳しくなく、特に年代の指標となる火山灰層がはっきりしなかった。また、尾根から谷地形まであり、どのグリッドでも同じ様な層序がみられる訳ではない。特に、Ⅲ層を分層できたのは谷部だけであった。

I a 層：青灰色土。腐葉土である。この層より上にある層は、後世の客土である。

I b 層：淡灰茶色土。1 cm大の白色軽石を含む。しまりはなく、ふかふかしている。上部は黄褐色に近い色を呈する。道跡を検出し、近世以降の遺物が出土した。

II 層：黒茶褐色土。しまりはあまりなく、やわらかい。粒はそろっていて、細かい。古代から中世の掘り込みや遺物を検出した。

III a 層：淡黄褐色土。しまりはなく、ふかふかしている。上部はわずかにII層のシミがみられる。乾燥がはやく、白っぽくなる。弥生時代終末期の土器と縄文時代後期前半の遺物が出土し



第10図 グリッド配置図



第11図 自動車道完成後の位置図

た。

III b 層：暗黄褐色土。ややしまりがでてくる層である。わずかに炭化物がみられる。

IIIb2層：暗黒茶褐色土。炭化物を多く含む。粒子は細かく、やや粘質を帯びる。下部ではIIIb3層が斑状に含まれる。しまりがあって硬い。遺物を最も多く含む。谷部にしかみられない層であり、こぶし大の礫を多く含む。これらの礫は、焼けて赤化したものも少し含まれるが、集石等の遺構になりそうなものはみられない。土器や石器と共に、上の生活面から投棄されたものと考えられる。この層は北側斜面の方が、南側斜面よりも色が濃く、炭化物も多い。このことから、生活の主体はF19区あたりを中心にして営まれ、範囲外の南側（I 19区あたり）は、住居等が存在する可能性はそれほど高くないと思われる。それは、南側の傾斜が急になることからいえるのではないかと考える。

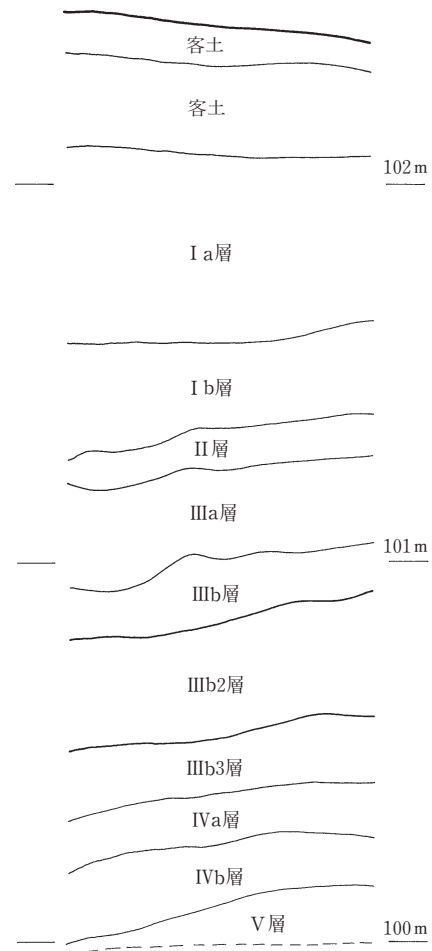
IIIb3層：黄褐色弱粘土質。炭化した小さな粒子を含む。IIIb2層よりもややシルト質にかわってくる。しまりがありかたい。縄文時代後期前半の土器等も量的に多くはないが出土する。H20区にしかみられない層である。

IV a 層：明肌色シルト質土。炭化物は含まなくなる。しまりはややあるが、やわらかい。無遺物層である。本来ならば、約6,400年前に鬼界カルデラが噴出したアカホヤ火山灰の前後の層に相当するものと思われる。下剥峯式土器はこの層内で出土しても矛盾はないのであるが、はっきりしなかった。

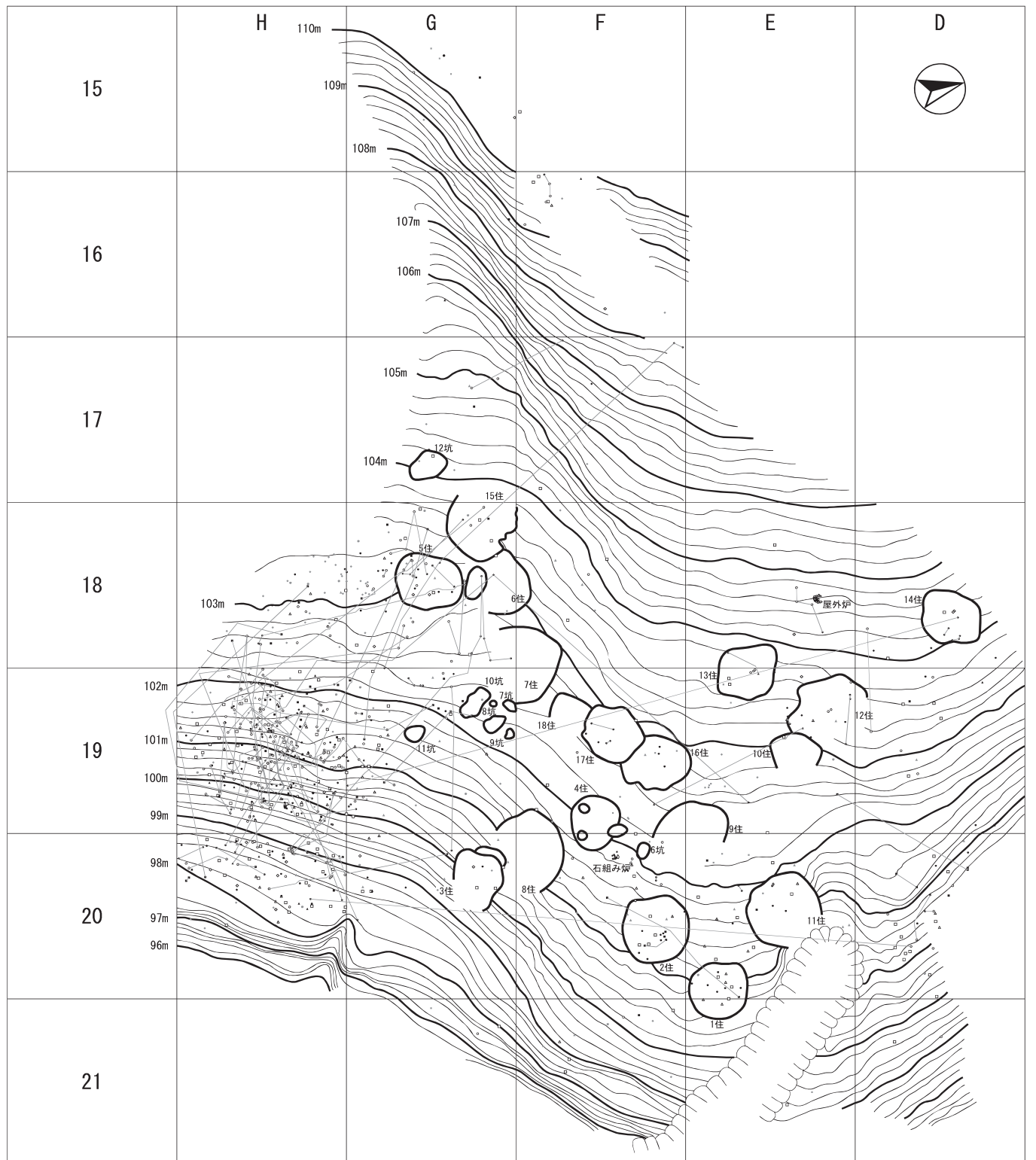
IV b 層：明橙色砂質土。軽石や砂を多く含む。無遺物層である。本来ならば、約11,500年前に桜島が噴出した薩摩火山灰に相当するものと思われる。場所によっては、はっきりと薩摩火山灰層の軽石であると確認できる。

V a 層：黄白色シルト質土。しまりがなくやわらかい。シラスの風化土と考えられる。無遺物層である。

V b 層：白色シルト質土。粘質のあるシルト質で、しまりがある。下部では若干砂っぽくなっていく。約24,500年前に始良カルデラが噴出したシラス（始良丹沢火山，A.T）である。40 m以上の堆積はある。



第12図 基本土層図



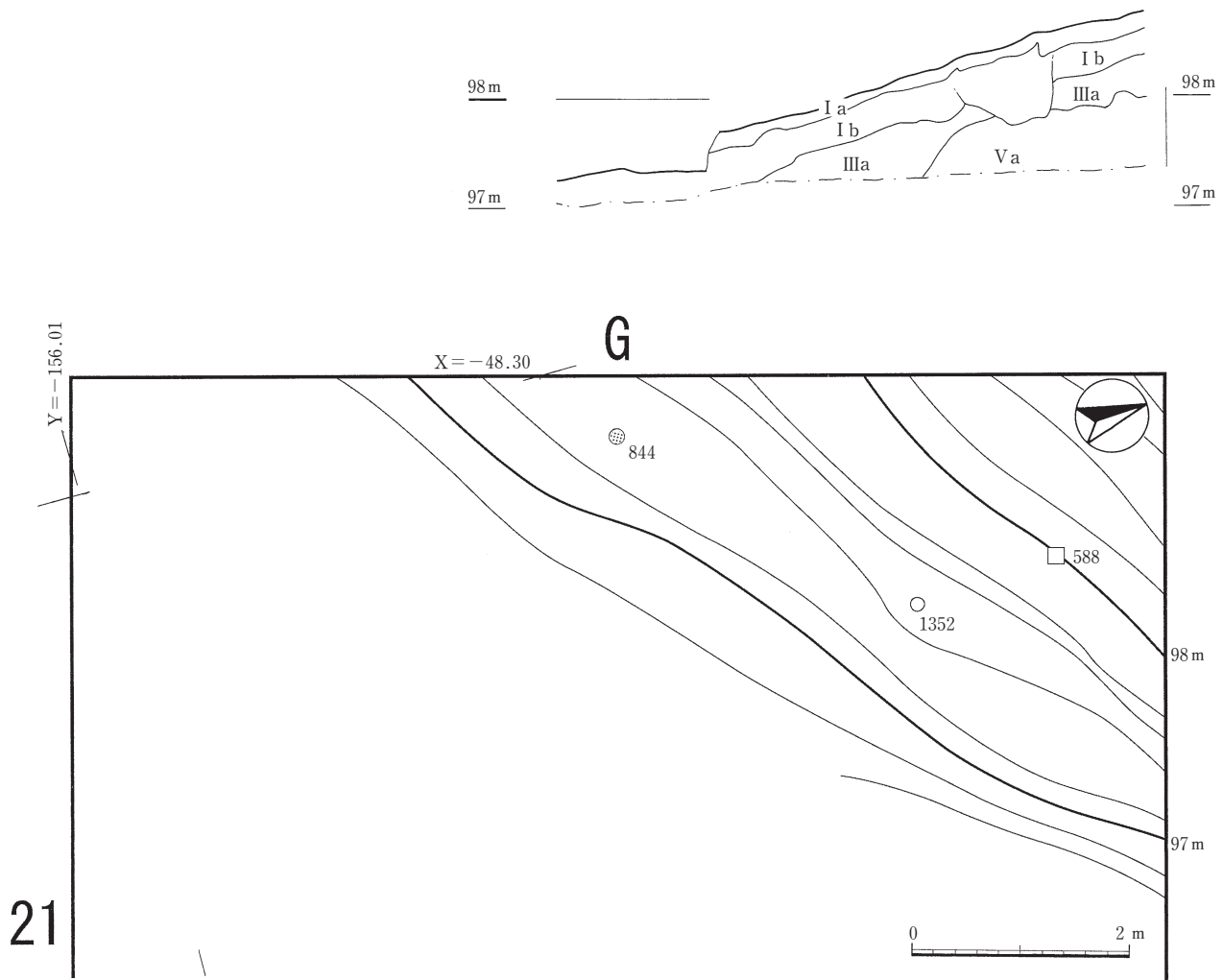
第13図 15区～21区の状況図

第3節 各グリッドの状況

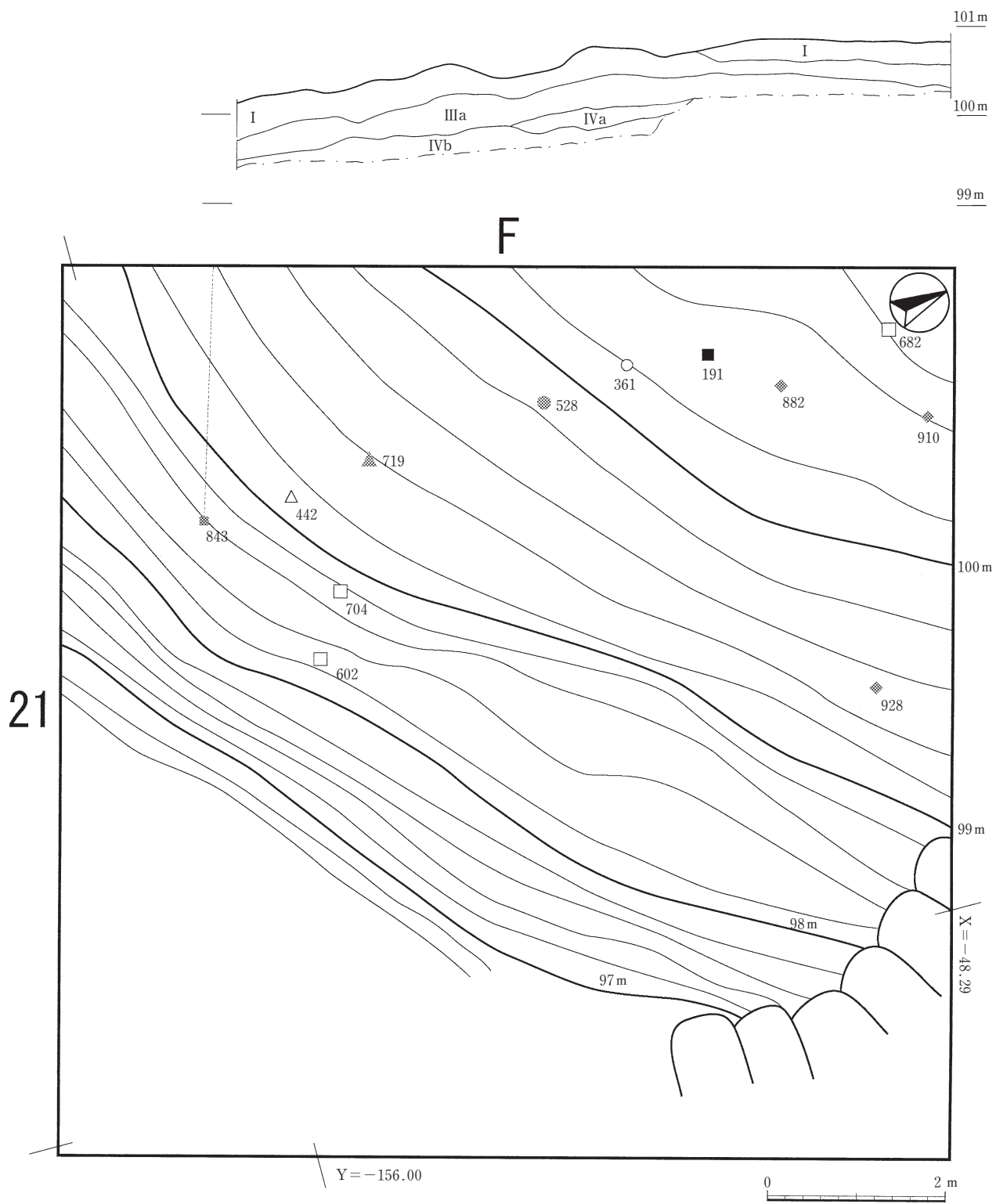
山ノ中遺跡の調査区は170mに及ぶ範囲にわたっていることから、各時期の遺構や遺物が重複して出土した区域を中心に、200分の3の縮尺で各グリッドの状況を示すこととする。西側断面図と北側断面図も同図で掲載できれば良かったのであるが、高低差が大きく紙面に入らないので、西側断面図のみを同時に掲載した。北側断面図については、数字列のグリッド毎にまとめて掲載してある。遺物ドットの種類については、凡例に示したとおりである。全体は、第13図に示してある。

G21区

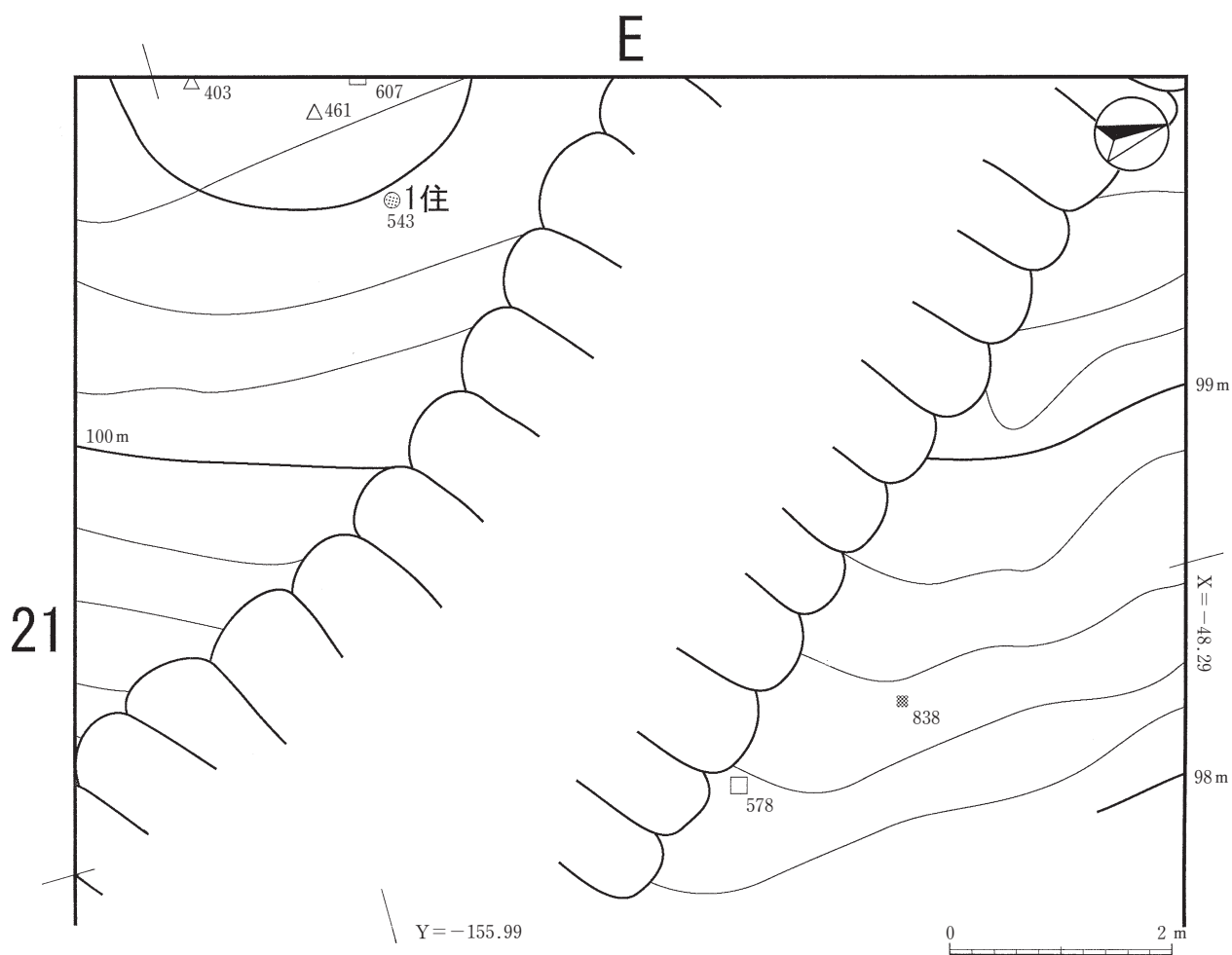
調査区の最も南東側に位置する。急崖のため、わずかの範囲しか調査できなかった。表層での傾斜角度は、南側30%、東側28%である。層位はII層が無く、III a層の下も次第に無遺物層になった。縄文時代の遺物がわずかに出土しただけであった。



第14図 グリッド状況図（1）G21区



第15図 グリッド状況図（2）F21区



第16図 グリッド状況図（3）E21区

F21区

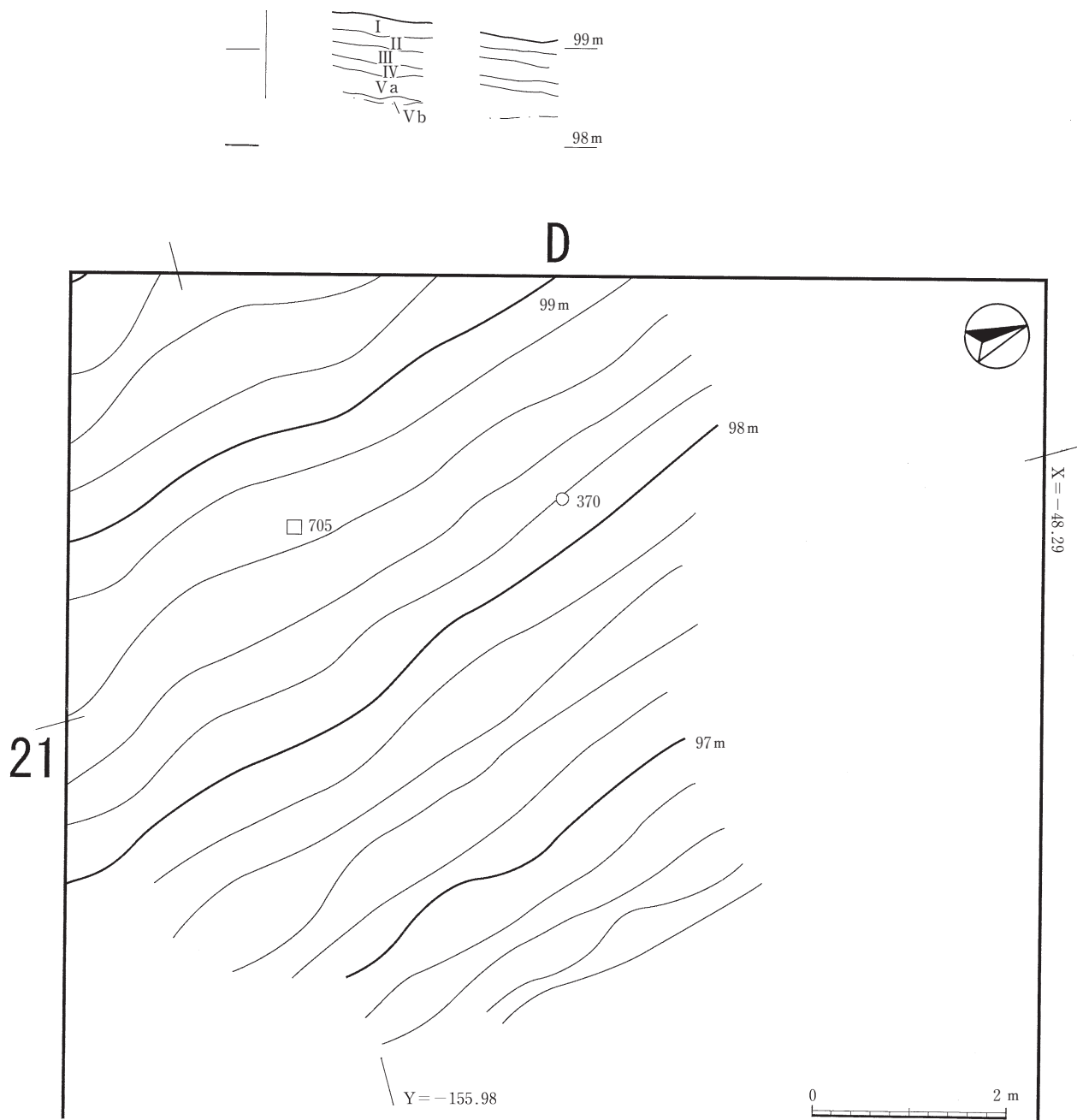
表層での傾斜角度は、南側21%、東側17%である。層位は比較的安定しており、遺物の出土も多かった。初年度の調査であったため、遺構が全くなかったかどうかについては自信が無いが、遺物の出土状況を見る限りは、集中した部分はみられない。

E21区

範囲の大半は、工事前の伐採作業用に重機が通る道として削平されている。表層での傾斜角度は、東側29%である。断面をとれる範囲が確保できず、層位は記録していない。削平された部分に遺構があったのかどうかは判断できないが、少なくとも削平された壁面には、遺構は確認できなかった。1号住居跡の一部がかかっているが、初年度の調査であったため遺構に対する認識が甘く、住居跡と確認できたのは既に急傾斜面の工事が終了した後であり、全形を明らかにすることは出来なかった。

D21区

調査区の最も北東側にあり、表層での傾斜角度は北側15%であるが、東側はかなりきつい。層位は安定しているものの、遺物量は少ない。上の方から投棄されたものと考えられる。



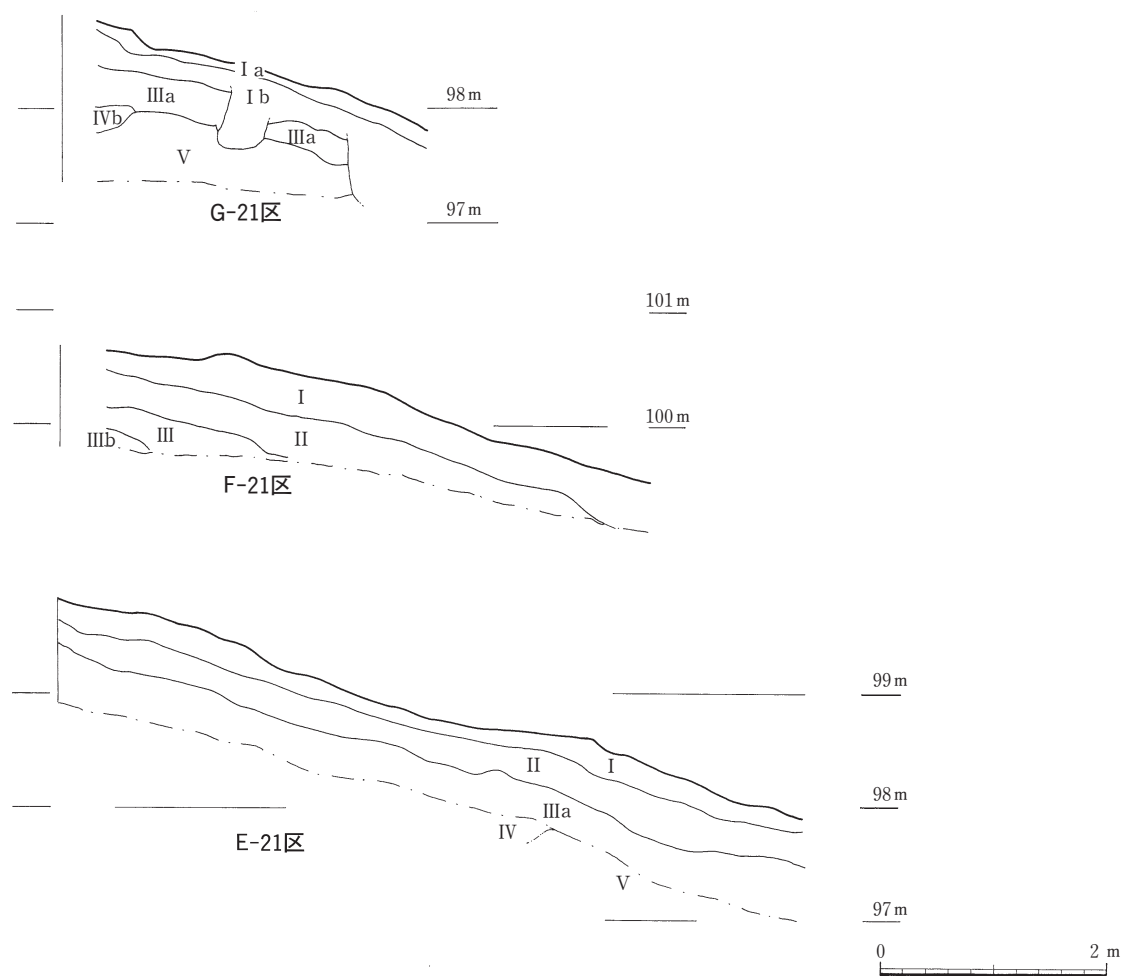
第17図 グリッド状況図（4）D21区

H20区

谷部にあたる場所であり，東側は急崖となっている。表層での傾斜角度は，南側14%，東側33%である。層位は深く安定しており，II層やIIIb3層もはっきりしていた。深い部分まで多量の遺物が出土し，崖際の遺物については工事中に取り上げた。

G20区

表層での傾斜角度は，南側26%，東側32%である。層位は北側では薄い，南側で次第に厚くな



第18図 北側土層断面図（1）G・F・E-21区

る。3号住居跡が検出され、8号住居跡の一部がかかっている。斜面の状況から考えると、生活できる範囲の限界ではないかと推察される。遺物の出土も比較的多く、崖際の遺物については工事中に取り上げた。

F20区

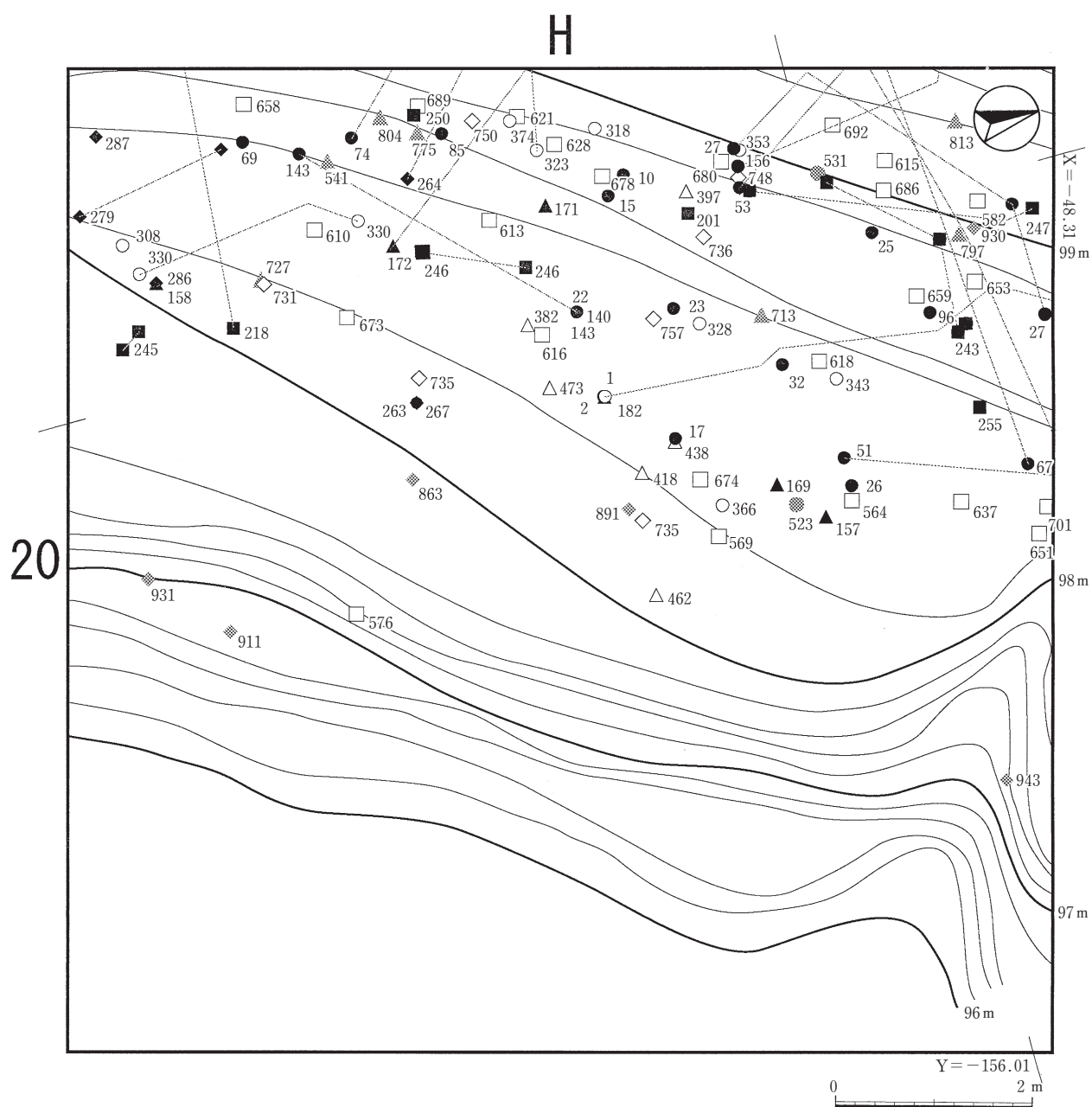
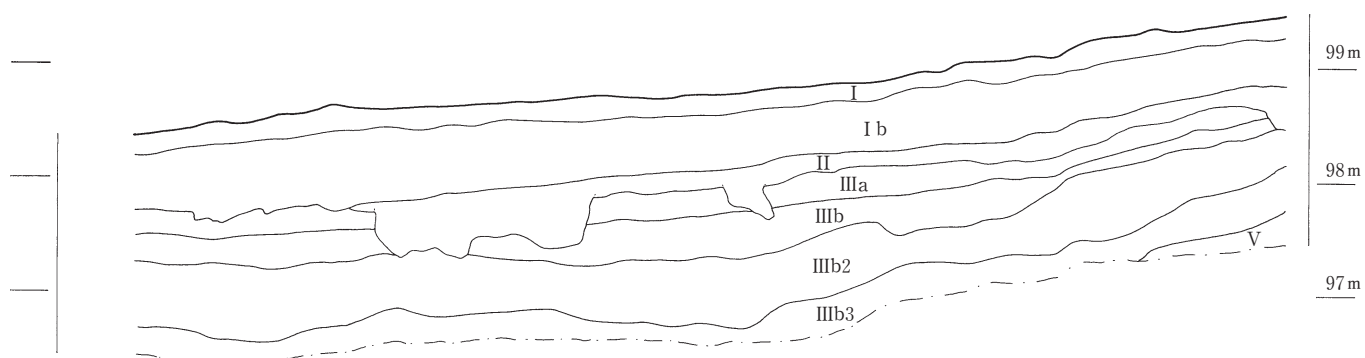
表層での傾斜角度は、南側24%、東側19%であり、比較的安定した場所である。層位は薄くなってきて、各層の境が不鮮明となる。2号住居跡が検出され、4号・8号・9号住居跡の一部がかかっている。また、6号土坑と石組みも検出され、生活しやすかった場所であることが窺える。

E20区

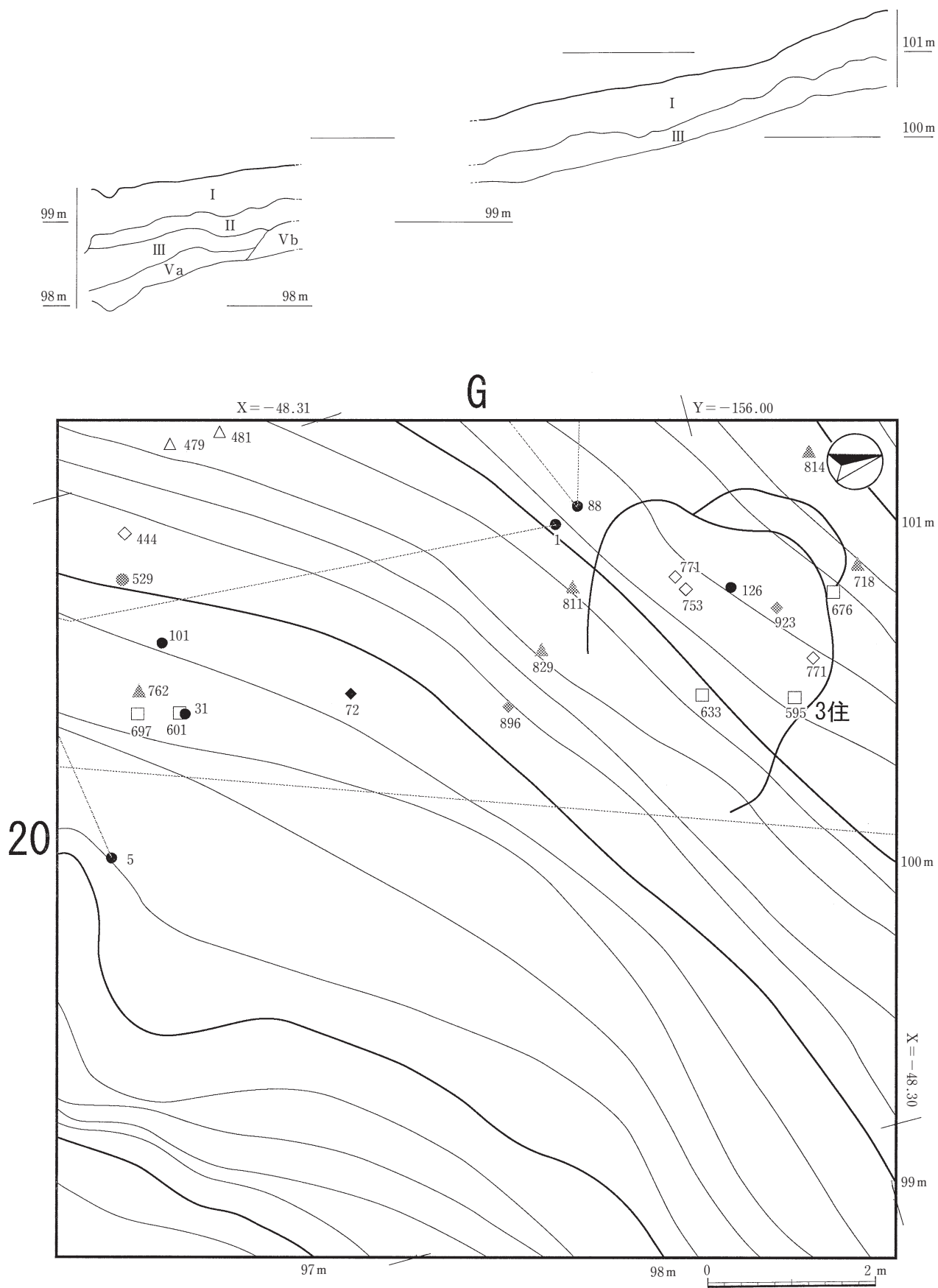
表層での傾斜角度は、南側11%、東側20%であり、比較的安定した場所である。層位は上位は薄い、薩摩火山灰層が安定して堆積している。11号住居跡が検出され、1号・9号住居跡の一部がかかっている。平坦面の中では遺物量が最も多く、生活しやすかった場所であることに加え、上の方から投棄された可能性も考えられる。

D20区

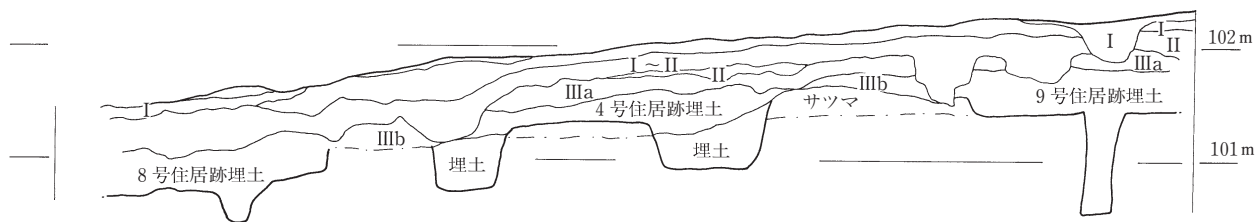
表層での傾斜角度は北側21%であり、急崖へ至る。このような地形の割には遺物量が多く、上の



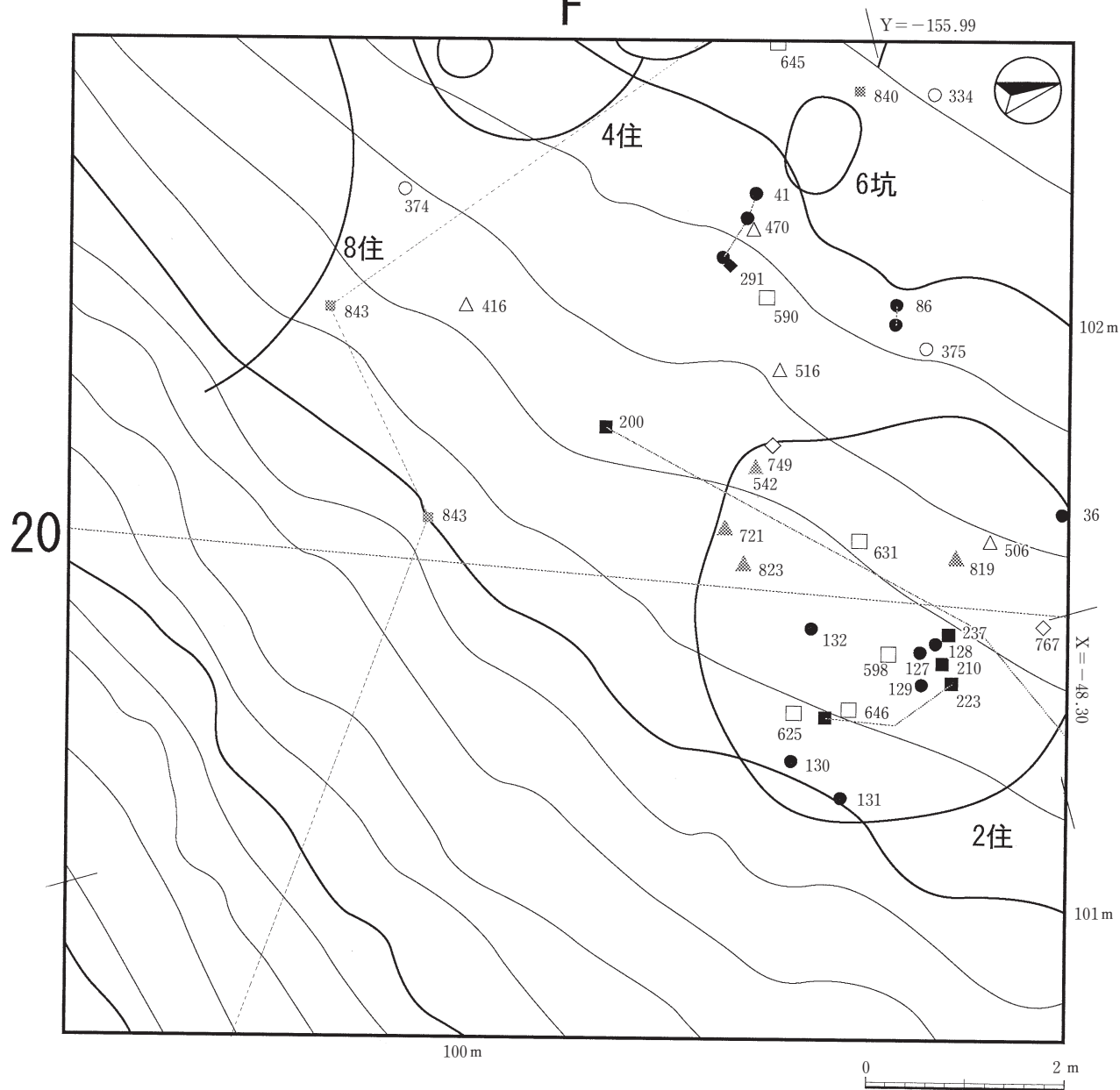
第19図 グリッド状況図 (5) H20区



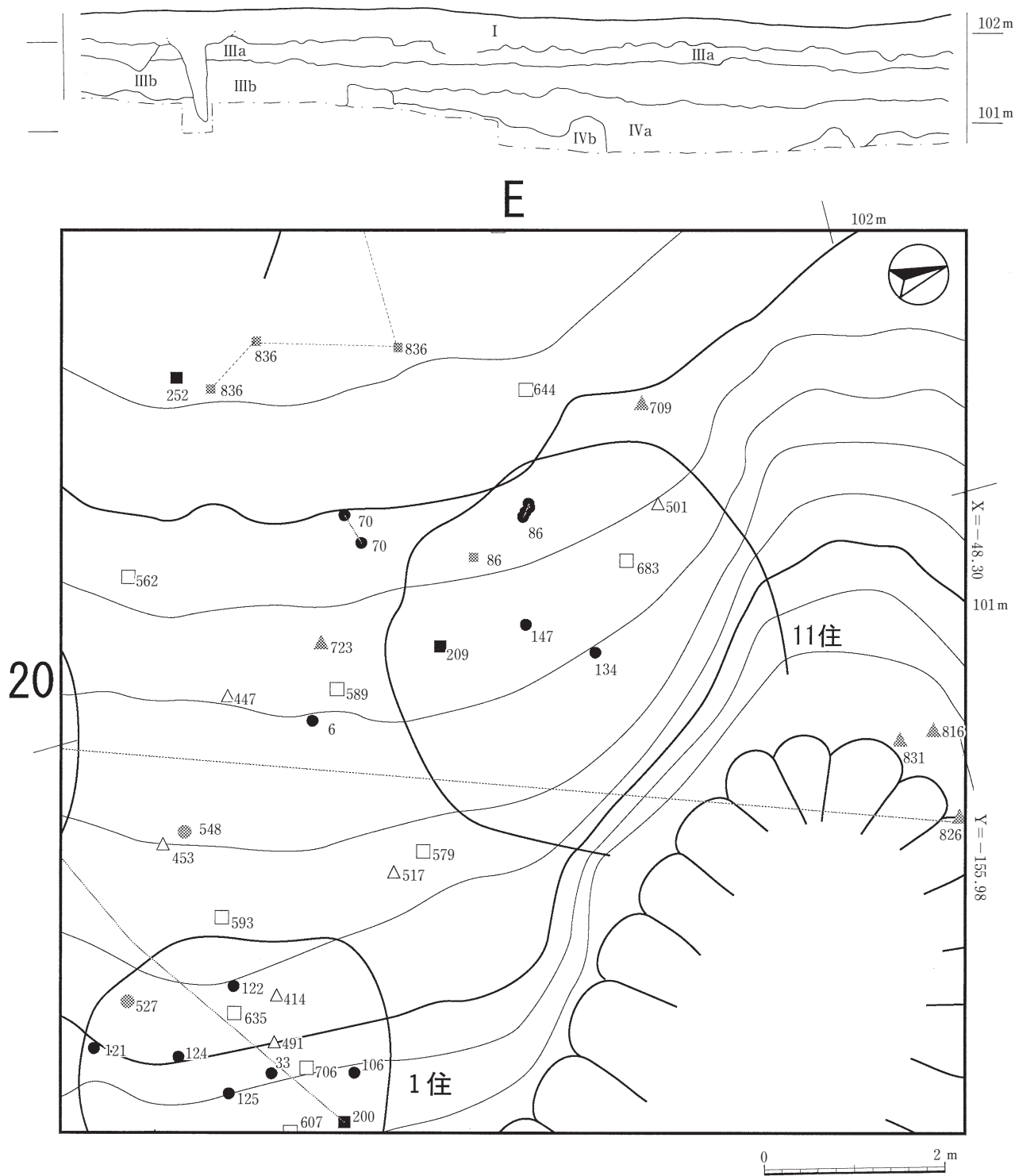
第20図 グリッド状況図（6）G20区



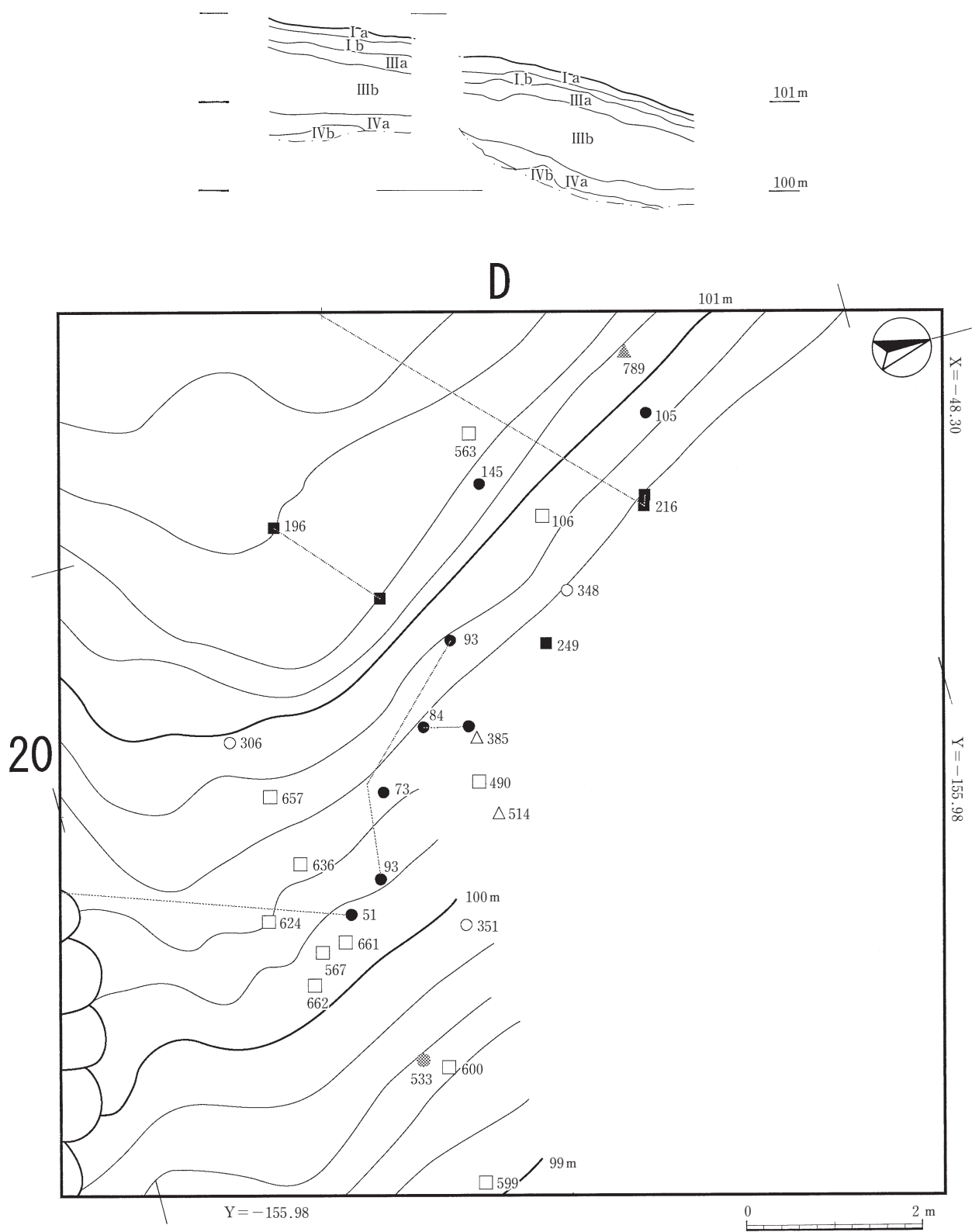
F



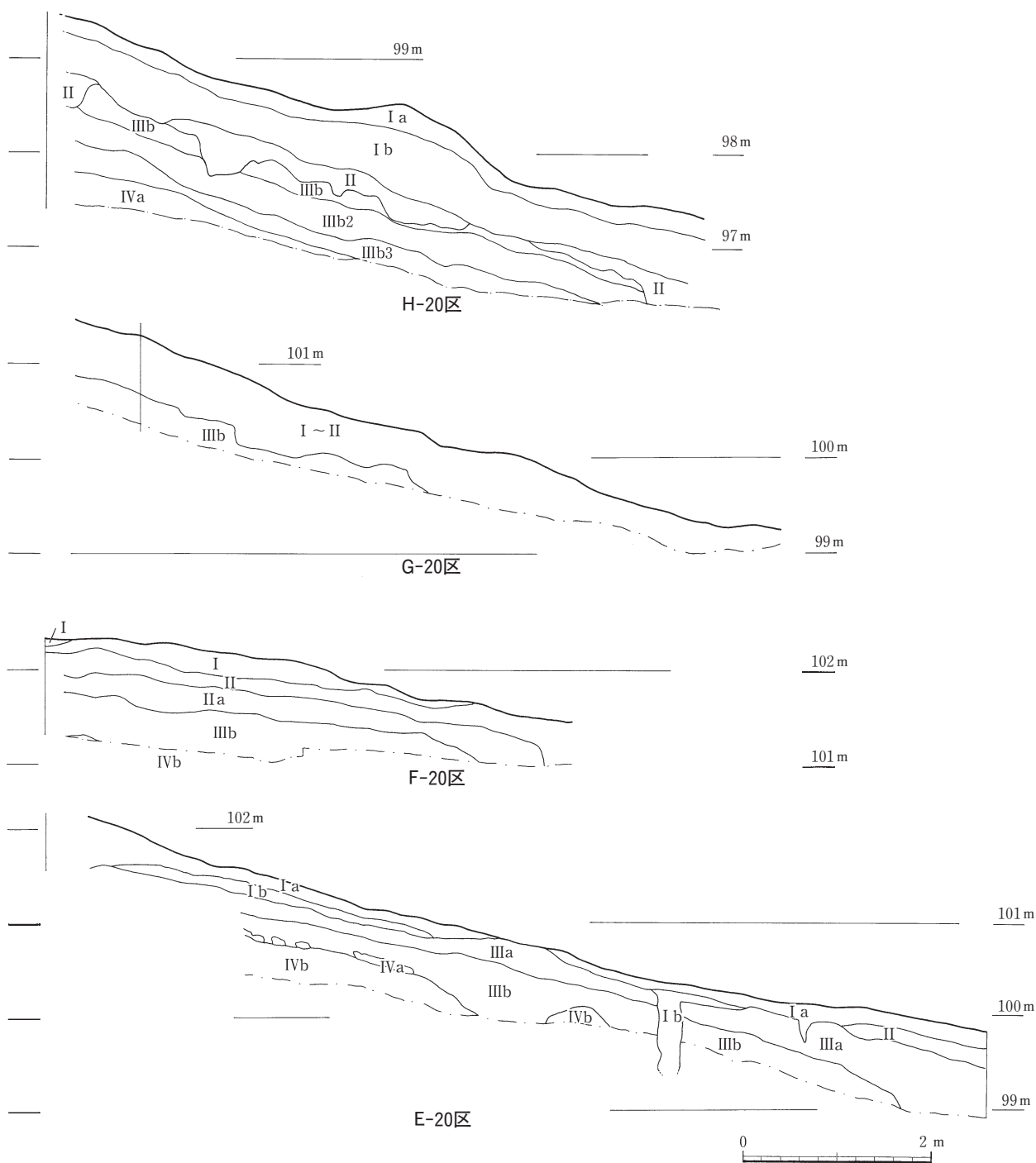
第21図 グリッド状況図 (7) F20区



第22図 グリッド状況図（8）E20区



第23図 グリッド状況図（9）D20区

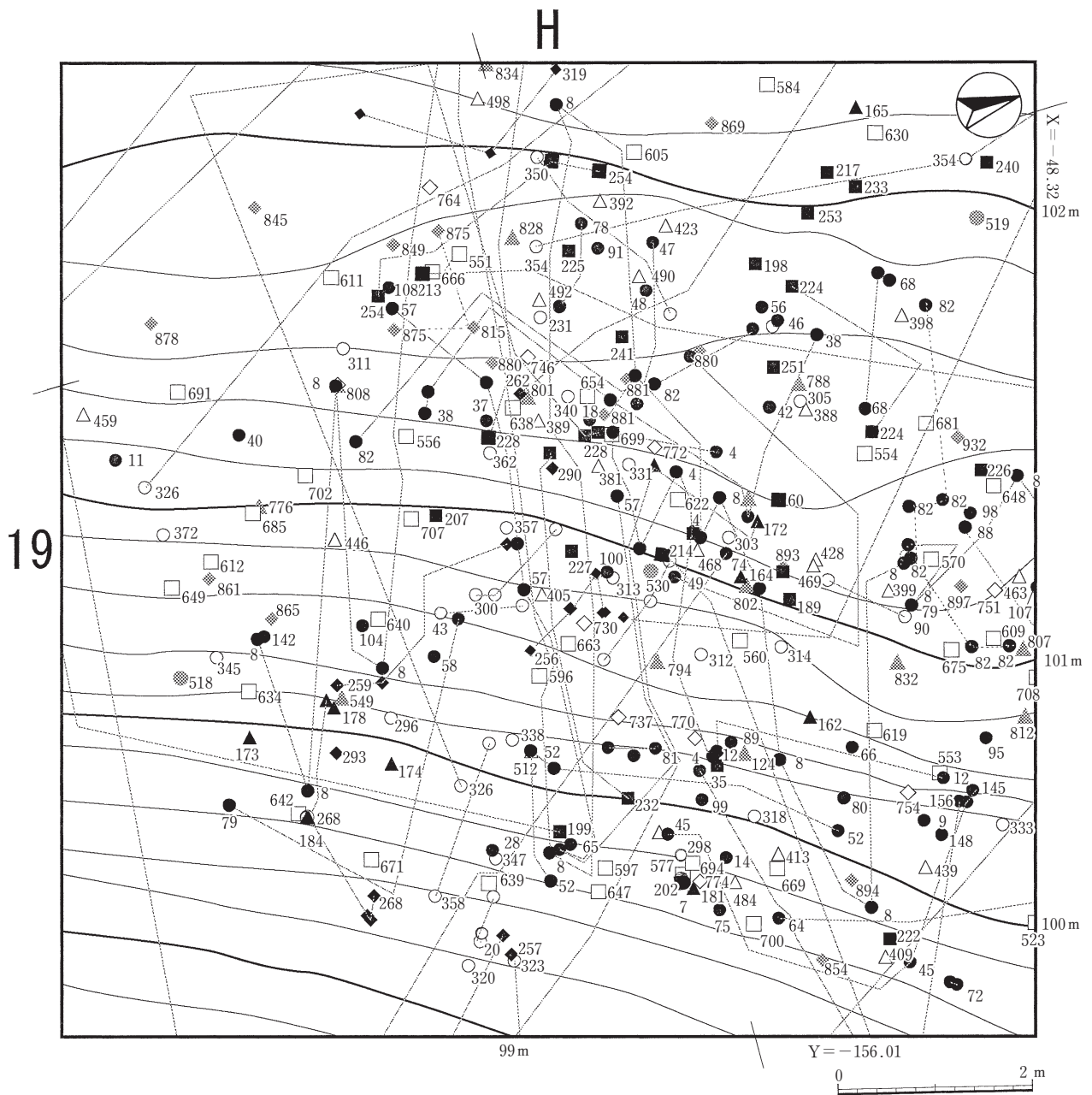
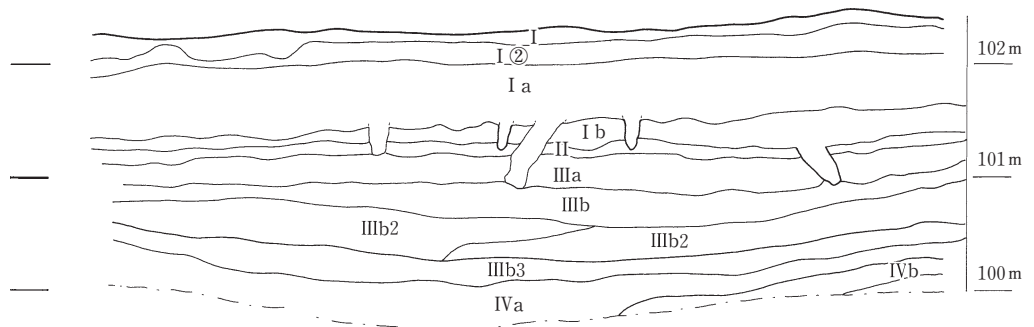


第24図 北側土層断面図（2）H・G・F・E-20区

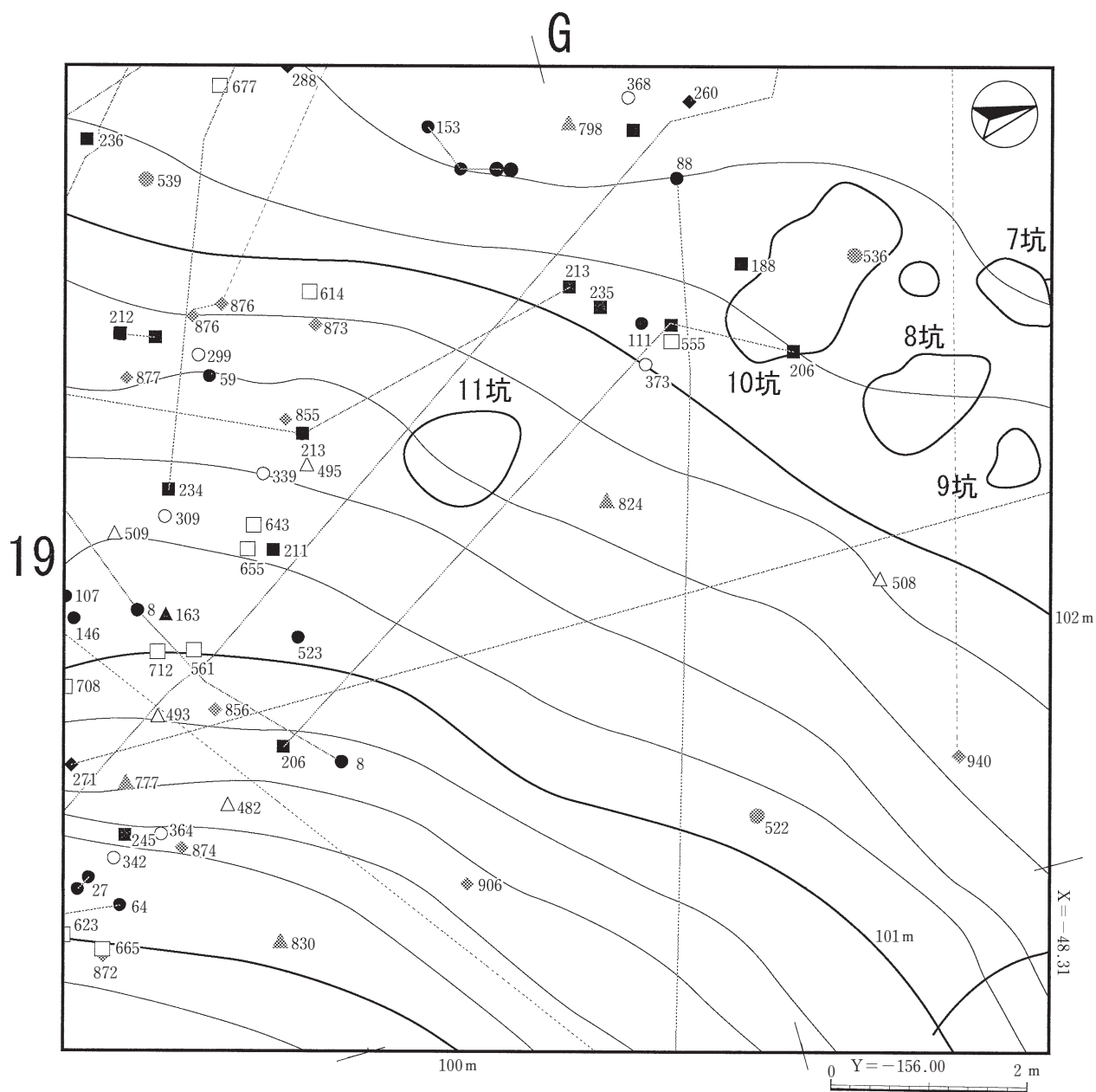
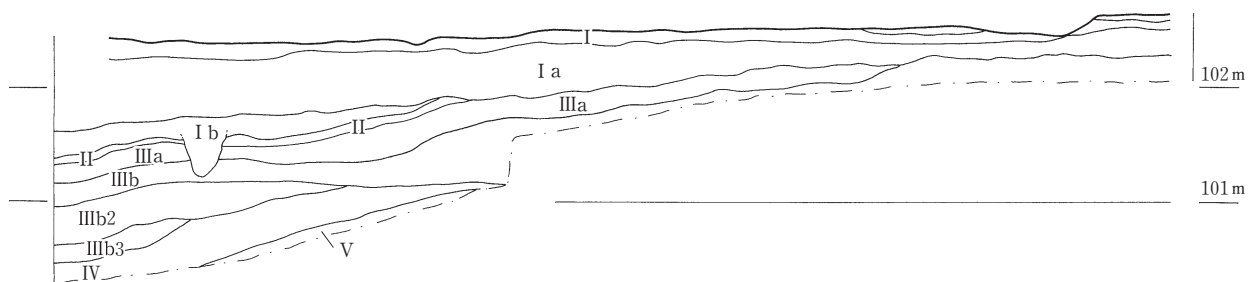
方から投棄されたと考えられる。この範囲に遺物を投棄した縄文人は、E区及びD区の人々だった可能性が高い。

H19区

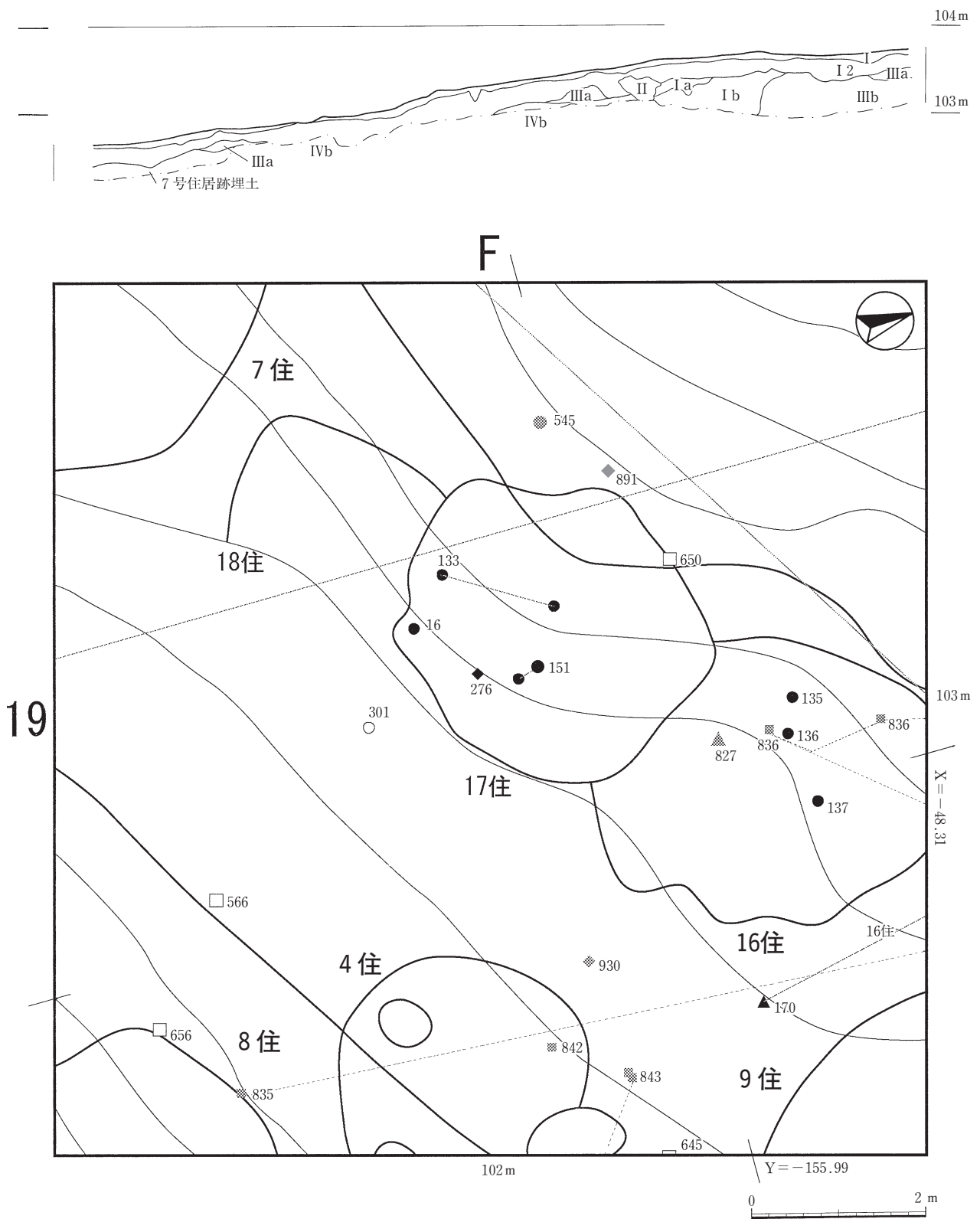
谷部に位置して、最も多くの遺物が出土した場所である。表層での傾斜角度は、南側4％，東側24％であるが、縄文時代後期にはこれよりも傾斜がきつかったことが窺える。層位は各層が厚く堆



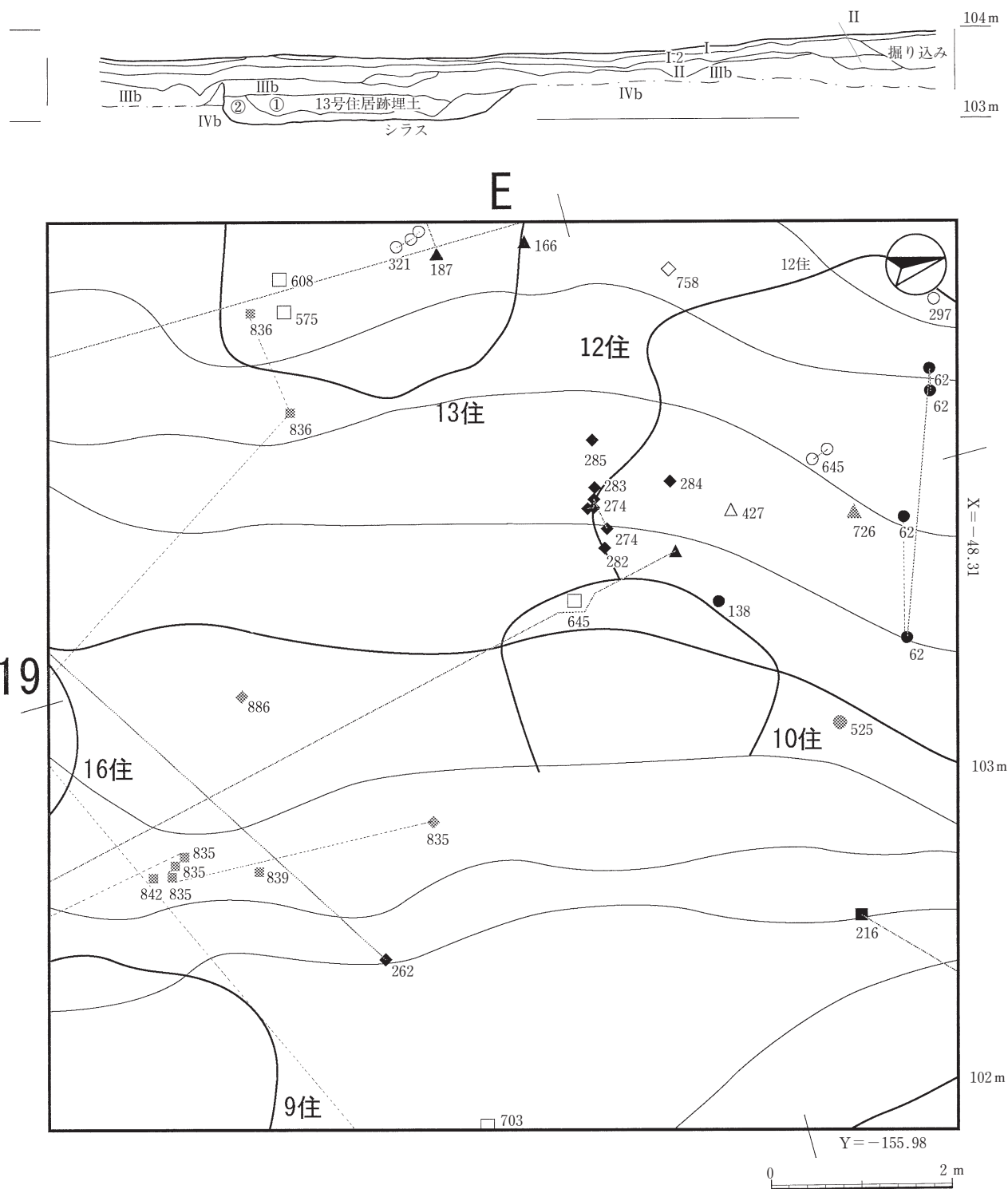
第25図 グリッド状況図 (10) H19区



第26図 グリッド状況図 (11) G19区

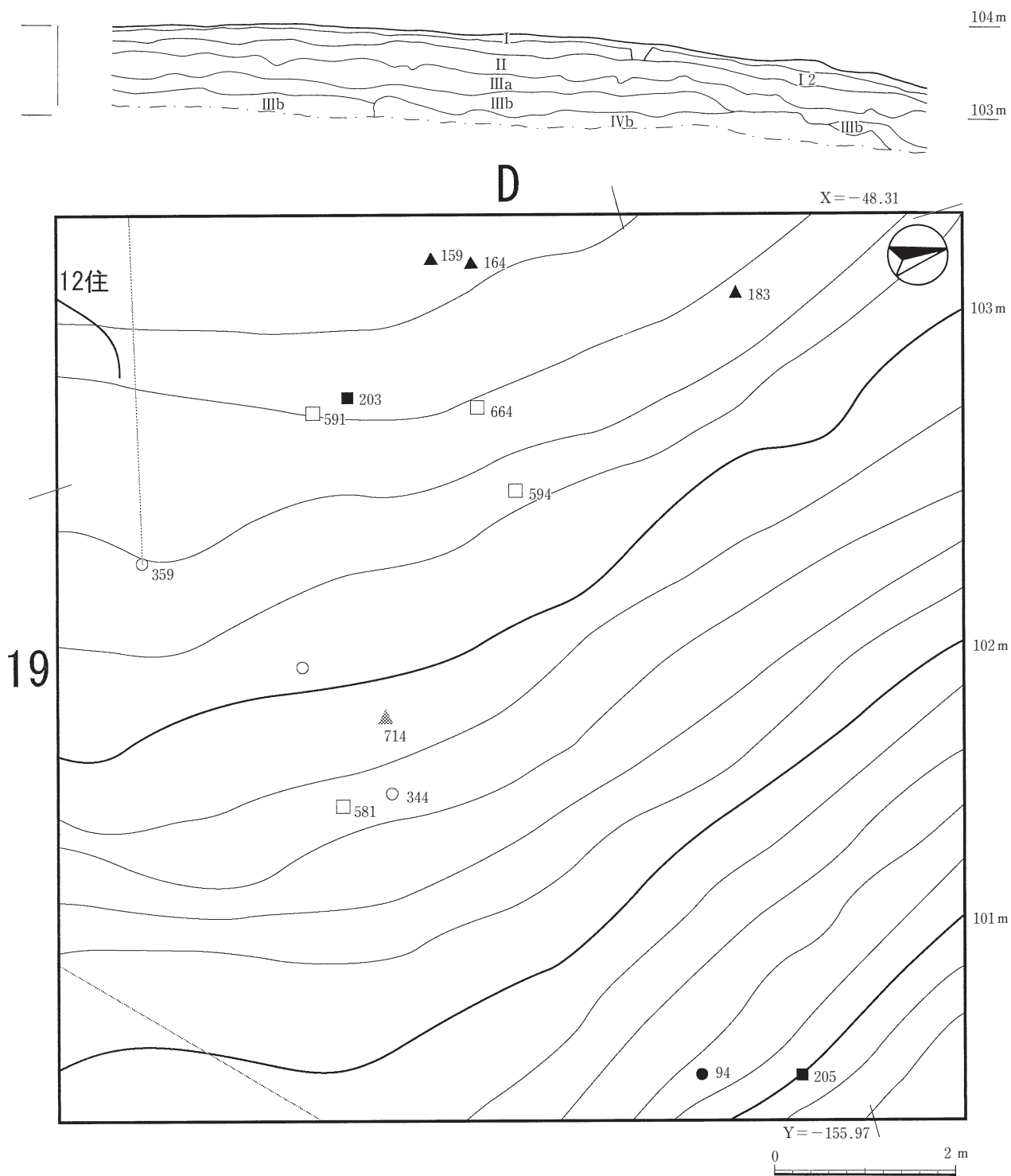


第27図 グリッド状況図 (12) F19区



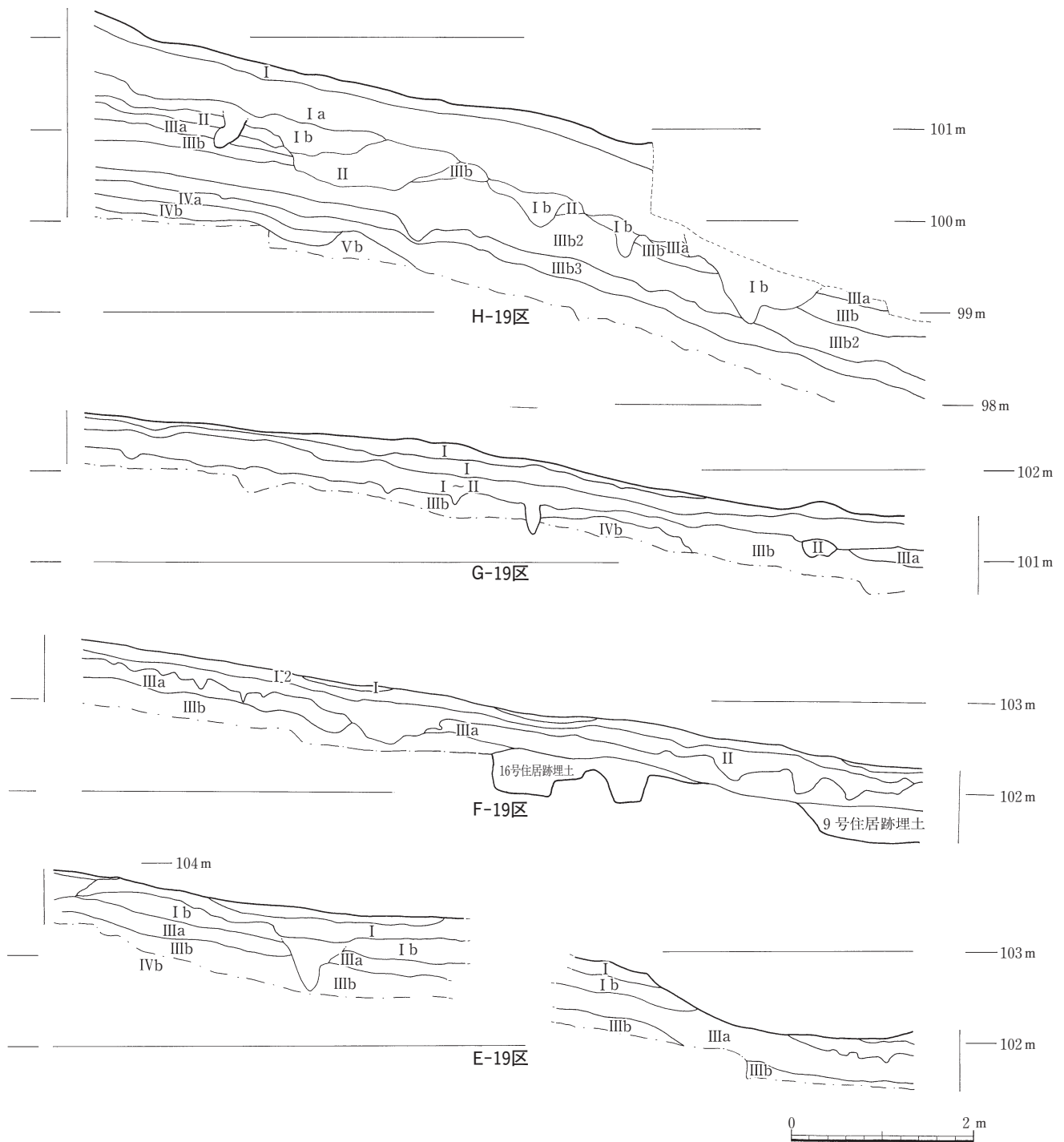
第28図 グリッド状況図 (13) E19区

積しており、基準土層断面もこの区の西側壁面を利用している。縄文時代は谷部を利用した廃品の
 投棄場所であったと考えられ、破損した土器や石器、あるいは何かに利用されたと思われる礫など
 が、混在して出土した。縄文土器の接合線をみると、高い方の区との接合も多く、時間が経つにつ



第29図 グリッド状況図 (14) D19区

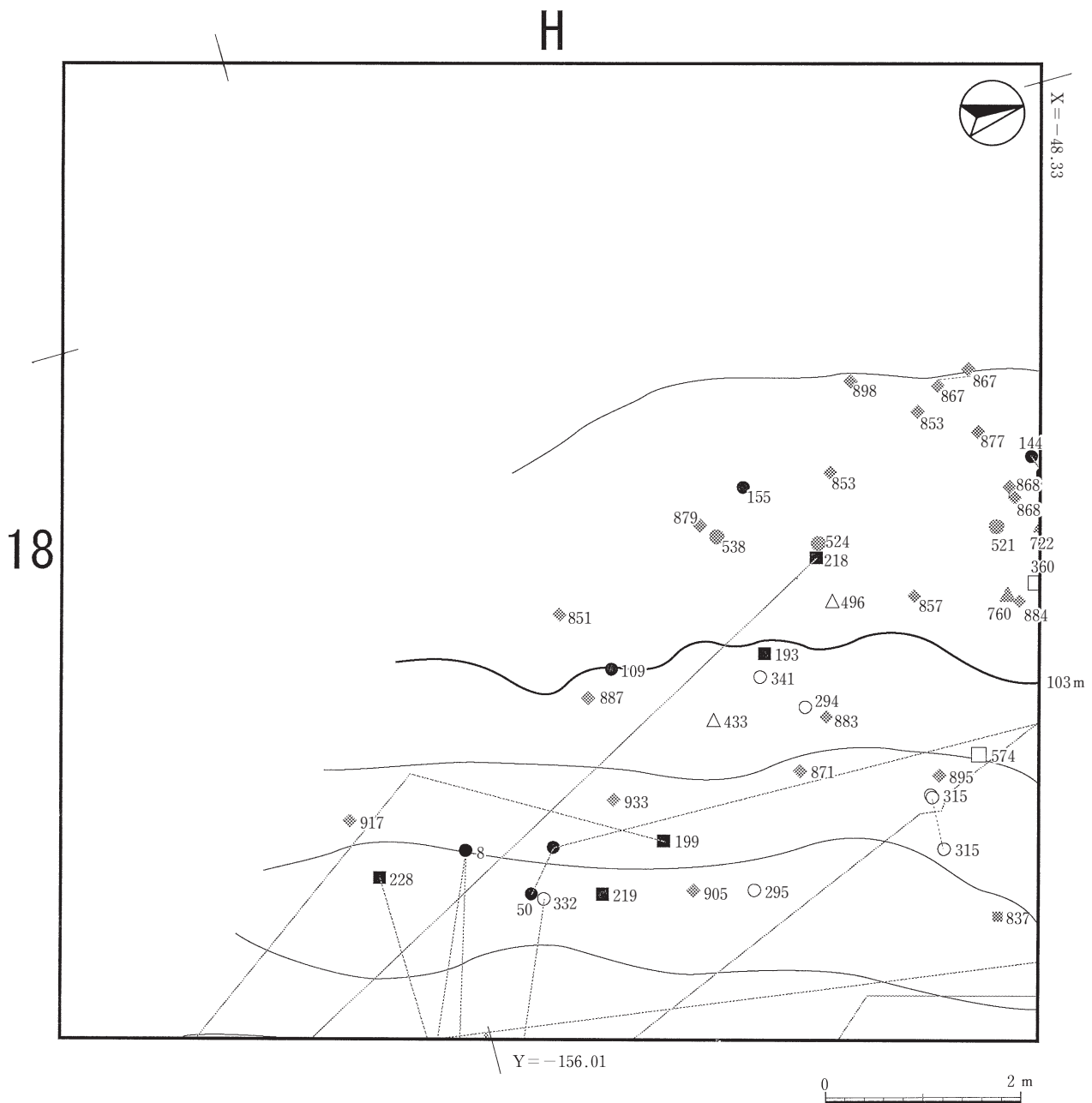
れて転がり落ちてきたものも多いことが窺える。平安時代前半には安定した地形であったらしく、掘り込み3などの遺構がある。その後、古代後半から中世前半にかけては根栽系植物の採掘などに利用されたようである。



第30図 北側土層断面図（3）H・G・F・E-19区

G19区

谷部にかかろうとする地点であり，高い位置には遺構がある。低い位置では，投棄された遺物が出土している。表層での傾斜角度は，南側4%，東側18%である。層位は谷部ほど安定しており，高くなるとIIIb2層が捉えられなくなる。縄文時代の土坑が集中して検出され，7号と8号住居跡の

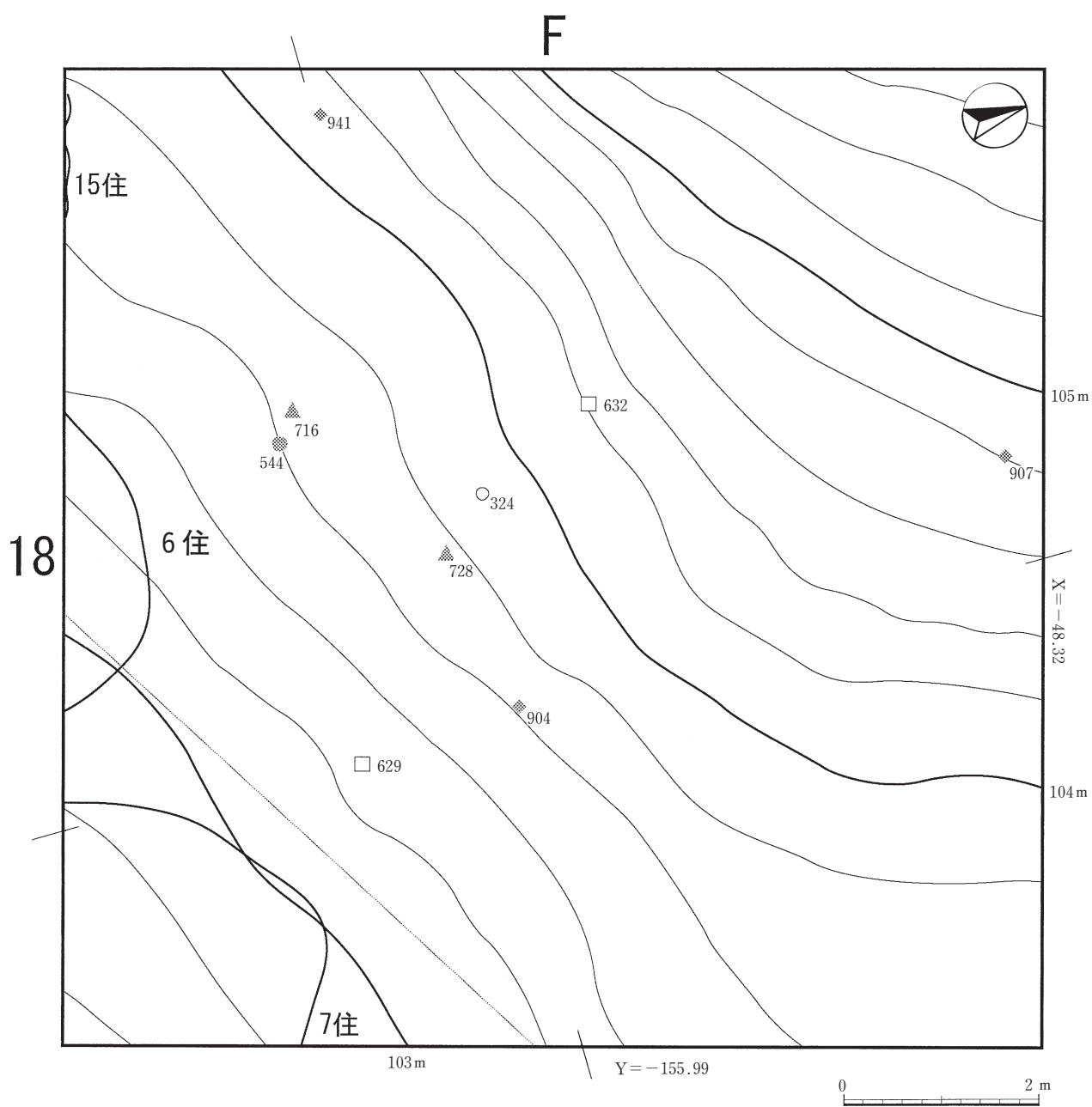
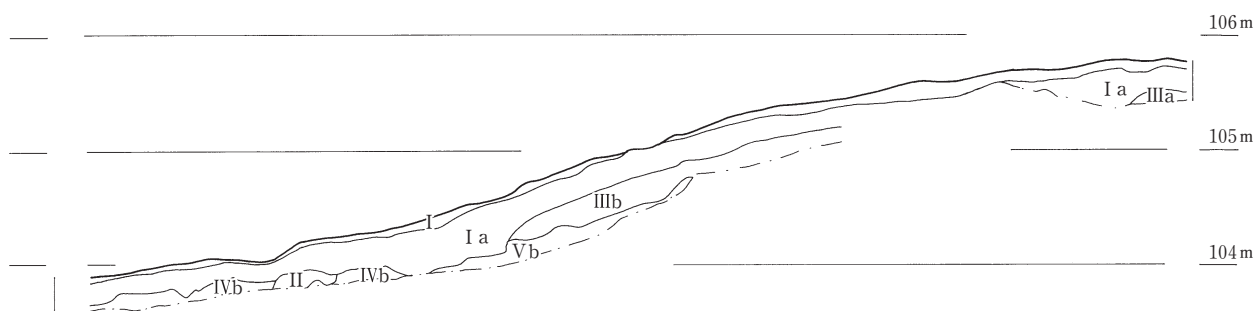


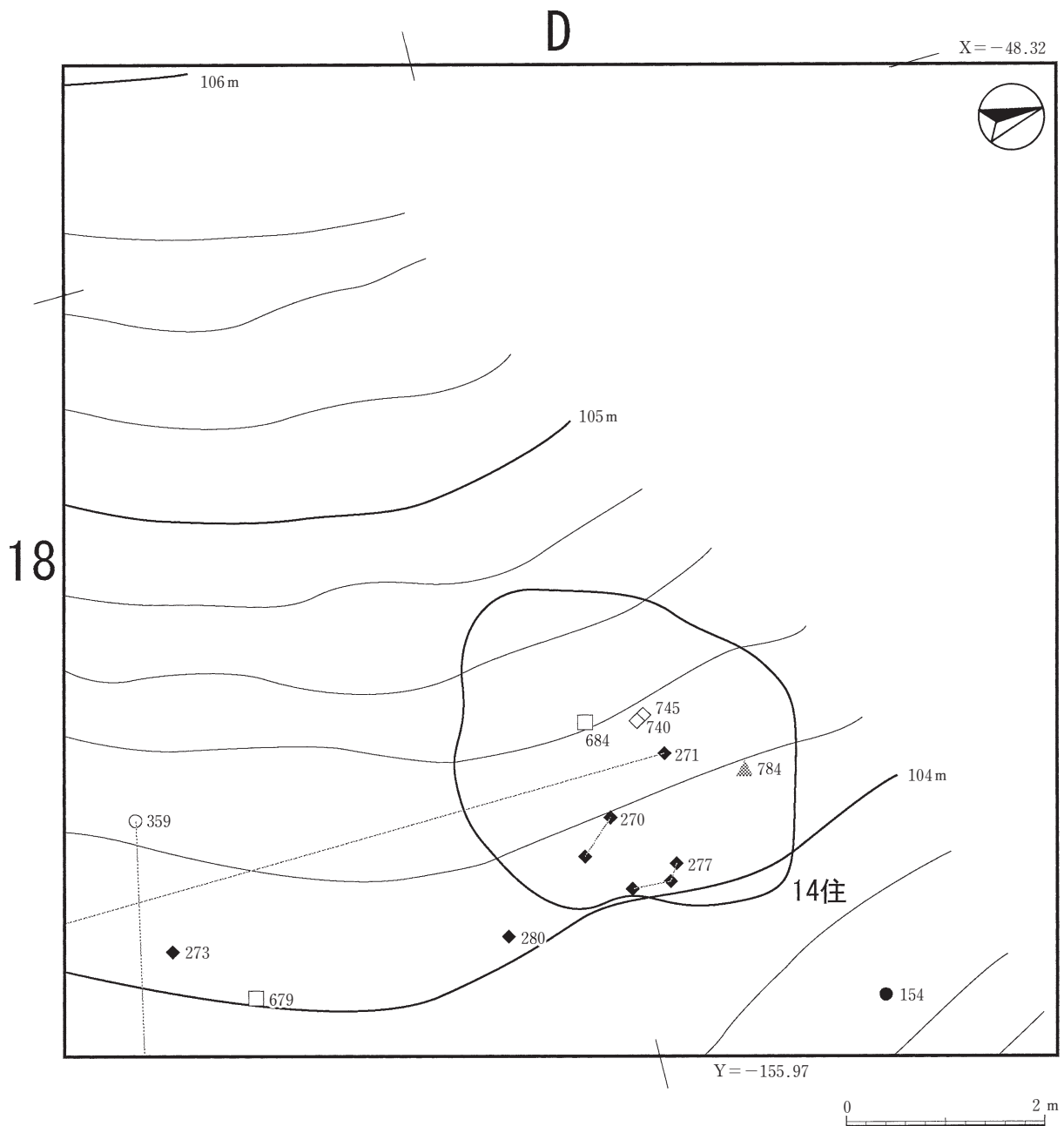
第31図 グリッド状況図 (15) H18区

一部がかかっている。

F19区

表層での傾斜角度は、南側15%、東側14%であるが、山ノ中遺跡では最も水平に近い安定した場所である。層位は薄いが、遺構は捉えることができた。4号・16号・17号・18号住居跡が検出され、7号・8号・9号住居跡の一部がかかっている。縄文時代の遺構が最も集中している区域であり、この時期には傾斜が緩く住み易い地点であったことが窺える。包含層が薄かった為、遺物の出土点数はそれほど多くはない。



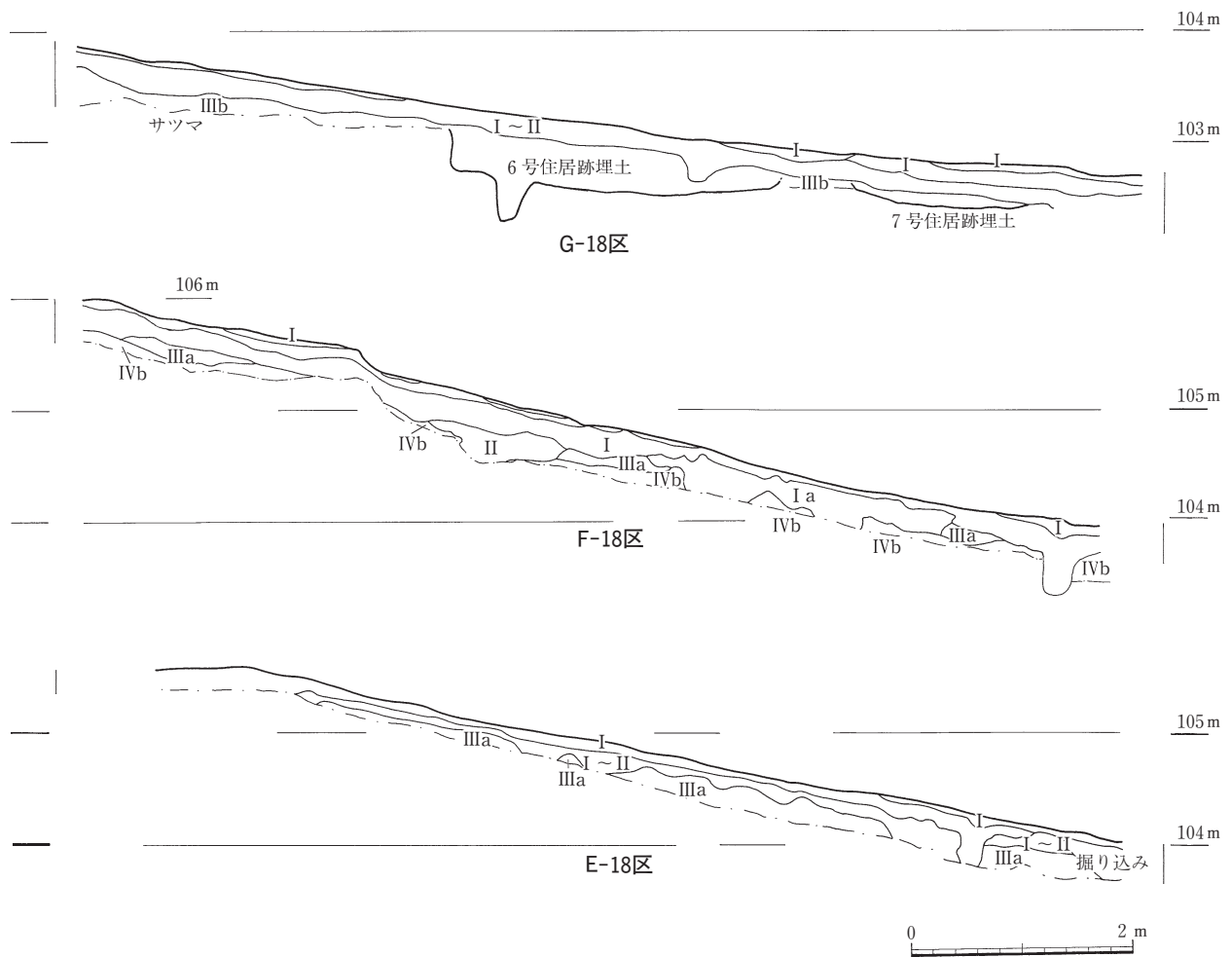


第35図 グリッド状況図 (19) D18区

部がかかっている。表土層下で検出された道跡はこの地点に集中しており、上り下りする時の一休み場所であったことが窺える。

D19区

傾斜面が南側から北側へ変わる地点であり、表層での傾斜角度は北側17%である。層位は次第に厚さを増しており、安定している。12号住居跡の一部がかかっているだけで、これより北東側に遺構はみられない。



第36図 北側土層断面図（4）G・F・E-18区

H18区

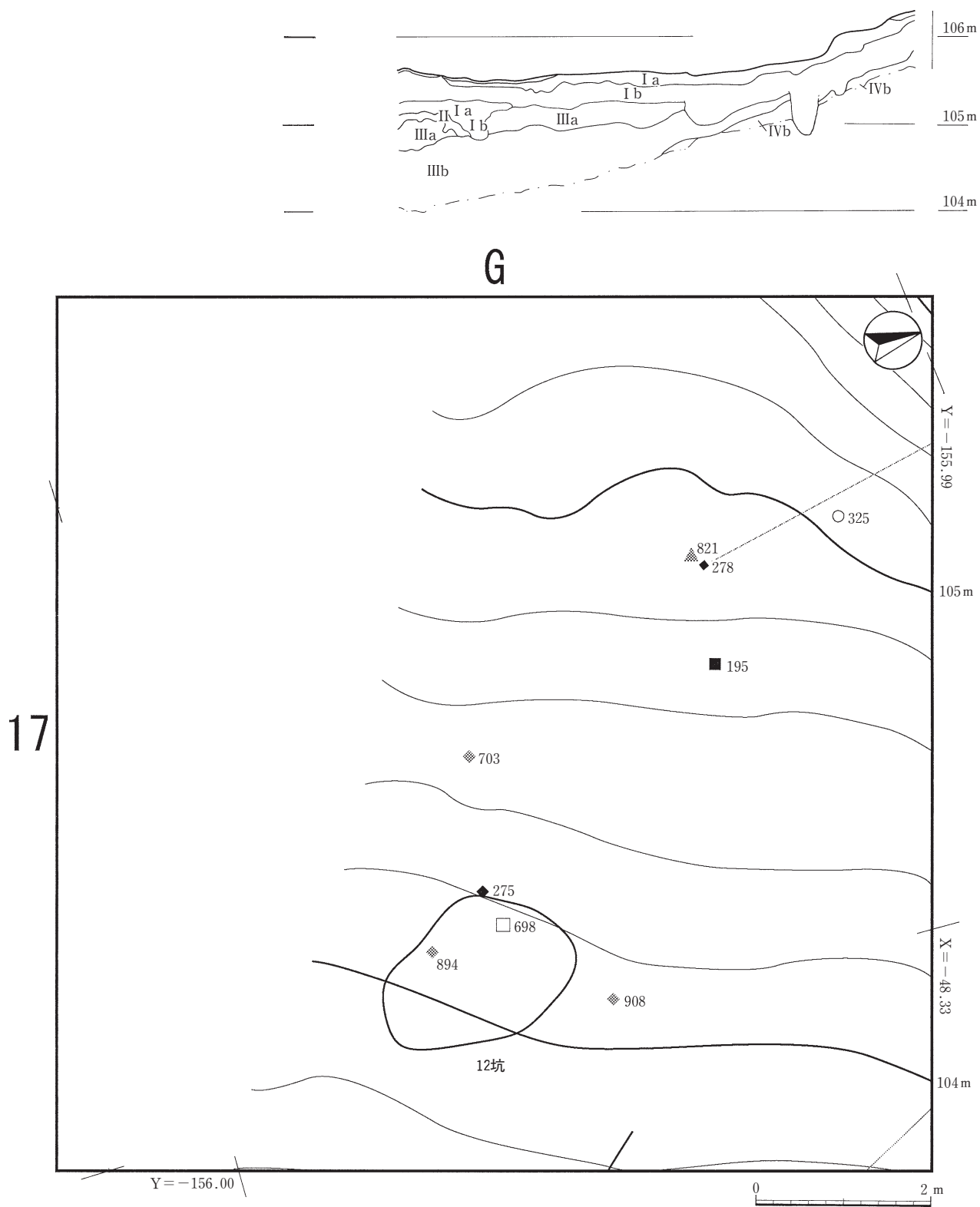
谷頭にあたる地点であり、南北方向の地形は水平に近い。縄文時代の遺物よりも古代前半の遺物が多く、この時代に生活場所として利用されたことが窺える。古代後半から中世前半頃には、掘り込み1のような根栽系植物の採掘痕があるので、人々の生活の場ではなく、自然のままの状態であったことが窺える。

G18区

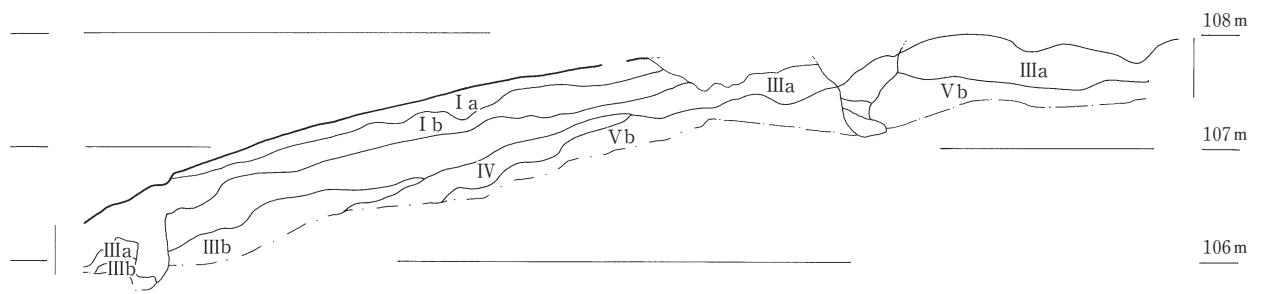
表層での傾斜角度は南側15%、東側16%で、比較的安定した地形である。層位は、II層、III a層共ははっきりしている。5号・6号・15号住居跡が検出され、7号住居跡の一部がかかっている。F19区と同様に、縄文時代の遺構が集中している区域であり、この時期には傾斜が緩い上に北風を防げるため、住みやすい地点であったことが窺える。

F18区

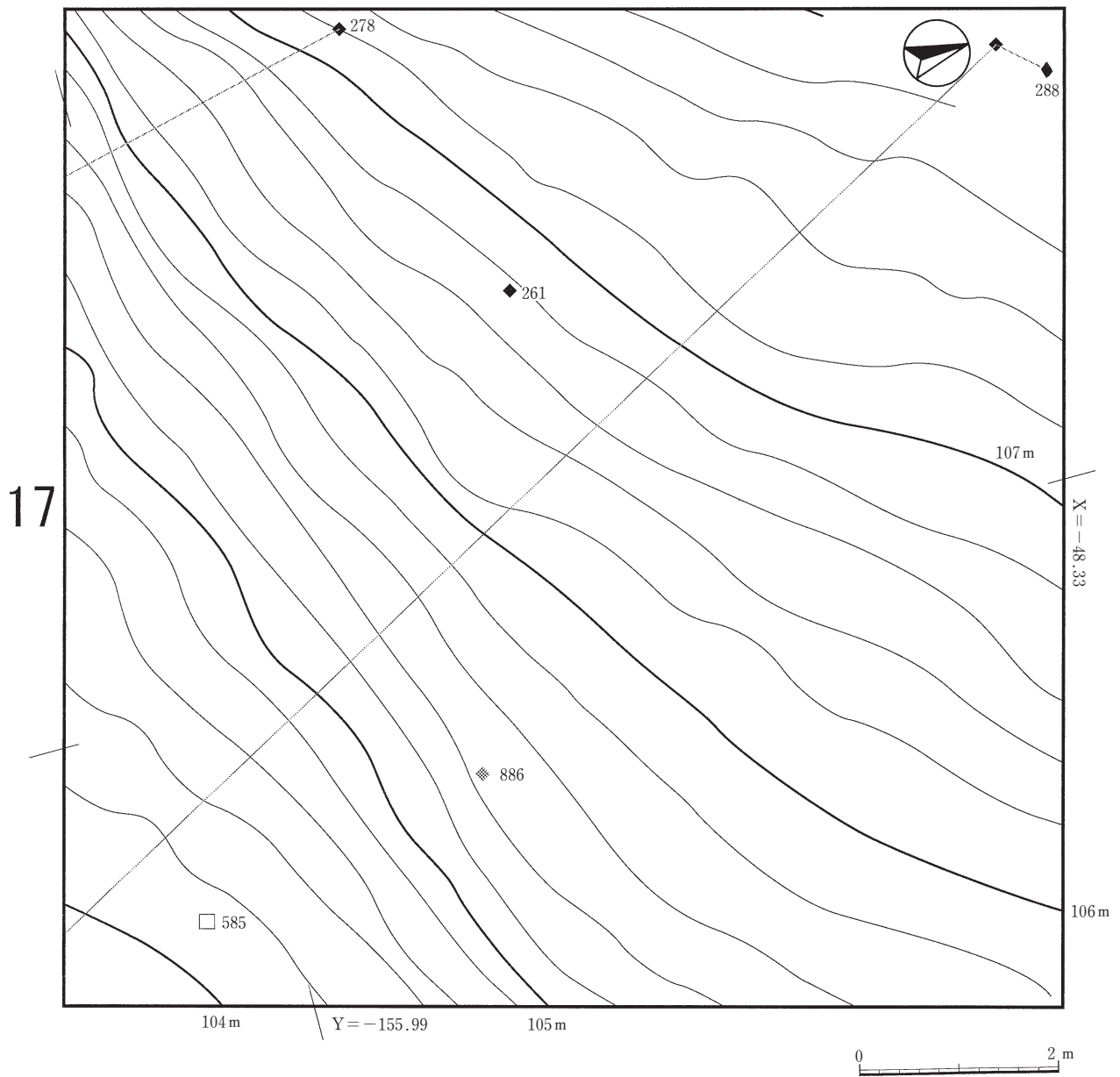
表層での傾斜角度は、南側27%、東側27%であり、北西に向かって傾斜がきつくなる地点である。発掘作業中の冬場に休憩用としてのテントを設置した場所であったが、北風を防げた上に日当たり



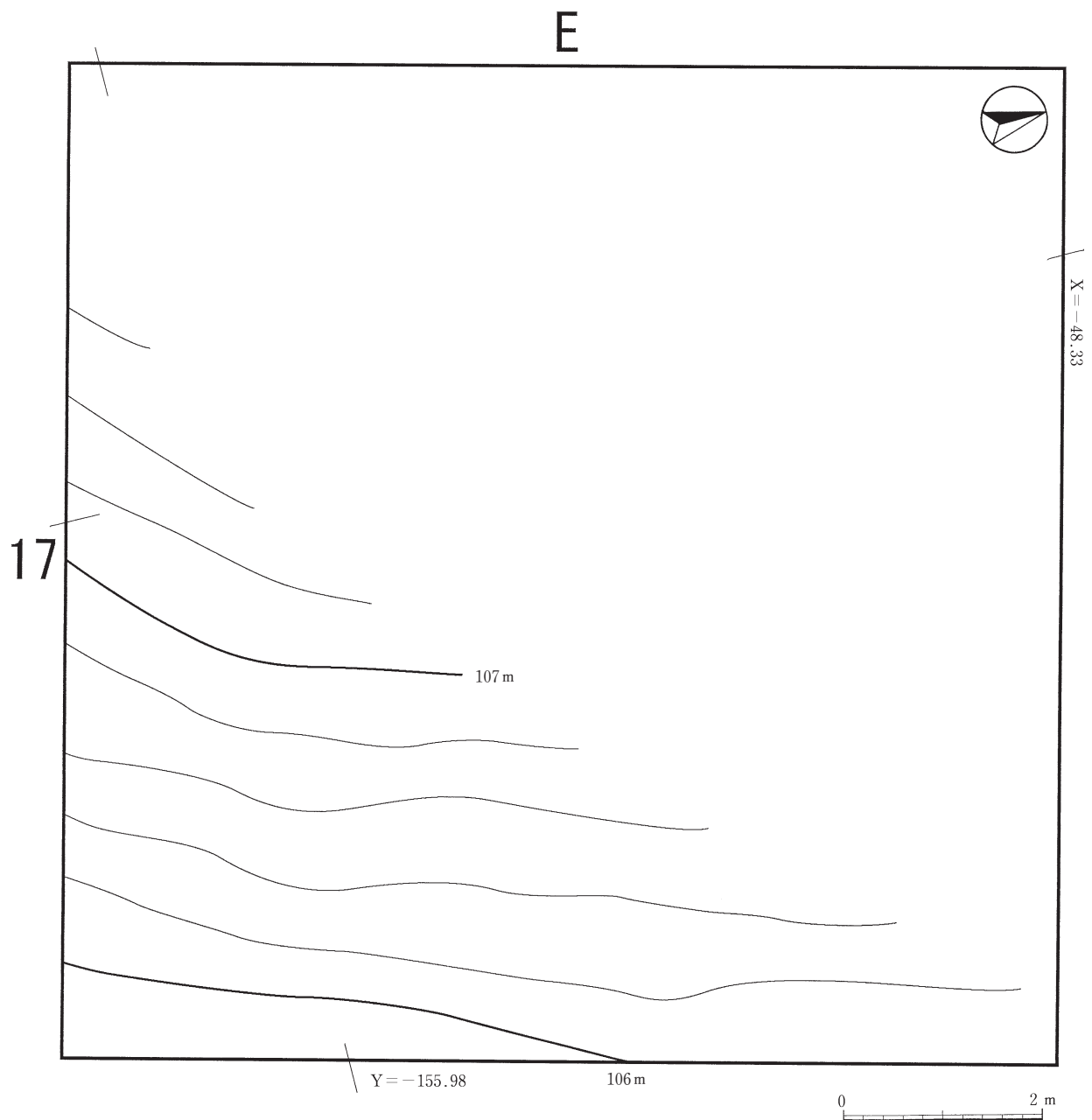
第37図 グリッド状況図 (20) G17区



F



第38図 グリッド状況図 (21) F17区

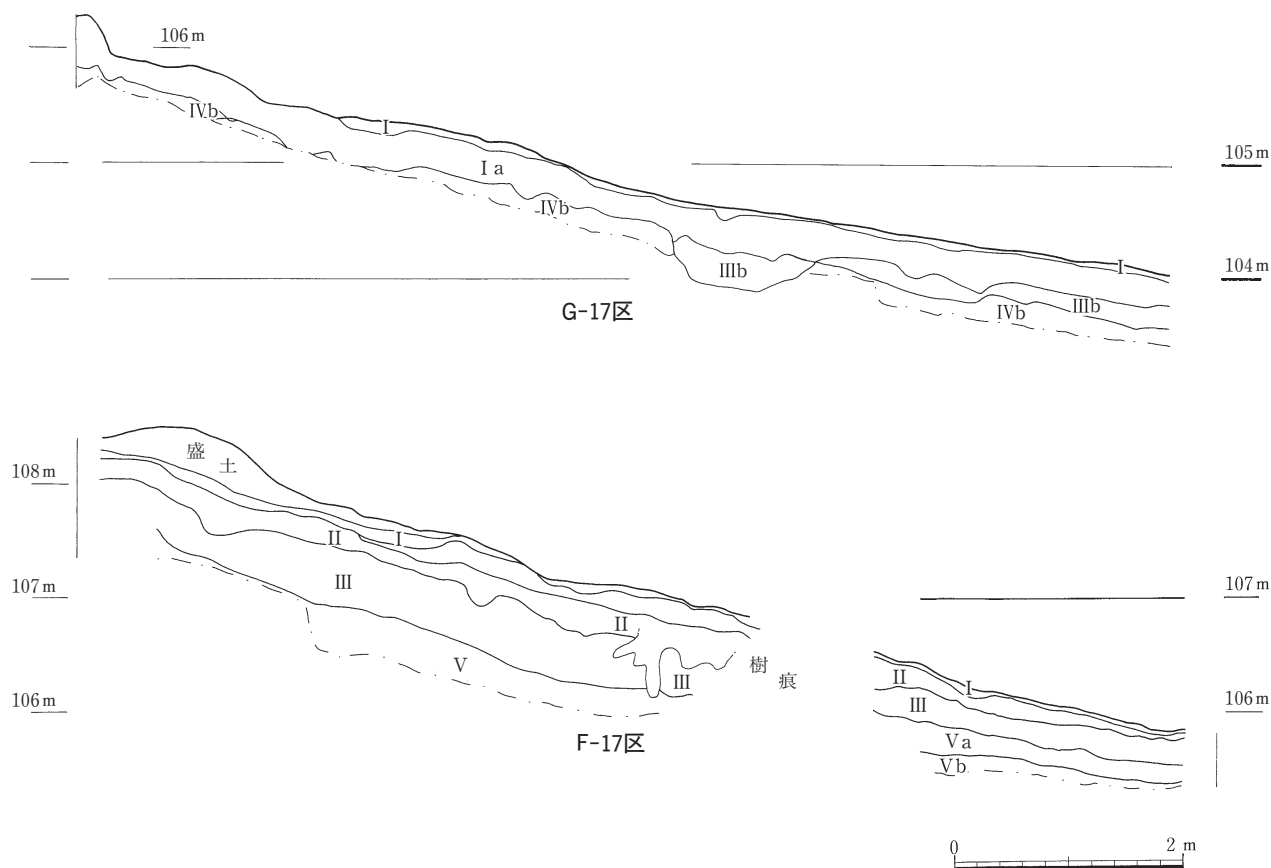


第39図 グリッド状況図 (22) E17区

も良く、居心地の良い場所であった。層位は表層は厚いが、Ⅲ層の残りは良くない。6号・7号住居跡の一部がかかっている。高くなるにつれて遺物の出土は少なくなる。

E18区

表層での傾斜角度は、南側5%、東側19%であり、傾斜が次第にきつくなる場所である。層位は薄く、Ⅲ層の境がはっきりしなくなる。屋外炉跡が検出され、13号住居跡の一部がかかっている以外は遺構はみられず、この地点より上位は生活に不向きだったことが窺える。



第40図 北側土層断面図（5）G・F-17区

D18区

範囲の北西側は、工事前の伐採作業用に重機が通る道として削平されている。傾斜がきつくなってくる地点であるが、14号住居跡が検出された。この住居跡が最も高い位置にあり、しかも北端に位置する。住居跡より上位には、遺物はみられなかった。

G17区

表層での傾斜角度は、南側15%、東側20%である。層位は、厚く安定していたが、遺物の出土は次第に少なくなる。遺構は、12号土坑が1基検出されただけである。

F17区

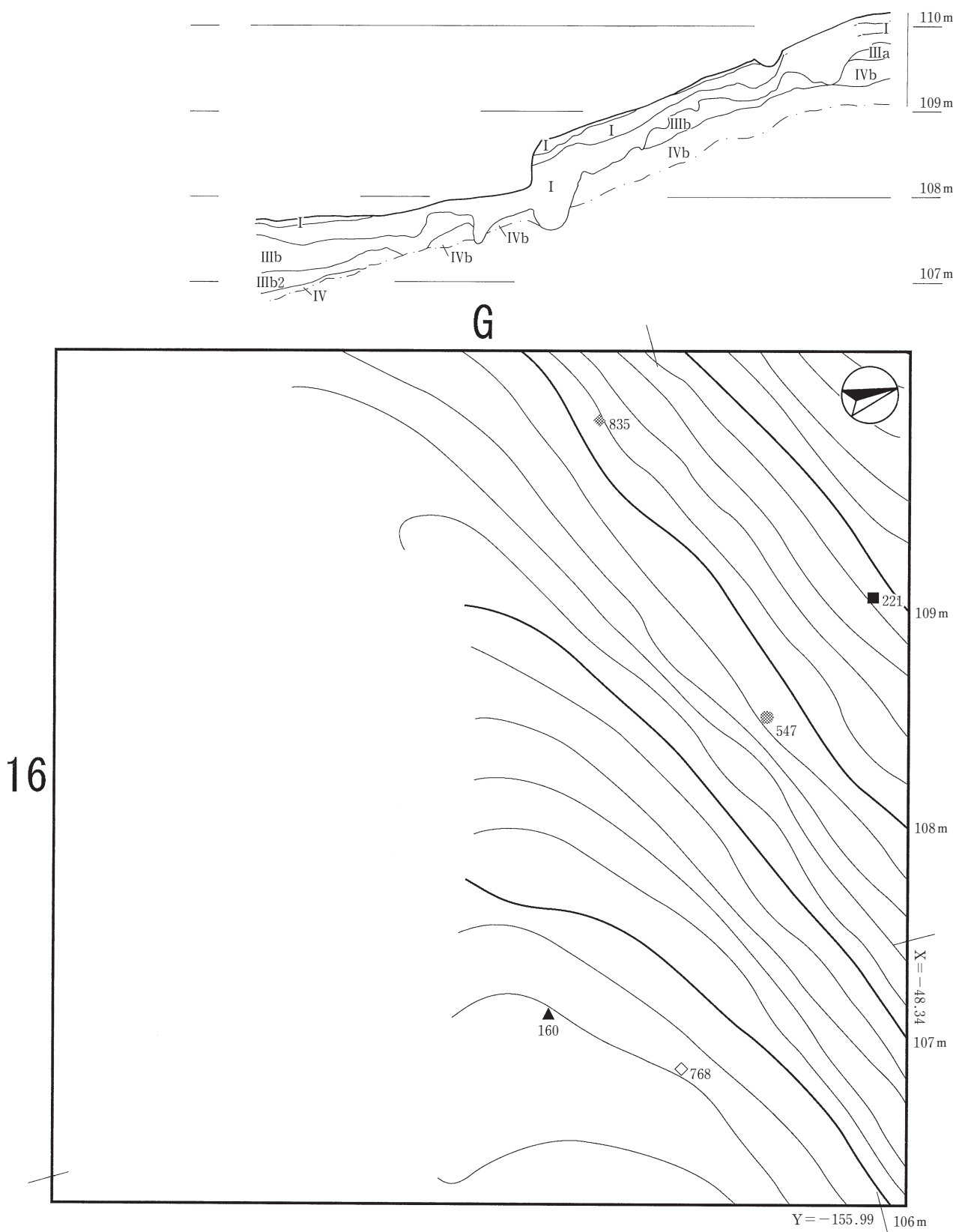
表層での傾斜角度は、南側27%、東側29%と、かなり急になる。層位は、高い方でIII b層がみられなくなる。遺構はみられず、遺物数は限られてくる。

E17区

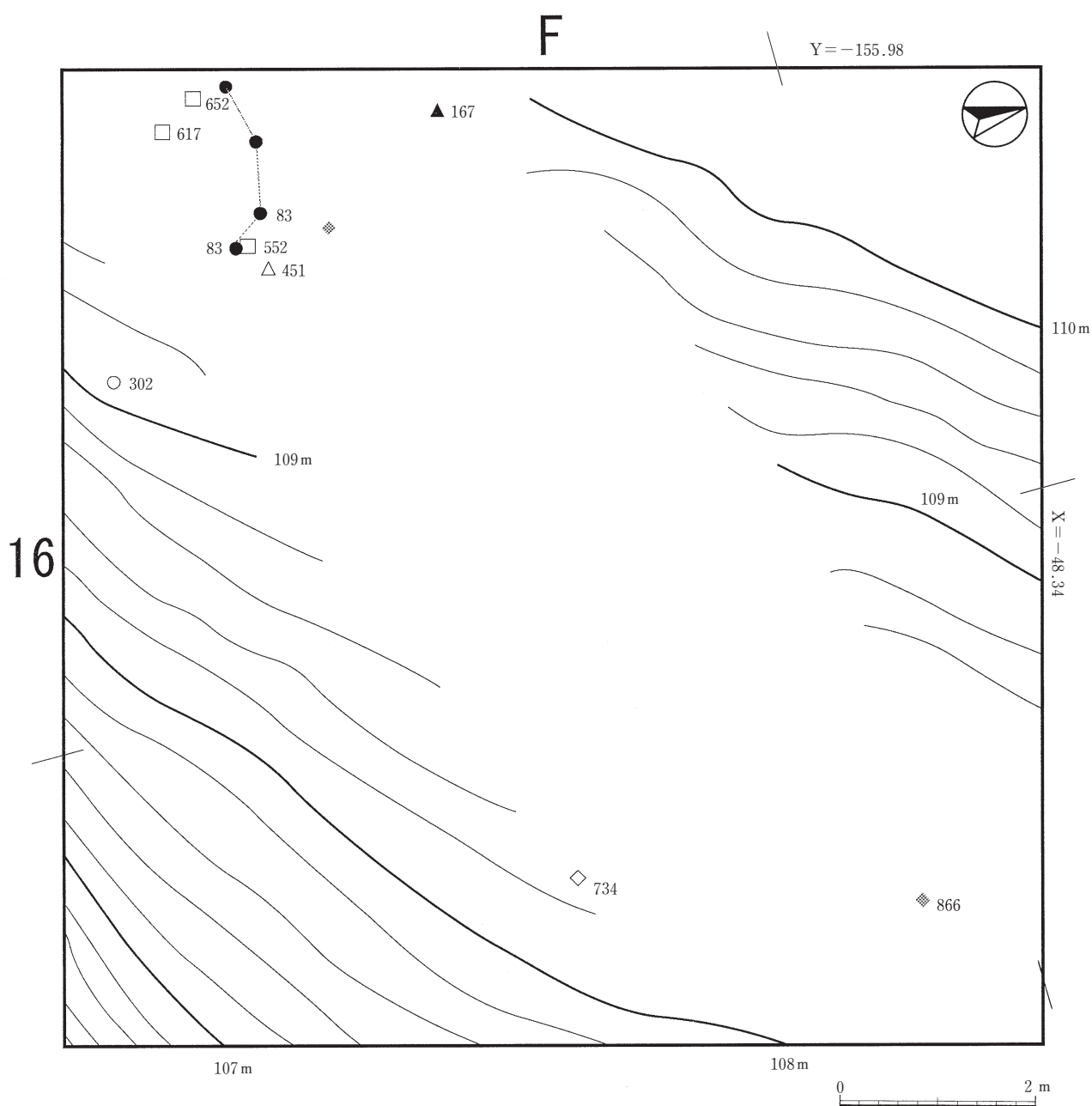
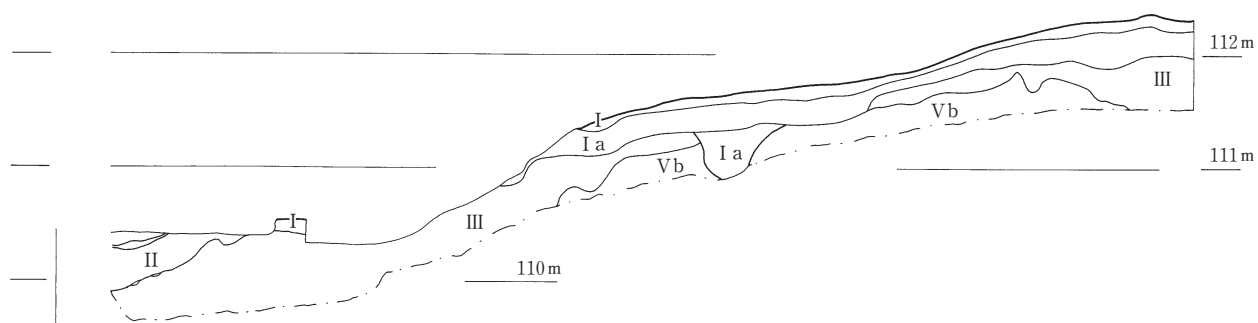
範囲の大半は、工事前の伐採作業用に重機が通る道として削平されている。傾斜角度が急で、遺構はみられない。遺物も極わずかである。

G16区

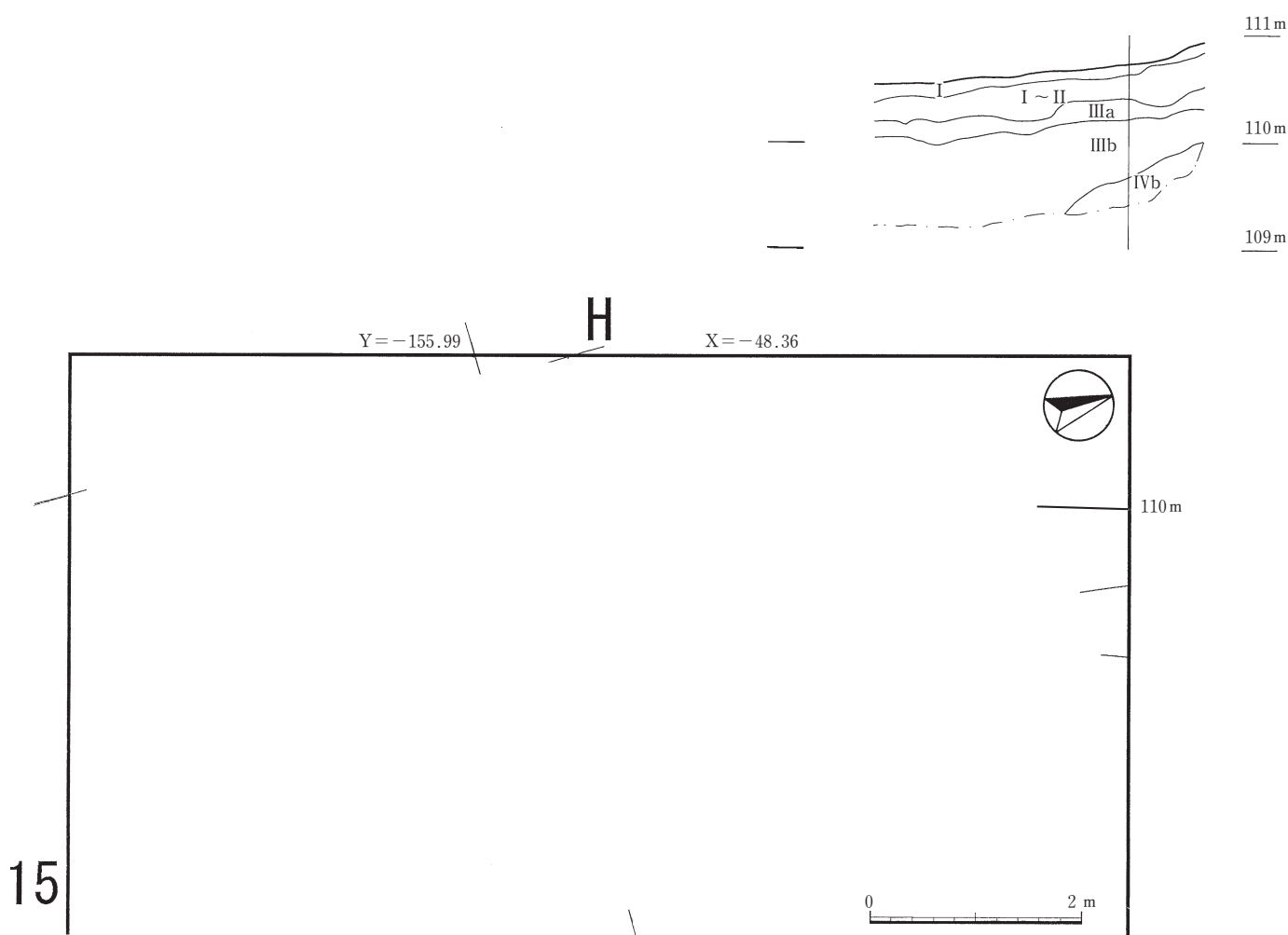
表層での傾斜角度は、南側36%、東側37%である。層位は比較的安定しており、III層もはっきり



第41図 グリッド状況図 (23) G16区



第42図 グリッド状況図 (24) F16区



第43図 グリッド状況図 (25) H15区

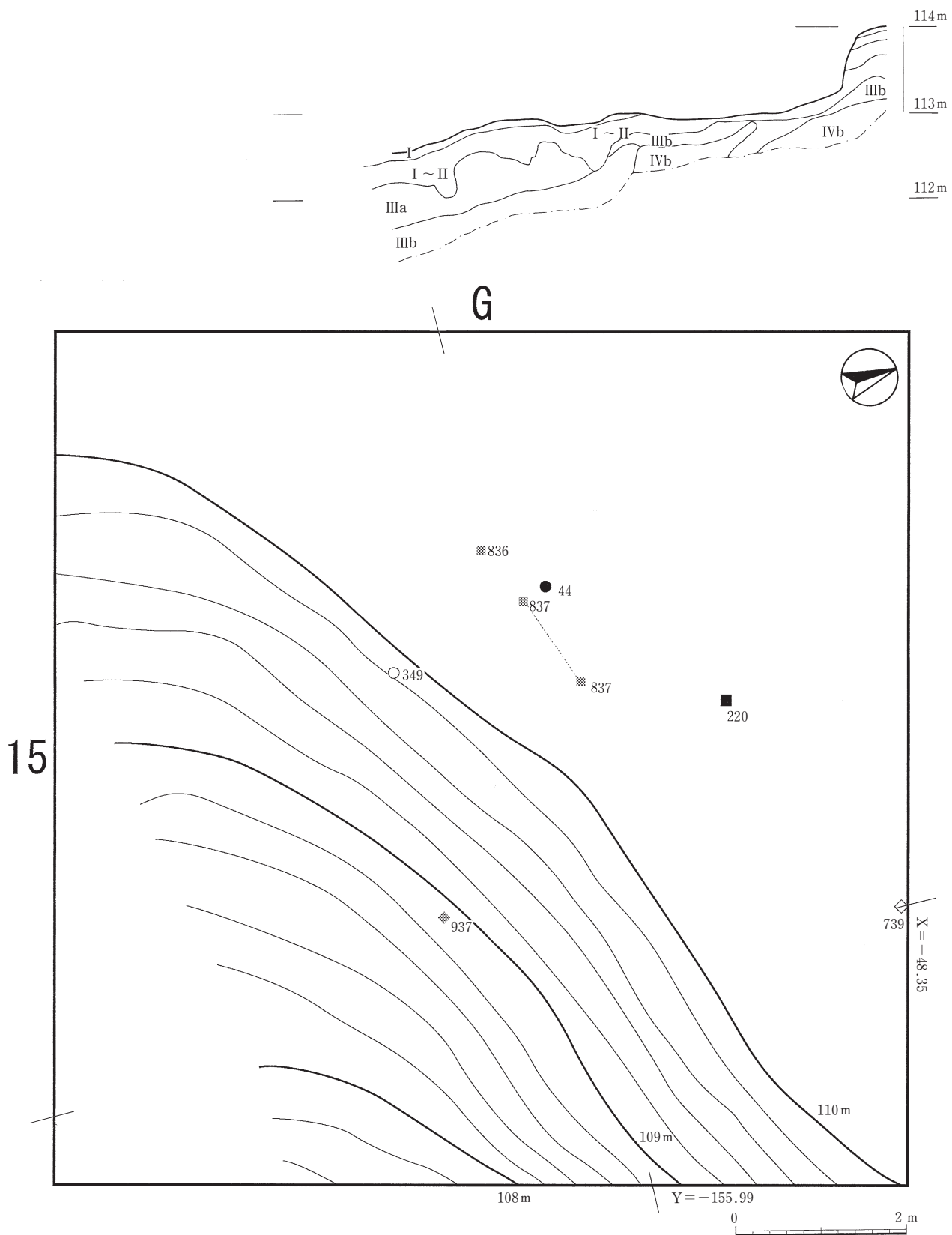
している。集石を1基確認したのであるが、記録を怠り地点がわからなくなった。遺物の出土量は少ない。

F16区

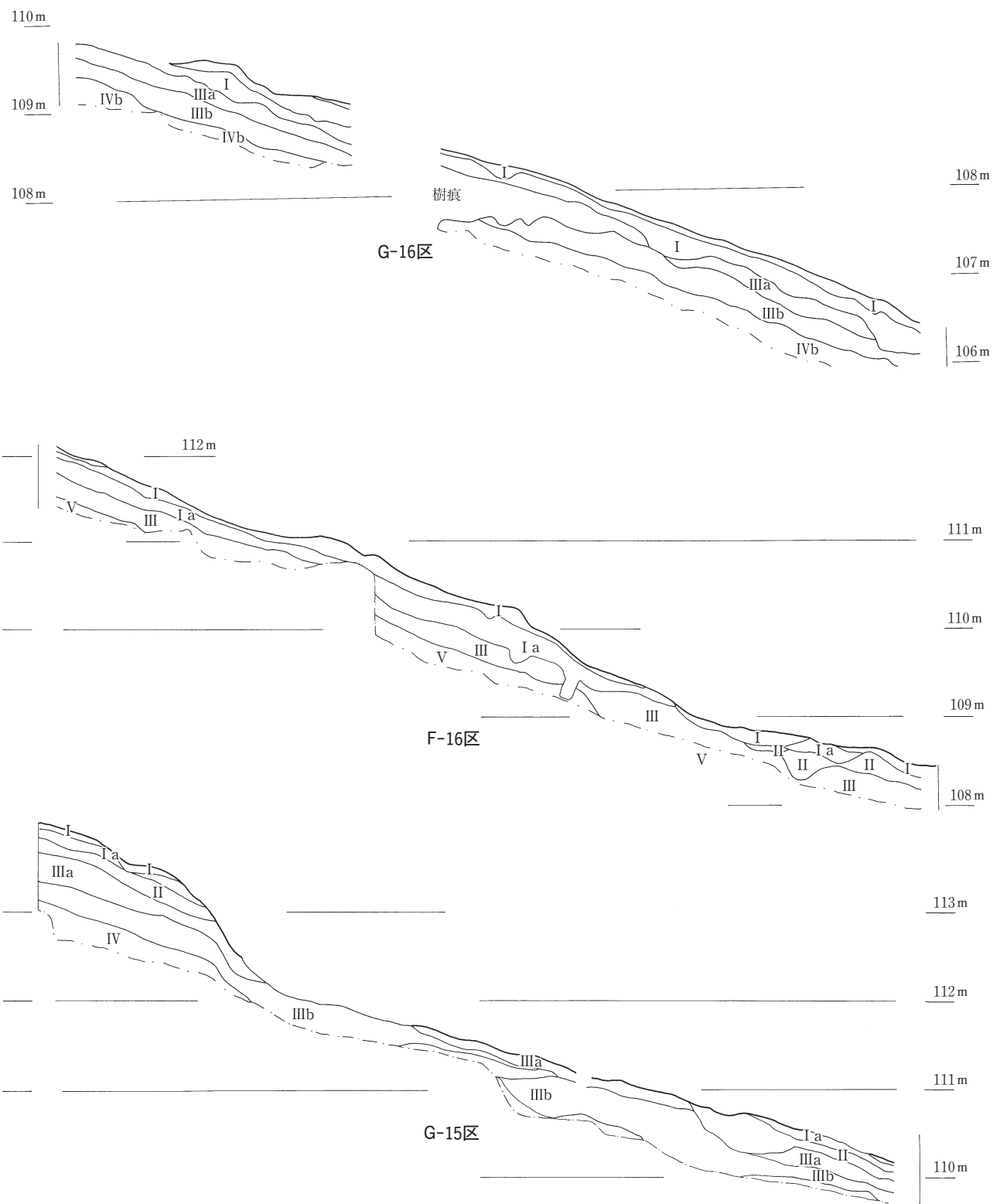
範囲の大半は、工事前の伐採作業用に重機が通る道として削平されている。表層での傾斜角度は、南側22%、東側40%である。層位は安定しているが、III層との境が不明瞭となる。遺物が出土しているものの、削平された道内であり、元位置を保っているとは考えられない。発掘調査の時点で排除しておけば良かったのであるが、とにかく記録するという対応したので、このような結果となった。

G15区

範囲の大半は、工事前の伐採作業用に重機が通る道として削平されている。表層での傾斜角度は、南側52%、東側42%である。F16区と同じで、遺物が出土しているものの、削平された道内であり、元位置を保っているとは考えられない。遺物ドットは多くあるように見えるが、傾斜地での遺物分布範囲をはっきりさせたかったため、小破片までも平板実測したことが影響しているようである。



第44図 グリッド状況図 (26) G15区



第45図 北側土層断面図 (6) G・F-16・G15区

0 2 m

第Ⅴ章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代の成果

山ノ中遺跡で最も多くの遺構や遺物が出土したのが、縄文時代である。しかも、早期の遺物は1個体もしくは2個体分の土器のみで、後は全て後期前半に位置づけられるものである。したがって、年代順としては早期の土器を先に紹介すべきであるが、後期前半の遺構及び出土遺物を先に記述することとする。

1. 縄文時代の検出遺構

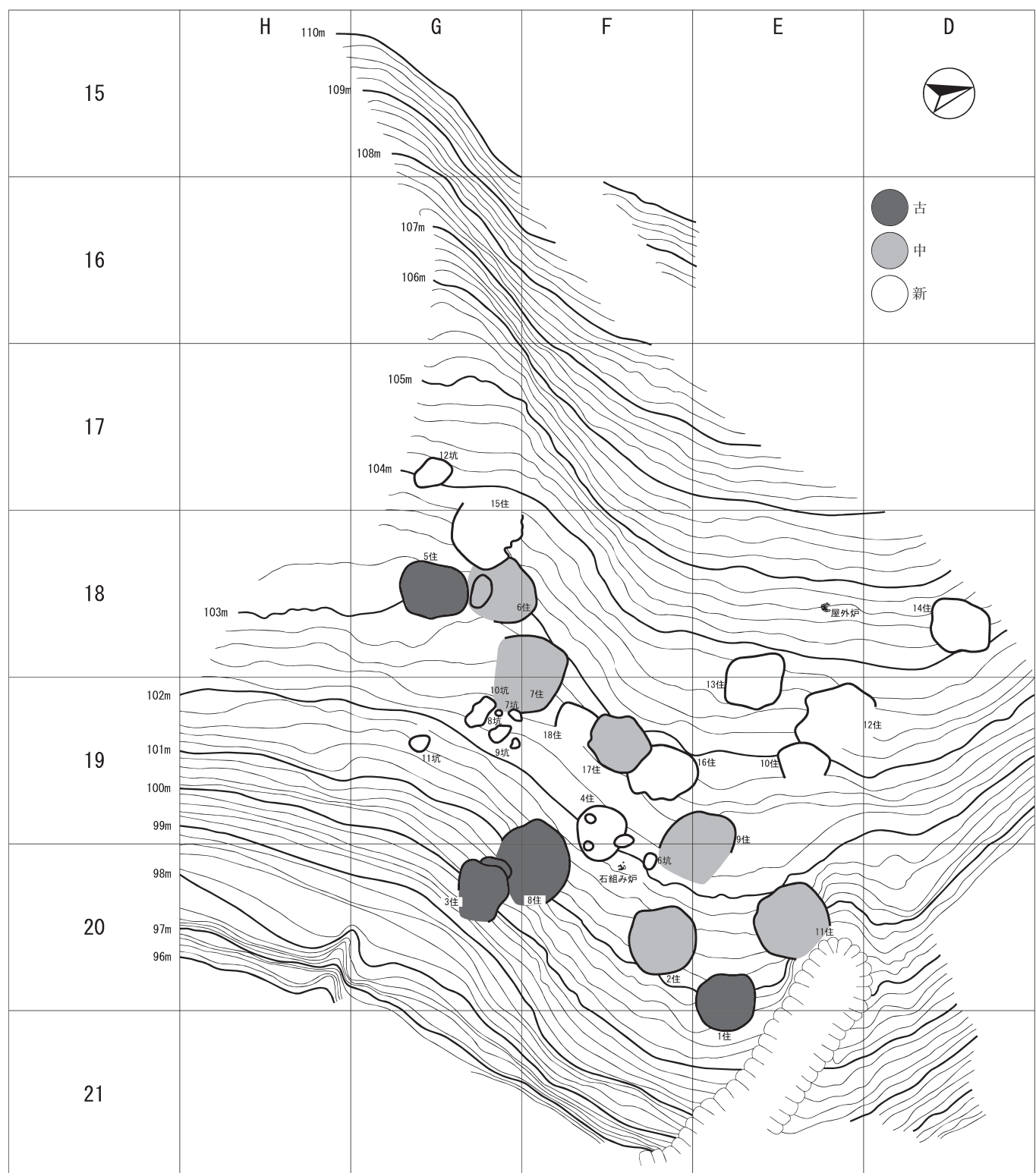
(1) 竪穴住居跡

1号住居跡：E20・21区で検出されたもので、直径360cmの略円形を呈する。検出面からの深さは50cmであり、床面の標高は99.8mである。中央部に140cm×95cmの楕円形で、深さ8cmの浅い窪みがあり、台石が置かれていた。炉跡及び作業場としての機能を備えた場所であると考えられる。柱穴も検出されたが、住居全体の構造を明らかにできるものではなかった。埋土は、「①暗黄茶褐色土(炭化物を多く含む。しまりがあってかたい。)、②茶黄褐色土(炭化物を含む。しまりがあってややかたい。)」である。それぞれの柱穴内も②と同じ埋土であった。住居内の②及び①の埋土がレンズ状に堆積した後の窪みは、Ⅲb層よりも古いことが断面図から窺える。

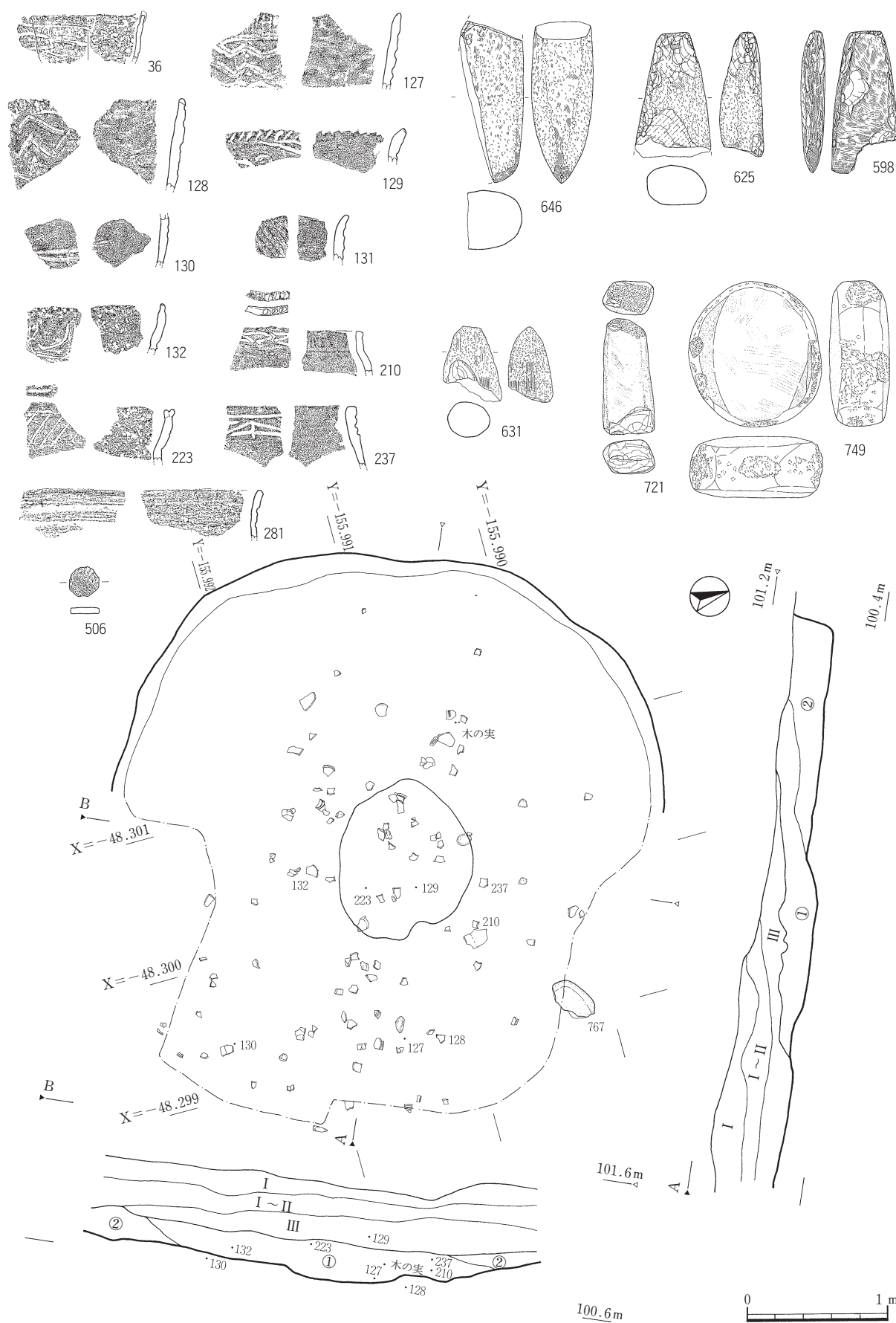
土器・石器とも出土量は少ない。200は南福寺式土器の系譜を引くものであり、他はⅠ類に該当する土器が目立つ。円盤状土製加工品も4点出土している。はっきりわかるⅣ類の指宿式土器はない。石器は、石鏃1点と磨製石斧3点が出土している。

2号住居跡：F20区で検出されたもので、400cm×450cm程度と推定される楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmであり、床面の標高は100.6mである。中央に下バ線を引けない程の浅い窪みがあり、炉跡である可能性がある。柱穴を検出することはできなかった。埋土は、「①暗黄茶褐色土(炭化物を多く含む。しまりがあってかたい。)、②茶黄褐色土(炭化物を含む。しまりがあってややかたい。)」である。南側をみた断面は、山手側から住居跡内に埋土が堆積した状況が窺え、最終的にはⅢ層が住居跡を覆っている。西側をみた埋土の断面は、①の上下に②があり矛盾しているが、現場での観察ではこれ以上のことはわからなかった。

土器量及び石器量ともに多く、Ⅲ類とした南福寺式土器系統のものが目立つ。210・223・237が南福寺式土器の系譜を引くものと考えられる。127～132は南福寺式土器の系譜からは少し離れたものであり、ⅠB類とした。ただし、鋸歯状の文様は、ⅠB類の中では南福寺式系統のものに近いと考えられる。円盤状土製加工品が3点、下剥峯式土器も1点出土した。281のようなⅣ類とした指宿式土器も出土しているが、埋土上位からの出土であり、時間的な差を指摘することができる。石器は石斧が少なくとも3点出土しており、2点は刃部の5mm前後ほどを砥ぎ出している。石鏃の先端部も1点ある。磨石の破片等も出土している。軽石は4点あり、加工や使用の痕跡は不明であるが、ただ平坦面をもつ軽石1点が出土している。木の実も出ており、コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果、2,210BC(50.7%) 2,140BCの年代値が得られている。

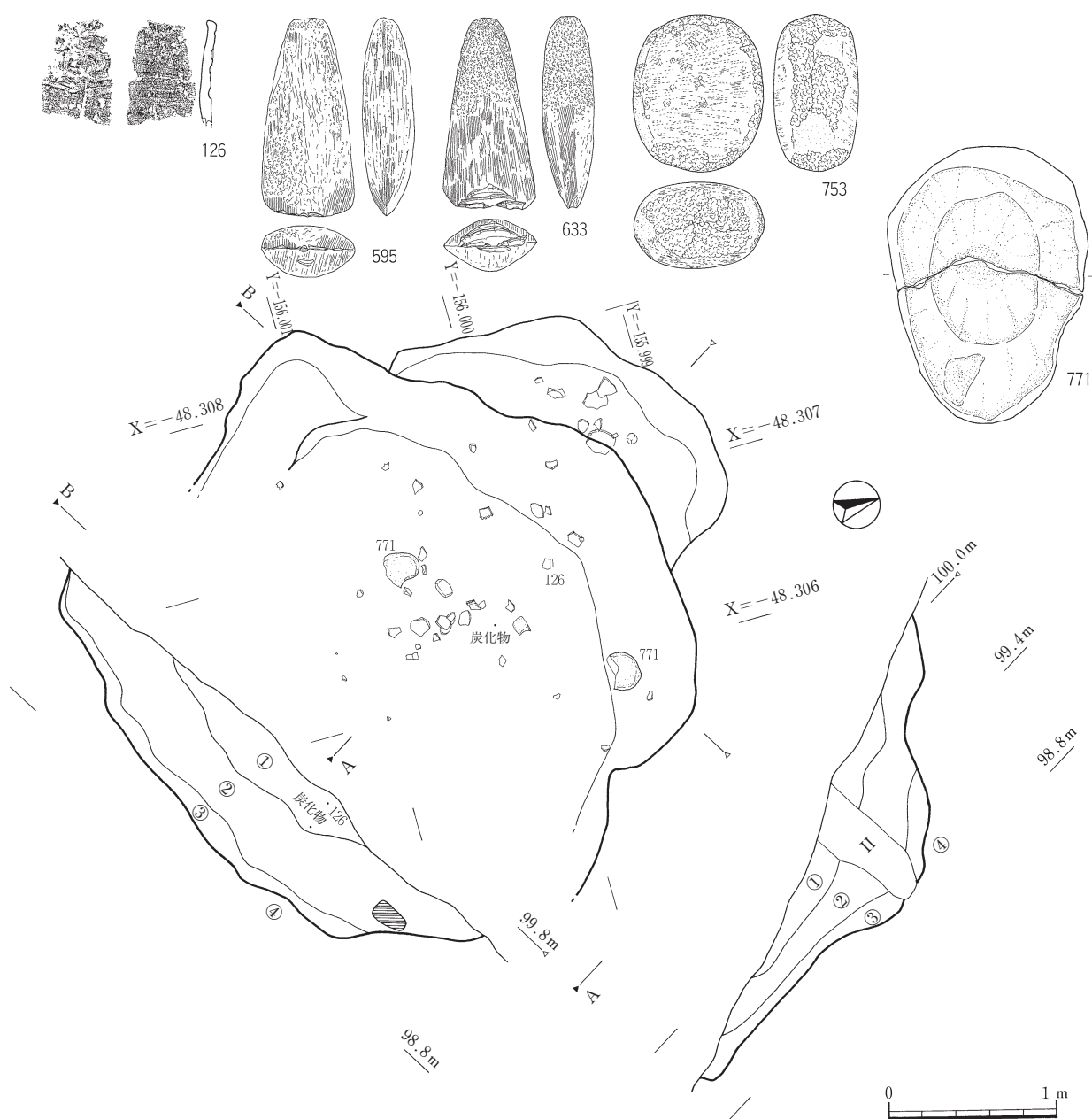


第46図 縄文時代後期前半遺構配置図



第48図 2号住居跡

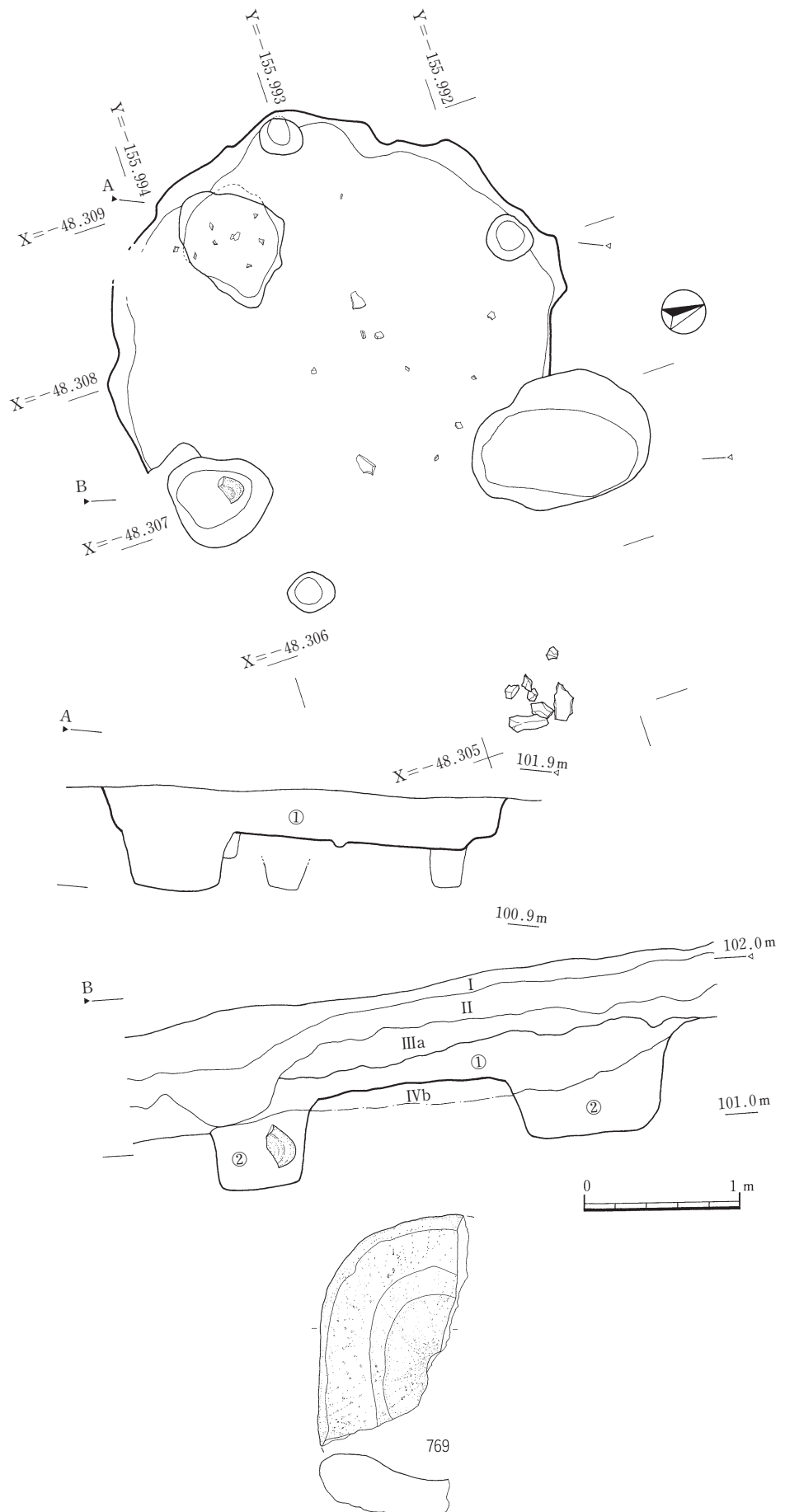
3号住居跡：G20区で検出されたもので、330cm程の略円形を呈する。検出面からの深さは40cm前後であり、床面の標高は90mである。今回検出された住居跡の中では、最も低い場所に位置する。山手側は2段に掘り下げられており、他の場所よりも急傾斜地を利用したことが窺える。柱穴は検出されなかった。埋土は、「①黄茶褐色土(炭化物を多く含む。しまりがあってかたい。この層に遺物が多い。)、②橙黄褐色シルト質土(炭化物をわずかに含む。ヌレシラスがにごったような感じ。石皿はこの層に出土。しまりはあるが比較的やわらかい。)、③桃褐色シルト質土(しまりはあるが比較的やわらかい。)、④白色砂質土(シラスと同じである。シルト質のシラスではなく、砂質のもの。しまりはなくぼろぼろ崩れやすい。)」である。レンズ状に堆積していることから、自然に埋まったものと考えられる。写真図版4にあるように2つに割れた石皿(771)が接合したことから、③の埋土が堆積した後、投棄されたものと考えられる。土器は特徴的なものが少なく、8mm幅の凹線をも



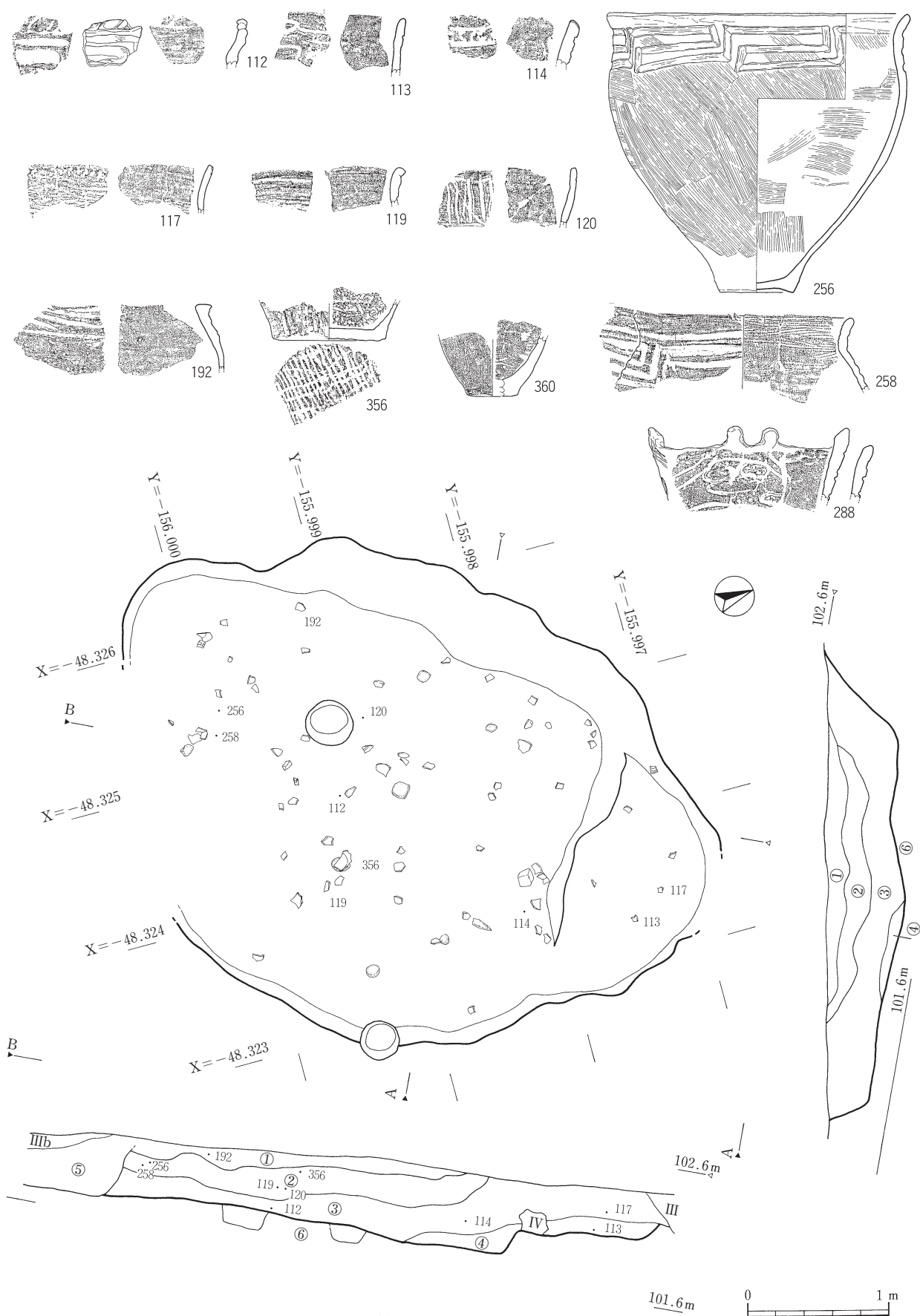
第49図 3号住居跡

つ南福寺式土器系統に近いIB類が出土している。石器は、磨製石斧と磨石から敲打具に転用した753もある。炭化物もあり、シイノキ属樹木炭化物を用いた年代測定の結果、2,470 BC (43.9%) 2,400 BCの年代値が得られている。

4号住居跡（5号土坑）：F19・20区で検出されたもので、直径280cmの略円形を呈する。当初、5号土坑と分離して調査を始めたのであるが、最終的に4号住居に附属すると判断し、同一遺構として扱った。なお、F20区については初年度の調査であり、遺構埋土に対する認識が甘くて壁面や床面を飛ばしてしまった。検出面からの深さは30cmであり、床面の標高は101.3mである。床面は薩摩火山灰層であり、他の部分よりもしまりがあって硬い。3か所の柱穴と3基の土坑があり、土坑



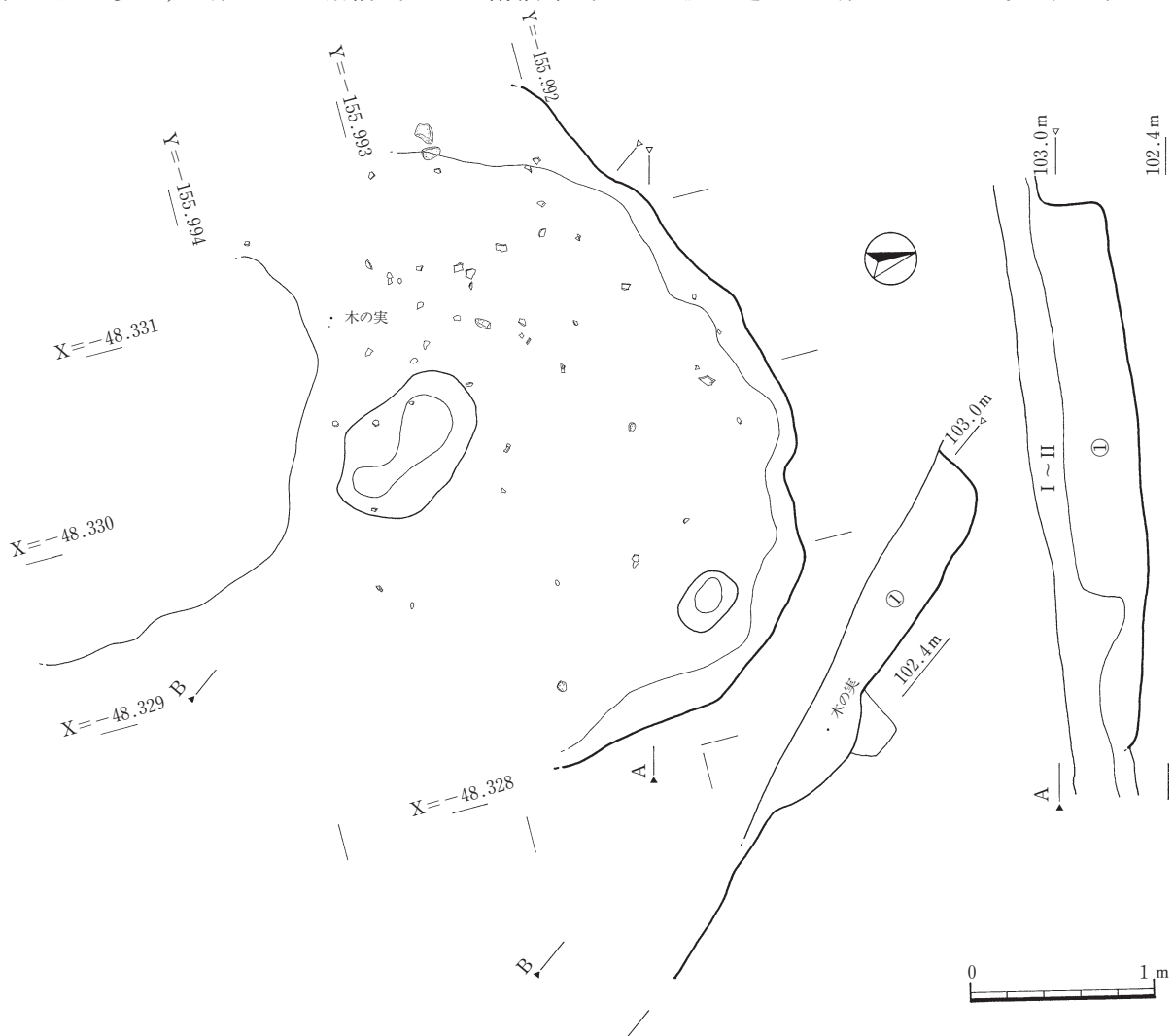
第50図 4号住居跡



第51図 5号住居跡

の一つからは石皿の残欠が出土した。埋土は、「①暗黄茶褐色土(質的には同じであるが、III b層よりも暗い層である。炭化物をわずかに含む。しまりがあってかたい。他の住居と違ってレンズ状の堆積状況等は確認できない。)」である。石組み炉も近接して検出されたのであるが、住居内には位置せず同一の遺構とは考えられない。ただし、突起部をもつ石皿を再利用していることから、4号住居跡の住民が使っていた屋外炉である可能性を否定するものではない。土器も石器もそれほど点数はなく、指宿式土器に近いものや黄色っぽい指宿式土器がみられる。炭化物も少量出土している。

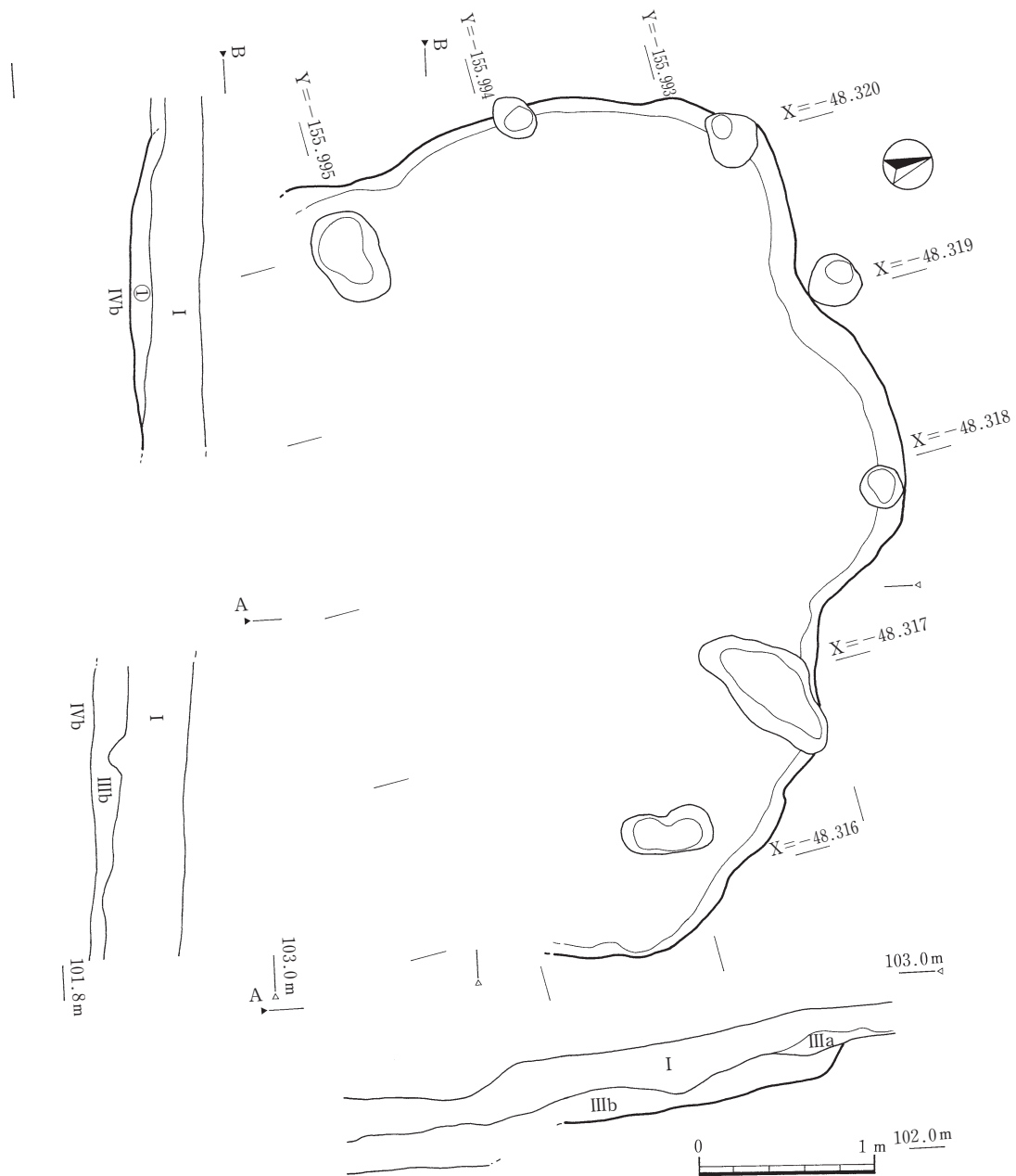
5号住居跡：G18区で検出されたもので、470cm×330cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは55cmであり、床面の標高は101.8mである。北側は20cmの高さで段状になっている。埋土は、「①暗黄茶褐色土(しまりがあってかたい。III b層を濃くした感じ。), ②黒茶褐色土(しまりがあってかたい。炭化物を含む。III b 2層とよく似ている。), ③黄茶褐色土(しまりがあってかたい。炭化物を含む。明るい色で斑状になる。), ④白茶色弱シルト質土(しまりはあるがやわらかい。この層まで遺物を含んでいる。), ⑤明橙色シルト質土(しまりはなくやわらかい。薩摩火山灰かアカホヤの火山灰。浮き上がりか?), ⑥明白茶褐色弱シルト質土(しまりがあってかたい。ここが床面か?)」である。出土量は多く、IV類とした指宿式土器や南福寺式土器系統に近いI B類がみられる。上位で出土した



第52図 6号住居跡

指宿胎土の土器が15号住居跡（2号土坑）のものと接合した。両面が研磨されて磨消縄文土器ではないかと思われるものもある。石器は大型の石皿片2点や花崗岩製の磨石類、それに軽石がある。炭化物も出土しており、年代測定の結果、2,280BC（49.8%）2,190BCの年代値が得られている。

6号住居跡：F・G18区で検出されたもので、少なくとも370cm以上はある略円形を呈する。検出面からの深さは30cmであり、床面の標高は102.6mである。中央付近に90cm×60cmの楕円形で、深さ14cmの窪みがある。南西側には土坑状の落ち込みがみられたが、6号住居に伴うのではなさそうである。埋土は、「①暗黄茶褐色土（Ⅲb層と同じ。しまりがあってかたい。炭化物をわずかに含む。）」である。レンズ状堆積等はみられなかった。15号住居跡（2号土坑）と切り合っているものの、前後関係を明らかにすることはできなかった。遺物量はわずかであり、指宿式土器に近いものがほとんど



第53図 7号住居跡

である。石器は、石斧転用の敲打具や石皿の欠損品がある。炭化物も出土しており、コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果、2,200BC (54.5%) 2,130BCの年代値が得られている。

7号住居跡：F18・19区で検出されたもので、470cm程の略円形を呈する。検出面からの深さは20cmであり、床面の標高は102.3mである。柱穴は壁面に沿って検出され、他の住居跡よりも構造がはっきりわかる。埋土は、土層断面部分にかかっているのであるが、III b層が若干暗くなった暗黄茶褐色土をとらえられたのみである。III b層との区別は困難であった。遺物の出土量はほんのわずかである。I類の土器片が目立つ。石器・炭化物とも出土してない。

8号住居跡：F19・20区で検出されたもので、直径400cmの略円形を呈する。検出面からの深さは20cmであり、床面の標高は100.7mである。埋土は、III b層とのはっきりした区別はつかなかったが、III b層よりも若干黒味を帯びるものである。出土遺物はわずかな量である。小片で図示はしなかったが、貝殻刺突を施す土器や、指宿式土器が出土している。安山岩の剥片と炭化物も出土している。サカキの炭化物を用いた年代測定の結果、2,280 BC (24.9%) 2,240BCの年代値が得られている。

9号住居跡：E・F19区で検出されたもので、直径520cmの略円形を呈する。検出面からの深さは24cmであり、床面の標高は101.4mである。直径25cmで、深さ90cmの柱穴もみられる。ちょうど土層断面にかかった柱穴であり、薩摩火山灰層に掘り込



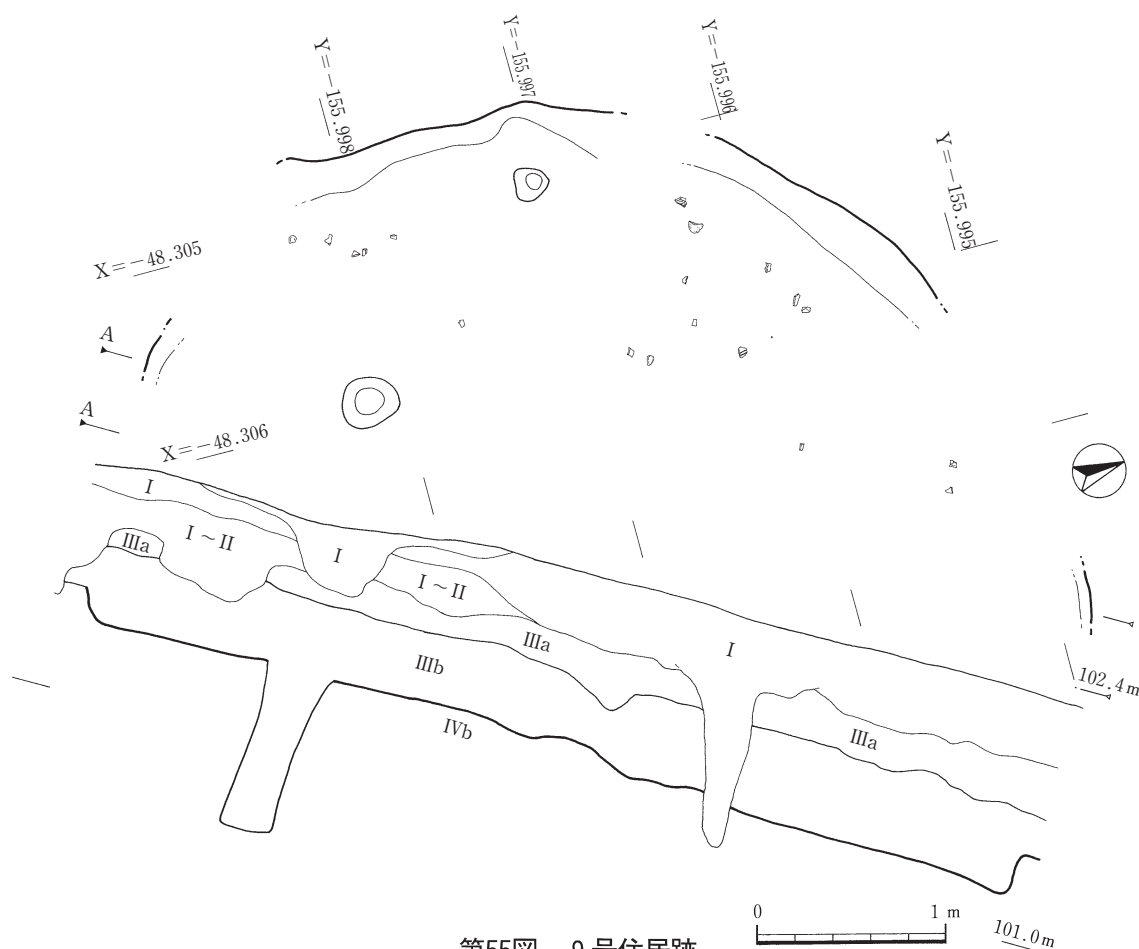
第54図 8号住居跡

まれてははっきり検出できた。他の柱穴についても、存在することを想定して念入りに検出しなければならなかったのであるが、そこまで至らなかった点を反省している。埋土は、III b層とのはっきりした区別はつかなかったが、III b層よりも若干暗い色である。出土した遺物はわずかな量である。土器の種類はとらえ難いが、指宿式土器に近いものもある。磨石の半欠品が1点出土している。

10号住居跡：E19区で検出されたもので、285cmの略円形を呈する。検出面からの深さは25cmであり、床面の標高は103.1mである。12号住居跡とは接しており、20cmの段をもって低くなっている。埋土は、「①黄褐色土（黄色パミスが少なく、よくしまっている。）②黄褐色土（パミスやブロックが多く混じり、かたくしめる。①より少し暗い。）」である。

出土土器は、指宿式土器に近いものが多く、胎土に角閃石が目立つ指宿胎土の土器もある。170の他に、磨消縄文土器片も出土している。円盤状土製加工品が2点、それに炭化物が多く出土している。石器は、磨製石斧1点と小型の石皿片も出土している。コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果、2,100BC（42.9%）2,040BCの年代値が得られている。

11号住居跡：E20区で検出されたもので、385cmの略円形を呈する。検出面からの深さは28cmであり、床面の標高は100.4mである。標高の低い方の立ち上がりははっきりせず、標高の高い方は二段に掘り込まれている。南寄りに近接した柱穴が2基あるのみで、焼土等は明らかにできなかった。



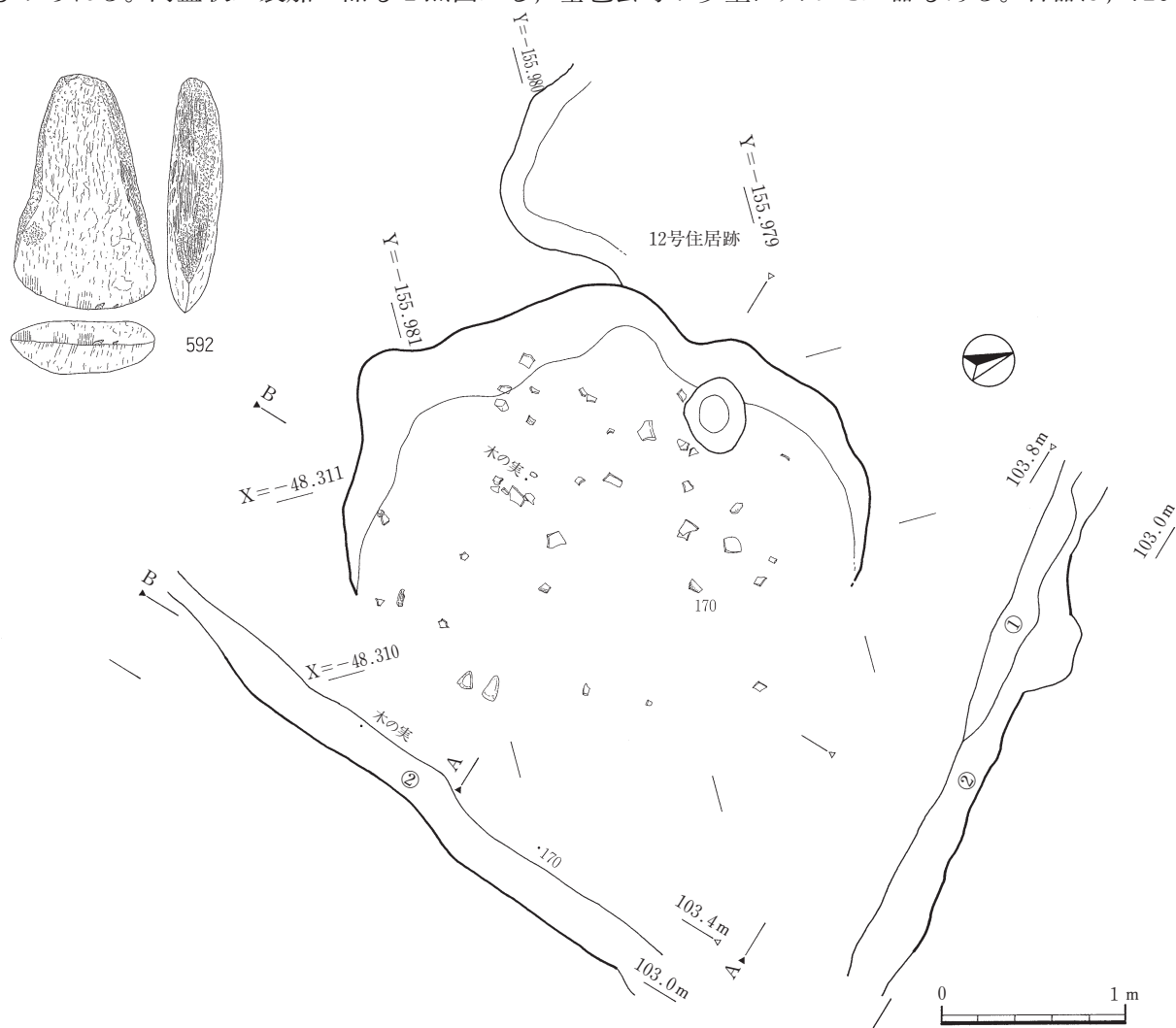
第55図 9号住居跡

埋土は、「①黄褐色土層(黄色パミスは少なく、しまりもある。他の住居跡の埋土のガチガチにしまった土よりはⅢa層に似る。)」である。

口唇部を平に面取りする土器が目立ち、Ⅲ類に近いものが多い。61はⅠB類に加えてあるが、口唇部に刻目を施してあり、Ⅲ類に近いものである。円盤状土製加工品も1点出土している。石器は、683の磨製石斧と剥片が少し出土している。

12号住居跡：E19区で検出されたもので、450cmの略円形を呈する。検出面からの深さは25cmであり、床面の標高は103.6mである。埋土は、「①黄褐色土(黄色パミスは少なく、よくしまっている。)、②黄褐色土(パミスやブロックが多くまじり、かたくしまる。①より少し暗い。)、③暗黄茶褐色土」である。10号住居跡と接しているが、発掘調査中に平面および断面による前後関係は明らかにできなかった。ただし、土層断面図をみると、10号住居跡が②の埋土に覆われた後、①の埋土が一部を覆っているのに対し、12号住居跡では②の上に①の埋土が厚く覆っていることから、10号住居跡よりも新しいと考えられるが、断定はできない。

土器は、黄色っぽい指宿式土器が目立つ。入組文を起点に両側に文様が展開する62のような土器もみられる。円盤状土製加工品も1点出土し、金色雲母が多量に入った土器もある。石器は、726の

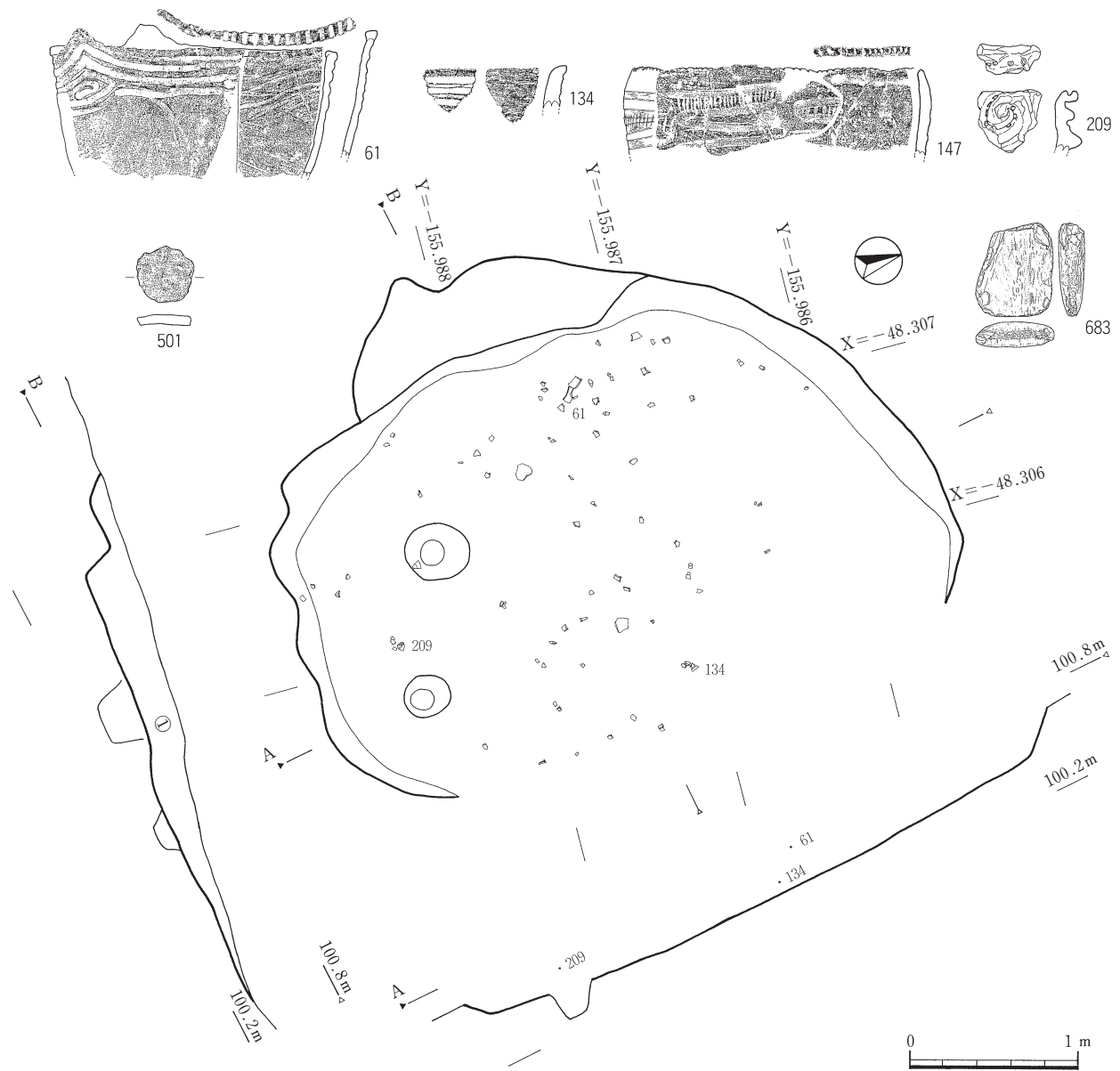


第56図 10号住居跡

敲打具が出土している。コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果、2,090BC (29.0%) 2,040BCの年代値が得られている。

13号住居跡：E18・19区にかけて検出されたもので、320cm×300cmの略円形もしくは略方形を呈する。検出面からの深さは30cmであり、床面の標高は102.8mである。埋土は、「①暗黄茶褐色土、②黄褐色土」である。遺物量は少なく、黄色っぽい指宿式土器が目立つ。無文であるが、丁寧にナデられた321のような土器もみられる。石器は、575のノミ形磨製石器と608の欠損した磨製石斧が出土した。炭化物も少しある。

14号住居跡：D18区で検出されたもので、全体の3分の1程しか明らかにできなかった。形状は4m程の円形もしくは略方形を呈する。標高の高い方での段差は55cmあり、低い方では壁の立ち上がり



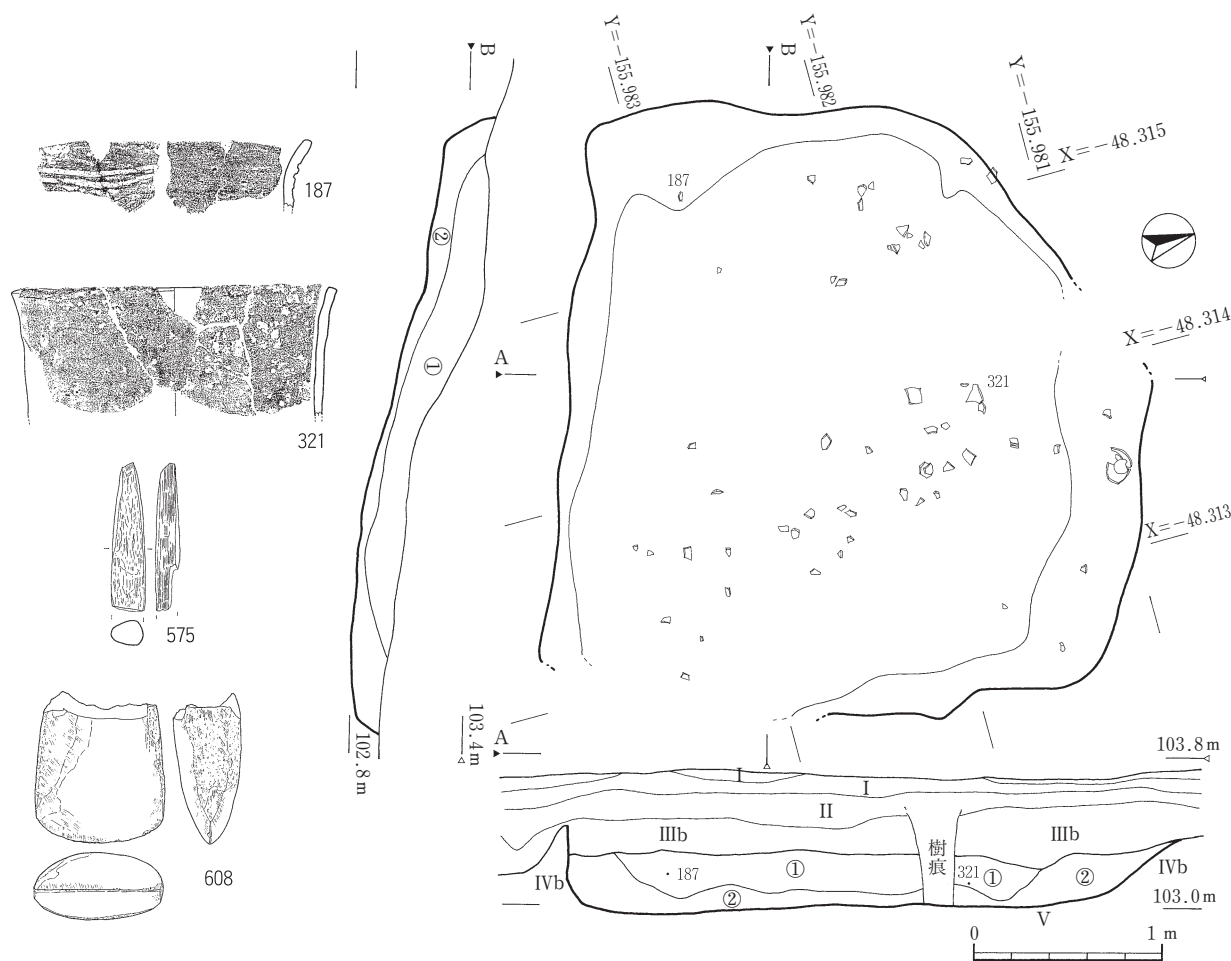
第57図 11号住居跡



第58図 12号住居跡

を確認できなかった。床面の標高は103.65mで、ほぼ水平である。今回検出された住居跡の中では、最も高い場所に位置する。床面は比較的しっかりしまっており、東側3m程のところで床面ははっきりしなくなる。埋土は「①淡黄褐色土（Ⅲa層と同じ層。）、②黄茶褐色土（軽石を多く含む。Ⅲb層を少し濃くした感じ。Ⅲb層よりは黒くない。しまりはありかたい。）」である。床面は比較的しっかりしまっており、東側壁面のピット状になった所は、埋土よりも暗い色の土であった。Ⅲb層との前後関係はとらえられなかったが、Ⅲa層が埋土を覆っている点は明らかである。床面から10～20cm程度浮いた状態で遺物が出土した。写真図版8にあるような丸みを帯びたピンク色の指宿式土器が出土したが、移動の際行方がわからなくなってしまった。他の土器もⅣ類とした270・271・277などの指宿式土器でまわっており、一括資料として重要である。石器は684の石斧や740と745の磨石が出土した。

15号住居跡（2号土坑）：G18区で検出されたもので、推定復元420cm×380cmの略円形を呈する。検出面からの深さは48cmであり、床面の標高は102.7mである。床面は約40cmの高低差があり、傾斜している。埋土は、「①暗黄褐色土（Ⅲb層と同じ。）、②黒茶褐色土（Ⅲb層によく似ている。しまりがあってかたい。炭化物を含む。）、③暗黄茶褐色（しまりがあって硬い。炭化物をわずかに含

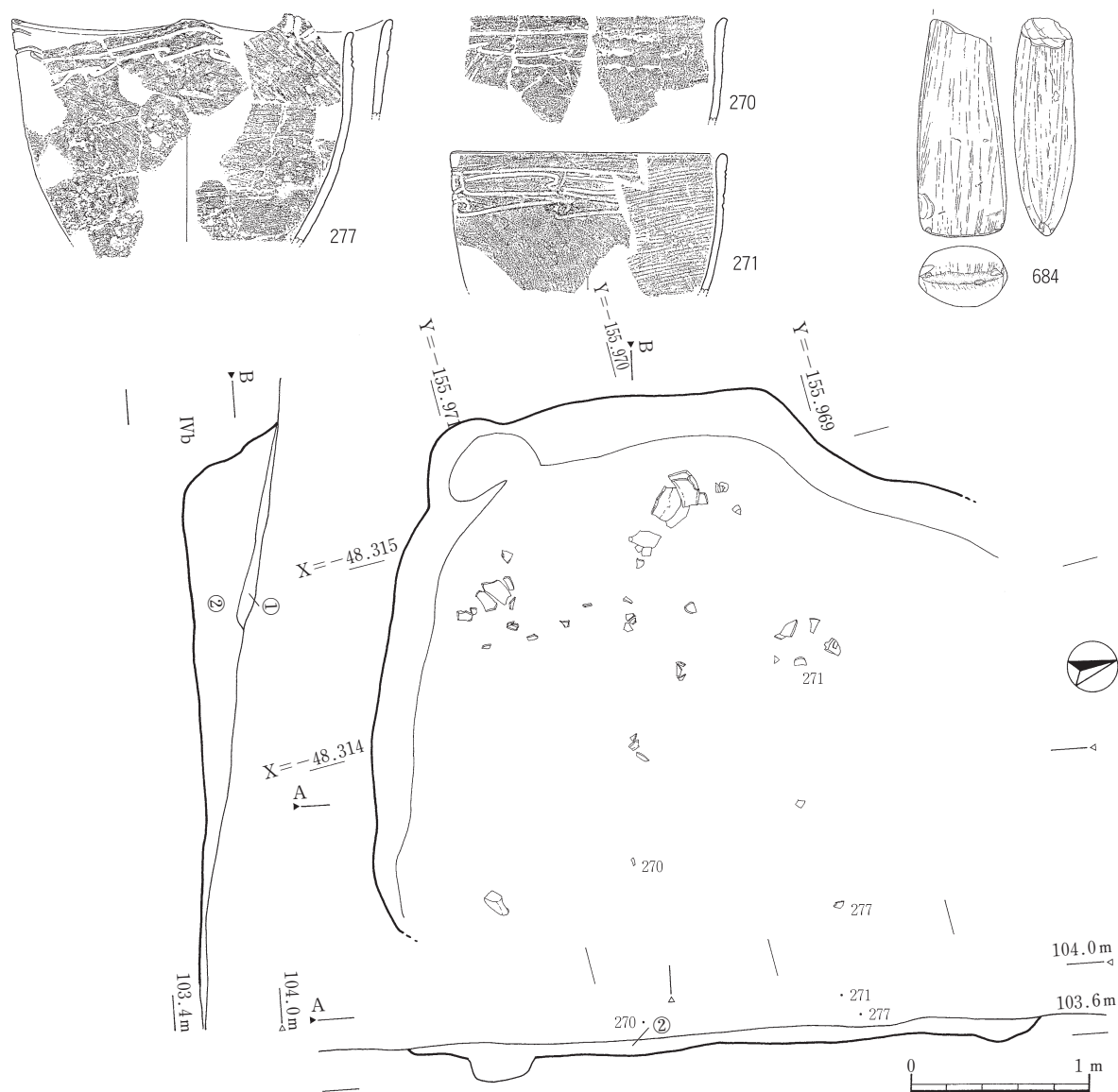


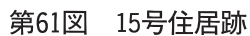
第59図 13号住居跡

む。), ④黄茶褐色パミス混土 (③と薩摩火山灰層のパミスが入り混じった層。この層が貼り床の可能性はある。)」である。南寄りに直径60cm, 深さ10cmの窪みがあり柱穴らしきものも5か所あるが, どのような構造であったかはわからない。検出当初は土坑として扱っていたが, 平面プランをほぼ確認することができたことと, 床面がしっかりしていることから, 住居跡とした。

出土土器は, 238や250のようなⅢ類土器とした西海岸の影響をもった土器もあるが, 大半はⅣ類の指宿式土器である。指宿粘土の指宿式土器もあり, 258例のように5号住居跡上位の土器とも接合している。無文で細かな筋が入る条痕調整の土器 (317) や, 図示はしなかったが磨消縄文も1点はある。他の土器も指宿に近いものが目立ち, 炭化物も出土している。石器も520の研磨面をもった石鏃や, ノミ形磨製石器 (572), 磨製石斧の欠損品 (626) などが出土している。コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果, 2,200BC (47.2%) 2,030BCの年代値が得られている。

16号住居跡 (3号土坑): F19区で検出されたもので, 推定復元400cm×330cmの略円形を呈する。標





重複しているが、埋土の区別による立ち上がりを明らかにすることができなかった。したがって、平面でも断面でも17号住居跡（4号土坑①）との前後関係を確定するまでには至らなかった。ただし、土層断面図をみると、17号住居跡（4号土坑①）の床面が最下層の埋土で完全に埋まった後にも窪みは残っており、上位の埋土①・②が堆積している。このことから、16号住居跡（3号土坑）が新しい可能性もあるが、断定はできない。

出土土器はそれほど多くないが、口縁部に貝殻による刻みをもち、幅7mmの細かな筋が入る凹線を入れ、鋭い貝殻腹線の刺突を施す137のような土器がある。この土器の製作者は左利きではないと思われる。また、貝殻腹縁を刺突して文様を描く136のようなものもある。IV類の指宿式土器はほとんどみられない。石器には、827の軽石製品の他に、磨石類や石皿の破片がある。

17号住居跡（4号土坑①）：F19区で検出されたもので、360cm×330cmの略円形を呈する。検出面からの深さは35cmであり、床面の標高は101.98mである。埋土は、「①暗黄茶褐色土(黄色パミスを多



第62図 16号住居跡

く含み、しまりはあってかたい。炭化物を含む。)」である。薩摩火山灰層との区別が困難であった。しかし、遺物が出土することと薩摩火山灰層がきっちり見えるところでプランを検出した。18号住居跡（4号土坑②）との切り合い関係については、検出面の上面プラン断面でも確実にとらえることは出来なかった。標高の高い方は40cmの段差をもち、低い方は17cmの段差をもつ。床面を水平に保とうとする意図が窺える。柱穴は1つしかなかったが、面積が他の住居跡と同じであることから、住居跡とした。

16のようなⅠA類の大波文をもつ土器が出土している。他に、金色雲母を含んだⅠB類もある。Ⅳ類の指宿式土器に近い土器もあったが、埋土内での上下関係をとらえることはできなかった。むしろ、波状口縁部に沿った大波文を描く16と、靴形文を描いてはいるもののⅣ類には含めなかった151、それに黄色っぽい指宿式土器の276と一緒に出土している点が興味深い。ノッチ状の剥離をもつ黒曜石や、花崗岩製の磨石、頁岩製の剥片も出土している。コナラ属炭化子葉を用いた年代測定の結果、2,180BC (28.2%) 2,140BCの年代値が得られている。

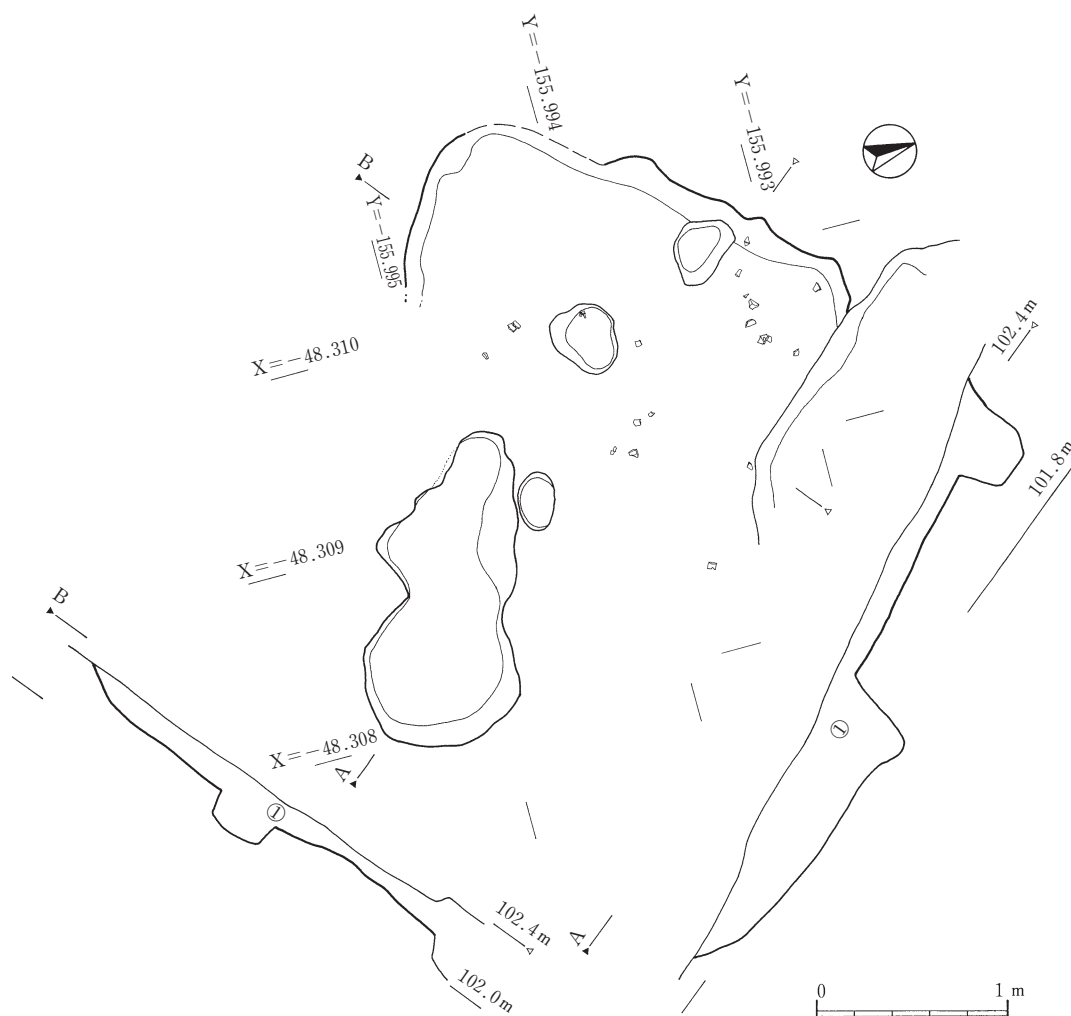


第63図 17号住居跡

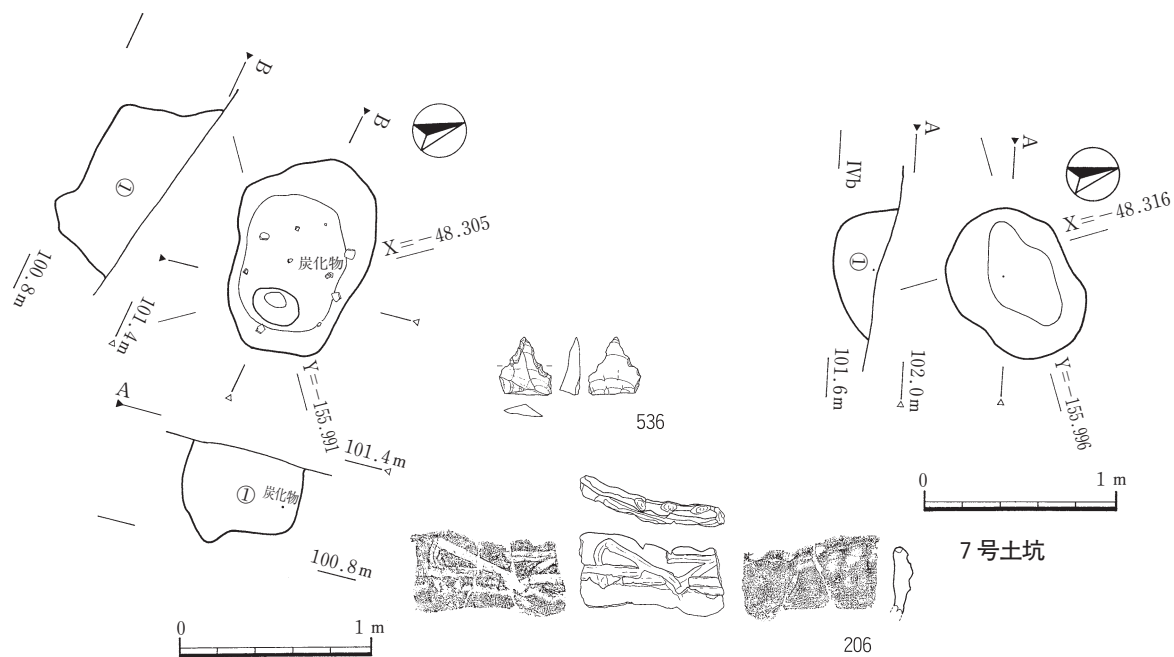
18号住居跡（4号土坑②）：F19区で検出されたもので、形状ははっきりとしない。少なくとも壁面と壁面の間は230cmの長さがある。標高の高い方は壁面の立ち上がりがはっきりし、20cmを測る。17号住居跡（4号土坑①）と重複しており、床面は20cmほど高く標高102.2mである。柱穴と土坑が検出されたが、確実に遺構に伴うものであるかどうかは分からない。埋土は17号住居跡（4号土坑①）と同じで、「①暗黄褐色土（黄色パミスを多く含み、しまりはあってかたい。炭化物を含む。）」である。両者の前後関係を明らかにすることは出来なかった。検出当初は土坑と思って調査していたが、次第に広がり、しかも床面の高さが違っていたため、二つに分離し18号住居跡とした。出土した土器は小破片ばかりで、特徴を示すものはなかった。

（2）土坑

6号土坑：F20区で検出されたもので、117cm×85cmの楕円形を呈する。検出面である薩摩火山灰層上面からの深さは40cmであり、床面の標高は100.92mである。埋土は、「①暗黄褐色軽石まじり土（炭化物をわずかに含む。しまりがあってかたい。III b層とそれほど差はない。）」である。床面の小ピットは浅い窪みであり、機能的なものであったかどうかは明らかでない。他の土坑と比べて壁面の立

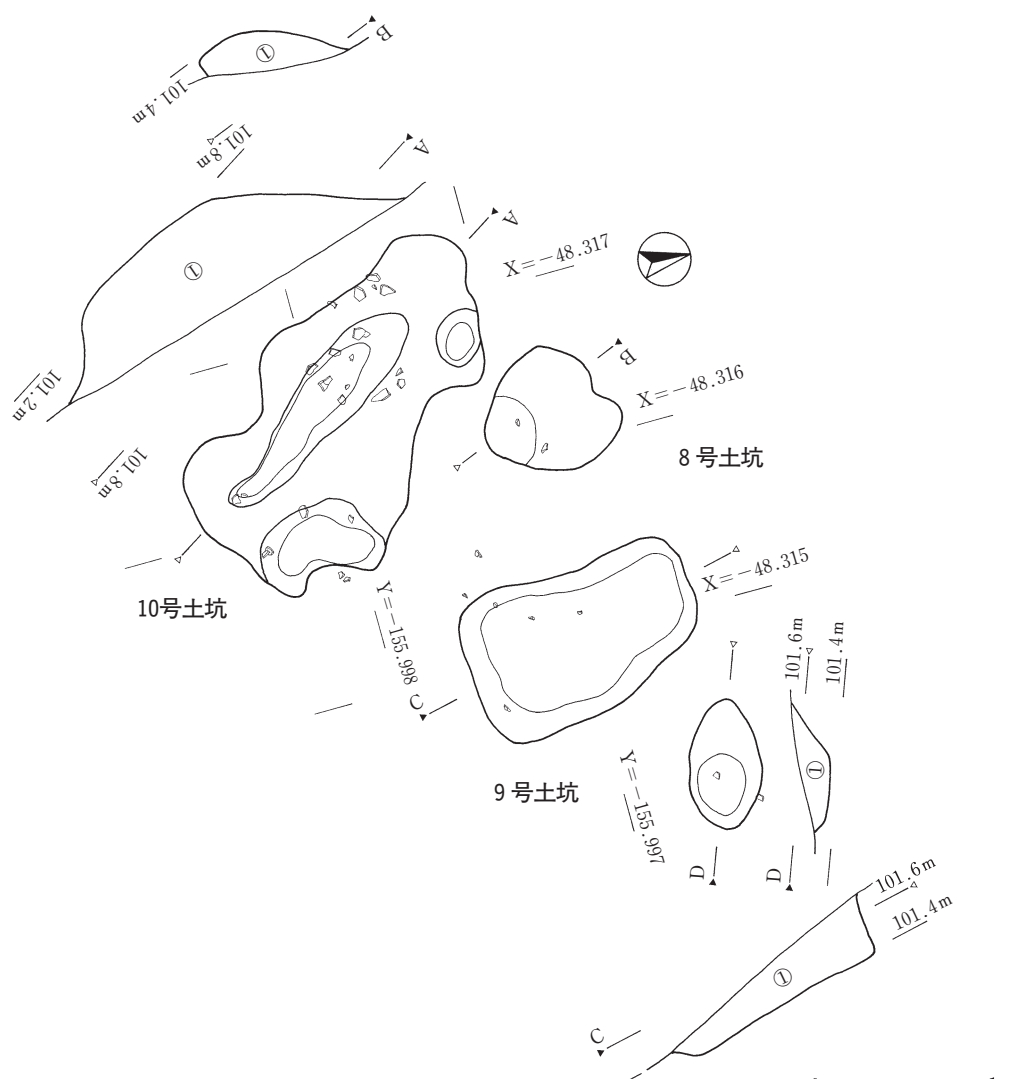


第64図 18号住居跡

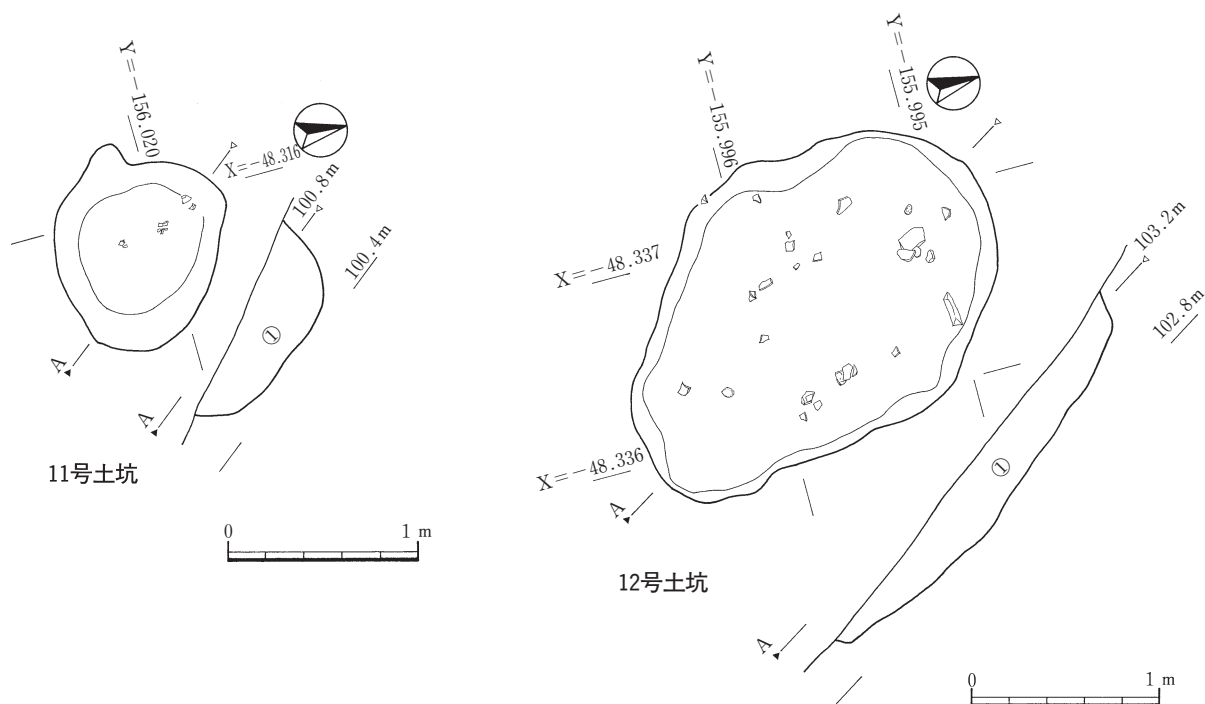


6号土坑

7号土坑



第65图 土坑 (6 · 7 · 8 · 9 · 10号)



第66図 土坑 (11・12号)

ち上がりがしっかりしていて、単独で存在している点が異なる。遺物の出土状況は埋土中の出土であり、元位置を保っていない。貯蔵穴なのか墓壇なのかの判断はつかない。出土土器は、206のⅢ類に近いような厚肥した口縁部に文様を施すものがある。また、ハリ質安山岩製の未製剥片石器(536)が出土しており、石鏃をつくろうとしたと考えられる。クワ属樹木炭化物を用いた年代測定の結果、2,480BC (48.1%) 2,400BCの年代値が得られている。

7号土坑：G19区で検出されたもので、83cm×64cmの楕円形を呈する。検出面である薩摩火山灰層上面からの深さは30cmであり、床面の標高は101.6mである。埋土は、「①暗黄褐色軽石混じり土(Ⅲb層よりも軽石が多い。しまりはあって、ややかたい。)」であり、遺物は黒曜石片1点と金色雲母及び細かな角閃石が目立つ土器片のみである。壁面の立ち上がりはゆるやかで、断面形が「U」字形をなす。性格については不明である。

8号土坑：G19区で検出されたもので、65cm×60cmの略円形を呈する。検出面からの深さは45cmであり、床面の標高は101.64mである。埋土は、「①暗黄茶褐色土(炭化物をわずかに含む。Ⅲbに似た土である。)」である。

9号土坑：G19区で検出されたもので、125cm×80cmの略方形を呈するものと、68cm×38cmの楕円形を呈するものがある。検出面からの深さはそれぞれ35cm、20cmである。埋土は、「①黄茶褐色土(パミスが少なく、しまりがある。)」である。

10号土坑：G19区で検出されたもので、200cm×110cmの不定形を呈する。検出面からの深さは65cmであり、床面の標高は101.15mである。埋土は、「①暗黄茶褐色土、②黄茶褐色土(①より淡い。パミスが少なくしまりがある)」である。図化はしていないけれども、埋土から出土した土器の中に透かしをもつ脚台状の底部片がある。外面には線刻が入り、胎土には滑石を含んでいる。このような特徴はⅢ類とした南福寺式系の土器に該当する。この1点だけをもって、10号土坑が古いということ

はいえない。

11号土坑：G19区で検出されたもので、105cm×92cmの略円形を呈する。検出面からの深さは40cmで、断面形は「U」字形を呈する。埋土は「①暗茶褐色土（しまりがあってかたい。わずかに炭化物を含む。埋め戻したという痕跡はみえない。土器もまばらである。）」である。指宿胎土の土器が出土した。

12号土坑：G17区で検出されたもので、230cm×160cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは20cmで、床面もほぼ安定している。埋土は、「①暗茶褐色土（しまりはなくやわらかい。シルト質である。）」である。遺物もまとまってはいるが、住居跡とするには面積が小さく、他の土坑とは性格が異なる遺構であると考えられる。出土土器は図化するほどの大きさはなかったが、IV類の指宿式土器がほとんどで、指宿胎土の土器も出土している。698の破損した石斧も出土している。

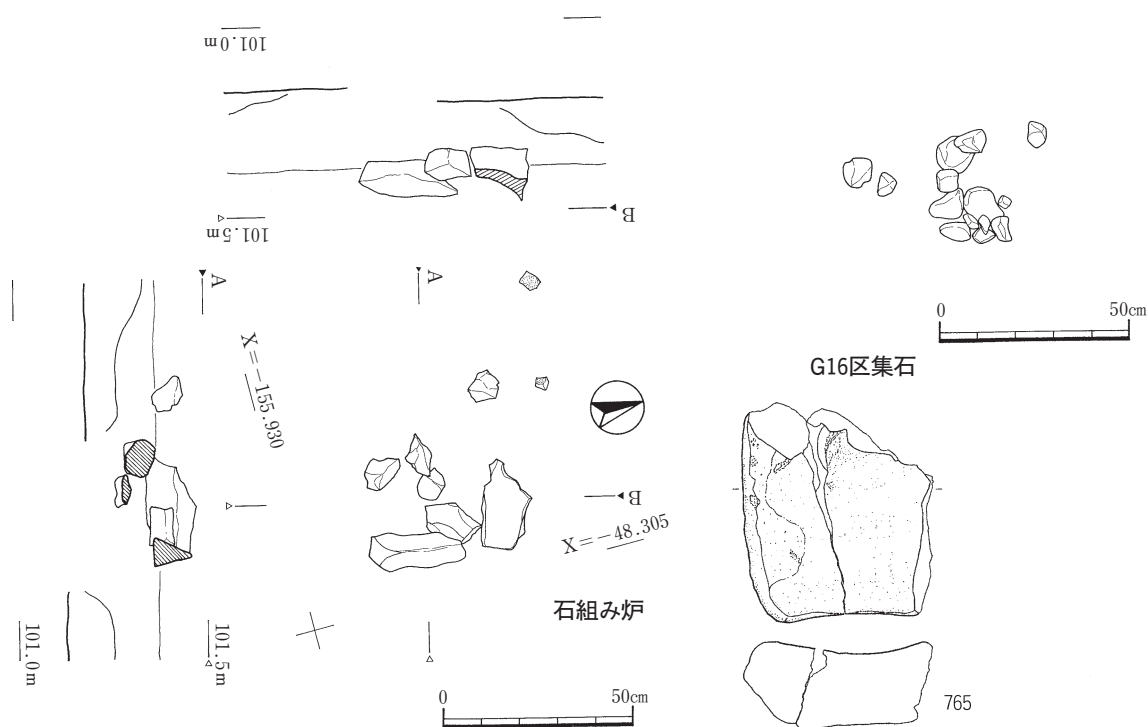
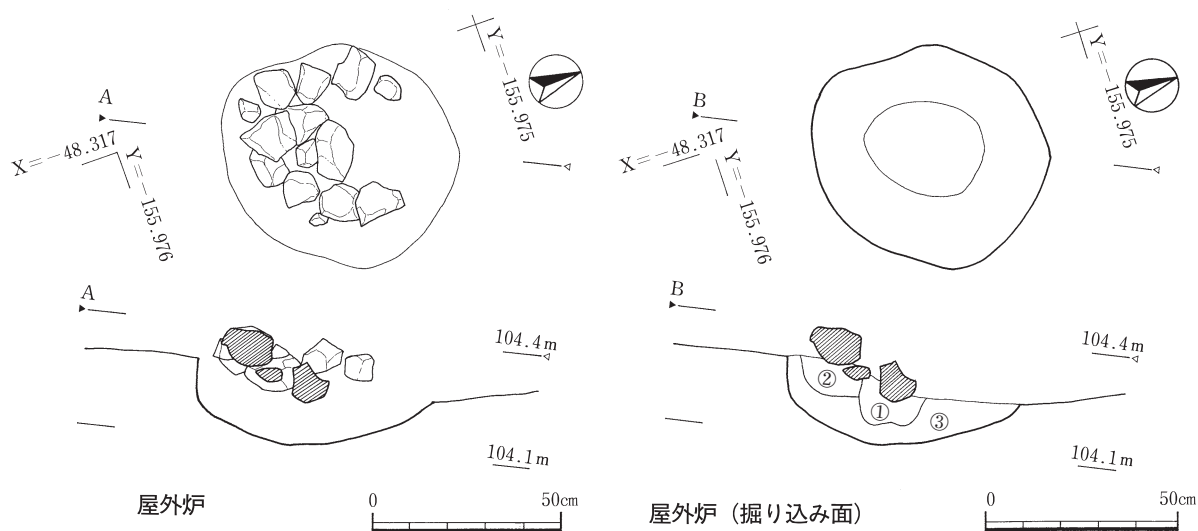
（3）炉跡

石組み炉：F20区の4号住居跡近くで検出されたもので、7個の礫で構成される。2個は破損した石皿（765）を再利用しており、直角に組み合わせている様相が窺える。集石というよりも、石組み炉とした方が良いのかもしれない。礫の部分の層は深くなっているが、意識的に掘り込んでいるかどうかは確認出来なかった。4号住居跡に接して検出されたが、住居内施設とするには距離がある。縄文時代早期の下剥峯式土器が2点出土しているが、突起状のつくり出しをもつ石皿の形状から、縄文時代後期前半のものと考えられる。

屋外炉：E18区で検出されたもので、14個の礫からなる。直径45cmのほぼ円形に礫を並べてあり、北側は開いている。内側に3個の礫が出土したが、これは北側に置かれていたものを取りはずしたとも考えられる。63cm×60cmの円形で、深さ20cmの掘り込みもあり、礫と一体となった遺構である。礫は良く焼けて赤色化し、炭化物の付着もみられた。内部の埋土は、「①暗灰色土層（粘質は弱く、サラサラしている。炭化物も少量混じっており、火を炊いた時の炭や灰の残る層もしくは焼けた石の熱を受けて変色した層。）、②明乳白色土（粘質は弱い、①よりは強い。炭化物は①より少なく、炉の成形時に埋めた土と思われる。）③シラスと灰色土の混ざった層（粘質も強い。炭化物を含んでいる。土器は含まない。）」である。周辺に竪穴住居や柱穴などの遺構がみられないことから、単独に設けられた屋外炉ではないかと考えられる。遺物の出土はなかったが、層位の状況から縄文時代後期前半の遺構であると考えられる。

通常の集石遺構は、こぶし大の礫が無造作に重なりながらほぼ円形になっているが、山ノ中遺跡のものは、まるく囲むように石が置かれている。中から小さな炭も出ているので、炉として使われた可能性が高く、住居の内側にそなえつけられていたのではなく、屋外炉として使われていたようである。覆屋の痕跡を示す柱穴等は確認できず、毎日の調理に使っていたのか、それとも何かがある時に調理を行っていたのかはわからない。

今回発見された炉跡の石の一部分はとりはずしている状況が確認できた。これは、灰のかき出し口と考えられ、炉内にたまった灰をとり除くのに便利だったと推察される。木灰の灰汁は、ドングリのアク抜きや、衣類用の植物繊維の不純物を取り除くために重要なものである。現在でもアク巻き（チマキ）やコンニャクをつくる時などに灰汁を使っている。木灰と食べ物というように全く無



第67図 炉跡

関係なものが結びつくのは、遠い昔の縄文人達の知恵が現在にも活かされている証かもしれない。

集石：G16区で検出されたものであるが、位置とレベルの記録を怠った。写真は、写真図版7右下である。55cm×35cmの範囲に14個の石が集中する。小さなものは4cm大で、大きなものは13cm大の礫である。掘り込みは確認できなかった。III a 層が上部を覆っていることから、縄文時代後期の集石と考えられる。なお、写真図版7右側中央にある集石も不明なものであり、併せて反省する次第である。

2. 縄文時代の出土遺物

(1) 縄文土器

山ノ中遺跡出土土器の大半は縄文時代後期前半に位置づけられるが、これまでの同時期の事例がそうであったように器形・文様・器面調整・胎土・色調のどれかに絞って分類することには無理があるので、これらの総合的な雰囲気から類似性を見出して大別し、それぞれの類別の中でまとまりのある事例については細別することとする。したがって数字や文字が新旧の順序を示すものではないことを先にお断りしておく。土器の選別にあたっては、遺構内出土はもちろんのこととして、口縁部から底部まである資料、本遺跡内で希少な胎土、鹿児島では少ない施文方法の土器を優先し、口縁部の形状や文様が違うものもなるべく取り上げた。それでも、全体の中の百五十分の一程度にすぎない。

I 類 山ノ中遺跡出土土器で最も多く見られるタイプであり、胴部上半から口縁部にかけて凹線や沈線で文様を描き、中には貝殻腹縁や円形の何らかの工具を刺突するものもみられる。器形は安定した底部から張りのある胴部に至り、頸部でややしまって外開きする口縁部となるものや、頸部のくびれがなくストレートに口縁部に至るものなどがある。文様構成の違いでI A類とI B類に分類する。

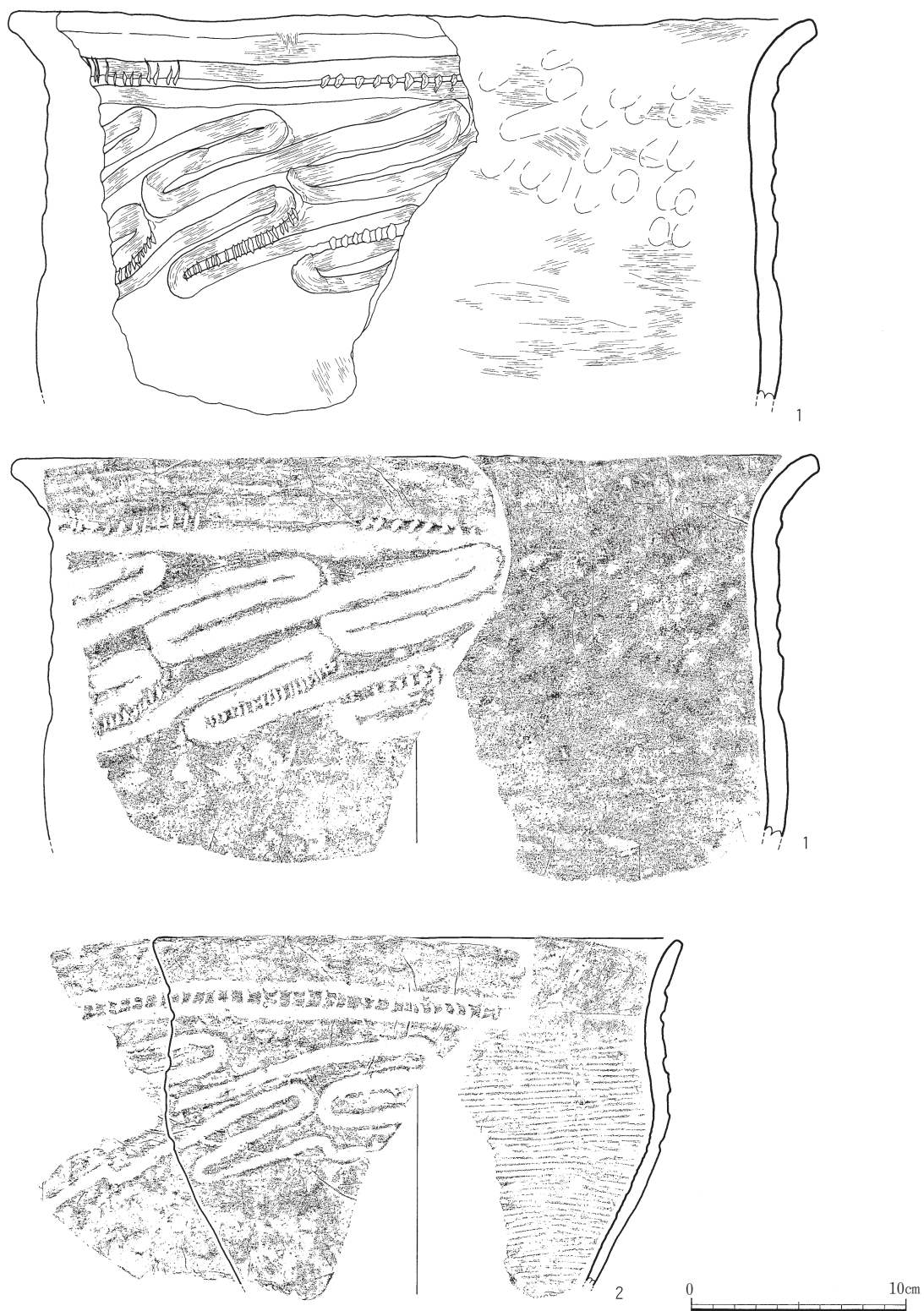
I A類 山ノ中遺跡出土土器で多く見られるタイプであり、右上がりの大きな波状の文様（以下「大波文」と略す）が横方向に展開するものである。したがって、線対称となる様な文様構成ではない。大波文の下に沿って小さな波状の文様（以下「小波文」と略す）を1条もしくは2条描くものもある。大波文の上、すなわち頸部から口縁部にかけて平行沈線や刺突が巡るものもある。大波文が角張って水平方向であれば、いわゆる「靴形文」と呼ばれるものであり、若干例外はあるもののこちらはIV類すなわち指宿式土器の範疇に含めてある。口縁部は波状口縁よりも平縁口縁の割合が高い。

I B類 I A類でみられた単純な大波文とは異なり、複雑な曲線や線対称となるような文様もみられる。文様のヴァリエーションが多く、各々の量は少ないが、共通点のある土器を近づけてある。結果的にI A類、II類、III類、IV類土器に含まれない事例がこの類に含まれることとなった。

II 類 回転による縄文及び巻貝を転がして文様を描くものである。また、縄文そのものではなくても、磨消縄文土器にみられるミガキ手法による器面調整のものもこの類に含めてある。器形は深鉢形土器の他に、浅鉢形土器に復元されるものもみられる。この類の土器に該当するのは、全部で263片であり、全体の1%にも満たない出土量である。山ノ中遺跡では客体的な存在だったと考えられる。

III 類 口縁部を肥厚させ、この部分に文様を描くものである。あるいは、口縁部を肥厚させることはないが、口縁部付近に似たような文様を描くものも含めた。口唇部を平に面とりし、刺突を加える点も特徴の一つであり、内面の稜や器面調整のケズリ手法も目安とした。深鉢形土器の他に浅鉢形土器がみられる。

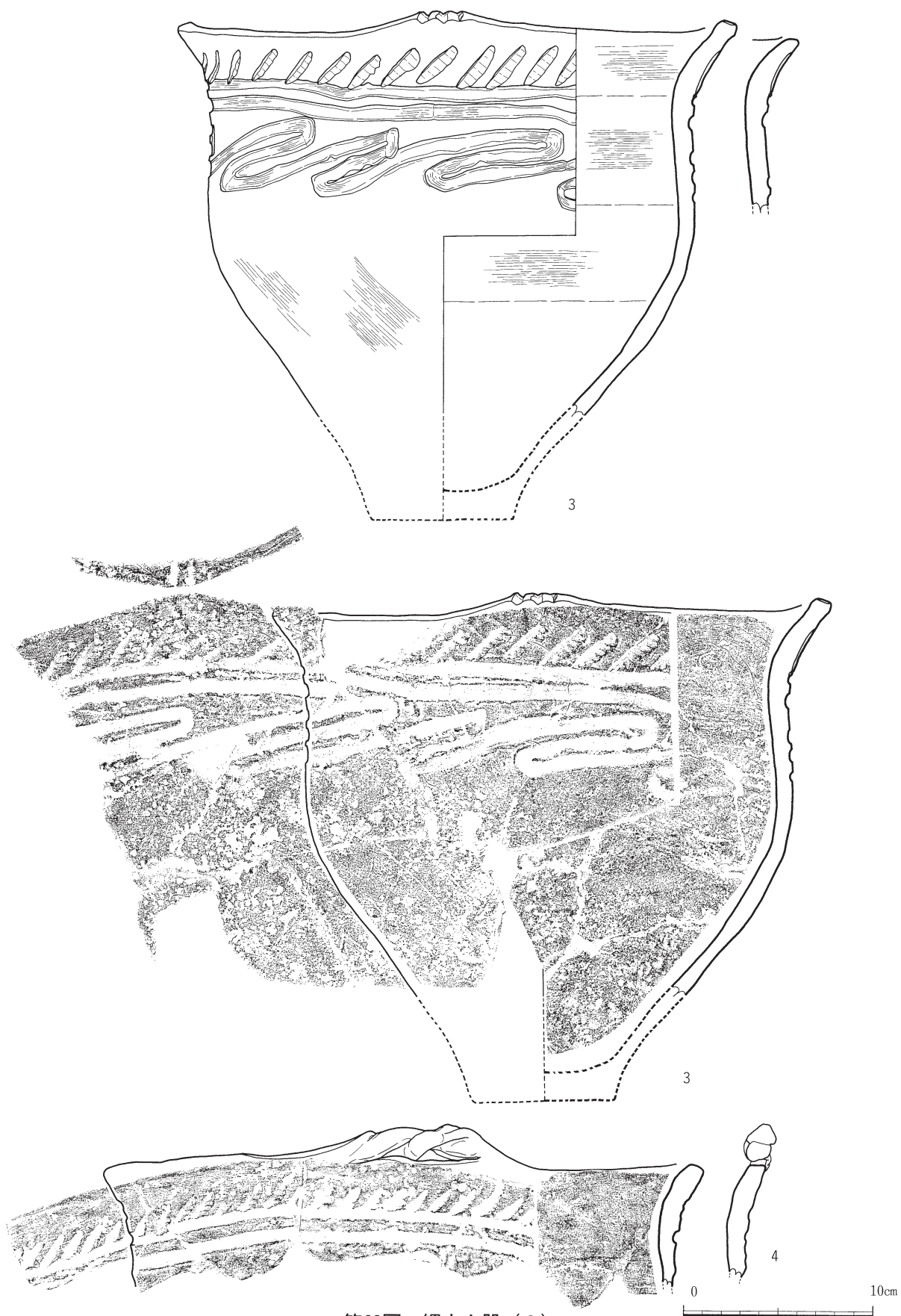
IV 類 二本の平行線を単位として文様を描くもの、もしくはそれに類する文様のものである。I 類土器との区別が付きにくいものもあるが、器壁が薄く硬質のものをこの類に含めた。深鉢形土器ばかりで浅鉢形土器はみられない。胴部が大きく張り出すものもみられるが、多くは張りの弱いも



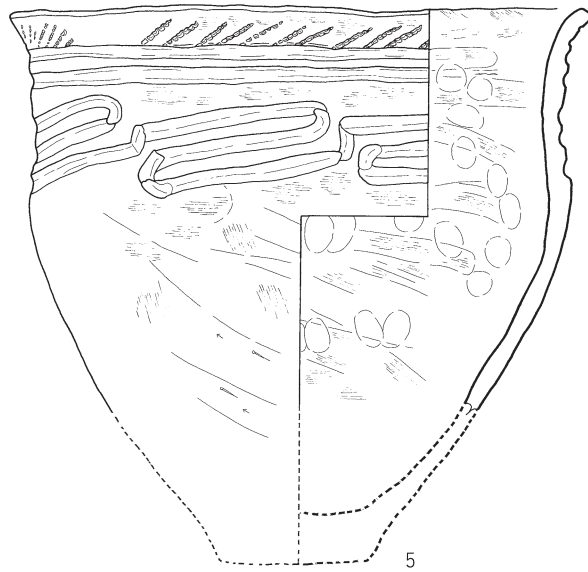
第68図 縄文土器（1）

ので、軽くくびれた後、外反する口縁に至るものが多い。厳密さに欠けるが色調と胎土の特徴から3つに分類した。

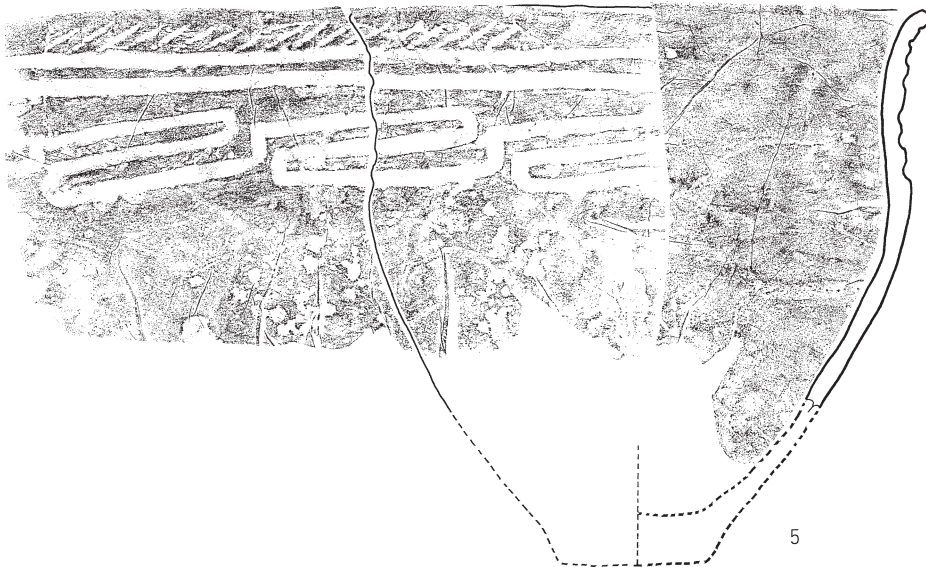
V類 基本的には無文のものであり、口縁部付近に刻目あるいは突起を施すものもこれに加えた。



第69図 縄文土器 (2)



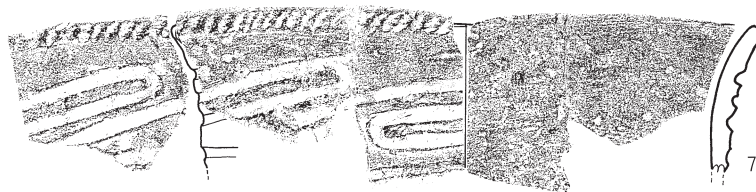
5



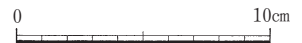
5



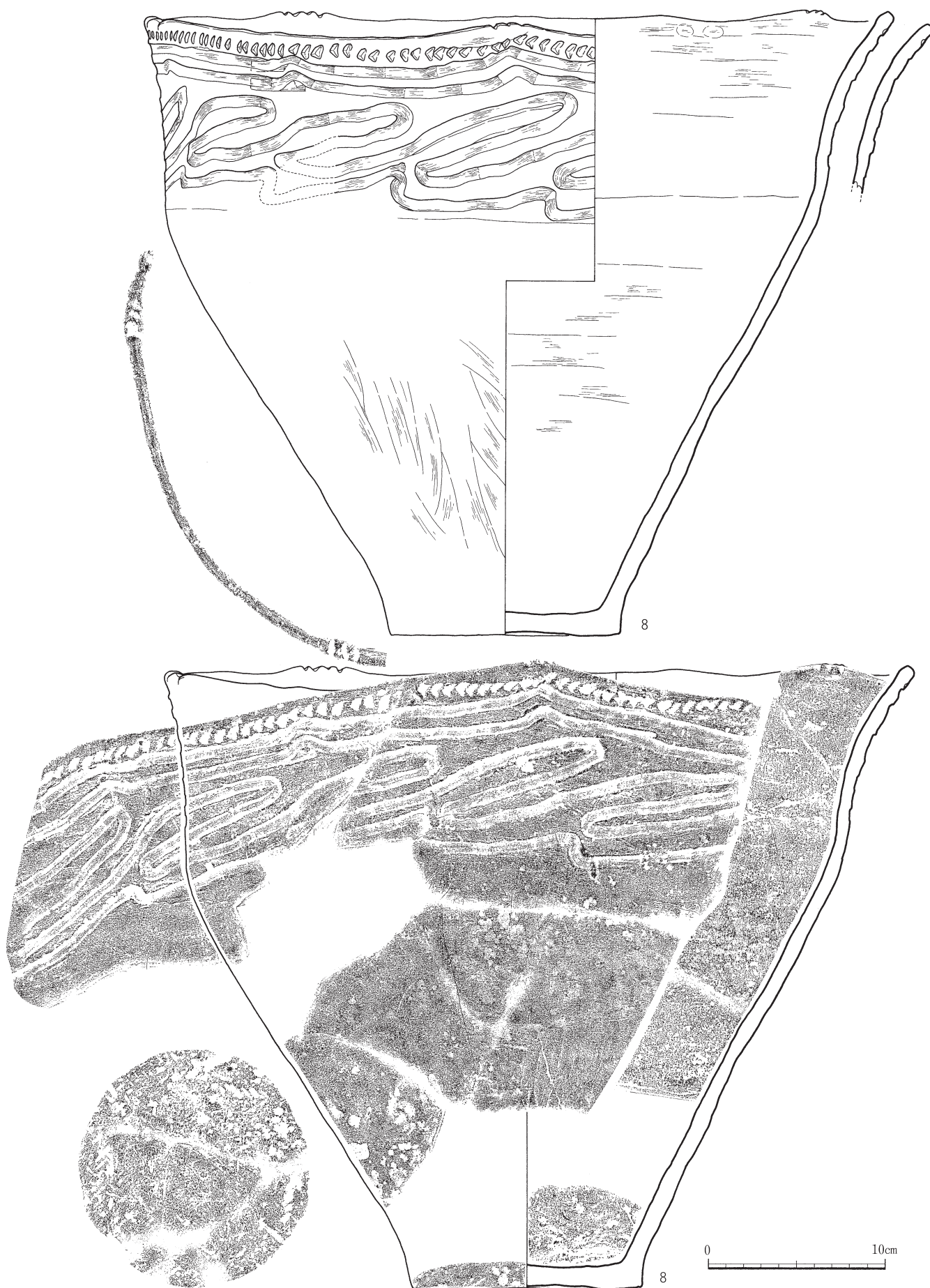
6



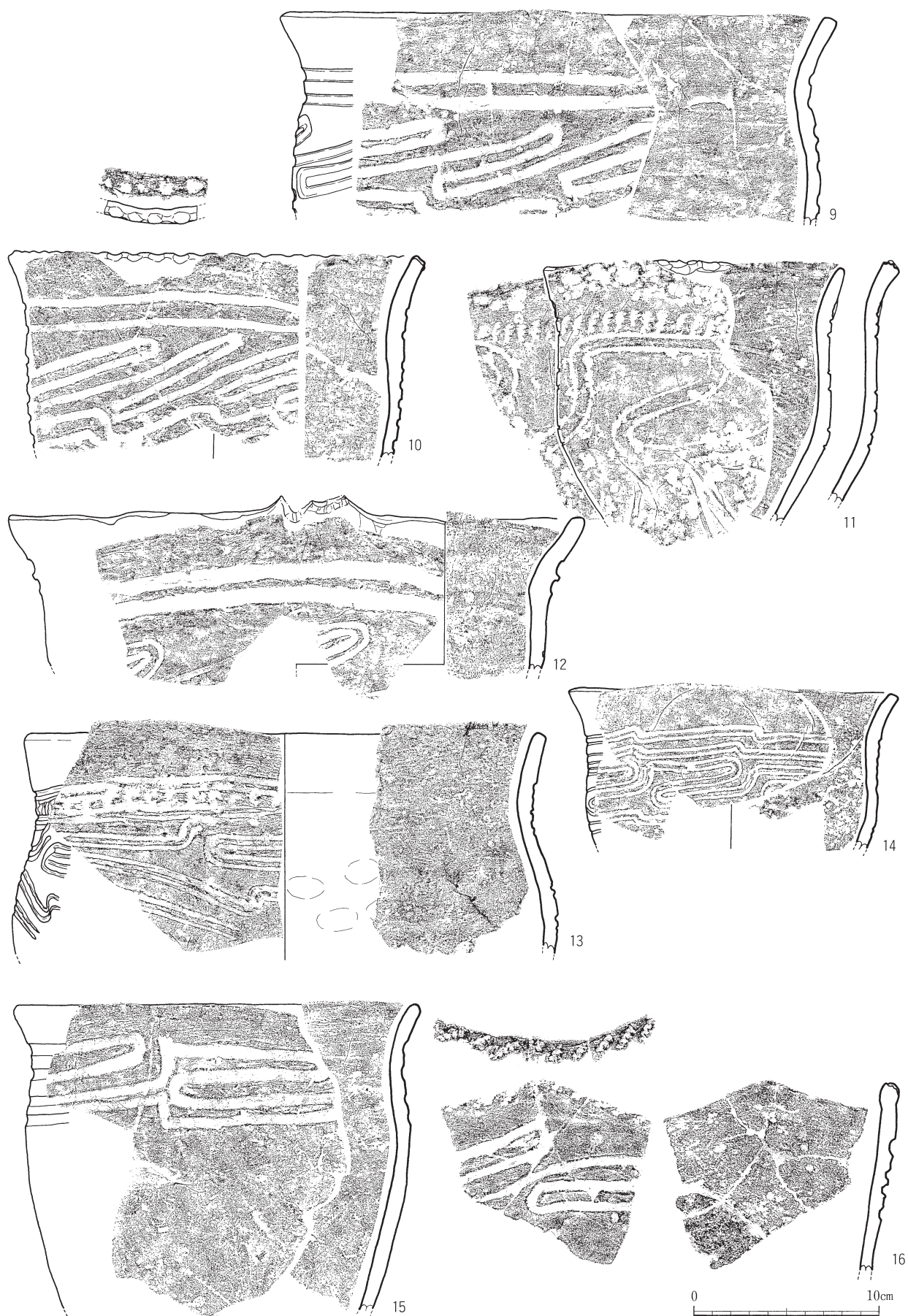
7



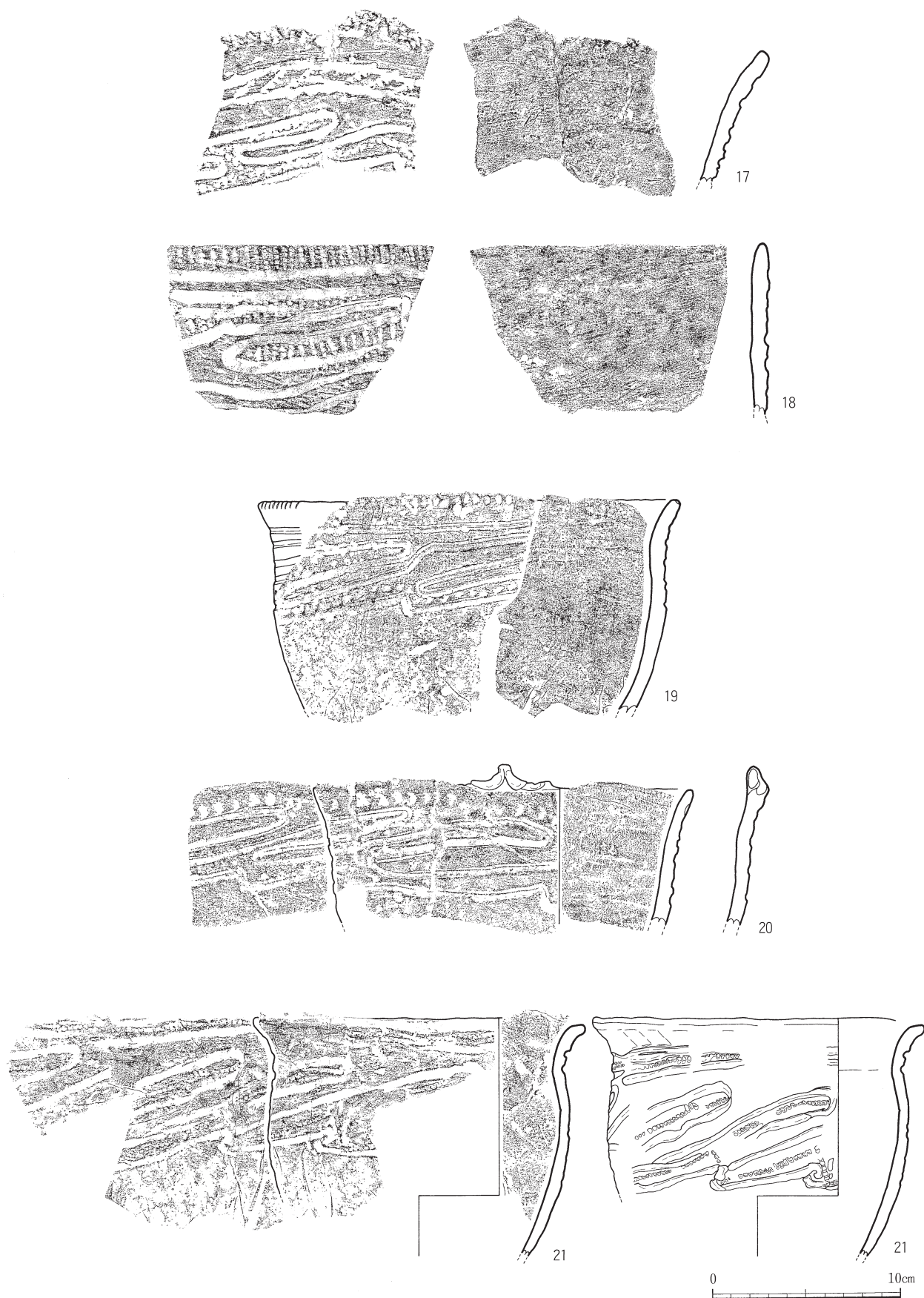
第70図 縄文土器 (3)



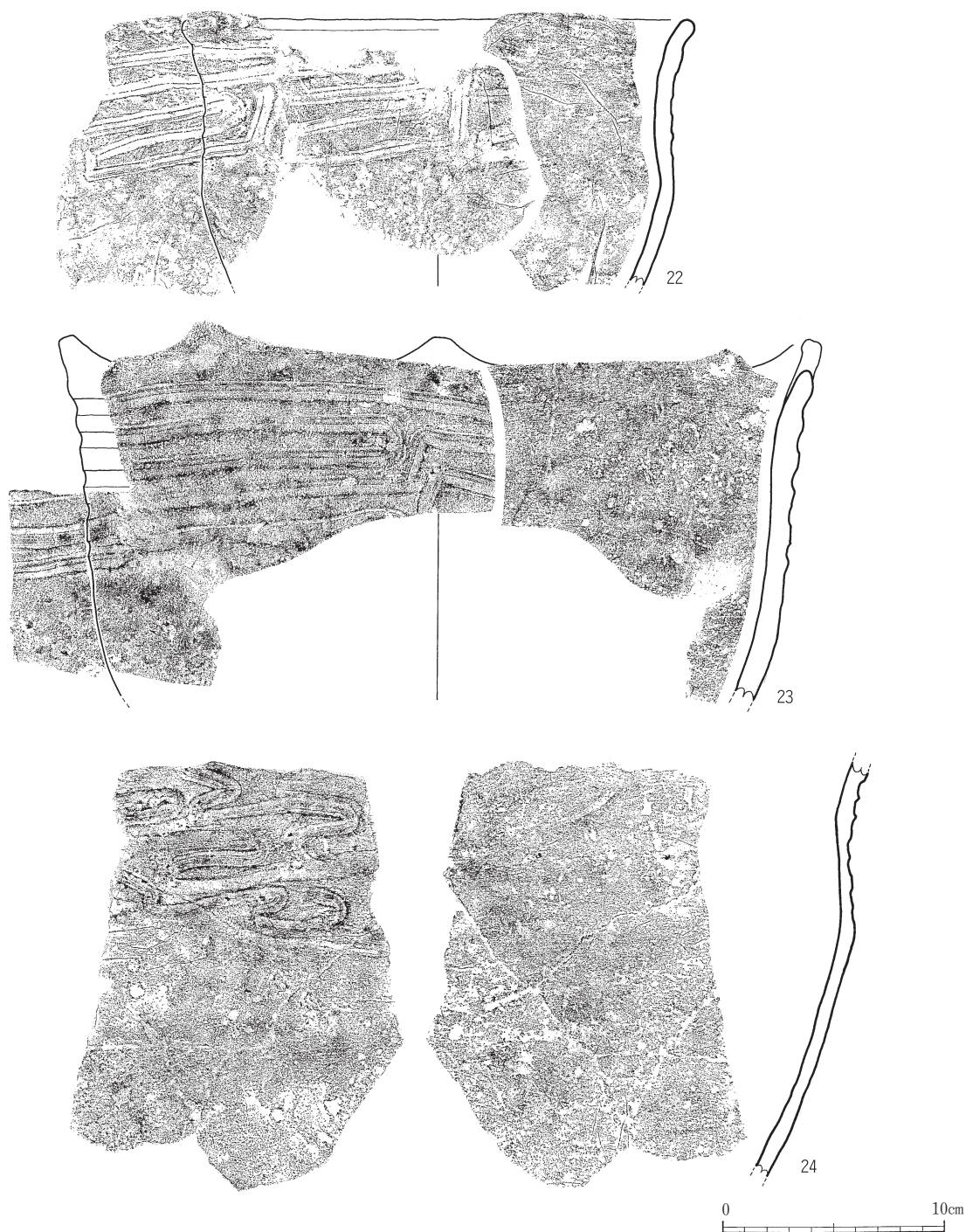
第71図 縄文土器 (4)



第72図 縄文土器 (5)



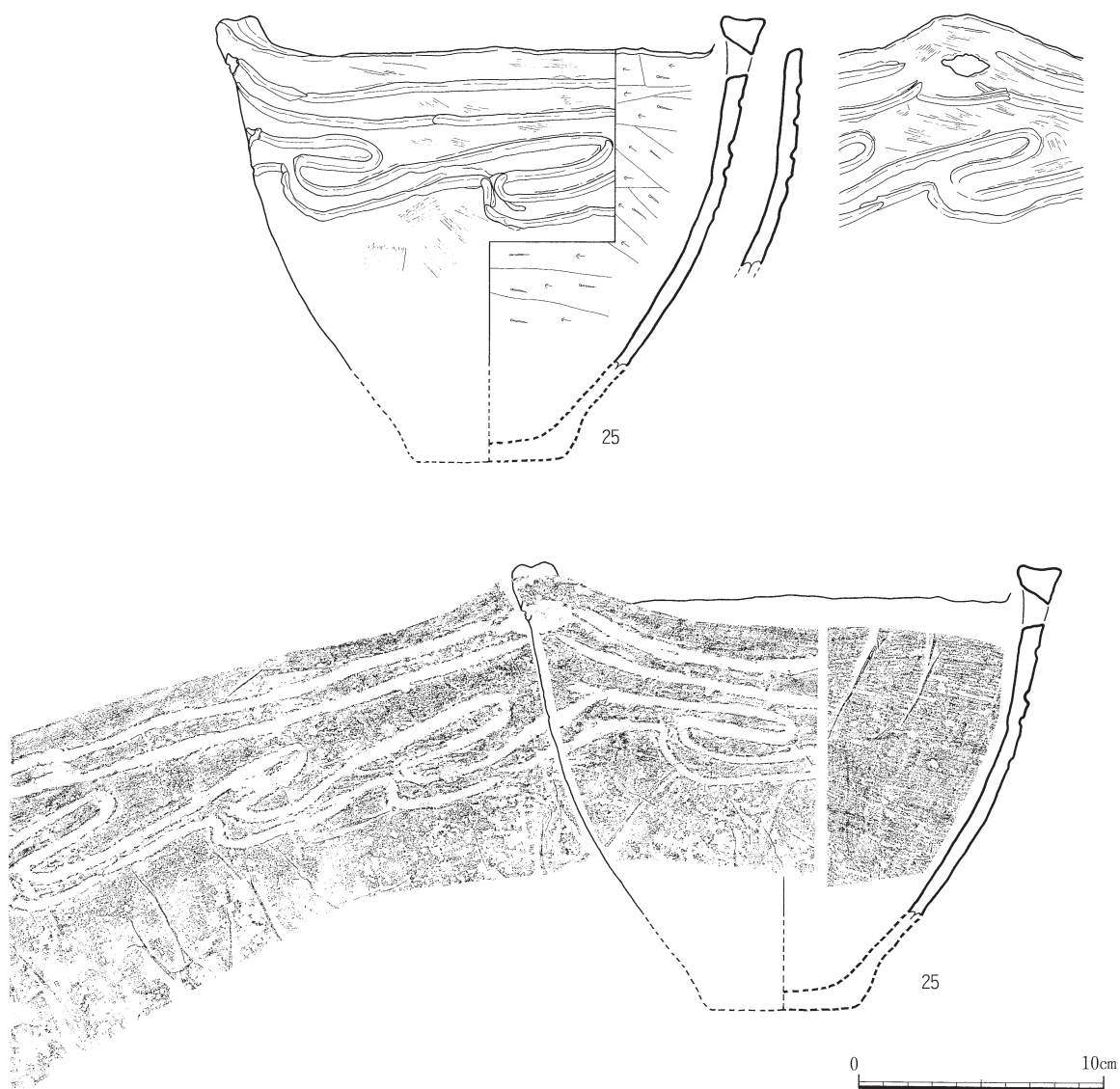
第73図 縄文土器（6）



第74図 縄文土器 (7)

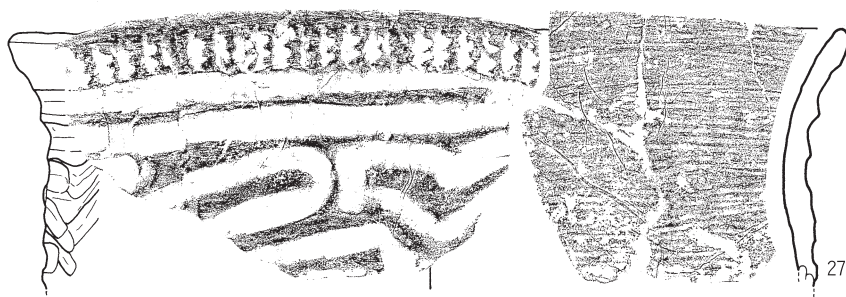
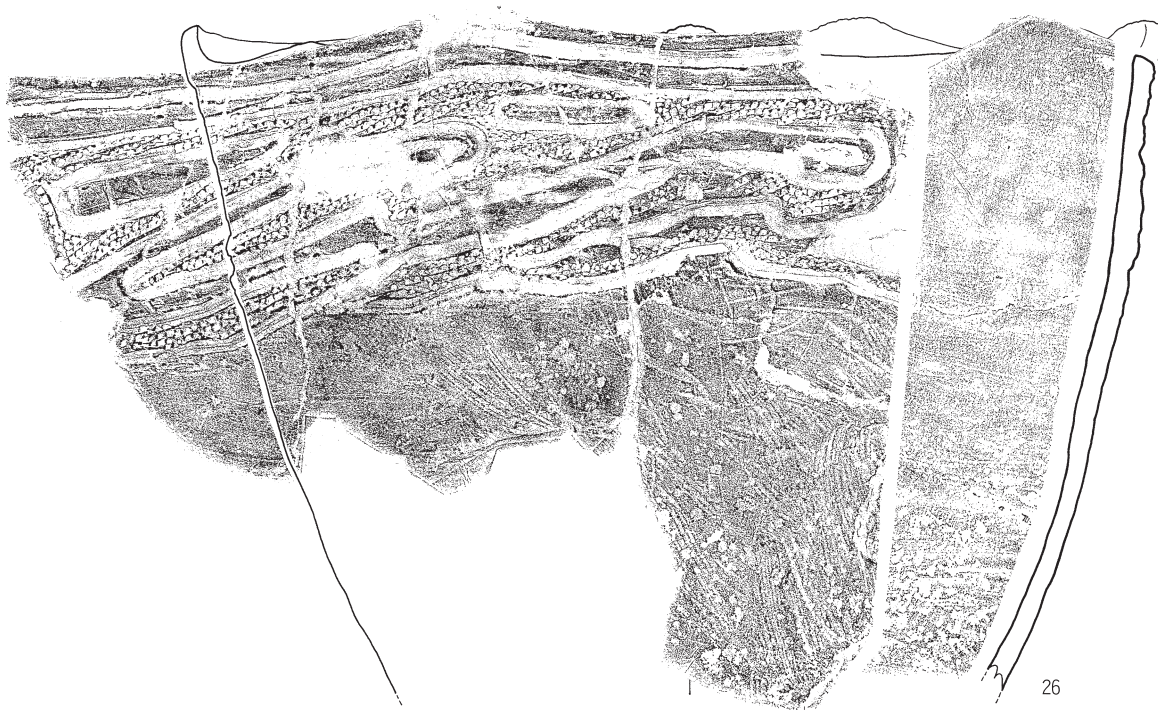
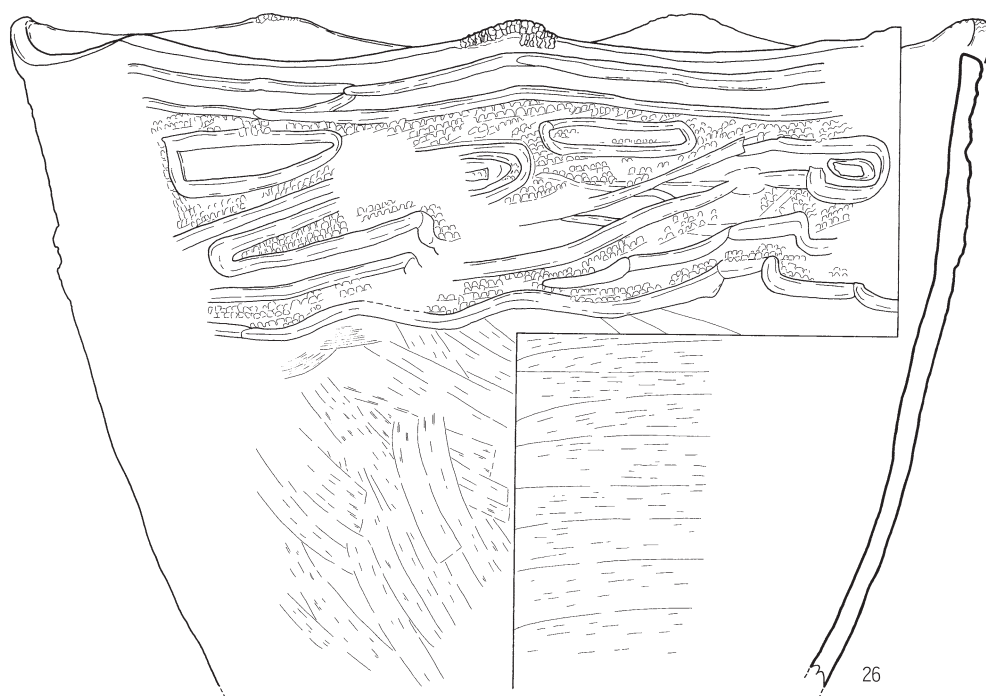
器面調整や器形，胎土などの総合的な特徴により，Ⅰ類およびⅢ・Ⅳ類土器に分類できるものもある。無文あるいは素文土器は，口縁部だけでの判断であるが，全体の2割にも満たないのではないかとされる。

底部 底部を器形で分けると，8類に分類できる。さらに，底部圧痕を有するものは素材によって5種類に分類されるが，別項で扱うこととする。

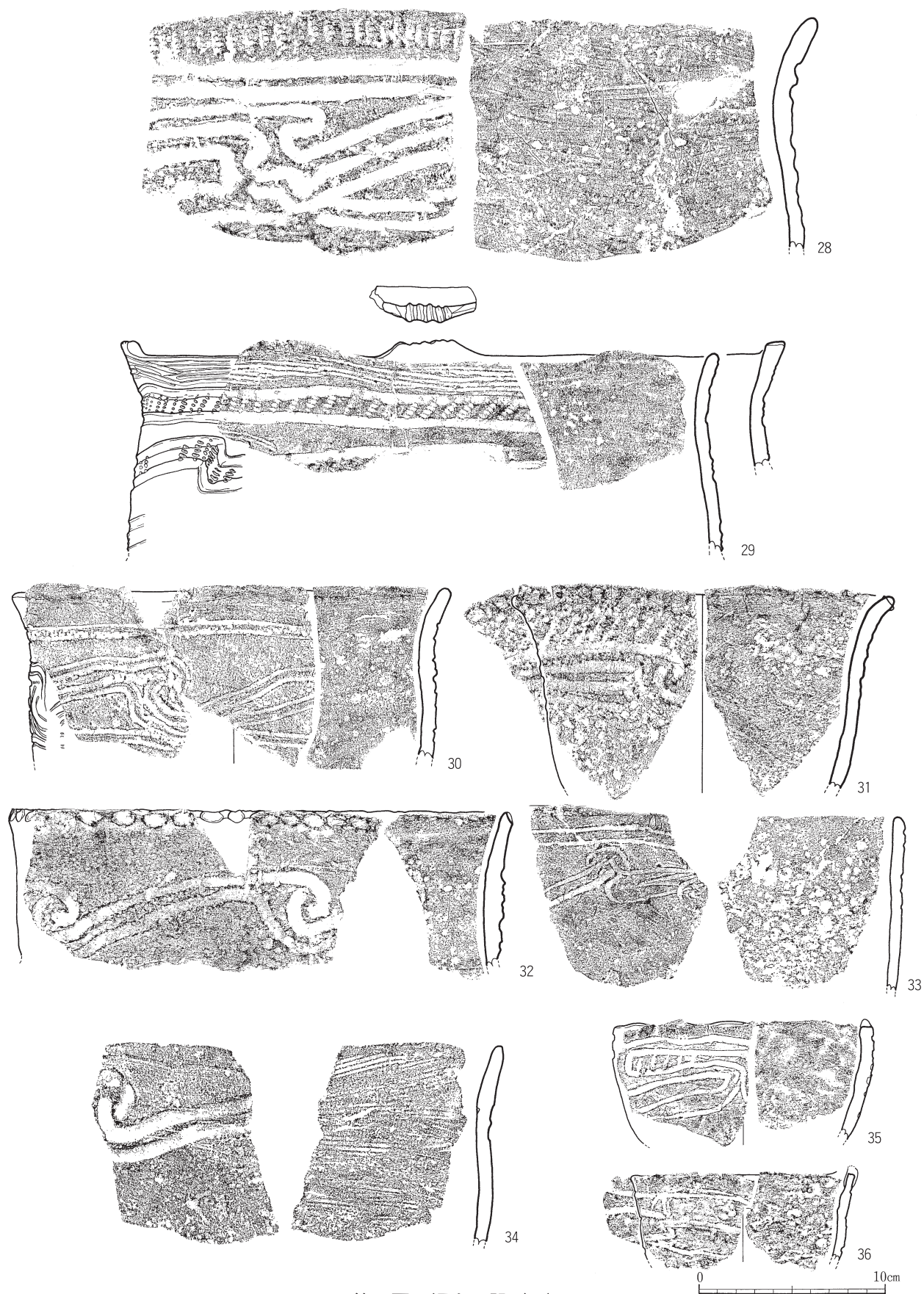


第75図 縄文土器（8）

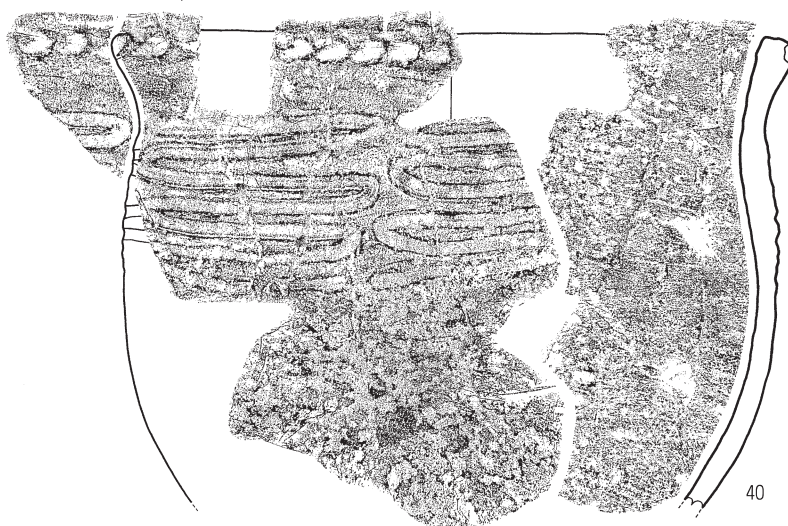
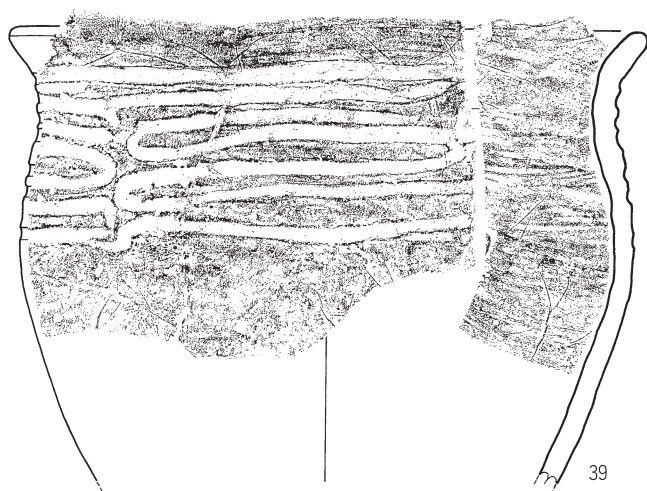
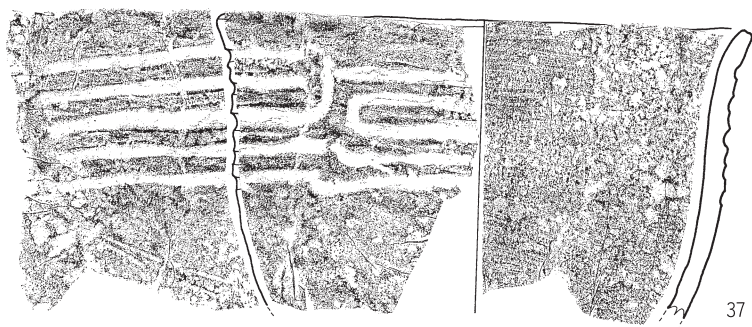
① I A類 1は胴部の張りがなく、口縁部のみが外反する。大波文の下にも同様の波文を巡らし、頸部の平行凹線間と同様に刻目を施す。I A類の中では凹線の太さが最も大きく、幅1 cmを越える。2は1と似たような構成であるが、下の方の大波文に小波文もみられる点が異なる。3と5は共通する部分が多く、張りのある胴部から頸部でくびれて、口縁部が開くタイプである。文様構成も似ており、口縁部の貝殻腹縁刺突、頸部の平行した凹線、胴部上半に巡らす一重の大波文である。異なる点は5が平縁であるのに対し3が4つの頂部をもつ点と、5の大波文がやや角張る点である。8は基本的には前者と同じであるが、凹線と口縁部の刺突が平坦な工具による点と大波文の下に小波文が添えられる点である。6は口唇端部に刻み目をもつ。11～14は平行線で文様を描き、14は頸部の平行線も小波文と同様にステップ状となる。15は口縁部あるいは頸部の文様はなく、やや角張った大波文と小波文だけのものである。17～21は、大波文あるいは小波文間に疑似縄文を施すもので、胴部の張りはそれほど強くない。22と23は粗い筋のある工具を用い、大波文は靴形文に近くなる。波頂部のみが丸みを帯びており、靴形文への変化もしくは靴形文との同時性を示す資料である。24



第76図 縄文土器 (9)



第77図 縄文土器 (10)



第78図 縄文土器 (11)



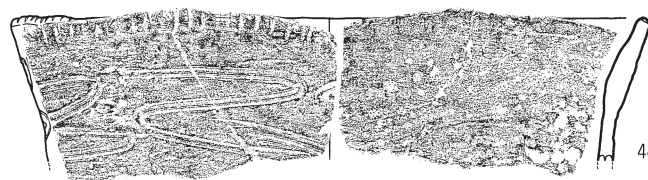
41



42



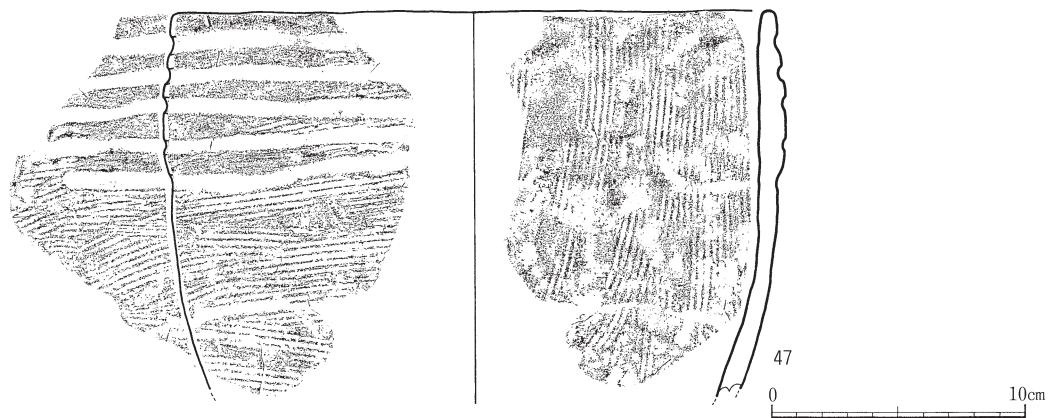
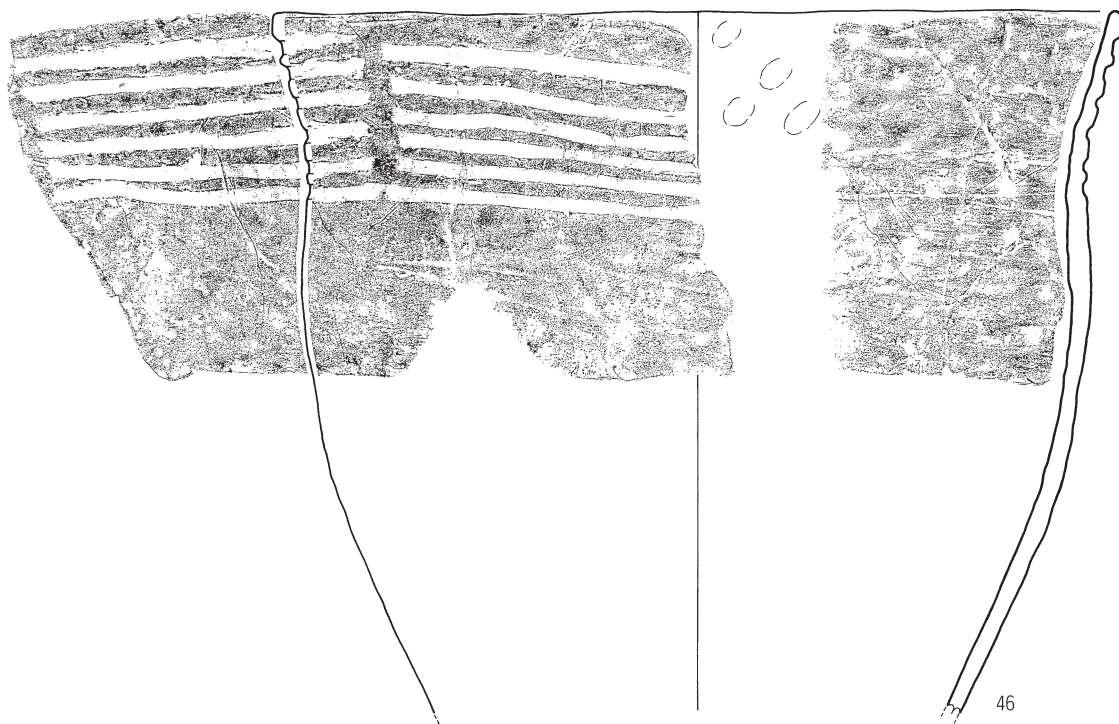
43



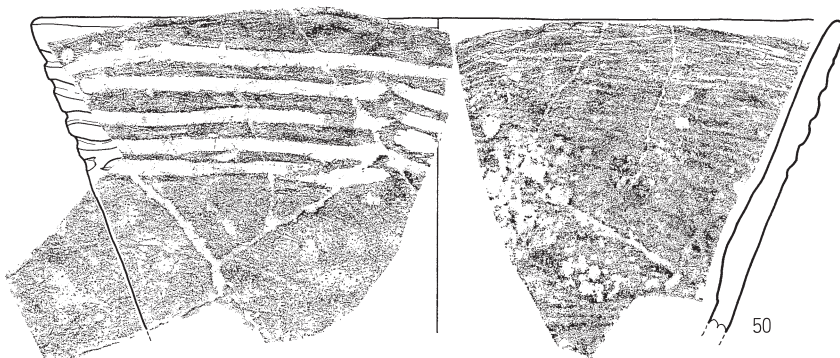
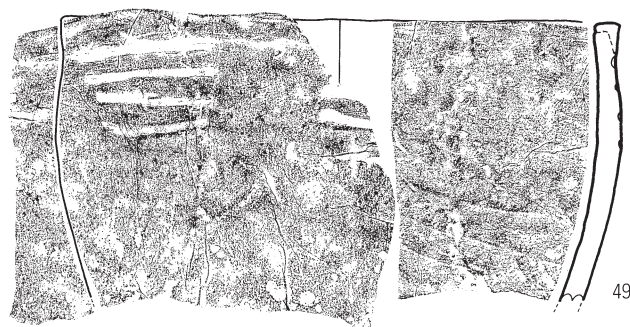
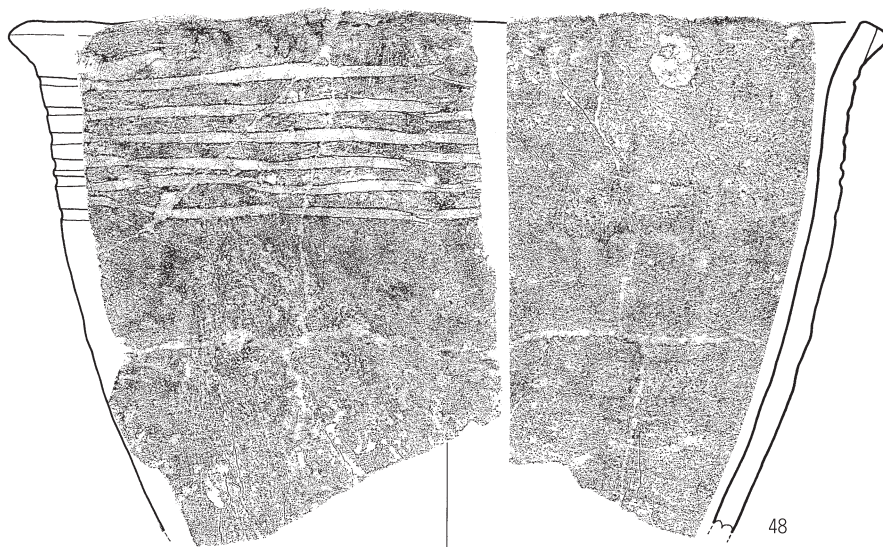
44



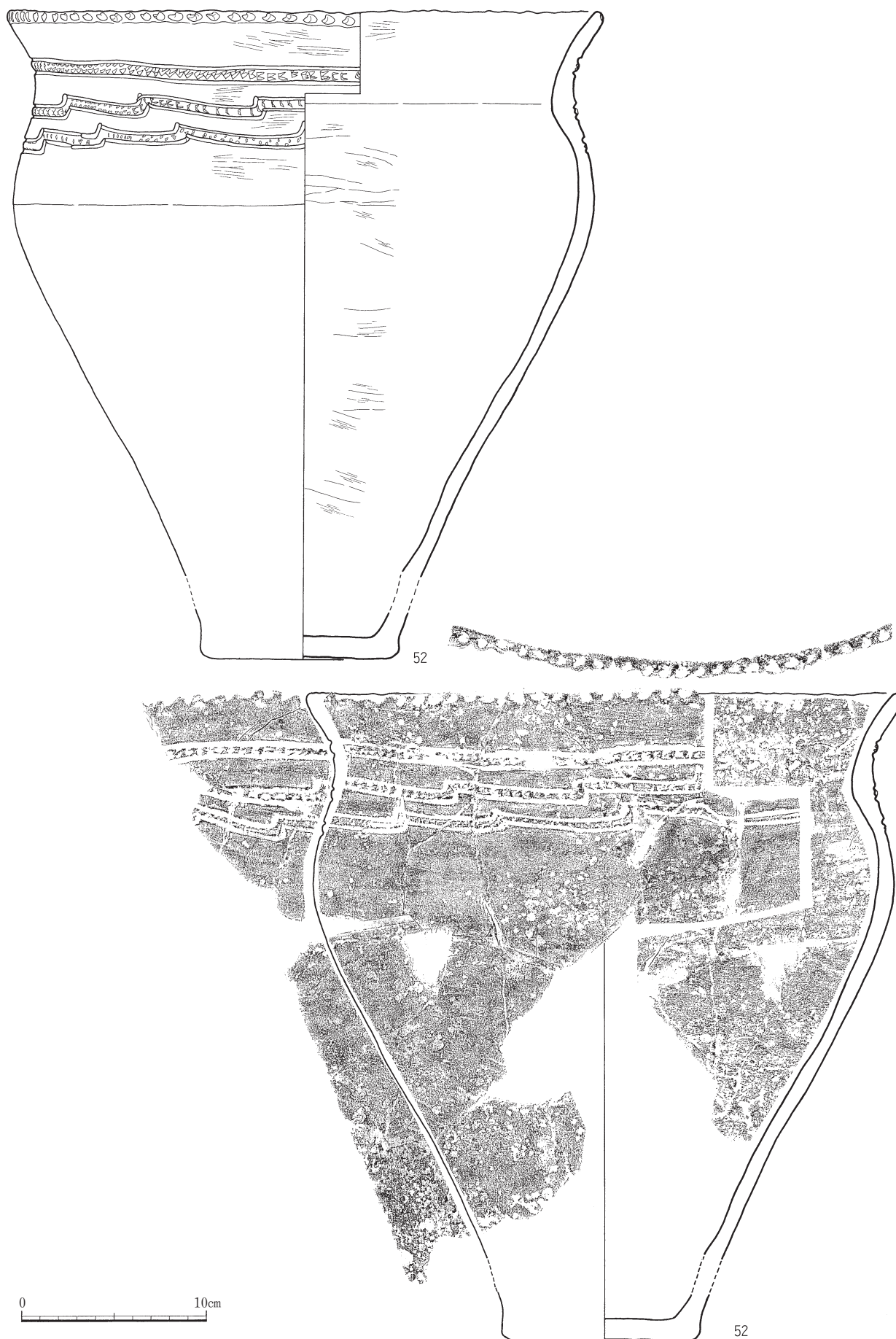
第79図 縄文土器 (12)



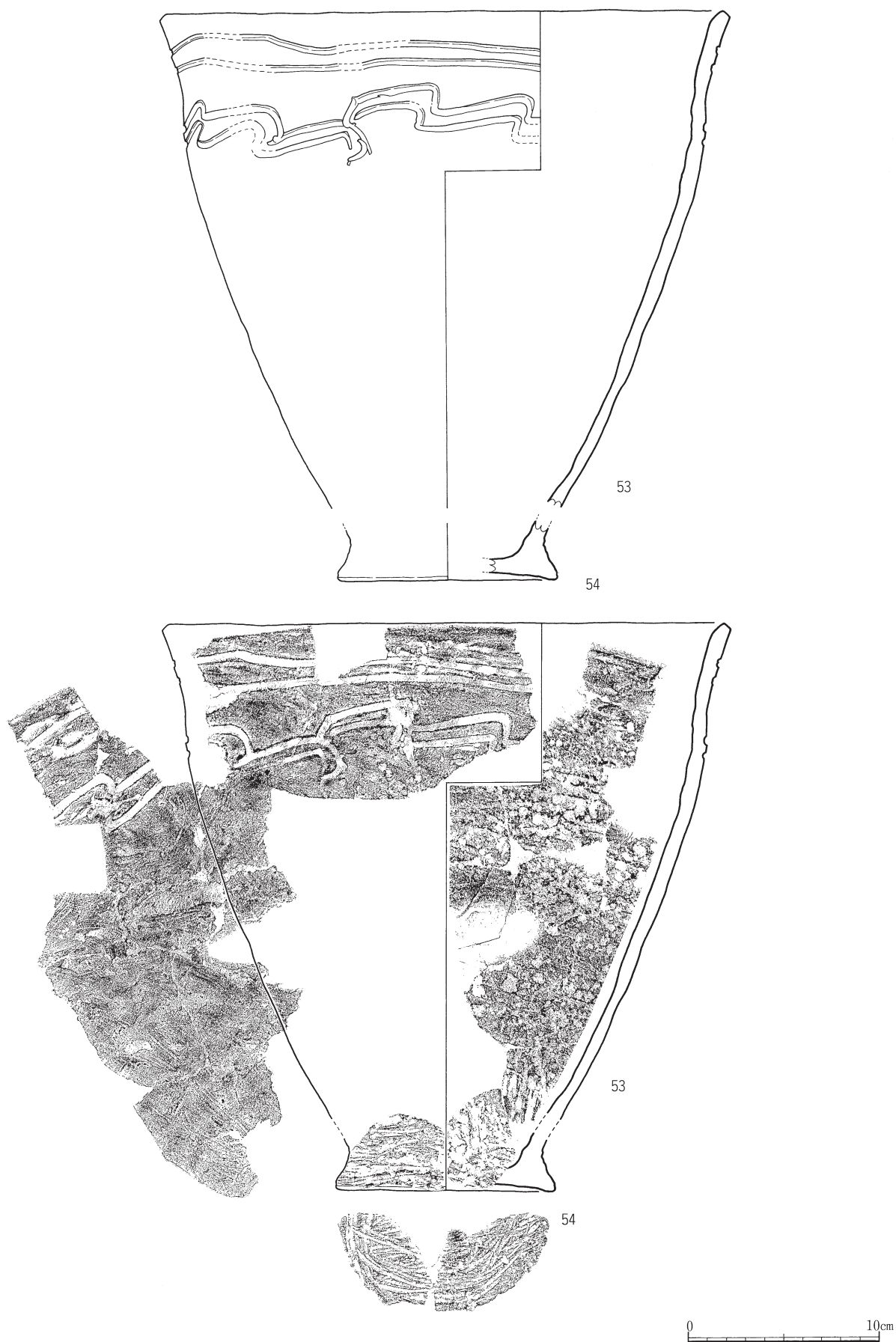
第80図 縄文土器 (13)



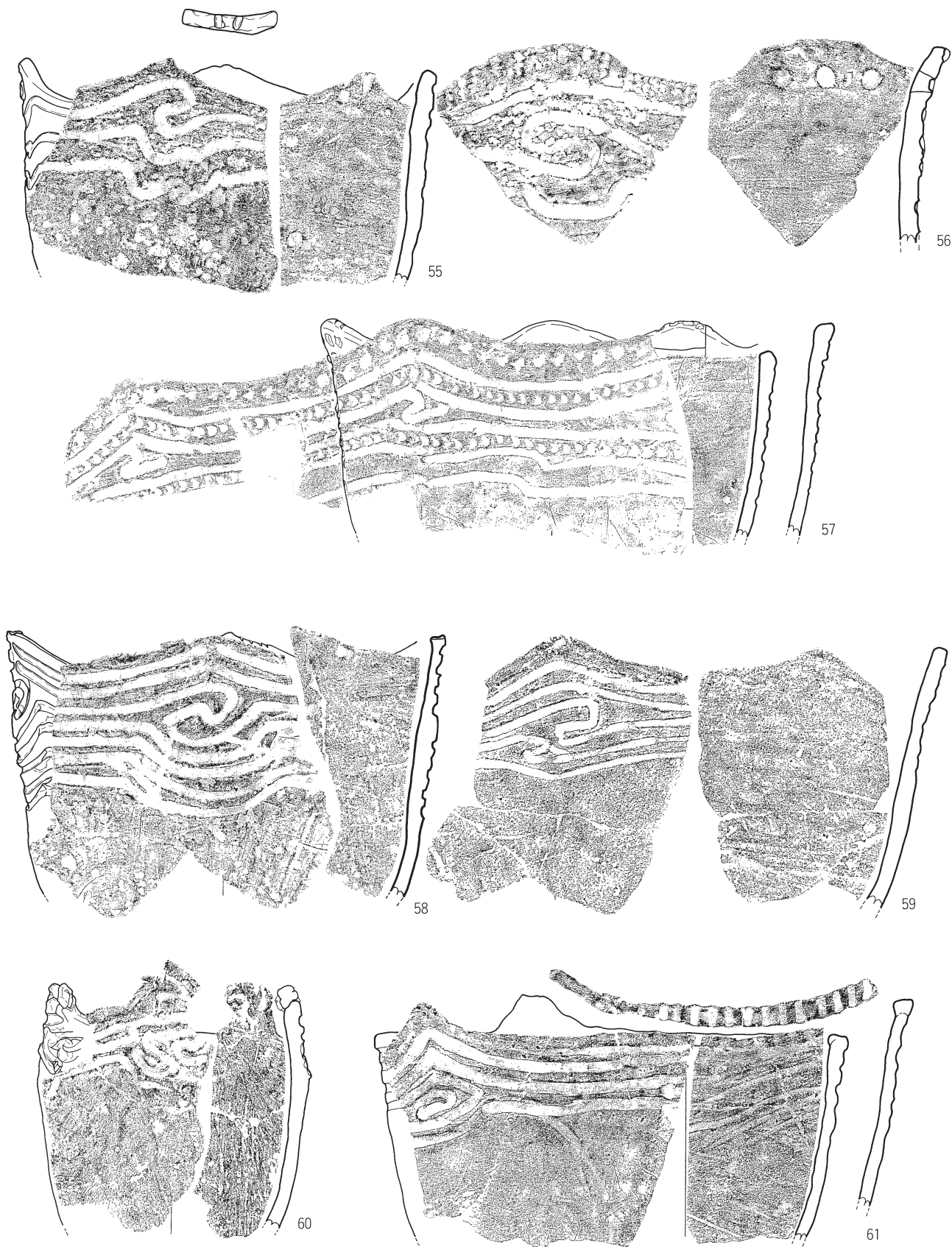
第81図 縄文土器 (14)



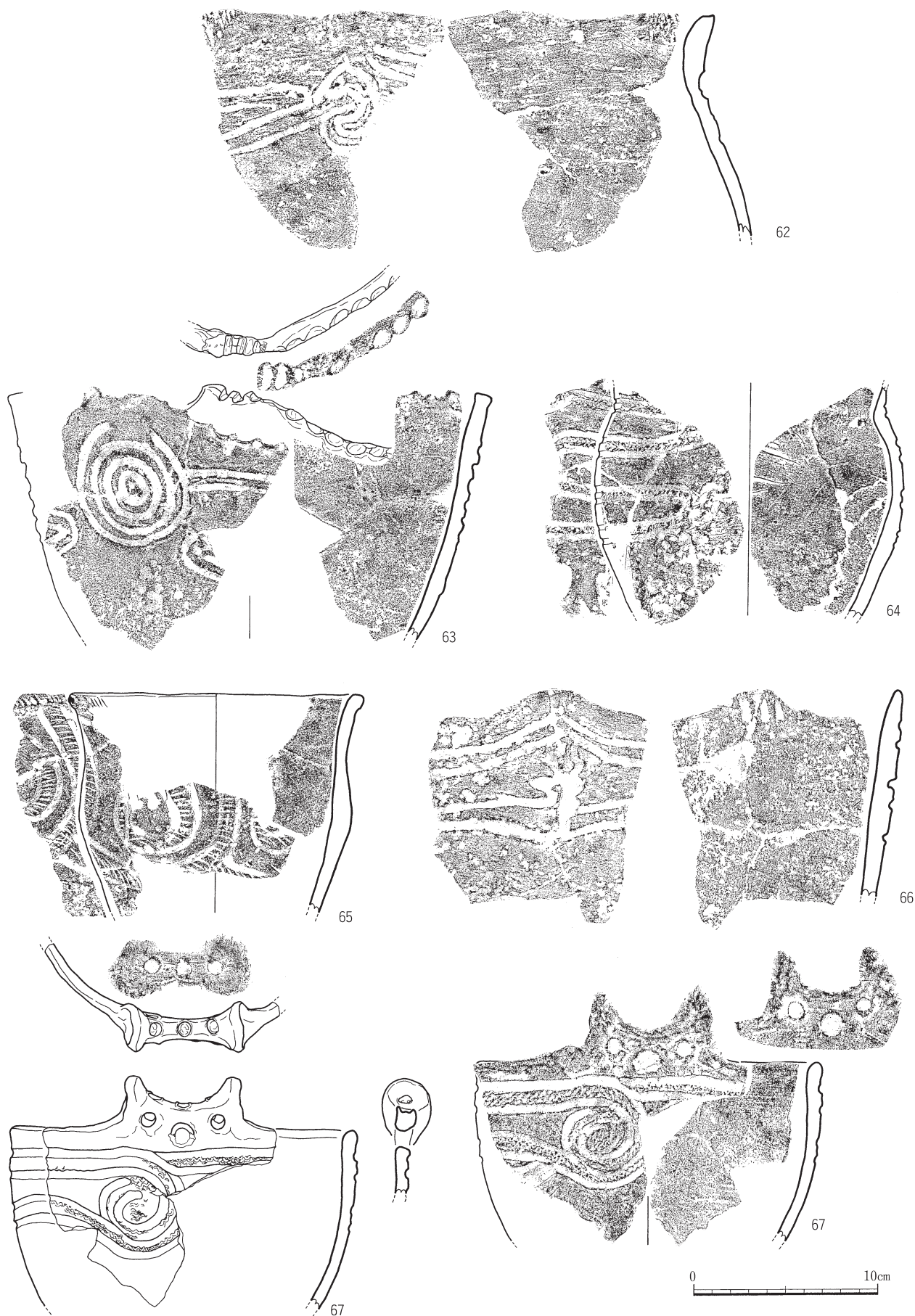
第82図 縄文土器 (15)



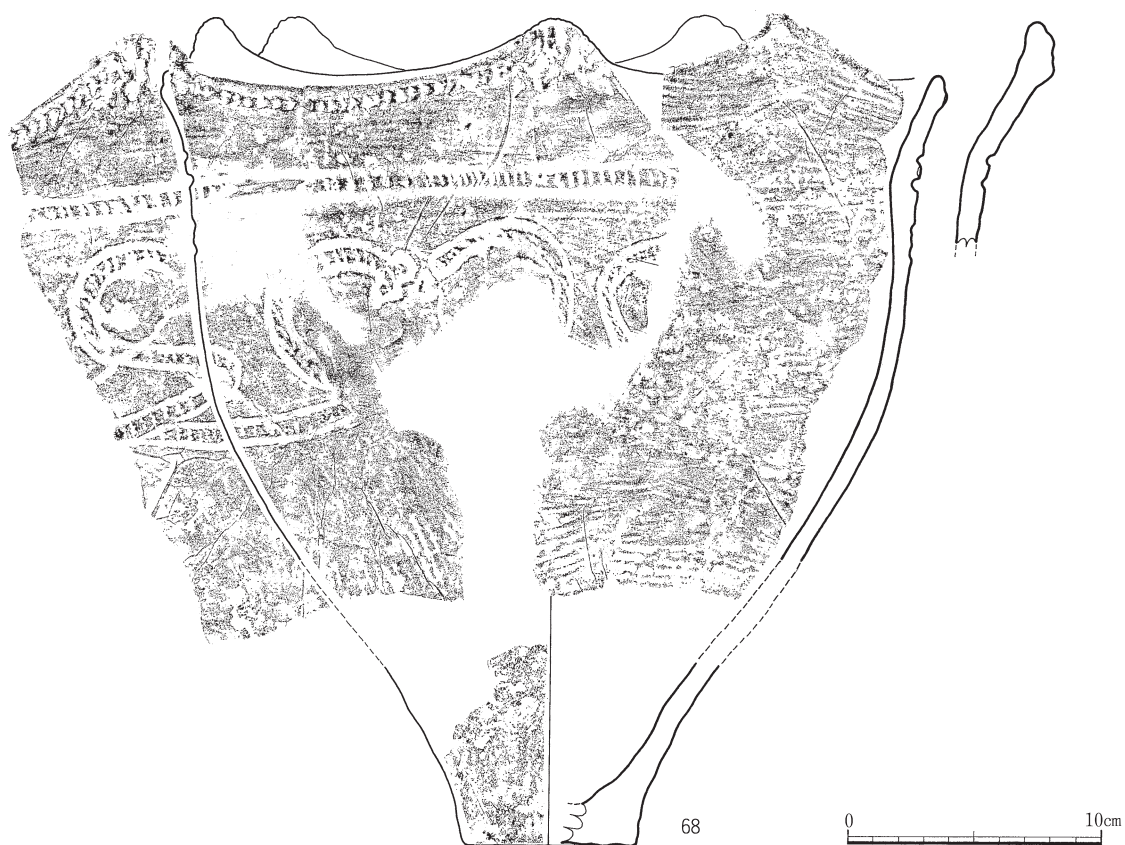
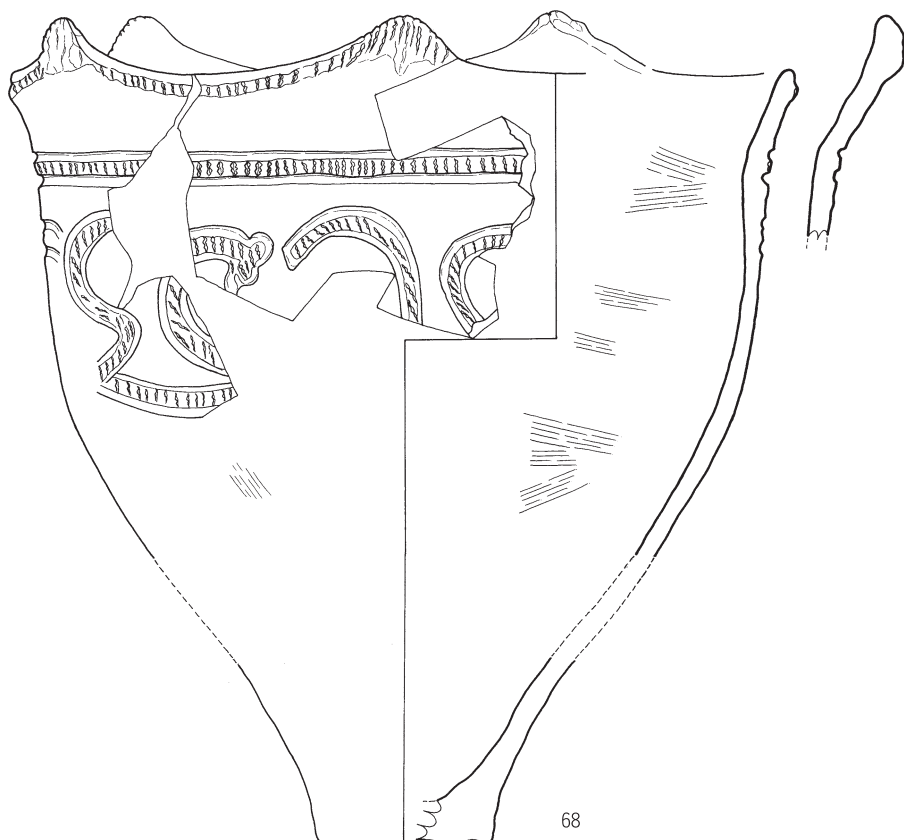
第83図 縄文土器 (16)



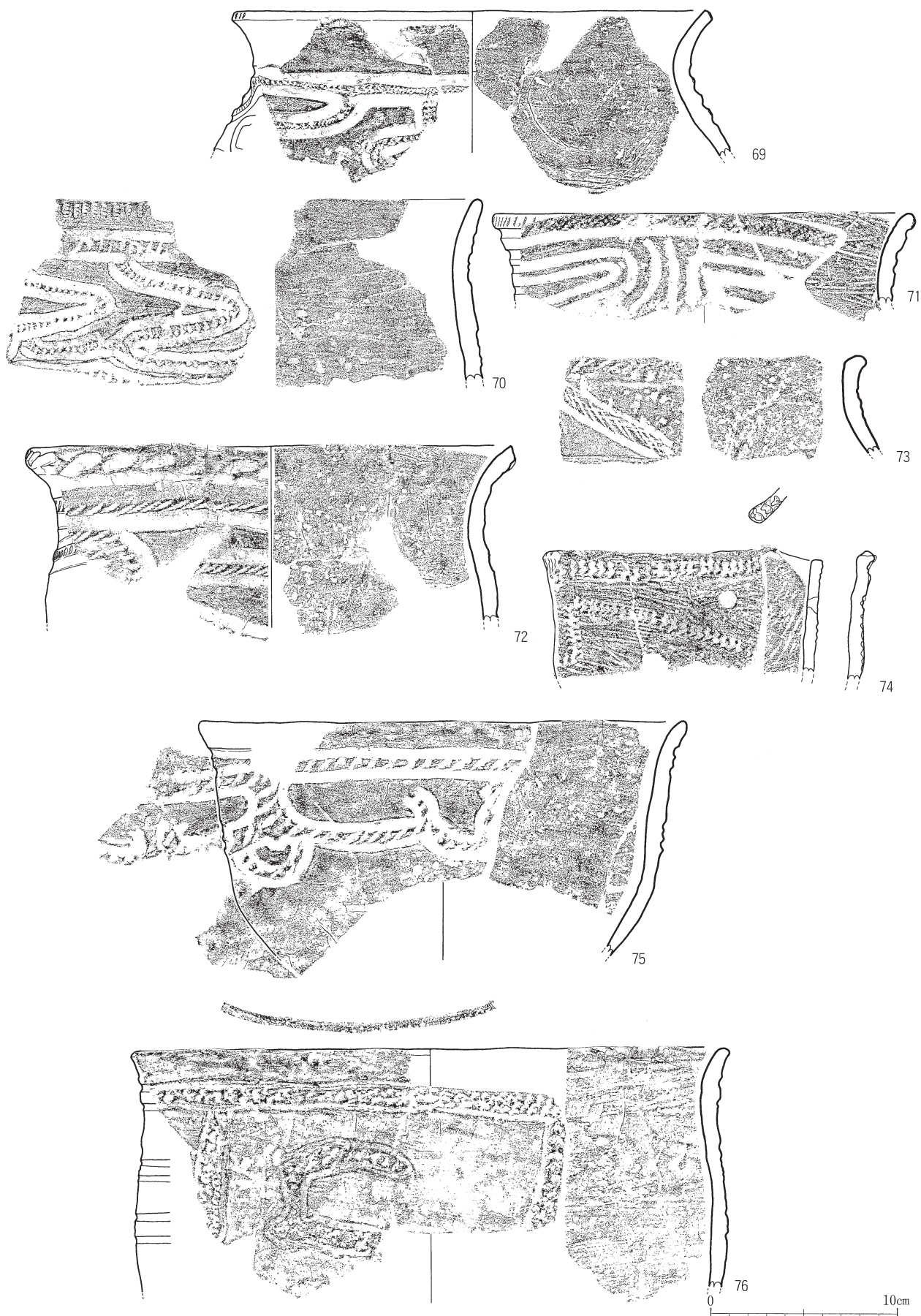
第84図 縄文土器 (17)



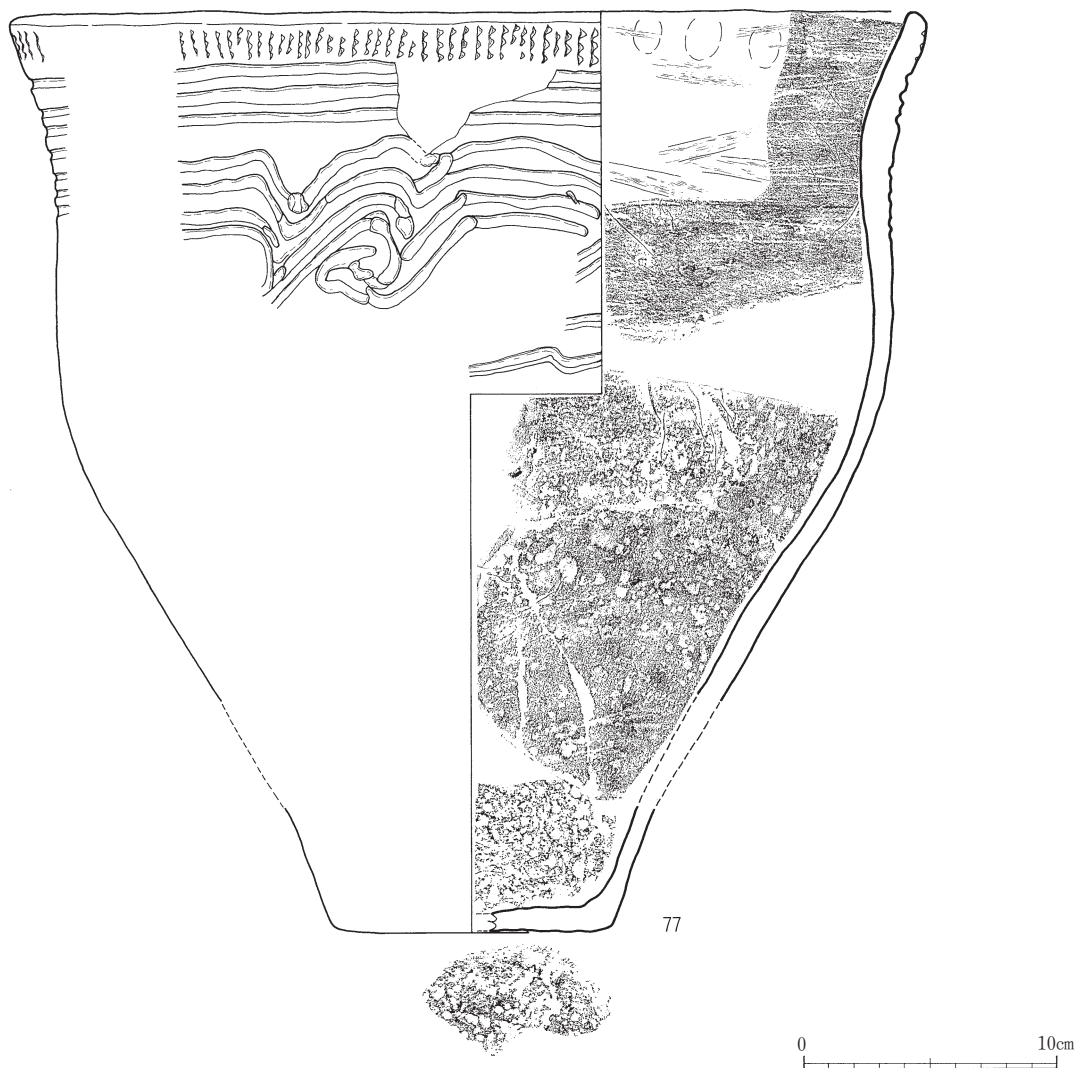
第85図 縄文土器 (18)



第86図 縄文土器 (19)



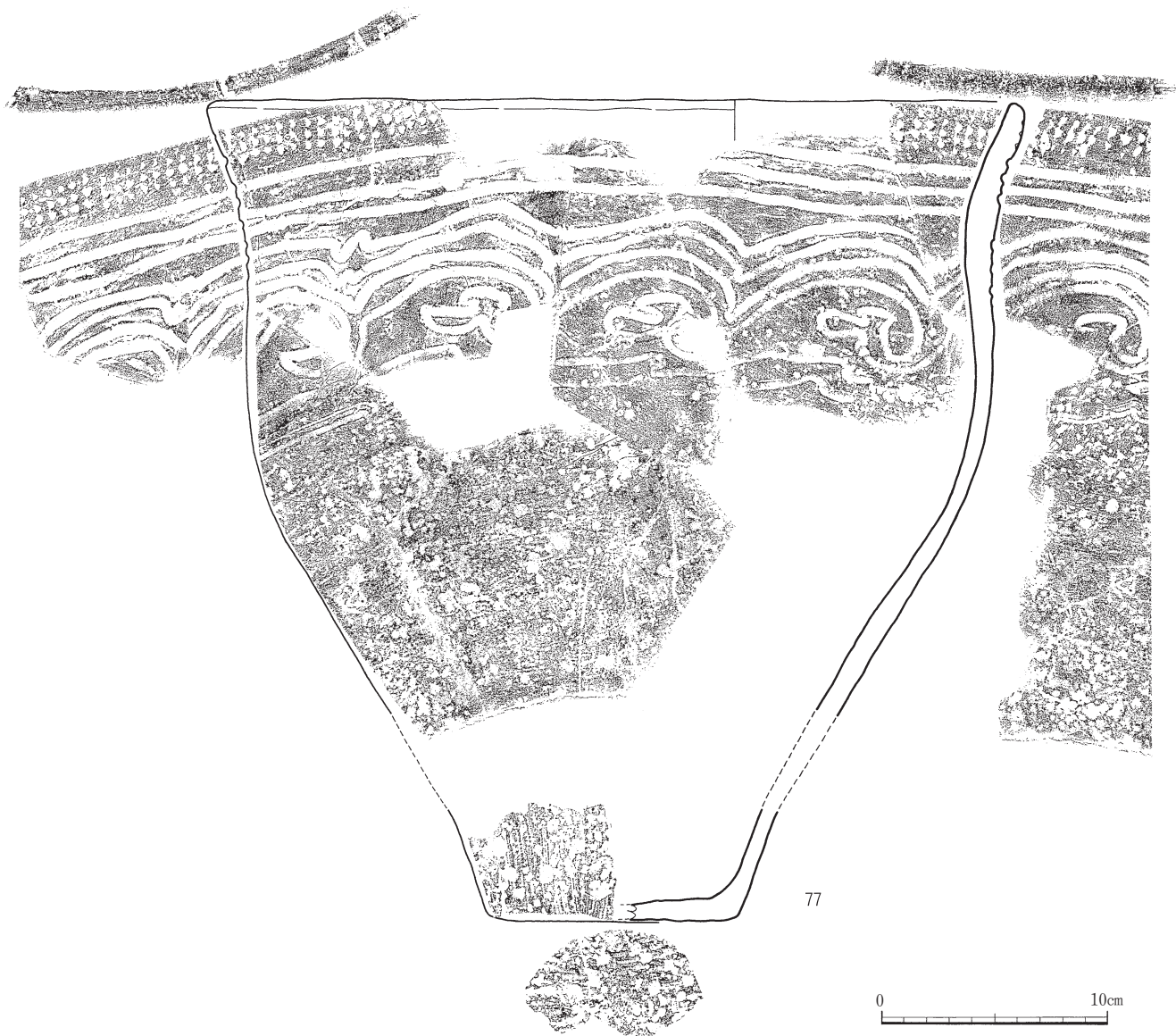
第87図 縄文土器 (20)



第88図 縄文土器 (21)

は大波文がかなり雑に描かれるものである。25は、ゆるく内湾しながら立ち上がる胴部から、ほぼ直口する口縁部へ至る。口唇部は内側に傾けて面とりする。2か所に透しのある把手状の頂部を持ち、肥厚させる。この部分の口唇部は指ナデによって浅く窪んでいる。口縁部の上面観は、頂部方向が若干長く、22.3cm×18.9cmの楕円形となる。外面の器面調整は、下部が縦方向に、上部が横方向のナデによるものである。文様は4mm幅の凹線により、頂部を起点として土器を時計回りにしながら施される。口縁部に沿って2条の平行線が描かれ、その下には7か所の波頂部をもつ文様を右上がりに描き、その下にもう1条の凹線を添えてある。胎土には透明の火山ガラスとくさり礫が目立ち、色調は明赤褐色を呈する。内側の調整を口縁部内面からみると、底から口縁部方向へ時計回りにケズリ様になされており、右手によるものと思われる。

② I B類 この類は多種多様である。本音を言えば、I A類、II類、III類、IV類、V類のどれにも該当しないものを寄せ集めたものであることは否めない。一般的には疑似縄文をもつものを独立させるのかもしれないが、他の類にも疑似縄文がみられる点や文様の一部分にしかみられないものもあるため、この類で扱うこととする。



第89図 縄文土器 (22)

26と27はⅠA類の大波文と霧囲気は同じであるが、端部を強調したり、空間を囲んだ凹線で埋めたりする点異なる。26はⅠA類に入れるべきか迷う土器であるが、大波文が途切れているのでこの類に含めた。大波文に相当する部分の右上先端はふくらんでおり、この中に楕円文を描く。7か所の波頂部はこの上に位置する。大波文の先端部分がふくらんだことによって、その下の線はクランク状になっている。大波文が間延びしたことによって、上の部分に空間ができ、ここを埋める様な形の枠文を描いている。口縁部平行線文内と枠文内、及び大波文に相当する部分の内側だけを残し、二枚貝腹縁の刺突による疑似縄文が施される。

28～36は右上がりの文様意匠がみられるもので、大波文に通じるものがある。30～32は大波文に相当する部分が鉤手状つなぎ文となっている。37は小波文はステップ状であるものの、大波文の部分が連続せずに途切れているものである。一つ一つの大波文が独立して描かれるため、横長の逆「S」字状の蛇行線となっている。大波文状からS字もしくは沈線を重ねるものへの変遷がみえる可能性をもつ。39は器形的にもⅠA類としたものに似ており、文様構成もその憶影を残している。この大波

文に相当する部分の文様がさらに退化することによって、横長の逆「S」字状文になっていく可能性がある。40と41は横長の逆「S」字状に蛇行した文様だけが描かれている。口唇端部に刻目を施す点は共通するが、施文具に違いがみられる。42は逆「S」字状に蛇行する文様の左側が途切れている。42～44はくびれ部のない器形で、横長の逆「S」字状を巡らすものである。44は、口唇部に刻目を入れる点や胎土からⅢ類に近い土器であり、南福寺式土器の文様の系譜を引く可能性もある。45～51は、横長の途切れた沈線のみが描かれている。器形は胴部の張りが弱く、頸部がはっきりしないものが多い。45と50のように、他の沈線は途切れるものの一番上の沈線だけがつながっている点は、ⅠA類の頸部にみられた平行線を髣髴とさせる。以上の土器は、ⅠA類の大波文から次第に崩れて横長の途切れた数条の沈線文に至る変遷過程を捉えられそうであるが、45と47もⅢb3層の出土であり、層位的に証明することはできなかった。

52と53は器形は異なるが、似たような文様構成をもつものである。52は口縁部直径と胴部最大径がほぼ同じであり、胴部最大径が肩部付近にあるものである。頸部に平行線が巡り、その下に2条のステップ状の文様を施し、それぞれが疑似縄文である。中間の大波文に相当する文様がなく、上下の文様が接近しているのは胴上部が狭くなっている点との関係が考えられる。52がくびれをもつ器形で、疑似縄文を施す点や胎土に金色雲母を含むことが特徴であることに對し、53はくびれをもたず、口縁端部がわずかに外反することが特徴である。前者が大隅半島南部の特徴であるのに対し、後者は薩摩半島の特徴をもつ。同じⅢb3層で出土している点から、同時性を示しているものと考えられる。

55～58は波頂部のところに大波文風あるいは入り組み文風の文様を描くものである。56だけが左向きである。58は全体的には7条の平行線文であるが、口縁部波頂部の位置だけが多様化している。最上位の2条は空間を空け、その下の1条は入り組状の文様を描く。その下の4条の平行線文は入り組状の文様が広がった分だけ孤状になる。57は疑似縄文を施し、刺突と凹線は同じ施文具と考えられるが、76の刺突具とともに何であるかの特定はできない。61は渦巻状に描かれ、63は同心円状となっている。頂部の下に入り組み状あるいは渦巻状に文様を描くのは、鹿児島県内でも曾於北部に多く、曾於市（旧末吉町）宮之迫遺跡や宮崎県綾町尾立遺跡などに類例がある。大きな波状口縁を多用する地域と関連のある文様であると考えられる。

64・65・67～73は細かな疑似縄文をもち、沈線間の狭いものである。68は口縁部に沿った刻目を低い突帯に施してあるもので、他のものと異なる。同様な施文方法の土器は、疑似縄文はもたないものの41や鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡にあり、金色雲母も多く含む。また、同じ系譜で金色雲母を含む土器が指宿市（旧山川町）成川遺跡でも出土しており、82の例も含めて時間的な変遷をたどれる可能性がある。67はミミズク状の突起をもつもので、他の土器に比べてつくりも繊細である。磨消縄文土器の影響をより強くもっているものと考えられる。74は沈線をもたずに貝殻復縁の刺突のみで疑似縄文を描くものである。

75と76は粗い疑似縄文をもつものであり、沈線間の幅も広い。

77は口径36.3cm、器高36.4cm、底径11.2cmに復元できるもので、胴部上半がわずかに張り、口縁部は軽く外反する。口縁部には貝殻腹縁の刺突を縦位に施し、その下には3条の平行線と3条の弧状線を巡らす。その下に先端が二つに分かれた突起をもつ渦巻状の文様を連続させる。この先端部



78



79



80



81



第90図 縄文土器 (23)

は、68の土器の文様に通じるものがある。視点を変えて下から見ると、大波文の波が砕けたような文様にも見える。一番下には小波文というよりもステップ状の平行線が浅く巡らされる。

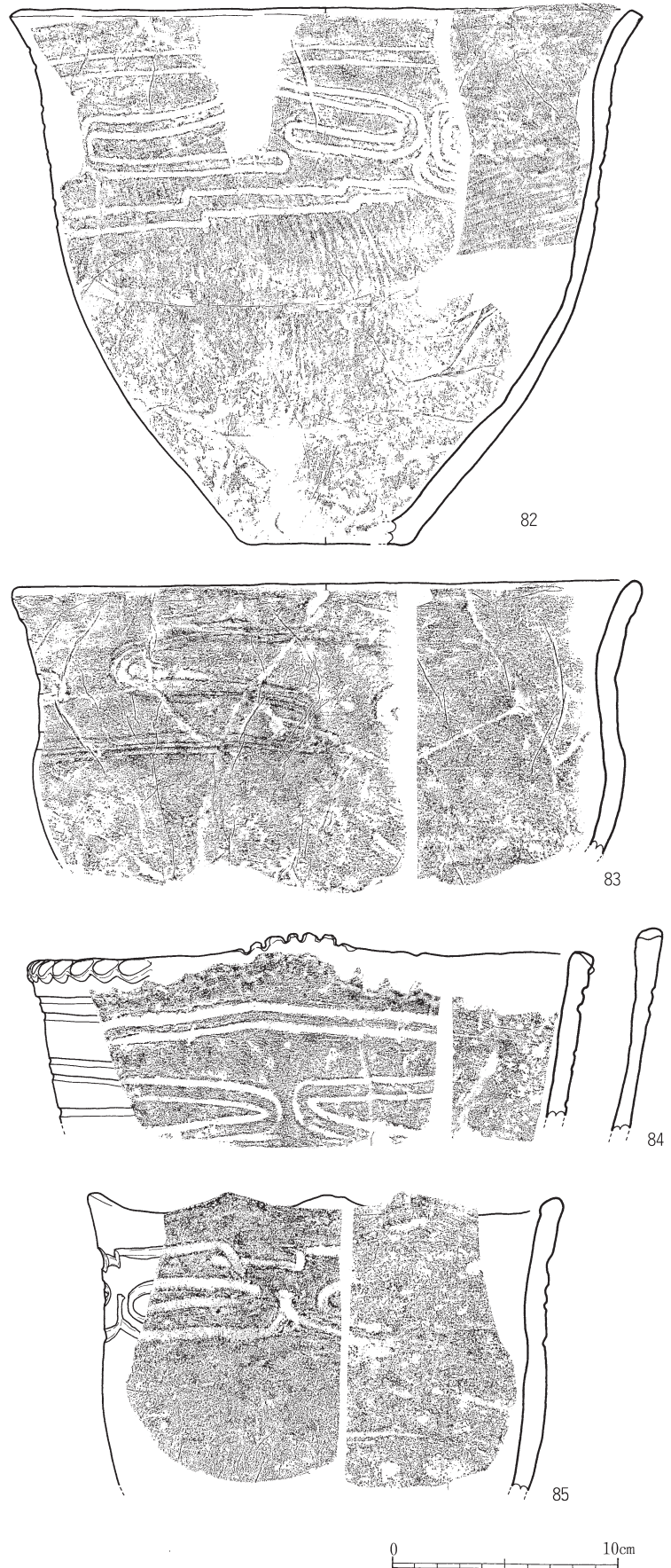
78～85は胴上部の文様が線対称となるような描かれ方をするものである。波状口縁は少なく、あったとしても小さな頂部をもつものばかりである。また、頸部のくびれも弱く、平行線で文様を描くものが目立つ。79は全体の雰囲気はIV類に入れても良いものである。82は頸部の平行線や下部にステップ状の施文をもつものである。

87～110は、個性的な一群である。88は53の土器と黄色っぽい指宿式土器の中間的な雰囲気をもちものである。89は細めの大波文を間隔をあけて施す。刻目の施文具は不明である。90と91は幅広の施文具で描いてはいるが、モチーフを理解し難い。54も器形や施文位置は踏襲しているものの、文様モチーフはわからない。93は指頭状の凹線である。94と102は巻貝による刺突にもみえるが、確実ではない。

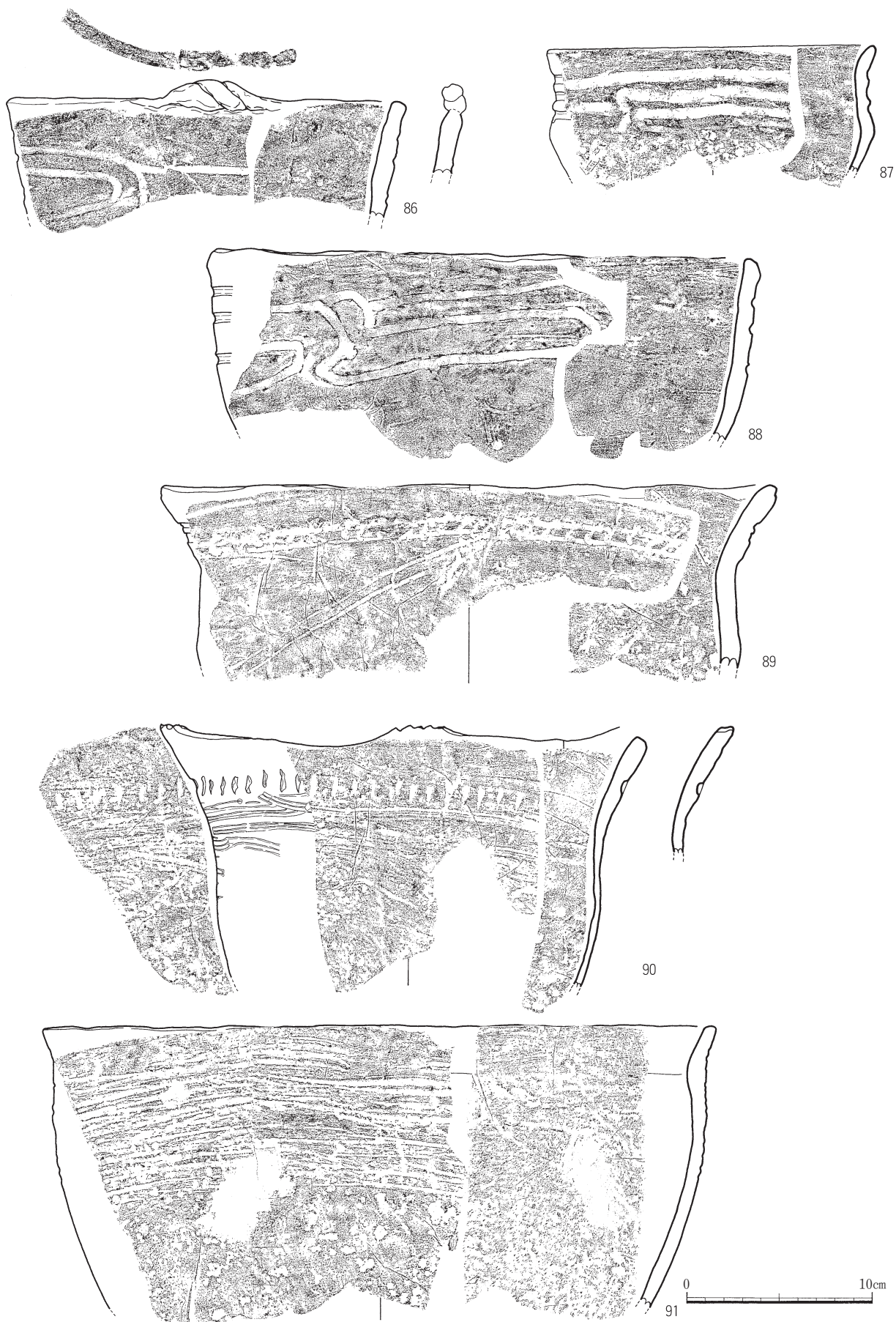
96は二枚貝の腹縁による刺突で文様を描く。95と97は他の凹線の一部から平行した凹線を引きはじめるもので、92や98にも通じるものがある。99と100は4条が一単位となる施文具である。140～149は口縁部の縦長の刺突や文様構成が、III類土器の雰囲気に近いものである。

152～156は平行線で文様を描く点で、IV類土器の雰囲気に近いものである。

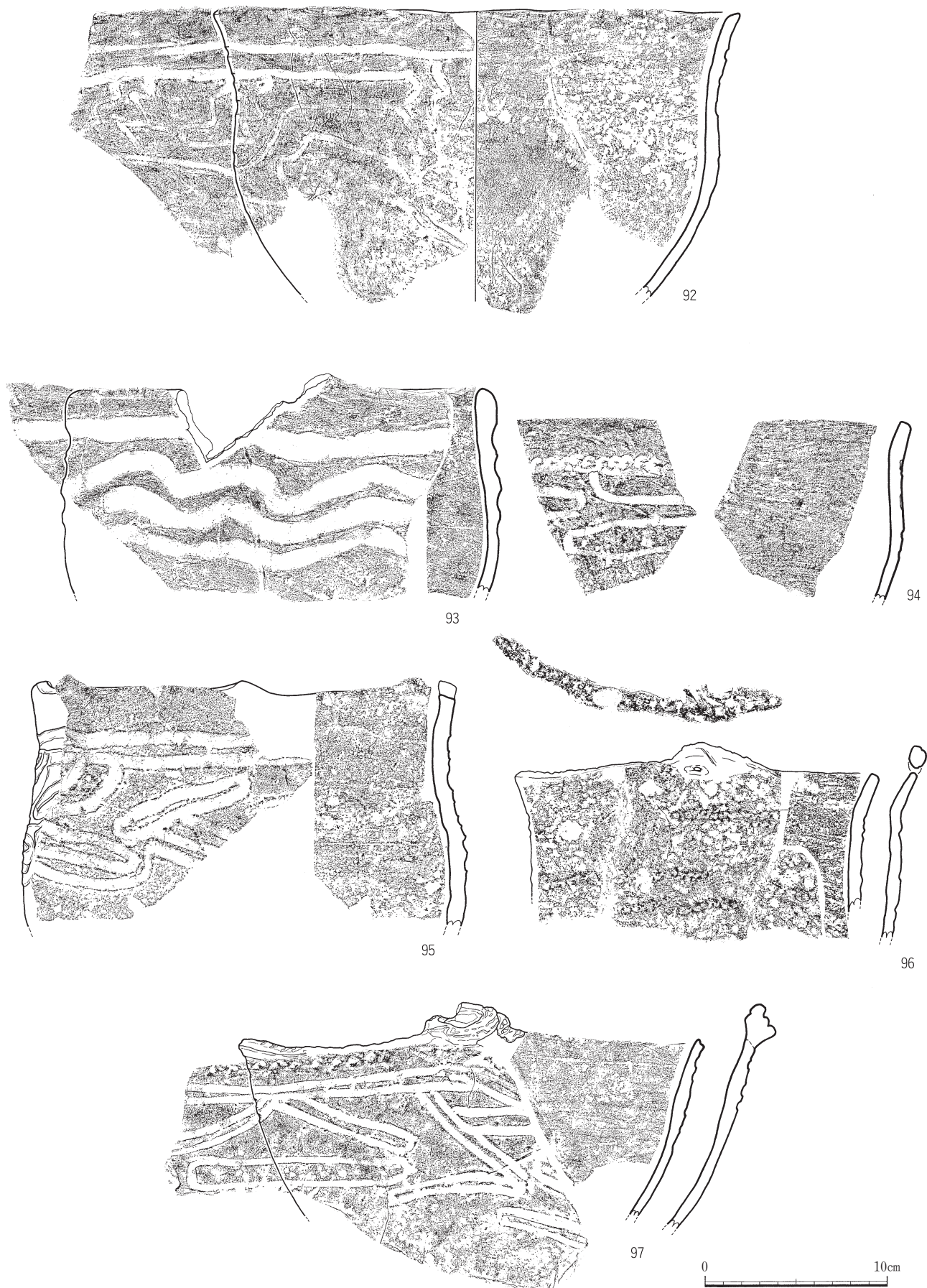
③Ⅱ類 181は口縁部直径よりも胴部



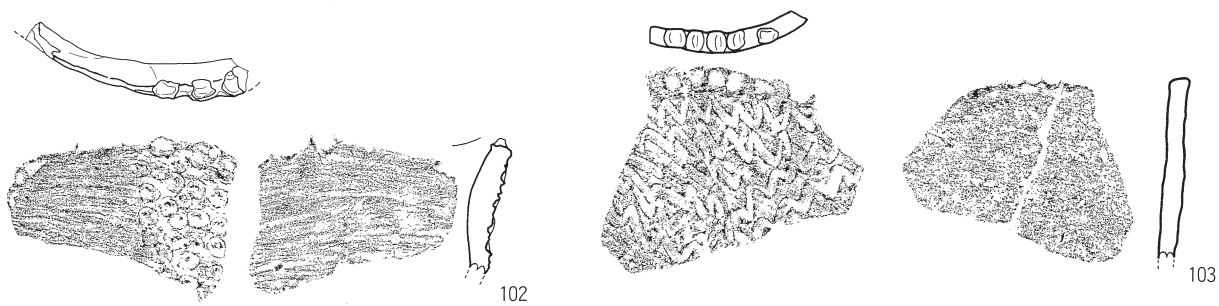
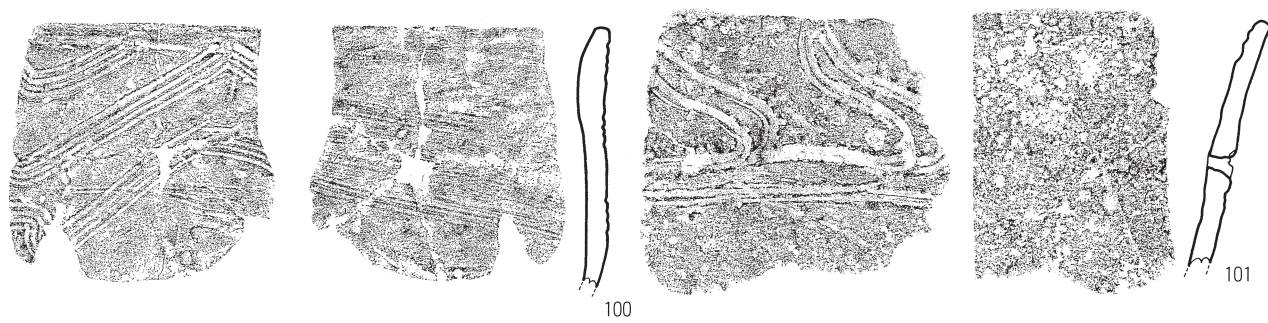
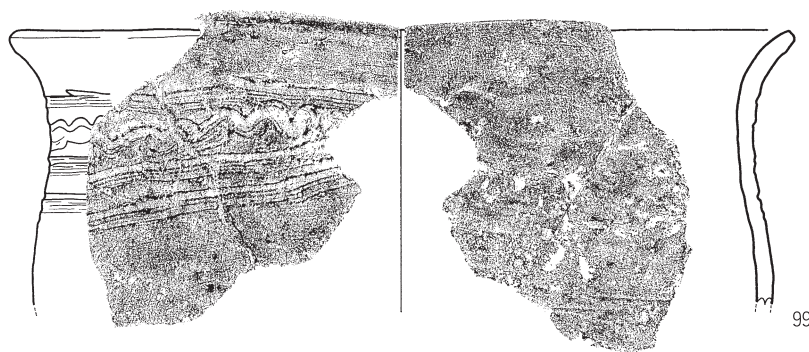
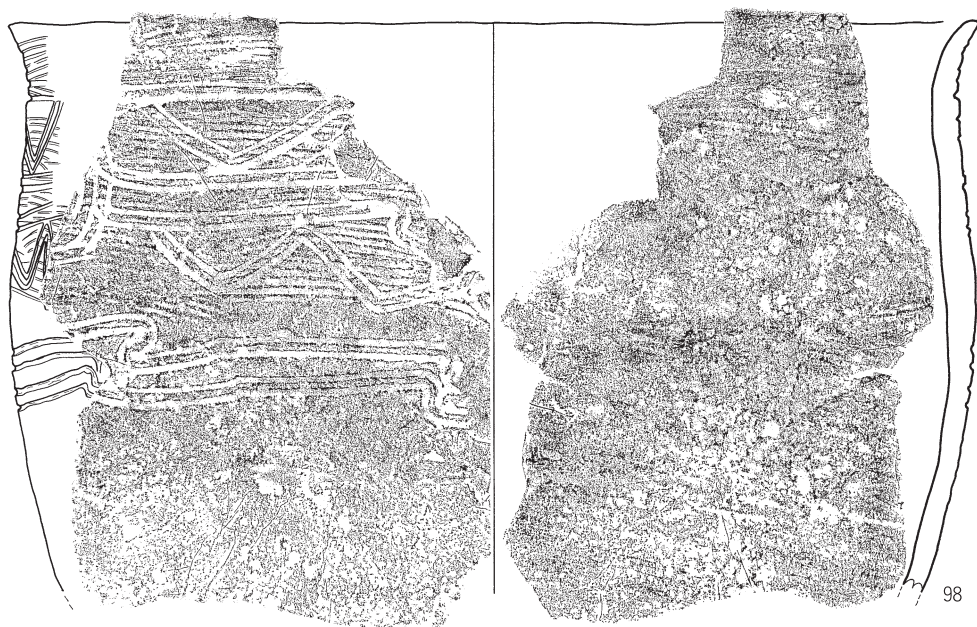
第91図 縄文土器 (24)



第92図 縄文土器 (25)

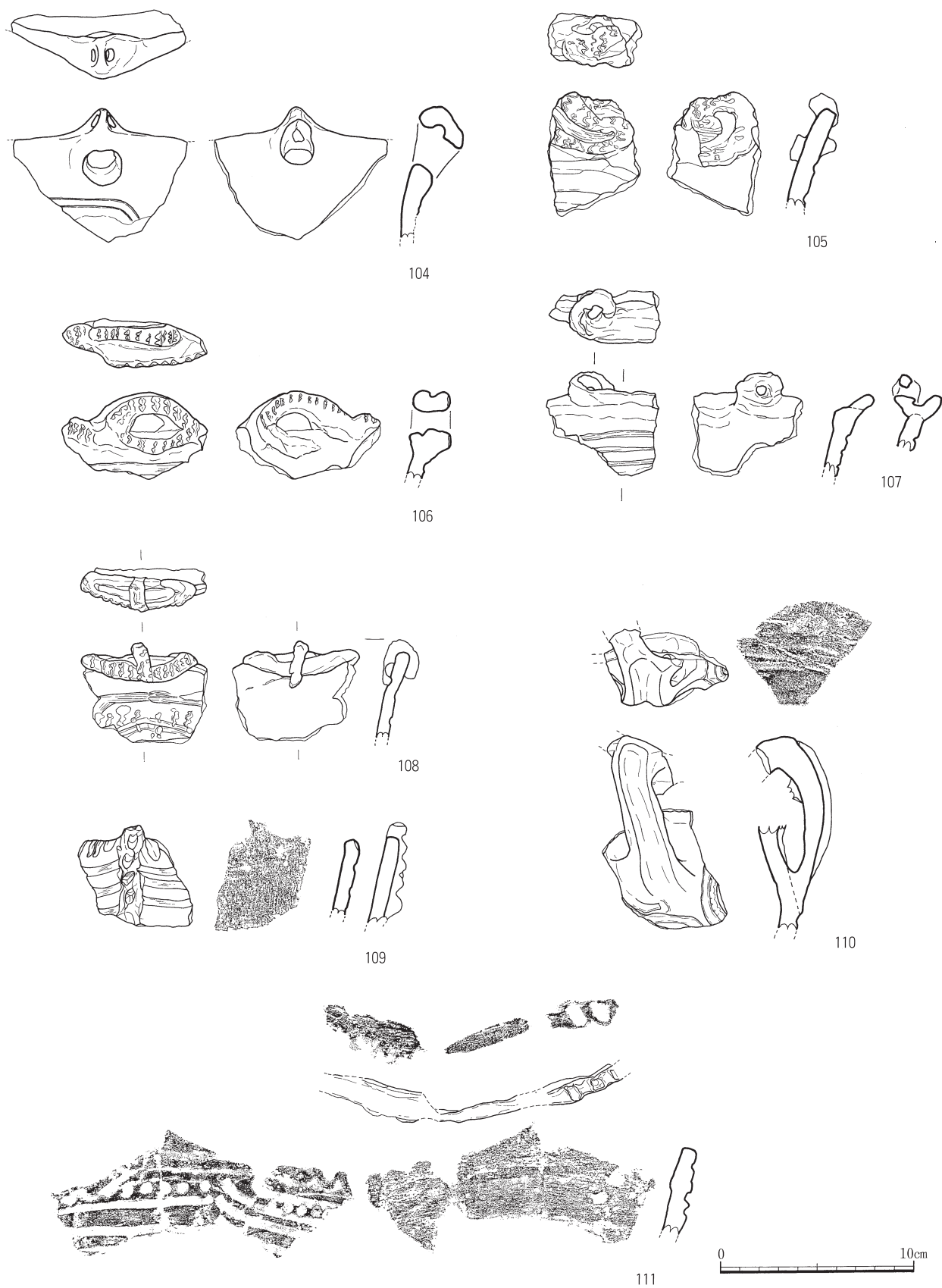


第93図 縄文土器 (26)



0 10cm

第94図 縄文土器 (27)



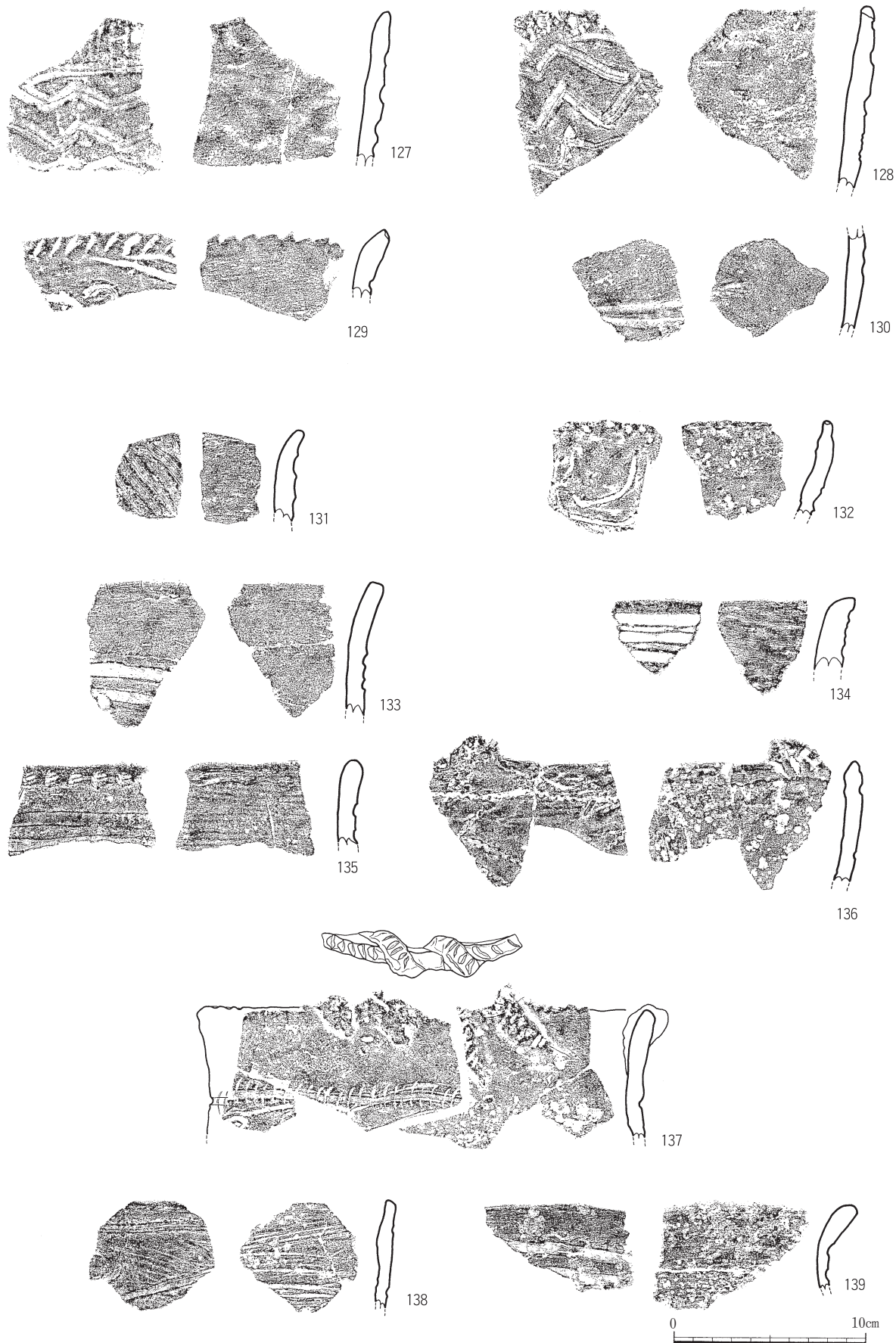
第95図 縄文土器 (28)



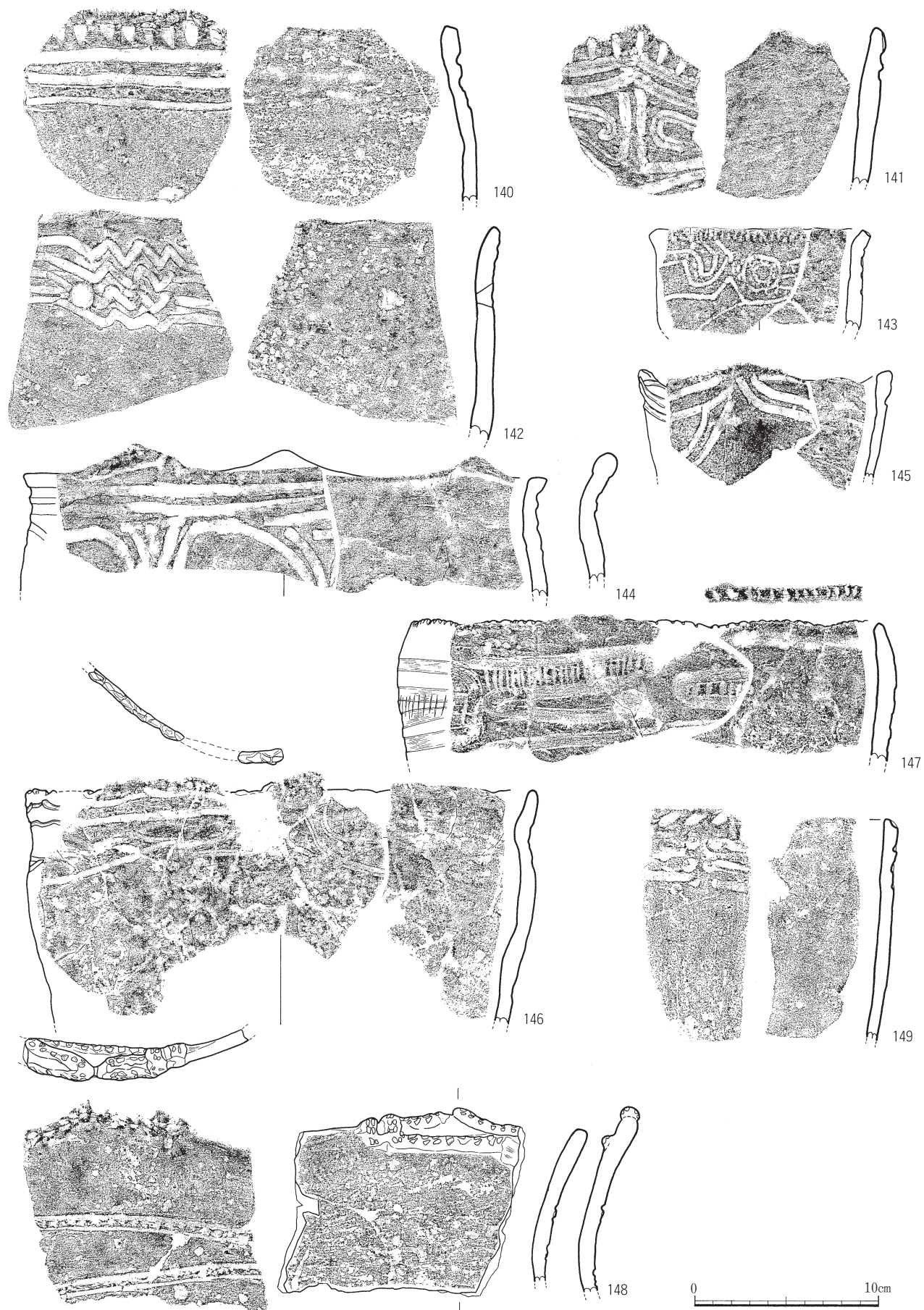
第96図 縄文土器 (29)

最大径の方が大きいもので、頸部がしまって口縁部は大きく外反する。口唇部を厚くふくらませ凹線を巡らす。3か所に頂部があると考えられ、頂部と頂部の中間にもアクセントをつける。これらの位置から磨消縄文を垂下させ頸部の帯状文につながる。その下に渦巻状の文様を起点とし、両側に斜位の磨消縄文を配する。

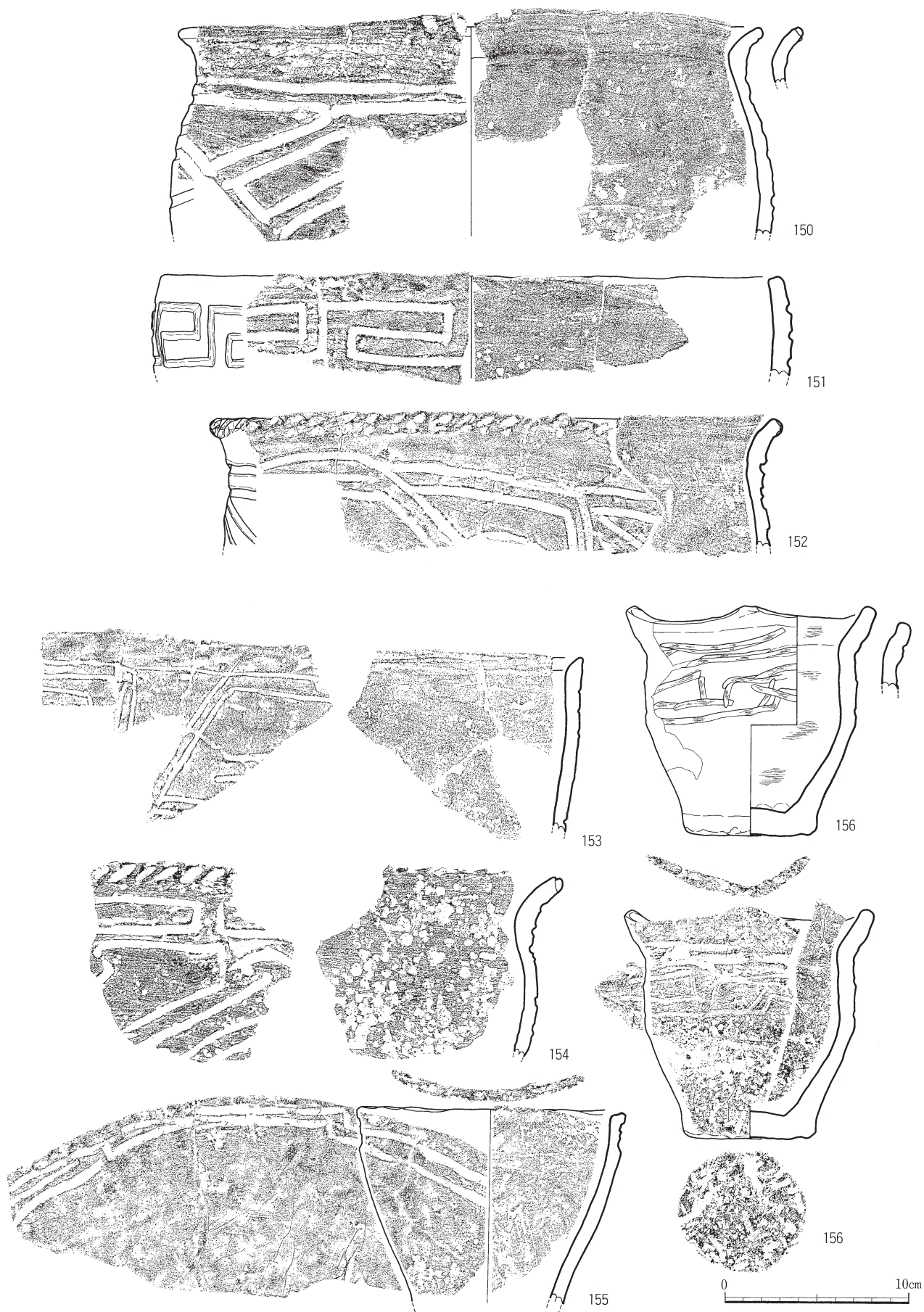
157～161, 167～169, 172～181は単節の縄文をころがすもので、右撚り（Z字撚り）と左撚り（S字撚り）がみられる。左撚り（S字撚り）が大半を占め、右撚り（Z字撚り）は172と179の2点のみ



第97図 縄文土器 (30)



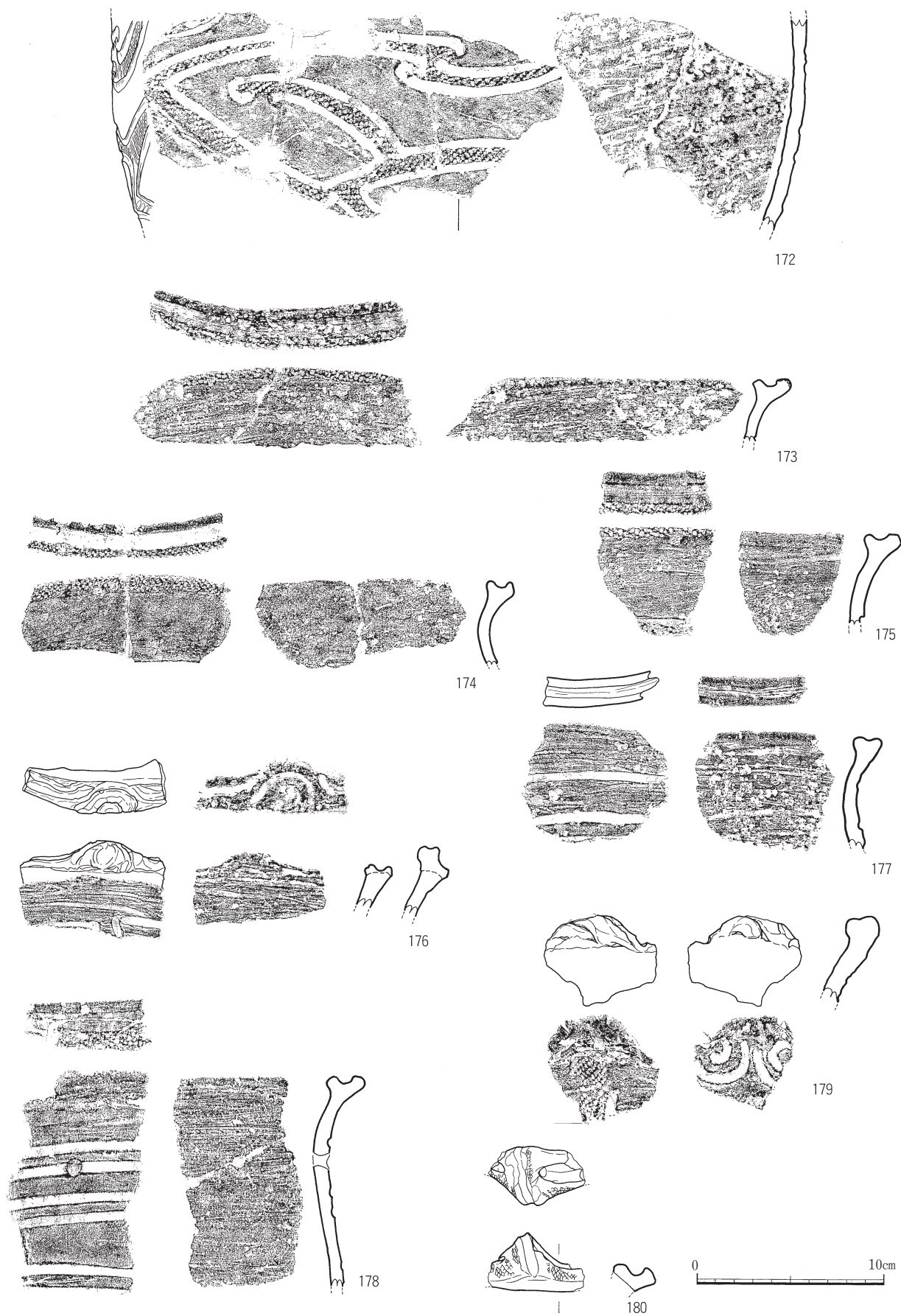
第98図 縄文土器 (31)



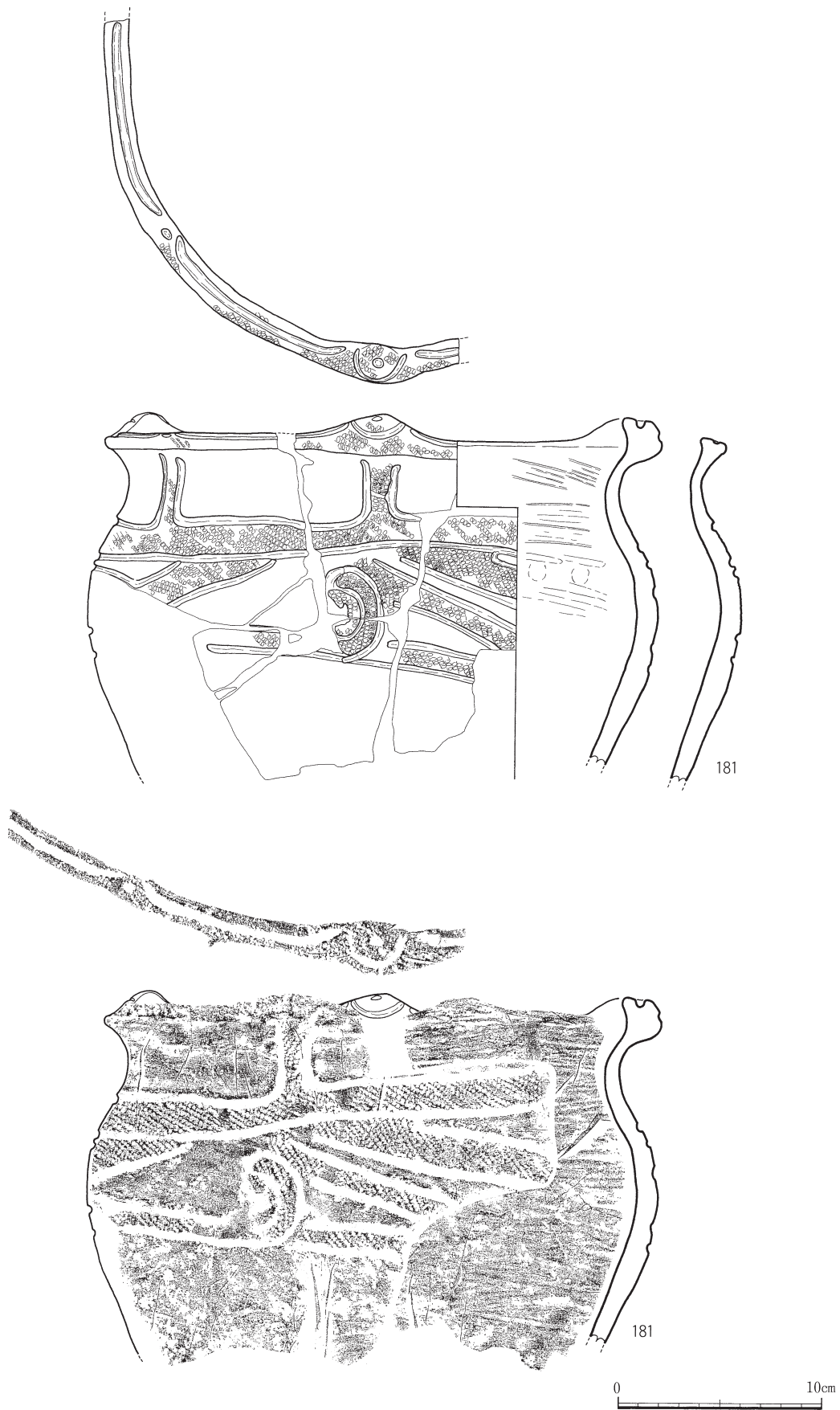
第99図 縄文土器 (32)



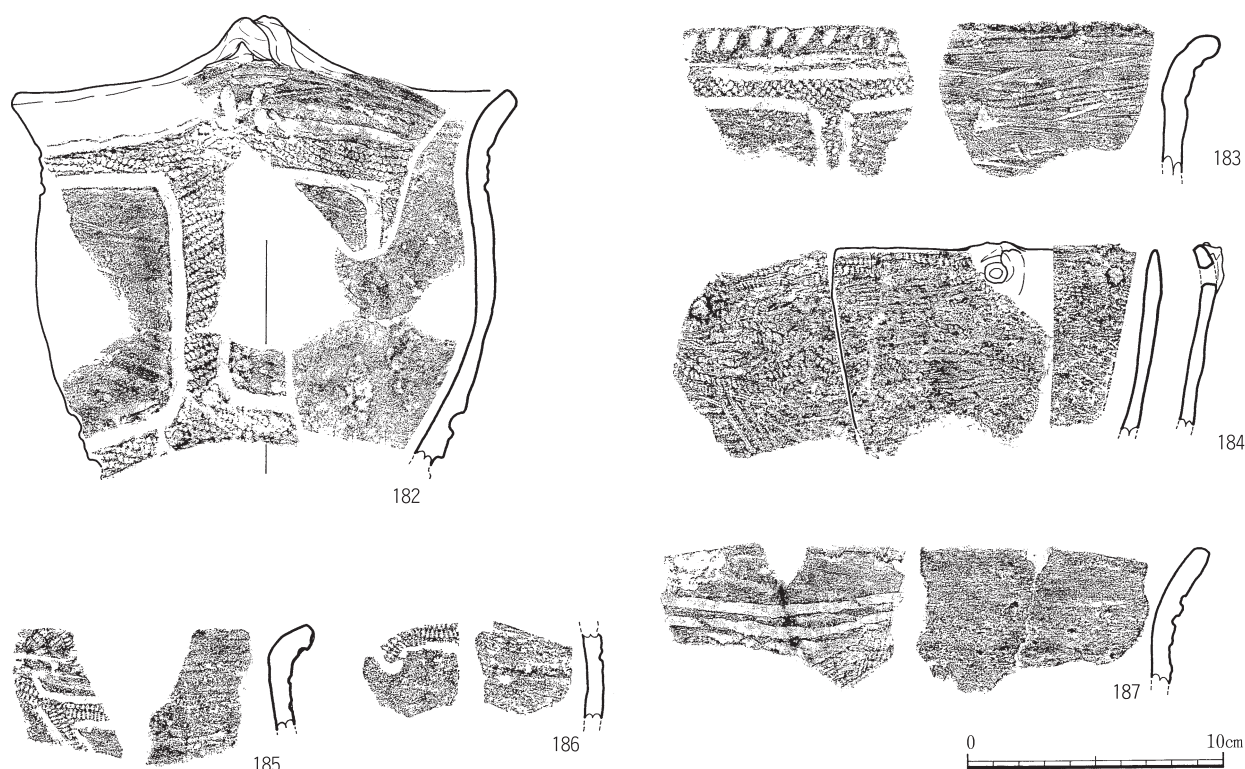
第100図 縄文土器 (33)



第101図 縄文土器 (34)



第102図 縄文土器 (35)

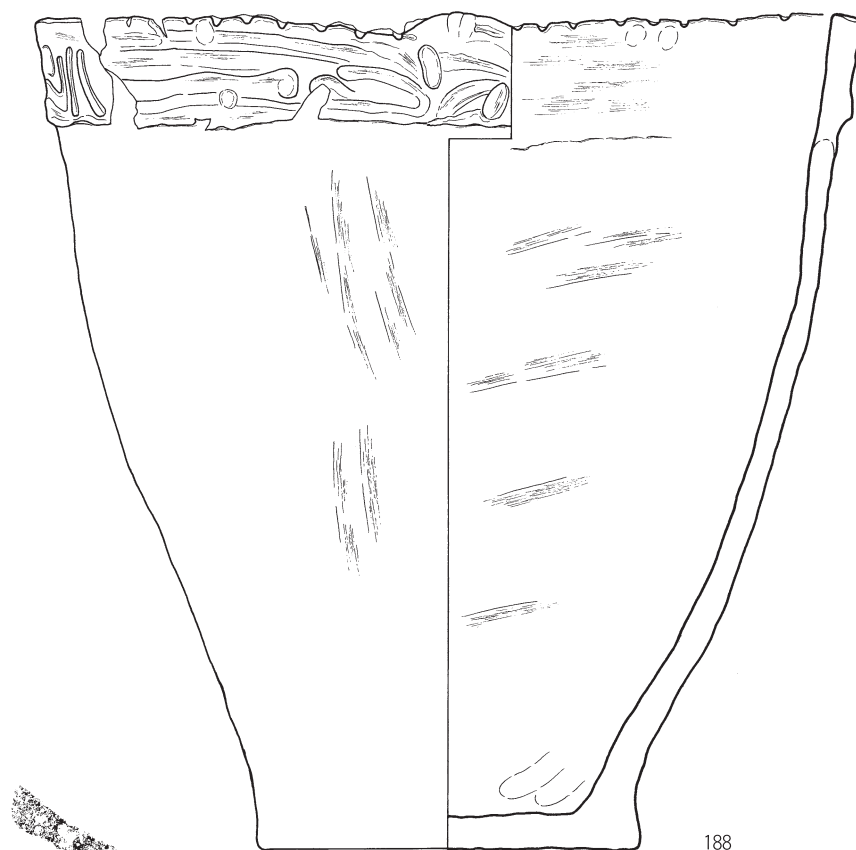


第103図 縄文土器 (36)

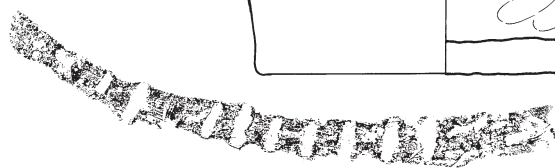
である。169は浅鉢状の器形に復元できるものではないかと考えられ、入組状の文様を多用している。162～166, 170・171は縄文はみられないが、器面の研磨や文様構成から磨消縄文と関係が強いものである。特に162～166は口縁部が大きく内湾した浅鉢に復元できるものであり、他の器形と異なる。口縁部の内側をややふくらませ、口唇部は尖りぎみに丸くおさめる。渦巻き状の文様の外側に沈線を施してある。器形および文様構成とも高知県松ノ木遺跡を標式とする土器に類似するが、色調や胎土は南九州的である。胎土については、小破片をプレパートにして清水芳裕先生にも確認していただいている。164には赤色顔料が付着している。

170は沈線内に円形の刺突を配するもので、錦江町（旧田代町）岩崎遺跡出土の肥厚した口唇部に凹線を施す土器に類例がある。また、沈線内に刺突する手法は志布志市（旧志布志町）中原遺跡の縄文施文土器にもあり、磨消縄文土器と一緒に入ってきた手法であることが窺える。同じような沈線内刺突をもつ171は、注口部分と考えられ、県内では加治木町干迫遺跡の加曽利式土器系統のものと、大口市大牟田遺跡と垂水市柊原貝塚の鳥井原式土器から三万田式土器の段階にかけてのものと、それに加世田市上加世田遺跡の注口土器が知られるのみである。184～187には巻貝をころがした疑似縄文が施されるものである。瀬戸内地方ではヘナタリが多用されるが、これらがヘナタリそのものかどうかは断定できない。

④Ⅲ類 194と195には胎土に滑石が含まれており、より西海岸的な様相を示す。189は指頭状の凹線によるもので、阿高式土器に近いものである。190と191は土器製作の際、やや乾燥が進んだ時点で施文したと考えられ、彫刻したような文様が描かれる。この様な施文技術も西海岸の南福寺式土器

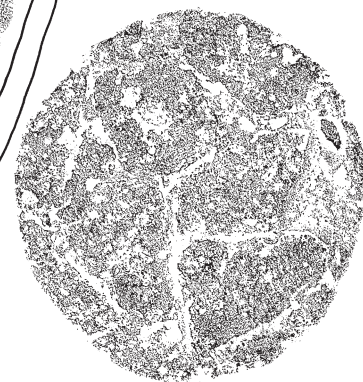


188

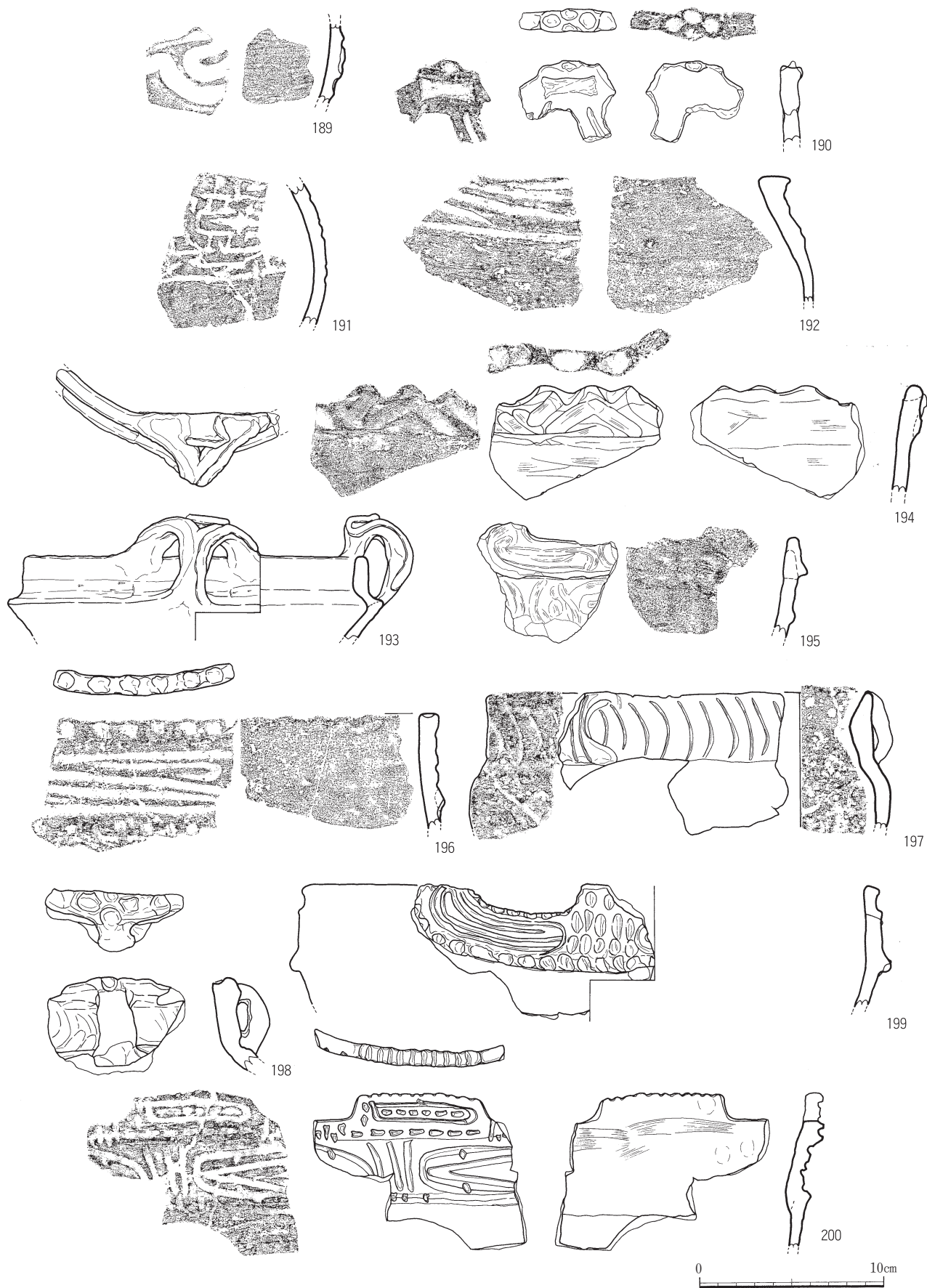


0 10cm

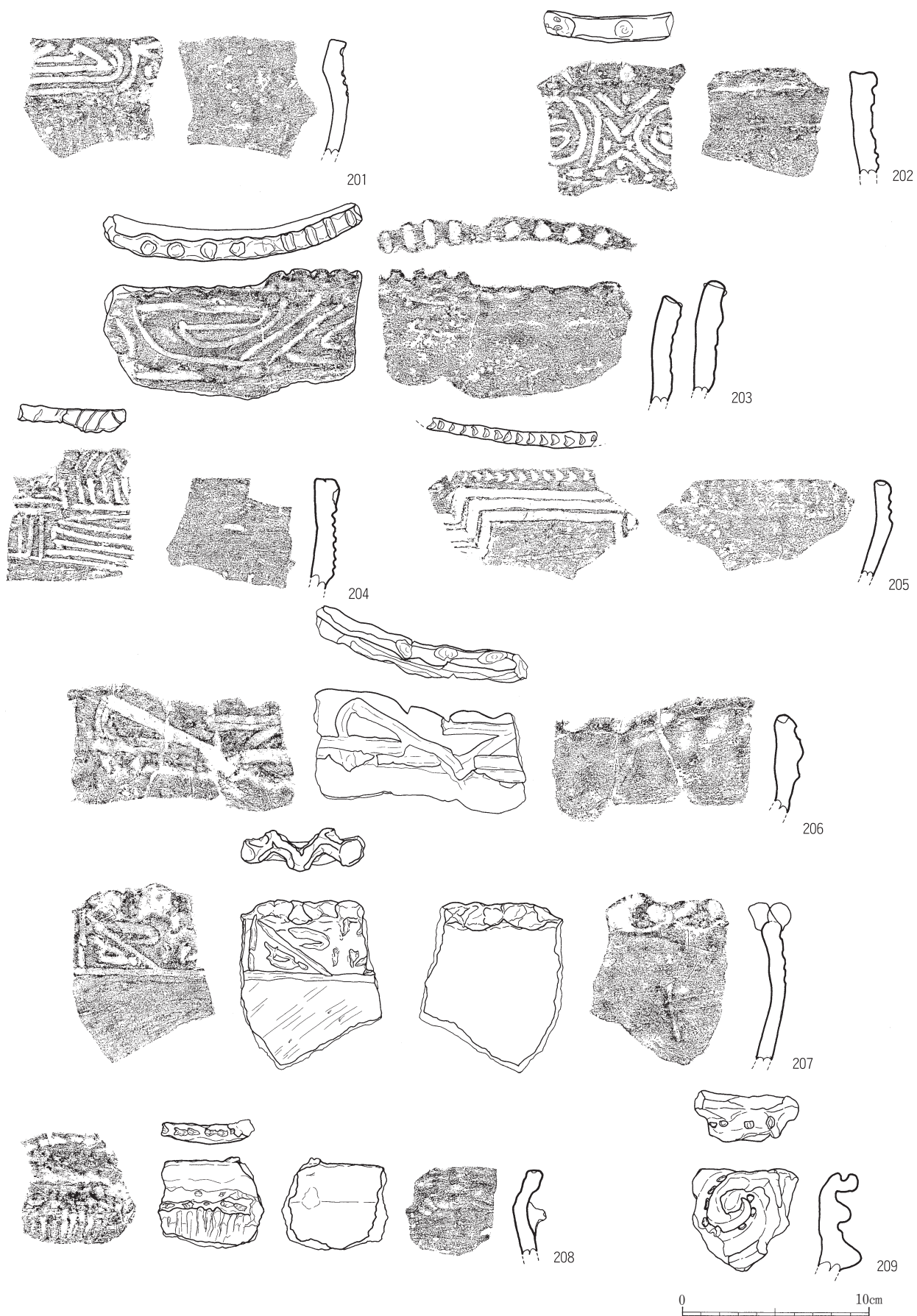
188



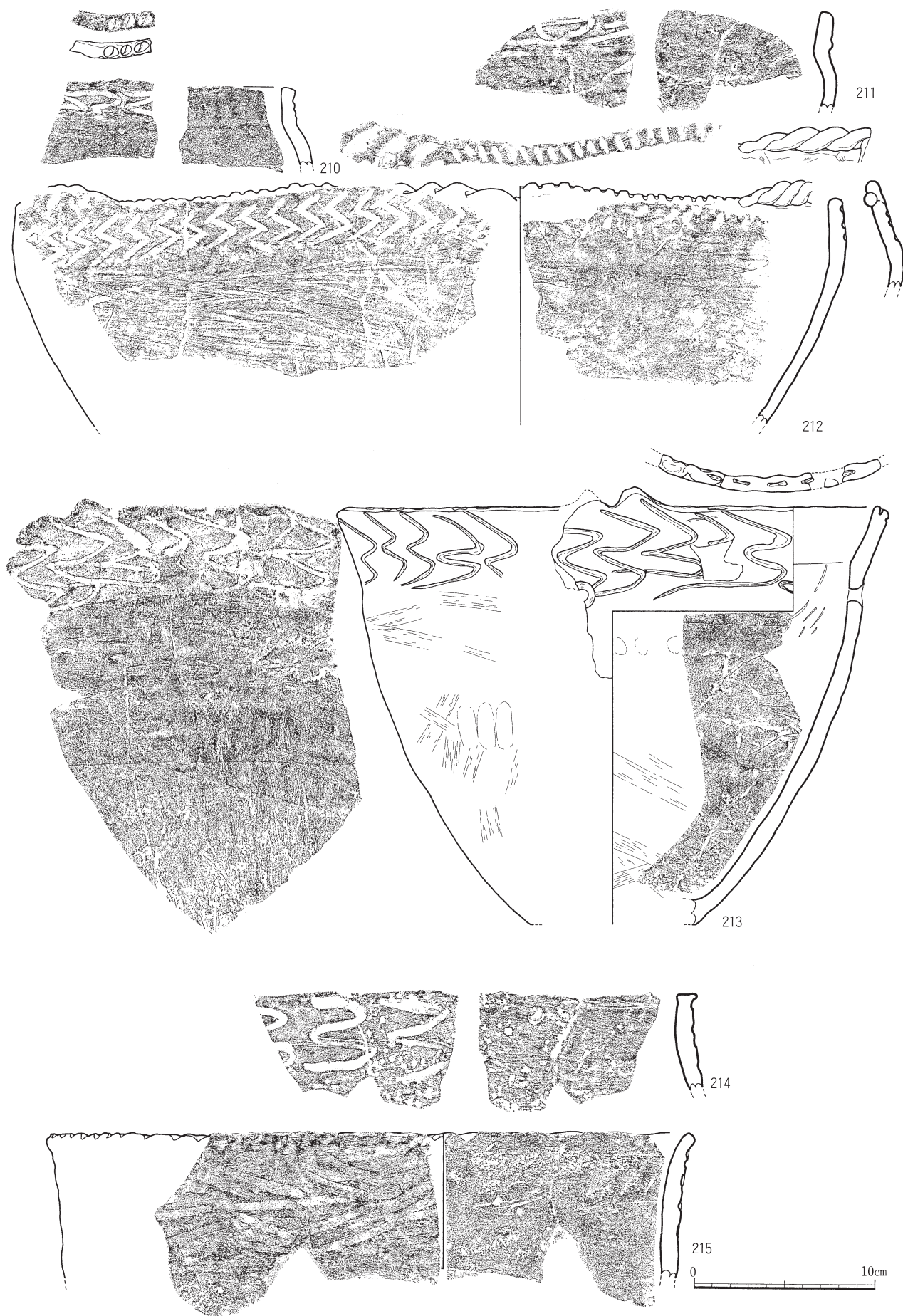
第104図 縄文土器 (37)



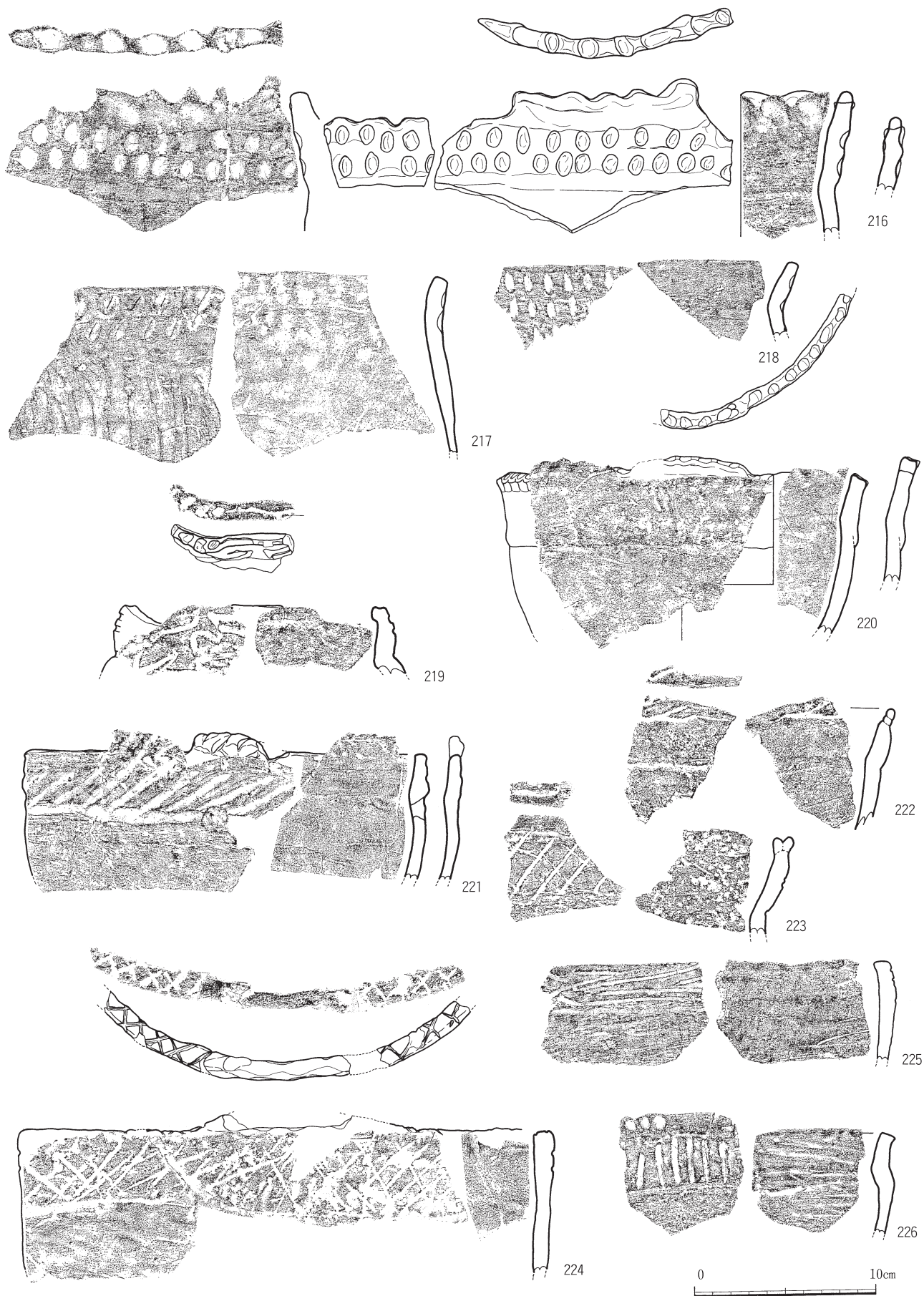
第105図 縄文土器 (38)



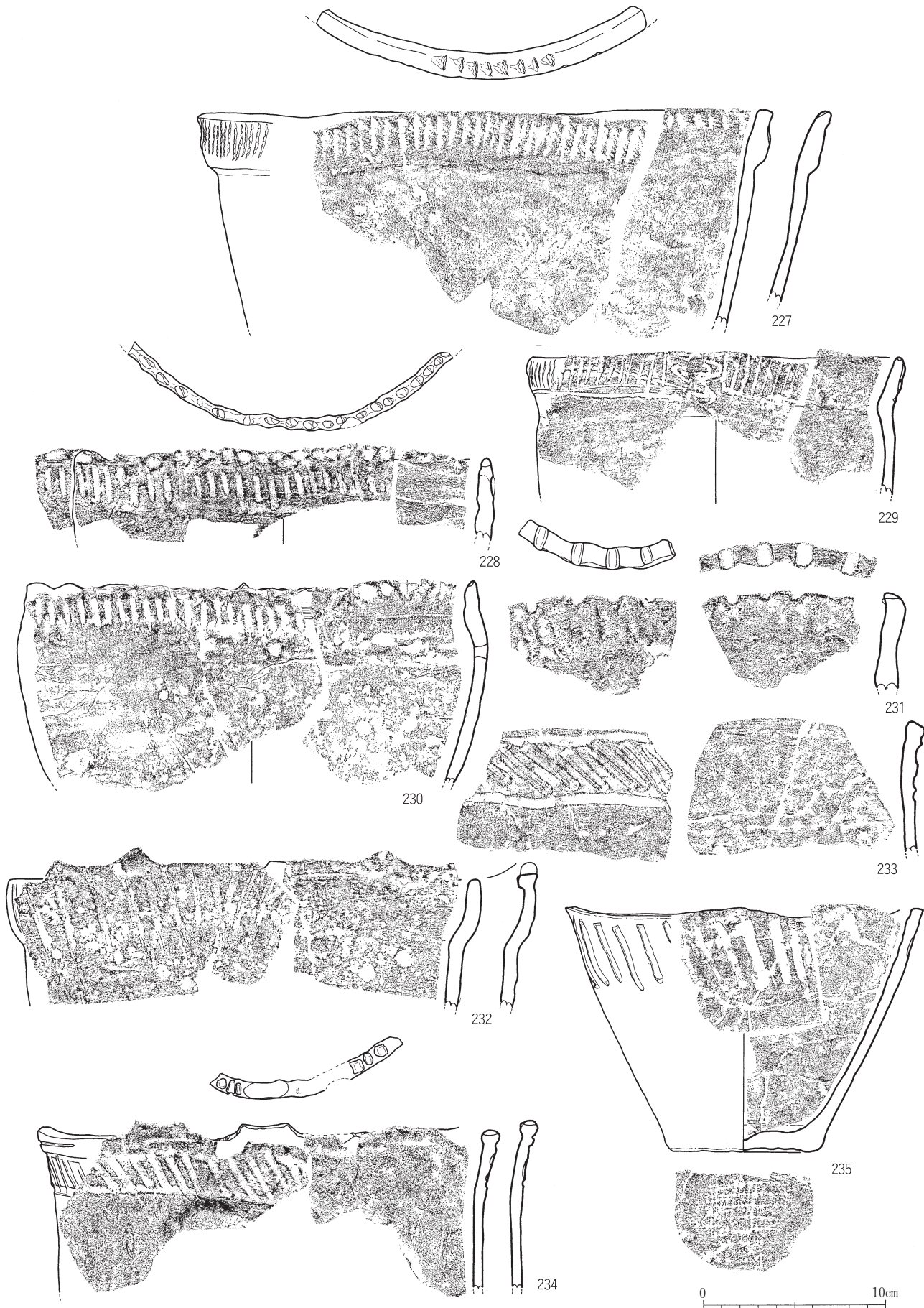
第106図 縄文土器 (39)



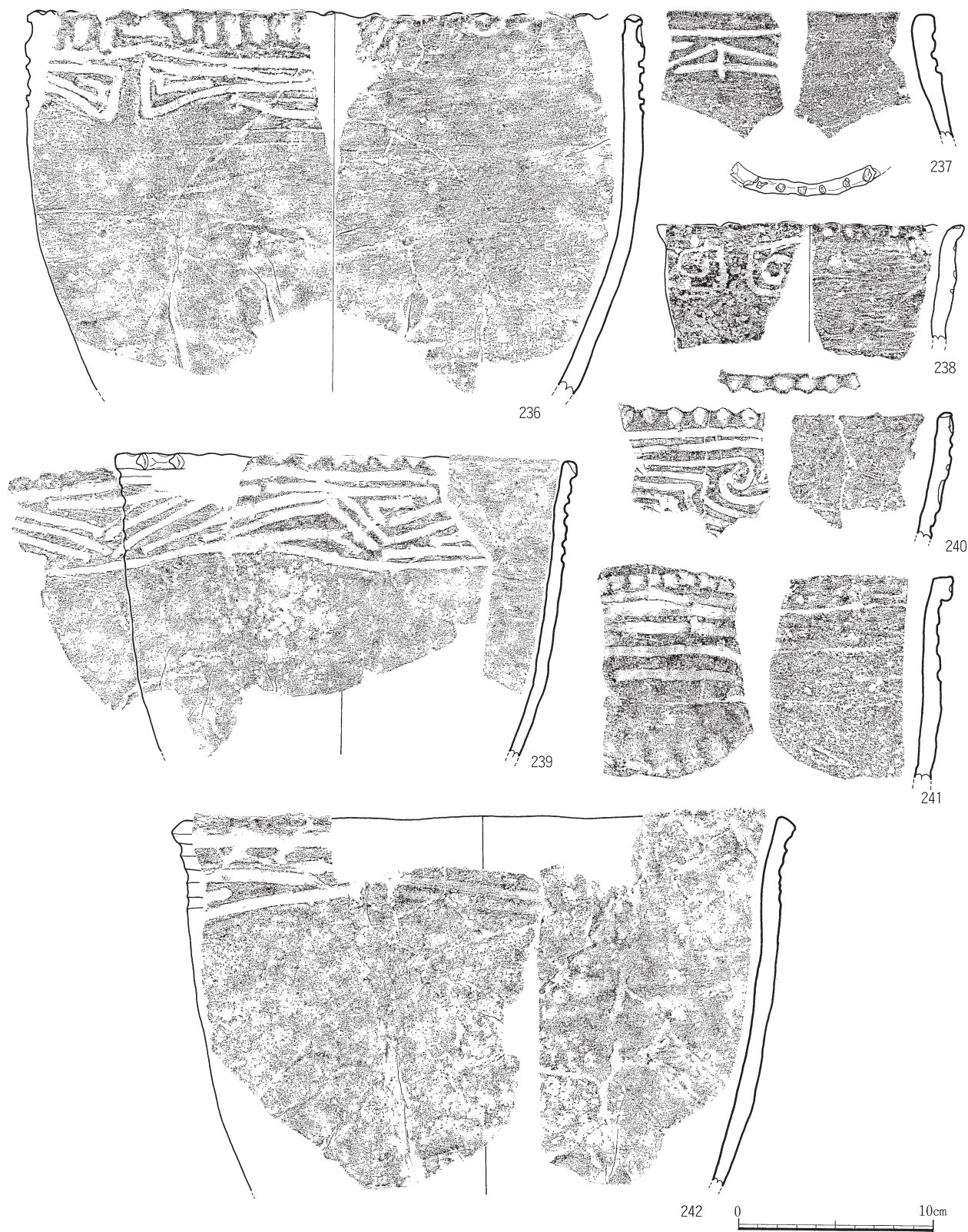
第107図 縄文土器 (40)



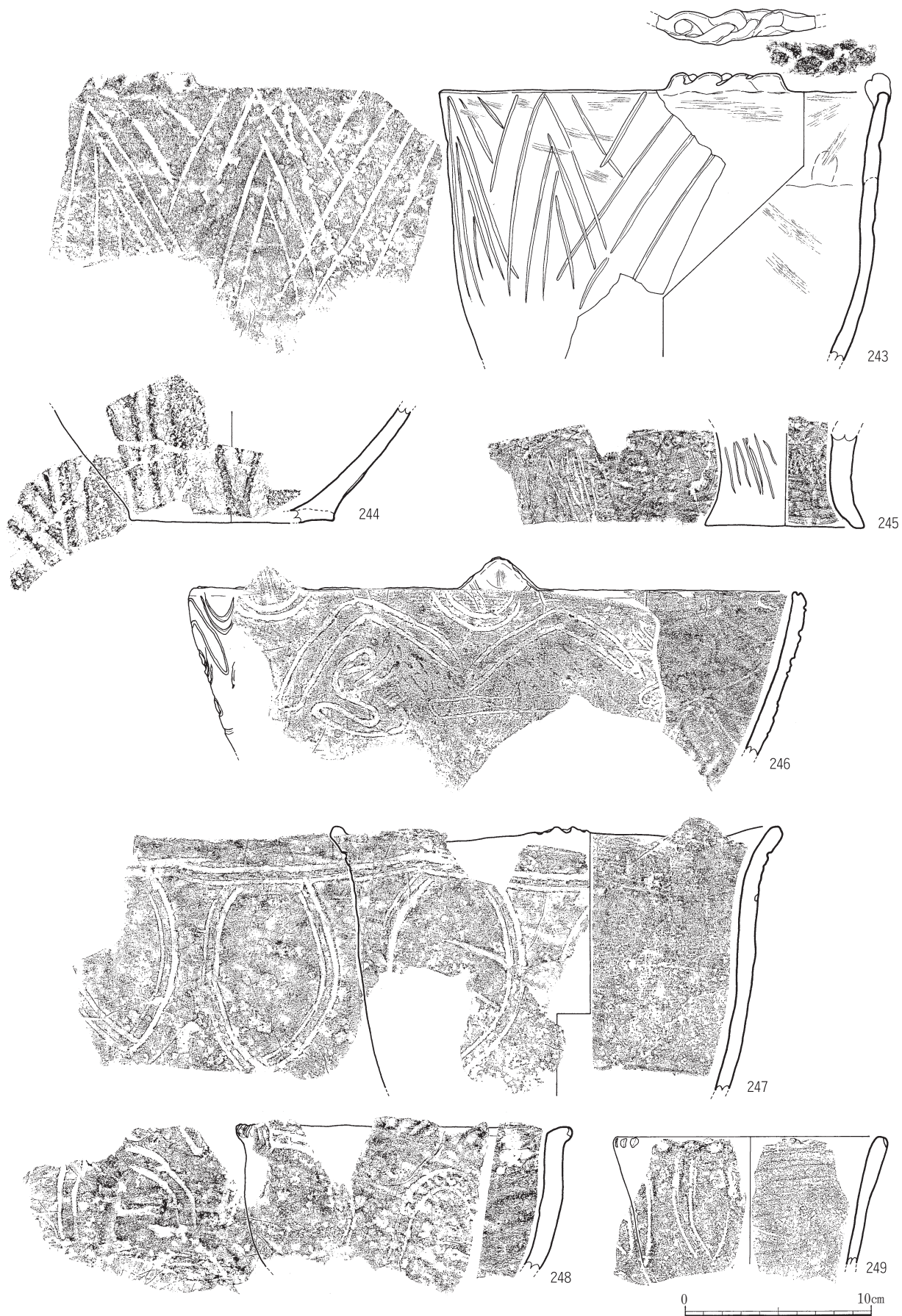
第108図 縄文土器 (41)



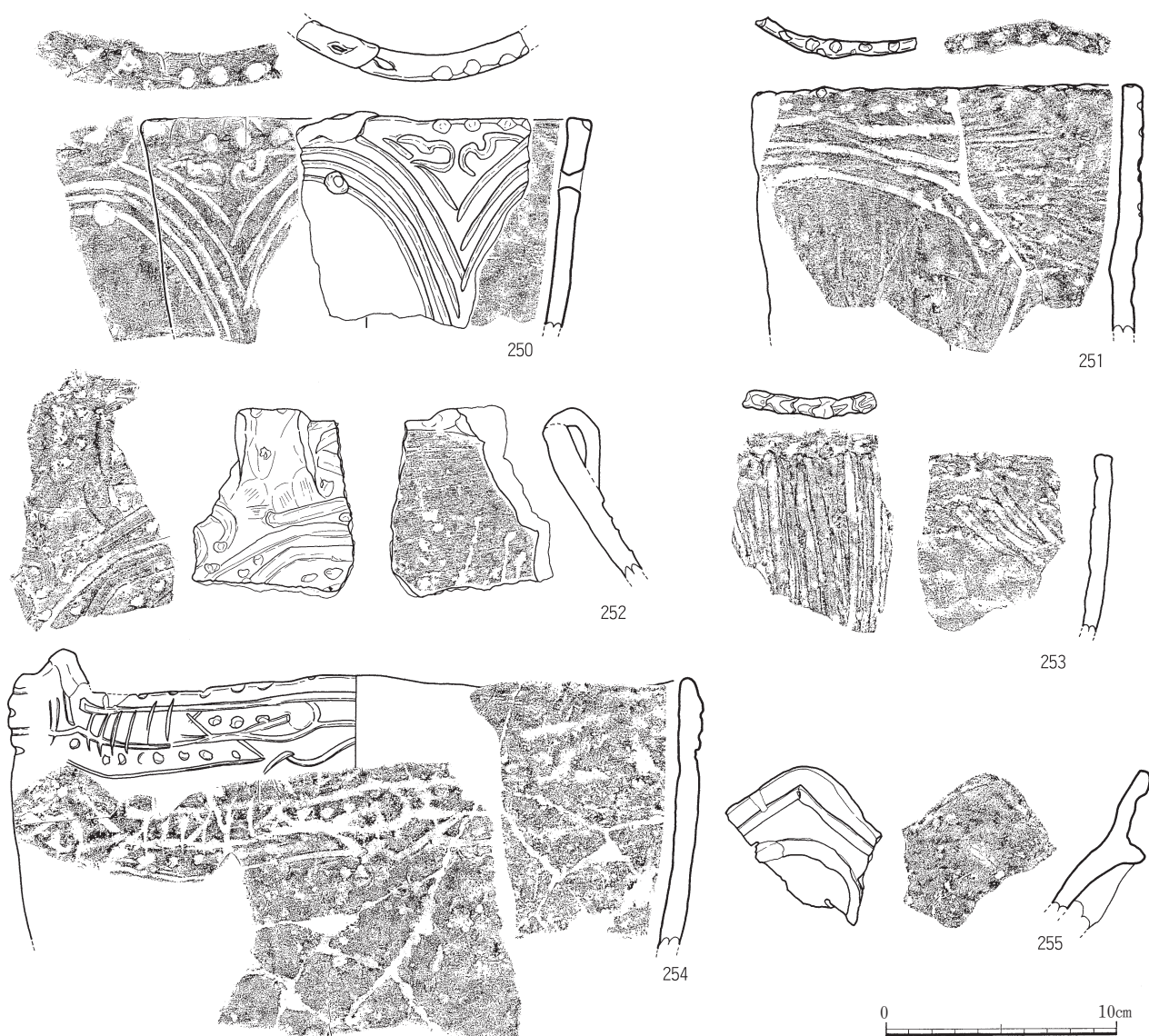
第109図 縄文土器 (42)



第110図 縄文土器 (43)



第111図 縄文土器 (44)

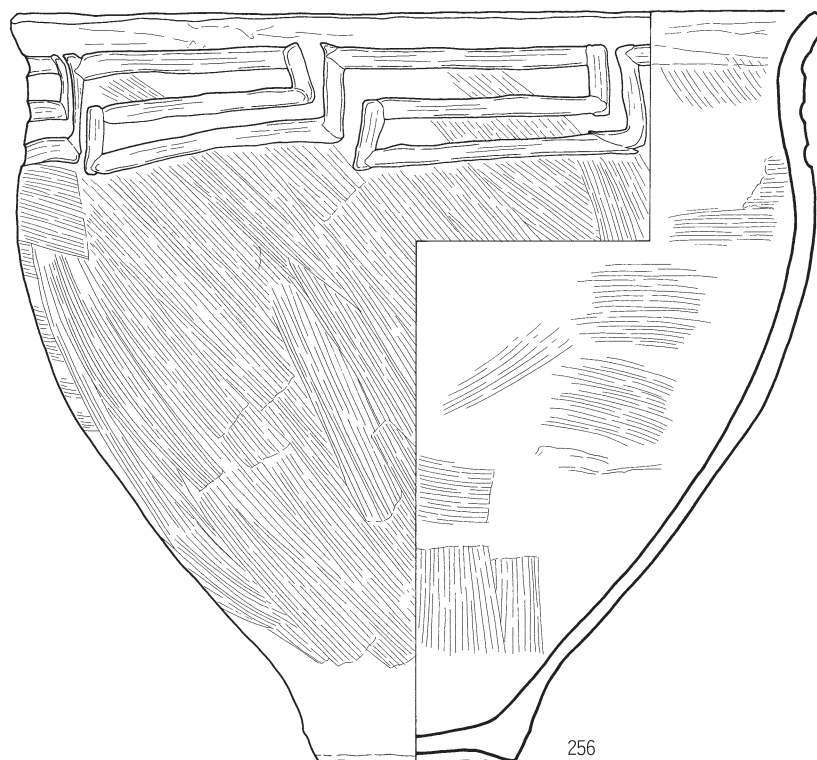


第112図 縄文土器 (45)

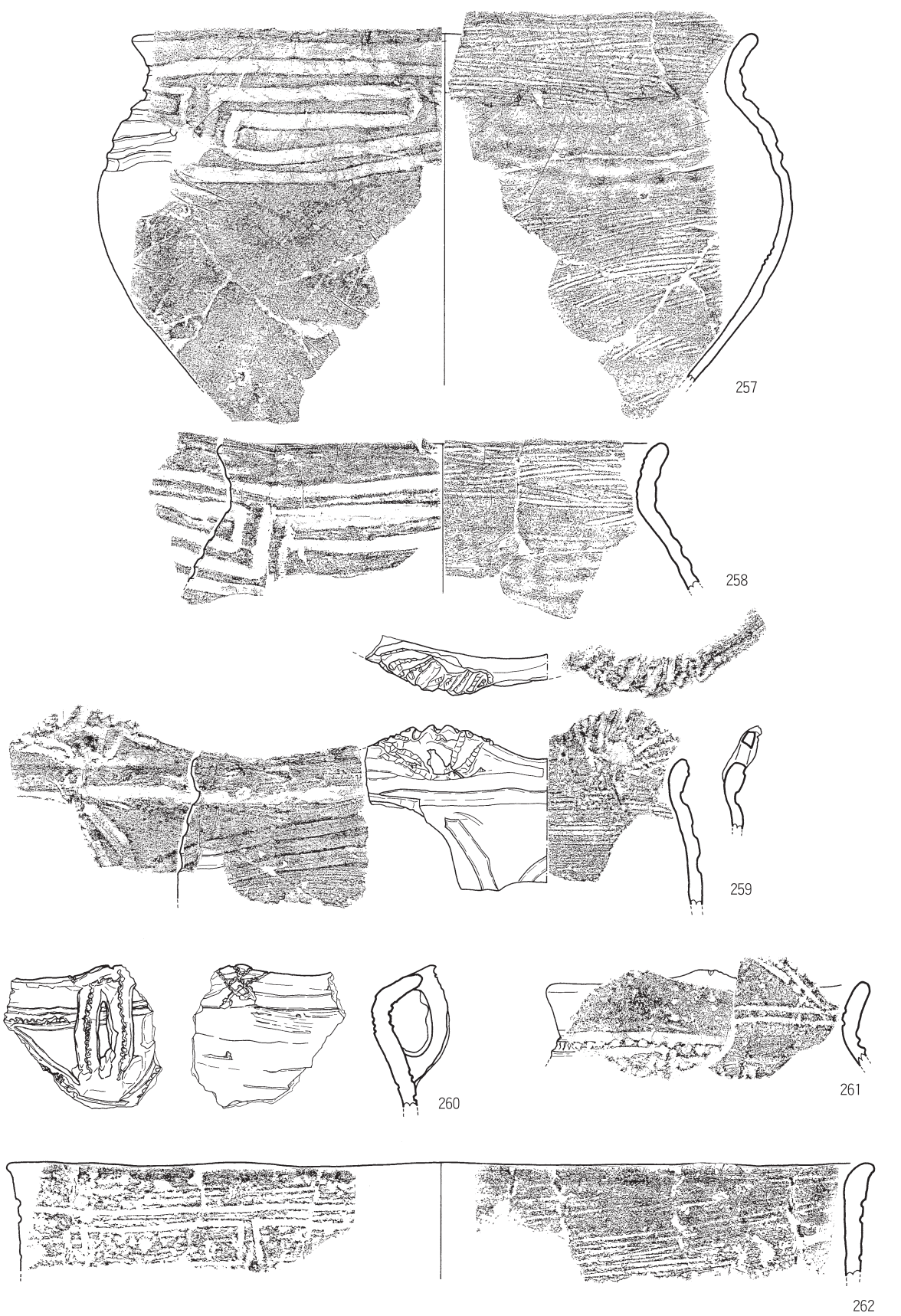
に特有なものである。188は安定した底部から外傾する胴部に至り、口縁部も直口する。口縁部は肥厚し、口唇部は平に面とりし、これらの面に文様もしくは刻目を施す。胴部外面の器面調整がケズリによる点も南福寺式土器の特徴である。口径は32cmで器高も32cmを測り、底径はその半分の15cmと安定している。

216と217は指頭による凹点をもつもので、凹点内に爪痕もみられる。212は基本的には南福寺式土器と同様であり、文様の「S」字文が角張って描かれる点と2本のねじり紐による頂部をもっている点に特徴がある。また、胎土に滑石は含まれず、色調が黒っぽい点が西海岸側の南福寺式土器と異なる。213は口縁部の肥厚はなく、内面に屈曲部の稜がみられるものである。文様の「S」字文はメリハリがなく統一性に欠け、器形は胴部が内湾し安定性に欠ける底部をもつ。

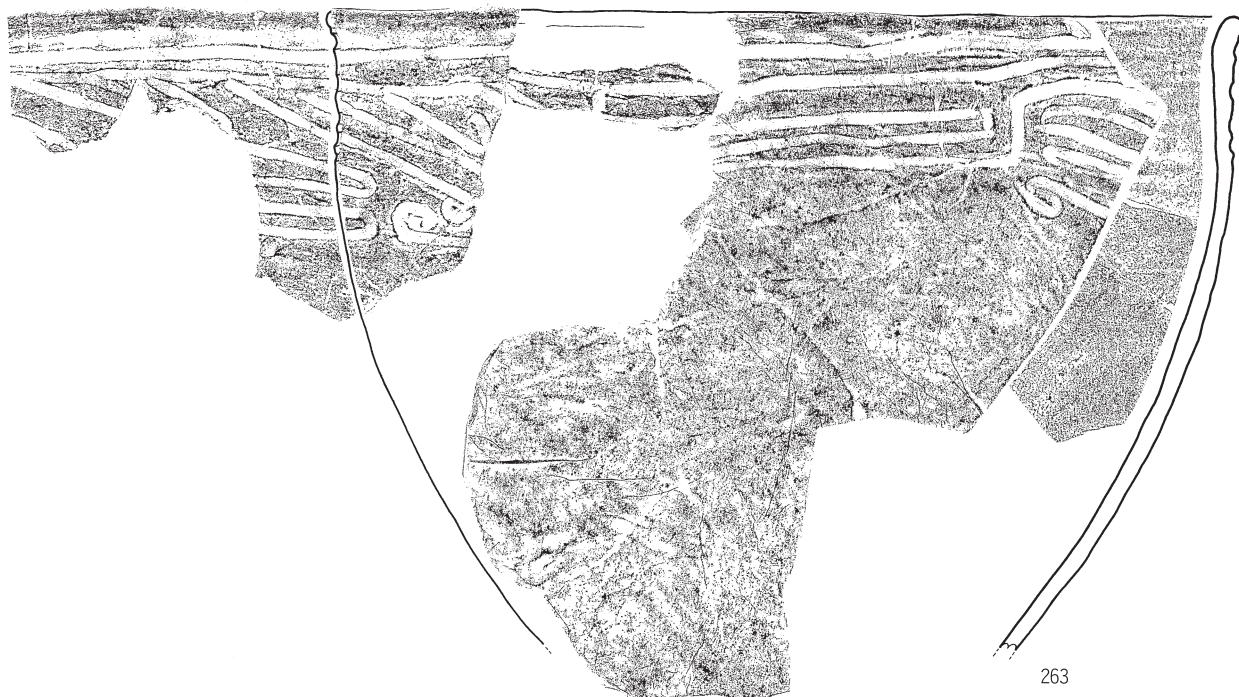
243～252は胴部下半まで文様を描くものであり、綾杉状あるいは紡錘状の曲線文様がみられる。南福寺式土器の特徴からは大きく離れるものであるが、霧島市（旧牧園町）九日田遺跡の住居跡から出土した土器に近く、この類に含めてある。224～235は胎土に火山ガラスが多く、色調も黄色味



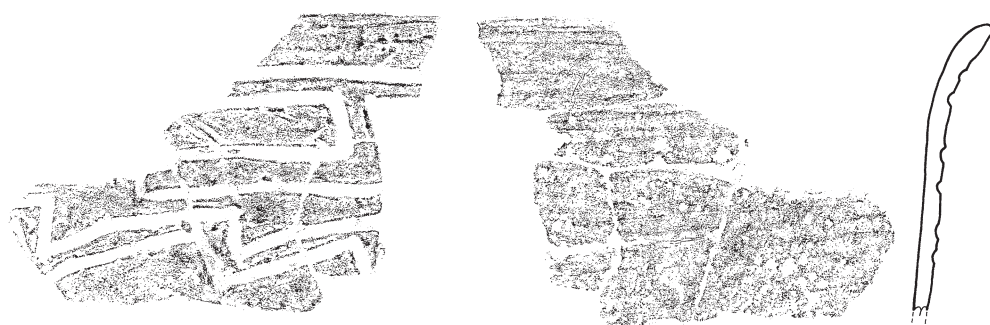
第113図 縄文土器 (46)



第114図 縄文土器 (47)



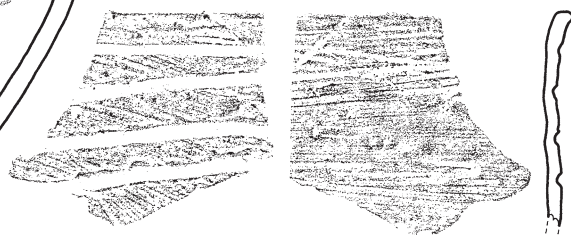
263



264



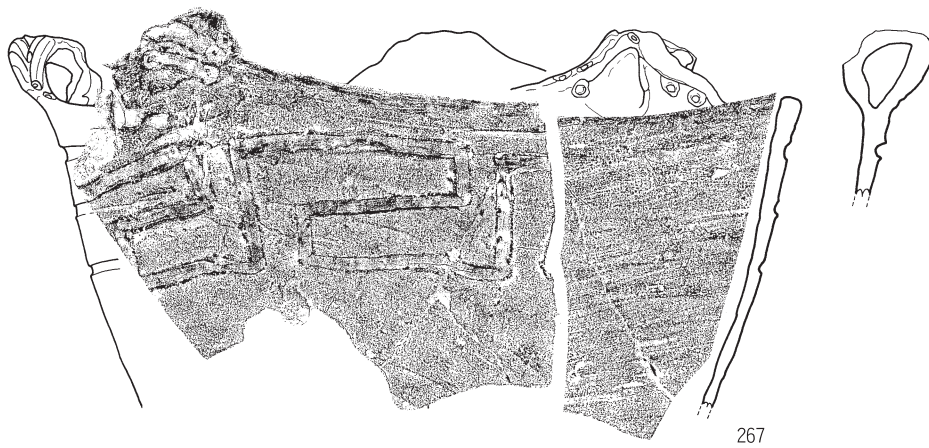
265



266



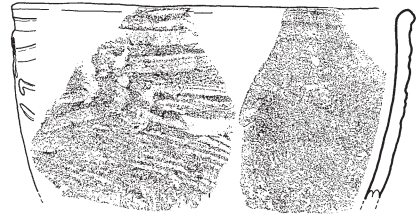
第115図 縄文土器 (48)



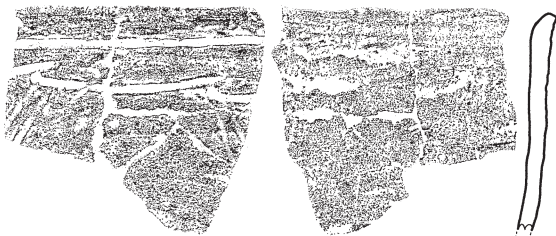
267



268



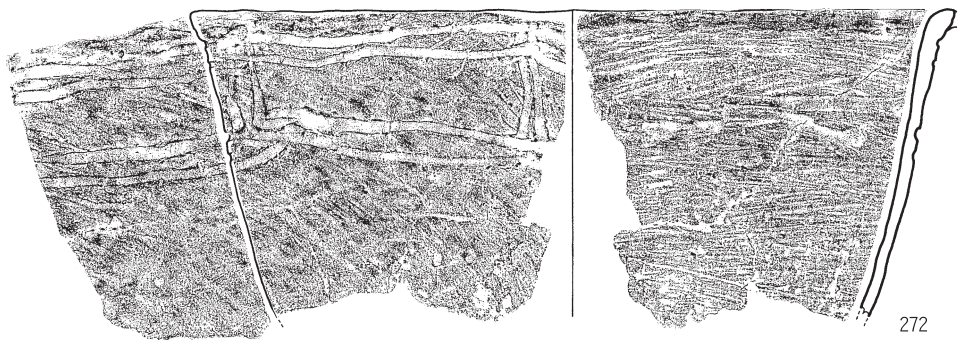
269



270



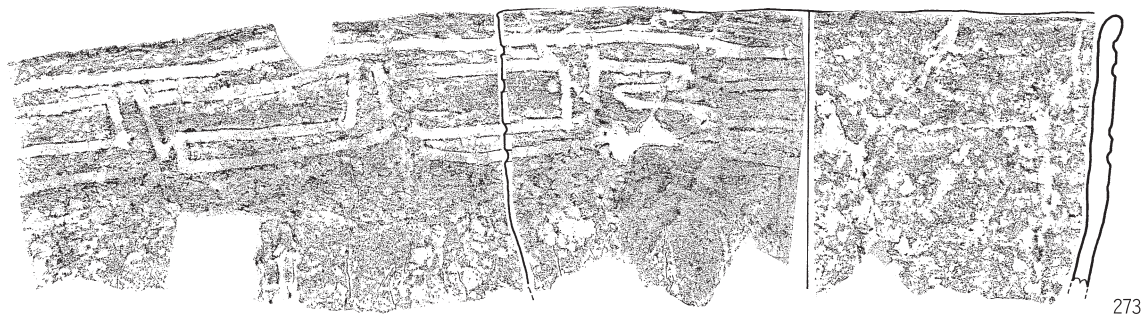
271



272

第116図 縄文土器 (49)

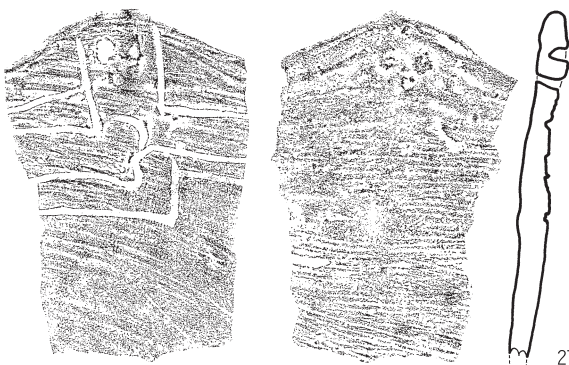
0 10cm



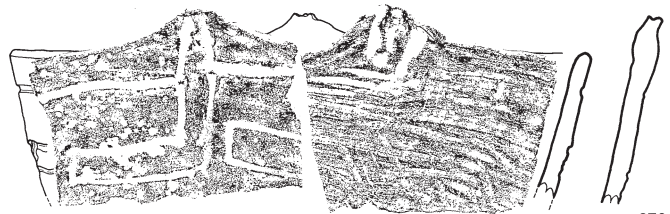
273



274



275



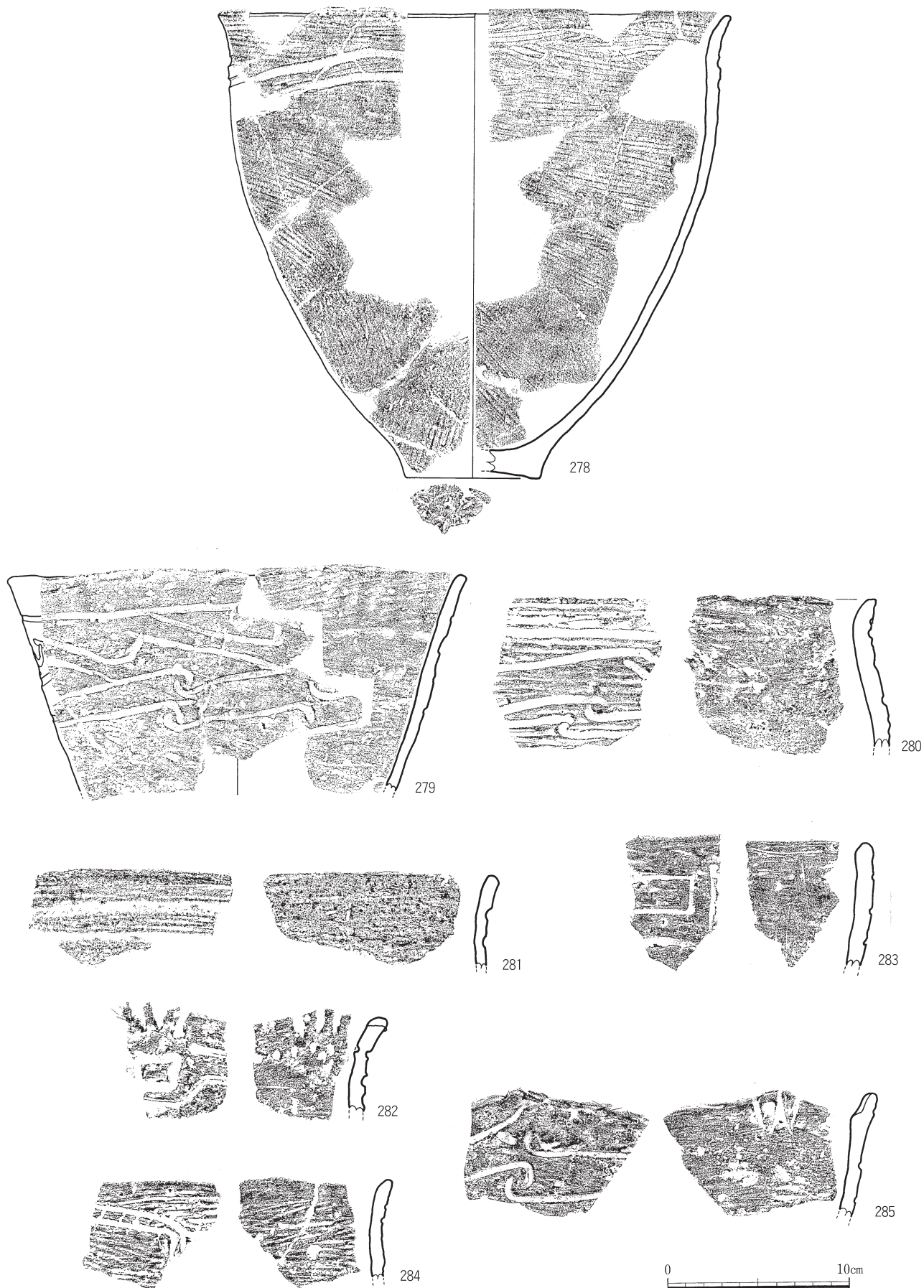
276



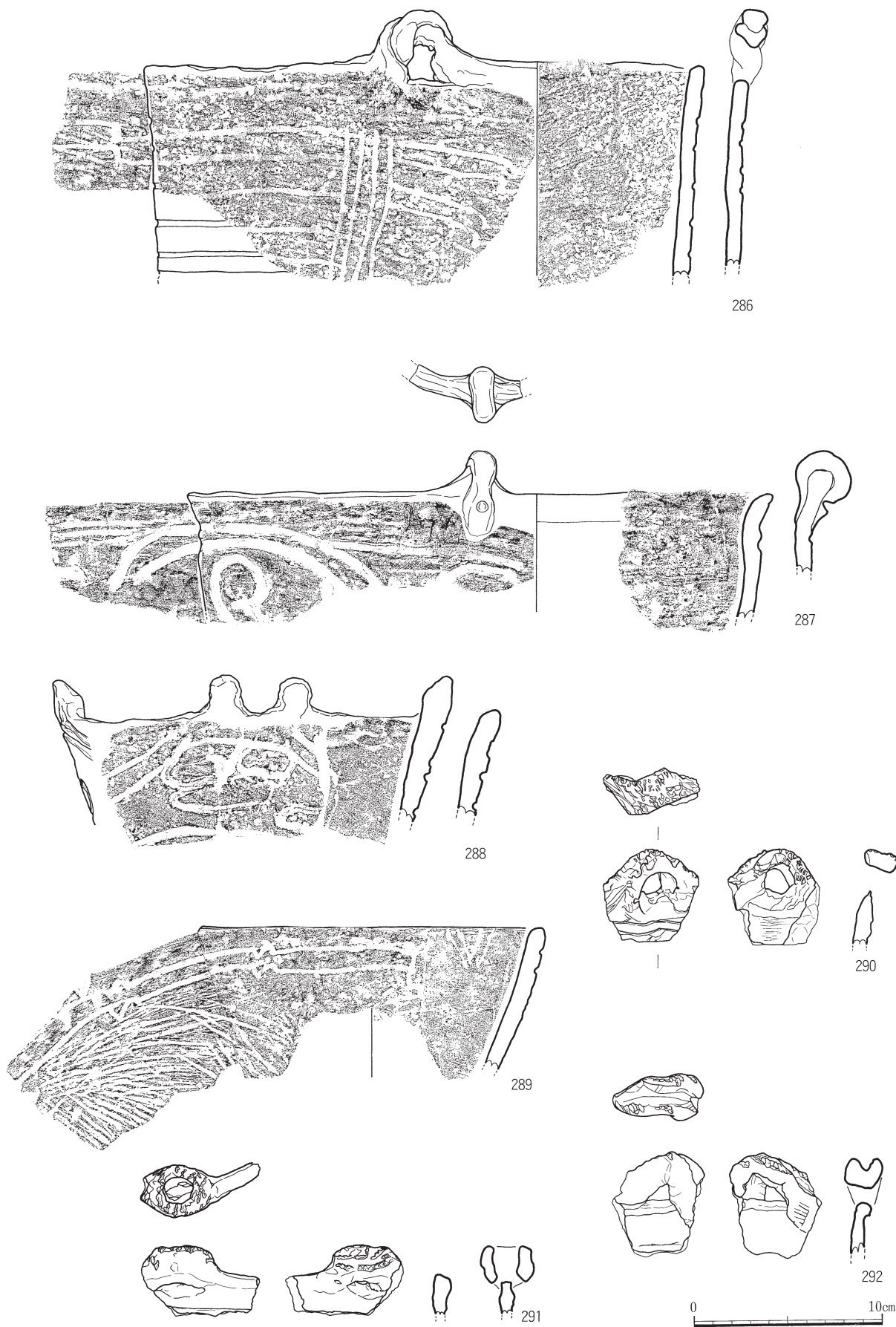
277



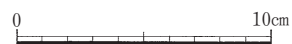
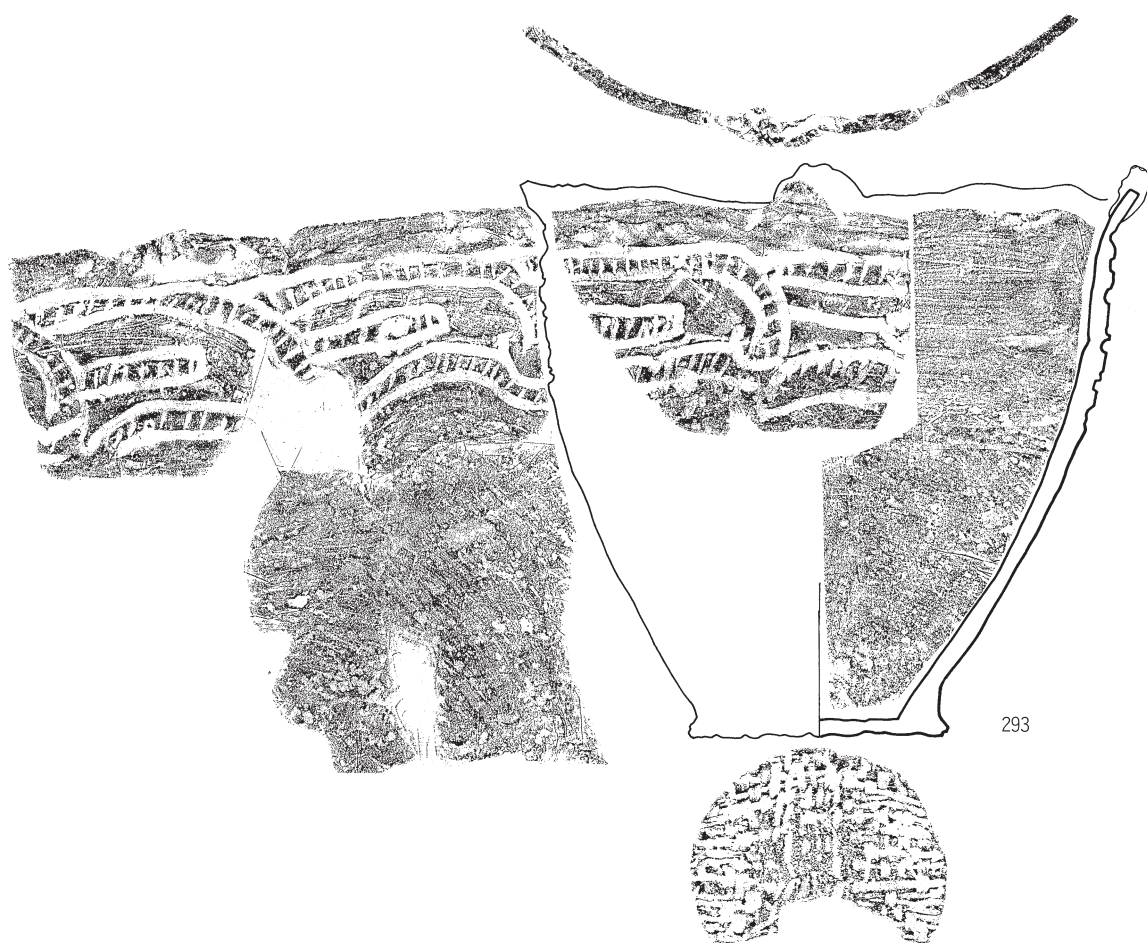
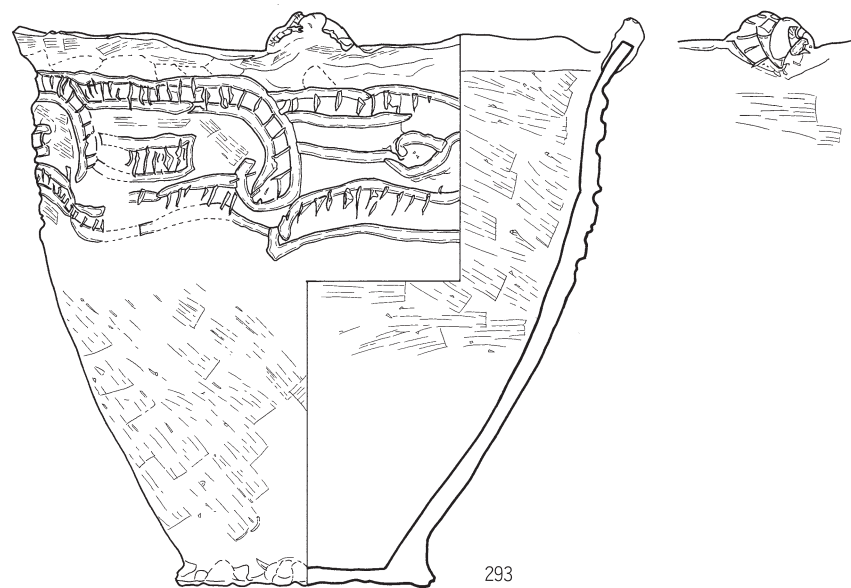
第117図 縄文土器 (50)



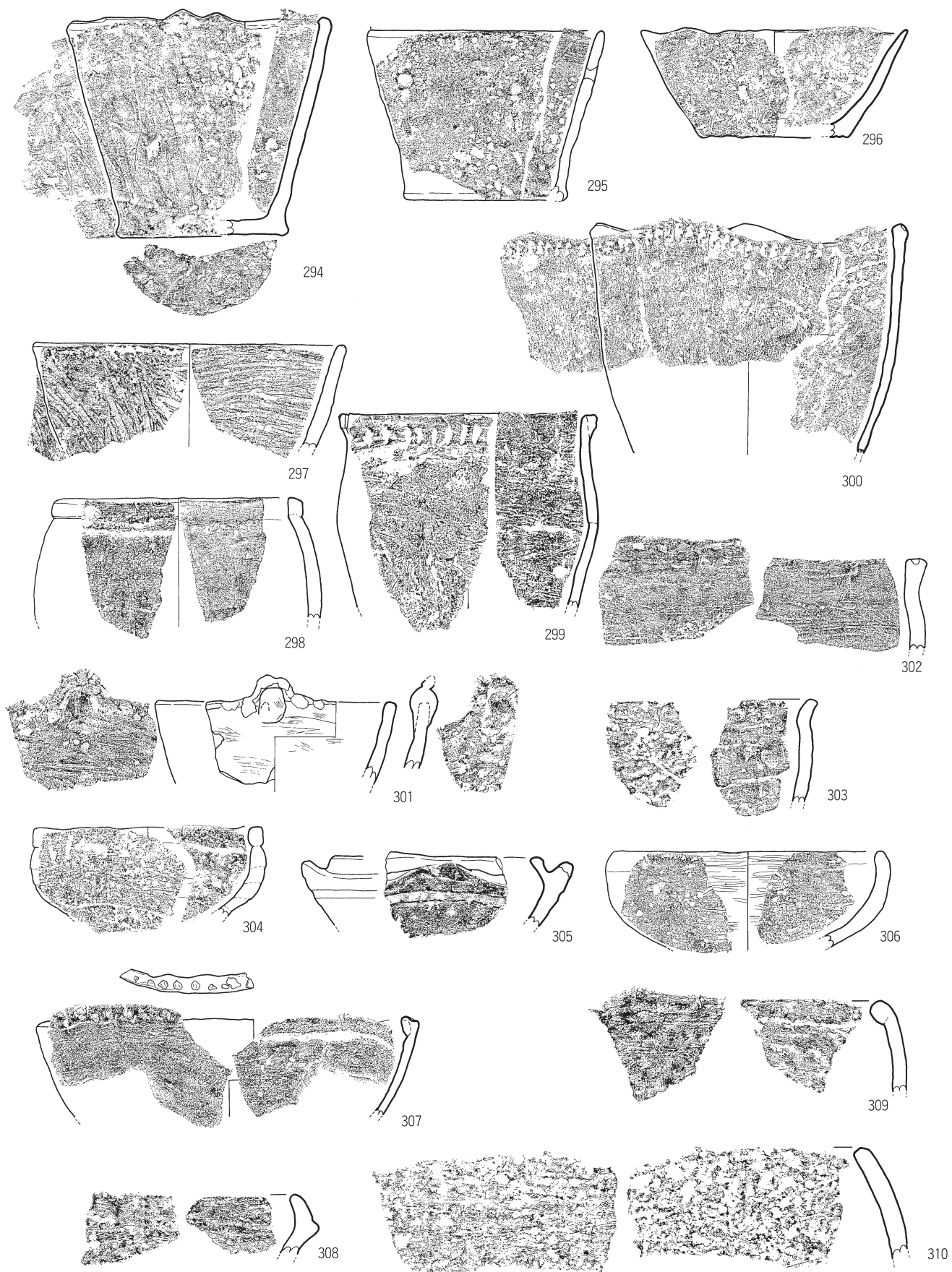
第118図 縄文土器 (51)



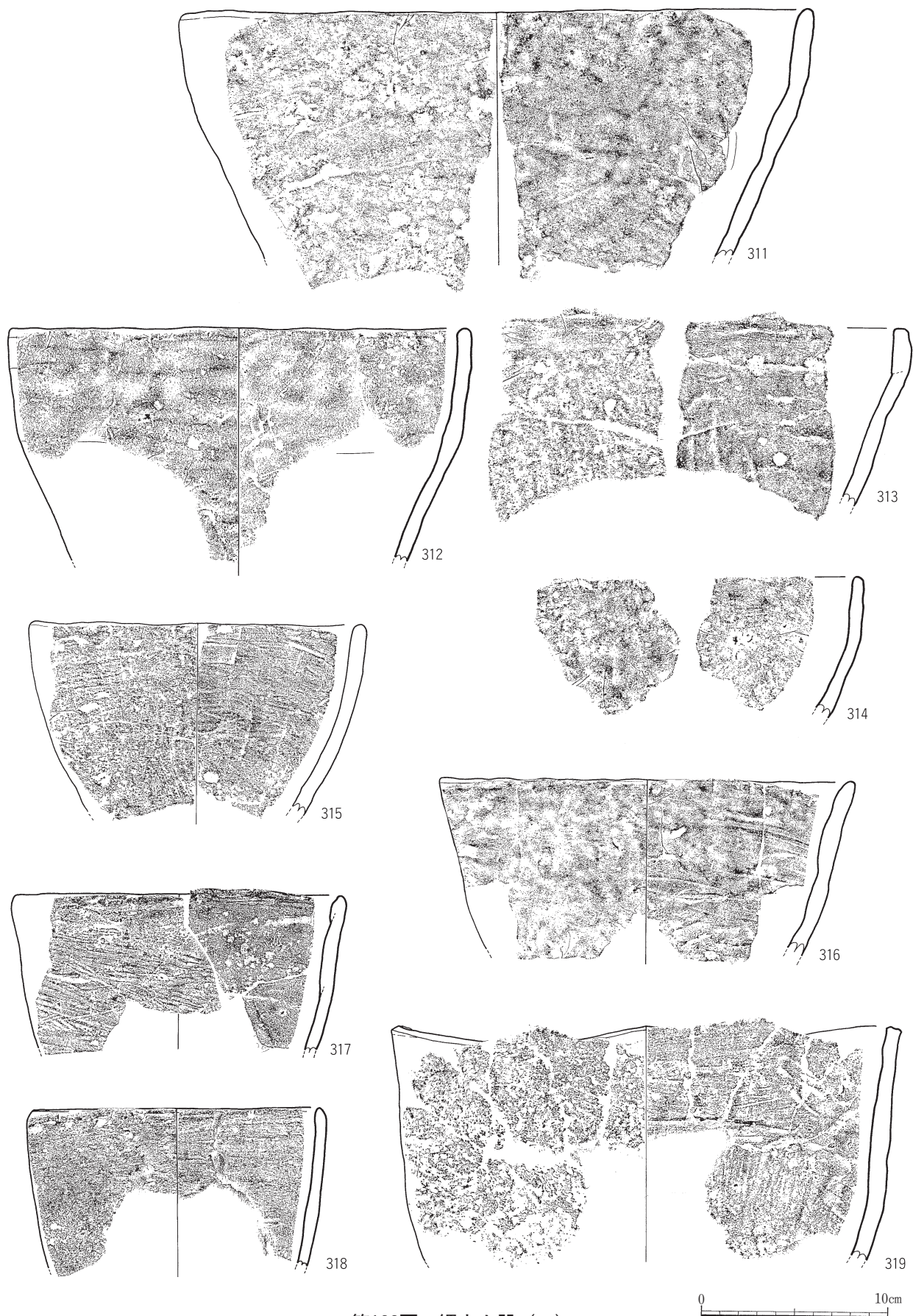
第119図 縄文土器 (52)



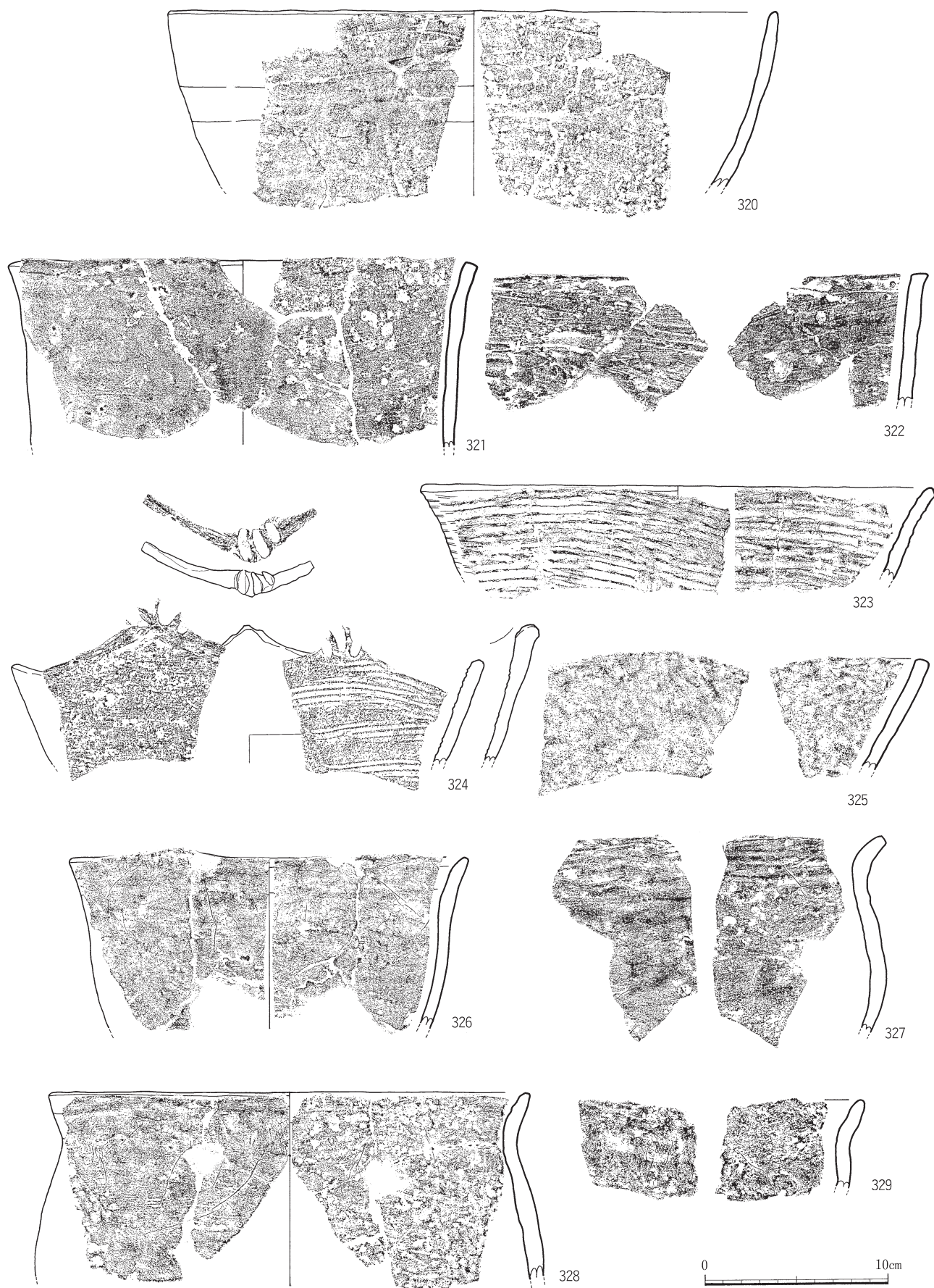
第120図 縄文土器 (53)



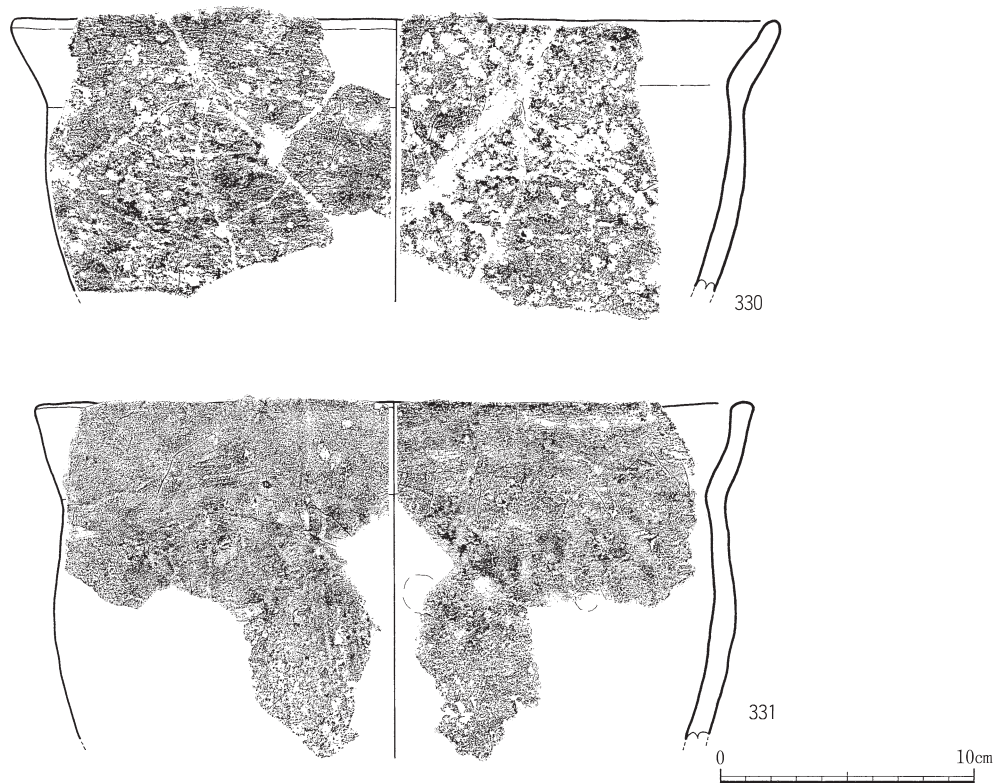
第121図 縄文土器 (54)



第122図 縄文土器 (55)



第123図 縄文土器 (56)

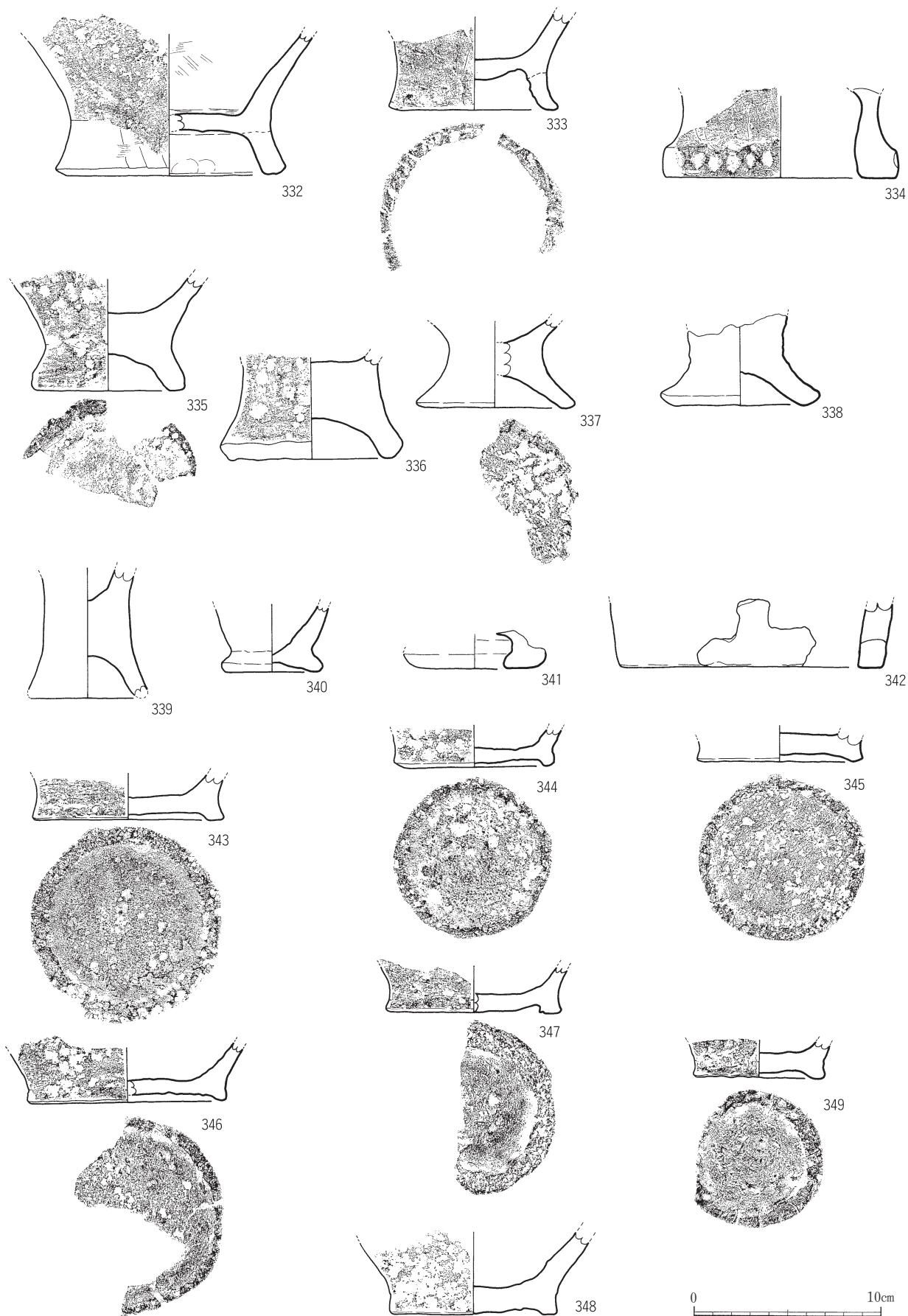


第124図 縄文土器 (57)

を帯びるが、口唇部に刺突する点や内側に稜をもつことからこの類に含めてある。

⑤Ⅳ類 この類は、指宿地方に特有な胎土及び色調をもつものを主体とし、それに近い文様や器壁が比較的薄い土器も含めてある。256はピンク色を呈する、いわゆる指宿胎土の土器であり、完全に復元できたものは南大隅町（旧根占町）前田遺跡と鹿児島市（旧喜入町）帖地遺跡にしかなく、全形と法量を知る上で良好な資料となった。器高29.5cm、口径35cm、底径7.8cmであり、全体的な重心は中位から上位にある。浅い上げ底で、ストレートに開く底部から、わずかに張りのある胴部に至る。ほぼ直に立ち上がってから、大きく開く口縁部をもち、口唇部は丸くおさめる。文様は口縁部付近に丸みを帯びた凹線で、単線の靴形文を描く。器面調整は貝殻条痕というよりは、ハケ目状の細かな条線が認められる。257は胴部が口縁部よりも大きな丸味をもった器形であり、口縁部が外反する。頸部に2条の平行線を巡らし、肩部に靴形文ともう1本の線を添える。

263～285は、ピンク色には発色しないが、全体の雰囲気指宿胎土の土器に近いものであり、わずかに外反するものの、ほぼストレートに立ち上がる器形である。264は靴形文の下にステップ状の文様を平行線で描いており、ⅠA類の大波文との関係を髣髴させる。文様のパターンが靴形文を挟んで上に沈線、下にステップ文と、ⅠA類にみられるものと共通している点が興味深い。266は外面付着煤による年代測定の結果、紀元前2,290～2,140年に含まれる可能性が95%であると指摘されている。271は靴形を意識したような文様であるが違和感がある。下には鉤手つなぎ文が巡る。272は靴形文の端部が接しており、変化した状況が窺える。277は波状口縁に沿って沈線が巡り、その下に大波文を髣髴とさせる鉤手つなぎ文を描く。始良町中原遺跡出土土器の中にも近い雰囲気をもつ土器



第125図 縄文土器 (58)

があり、こちらは大波文をはっきり描いている。

286～289, 293は文様構成や器壁が薄い点では典型的な指宿式土器に似るが、色調が黄色っぽいものである。286はネジリ紐状の突起をもち、その下に4条の垂線を描く。横線は平行線を単位とするが、途中でステップ状文と鉤手つなぎ文の中間的なアクセントが入る。289は口縁部に沿って2条の平行を描くもので、ステップ状の文様を意識した部分もみられる。293は口径24cm, 器高21cm, 底径10cmの安定した器形である。張り出した底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部のみ外反させる。平縁であるが一部に装飾された突起をもつ。胴上部に疑似縄文による文様が描かれる。

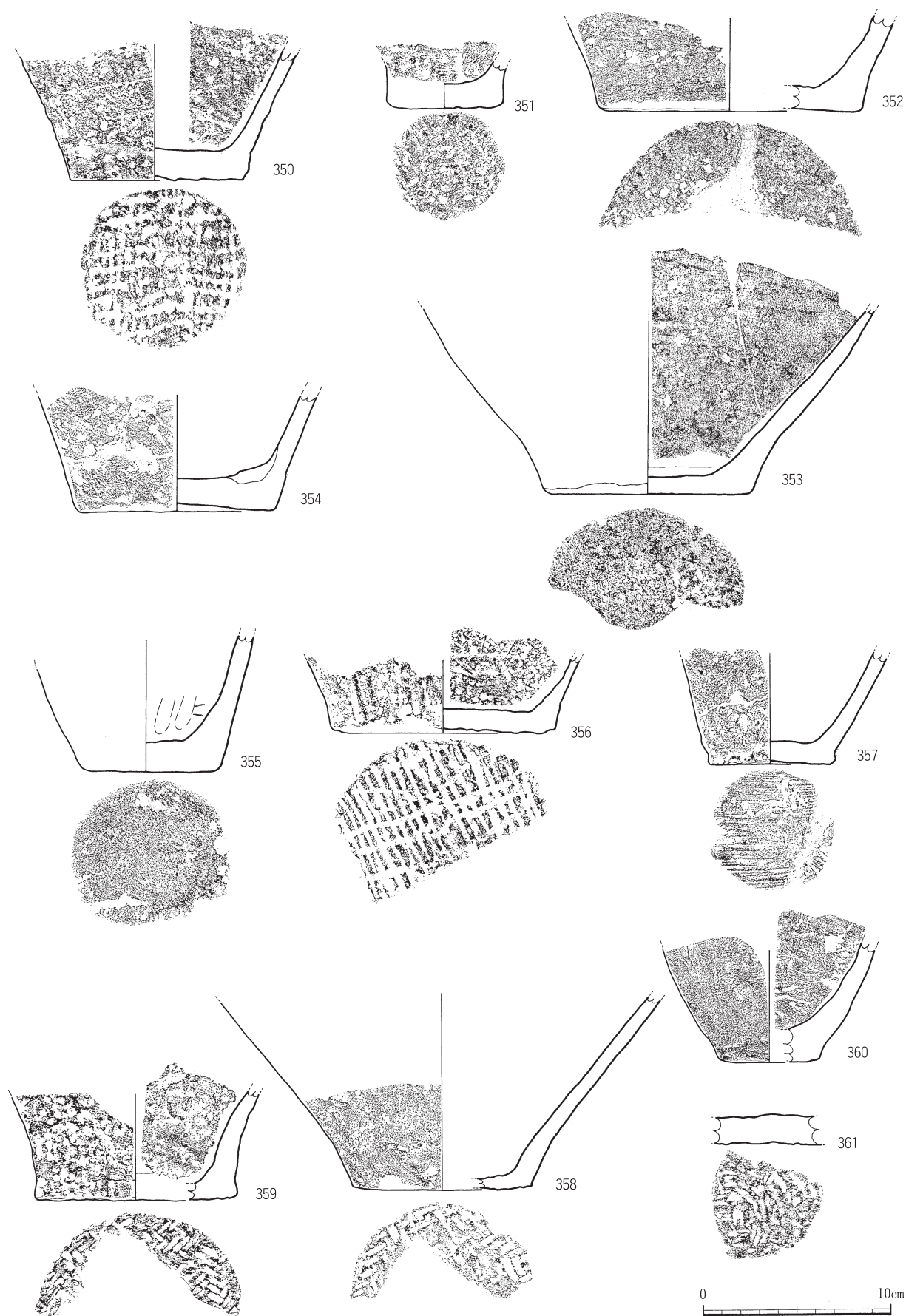
⑥V類 294と295は小型のもので、同じような器形である。底部から口縁部までストレートに立ち上がる点は、296も同様である。294の器面調整がケズリによるものである点や色調や胎土が共通することから、Ⅲ類土器の範疇に含まれるものと考ええる。内面に稜をもつ303もⅢ類に該当する。304～306は内湾する浅鉢に復元できるものであり、他の土器と趣きが異なる。器表面はミガキに近いもので、Ⅱ類土器との関連性があるが、胎土および色調とも南九州的である。326～331は胴部に張りがあり、頸部がはっきりするタイプである。色調、胎土ともⅠ類とした土器に近い。頸部をもたず、そのまま直口もしくは内湾ぎみになる口縁をもつ311～320のタイプの胎土および色調もⅠ類に近い。323は、Ⅳ類の指宿式土器との関係が窺える。

⑦底部 底部の形状は多様であり、底面の形態と縁辺の形から8つのタイプに分類した。332～342は脚台状になるものであり、339のように高坏の脚部状のものもある。342は透しのあるもので、南さつま市（旧金峰町）堀川貝塚の例などから、Ⅲ類の南福寺式系の土器に伴うものではないかと考える。334の底部縁辺に凹点を巡らすものも、南福寺式系の土器に多い。

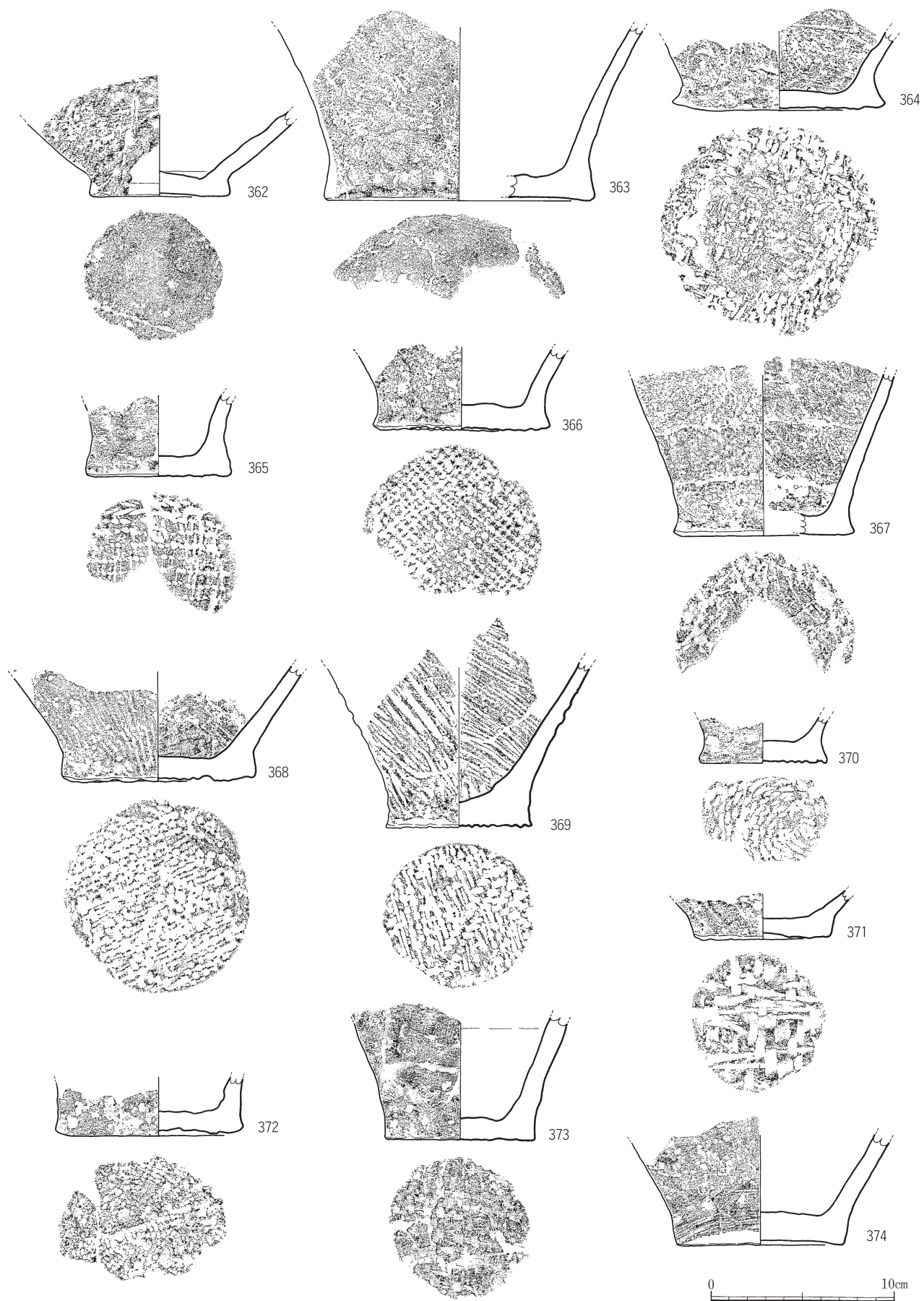
343～349は高台状となるものであり、粘土紐を一段足した程の上げ底である。349はわずかに上げ底となるもので、256の指宿式土器の底部がこの形状である。362は張り出しが強いものであり、若干上げ底状となる。366・368は張り出しがあるものの弱いものであり、全体的にこのタイプの底部が多い。350～360はほとんど張り出さないタイプである。360は縁辺が丸みを帯びるもので、量的には少ない。358は鈍角に折れるタイプであり、それほど多くはない。353は大きくて特徴のある底部であるが、これに該当する様な胎土の口縁部を探し出すことができず、型式は不明である。

なるべく、口縁部から底部までの形状がつかめるように接合に力を注いだのであるが、口縁部から底部まで接合できた例は少ない。それぞれの形状の底部がどの型式につくのかどうか重要なのであるが、特定することは難しかった。また、胎土や色調からも検討は試みたが、二次焼成されていることや胎土の特徴が際立ったものが少なかったことから、型式の特定までは至らなかった。

⑧下剝峯式土器 375～377は下剝峯式土器である。口縁部は内湾し、口唇部に向かって厚みを増す。口唇部は12mmの幅で平に面とりしてある。胴部以下はやや外反ぎみに底部へ向かうと考えられる。底部は平底で縁辺は丸みをもち、約70度の角度をもって立ち上がる。横方向に展開する綾杉状の文様を口縁部から底部に向かって順々に施してある。少なくとも5cm4mmの中に16の単位のある施文具を用いている。直線状に施文しているが、直線的なのか湾曲している施文具なのか判断はつかない。



第126図 縄文土器 (59)



第127図 縄文土器 (60)

い。上のほうがより深く、力が加わっている。底部付近は短い単位で横方向に施文する。接点がないので同一個体とは判断できないが、胴部のある部分に文様の変換点があると考えられる。胎土には花崗岩起源と考えられる白色の長石や石英、それに金色雲母が多く含まれる。内面は丁寧なナデである。

下剝峯式土器は、種子島に所在する西之表市下剝峯遺跡を標式とする縄文時代早期中葉の土器であり、黒川忠広氏の成果によると、分布は宮崎県から鹿児島県の熊毛地域以北に限られる。下剝峯式土器だけで主体となる遺跡の事例は未だなく、「辻タイプ」を明らかにしたこと以外は、研究もほとんど行われていないのが現状である。器形や文様の類似性から、桑ノ丸式土器との関係が窺えることが指摘されている程度である（脱稿後、山下大輔氏の論文を知った。）。本例のように下剝峯式土器には金色雲母を含むものが多く、花崗岩地域での製作が考えられ、金色雲母を含まない桑ノ丸式土器との関係が製作地の違いであるかどうか追究する必要がある。

山ノ中遺跡では34点の破片が出土し、接合によって22点となったが、残りの破片もほぼ似ていることから、1個体分もしくは2個体分ほどしかなかったと推察される。このことから、下剝峯式土器を使用した時期に山ノ中遺跡で定住していたとは考えられない。下剝峯式土器を携えた人もしくは家族が、立ち寄ってキャンプしたか短期間暮らした痕跡であると考ええる。遺跡によっては1個体分ほどの土器が各時期にわたってみられる日置市（旧伊集院町）山ノ脇遺跡や日置市（旧東市来町）堂園平遺跡などがあり、定住集落との比較を立地条件を含めて行うことも今後の課題である。

栗畑光博 1997

「南九州貝殻文円筒形土器の終焉」『第9回人類史研究会研究発表資料』 人類史研究会

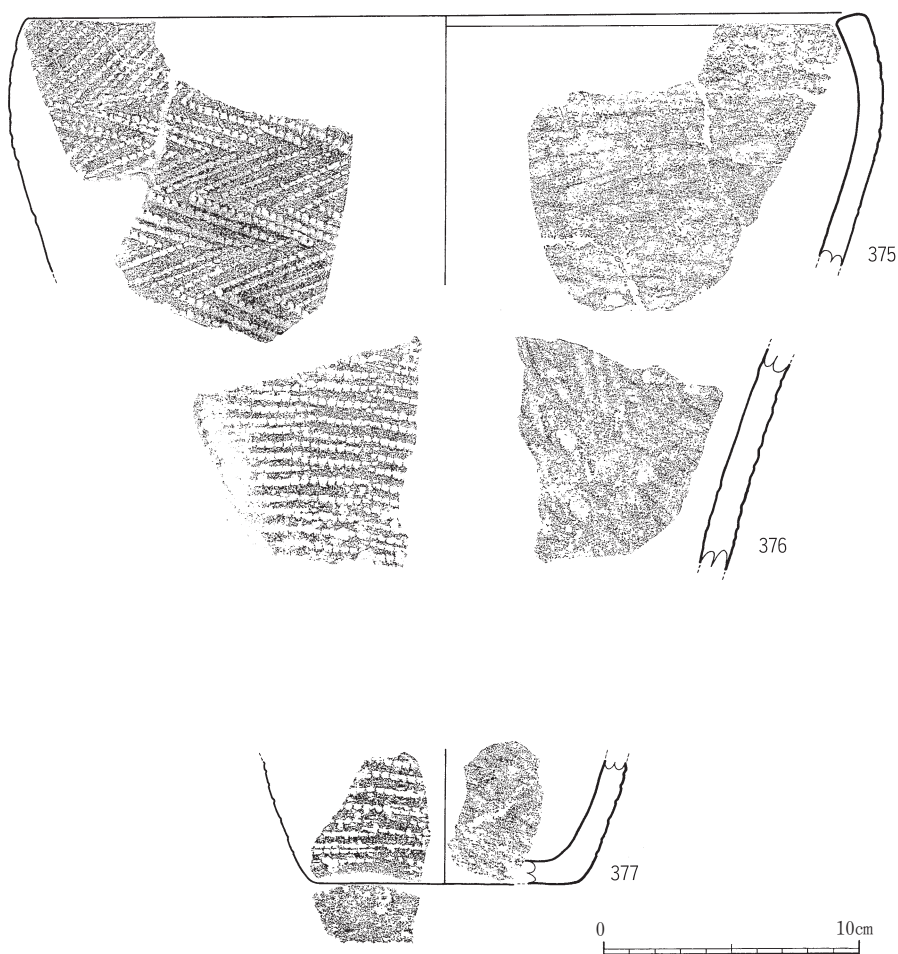
黒川忠広 2002

『南九州貝殻文系土器』南九州縄文集成1
南九州縄文研究会

山下大輔 2005

「下剝峯式および桑ノ丸式土器の再検討」

『南九州縄文通信』
No.16 南九州縄文研究会



第128図 縄文土器 (61)

表4 出土土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くきり塵	その他				
第68図	1	H20		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○	小石	1797	95.855	20	○
	2				I A	明赤褐色・ナデ	貝殻条痕	○	○	×	○	◎	×	○		—	—		
第69図	3				I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	○	◎	×	○	小石	—	—	16	
	4	H19		IIIb2	I A	褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			15588	99.850		○
第70図	5				I A	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		—	—	18	○
	6	E20		IIIa	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	◎	×		小石	3306	101.055		
	7	H19		IIIb2	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			13678	98.540		
第71図	8	H19		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×	○		15861	99.450	16	○
第72図	9	H19		IIIa	I A	明赤褐色・ナデ	ケズリヨコ	○	○	×	○	○	×		小石	5739	99.230		
	10	H19		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			1945	96.750	20	○
	11	H19		IIIb2	I A	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×			12412	99.620	20	
	12	H19		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○	小石	14814	98.730		○
	13	H19		IIIb2	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		14547	98.290		
	14	H19		IIIb2	I A	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		13690	98.400	20	
	15	H20		IIIb3	I A	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1917	96.590		
	16	F19	17住		I A	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			11818	102.280		
	17	H20		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1907	95.830		
第73図	18	H19		IIIb3	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×			16062	99.340	20	
	19				I A	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○	小石	—	—	20	
	20	H19		IIIb3	I A	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			18284	97.660		○
第74図	21	H20		IIIb3	I A	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1797	95.855	18	
	22	H20		IIIb3	I A	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			1889	96.275	20	
	23	H20		IIIb2	I A	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			1816	96.570		○
	24				I A	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	○	○	○	○	×			—	—		
第75図	25	H20		IIIb2	I A	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1909	97.280	18	
第76図	26	H20		IIIb3	I B	褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1782	96.135	16	
	27	H20		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	貝殻条痕	◎	○	×	○	○	×			1767	97.240		○
第77図	28	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	◎	◎	×			13834	98.370		
	29	G19		IIIb	I B	褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×	○		16677	99.020		○
	30				I B	褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×			—	—		○
	31	G20		IIIa	I B	褐色・ナデ	粗いケズリ	◎	○	×	◎	◎	×	○	小石	1378	97.760		
	32	H20		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	◎	×	○	○	×	○		1694	96.570		
	33	E20	1住		I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	◎	×		小石	3725	100.260		
	34				I B	明赤褐色・ケズリ	貝殻条痕	○	◎	×	◎	○	×	○		—	—		
	35	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	◎	○	×	○		13944	98.825		○
	36	F20	2住	IIIa	I B	褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×		小石	3815	102.365		
第78図	37	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			17194	99.300		
	38	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	○	◎	○	×			16284	99.600		○
	39	G18		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			19430	101.780	21	
	40	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	○	◎	×		小石	17901	99.630	21	
第79図	41	F20		IIIb	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	◎	○	○	×		小石	3740	101.530	21	○
	42	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリタテ	ケズリ	○	○	◎	◎	○	×	○		14581	99.970		
	43	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×	○		15040	99.160		○
	44	G15		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×	○		4791	111.185		
第80図	45	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ケズリ	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			16324	98.260	21	○
	46	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	指頭状痕・ヨコケズリ	○	○	×	◎	○	×	○		16136	99.140		○
	47	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	◎	×	○	○	×		小石	16289	99.450	21	○
第81図	48	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ケズリタテ	ナデ	○	○	×	○	○	×			15922	99.655		
	49	H19		IIIb2	I B	褐色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○		16903	99.015	21	○
	50	H18		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×		小石	19404	100.955		○
	51	H20		IIIb	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	◎	×			1479	96.470		○
第82図	52	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ミガキ様のナデ	ケズリ	◎	○	×	◎	○	×	○		14567	98.500	17	○
第83図	53	H20		IIIb3	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		1916	97.030	17	○
	54	G18		IIIb	底部	明赤褐色・粗いケズリ	粗いケズリ	○	○	×	○	◎	×	○	小石	13037	102.580		○
第84図	55				I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×		小石	—	—		
	56	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○	小石	13821	100.275		
	57	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	◎	○	○	○	×			15857	99.000		○
	58	H19		IIIb2	I B	褐色・ケズリタテ	条痕	○	○	×	○	○	×		小石	15733	98.820		
	59	G19		IIIb2	I B	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×			16887	100.320	23	
	60	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリタテ	○	○	×	○	○	×			15464	99.405		
	61	E20	11住		I B	褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	◎		20573	100.615	23	○
第85図	62	E19	12住		I B	明褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	◎	○	×	○	黒曜石片	21265	102.800		○
	63				I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	○	◎	◎	×	○	小石	—	—	23	
	64	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	◎	○	○	×			16879	98.185		○
	65	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	◎	○	○	×	○		13669	98.285	22	
	66	H19		IIIb	I B	明赤褐色・ケズリ	粗いケズリ	◎	○	×	○	○	×			13622	98.960		
第86図	67	H19		IIIb2	I B	褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			15540	99.340	22	○
第87図	68	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	◎	○	○	×	○		12427	100.245	22	○
	69	H20		IIIb3	I B	明赤褐色・ナデ	条痕	◎	◎	×	◎	○	×			1682	96.775	22	
	70	E20		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		3322	101.095	22	○

表5 出土土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり塵	その他				
第 87 図	71			IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	貝殻条痕	○	○	○	○	○	×	○		—	—		○
	72	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			11611	98.705		
	73	D20		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○		20101	99.965		
	74	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			14317	99.425	23	○
	75	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	◎	◎	×	○		15249	98.290	22	
第88-89図	76	H19		IIIb2	I B	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○	小石	8319	100.775	22	○
	77	H19		IIIb2	I B	赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	15950	99.420		○
	78	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	◎	◎	×	○	◎	×		小石	15970	99.665		○
	79	H19		IIIb	I B	明赤褐色・条痕	条痕	◎	○	×	◎	◎	×	○	小石	12420	98.510		○
	80	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×		小石	15061	98.460		
第 90 図	81	H19		IIIb3	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×			14819	98.680		○
	82	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	◎	○	○	×	○	小石	15050	99.570		○
	83	F16		IIIb	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×	○		5816	109.495		○
	84	D20		IIIa	I B	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	○	○	◎	×			20089	99.845		○
	85	H20		IIIb3	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			1808	96.610		
第 91 図	86	F20		II	I B	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		2362	101.570		○
	87	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			16196	99.800		○
	88	G20		IIIa	I B	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		2560	101.780		○
	89	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×	○		16856	98.550		
	90	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	◎	×	○		14994	99.580		
第 92 図	91	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	○	◎	×		小石	14590	100.310		
	92			III	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	◎	○	×	○		—	—	23	
	93	D20		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			20423	99.560		○
	94	D19		IIIa	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			20403	100.745		
	95	H19		IIIa	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○	小石	5735	99.550		
第 93 図	96	H20		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×			1741	97.160		○
	97	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	○	○	○	×	○		14544	98.640	23	
	98	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	粗いケズリ	◎	○	×	◎	◎	×			11111	100.120	23	
	99	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	◎	×	○		12994	98.920		
	100	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×	○		16384	99.080		
第 94 図	101	G20		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×	○		1643	97.885		
	102	G19		IIIa	I B	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×			4525	100.190		
	103	G18		IIIb	I B	赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	○	×	◎	◎	×		小石	18173	101.765		○
	104	H19		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	○	◎	×			11183	99.020		
	105	D20		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×	○		20732	100.330		
第 95 図	106	E20	1住	IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			2942	100.440		
	107	G19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		16820	99.805		
	108	H19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			13987	100.040		
	109	H18		IIIb	I B	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			17994	101.070		
	110	D19		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○		20343	103.325		
第 96 図	111	G19		IIIa	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	◎	×	○	○	×		小石	3413	101.425		
	112	G18	5住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	17463	101.805		
	113	G18	5住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	◎	○	×			17455	102.140		
	114	G18	5住		I B	にぶい橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		17410	102.010		
	115	G18			I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			18638	101.955		
第 97 図	116	G18			I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			16516	102.120		
	117	G18	5住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	×			18613	102.170		○
	118	G18			I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×			16517	102.100		
	119	G18	5住		I B	褐色・ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	○	○	×	○	○	×	○		16593	102.080		
	120	G18	5住		I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×			17488	101.975		
第 98 図	121	E20	1住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			10743	99.930		
	122	E20	1住		I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			3845	100.025		
	123				I B	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			—	—		
	124	E20	1住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			10793	99.900		
	125	E20			I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			18009	99.870		
第 99 図	126	G20	3住		I B	にぶい橙色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			9780	99.580		
	127	F20	2住		I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			17380	100.640		
	128	F20	2住		I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			17381	100.675		
	129	F20	2住	I	I B	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			11384	100.945		
	130	F20	2住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	○	○	○	×			13460	100.640		
第 100 図	131	F20	2住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		12045	100.750		
	132	F20	2住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13497	100.760		
	133	F19	17住		I B	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			12123	101.985		
	134	E20	11住		I B	にぶい褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			20523	100.395		
	135	F19	16住		I B	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×	○		11711	102.380		
第 101 図	136	F19	16住		I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×	○		11774	101.840		
	137	F19	16住		I B	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	◎	○	×	○		11735	101.980		
	138	E19	12住		I B	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×	○		20602	102.490		
	139	E19			I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×	○		20647	102.810		
	第89図	140	H20		IIIb3	I B	明赤褐色・ケズリタテ	ケズリ	○	○	○	○	◎	×		小石	1889	96.270	25

表6 出土土器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり塵	その他				
第 98 図	141	G18		IIIa	I B	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			13023	101.850		
	142	H19		IIIb2	I B	赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			15316	98.610		
	143	H20		IIIb3	I B	にぶい黄褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	◎	○	×			1889	96.275		○
	144	G18		IIIb2	I B	にぶい赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		18304	101.640		○
	145	D20		IIIa	I B	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			19844	100.605		
	146	G19		IIIb2	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	16706	99.910		
	147	E20	11住	IIIb	I B	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○	小石	3673	100.820		
	148	H19		IIIb2	I B	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×	○		15133	98.505		
	149	G18		IIIb2	I B	にぶい褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	◎	○	×			19325	101.530		
第 99 図	150			IV		橙色・ナデ	ケズリ様のナデ	○	○	×	○	◎	×		小石	—	—	27	
	151	F19	17住	IIIa	I B	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×			4069	102.404		○
	152			I B		明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	◎	×	○		—	—		
	153	G19		IIIa	I B	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			4552	104.415		○
	154	D18		I a	I B	橙色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○	小石	21557	103.420		
	155	H18		IIIb2	I B	橙色・ナデ	粗いケズリ	○	○	×	◎	○	×			18433	101.370		
	156	H19		IIIb2	I B	明黄褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13637	98.960	19	○
	157	H20		IIIb3	II	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	1635	95.860	24	
	158	H20		IIIb2	II	橙色・ナデ	ナデ	◎	○	×	◎	○	×	○		1865	96.030	24	
第 100 図	159			II		橙色・ミガキ様ナデ	条痕	◎	○	×	○	○	×	○		—	—	24	
	160	G16		I	II	橙色・ミガキ	ミガキ	○	○	×	○	○	×			4490	105.680	24	
	161			II		明赤褐色・ミガキ様ナデ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×	○		—	—	24	
	162	H19		IIIb2	II	灰白・ミガキ	ミガキ	◎	○	×	○	○	○			14363	98.070	24	
	163	G19		IIIa	II	灰白・ミガキ	ミガキ	◎	○	×	○	○	○			3681	99.775	24	
	164	H19		IIIa	II	灰白・ミガキ	ミガキ	◎	○	×	○	○	○			6204	100.845	24	
	165	H19		IIIa	II	灰白・ミガキ	ミガキ	◎	○	×	○	○	○			6153	100.825	24	
	166	E19		I	II	灰白・ミガキ	ミガキ	◎	○	×	○	○	○			4460	103.570	24	
	167	F16		IIIa	II	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			2203	110.305	24	
	168			II		橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			—	—	24	
	169	H20		IIIb	II	にぶい黄褐色・ナデ	ケズリ様ナデ	○	○	×	○	○	×			1478	96.180	24	
	170	F19	12住	II		明褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×	○		4657	102.030	24	○
	171	H20		IIIb2	II	明褐色・ミガキ様のナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×	○		1844	96.795	24	○
	172	H20		IIIb3	II	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×			1835	96.240	24	○
	173	H19		IIIb2	II	明赤褐色・ケズリヨコ	ケズリヨコ	◎	○	×	○	○	×	○		14508	98.435		
	174	H19		IIIb	II	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×	○		13828	98.780		
	175			II		明赤褐色・ケズリヨコ	ケズリヨコ	◎	○	×	○	○	×	○		—	—		
	176			II		明赤褐色・条痕	条痕	○	○	×	○	○	×	○		—	—		
	177			II		橙色・条痕	条痕	◎	○	×	○	○	×	○		—	—		
第 101 図	178	H19		IIIb2	II	明褐色・ナデ	ケズリヨコ	◎	◎	×	○	○	×	○		14414	98.650	24	
	179			II		明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			—	—	24	
	180			II		橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×			—	—		
第 103 図	181	H19		IIIb2	II	明赤褐色・貝殻条痕	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		12883	98.500	18	
	182	H20		IIIb3	II	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	◎	○	×			1797	95.855	24	
	183	D19		IIIa	II	橙色・ナデ	貝殻条痕	◎	○	×	◎	○	×			19703	103.180	24	
	184	H19		IIIb2	II	明赤褐色・貝殻条痕	条痕	○	○	×	○	○	×	○		14945	98.320		○
	185			II		明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	◎	○	○	×			—	—	24	
	186			II		明黄褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×		小石	—	—	24	
	187	E19	13住	II		明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			21088	103.035		○
	188	G19		IIIb	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			4570	101.640	17	
第 105 図	189	H19		IIIb2	III	赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	◎	○	×			14043	99.475	25	
	190			III		明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		—	—		
	191	F21		IIIb	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			989	100.005	25	
	192	G18	5住	III		明赤褐色・ケズリ様のナデ	ケズリ	○	○	○	○	○	×			17441	102.155	25	
	193	H18		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	◎	○	○	×	○	小石	18915	101.165	25	
	194	G18		II	III	明赤褐色・ケズリ様のナデ	ケズリ	○	○	○	○	○	○		小石	17792	102.900		
	195	G17		I	III	橙色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	◎	○			6039	104.570		
	196	D20		IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	○	○	○	○	×			20749	100.460	25	○
	197	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	◎	×	○	◎	×		小石	15999	99.175		
	198	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	◎	○	×	○		15087	100.020		
	199	H18		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			19505	100.735	25	○
	200	E20	1住	IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×			2689	101.170	25	○
第 106 図	201	H20		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	○	○	×			1847	97.100		
	202	H19		IIIb	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			11592	98.715	25	
	203	D19		IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			20362	102.970		
	204			III		明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			—	—	25	
	205	D19		IIIa	III	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			20992	100.430		
	206	G19	10坑	IIIa	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	◎	◎	×		小石	4566	101.460		○
	207	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×			12849	99.360	25	
	208	G19		II	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			3046	99.675		
	209	E20	11住	III		明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			20510	100.615		○
第107図	210	F20	2住		III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13448	100.800	25	

表7 出土土器観察表(4)

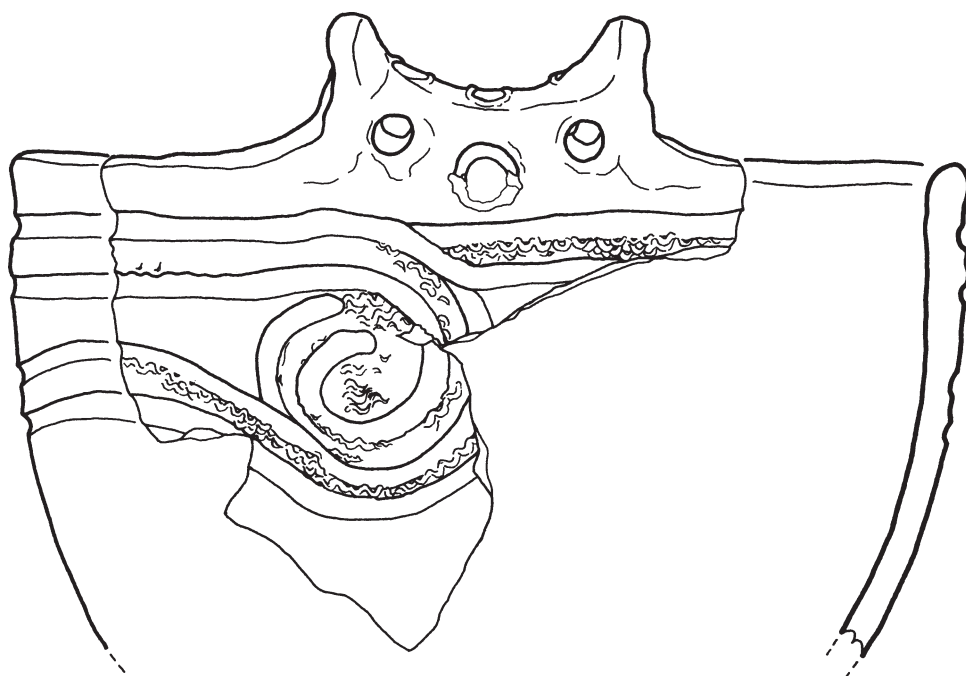
挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり塵	その他				
第 107 図	211	G19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ様のナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			11503	100.360		
	212	G19		IIIb2	III	赤褐色・粗いケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×			13165	100.470	26	○
	213	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			14276	100.045	26	○
	214	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			14901	99.400		
	215				III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×		小石	—	—		
第 108 図	216	D20		IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	◎	×			20865	99.935	25	○
	217	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリタテ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13785	99.405	25	
	218	H18		IIIb	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	17607	101.615		○
	219	H18		IIIb2	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			19523	100.805		
	220	G15		IIIa	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			4998	111.265		
	221	G16		I	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			4727	108.995		
	222	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	×		小石	16945	98.220		
	223	F20	2住	I	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			11377	100.850		○
	224	H19		IIIb2	III	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	◎	○	×			15604	99.820		○
	225	H19		IIIb	III	明赤褐色・ケズリヨコ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			14966	100.030		
第 109 図	226	H19		IIIb	III	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×			7039	100.235	25	
	227	H19		IIIb2	III	赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	◎	×	○	小石	15683	99.230		
	228	H19		IIIb	III	明褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×			14482	99.970		○
	229				III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			—	—	26	
	230	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×			13000	98.920		
	231				III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×		小石	—	—		
	232	H19		IIIb2	III	明赤褐色・条痕	ケズリ	○	◎	×	◎	◎	×			13590	98.630	25	○
	233	H19		IIIb3	III	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			14065	101.075	25	
	234	G19		IIIb2	III	明黄褐色・ケズリタテ	ケズリタテ	◎	○	×	◎	○	×			12685	101.290		○
	235	G19		IIIa	III	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×		小石	3000	101.390	19	
第 110 図	236	G19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリヨコ	ケズリヨコ	○	○	×	○	○	×		小石	16993	100.685		
	237	F20	2住		III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			17325	100.850	25	
	238	G18	15住		III	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		11201	103.290		
	239	G18		IIIb2	III	にぶい黄褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		19425	101.580		○
	240	H19		IIIb	III	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○	小石	12509	100.520		
	241	H19		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×			15633	99.835	25	
	242				III	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	◎	×		小石	—	—		
第 111 図	243	H20		IIIb3	III	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			1780	97.110	26	○
	244	H19		IIIb2	底部	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	◎	○	○	×		小石	13720	98.660		○
	245	H20		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ様のナデ	ケズリ様のナデ	○	○	×	○	○	×			1642	96.765		○
	246	H20		IIIb2	III	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		1947	96.120	26	○
	247	H20		IIIb3	III	明褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	◎	×		小石	1803	97.740	19	○
	248				III	橙色・ナデ	ケズリ様のナデ	○	○	×	○	○	×		小石	—	—		
	249	D20		IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	ケズリ様のナデ	○	○	×	○	○	×			20077	99.900		
第 112 図	250	H20	15住	IIIb3	III	にぶい黄褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×	○		1676	96.715	26	
	251	H19		IIIa	III	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	◎	○	×			6182	100.370	26	
	252	E20		IIIb	III	明褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		3482	101.365		
	253	H19		IIIb2	III	明赤褐色・粗いケズリ	粗いケズリ	○	○	×	○	○	×	○		14438	100.050		
	254	H19		IIIb2	III	橙色・ナデ	ナデ	○	◎	×	◎	○	×			14258	100.270		○
	255	H20		IIIb	III	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	◎	×	◎	◎	×			1340	97.095		
第 114 図	256	G18	5住	IIIb2	IV	淡赤褐色・ハケメ状条線	ハケメ状条線	◎	◎	×	◎	○	×	○		14768	99.360	26	○
	257	H19		IIIb2	IV	にぶい橙色・ケズリ	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			17199	97.860		
	258	G18	5・15住		IV	にぶい橙色・ナデ	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×	○		18510	103.095		○
	259	H19		IIIb2	IV	にぶい橙色・条痕	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×	○		13666	99.620		○
	260	G19		IIIb	IV	明赤褐色・ナデ	条痕	◎	○	×	○	○	×			18138	101.385	27	
	261	F17		IIIa	IV	にぶい赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	◎	×	○		4943	106.290		
第 115 図	262	H19		IIIb2	IV	赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	◎	◎	×	◎	○	×			15918	99.475		○
	263	H20		IIIb2	IV	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	◎	×			1868	95.620		
	264	H20		IIIb	IV	にぶい橙色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×	◎		1287	96.790	27	○
	265				IV	橙色・貝殻条痕	貝殻条痕	◎	○	×	◎	○	×			—	—		
	266	H19		IIIa	IV	明黄褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			6256	98.680		
第 116 図	267	H20		IIIb2	IV	にぶい黄褐色・ケズリ	粗いケズリヨコ	○	○	×	○	○	×			1868	95.620	27	
	268	H19		IIIb2	IV	明赤褐色・条痕	ケズリ	○	○	×	○	○	×			15839	98.040		○
	269	H20		IIIb	IV	明赤褐色・貝殻条痕	ナデ	○	○	×	○	○	×			—	—		○
	270	D18	14住	IIIa	IV	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	◎	×	○	○	×			21881	103.825		○
	271	D18	14住	IIIb	IV	明赤褐色・条痕	貝殻条痕	◎	◎	×	◎	○	×			21867	103.915	27	○
	272	D18		II	IV	にぶい黄褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×			—	—	27	
	273	D18		II	IV	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		21575	103.800	19	
第 117 図	274	E19	12住		IV	明黄褐色・粗いケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×	○		20263	102.490		
	275	G17	12坑		IV	にぶい黄褐色・条痕	条痕	◎	○	×	○	○	×	○		16422	103.080		
	276	F19	17住	IIIa	IV	にぶい黄褐色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×	○		3976	102.345		
	277	D18		IIIa	IV	にぶい黄褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×			21594	103.760		○
第 118 図	278	F17		IIIa	IV	にぶい褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	×	○	◎	×		小石	4920	106.455		○
	279	H20		IIIb	IV	にぶい黄褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×		小石	1513	96.790		○
	280	D18		IIIa	IV	にぶい黄褐色・条痕	ケズリ	○	○	×	○	○	×			21579	103.730		

表8 出土土器観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり塵	その他				
第 118 図	281	F20	2住	①	Ⅳ	明褐色・条痕	ナデ	○	○	×	◎	○	○		小石	11386	100.930	27	
	282	E19	12住		Ⅳ	にぶい黄橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			20221	102.415		
	283	E19	12住		Ⅳ	にぶい橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			21327	102.210		
	284	E19	12住		Ⅳ	明赤褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	◎	×	○	○	×			20230	102.580		
第 119 図	285	E19		Ⅲb2	Ⅳ	にぶい橙色・ナデ	ケズリヨコ	○	○	×	○	○	×	○		20269	102.500		
	286	H20		Ⅲb2	Ⅳ	橙色・ケズリ	ケズリヨコ	○	○	×	×	○	×	○		1865	96.030		
	287	H20		Ⅲa	Ⅳ	橙色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		453	97.480		
	288	G18	5住	Ⅲa	Ⅳ	にぶい黄橙色・貝殻条痕	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		10567	102.685	27	○
	289	E18		Ⅲa	Ⅳ	浅黄色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×		小石	21925	104.470	27	○
	290	H19		Ⅲb2	Ⅳ	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13664	99.745		
	291	F20		Ⅲa	Ⅳ	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			2296	101.435		
第 120 図	292	G20		Ⅲa	Ⅳ	橙色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×			1360	98.355		
	293	H19		Ⅲb	Ⅳ	明褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		13658	98.650		
第 121 図	294	H18		Ⅲb2	V	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			19061	101.080	19	○
	295	H18		Ⅲb2	V	明赤褐色・ナデ	条痕	○	○	×	○	○	×		小石	19466	100.630	19	
	296	H19		Ⅲb3	V	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			14939	98.670	19	
	297	E19	12住	Ⅲa	V	明赤褐色・粗い条痕	粗い条痕	○	○	×	○	○	×		小石	21810	103.435		
	298	H19		Ⅲb3	V	にぶい褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			17127	98.060		
	299	G19		Ⅲa	V	にぶい褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×		小石	4544	100.700		
	300	H19		Ⅲb3	V	にぶい褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	○	○	◎	×			16747	98.950		○
	301	F19		I b	V	明赤褐色・条痕	ケズリ	◎	○	×	○	◎	×		小石	20	102.225		
	302	F16		Ⅲa	V	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	○	○	×			5305	108.725		
	303	H19		Ⅲb2	V	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			14039	99.500		
	304	H19		Ⅲb2	V	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×	○	小石	14705	99.640		○
	305	H19		Ⅲb2	V	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		16601	99.605		
	306	H20			V	明褐色・ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	○	○	×	○	○	×			—	—		
	307	G20			V	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×			—	—		
	308	H20		Ⅲb2	V	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	○	○	○	×	○		1814	96.360		
	309	G19		Ⅲb	V	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			17072	100.090		
	第 122 図	310	H19		II	V	橙色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	◎	×			62	101.200	
311		H19		Ⅲb3	V	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			15913	99.640		
312		H19		Ⅲb2	V	明褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			16769	98.830		
313		H19		Ⅲb2	V	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			16844	99.000		
314		H19		Ⅲb2	V	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		16862	98.850		
315		H18		Ⅲb	V	明赤褐色・ケズリ	条痕	○	○	×	◎	○	×			13355	101.265		○
316		H20		Ⅲ b	V	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			1420	97.300		
317		G18	15住		V	明赤褐色・貝殻条痕	ナデ	○	○	×	○	○	×			18506	102.960		
318		H20		Ⅲb2	V	橙色・ケズリヨコ	条痕	◎	◎	×	○	○	×	○		1675	97.040		
319		H19		Ⅲb2	V	明赤褐色・ケズリ	粗いケズリ	○	◎	×	◎	○	×	○	小石	13994	100.390		○
第 123 図	320	H19		Ⅲb2	V	橙色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○		17910	97.790		
	321	E19	13住		V	明赤褐色・ミガキ様のナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		21090	103.110		○
	322	E19	12住		V	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	○	○	×			20638	102.840		○
	323	H20		Ⅲa	V	にぶい黄橙色・貝殻条痕	粗い貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			1525	97.120		○
	324	F18		Ⅲa	V	明赤褐色・ケズリヨコ	貝殻条痕	○	○	×	◎	○	×			16338	103.640		
	325	G17		Ⅲa	V	橙色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	○	○	×	○		8928	104.770		
	326	G18	15住	I a	V	明赤褐色・ミガキ様のナデ	ミガキ様のナデ	○	○	×	○	○	×			7902	103.44		○
	327	G18		Ⅲb	V	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		17784	102.025		○
	328	H20		Ⅲb2	V	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	○	◎	×	○		1948	96.170		
	329	G18		Ⅲb	V	にぶい黄橙色・ナデ	ケズリ	○	◎	×	○	○	×			18425	102.045		
第 124 図	330	H20		Ⅲb3	V	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×			1791	96.460		○
第 125 図	331	H19		Ⅲb2	V	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×		小石	13665	99.815		
	332	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	○	×	◎	○	×	○		15214	99.790		○
	333	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	○	○	◎	○	×			14193	98.830		
	334	F20		Ⅲb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			3750	101.510		
	335	H19		Ⅲb3	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×			16108	99.120		
	336	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	○	◎	×		小石	14094	100.060		
	337	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		12893	98.770		
	338	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			14676	98.600		
	339	G19		I a	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			11518	100.495		
	340	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			16193	99.705		
	341	H18		Ⅲb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			17041	101.400		
	342	G19		Ⅲb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			3943	99.345		
	343	H20		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ケズリ	○	○	×	○	○	×	○		1574	96.750		
	344	D19		Ⅲa	底部	明赤褐色・ケズリ	ナデ	◎	◎	×	○	○	×	○		20386	102.130		
	345	H19		Ⅲb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×	○		12536	98.780		
	346					底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○	—	—	29	
	347	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			13598	98.245		
	348	D20		Ⅲa	底部	明赤褐色・ナデ	ケズリ	◎	○	◎	○	○	×			19856	100.135		
	349	G15		Ⅲa	底部	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	○	○	×	◎	○	×			5040	110.020		
第 126 図	350	H19		Ⅲb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	◎	×		小石	14722	100.010		○

表9 出土土器観察表（6）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎 土								取上げ 番号	レベル (m)	写真 図版	接 合
						外面	内面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり塵	その他				
第 126 図	351	D20		IIIa	底部	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○		20486	99.305		
	352	G21		IIIb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×	○		1032	97.230		
	353	H20		IIIb3	底部	橙色・ケズリタテ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			1714	97.350		
	354	H19		IIIb2	底部	にふい黄褐色・ケズリ	ナデ	○	◎	×	◎	○	×	○	小石	15279	99.955		
	355	G18		IIIb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×			18956	101.740		
	356	G18	5住		底部	にふい黄褐色・貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	×	○	○	×			16503	102.130	29	
	357	H19		IIIb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×		小石	14303	99.470		
	358	H19		IIIb2	底部	橙色・ケズリ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			15488	98.020		○
	359	D18		IIIa	底部	橙色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	◎	○	×	○		21841	103.985		○
	360	G18	5住		底部	にふい橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	◎	○	×	○		17489	101.970		
	361	F21		IIIb	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	○	×			218	100.035		
第 127 図	362	H19		IIIb2	底部	橙色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○	小石	14622	99.870		
	363	G18		IIIa	底部	橙色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×	○	小石	10848	102.025		
	364	G19		IIIb	底部	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×		小石	3950	99.535		
	365	D19		IIIa	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	◎	×	◎	○	×		小石	20947	102.130	29	
	366	H20		IIIb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	◎	×	○	◎	×			1614	95.765	29	
	367	G18	5住	IIIb	底部	橙色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×	○		19002	102.355		○
	368	G19		IIIa	底部	明赤褐色・ケズリ	粗いケズリ	○	◎	×	○	○	×		小石	4100	101.900	29	
	369	H20		II	底部	にふい褐色・条痕	条痕	○	○	×	○	○	×			—			
	370	D21		II	底部	にふい褐色・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	×	○	小石	20134	97.665	29	
	371	D19		IIIa	底部	明赤褐色・ケズリ	ケズリ	◎	◎	×	◎	○	×			20005	103.240	29	
	372	H19		IIIb2	底部	明赤褐色・ナデ	ナデ	○	○	×	○	◎	×			13562	99.210	29	
	373	G19		IIIa	底部	橙色・ナデ	ナデ	◎	○	×	○	○	×			2997	101.400		
	374	H20		IIIb2	底部	明赤褐色・ケズリ	ナデ	○	○	×	○	○	×			1832	96.830	29	
第 128 図	375	F20		IIIb	下剥離	にふい黄褐色・ナデ	丁寧なナデ	◎	○	◎	○	○	×	○		3125	101.240		
	376				下剥離	にふい黄褐色・ナデ	丁寧なナデ	◎	○	◎	○	○	×			—			
	377	F20		II	下剥離	にふい黄褐色・ナデ	丁寧なナデ	◎	○	◎	○	○	×			2667	101.305		



ミミズクをモチーフとした土器

（２）土製品及び木の実

①円盤状土製加工品

山ノ中遺跡では、土器片を再利用した多数の円盤状土製加工品が出土した。全てを図化して掲載できないことから、３つのランクに分けて記述したい。Ａランクとしたのは、図化した140点である。文様があるものや穿孔したものを優先し、完全な形のわかるものを大小とり混ぜてランダムに抽出した。Ｂランクとしたものは図化しなかったが、全体の形がわかるので、直径と重さの個数を表したのが第129図上のグラフである。Ｃランクとしたものは、一部が欠損しており、打ち搔かれた側面の面数が少なく、円盤状と断定しにくい破片である。179点を数えた。全体を通じて、大きさは直径３～５cmに集中し、重さは10～20gが最も多い。

中央に穿孔のあるものは378・382・383の３点があり、384は貫通していない。379はわずかに回転穿孔痕がみられるが、貫通しているかどうかはわからない。378～381の４点は、側面に研磨痕がみられる。穿孔された円盤状土製加工品と側面が磨かれたものとの相関関係は、はっきりつかむことができない。穿孔していても側面が磨られていない例の382と383もあることから、再加工の段階で磨るのか、穿孔を利用しながら使用しているうちに磨られるのか検討を要する。文様を有するものはほとんどはⅠＢ類であり、389と444のみがⅢ類の南福寺式土器の系統に該当する。

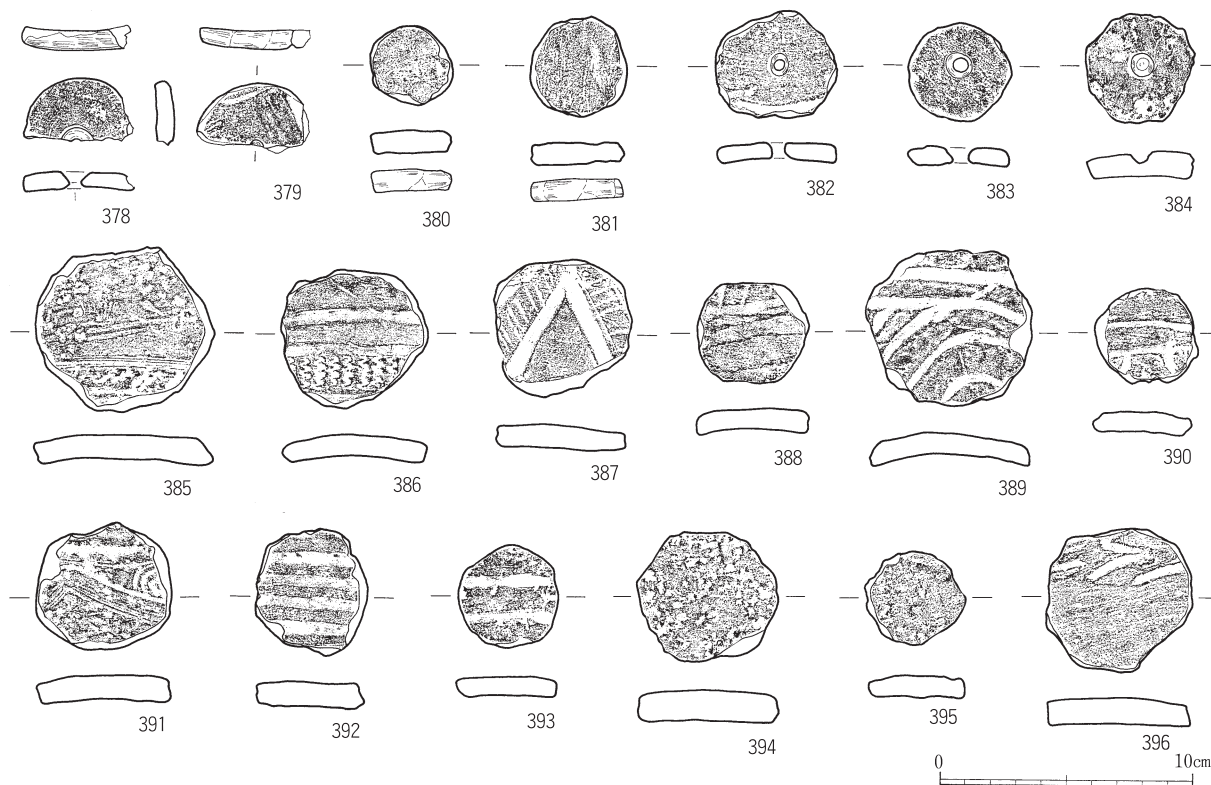
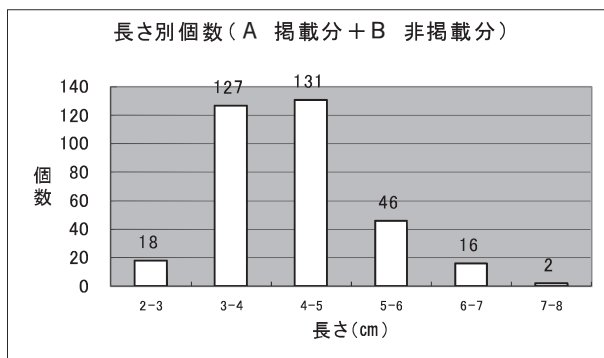
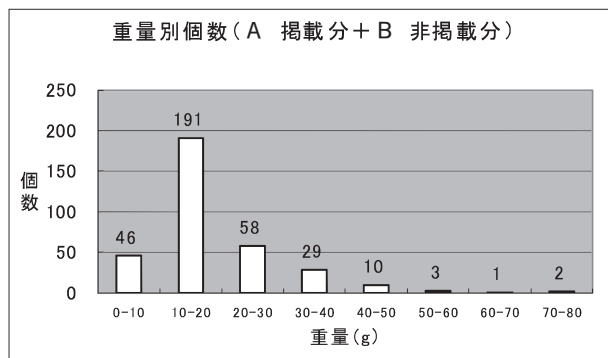
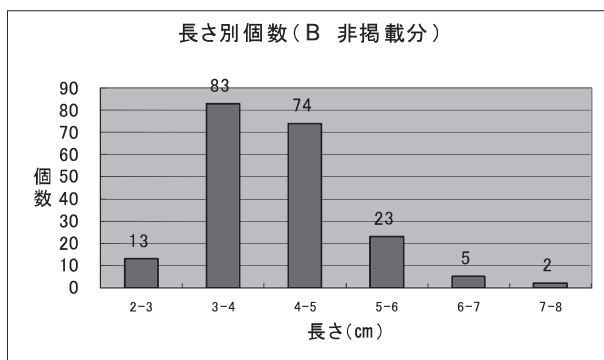
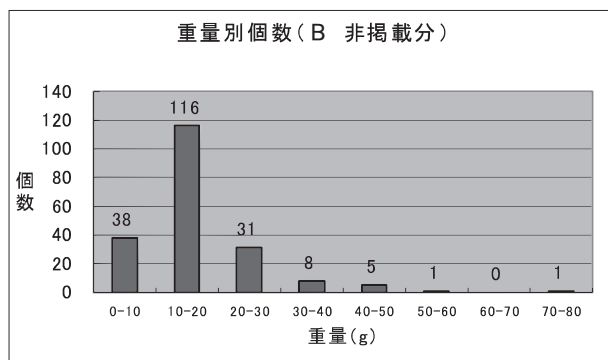
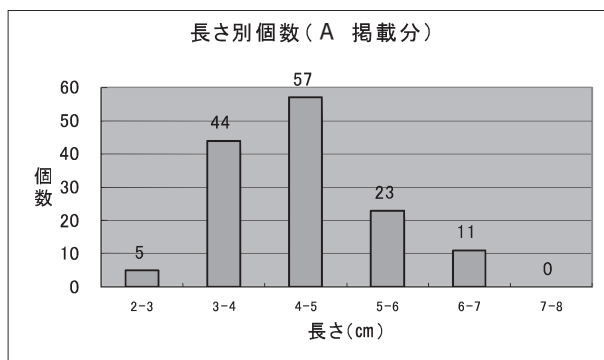
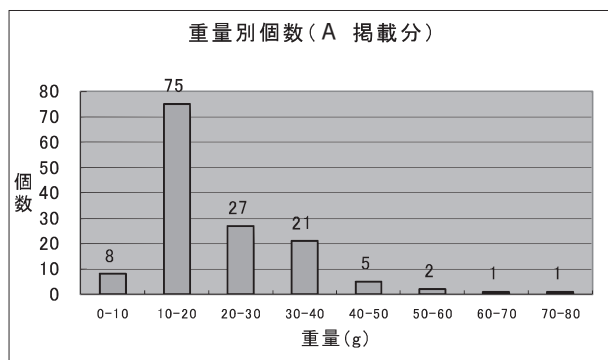
前迫亮一氏によると、円盤状土製加工品は縄文時代中期末～後期中半に最も多くみられ、加治木町干迫遺跡では1,270点、志布志市（旧志布志町）中原遺跡では1,081点、薩摩川内市（旧川内市）麦ノ浦貝塚で563点、鹿児島市草野貝塚では412点が出土しているという（前迫2000）。山ノ中遺跡出土の円盤状土製加工品は、Ａ・Ｂランク合わせて少なくとも340点はある、現在のところ鹿児島市（旧喜入町）帖地遺跡に次いで県内では６番目に多い数である。古くは縄文時代早期前半から存在し、新しいものは江戸時代の陶磁器を利用したものもある。使い方については諸説あり、編み物等の錘説・竹筒の蓋説・遊具説といろいろ考えられているが、まだ解明されていない。

前迫亮一 2000 「かごしま考古なんでもランキング円盤状土製加工品」『大河』第7号 大河同人

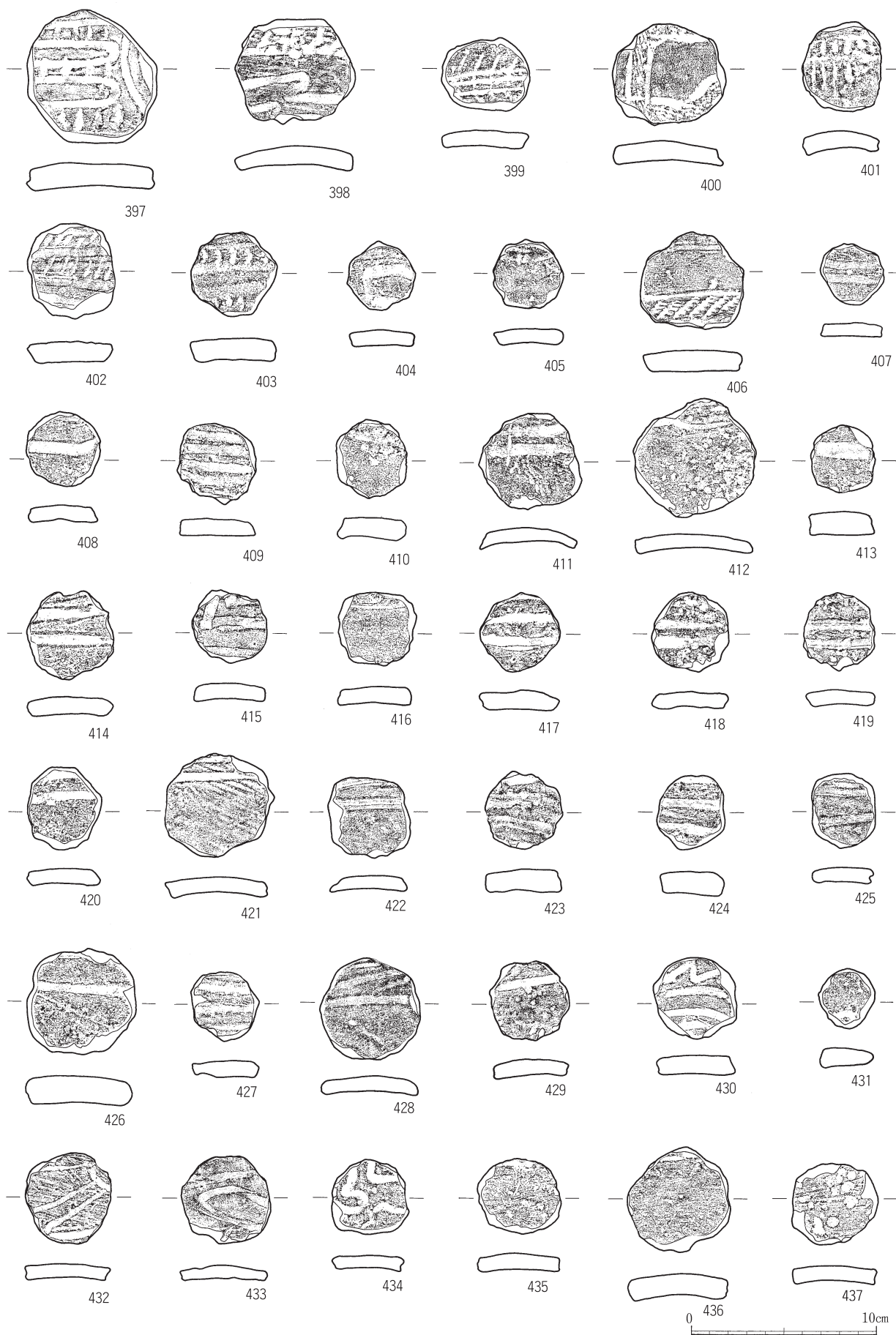
②底部圧痕

山ノ中遺跡で出土した底部の半数以上は、何らかの圧痕がみられた。底部圧痕をその素材となる種類で分けると、鯨類の背骨・木の葉類・編み物の３種類に分けられる。鯨骨については可能性はあるものの断定できないため図はなく、木の葉についても１点しか図示していない。縄文時代の編み物については、渡辺誠氏や植松なおみ氏など多くの研究がなされている。さらに、時代は下るが弥生時代の編み物については、鳥取県青谷上寺地遺跡で出土した籠類の実物資料を分析した野田真弓氏等の研究がある。鹿児島県内では岡元満子氏の研究によるところが大きい。また、鹿児島市（旧桜島町）武貝塚の出土資料を整理した廣田晶子氏の論考もある。これらの先行研究によると、縄文時代の編み物には大きく網代編みとモジリ編みとがあり、両者が組み合わさったものもみられる。それぞれの編み方にも多彩なパターンがあり、縄文人の用と美を兼ね備えた感覚と技術に現代人も学ぶ点が多い。

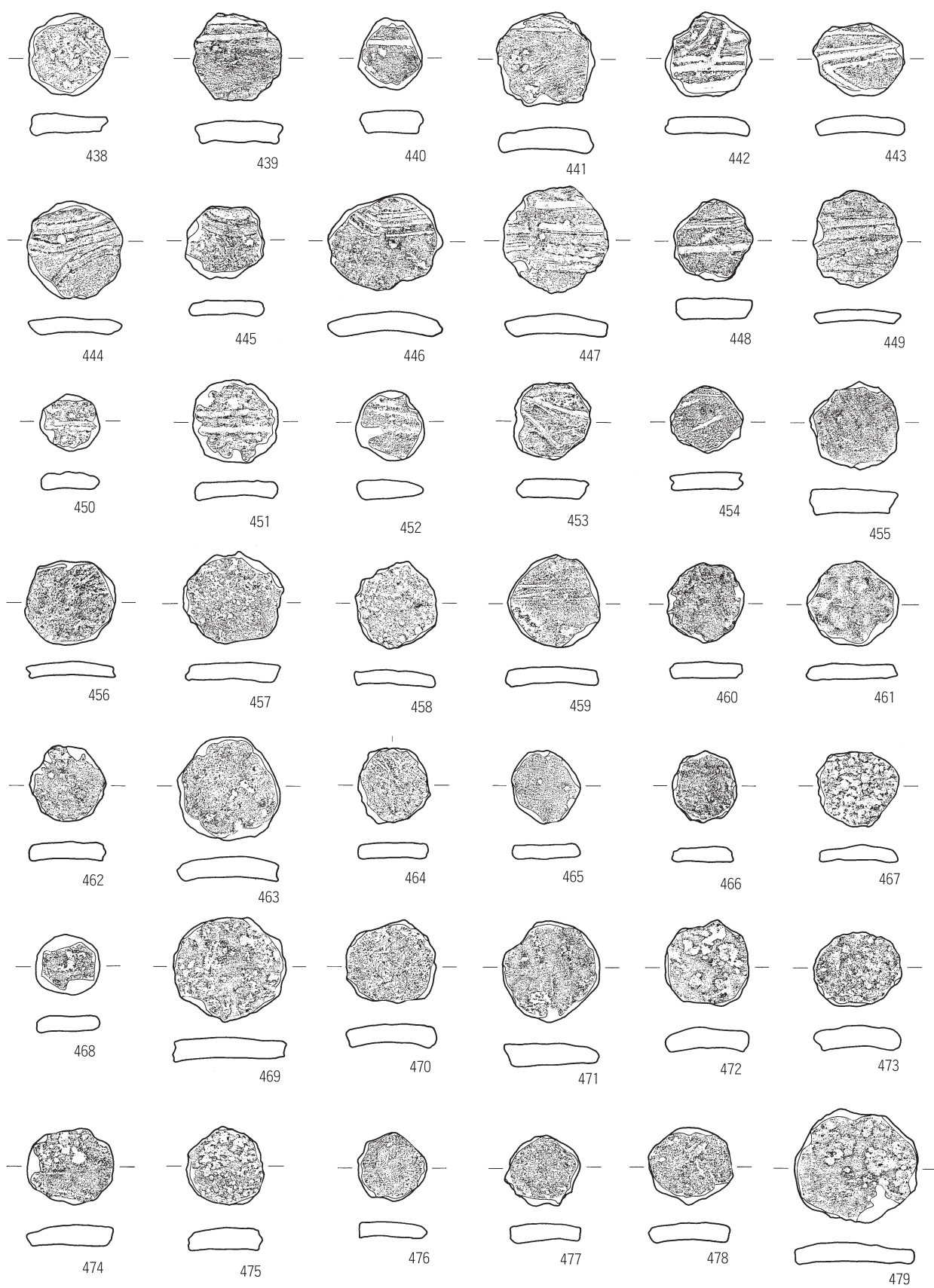
編み物については、先に用語の説明を行っておきたい。本来の籠や簾状の品物であれば、使う方



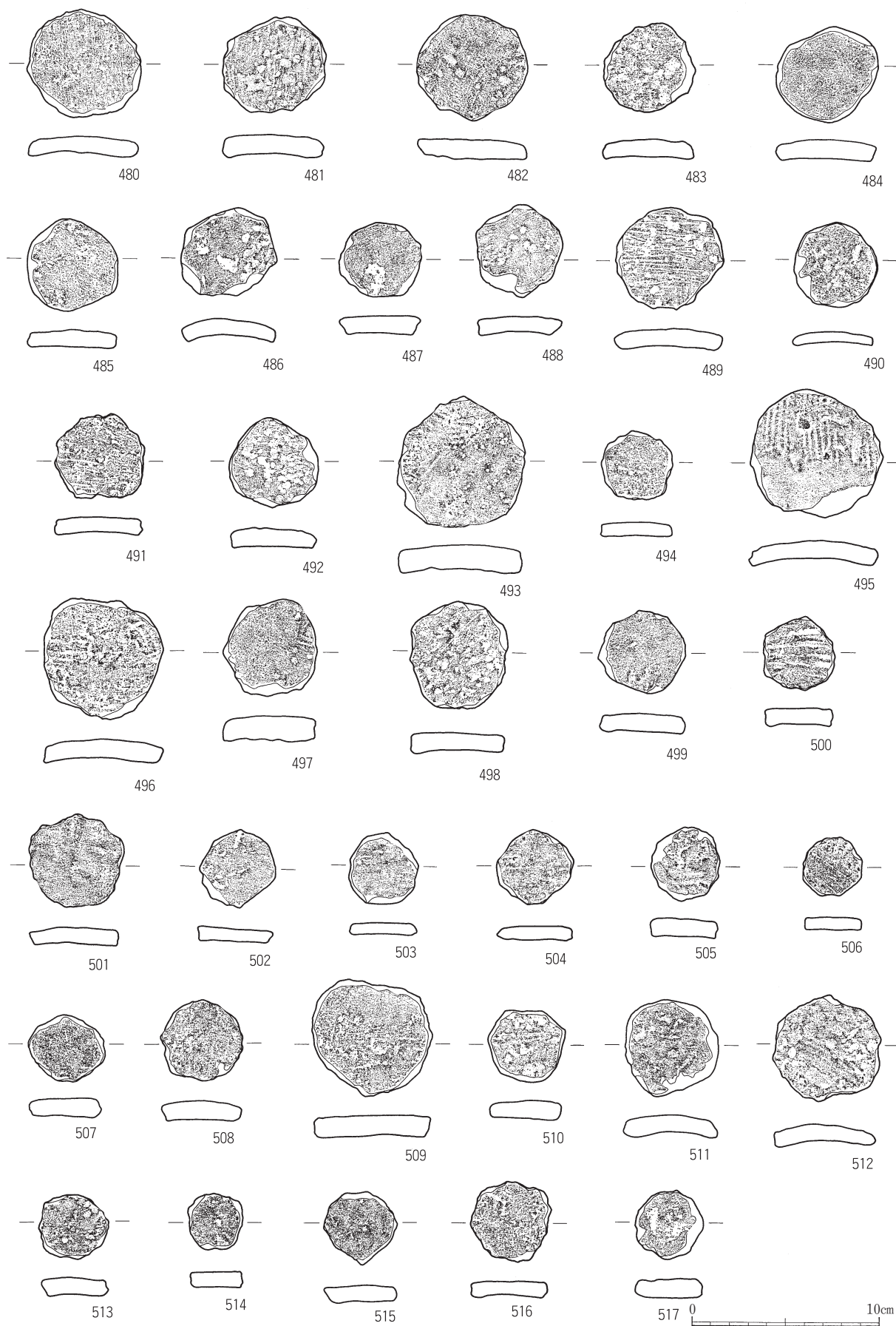
第129図 円盤状土製加工品 (1)



第130図 円盤状土製加工品（2）



第131図 円盤状土製加工品（3）



第132図 円盤状土製加工品（4）

表10 円盤状土製加工品観察表 (1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	調整・文様・色調等	胎					土				取上げ 番 号	長さ (cm)	重さ (g)	写真 図版
					外 面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり礫	その他					
第 129 図	378	H20		IIIb3	明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○			(3.9)	(8.33)		
	379	H20		IIIb3	橙色	○	○	×	○	○	×				(4.1)	(8.77)		
	380	H20		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				2.9	8.40		
	381	H19		IIIb2	明赤褐色	◎	○	×	○	○	×			15453	3.7	13.58	28	
	382	H20		IIIb2	明赤褐色	◎	○	×	○	○	×			1736	4.5	16.01	28	
	383				にふい黄橙色	○	○	○	○	◎	×				3.8	9.68	28	
	384	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		4.0	19.54	28	
	385	D20		IIIa	明赤褐色	○	○	○	○	○	×	○		19881	6.8	46.52		
	386	G20			にふい褐色	○	○	×	○	○	×				5.4	30.69		
	387				にふい褐色	◎	○	×	○	○	×	○			5.1	31.39	28	
	388	H19		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			15187	4.1	17.32	28	
	389	H19		IIIb2	にふい褐色	◎	○	×	◎	◎	×			15585	5.7	35.76		
	390				灰黄褐色	○	○	×	○	○	×				4.0	12.46	28	
	391	H20		III	明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○			5.2	30.60		
	392	H19		IIIb2	橙色	○	○	×	○	○	×			14254	4.8	22.12	28	
	393				橙色	○	○	○	○	○	×	○	小石		3.8	12.39	28	
	394				明赤褐色	◎	◎	×	○	○	×				4.9	39.05		
	395				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.7	10.82		
	396				明赤褐色	○	○	×	◎	○	×				5.7	34.38	28	
第 130 図	397	H20		IIIb2	明赤褐色	○	◎	○	○	◎	×			1937	6.9	70.29		
	398	H19		IIIb2	明赤褐色	○	○	○	◎	○	×			13917	6.0	37.68		
	399	H19		IIIb2	明赤褐色	○	◎	×	○	○	×		小石	11112	4.6	19.43		
	400				にふい褐色	○	○	×	△	△	×				5.7	40.14		
	401	H20		IIIb2	褐色	○	○	×	○	○	×		小石		4.4	22.65		
	402	H20		掘り込2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.8	29.71		
	403	E21	1住		明赤褐色	○	○	×	○	△	×			8597	4.2	26.76		
	404				赤褐色	◎	◎	○	◎	○	×	○	小石		3.5	11.62		
	405	H19		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			14114	3.4	11.07		
	406	H20		IIIb	明赤褐色	◎	◎	×	○	◎	×	○			5.3	36.66		
	407				明赤褐色	○	○	×	◎	○	×	○			3.2	7.41		
	408				赤褐色	○	◎	×	◎	○	×				3.8	14.74		
	409	H19		IIIb2	赤褐色	◎	○	×	◎	○	×		小石	16943	4.3	15.83		
	410				明赤褐色	◎	○	×	○	○	×		小石		3.7	16.66		
	411	H20		IIIb	にふい褐色	○	○	×	○	○	×	○			5.4	21.47		
	412	H20		IIIb2	明褐色	◎	○	×	○	○	×		小石		6.2	36.01		
	413	H19		IIIb3	赤褐色	○	○	×	○	○	×			15513	3.4	14.99		
	414	E20	1住	IIIa	明赤褐色	○	◎	×	○	○	×			3663	4.3	19.33		
	415				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.4	14.67		
	416	F20		IIIa	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			2252	4.0	17.07		
	417	H20		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.9	15.13		
	418	H20		IIIb3	明赤褐色	○	◎	×	○	○	×		小石	1802	4.1	15.64		
	419	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.0	13.20		
	420				明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		4.2	14.76		
	421	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				5.3	30.21		
	422				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.2	16.19		
	423	H19		IIIb2	明赤褐色	◎	◎	×	○	○	×			13843	3.8	20.76		
	424	G20		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.8	17.99		
	425	H20		IIIb2	にふい赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.8	11.31		
	426	H19		IIIb2	暗赤褐色	◎	○	×	◎	○	×		小石	14693	6.0	51.39		
	427	E19		IIIa	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			15416	3.5	11.34		
	428	H19		IIIa	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			5685	5.1	23.87		
	429				暗赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.1	16.84		
	430	H20		IIIb2	にふい赤褐色	◎	◎	×	○	○	×				4.0	21.54		
	431				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				2.9	8.01		
	432				にふい黄橙色	○	○	×	○	○	×				4.5	20.22		
	433	H18		IIIb2	にふい黄褐色	○	○	×	◎	○	×			18827	4.5	16.63		
434	H20		IIIb3	にふい黄褐色	○	○	○	○	○	×				4.1	13.42			
435				赤褐色	○	○	×	○	○	×	○	小石		4.4	16.52			
436				明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		5.2	34.65			
437	G20			赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.2	21.26			

表11 円盤状土製加工品観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	調整・文様・色調等	胎							土		取上げ 番 号	長さ (cm)	重さ (g)	写真 図版
					外 面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり礫	その他					
第 131 図	438	H20		IIIb3	明赤褐色	○	○	◎	○	○	×		小石?	1924	4.2	22.67		
	439	H19		IIIb2	暗褐色	○	○	×	○	◎	×		小石	14565	4.5	23.74		
	440	H20		III	にぶい褐色	○	○	×	○	○	×	○			3.3	14.76		
	441				明赤褐色	○	○	×	◎	◎	×				4.8	31.11		
	442	F21		II	明赤褐色	○	◎	×	○	○	×			1248	4.4	17.17		
	443	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○	小石		4.4	16.11		
	444				明赤褐色	◎	◎	×	◎	◎	×		小石		4.8	25.33		
	445	H20		IIIb2	にぶい赤褐色	○	◎	○	○	○	×				4.0	13.14		
	446	H19		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			13544	5.5	25.40		
	447	E20		IIIb	明赤褐色	◎	◎	×	○	○	×			3378	5.2	28.80		
	448	H20		III	明赤褐色	○	○	×	◎	○	×				4.0	17.87		
	449	H20		IIIb2	にぶい黄橙色	◎	○	×	◎	○	×	○	小石		4.7	14.35		
	450				明赤褐色	◎	○	×	◎	○	×				2.7	9.16		
	451	F16		IIa	明赤褐色	◎	◎	×	◎	◎	×	○	小石	5325	4.4	17.11		
	452	H20		掘り込4	明赤褐色	◎	○	×	○	○	×				3.5	12.46		
	453	E20		IIIa	明赤褐色	◎	◎	×	◎	○	×			3377	3.9	19.18		
	454	G20			にぶい赤褐色	◎	◎	×	○	○	×				3.6	11.82		
	455				赤褐色	◎	○	×	○	○	×	○			4.2	29.70		
	456				赤褐色	◎	○	×	○	◎	×				4.4	18.05		
	457	F21		IIIa	赤褐色	○	○	×	○	◎	×				4.9	25.67		
	458				赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		4.3	17.09		
	459	H19		IIIb	赤褐色	○	○	×	◎	◎	×			17975	4.6	19.72		
	460	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	△	×	○			3.7	14.58		
	461	E21	1 住		明赤褐色	○	○	×	○	○	×			10707	4.5	17.30		
	462	H20		IIIa	赤褐色	◎	○	×	○	○	×		小石	1301	3.8	14.06		
	463	H19		IIIb2	明赤褐色	◎	◎	×	○	○	×		小石	15703	5.3	36.48		
	464	H20		III	明赤褐色	○	○	×	△	△	×				3.6	12.83		
	465				明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		3.7	11.84		
	466				にぶい赤褐色	○	○	×	○	○	×	○			3.5	10.41		
	467				赤褐色	◎	○	×	○	○	×		小石		3.7	11.56		
	468	H19		IIIb2	明赤褐色	◎	○	×	○	○	×			14903	3.1	10.71		
	469	H19		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○		14328	5.7	35.28		
	470	F20		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			3739	4.3	24.89		
	471				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				5.0	31.92		
	472				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.1	23.11		
	473	H20		IIIa	明赤褐色	◎	◎	×	○	○	×			1066	4.3	19.54		
	474	H20		II	明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.4	17.12		
	475				赤褐色	◎	○	×	○	◎	×				3.6	19.93		
	476				明赤褐色	○	◎	×	○	○	×		小石		3.4	11.60		
	477				明赤褐色	○	○	×	○	△	×				3.5	12.93		
	478				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				4.1	13.41		
	479	G20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			1853	6.2	38.22		
第 132 図	480	G18		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石	18967	5.8	29.56		
	481	G20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			1854	5.2	29.67		
	482	G19		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			3947	5.4	30.79		
	483	H20		IIIb	橙色	◎	○	×	○	○	×	○			4.6	22.84		
	484	H19		IIIb3	橙色	○	○	○	○	○	×			17719	5.4	24.43		
	485				にぶい黄橙色	◎	◎	×	◎	○	×				4.6	19.47		
	486				にぶい黄橙色	○	○	×	○	○	×				4.9	19.91		
	487	H20		IIIb2	橙色	○	○	○	○	○	×				4.0	17.45		
	488	H20		II	明赤褐色	◎	◎	×	◎	○	×		小石		4.3	18.67		
	489	H20		IIIb2	明赤褐色	◎	◎	×	◎	◎	×	○			5.4	33.08		
	490	H19		IIIb2	明赤褐色	○	△	○	○	○	×			13997	4.3	11.35		
	491	E20	1 住	IIIb	にぶい橙色	○	○	×	○	○	×		小石	3606	4.4	21.34		
	492	H19		IIIb2	赤褐色	○	○	○	○	○	×			13859	4.4	22.15		
	493	G19		IIIb2	暗赤褐色	◎	○	×	○	○	×			12368	6.9	69.06		
	494				明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○			3.6	11.17		
	495	G19		IIIa	明赤褐色	◎	○	×	○	○	×			4041	6.8	49.26		
	496	H18		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○		19017	6.0	47.96		
	497	G21		I b	にぶい褐色	○	○	×	○	○	×				4.8	37.77		

表12 円盤状土製加工品観察表 (3)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	調整・文様・色調等	胎								取上げ 番 号	長さ (cm)	重さ (g)	写真 図版
					外 面	石英・長石	角閃石・輝石	金色雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり礫	その他				
第 132 図	498	H19		IIIb2	にぶい褐色	○	○	×	○	○	×			13180	5.4	31.79	
	499				にぶい褐色	○	○	×	○	○	×				4.4	18.94	
	500				明赤褐色	○	○	×	○	○	×	○			3.5	13.21	
	501	E20	11住	IIIb	明赤褐色	○	○	△	○	×	×			3642	4.7	21.95	
	502	H20		IIIb2	明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		3.8	12.50	
	503				明赤褐色	○	○	×	○	○	×				3.4	9.82	
	504				にぶい褐色	○	○	×	○	○	×				3.9	12.76	
	505				明赤褐色	○	○	△	○	○	×	○			3.6	15.02	
	506	F20	2住	IIIa	明赤褐色	○	△	×	○	○	×		小石	2349	2.8	9.05	
	507				明赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		3.6	14.56	
	508	G19		IIIa	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			1963	3.9	17.37	
	509	G19		IIIa	明赤褐色	◎	◎	×	◎	◎	×			3924	6.2	53.94	
	510				赤褐色	○	○	×	○	○	×		小石		3.6	16.80	
	511	G20		III	赤褐色	○	○	×	○	×	×				4.7	27.19	
	512	H19		IIIb2	明赤褐色	◎	◎	◎	◎	◎	×	○	小石	14677	5.6	32.70	
	513				暗赤褐色	○	○	×	△	×	×				3.5	14.25	
	514	D20		IIIa	明赤褐色	○	△	×	△	×	×	○		20156	2.7	8.26	
	515				にぶい褐色	○	○	×	△	×	×				3.6	11.78	
	516	F20		IIIa	にぶい褐色	○	○	○	○	○	×			2307	3.8	15.37	
	517	E20		IIIb	明赤褐色	○	○	×	○	○	×			3502	3.3	12.98	

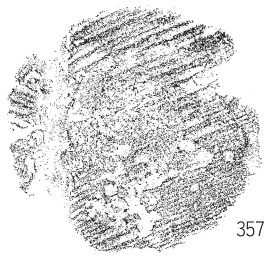
向によって上下が決まるので、縦方向か横方向かがはっきりするのであるが、底部圧痕の場合は品物の一部であるので、上下の方向は確定できない。例えばモジリ編みの場合、簾状のものであればモジリ編みの方が縦方向になるが、籠状のものであれば回す材料となるのでモジリ編みが横方向となる。そこでモジリ編みの場合、巻きつかれる方を「地材」、巻きつく方を「巻き材」と便宜的に呼んでおきたい。網代編みの場合は、上下そのものがはっきりしないので、縦横を決めることは出来ない。したがって、タテ材・ヨコ材として使っている言葉は、便宜上使っているもので厳密な使い方ではないことをお断りしておく。

次に繊維の撚りやモジリ編みにした場合の撚りの方向であるが、「右撚り・左撚り」や「時計回り・反時計回り」などの呼び方がある。これらの呼び方ではどちら方向かイメージできないので、被服学で用いる「S字撚り・Z字撚り」を使うが、圧痕の状態ではなく本来の撚り、すなわち陽像をつくって見た場合を示している。経験上右利きで編む場合、巻き材が縦になる簾状も、巻き材が横方向に巡るモジリ編みの時もS字撚りの方が編み易い。

山ノ中遺跡の圧痕例

357は羽状の葉脈をもつものである。成尾英仁氏によると、この葉っぱはオオタニワタリという植物とのことである。オオタニワタリはシダ科の植物で、紀伊半島以南の暖かい場所に生育している。鹿児島市草野貝塚でもオオタニワタリの圧痕土器が出土しているので、後期前半から中半にかけての土器が作られた場所周辺は、オオタニワタリが育つぐらいの暖かい気候だったことがわかる。

361・370・372は、カゴ類の底付近を使用したものである。361は放射状に2本を単位とする地材を並べ、その1本1本を絡めるように2本の巻き材で編み込んでいる。巻き材の編み方はS字撚りのモジリ編みである。地材・巻き材ともに比較的隙間が広い。地材の途中では2本を1本にしている部分がみられ、円周が大きくなるにつれて地材の間隔が開くことを補正している様子が窺える。370は361よりも目の細かなもので、地材の本数も多いと考えられる。編み方は、S字撚りのモジリ編

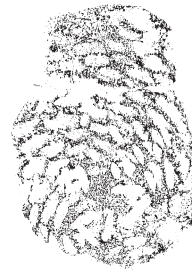


357

オオタニワタリの葉脈



361

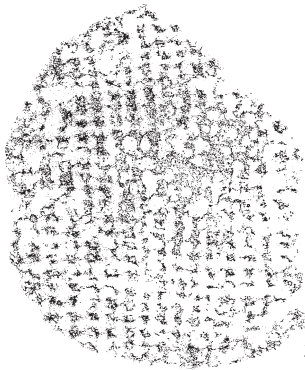


370

モジリ編みによるカゴ類



372



366



365

スダレ状にみえるモジリ編み



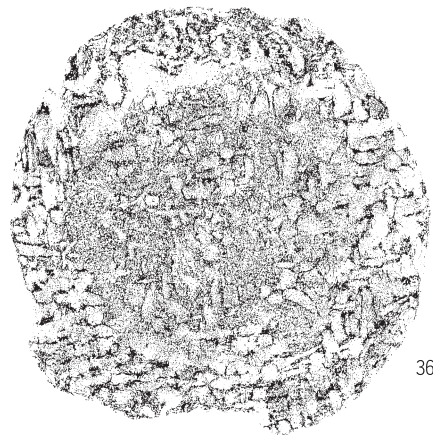
235



359



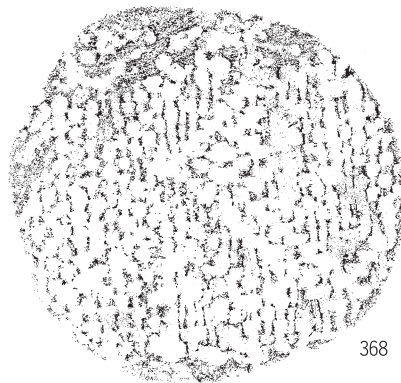
293



364

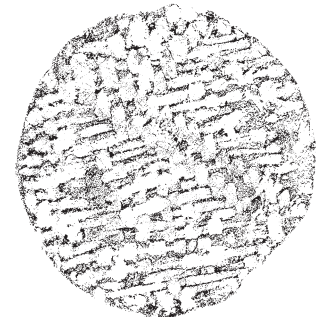


371



368

網代編み各種



369



第133図 底部圧痕のいろいろ

みである。372はさらに目の詰まったもので、繊細なつくりである。底の中心部もみられるが、地材の並べ方が菊目底かどうかはわからない。この様な目の細かなモジリ編みにするには、普通の蔓では無理である。ほぐしたような柔らかい繊維でなければ、目が詰まっていけないようである。

365は、スグレ状に見えるが、地材が途中で分かれていることから、カゴ類であると考えられる。拓本の右端には、地材を2本越しにした部分がみられ、Z字撚りとS字撚りを重ねることによって羽状の装飾効果を出している。366と235はスグレ状のモジリ編みなのか、カゴ類なのかの判断はつかない。

最も多いのが網代編みである。371は1本越え1本潜り1本送りを基本とする網代であるが、一部分を2本越え1本送りを羽状にしてあり、文様効果を出してある。タテ材とヨコ材は違う材質、もしくは同じ材質でも加工の仕方が異なっていると考えられ、幅もしなやかさも差がある。タテ材は3mmと細く硬そうであり、ヨコ材は5～7mmの幅でしなやかである。

368と369は1本越え1本潜り1本送りを基本とする網代であるが、一部分に2本越え1本送りを効果的に羽状に配してあり、文様効果を出してある。タテ材とヨコ材は違う材質、もしくは同じ材質でも加工の仕方が異なっていると考えられ、幅もしなやかさも差がある。つくりとしてもデザインとしても精巧に出来ている。

網代底にみられる網代の材質は竹であるだろうと考えられてきたが、実際竹で編もうとするとどうしてもうまくいかない点がある。それは、2本越え2本潜りや3本越え3本潜りではうまくいくものの、1本越え1本潜りでは目が詰まらずに隙間が開いてしまうのである。竹の厚さを1mm以下にしても同様であり、もっと柔軟性のある材質でなければ1本越え1本潜りの編み方は不可能であることが解る。

鹿児島県内での縄文土器底部圧痕例は13,000年前の草創期からあり、中種子町三角山遺跡ではモジリ編みが知られている。9,500年前の早期前半の前平式土器にもモジリ編みがあり、8,000年前の早期中頃の日置市（旧東市来町）市ノ原遺跡出土押型文土器には格子状の地材に巻き材をからめている例がみられる。このように縄文時代の早い段階から編物がつくられており、縄文時代の道具の多様性が窺える。

植松なおみ 1981 「東北型網代圧痕について ―鳥取市桂見遺跡出土資料の再検討を中心に―」『古代文化』33(2) 古代学協会

岡元満子 1986 「底部に圧痕を有する縄文土器について ―南九州におけるいわゆる網代底とその背景―」『鹿大考古5』 鹿児島大学法文学部考古学研究室

加藤亜希子・佐々木由香 2002 「考古学における編組製品の研究」『人類誌集報2002』東京都立大学考古学報告8 人類誌調査グループ

成尾英仁1994「縄文土器の植物葉圧痕について」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会

野田真弓・本間一恵・金原正明 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書8 鳥取県埋蔵文化財センター

廣田晶子 1998 「第7章 出土土器底部の編物圧痕 ―武貝塚における編みの技術と地域性―」『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書第16集 奈良大学文学部考古学研究室

③底部白色付着物

山ノ中遺跡の発掘調査中から、白色の付着物が底部底面でよく観察された。鹿児島市草野貝塚出土の縄文土器底部を整理・報告した岡元満子氏は、「その他、土器底部に関して注意をひくものに、底面に付着した白色物がある。この例は決して少なくない。圧痕の有無・器形の違いにかかわらず付着している。付き方も全体に薄く付着するものがある一方、網代底では、圧痕を塗りつぶすように凹部にはいり込んでいるものがあった。この白色物が何であるのか、何故付着するのか、今後検討する必要がある。」と、述べている。多くの方々が気付いていながら、その出自や原因について明文化されたものを知らない。本田道輝先生からは「土器製作の際に台から離しやすいように餅取り粉のような役目をはたしたのではないか。」という話を伺ったことがあり、また、山ノ中遺跡を発掘していた当時中学生だった吉満亮さんは「敷物を敷いたまま焼いたので、その灰が付着したのではないか。」との意見を述べていた。

白色の付着物がみられるのは平底だけではなく、丸底や尖底にもある。縄文時代前期に位置づけられる轟式土器と曾畑式土器の丸底の底面や、中期前半に位置づけられる条痕文尖底土器の尖底部にも白色の付着物はみられる。また、脚台状の底部であっても接地面に白色付着物がみられる。一方、煮沸具以外の用途と考えられる浅鉢形土器の底部に、白色の付着物はみられない。

以上のことから、煮沸用として直接火床に接した土器に白色の付着物は多く、灰の可能性が導き出される。縄文土器は熾火（おきび）の中に置かれ、灰に接した時間も長かったと考えられる。炎を利用した弥生時代以後の煮沸方法とは異なる。灰であることの証明方法は、pH検査などによらなければならないが、今回は行っていない。可能性だけを提示しておきたい。木灰および灰汁の効用は、屋外炉で記したように幅広く、縄文人の知恵が現在にも受け継がれていると考える。

岡元満子 1988 「2 底部」『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（9） 鹿児島市教育委員会

④木の実

山ノ中遺跡で出土した炭化物は約90点あり、木の実と樹木の炭化物がある。木の実については、平成7年に名古屋大学教授渡辺誠先生にみていただき、コナラ属の一種とチャンチンモドキがあることがわかった。その当時、他の炭化物を名古屋大学年代測定資料研究センターで測定していただいたところ、 $4,000 \pm 70$ と $3,990 \pm 70$ という測定値を得ている。今回の整理作業にあたって、遺構内出土の炭化物の科学分析を行ったところ、第VI章のような分析結果を得た。木の実については、コナラ属の炭化子葉であることがわかった。

(3) 縄文石器

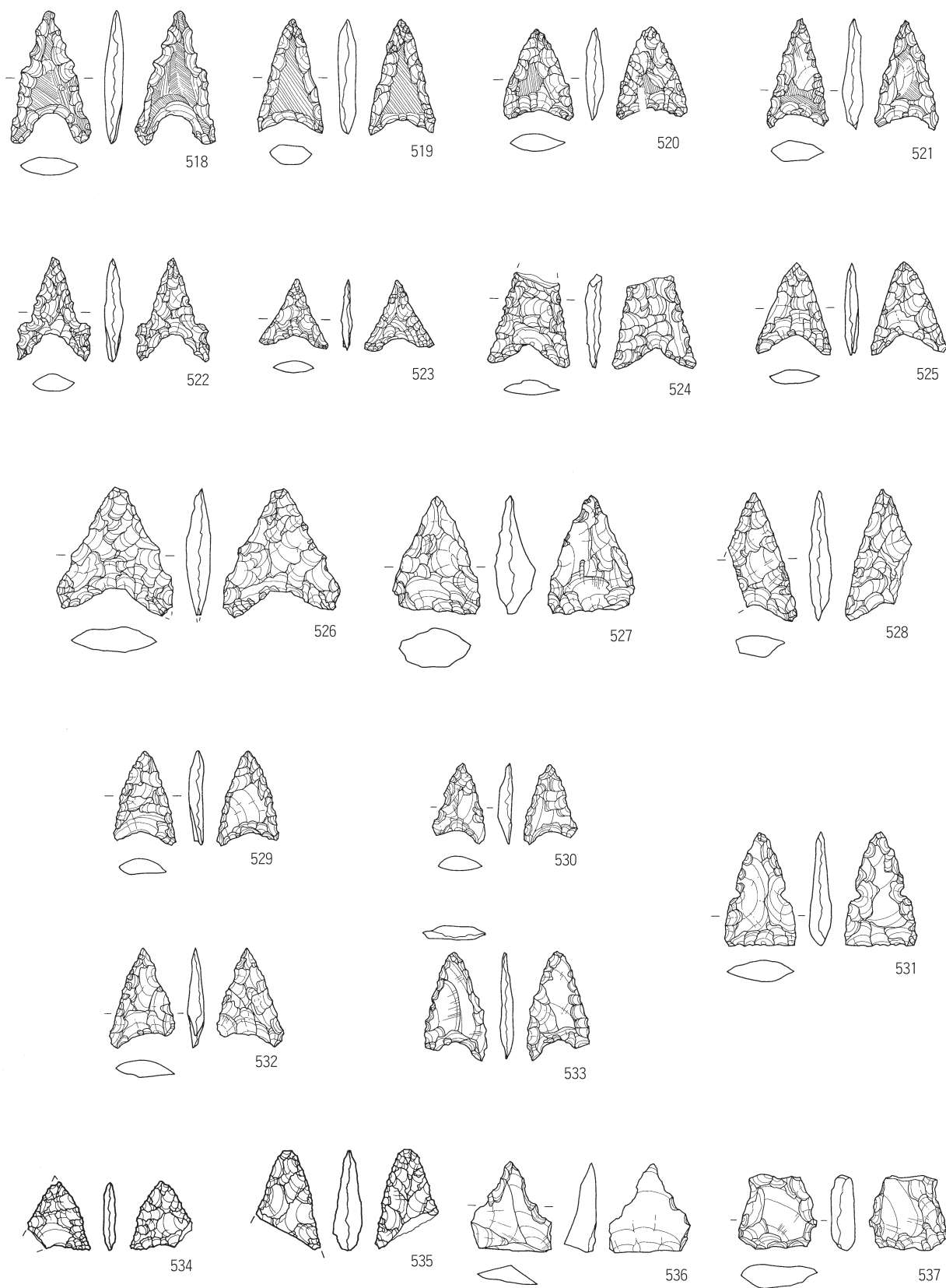
発掘調査時点で、出土した全ての石を出土位置に残すか、2 m四方ごとに集めるかして、全点に目を通してから平板で取り上げるか、もしくは持ち帰るかどうかを選別した。

山ノ中遺跡で出土した縄文時代の石器は、石鏃、石匙、剥片石器、石核、玉類、ノミ形磨製石器、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、砥石、擦切石器、軽石製品がある。水洗い後、定形化したものや人工的な加工痕のあるものについては、極力掲載するように努めたが、全てを図化する訳にはいかなかった。石器組成の傾向がつかめる程度には掲載したつもりである。全て縄文時代後期前半に時期が限定される資料であり、当時の生活の復元や他の時期あるいは他の地域と比較して使うのには有効であると考ええる。

①石鏃

山ノ中遺跡で出土した全ての石鏃を図化した。518～521は押圧剥離と研磨を同時にもっている石鏃である。両面とも研磨されており、押圧剥離は他の石鏃に比べて大ぶりである。519～521が押圧剥離の後研磨されており、石材も共通している。また、519と521は形状が似ており、520も基部は共通する。518は研磨の後押圧剥離を加えて成形するものである。基部の抉りが深く、長脚状になる。522は長脚の二等辺三角形鏃であるが、側縁の腰の部にアクセントを残し、ロケット形の特異な形状をもつ。531は平基の二等辺三角形鏃であるが、側縁の中央付近に抉りを施すのが特徴的である。柄との接着に関係する機能的なものかもしれない。527・531・537が平基式である以外は、全て凹基式である。

石鏃は矢の先につける矢じりで、弓につがえて動物を捕る道具である。518～521のこれら4本の石鏃は、これまでに出土した石鏃と異なる特徴をそなえているという点で、共通している。打ち欠いてつくった部分（打製）と磨いてつくった部分（磨製）が同一の石鏃の中にみられるからである。一般的に、縄文時代には打製石鏃が主体を占め、磨製石鏃はそれほど多くはない。ただし、南九州では縄文時代草創期から早期にかけて、磨製石鏃がみられる点が他の地域と異なる。打製石鏃は、押圧剥離技法と呼ばれる黒曜石やチャートなど粒子の非常に細かな石の一点に力を集中して加えると、石のかけらがピーン、ピーンと薄く剥がれる性質を利用して三角形に形づくられる。この押圧剥離技法によると縁がギザギザになり、切れあじも鋭く、動物のかたい皮も突き貫ける。今回出土した山ノ中遺跡の石鏃は、縁の部分は押圧剥離によってギザギザになっているが、内側の方は丁寧に研磨されている。そのようにした理由として、①「石鏃の内側まで押圧剥離が届かず、厚くなったので研磨することによって薄くした。」②「石材が良質ではなく、押圧剥離だけではうまく形づくれなかった。」③「伝統的にこの技法でつくった石鏃を使う集団がいた。」④「例えば、お祭りなど特別な時に利用した。」など、いろいろなことが考えられる。他にこのような例を探すと、志布志市（旧志布志町）十文字遺跡や倉園A遺跡、曾於市（旧末吉町）宮之迫遺跡があり、どの遺跡も山ノ中遺跡と同じ4,000年ぐらい前で、ちょうどこの時期に打製と磨製が折衷した石鏃が流行したようである。石鏃全体の中ではこのような石鏃の発見は少なく、鹿児島県外の事例も含めて検討していくことが今後の課題である。なお、西北九州の縄文時代早期の事例を検討した渡邊康行氏は、研磨のみられる石鏃について毒矢の可能性を指摘している。



第134图 石器 (1)

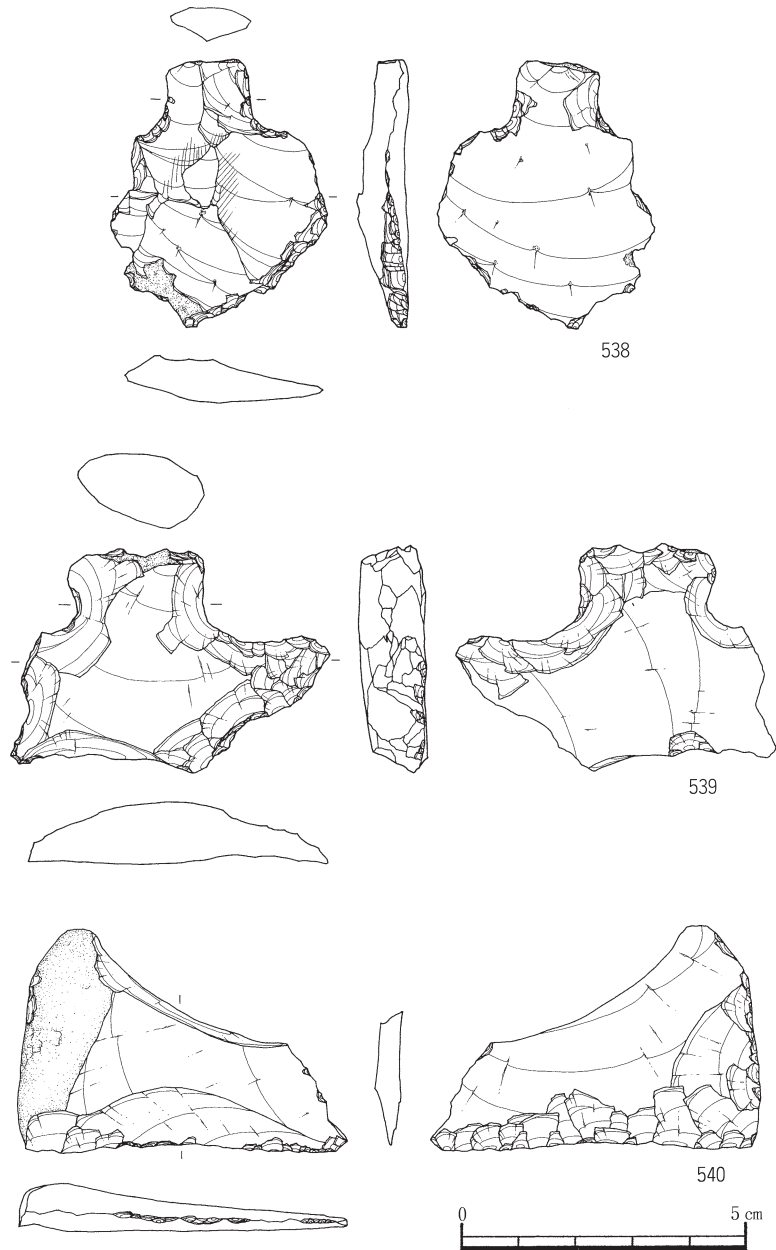
宮田栄二 1994 「縄文早期の磨製石鏃」『縄文通信』

No.8 南九州縄文研究会

渡邊康行 2005 「石鏃研磨考 —西北九州縄文早期における毒矢の可能性—」『西海考古』第6号 西海考古同人会

②石匙

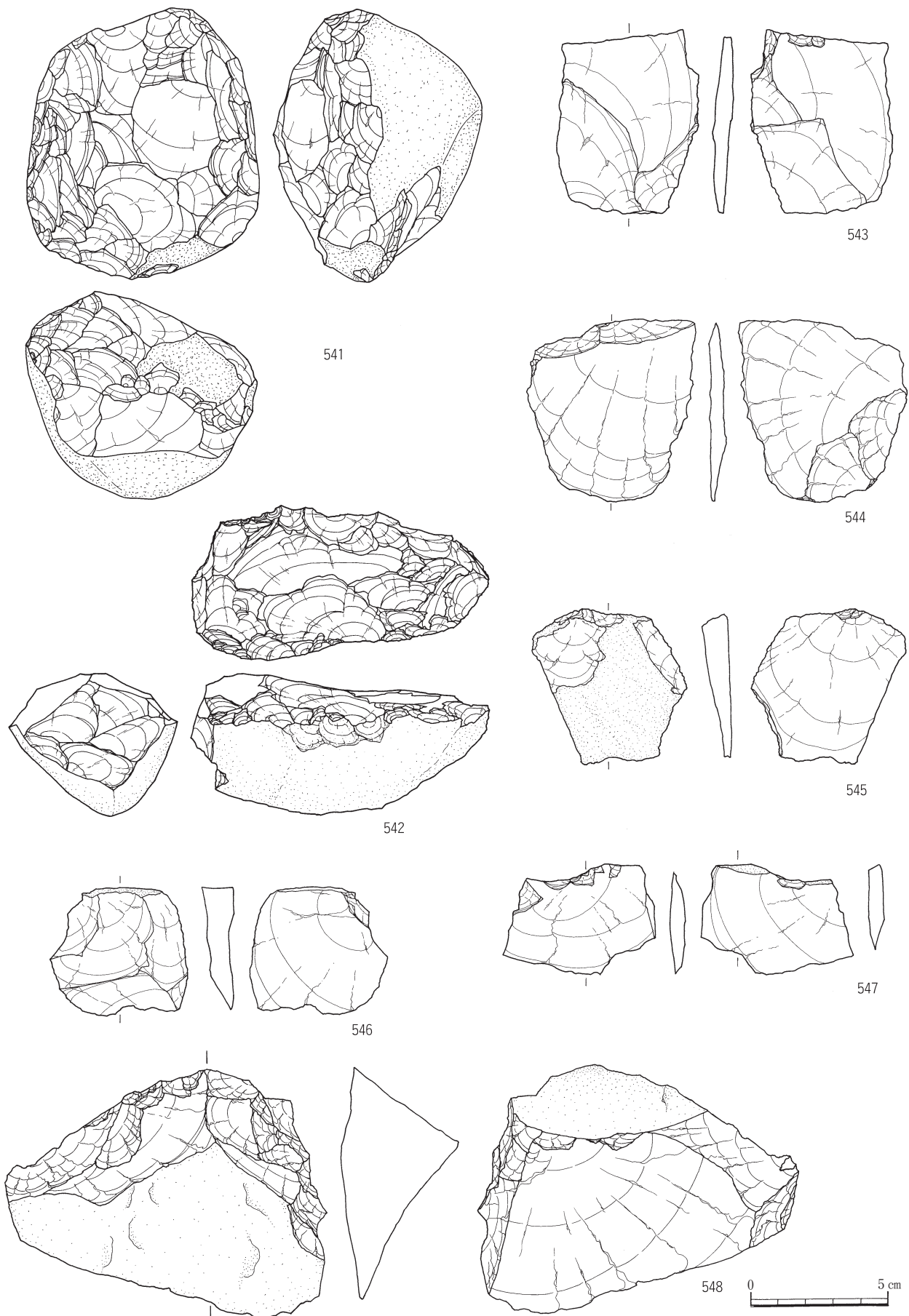
538～540は石匙である。538と539にはつまみが残っているが、他の遺跡に比べて大ぶりである。また、身部の形状も統一性がなく、刃部のつくりも粗雑である。他の石器に比べて数が少ない点も、他の時期の縄文遺跡と異なる。石匙は動物を解体したり物を切るための道具であり、材質は異なるものの、いつの時代にも必要なものである。その道具が全部で3点しか出土しなかったことについては、移動に際して持って行ったか、他に代用品があったのか等考慮しなければならない。石鏃の少なさを併せると、動物に対する依存度が小さかったと考える。



第135図 石器（2）

③剥片石器

本遺跡では安山岩製の剥片が多量に出土し、パンケース4箱分にのぼった。1,456点で24.6kgとなった。石核2点と剥片6を図示したが、写真図版31のようにかなりの量である。541と542は石核であり、中心に向かって全周から剥片を作出している。543～548は剥片であり、形状や大きさにまともりはみられない。縁辺に刃こぼれしたような痕跡がみられるものはあるが、意識して加工したものはない。549は、砂岩を素材とする石核であり、平坦な打面の全周から剥片を作出している。



第136图 石器 (3)

上述のような安山岩製の剥片が、どのような用途として使われたのか不明であるが、曾於市（旧末吉町）宮之迫遺跡や鹿児島市（旧桜島町）武貝塚・日置市（旧伊集院町）上ノ平遺跡でも同様な石器が多く、山や海など立地に関係なく同時期の特徴の一つである。

④石製垂飾品

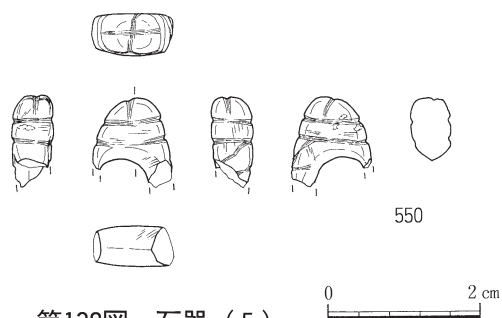
550は緑色の石材を素材とした玉であり、欠損しているものの穿孔されていることから、垂飾品と考えられる。穿孔は両面からなされており、孔の直径は7mmに復元できる。垂飾品の上部と考えられ、側面に2条の線刻が巡り、上面にも「十」字状に線刻が施される。本遺跡での出土は1点のみである。

南九州の玉類については、縄文時代早期末から前期にかけて

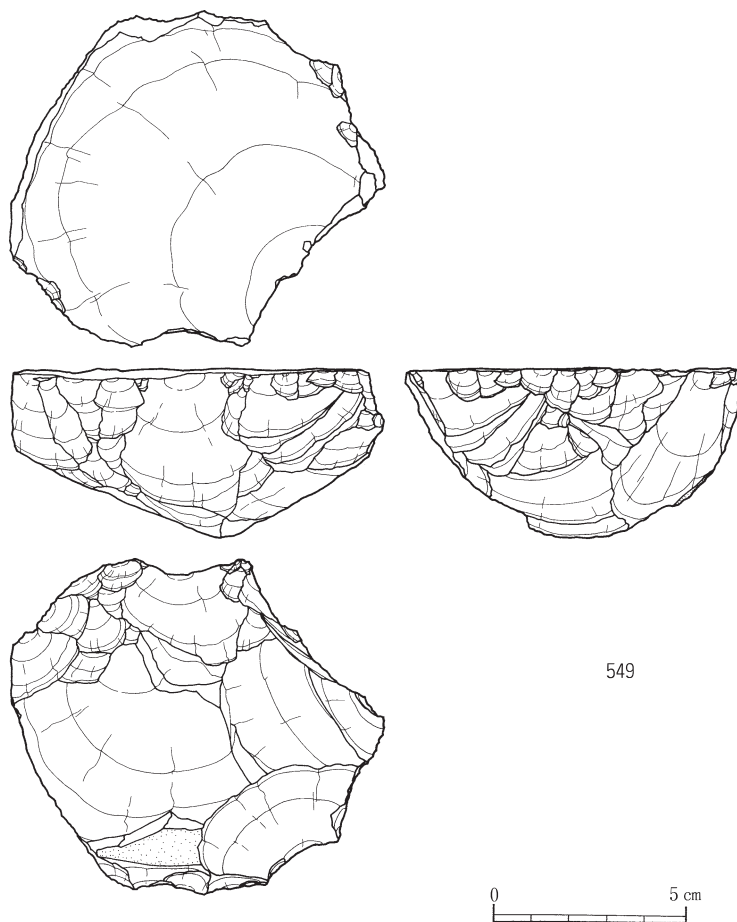
の玦状耳飾や後期後半から晩期にかけての勾玉や管玉などの出土例が多いが、縄文時代中期から後期中半にかけての例は少ない。そういう意味でも本例は希少なものであり、その系譜や石材原産地を追究することが今後の課題である。

⑤ノミ形磨製石器

551～586は、厚さ2cm以下の扁平な石斧である。刃部の幅によって、さらに2種類に分けることができ、2cm以上のもの（551～560・585・586）と2cm未満のもの（561～584）がある。石材には



第138図 石器（5）

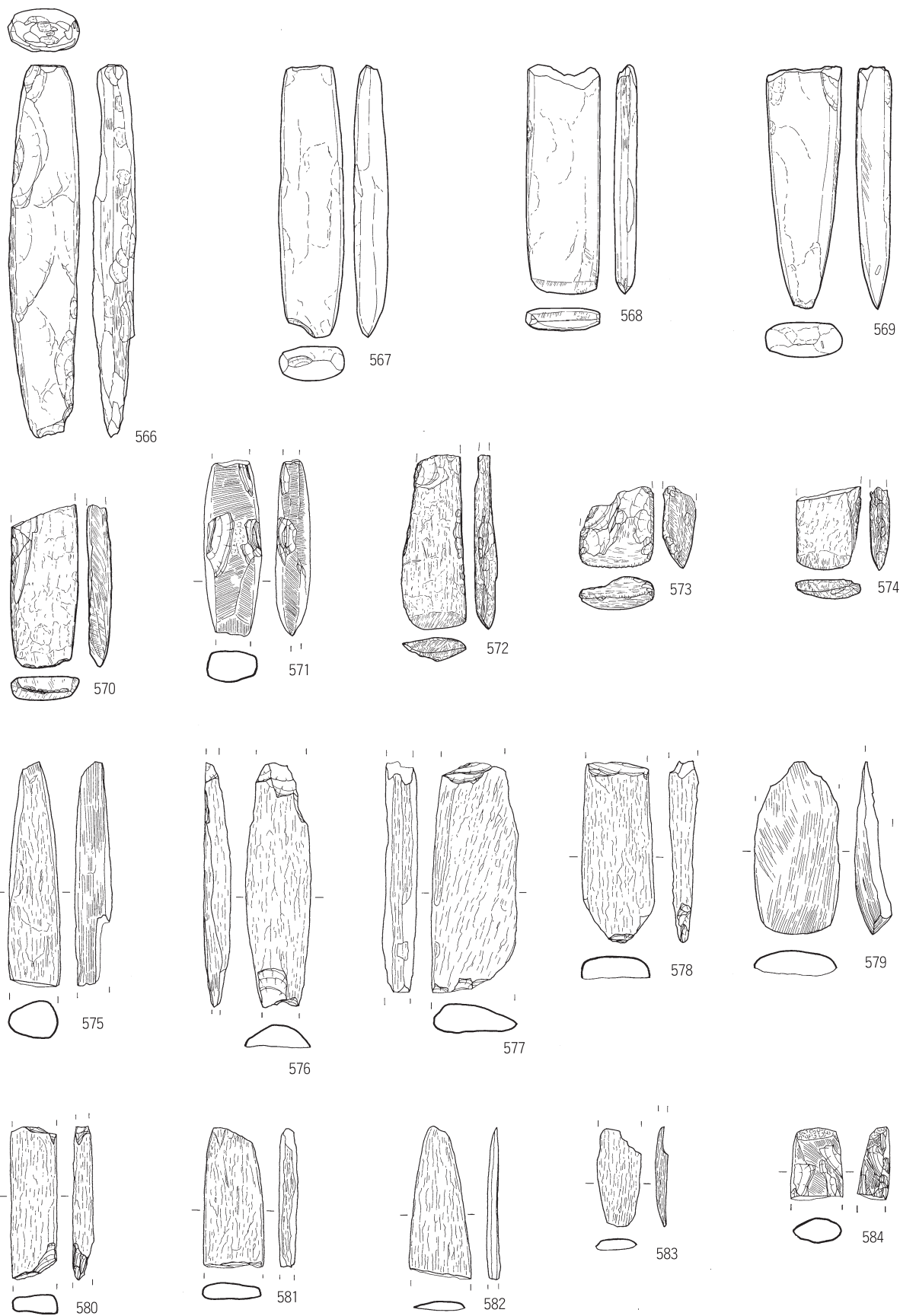


第137図 石器（4）

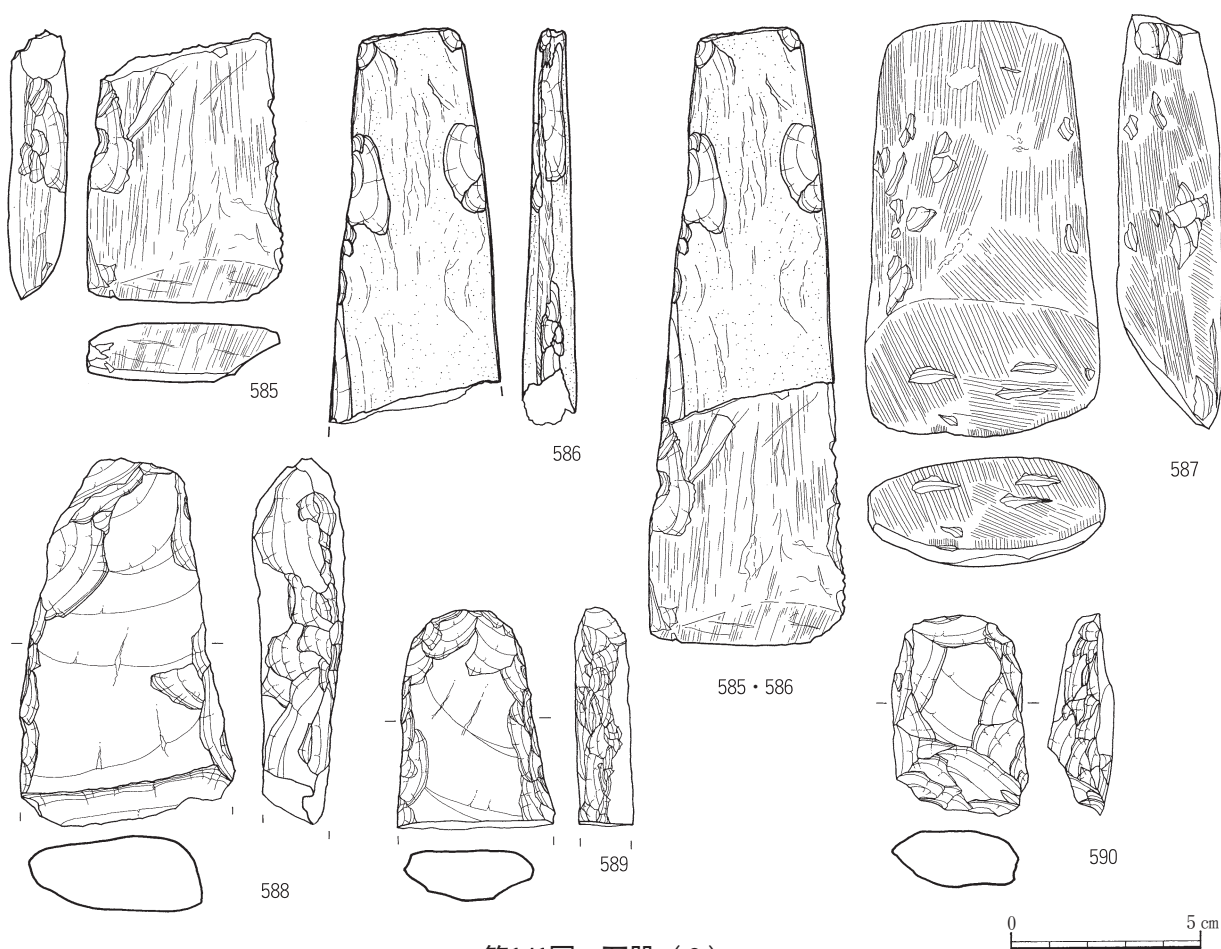
蛇紋岩製と頁岩製・砂岩製及びホルンフェルス化したものなど比較的硬い材質が選ばれている。ほとんどが片刃であり、木材加工用として、手斧や鑿のような使われ方をしたのではないかと考えられる。他の遺跡と比較して出土量が多い。585と586は接合し、16.3cmの長さとなった。587は偏平ではないものの、片刃をなすものである。588～590は



第139图 石器 (6)



第140图 石器 (7)



第141図 石器（8）

剥離のみにとどまるもので、敲打成形以前の製作途中のものと考えられる。木製品が残っていないので何とも言えないのであるが、これほどの細かな道具があるということは、建築部材の加工だけではなく、日常使う様々な木製品に対しても細かな文様や細工がなされていたと想像される。

⑥磨製石斧

ノミ形磨製石器と磨製石斧は243点出土し、そのうちの小破片を除く122点の磨製石斧を図示した。分類にあたっては、本来使用していた時の状態で、形状・法量・刃部の断面形・石材などの属性を基に細分すべきであるが、本遺跡出土の磨製石斧は敲打具として転用されているものが多い。したがって、本来磨製石斧として使用された状態を復元することは困難であるので、敲打具として転用される過程を基に分類を行うことにする。

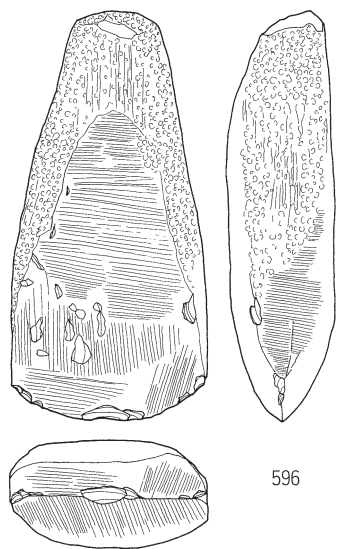
まず、残存した部位を基に、全形がわかるものをA、刃部のみをB、基部のみをC、頂部のみをDとした。そして、どちらか一方に石斧以外の使用痕が認められるのを1、両端にみられるものを2、どちらにもみられないものを0として分類した。さらに再利用に際して剥離痕の認められるものをa、剥離痕と敲打痕の両方認められるものをb、敲打痕のみ認められるものをcとした。敲打痕のみ認められるcとしたものの中には、頻繁に敲打したため剥離痕がみえなくなってしまったものも含まれていると考えられる。



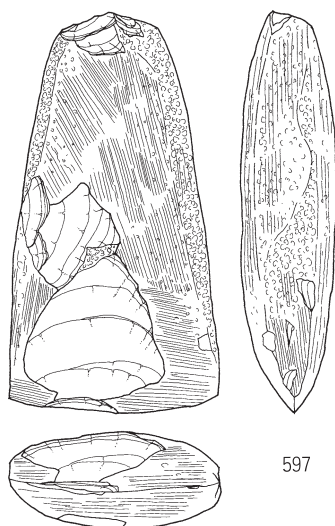
第142図 石器（9）

667と674は、破損したために再利用したのではなく、刃部の研ぎ直しを何回も繰り返した結果、これ以上石斧として使える長さを保てなくなったために、敲打具として再利用したものである。どちらも10cm未満である。

山ノ中遺跡出土の磨製石斧をみると、石斧として使われている途中と考えられるものは、591・



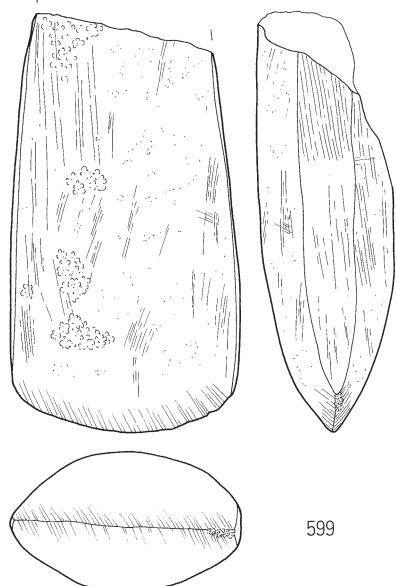
596



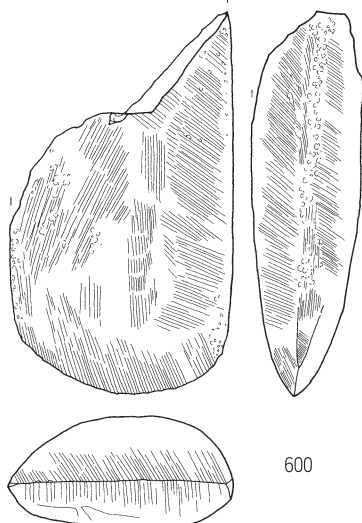
597



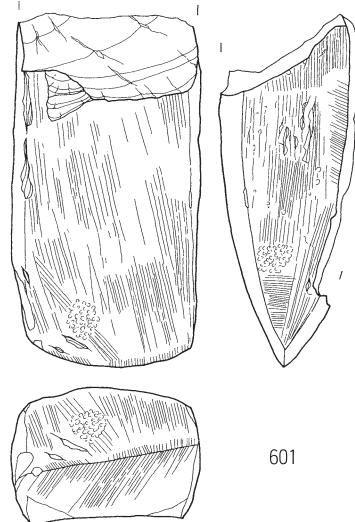
598



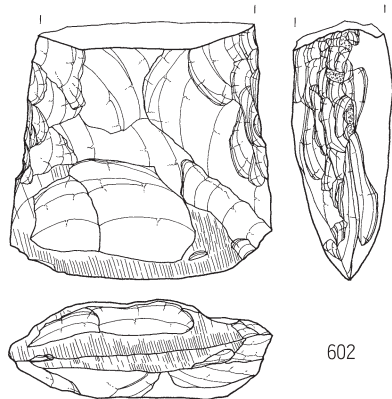
599



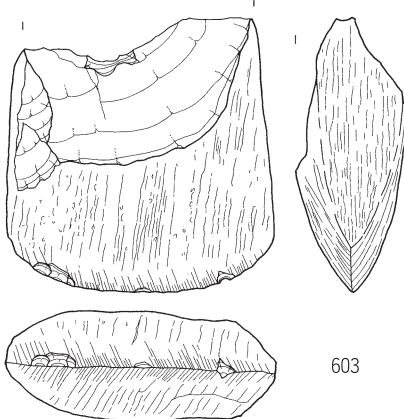
600



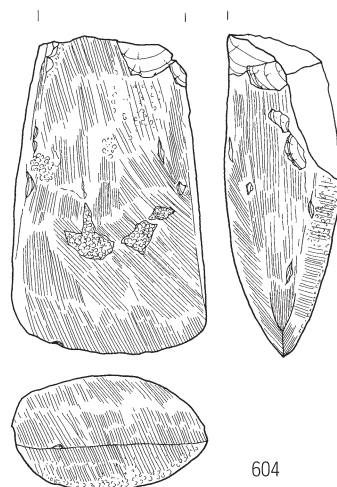
601



602



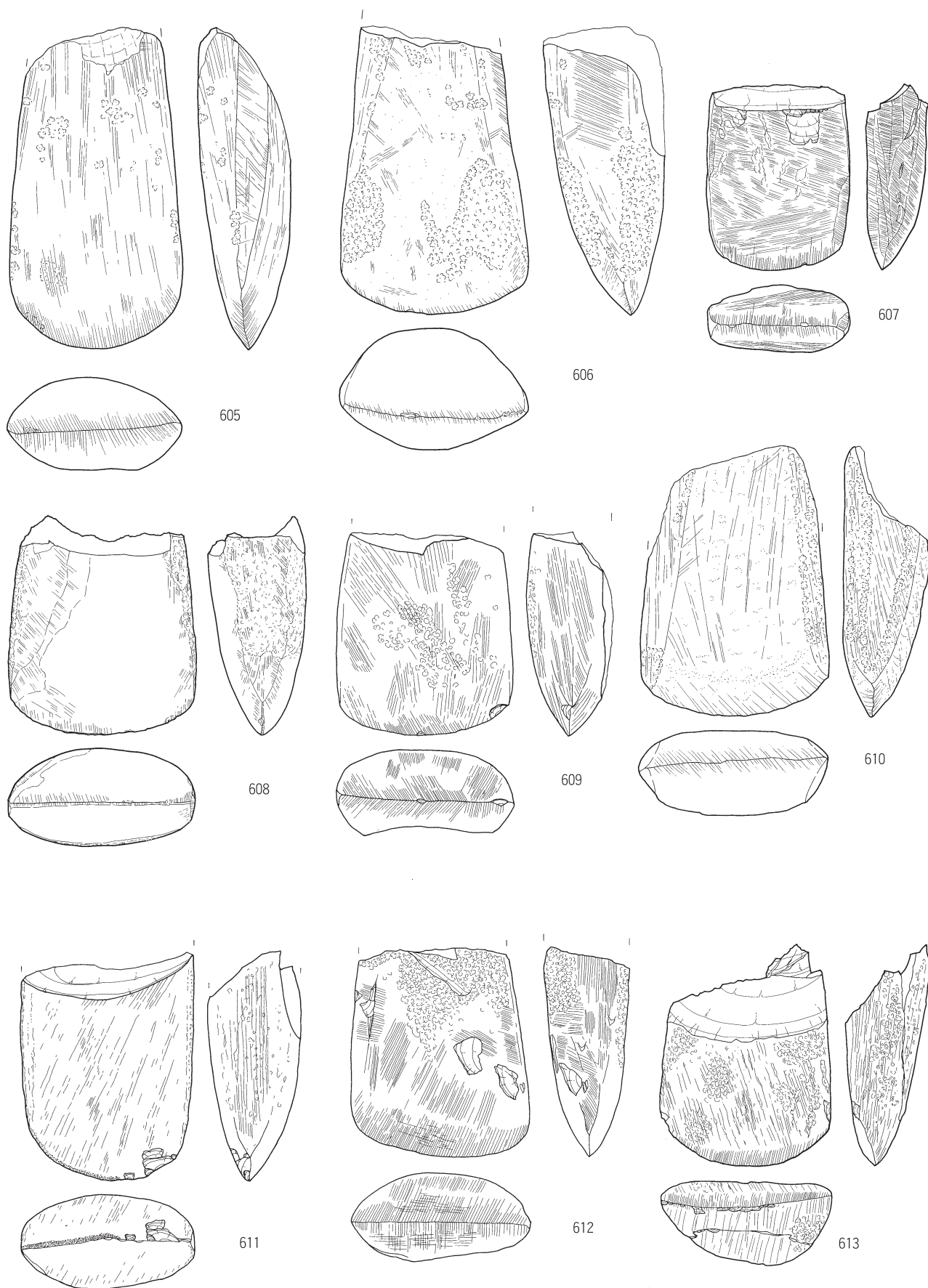
603



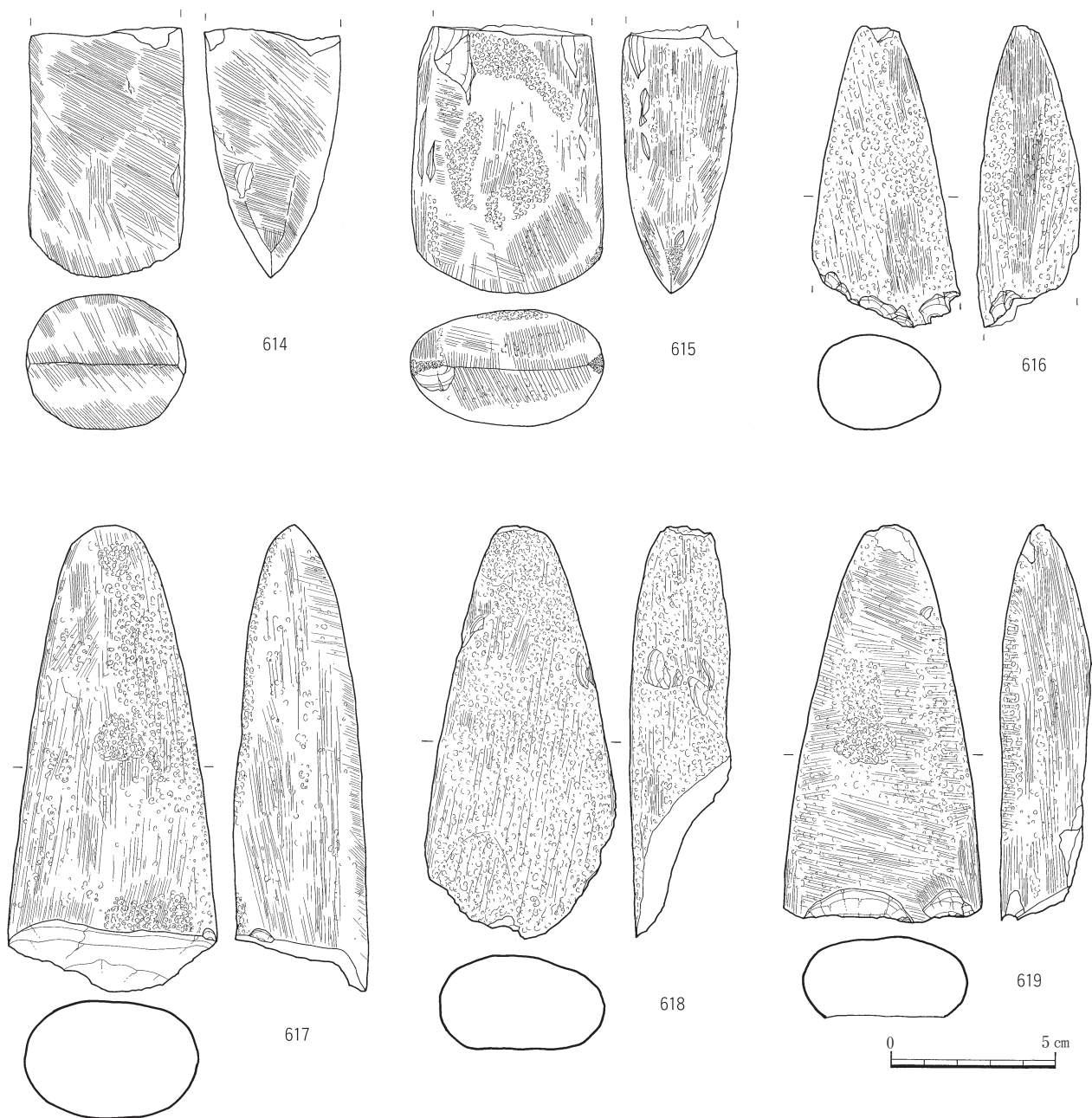
604



第143图 石器 (10)



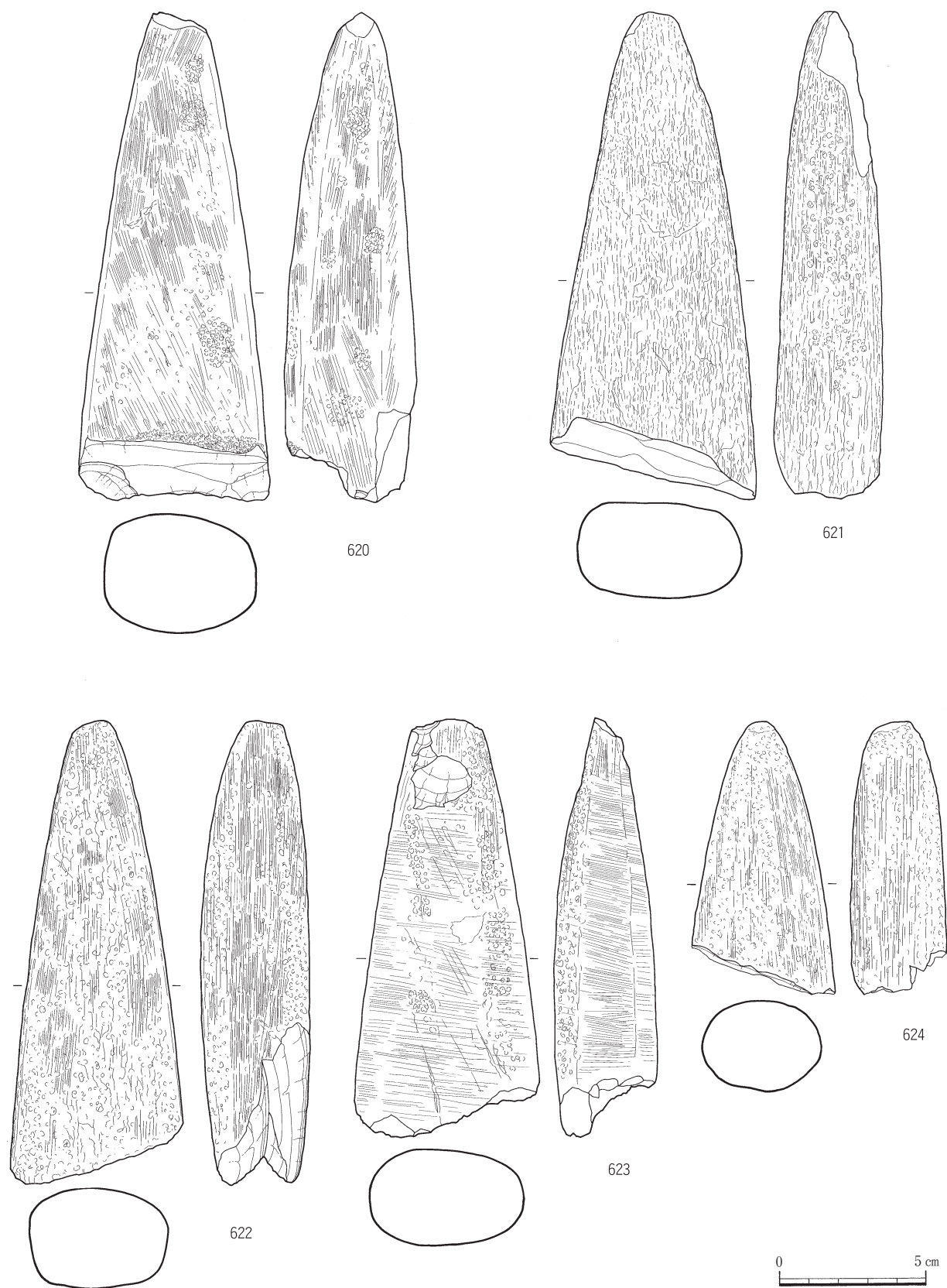
第144图 石器 (11)



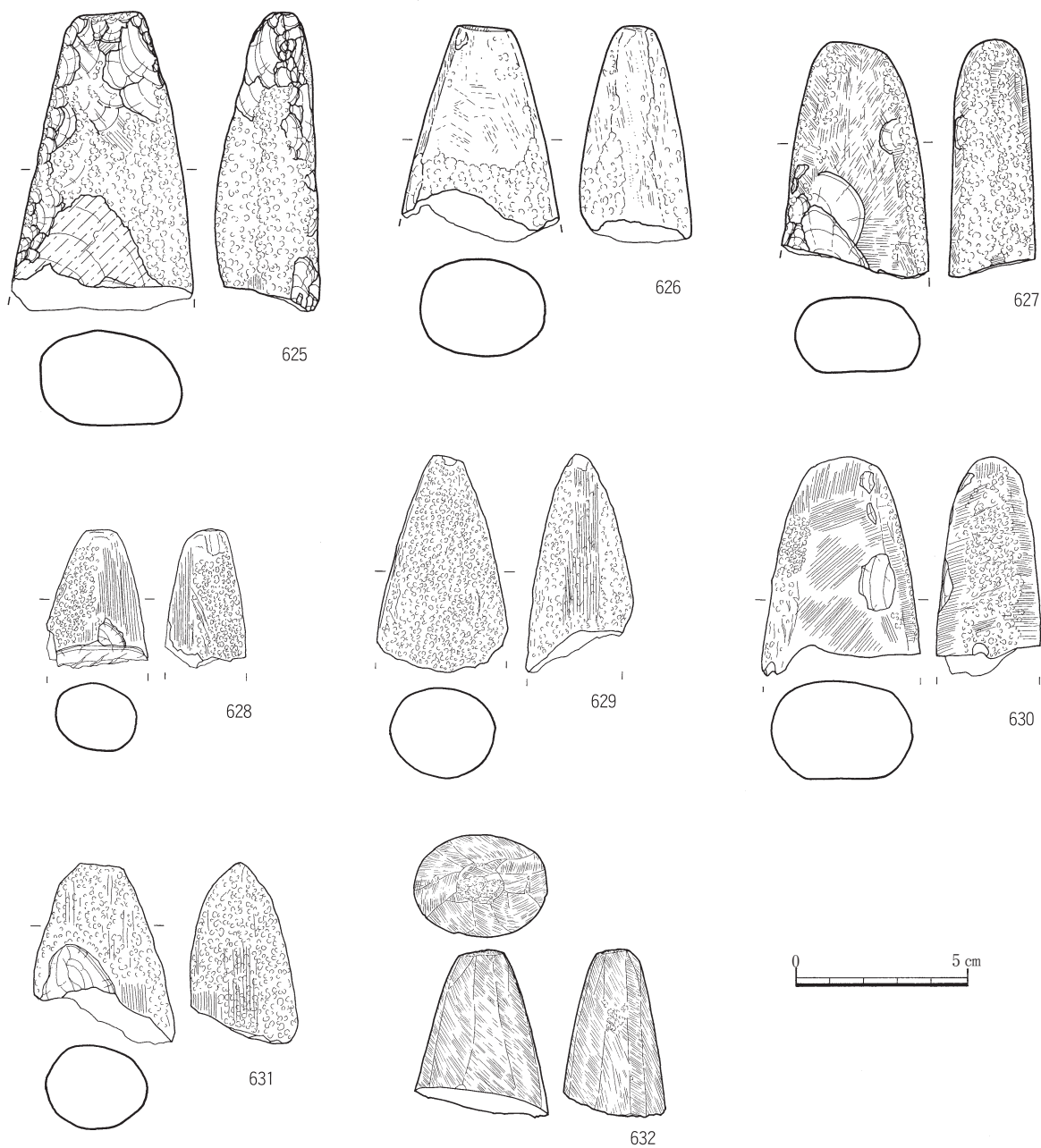
第145図 石器 (12)

592・595の3点にすぎず、ほとんどは破損品もしくは敲打具への転用品である。591～598は全形を知ることができる。593・596・597は全形を保っているものの、刃部の一部が欠損し、10cm以下の短いものである。恐らく、これ以上は柄に装着できたとしても、刃部が見えている部分が短く、伐裁具として機能しなかったのではないかと思われる。599～615は折れた時の状態に近いと思われ、刃部の摩耗度も少なく、良好に残っている。磨り減りの激しい方が人からみて外側だったと推察される。616～632は再加工痕がみられず、折れた時の状態に近い基部である。端部が尖っているのも本遺跡出土石斧の特徴で、製作時の形状が窺える。627と630は端部は丸みを帯びており、両側面は敲打で残し、正面・端部・背面にかけて研磨している点は591を含めて共通している。

なお、断面形態にも617～619の楕円形と620～623のような方形に近いものがあり、柄の装着形態差であることのご教示を山田昌久氏に受けた。



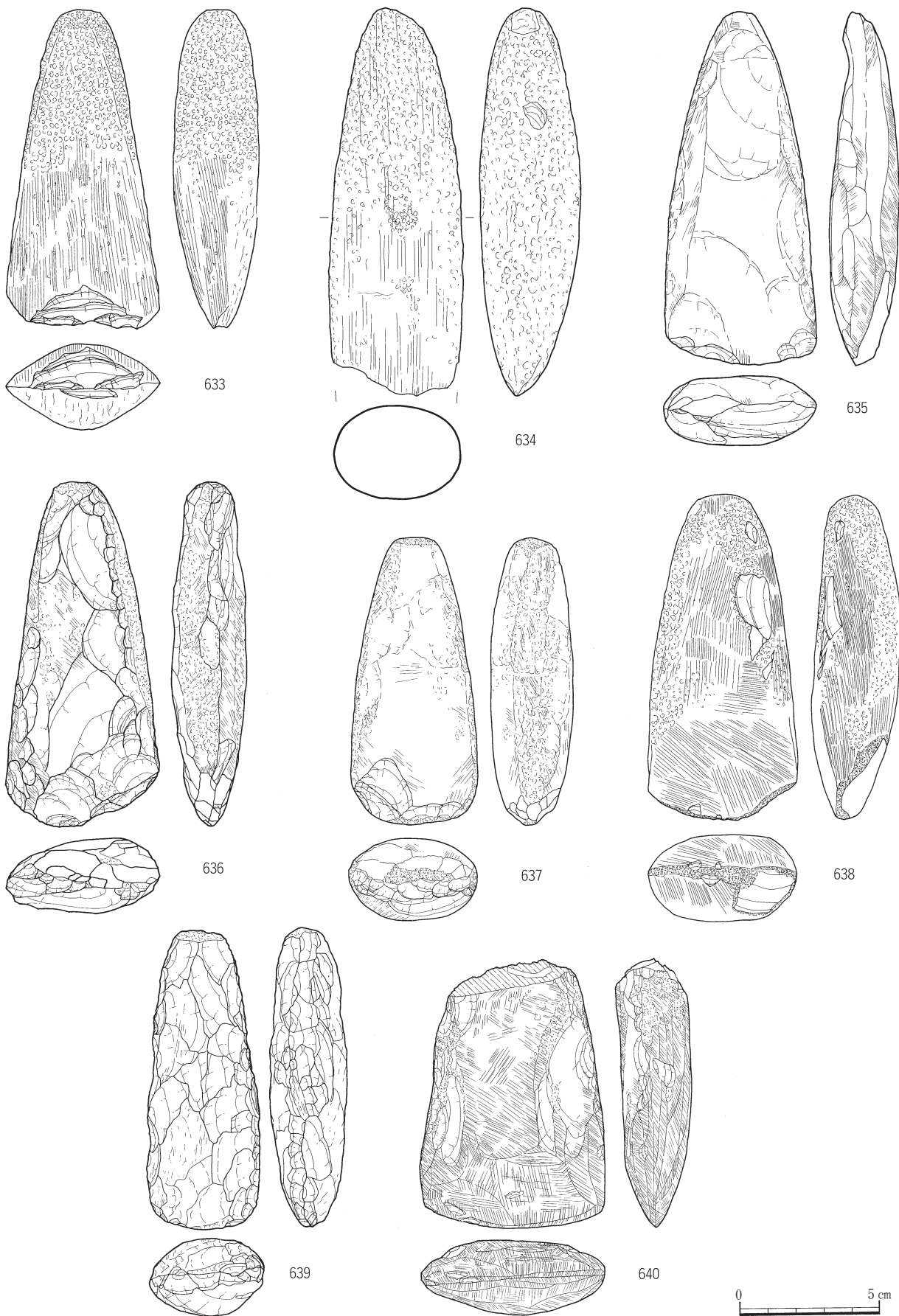
第146图 石器 (13)



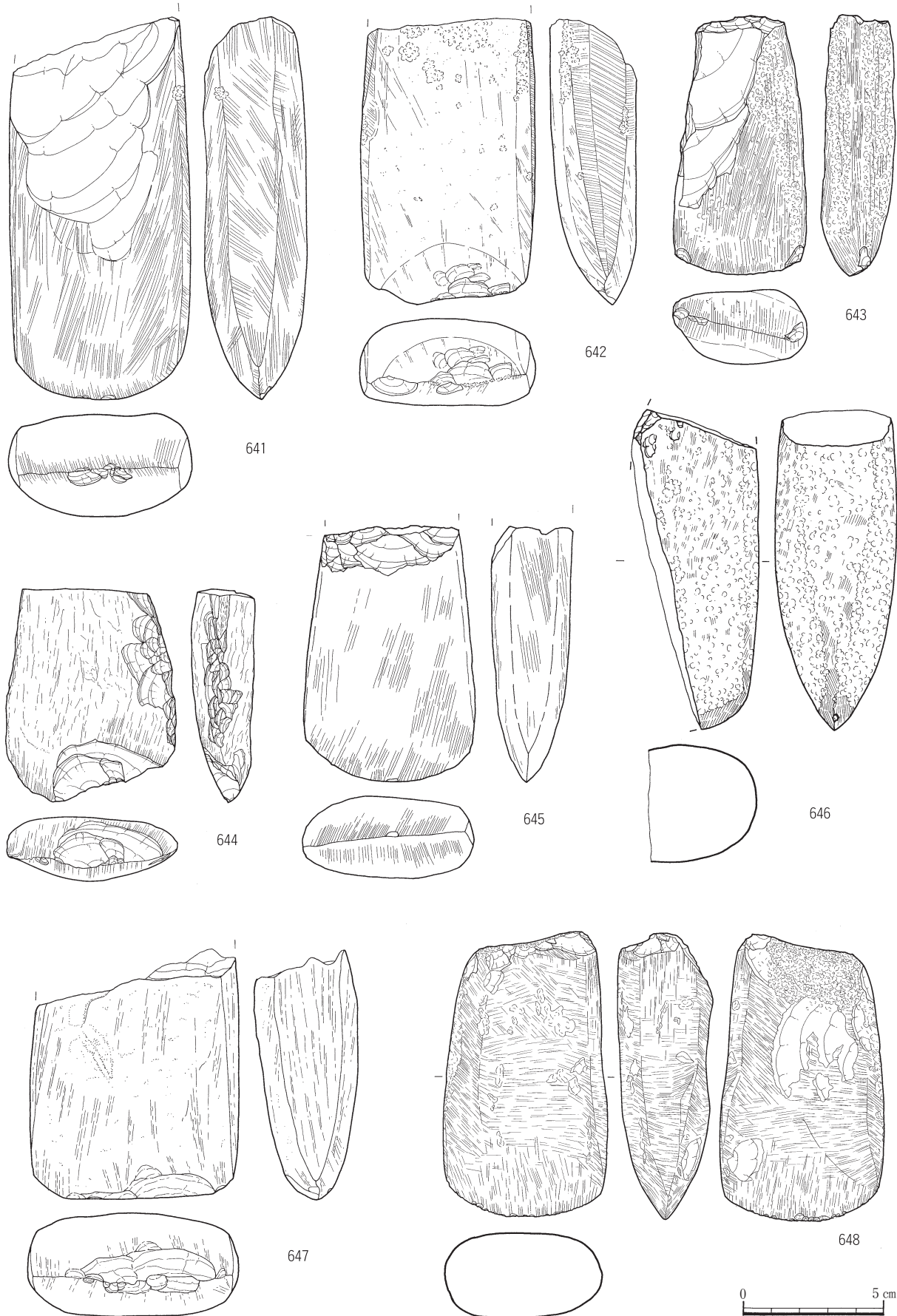
第147図 石器 (14)

633～635は折れた時の剥離なのか，故意の剥離なのか区別がつかない。636～639は刃部に敲打痕が集中し，敲打具として再利用されたと考えられる。いずれも12cm未満である点が興味深い。640～666は，どちらか片方に剥離痕あるいは敲打痕が認められるものである。折れた時の状態で敲打具として利用しているものもあれば，640や649などのように，割れ口を縦方向に剥離してから使用している例もみられる。679はそのことがよくわかる好例である。667～712は両端とも剥離もしくは敲打痕のみられるものである。707～712は，磨製石斧を敲打具として使用した際の最終形態を示していると考えられる。

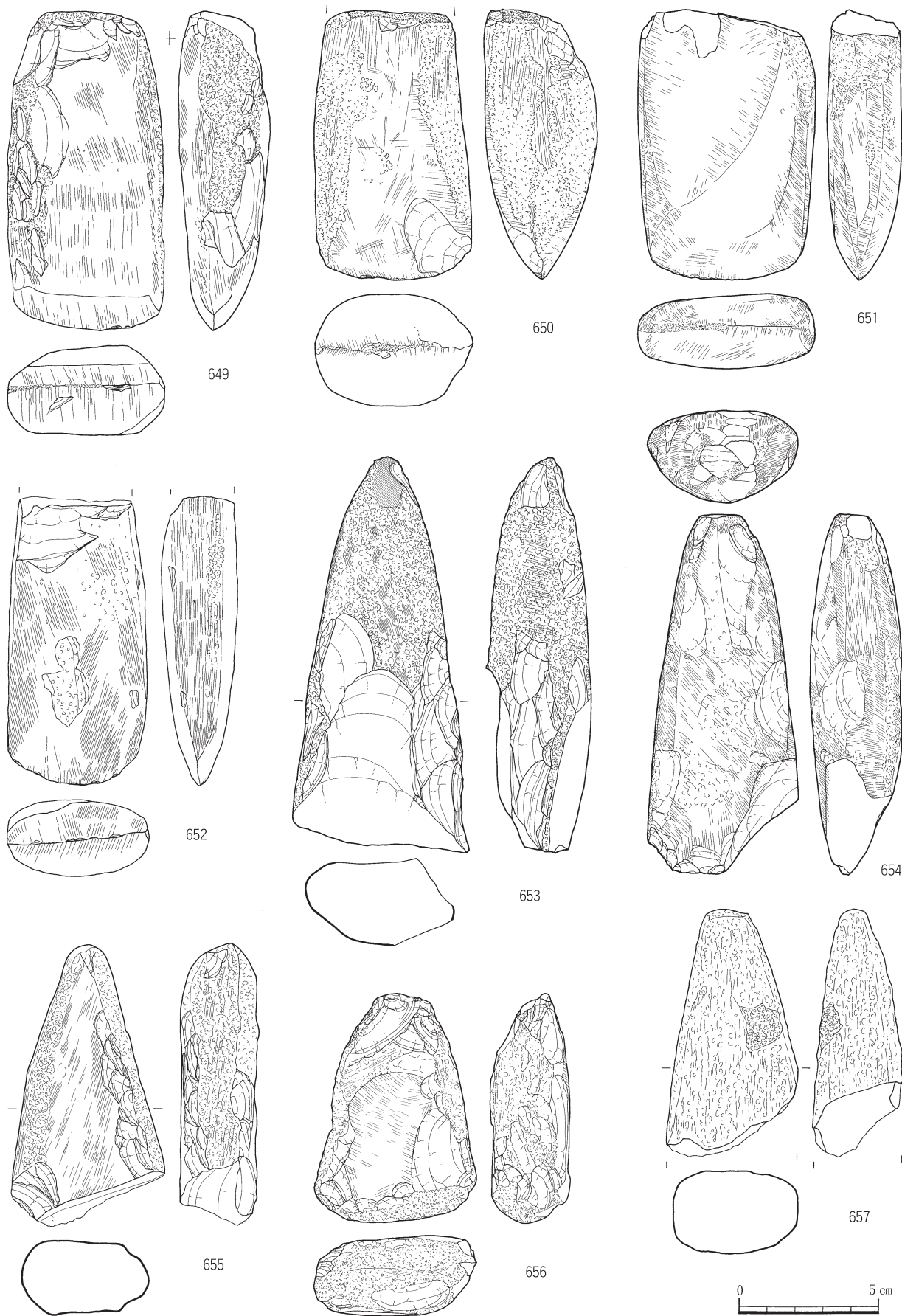
D類の残存状況と敲打痕の有無から，7cm以下のものについては再利用しなかった可能性がある。敲打具として目一杯使用した転用品が708・711・712とすれば近い数値となり，手に持って作業する



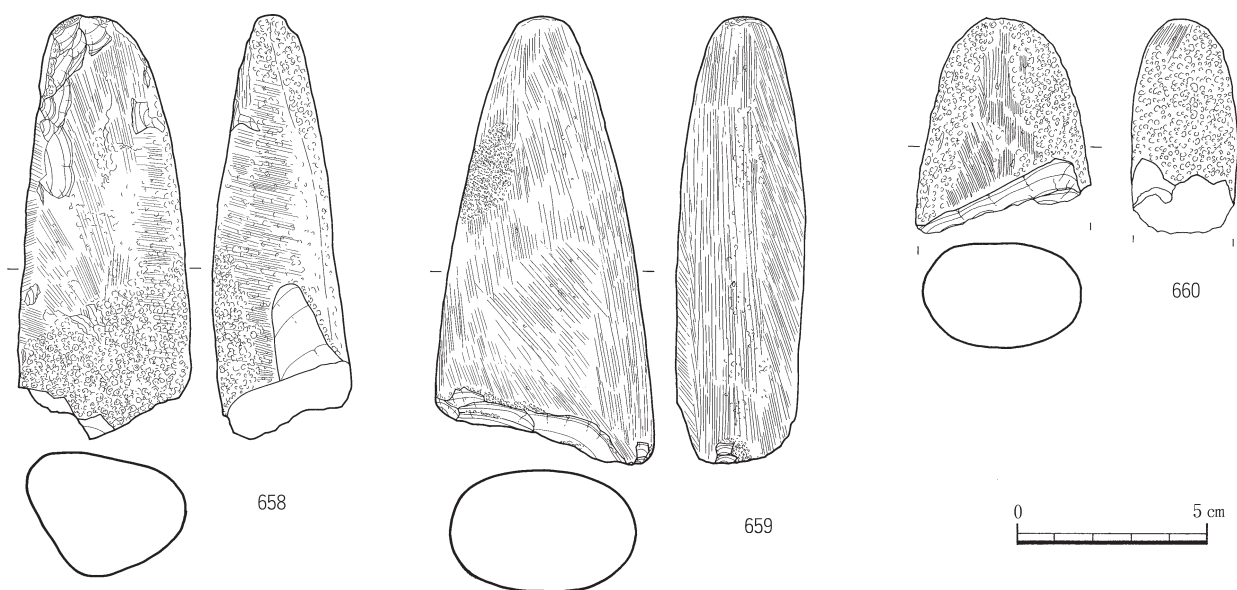
第148图 石器 (15)



第149图 石器 (16)



第150图 石器 (17)



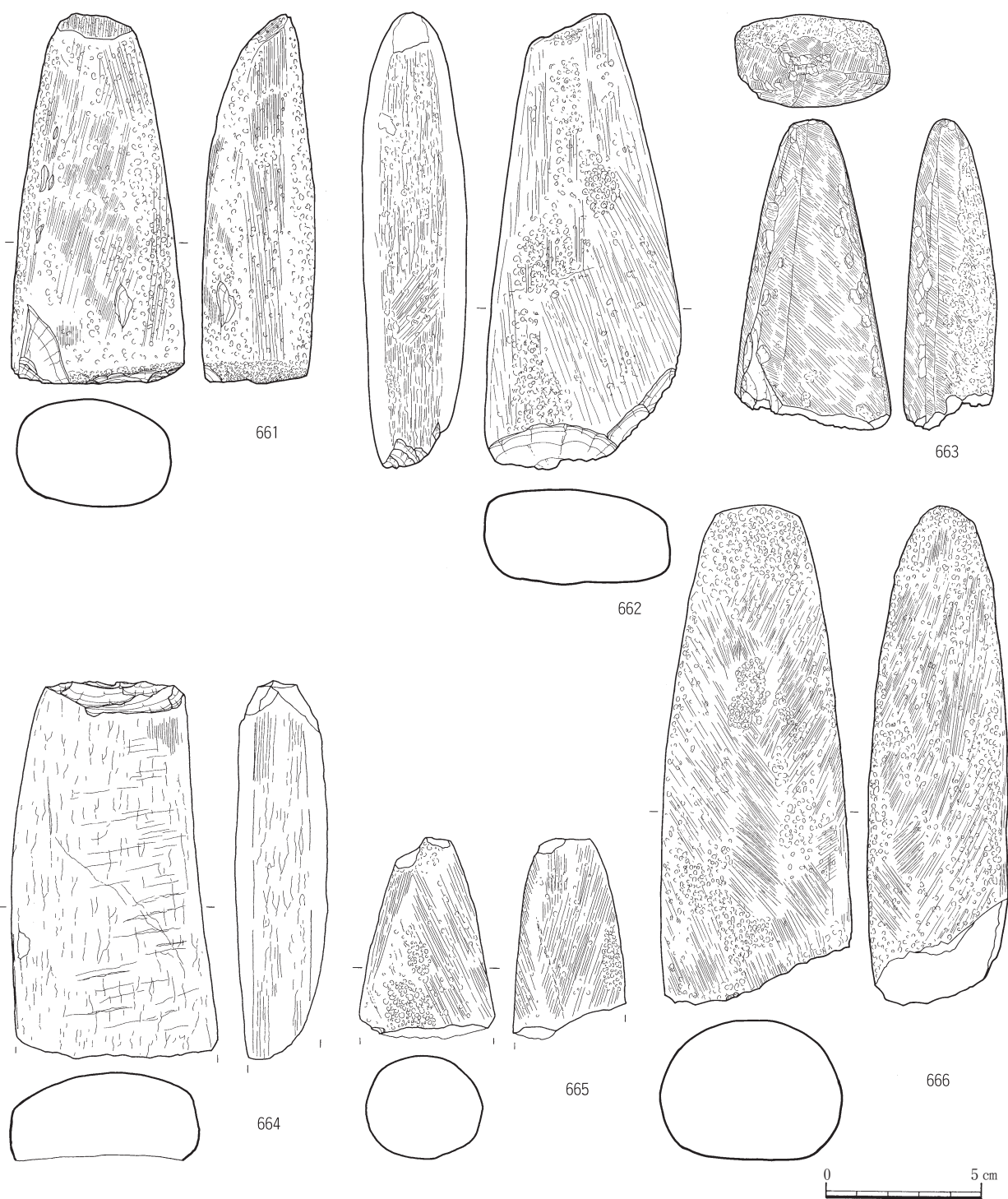
第151図 石器 (18)

限界が5～7cm前後であったことが窺える。D類の基部のみが山ノ中遺跡から出土する点については、後述するように使えなくなった石斧を外から持ってきていたとしたら、わざわざ欠けた方を持ってくるとするのは考えにくいので、敲打具用にするために故意に基部端部を打ち欠いたのではないかと考える。

598と646の刃部は両面とも変色しており、エッジも非常に鋭い状態に残っている。恐らく研ぎ直してからの時間がさほど経過しないうちに折れてしまって、他の石斧に比べて風化する時間が違ったからではないかと推察される。この様な刃部のみ色が違う石斧は、薩摩川内市（旧川内市）楠元遺跡でもみられ、類例を探せば共通点が見えてくるかもしれない。

普通にみる磨製石斧は河原などから手ごろな石材・形の石を選び、大割り（剥離）しながら適当な形にし、次にコツコツ・コツコツ叩いて（敲打）形を整える。そして、最後にきれいに研ぎながら磨き上げ、木製の柄に固定して完成させる。刃部もしくは柄が破損した時、役目を終える。

石斧としてまだ使えるものについては、持って移動したとも考えられるが、他の遺跡では完全な形の磨製石斧も多いことから、一概に使える石斧を持ち出したとは言えない。そうすると、山ノ中遺跡で出土した石斧のほとんどは遺跡の外で使用して、使えなくなったものを再利用するために、遺跡内に持ち込んだと想定される。では、山ノ中遺跡内で敲打具としてどのような行為が行われていたのだろうか。現在まで残った遺物の中で敲打痕が残るものには、磨製石斧を製作する際の敲打痕と安山岩質の剥片を作出する際の敲打痕がある。磨製石斧を製作する際の敲打成形に石斧転用の敲打具を利用していたと考える方が理解しやすいのであるが、石斧製作時の剥片がほとんど出土していないことから、石斧製作の場所も別であったと推察される。もしくは、剥離を伴う成形や研磨については、石材産出地の近くや水辺で行い、敲打による成形のみを居住地で行った可能性もある。遺跡で残らない敲打痕としては骨角牙齒や植物質に対する敲打が考えられるが、それを実証する手立ては山ノ中遺跡の中ではみられない。したがって、何に対して敲打したのかは分からないけれども、山ノ中遺跡の中で敲打する作業が頻繁に行われていたことは確かである。



第152図 石器 (19)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『楠元遺跡・城下遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書 (57)

⑦ 敲石

713～718・725・726のように球状になるもの，719～721のような棒状のもの，それに722～724・



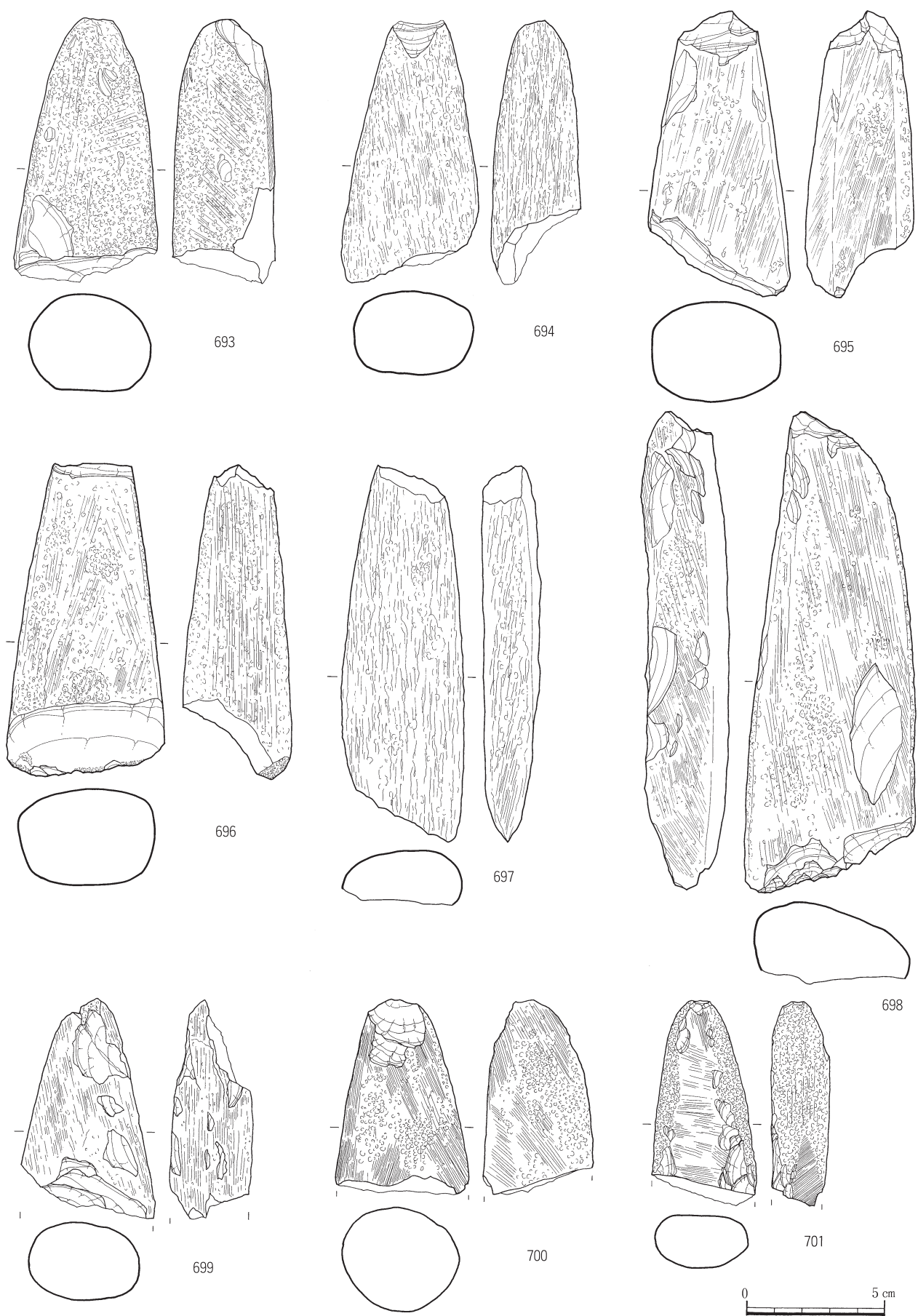
第153图 石器 (20)



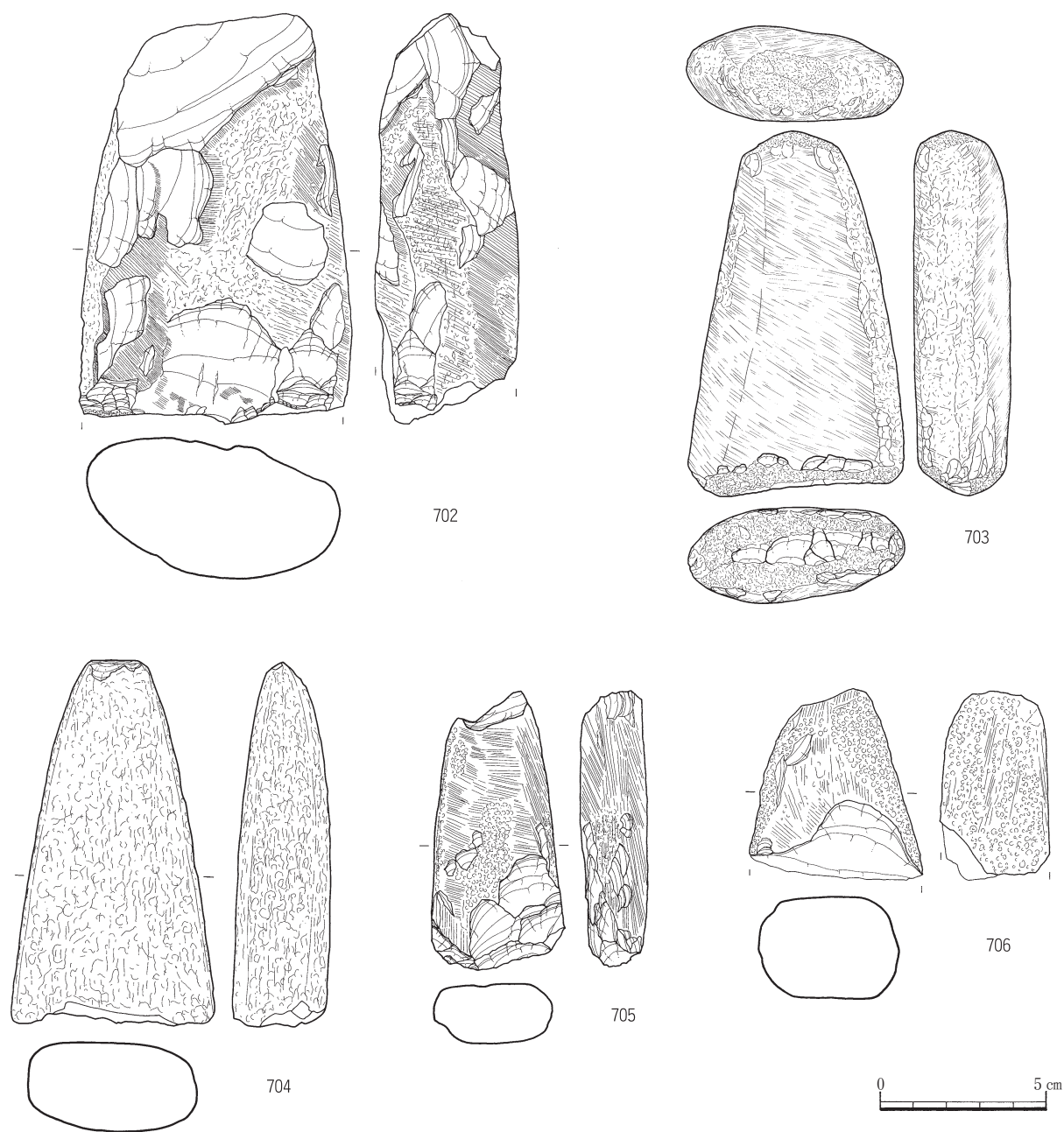
第154图 石器 (21)



第155图 石器 (22)



第156图 石器 (23)



第157図 石器 (24)

728のような楕円形の礫を用いたものがみられる。球状のものは、白色の石英を用いたものが目立つ。8 cm大の河川礫を使用しており、当初は713と715のように長軸の一端を使い、次は長軸の両端を使ったようである。さらに、714例が示すように、長軸と短軸の差が小さくなった場合は側面を利用したことが窺える。そして、ついに最終的には717例が示すように、全周を利用していることがわかる。上下左右関係なく使用したとみられ、側面の中央には稜が入り、算盤玉状の断面となっている。棒状の3点(719~721)と楕円形のもの(722~728)も同じような敲打痕がみられ、作業内容は同一であったことが推察される。

723は砥石からの転用品である。敲打具及び石斧を再利用した敲打具の敲打痕を図面及び直接手にとって見ると、時計の10時及び4時の方向に敲打痕は集中してみられる。打撃を受ける対照物から

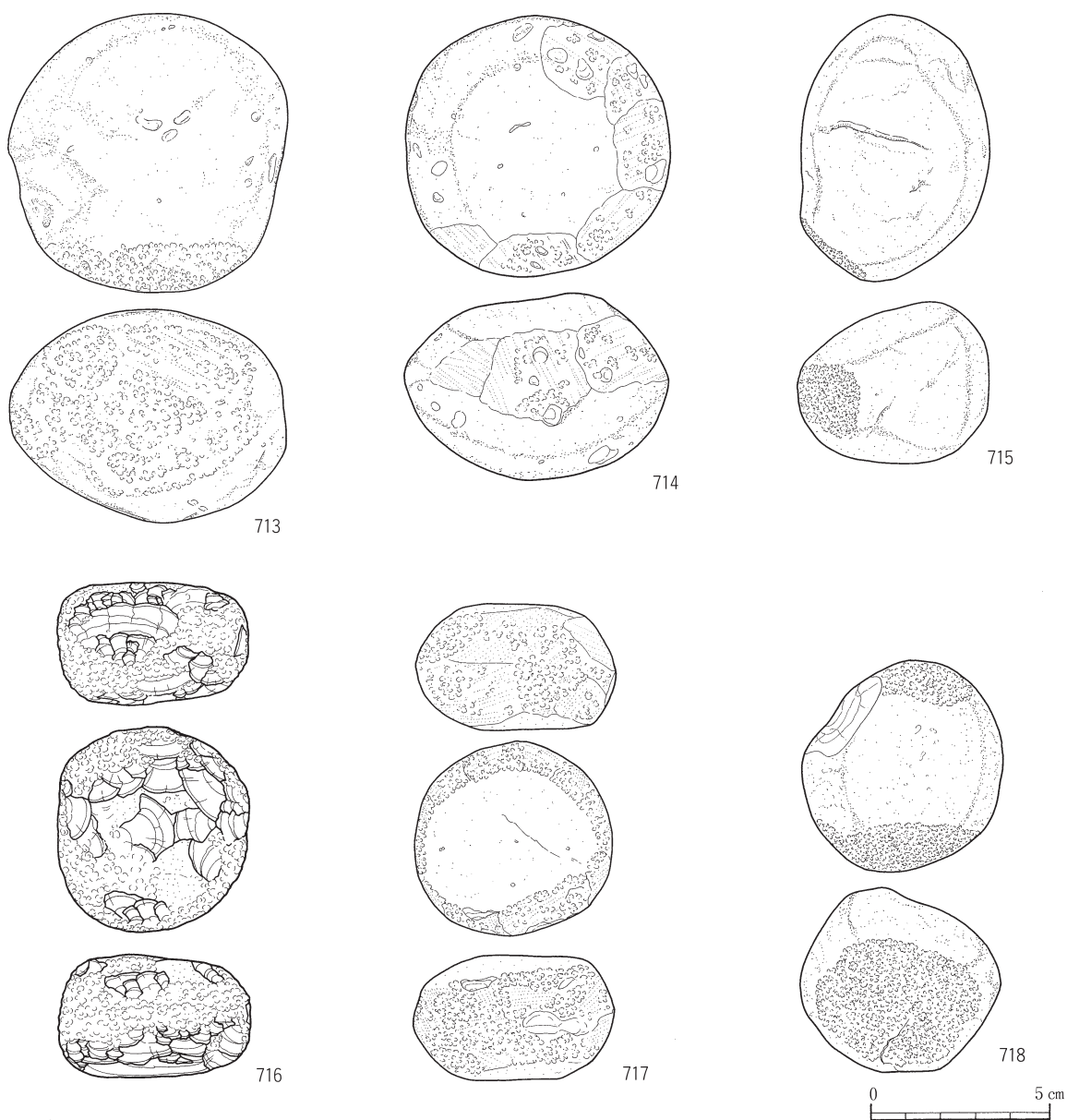


第158図 石器 (25)

すれば、ちょうど鏡映しの状態になるので、上からみると8時及び2時の方向に打撃痕が集中することになる。このことは、同じ様な握り方をして、前後の区別無く使用した結果であると考えられる。磨製石斧転用の敲打具も基本的に同じである。

⑧磨石類

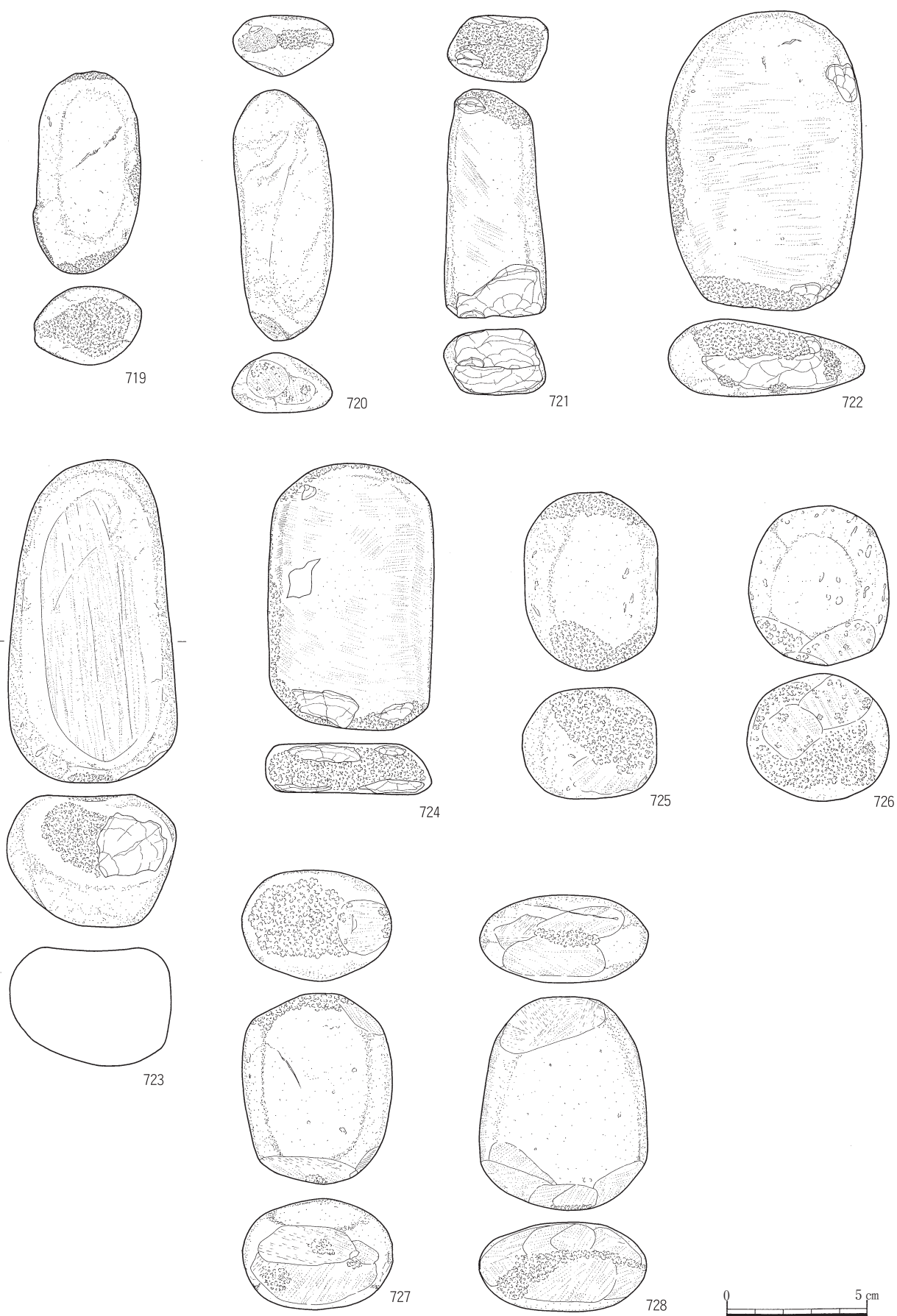
山ノ中遺跡の磨石は形状がそろっており、肉厚で円形に近く、大きさも10cmを越えるものが多い。磨面も全体にみられるが、図面でみた場合、両面とも時計の針の4時と10時の部分に顕著である。使用の際に特に力が加わった部分であるとする。側面に敲打痕がみられるものは、他遺跡よりも少ないが、731は4側面の中央部を残して、すべて細かな敲打痕が認められる。広い面よりも角張っ



第159図 石器 (26)

た部分を敲打具として利用したことが窺える。732と755も敲打具としても利用されており、下方に
対峙する二面の敲き痕がみられる点は、石斧の転用品などとも一致する。通常の遺跡で見られる磨
石類側面の敲打痕は、粗くて側面中央部に集中するが、本遺跡出土例は敲打痕が細かく縁辺に顕著
である点が異なる。敲く対照物が違っていたのではないかと考えられる。

760は石鱗状の磨石を利用したもので、下端部に敲打痕、両面中央に凹みがみられるものである。
他の磨石と形状が異なり、この様な形は縄文時代早期前半によくみられることから、その時期のも
のである可能性もある。762は河原礫を利用した凹石である。761は河原礫を利用したもので、一端
に赤色顔料が付着している。蛍光X線分析と電子顕微鏡による観察の結果、Feにピークがみられる
ことと、パイプ状粒子が観察されることから、ベンガラであることがわかった。敲打痕はさほど顕



第160図 石器 (27)

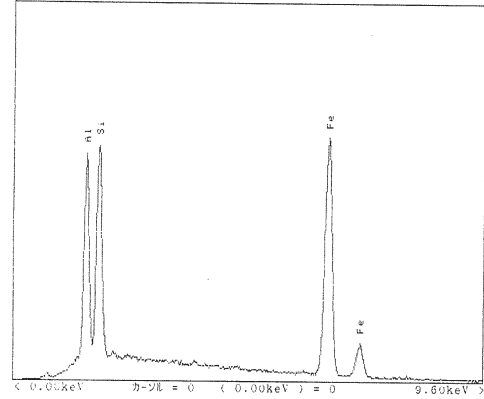
著ではなく、敲いたというよりも押し潰すようにして使った可能性もある。松ノ木式類似の土器(164)にベンガラが認められたが、同一のものであるかどうかはわからない。

山ノ中遺跡で出土した花崗岩製の磨石は図化したものを含めて35点あり、他の遺跡よりも比率が高い。花崗岩は風化しやすいことを考えると、これ以上の点数になると思われる。遺跡近辺の15km以内には花崗岩を産出する場所はなく、素材は運ばれて来たものと考えられる。図化しなかった磨石類も含めると、山ノ中遺跡で出土した点数は83点である。磨石は石皿とセットで使われたと一般的に考えられており、石皿の点数の約2.6倍である。このことは、磨石の消耗度が高かったことを示していると考えられる。

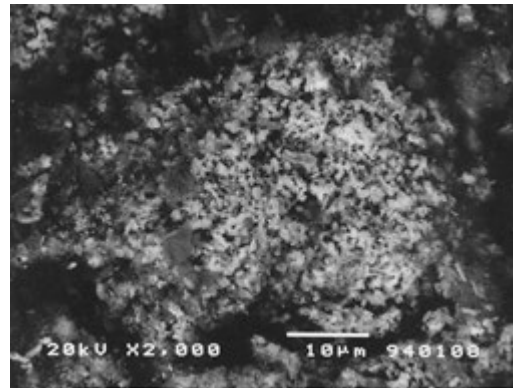
⑨石皿

20cm以上残存する32点の石皿が出土したうちの12点を図化した。石皿は磨石と一緒に使い、木の実を磨り潰したりする道具である。磨石を前後に動かして使うので、動作を行う人物からみて手前の方は縁の部分まで磨面が

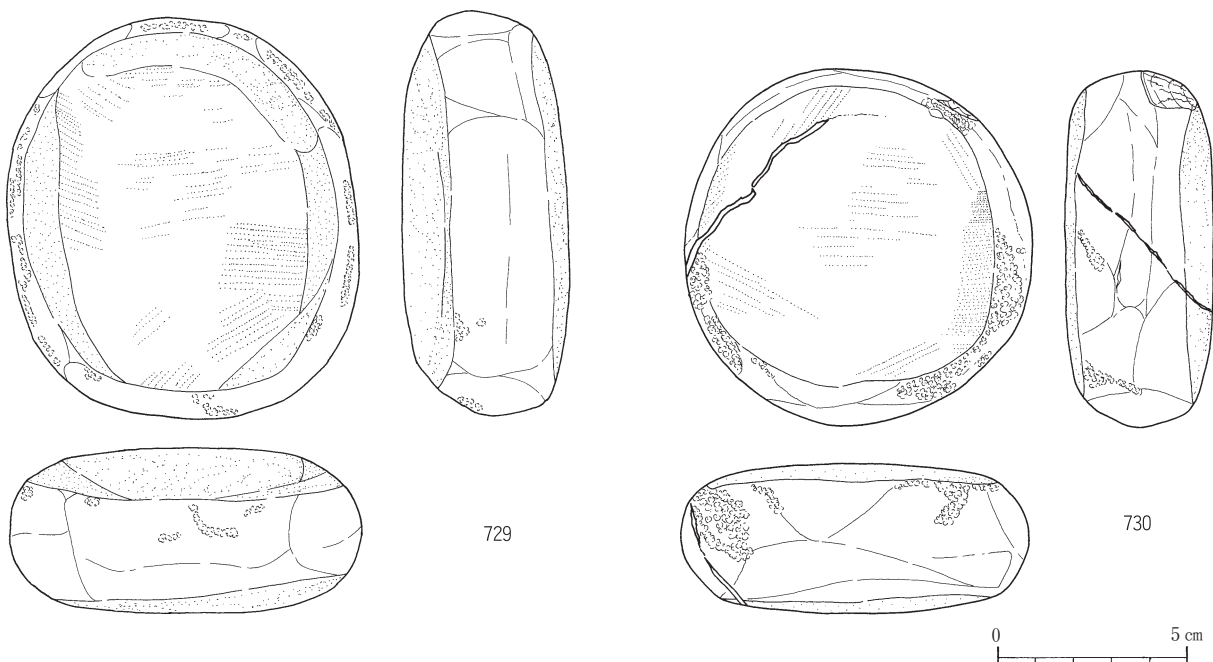
J E O L J E D - 2 0 0 1
試料名 : 940108 YAMANONAKA
経過時間: 129.49 秒
有効時間: 100.00 秒
測定日 : 94年12月27日
測定時刻: 19時05分29秒
7kスケール 4k



赤色顔料の蛍光X線分析値



赤色顔料の電子顕微鏡写真



第161図 石器 (28)

あり、図面でも下の方に置いてある。山ノ中遺跡の石皿の特徴は、763～765のように手前の両端を突起状につくり出していることで、装飾的な意味合いと磨り潰したものの受け口となっていたと想定される。このような形状の石皿は、万之瀬川下流域の遺跡群でも出土しており、後期前半における共通性が窺える。763は完全な形を残すものであり、38cm×30cmの方形を呈する。772も方形状になるものであるが、手前の方の縁に突起状のつくり出しはみられない。765は、破損後に石組み炉の一部として再利用されている。住居跡内で出土したものもあり、767は2号住居跡から、771は3号住居跡内で、769は4号住居跡内の土坑から出土した。766と771のように使用面がほぼ平坦なものがある一方、764・769・773のように内面が大きく窪んでいるものも多く、長期間にわたって頻繁に使われた結果であると考えられる。

一般的に、石皿は一家に1つあれば足りる道具であり、消耗度も他の石器よりは著しくないと考えられる。18軒の住居跡に対し32点の石皿が出土したということは、1軒あたり2点足らずの消費料であると推察される。

⑩砥石

775～782は砂岩を素材とした砥石である。これらの石材には、擦切石器に使われた素材と同じ様な白銀に光る粒子がみられる。両面ともかなり使い込まれており、深い凹面となっている。775と778は幅の狭い面も凹面となっており、この面に合った対照物を想定しなければならない。780には直交する4か所の使用痕がみられ、紐状の対照物の使用も考えられる。781の側面には、両面から同じくらの深さの擦り切られた痕跡がみられる。縁の方は中央まで達しており、折られた状況が認められる。782の一面は平坦であるが、もう一面にはゆるい凹凸が認められる。

通常の縄文時代の遺跡で出土する砥石とは異なり、小さくて薄いことから、同じ石材の擦切石器に関わる使い方が想定される。擦切石器そのものを砥ぎ出していたかどうかはわからないが、凹みの深いものについてはそれだけでは説明がつかない。石材産地の追究も含めて、今後の課題である。

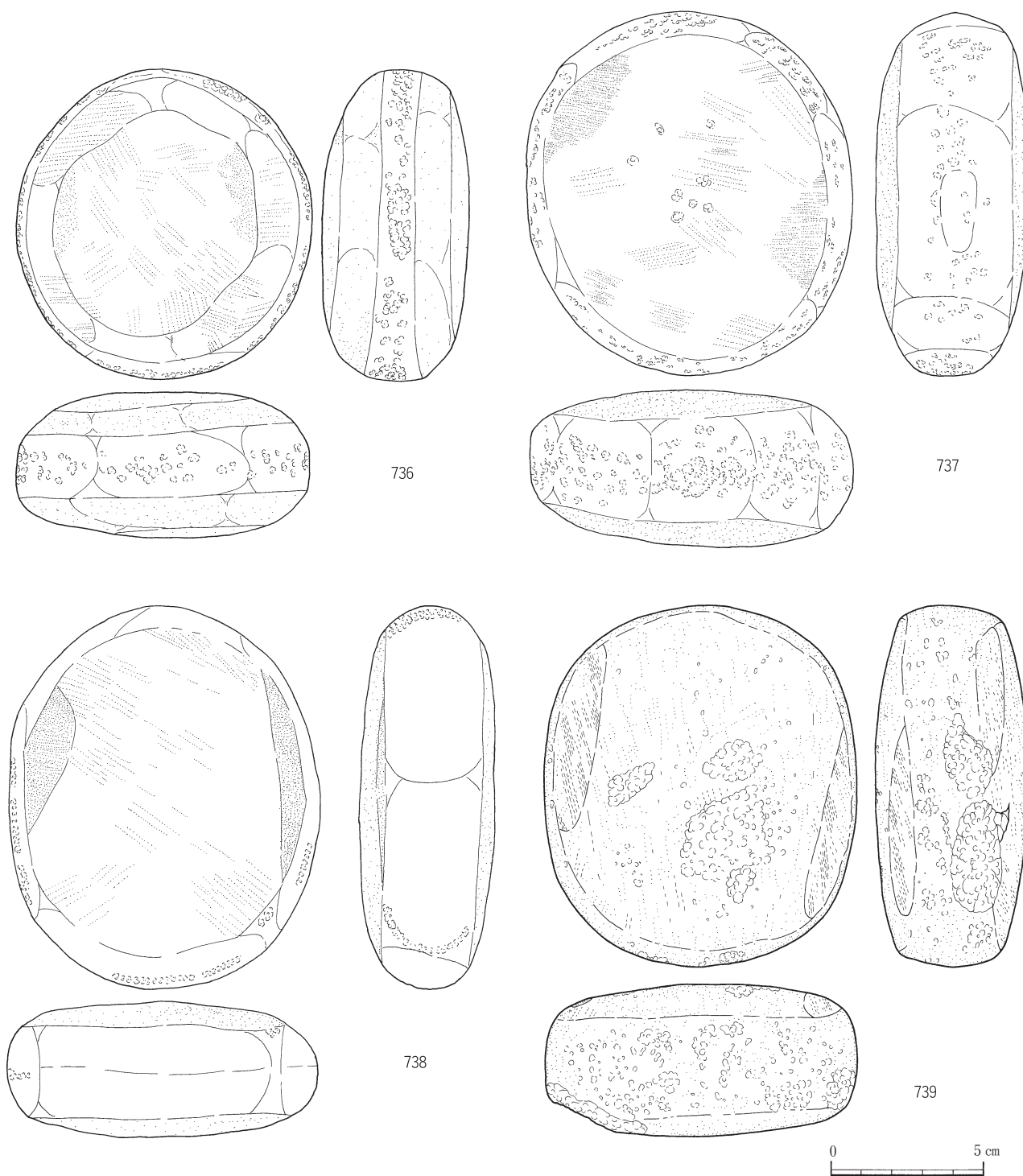
⑪擦切石器

783～790は細粒の砂岩を素材とした擦切石器である。石材には白銀に光る特徴的な粒子が含まれている。刃の部分が直線的で、厚さは10mm以下と薄い。側縁が両面とも擦れており、断面の形状は蛤刃形を呈する。刃部を砥いですぐの状態ではなく、かなり使用した時の形状であると考えられる。使用痕は側縁に平行した擦痕が認められるので、前後に動かす様な動作を行ったと考えられる。すべて欠損しているため、全体の形状は不明である。本遺跡には、砥石と考えられる781に両面から擦り切られた様な痕跡をもつものがある。また、蛇紋岩製のノミ形磨製石器も多く出土しており、製作の際に使われた可能性がある。

このような擦切石器は鹿児島市草野貝塚や志布志市（旧志布志町）十文字遺跡でも出土しており、河口貞徳氏や山崎純男氏の論考がある。十文字遺跡から出てくる土器は山ノ中遺跡のものとよく似ており、同時期であると考えられる。十文字遺跡では切り目石錘が出土しているので、この切り目を入れる時に、擦切石器を使ったのではないかと考えられる。しかし、山ノ中遺跡は海から遠く離れ、魚がさかのぼるような川も少し遠いせいか、石錘は出土していない。

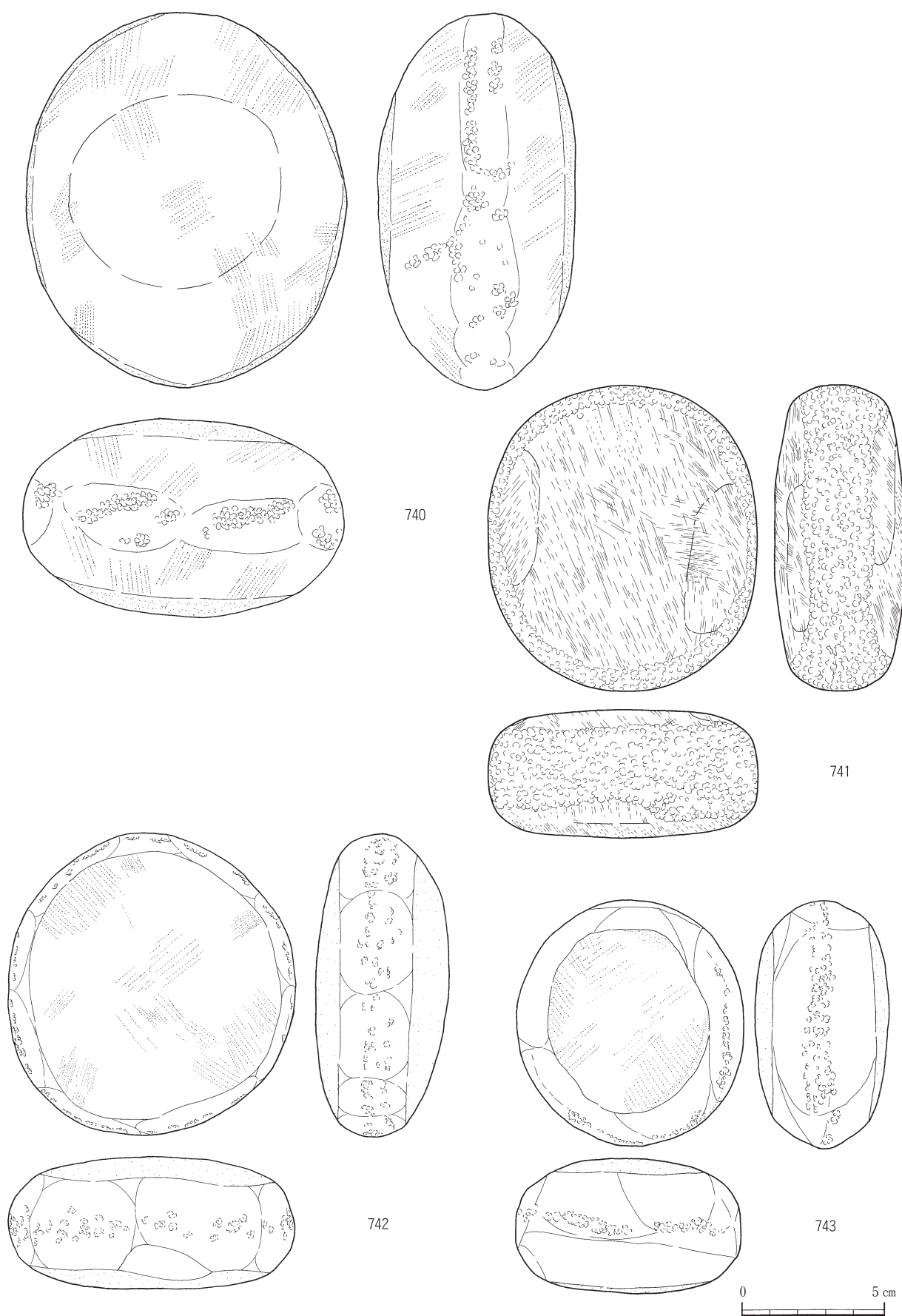


第162図 石器 (29)

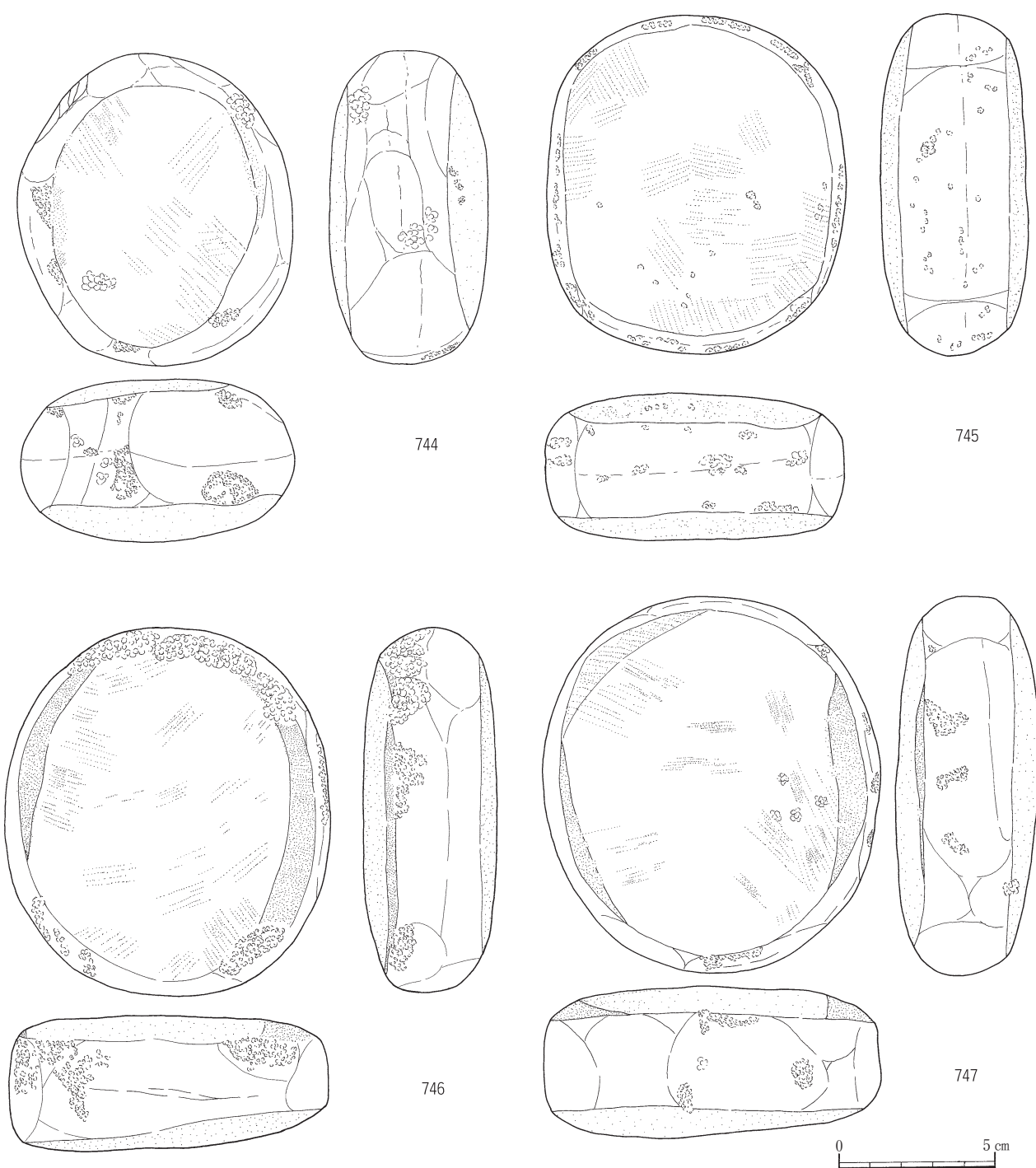


第163図 石器 (30)

擦切技法による石斧は、蛇紋岩製によくみられる。広く平べったい石を最初に磨きあげ、全体の形を整えた上で擦切技法により分割し、1本1本の石斧に仕上げたと考えられる。両面から擦り切って、ある程度深くなった時点で割っており、石斧の側面に段違いの痕跡があれば、擦切手法によって製作した石斧であることがわかる。しかし、山ノ中遺跡では、確実にこの方法でつくられた石斧はみつかっていない。蛇紋岩製の偏平な石斧やノミ状の細長の石斧は10数本出土しているので、も



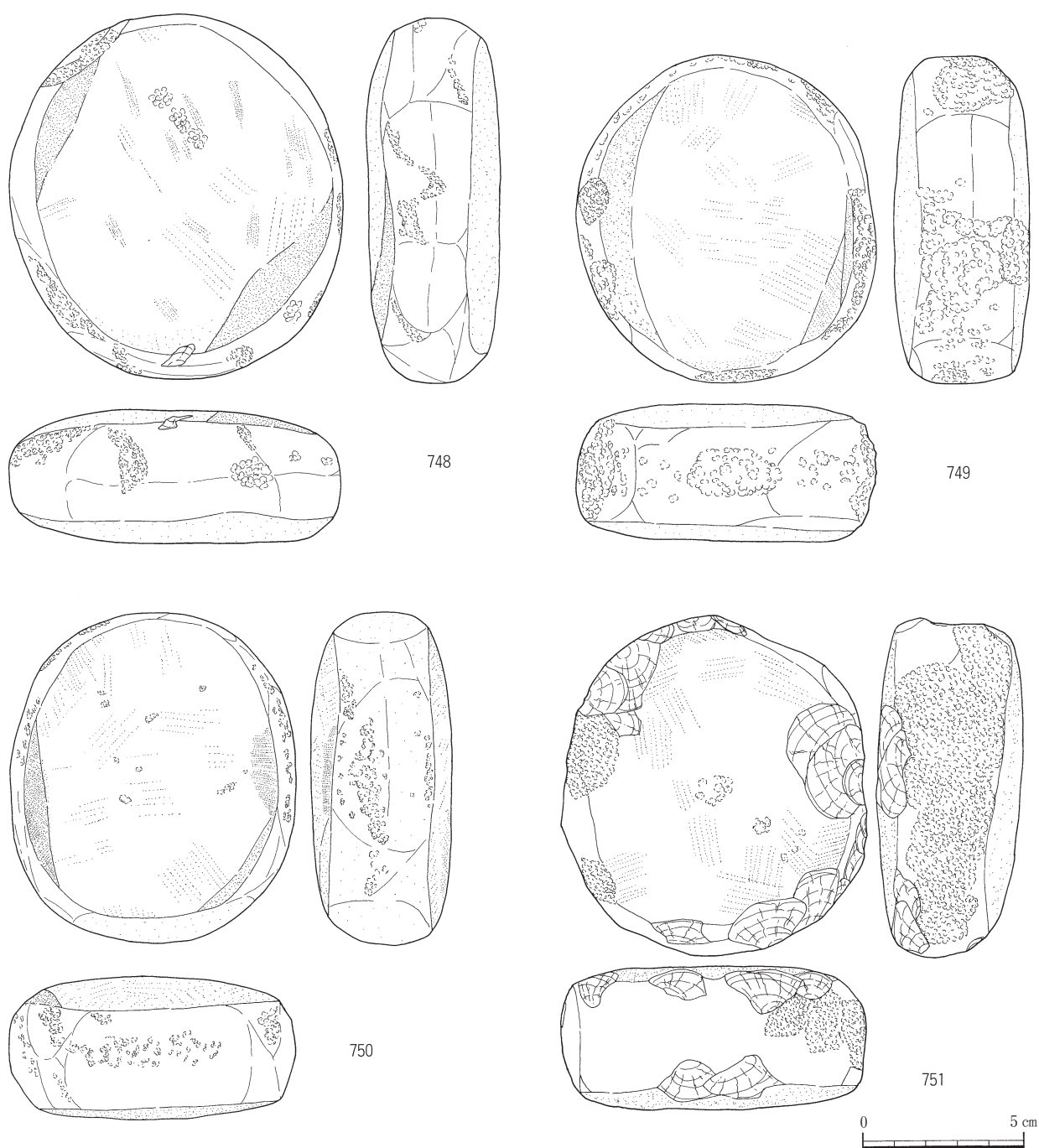
第164図 石器 (31)



第165図 石器 (32)

しかしたら、これらの石斧をつくるために擦切石器は使われたのかもしれない。側面まで丁寧に研磨され、折りとった痕跡を確認できない可能性がある。鹿児島市草野貝塚では15点の擦切石器が出土し、「板状磨製石器」として紹介されている。曾於市（旧末吉町）宮之迫遺跡では「石包丁状石器」としているが、擦切石器である。また、日置市（旧伊集院町）上ノ平遺跡では8点の擦切石器が出土している。

河口氏が発表した当時は市来式土器の頃のものしかみつかっていなかったが、山ノ中遺跡のもの



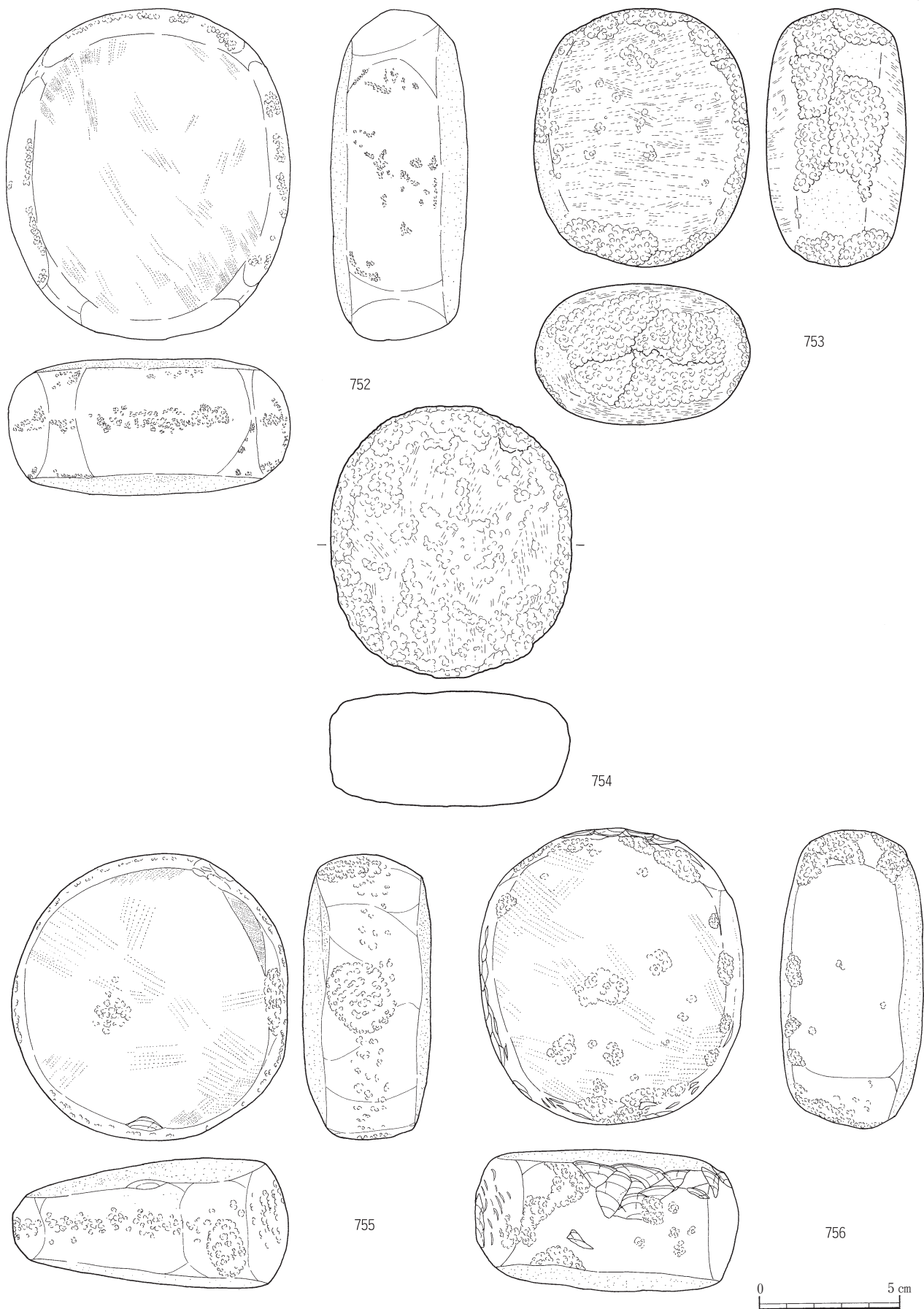
第166図 石器 (33)

や宮之迫遺跡・上ノ平遺跡は、それよりも古いものである。

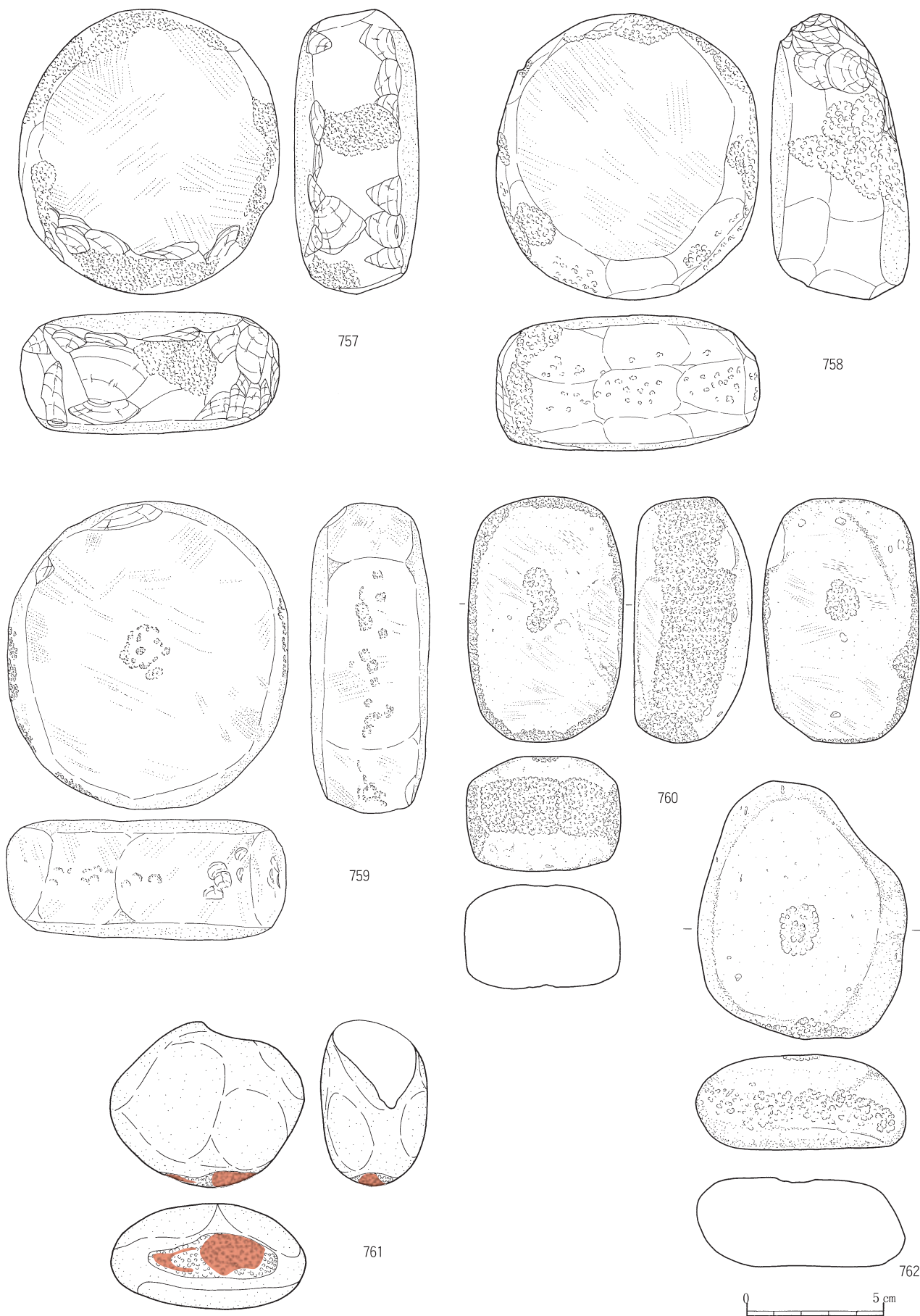
河口貞徳 1986 「市来式と擦切手法」『考古月報』No.1 鹿児島県考古学会

山崎純男 1999 「東アジア新石器時代の擦切技法」『日韓新石器時代交流研究会 第3回 鹿児島大会 資料集』九州縄文研究会

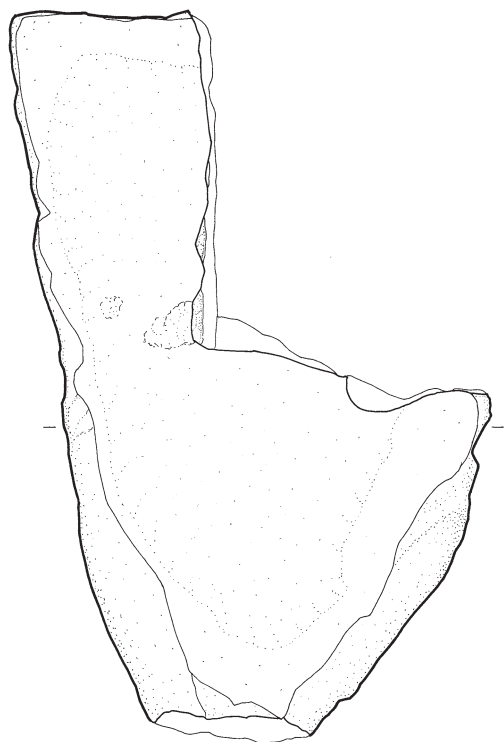
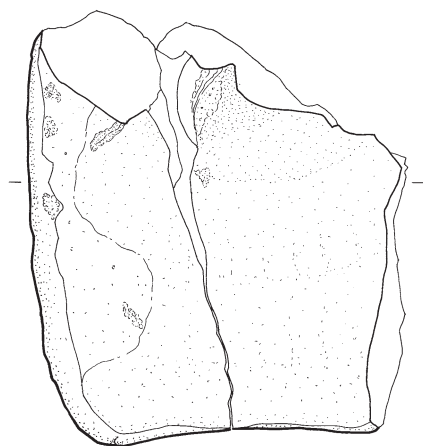
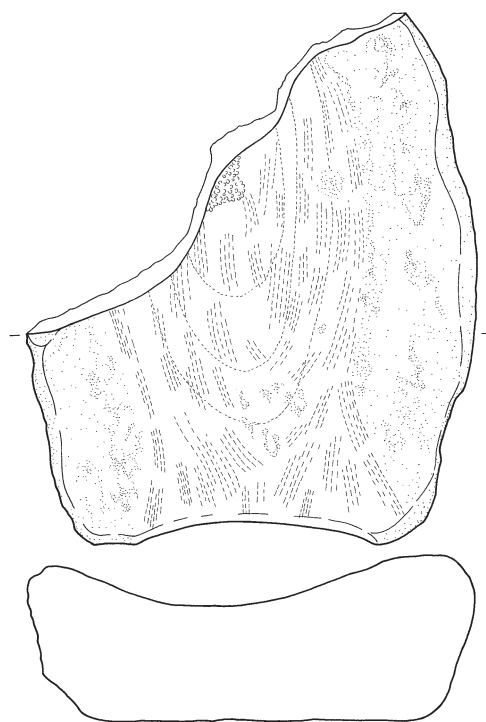
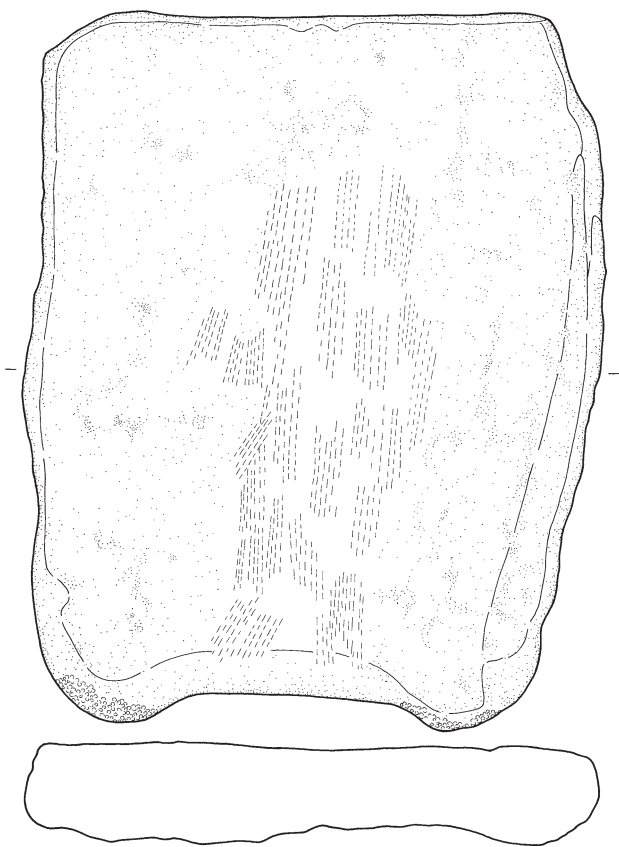
志布志町教育委員会 1983 『倉園B遺跡・十文字遺跡』



第167図 石器 (34)

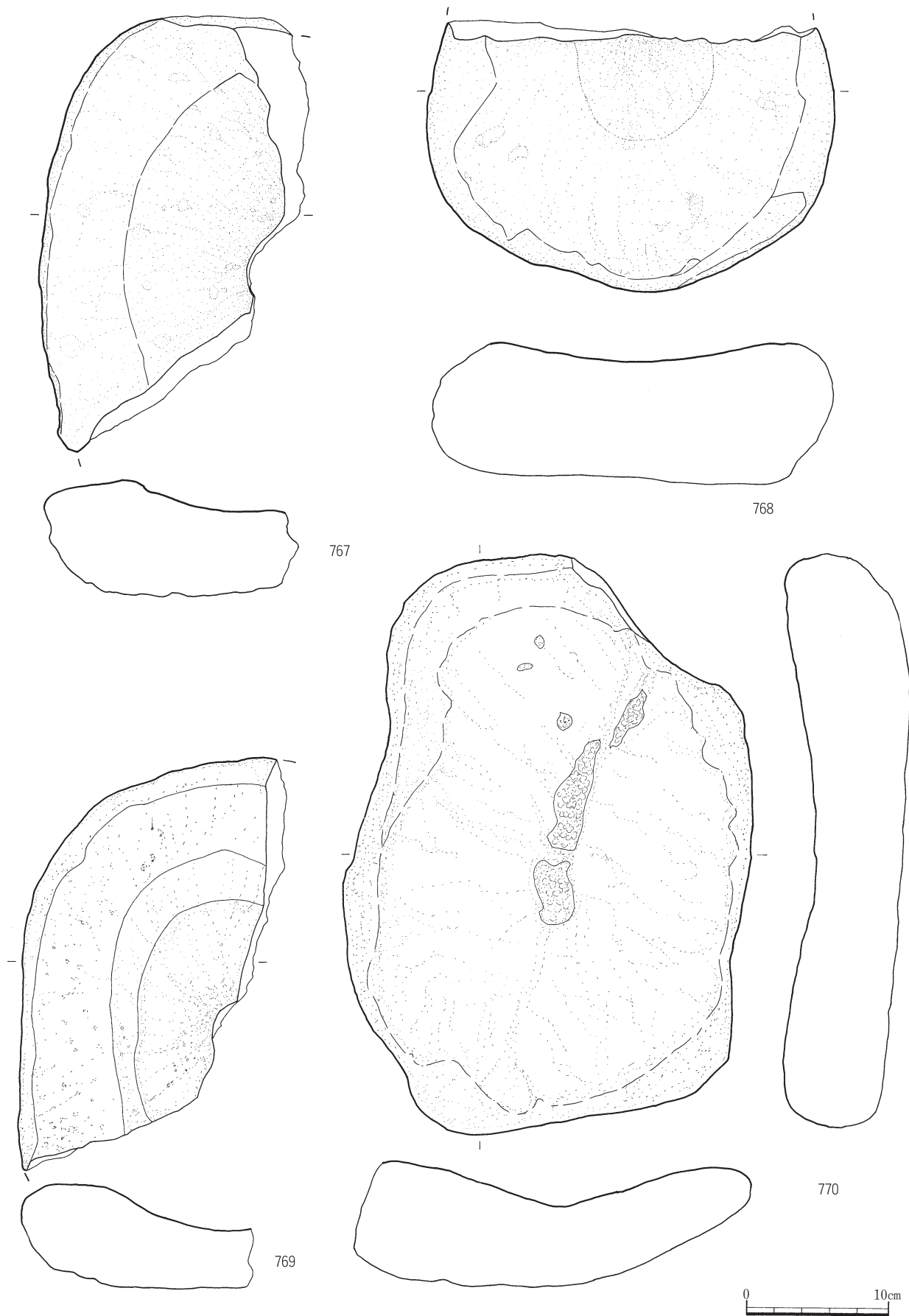


第168図 石器 (35)

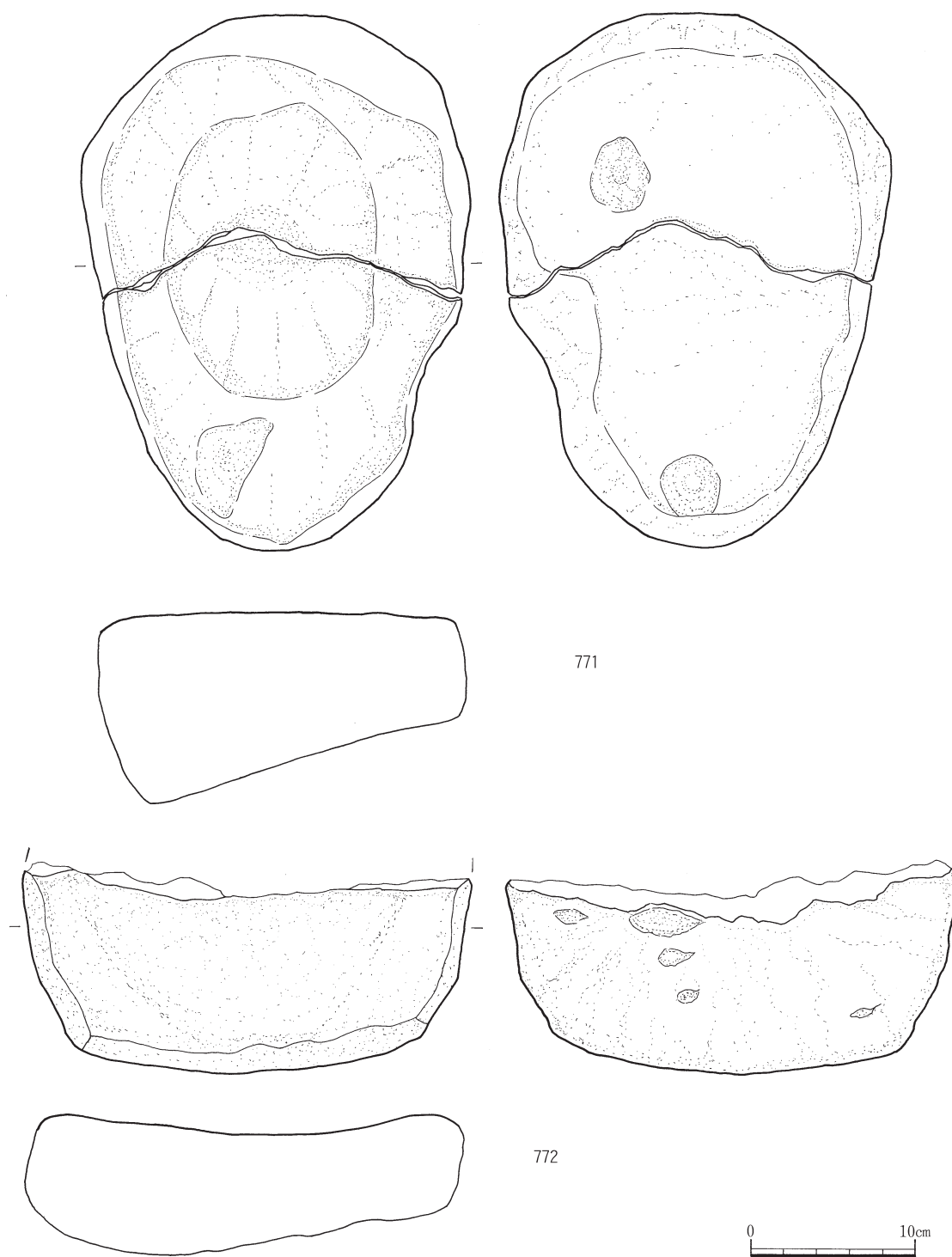


0 10cm

第169図 石器 (36)



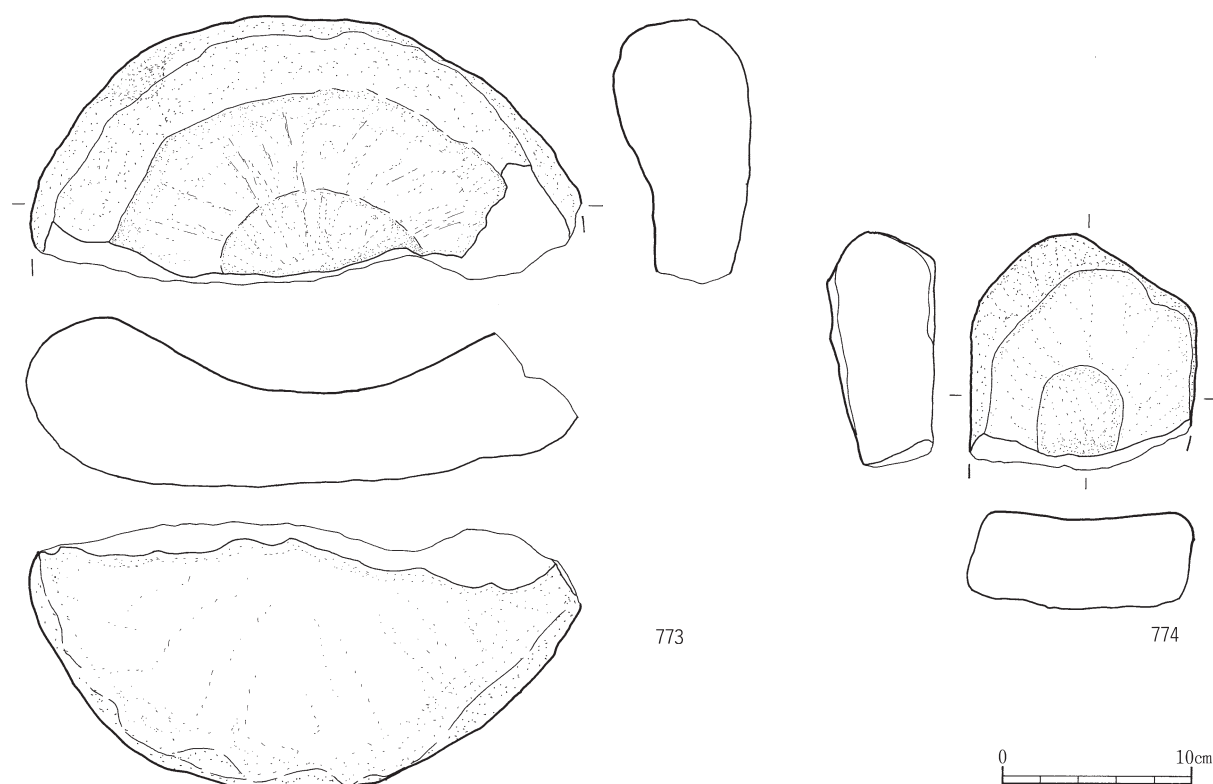
第170図 石器 (37)



第171図 石器 (38)

⑫軽石製品

山ノ中遺跡では、他の遺物に混じって、軽石の出土も目立った。パンケースにして19箱分の軽石を取り上げてきたが、大きなものは人頭大のものから小さなものは3 cm大のものまである。軽石は他の石材と違ってまろく、水洗いができないので、よく乾燥させた後ブラシや竹串で泥を落とす作業を行った。その結果、人工的に手が加えられたと考えられる44点について図化した。ただし、そ



第172図 石器 (39)

れ以外の軽石も当時の人々の手を経て遺跡内に持ち込まれたものであることは確かである。

(1) 軽石製垂飾品

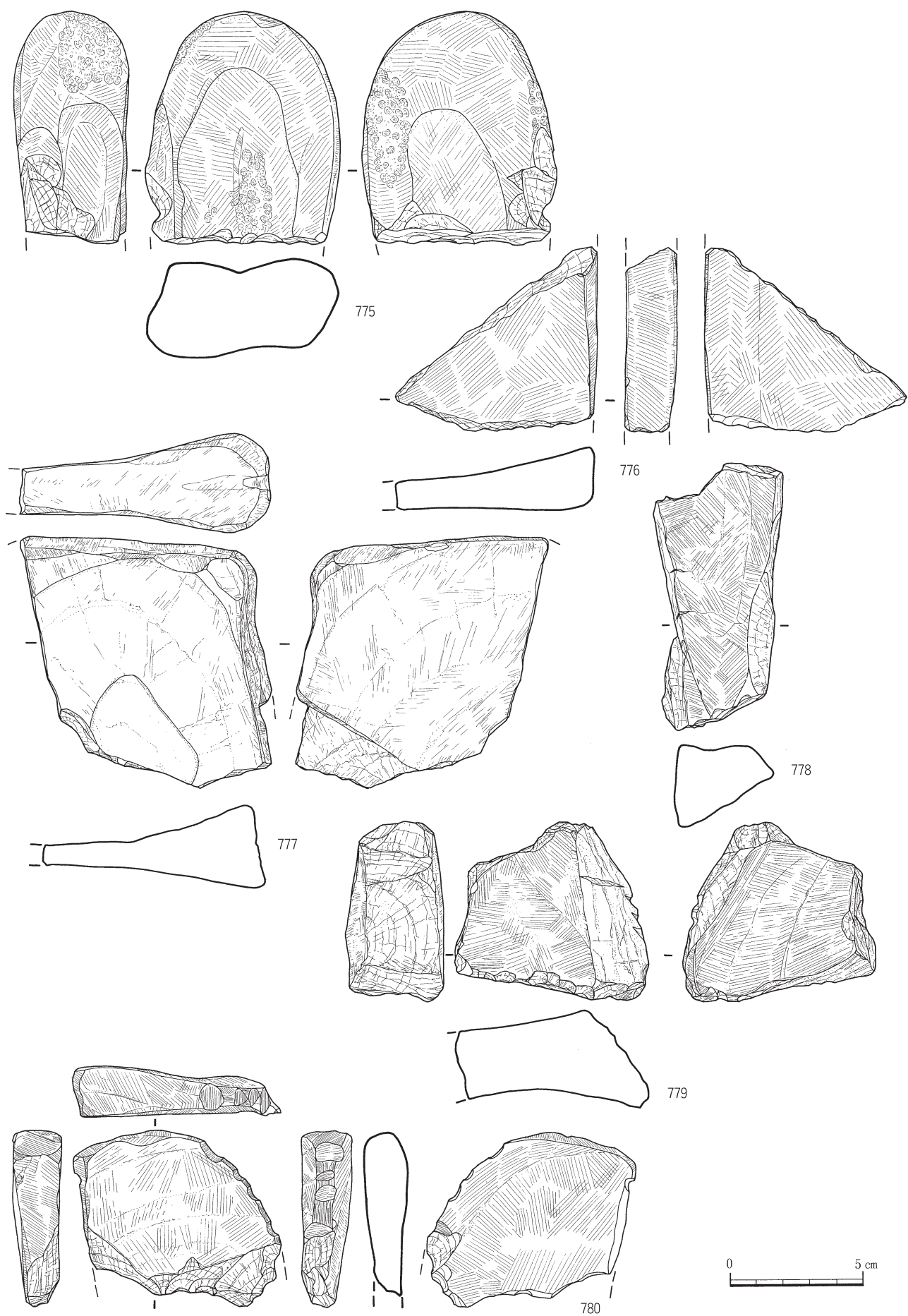
791～798は半月形に近い長軸上の一端に穿孔をもつもので、8点出土した。大きさと形は若干異なるものの、厚さや穿孔位置に大きな差はなく、同じ目的で使われたと考えられる。穿孔部分上面に紐ずれ痕を確認することはできないが、ペンダントのように首から下げた垂飾品ではないかと考えられる。これに類似したものは、中原遺跡や草野貝塚でも出土している。799～801も同じくらいの厚さを保っており、同様の垂飾品をつくろうとしたものかもしれない。

(2) 軽石製研磨具

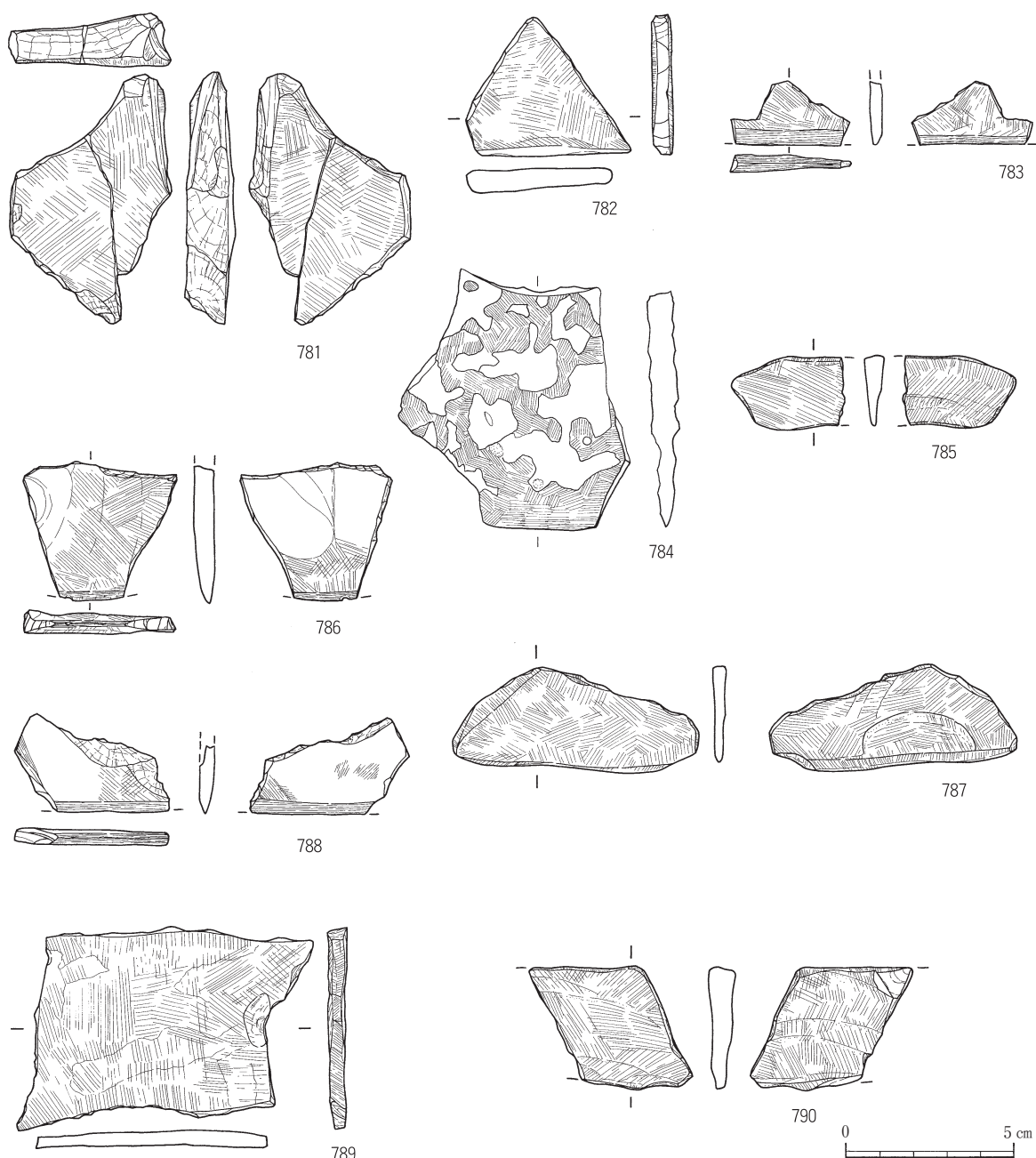
802～827・829・830は、最初から意図してこのような形になったのではなく、それぞれの作業を行った結果、最終的にそれぞれの形になったと想定される。ほとんどは平坦面をもつが、804と806は蛤刃状に、819は内湾する面をもち、それぞれ違った対照物を研磨したものと考えられる。829と830は棒状の表面を研磨した結果、円形になったと考えられ、それぞれの直径は3.5cm、3cmである。826には中央に直線的な線刻がみられ、別の用途があったと考えられる。土器製作時の調整具とされるような凹面をもったものは、827しか出土していないが、土器製作に使われたかどうかは不明である。

(3) 碗状軽石製品

828・831～833の大小4点が出土している。831は穿孔されている。草野貝塚で「碗形」、中原遺跡



第173图 石器 (40)

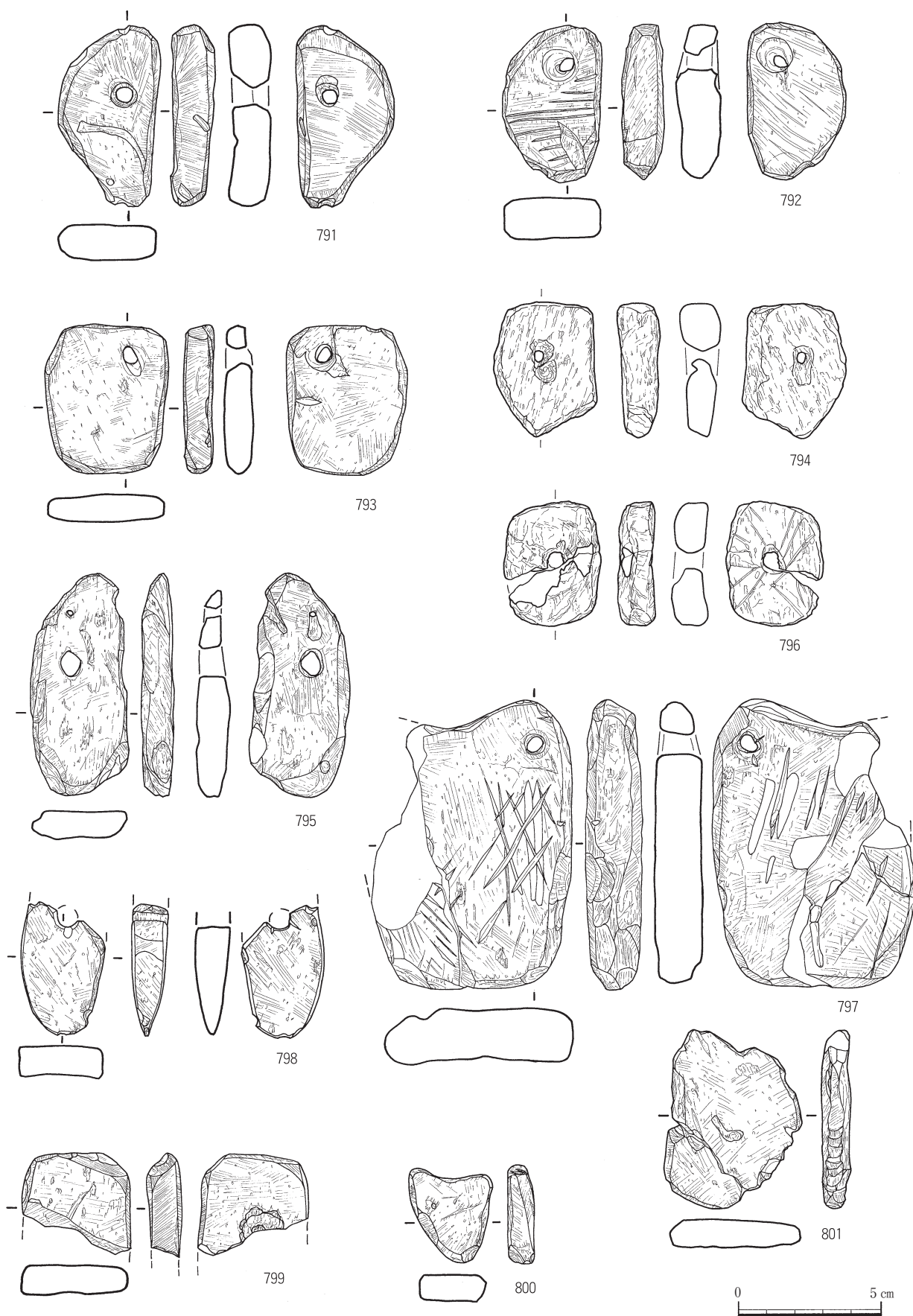


第174図 石器 (41)

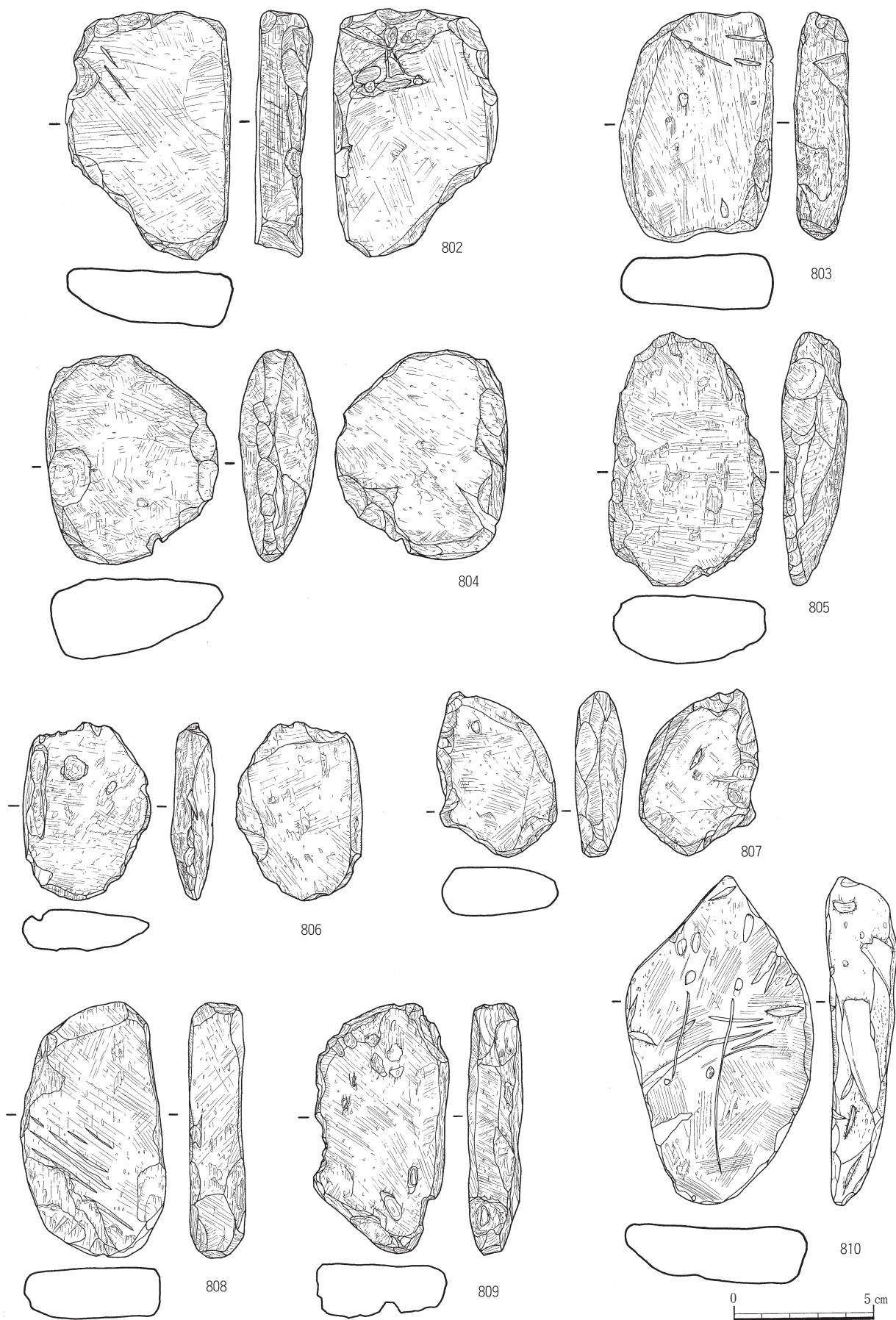
で「円形凹面石製品」と呼ばれており、軽石製品としてよく出土するものである。船形軽石製品のように定形化はしていない。用途は不明である。

(4) 輪状軽石製品

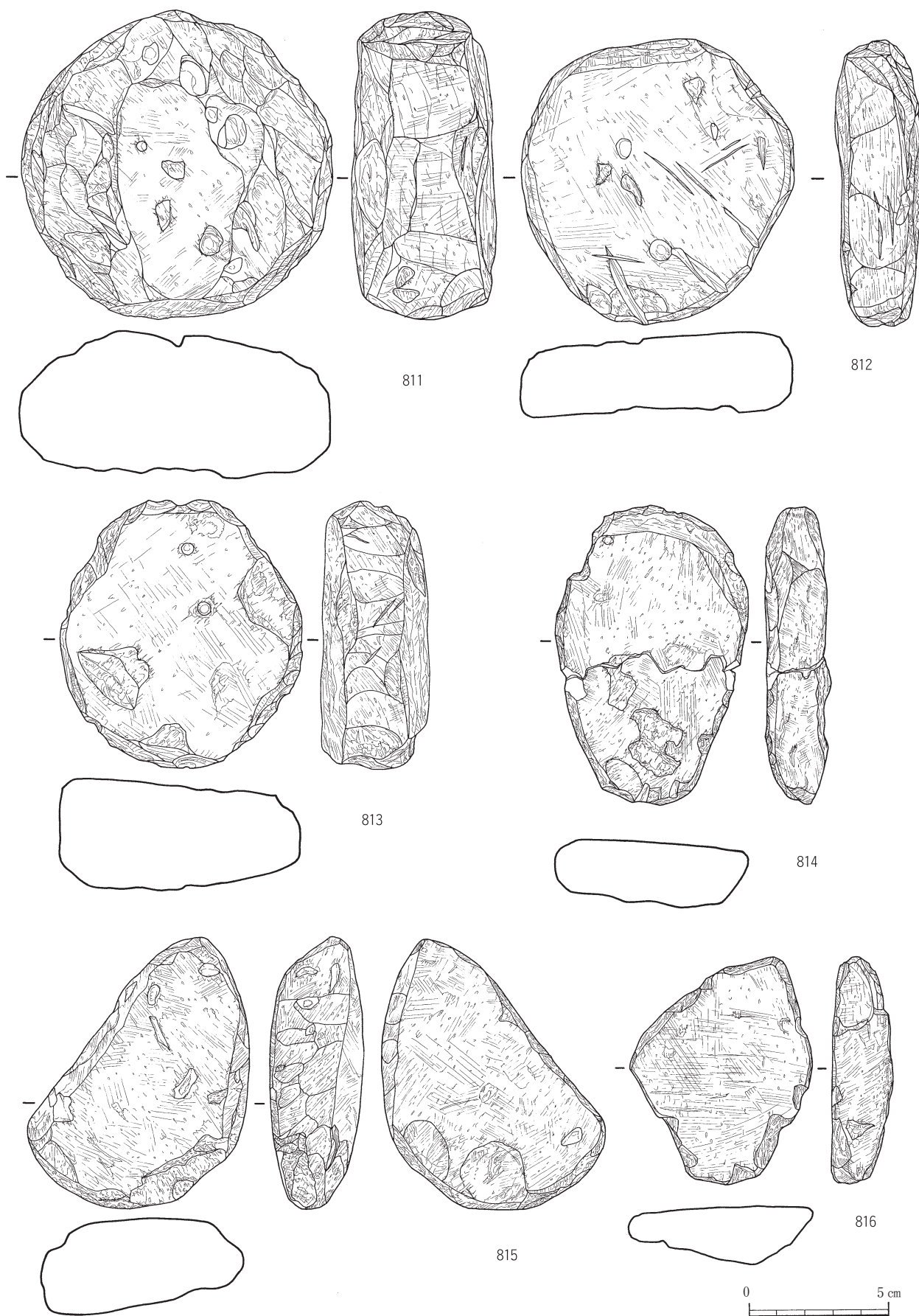
834は最大長15.7cm, 厚さ5.8cmで中央に直径2.7cmの孔が空くものである。両面から穿孔している様子が窺える。加工は丁寧なものでなく、草野貝塚のように定形化していない。用途は不明である。



第175图 石器 (42)



第176图 石器 (43)



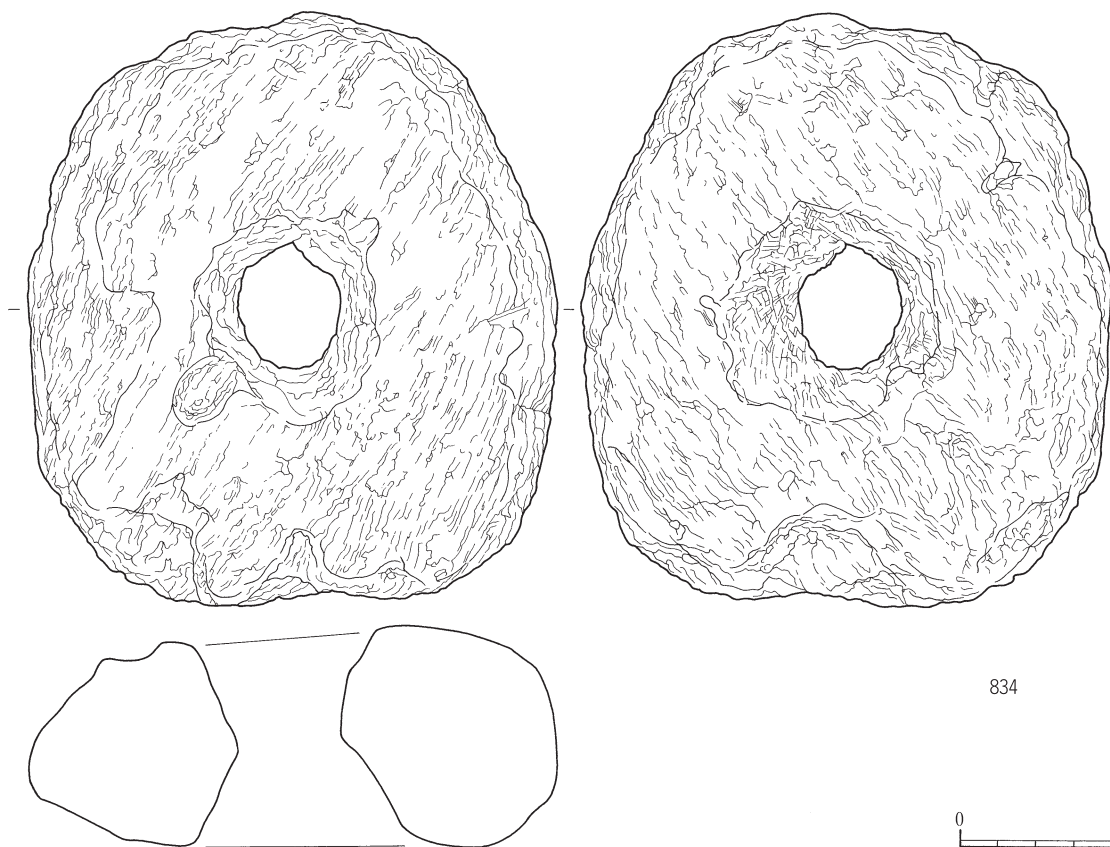
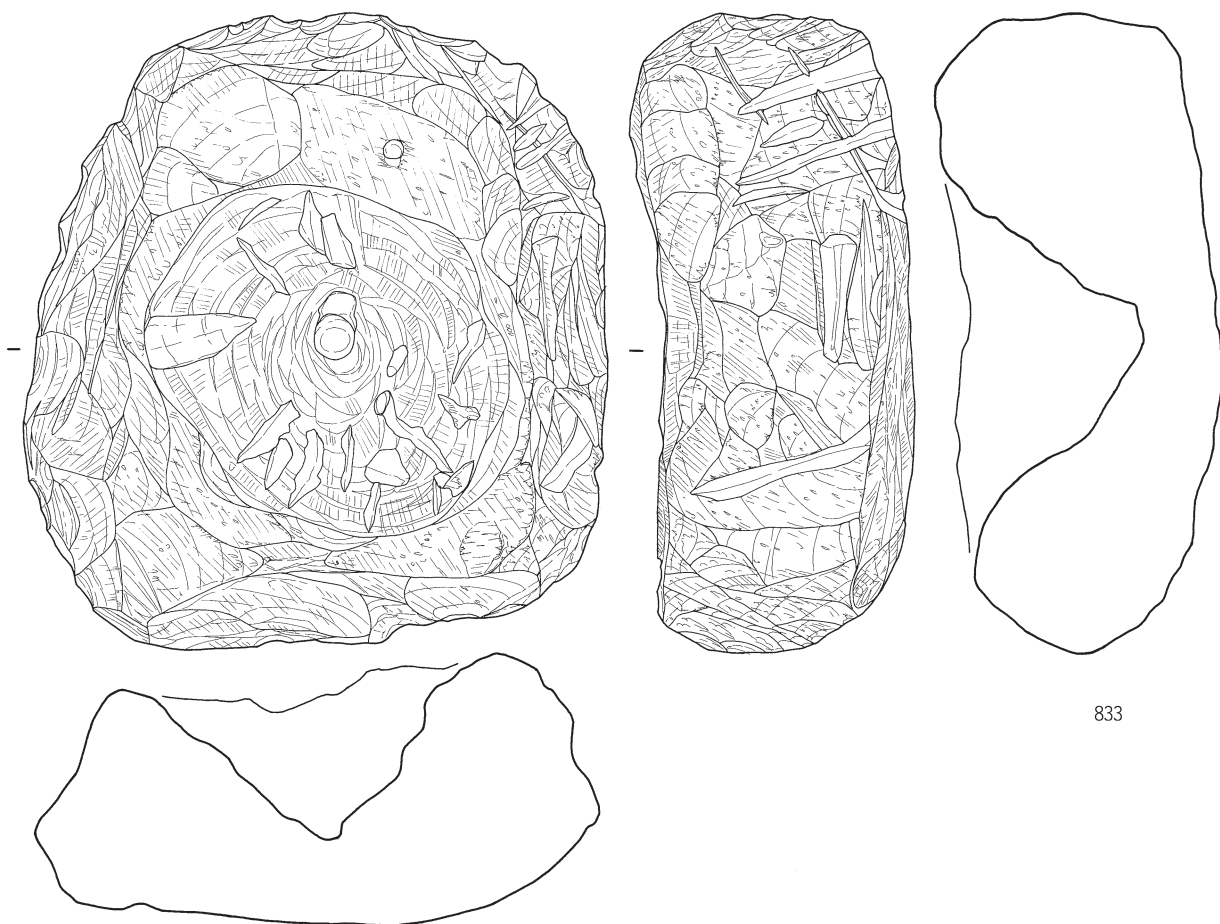
第177図 石器 (44)



第178图 石器 (45)



第179図 石器 (46)



第180図 石器 (47)

表13 出土石器観察表（1）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	レベル (m)	取上番号	写真 図版
第 134 図	518	H19		IIIb	石鏃	ハリ質安山岩	3.08	1.80	0.49	1.57	98.67	13583	30
	519	H19		IIIb	石鏃	ハリ質安山岩	2.55	1.50	0.49	1.41	100.32	13370	30
	520	G18	15住	2号土坑	石鏃	ハリ質安山岩	2.05	1.67	0.40	1.04	103.17	11276	30
	521	H18		IIIb	石鏃	ハリ質安山岩	2.40	1.40	0.43	1.11	101.76	15369	30
	522	G19		I b	石鏃	黒曜石	2.36	1.70	0.48	0.79	100.91	1968	30
	523	H20		IIIb2	石鏃	黒曜石	1.50	1.54	0.24	0.28	95.93	1613	30
	524	H18		IIIa	石鏃	黒曜石	2.05	1.94	0.34	0.93	101.82	17606	30
	525	E19		IIIb	石鏃	チャート	2.02	1.63	0.31	0.73	102.45	18864	30
	526	G18		I a	石鏃	黒曜石	2.76	2.64	0.56	2.69	103.15	7168	30
	527	E20	1住	埋土①	石鏃	安山岩	2.61	2.02	1.84	3.36	100.23	3801	30
	528	F21		IIIb	石鏃	真岩	2.85	1.31	0.58	1.48	99.76	225	30
	529	G20		IIIb3	石鏃	真岩	2.09	1.48	0.35	0.82	97.80	1709	30
	530	H19		IIIb	石鏃	真岩	1.79	1.27	0.34	0.44	99.18	16000	30
	531	H20		II	石鏃	真岩	2.54	1.69	0.44	1.56	97.69	1154	30
	532	G18		IIIb	石鏃	真岩	2.27	1.43	0.34	0.71	102.92	18422	30
	533	D20		IIIa	石鏃	真岩	2.46	1.42	0.32	0.95	99.10	20871	30
	534	-	-	-	石鏃	真岩	1.54	5.56	0.38	0.50	-	-	30
	535	-	-	-	石鏃	真岩	2.21	1.59	0.68	1.17	-	-	30
	536	G19	10坑	IIIa	石鏃	真岩	2.07	1.82	0.77	1.54	101.83	4392	30
	537	-	-	-	石鏃	真岩	1.79	1.86	0.57	1.94	-	-	30
第 135 図	538	H18		IIIb	石匙	黒曜石	4.74	3.81	0.86	11.02	101.35	18264	30
	539	G19		IIIb	石匙	安山岩 (サマカイト)	4.11	5.82	1.29	23.71	100.58	13749	30
	540	-	-	-	石匙	真岩	3.97	5.82	0.79	13.32	-	-	30
第 136 図	541	-	-	-	石核	安山岩	9.96	8.34	6.80	680.00	-	1283	31
	542	-	-	-	石核	安山岩	4.39	10.65	5.11	290.00	-	2266	31
	543	-	-	-	剥片	安山岩	6.83	5.48	0.78	26.11	-	1020	31
	544	-	-	-	剥片	安山岩	6.69	6.39	0.64	24.08	-	16334	31
	545	-	-	-	剥片	安山岩	5.78	5.39	0.99	30.02	-	4461	31
	546	-	-	-	剥片	安山岩	4.35	5.16	0.97	25.69	-	-	31
	547	-	-	-	剥片	安山岩	4.28	5.42	0.68	14.25	-	4822	31
	548	-	-	-	剥片	安山岩	8.46	12.04	4.86	290.00	-	2954	31
第137図	549	H19		IIIb	石核	砂岩	4.61	9.96	8.80	420.00	98.97	12321	
第138図	550	-	-	-	玉	緑色の石材	1.29	1.18	0.69	0.85	-	-	30
第 139 図	551	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	蛇紋岩	8.79	5.28	1.88	107.05	100.20	14275	32
	552	F16		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	8.95	4.21	1.44	71.63	109.40	5964	32
	553	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	7.84	3.73	1.16	45.60	99.10	11600	32
	554	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	蛇紋岩	9.47	4.35	1.29	105.89	99.96	14851	32
	555	G19		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	9.24	3.23	1.72	71.52	101.46	4390	32
	556	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	10.69	2.93	1.13	67.46	99.72	12244	32
	557	-	-	-	ノミ形磨製石器	真岩	4.58	3.08	1.04	19.78	-	-	
	558	-	-	-	ノミ形磨製石器	蛇紋岩	5.15	3.55	1.15	27.30	-	-	
	559	G18		I a	ノミ形磨製石器	真岩	5.63	3.20	1.26	33.79	103.27	7195	
	560	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	5.36	4.55	1.19	45.61	98.84	16774	
	561	G19		IIIb	ノミ形磨製石器	蛇紋岩	9.98	2.41	2.06	74.45	99.87	13160	32
	562	E20		IIIa	ノミ形磨製石器	蛇紋岩	9.65	3.03	1.61	70.87	101.38	3101	32
	563	D20		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	7.19	2.48	1.61	44.69	100.75	20988	32
	564	H20		IIIb3	ノミ形磨製石器	真岩	7.31	2.26	0.99	23.81	96.21	1701	
	565	-	-	-	ノミ形磨製石器	真岩	5.76	1.44	0.86	11.69	-	-	
第 140 図	566	F19		II	ノミ形磨製石器	真岩	12.87	2.48	1.66	67.30	101.76	4285	32
	567	D20		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	9.49	2.25	1.22	42.25	100.18	20479	32
	568	E18		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	7.85	2.65	0.88	29.25	105.26	21929	32
	569	H20		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	8.56	2.69	1.23	41.60	95.79	1540	32
	570	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	5.64	2.45	0.88	18.09	99.58	14995	
	571	H18		II	ノミ形磨製石器	真岩	6.15	2.08	1.16	22.44	101.73	11446	
	572	G18	15住	I a	ノミ形磨製石器	真岩	6.05	2.29	0.86	13.40	103.30	6965	
	573	-	-	-	ノミ形磨製石器	真岩	2.36	2.16	1.03	9.19	-	-	
	574	-	-	IIIb2	ノミ形磨製石器	真岩	3.15	2.21	0.77	6.35	-	-	32
	575	E19	13住	II	ノミ形磨製石器	真岩	7.71	1.87	1.35	25.19	103.40	4456	
	576	H20		II	ノミ形磨製石器	真岩	8.43	2.27	0.92	20.38	95.64	354	
	577	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	真岩	8.08	2.93	1.03	37.55	98.64	11144	
	578	E21		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	6.35	2.44	0.91	20.37	98.50	884	
	579	E20		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	5.94	3.06	1.05	19.81	100.72	3536	32
	580	-	-	-	ノミ形磨製石器	真岩	5.39	1.68	0.64	10.18	-	-	
	581	D19		IIIa	ノミ形磨製石器	真岩	4.81	2.17	0.60	10.36	99.93	20774	

表14 出土石器観察表（2）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	レベル	取上番号	写真 図版
							(cm)	(cm)	(cm)	(g)	(m)		
第 140 図	582	H20		IIIa	ノミ形磨製石器	頁岩	5.27	2.16	0.48	5.18	97.39	4591	
	583	-		IIIb2	ノミ形磨製石器	頁岩	3.48	1.57	0.43	1.89	-	-	
	584	H19		IIIb	ノミ形磨製石器	頁岩	2.48	1.87	1.16	6.55	100.42	12820	
第 141 図	585	F17		II	ノミ形磨製石器	頁岩	7.03	5.25	1.47	82.38	103.72	4400	
	586	-		-	ノミ形磨製石器	頁岩	10.28	4.59	1.47	80.36	-	-	
	587	G18		IIIb	ノミ形磨製石器	頁岩	11.16	6.29	2.79	290.27	102.33	19123	
	588	G21		IIIc	石斧	ホルンフェルス	9.79	5.79	2.42	159.02	97.98	129	
	589	E20		IIIa	石斧	頁岩	5.87	4.29	1.34	52.59	101.08	3238	
	590	F20		II	石斧	頁岩	5.12	3.51	1.73	39.66	101.48	2100	
第 142 図	591	D19		IIIa	石斧A0	ホルンフェルス	15.99	6.39	3.77	570.00	102.95	20363	33
	592	E19	10住	-	石斧A0	ホルンフェルス	12.87	7.70	2.88	380.00	102.36	20206	33
	593	E20		IIIa	石斧A0	ホルンフェルス	9.03	5.64	2.56	184.96	100.81	3550	33
	594	D19		IIIa	石斧A1c	頁岩	13.30	5.93	3.04	334.57	102.44	21503	33
	595	G20	3住	IIIb	石斧A0	ホルンフェルス	11.73	5.57	3.05	263.25	99.80	1000	33
第 143 図	596	H19		IIIb	石斧A0	ホルンフェルス	10.75	5.19	2.83	240.99	98.84	14536	33
	597	H19		IIIb	石斧A0	ホルンフェルス	10.41	5.45	2.41	206.82	98.23	13674	33
	598	F20	2住	-	石斧B0	頁岩	10.10	4.59	1.79	101.86	100.70	17337	33
	599	D20		IIIa	石斧B0	ホルンフェルス	11.32	6.07	3.68	360.00	98.26	20478	33
	600	D20		IIIa	石斧B0	ホルンフェルス	10.45	5.98	2.76	192.13	99.01	20835	33
	601	G20		IIIa	石斧B0	ホルンフェルス	9.29	4.92	3.35	224.05	98.49	1823	33
	602	F21		IIIa	石斧B0	頁岩	7.14	6.95	2.42	159.30	98.15	1250	
	603	D20		II	石斧B0	ホルンフェルス	7.23	7.02	2.89	180.20	100.41	20302	
	604	-		-	石斧B0	ホルンフェルス	8.50	5.12	2.94	183.17	-	-	33
	605	H19		IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	11.79	6.38	2.95	315.46	100.43	13263	
第 144 図	606	-		-	石斧B0	砂岩	10.52	6.73	4.23	420.00	-	-	
	607	E21	1住	IIIa	石斧B0	ホルンフェルス	6.86	5.14	2.19	117.84	100.28	9848	
	608	E19	13住	IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	7.69	6.73	3.68	270.30	103.20	10381	
	609	H19		IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	7.21	6.25	2.86	213.43	99.85	11115	33
	610	H20		IIIb3	石斧B0	ホルンフェルス	9.91	6.81	3.01	254.60	96.42	1812	
	611	H19		IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	8.55	6.25	3.31	229.30	100.15	14978	
	612	H19		IIIb	石斧B0	砂岩	7.68	6.44	2.92	214.48	98.92	14177	33
	613	H20		IIIb2	石斧B0	ホルンフェルス	8.20	6.23	2.62	155.79	96.52	1929	33
第 145 図	614	G19		IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	7.35	4.71	3.94	223.23	100.88	7805	
	615	H20		IIIb	石斧B0	ホルンフェルス	8.13	5.75	3.37	242.11	97.40	1908	
	616	H20		IIIb3	石斧C0	ホルンフェルス	9.41	4.24	2.99	141.81	96.08	1906	
	617	F16		IIIa	石斧C0	ホルンフェルス	14.45	5.85	4.08	470.00	109.73	5470	34
	618	H20		II	石斧C0	ホルンフェルス	12.69	5.71	2.99	238.35	97.29	491	34
	619	H19		IIIb	石斧C0	頁岩	12.13	5.93	2.66	263.50	99.21	12910	34
第 146 図	620	G18	5住	-	石斧C0	ホルンフェルス	16.74	6.23	4.86	620.00	102.07	16565	34
	621	H20		IIIb	石斧C0	ホルンフェルス	16.85	6.97	3.53	560.00	97.22	1418	34
	622	H19		IIIb	石斧C0	ホルンフェルス	16.15	5.76	3.67	440.00	99.74	13887	34
	623	H19		IIIb	石斧C0	ホルンフェルス	14.44	6.19	3.53	410.00	98.89	16673	34
	624	D20		IIIa	石斧C0	ホルンフェルス	9.42	4.77	3.14	183.59	99.82	20112	34
第 147 図	625	F20	2住	I	石斧D	ホルンフェルス	8.94	5.33	3.08	184.35	100.86	11370	34
	626	G18	15住	-	石斧D	ホルンフェルス	6.43	4.63	3.43	109.74	103.26	11231	34
	627	-		-	石斧D	ホルンフェルス	6.53	4.42	2.56	114.02	-	-	
	628	H20		IIIb	石斧D	ホルンフェルス	4.00	2.94	2.29	33.75	96.83	1843	34
	629	F18		II	石斧D	ホルンフェルス	6.41	3.89	3.23	74.27	103.26	16032	34
	630	H19		IIIa	石斧D	ホルンフェルス	6.52	4.75	3.18	117.97	100.81	6155	34
	631	F20	2住	埋土①	石斧D	ホルンフェルス	5.33	4.09	3.13	68.85	100.82	3892	34
	632	F18		II	石斧D	ホルンフェルス	4.94	3.92	3.10	63.13	104.22	16024	34
第 148 図	633	G20	3住	I b	石斧A1a	ホルンフェルス	11.66	5.41	3.01	232.00	99.63	184	35
	634	H19		IIIb	石斧A1a	ホルンフェルス	13.82	4.74	3.40	328.20	98.92	13797	35
	635	E20	1住	IIIa	石斧A1	ホルンフェルス	12.62	5.45	2.54	228.21	100.58	3600	35
	636	D20		IIIa	石斧A1	ホルンフェルス	12.37	5.45	2.76	225.56	99.78	20164	
	637	H20		III	石斧A1b	ホルンフェルス	10.38	4.54	3.07	208.31	96.77	700	
	638	H19		IIIb	石斧A1b	ホルンフェルス	11.76	5.40	3.02	280.00	99.93	14288	35
	639	H19		IIIb	石斧A1	ホルンフェルス	10.61	4.03	2.76	173.13	97.99	16119	
第 149 図	640	H19		IIIb	石斧B1a	ホルンフェルス	9.67	6.61	2.68	245.43	99.09	14753	35
	641	-		-	石斧B	頁岩	13.61	6.49	3.68	230.00	-	-	35
	642	H19		IIIb	石斧B1a	ホルンフェルス	10.69	6.15	2.83	324.89	98.52	13659	35
	643	G19		IIIa	石斧B1a	ホルンフェルス	9.29	4.87	2.46	159.07	100.54	4218	
	644	E20		II	石斧B1a	ホルンフェルス	7.63	6.16	2.09	143.46	98.23	2468	
	645	F20		IIIa	石斧B1a	ホルンフェルス	9.13	6.11	2.72	253.43	101.81	21765	

表15 出土石器観察表（3）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	レベル	取上番号	写真 図版
							(cm)	(cm)	(cm)	(g)	(m)		
第 149 図	646	F 20	2 住	-	石斧B	ホルンフェルス	11.53	4.51	4.39	304.11	100.71	12023	
	647	H19		IIIb	石斧B1a	ホルンフェルス	8.89	7.35	3.62	370.00	98.39	12871	
	648	H19		IIIb	石斧B1b	ホルンフェルス	10.14	5.80	3.13	306.75	100.03	15870	35
第 150 図	649	H19		IIIb	石斧B1b	ホルンフェルス	11.34	5.54	3.26	314.83	99.23	13563	35
	650	F 19		I	石斧B1c	ホルンフェルス	9.73	5.62	4.04	334.88	103.06	3980	35
	651	H20		IIIb3	石斧B1b	砂岩	9.54	6.45	2.73	270.24	96.48	1634	35
	652	F 16		IIIa	石斧B1c	ホルンフェルス	10.23	4.99	2.69	219.83	109.78	5474	35
	653	H20		IIIb2	石斧C1a	ホルンフェルス	13.98	6.14	3.50	350.00	97.33	1911	
	654	H19		IIIb	石斧C1a	ホルンフェルス	12.88	5.24	3.36	293.35	100.18	11624	
	655	G 19		IIIa	石斧C1a	ホルンフェルス	10.18	5.58	2.70	197.25	100.52	4219	
	656	F 19		IIIa	石斧C1b	ホルンフェルス	8.38	5.82	2.84	191.04	101.33	12605	35
	657	D 20		IIIa	石斧C1b	ホルンフェルス	8.92	4.93	3.19	149.42	100.22	19912	35
第 151 図	658	H20		IIIb3	石斧C1c	ホルンフェルス	11.25	4.53	3.58	237.10	96.90	1725	
	659	H20		IIIb	石斧C1c	ホルンフェルス	12.19	5.70	3.27	310.72	97.29	1910	
	660	H18		IIIa	石斧D1b	ホルンフェルス	5.95	4.69	2.73	99.90	101.86	12743	35
第 152 図	661	D 20		II	石斧C1a	ホルンフェルス	12.80	5.54	3.79	360.00	99.52	20036	
	662	D 20	12住	II	石斧C1b	ホルンフェルス	14.70	7.10	3.22	430.00	99.47	20635	
	663	H19		IIIa	石斧C1b	ホルンフェルス	10.17	5.19	3.02	191.36	99.49	8453	
	664	D 19		IIIa	石斧C1a	ホルンフェルス	12.11	6.22	2.65	380.00	102.88	20052	
	665	G 19		I b	石斧C1b	ホルンフェルス	6.65	4.27	3.52	121.23	99.36	282	35
	666	H19		IIIb	石斧C1b	砂岩	16.03	6.01	4.69	630.00	100.17	14101	
第 153 図	667	-		-	石斧A2c	ホルンフェルス	10.02	4.61	3.05	219.16	-	-	36
	668	-		-	石斧A2b	ホルンフェルス	11.24	5.89	3.57	370.00	-	-	36
	669	H19		IIIb	石斧A2b	ホルンフェルス	10.42	5.10	3.17	248.92	98.66	13611	36
	670	D 20		IIIa	石斧A2b	ホルンフェルス	8.47	5.22	2.59	167.72	99.63	20170	36
	671	H19		IIIb	石斧A2b	ホルンフェルス	8.43	4.93	2.71	195.96	98.26	13660	36
	672	F 15		IIIa	石斧A2b	ホルンフェルス	15.62	6.41	2.27	390.00	110.86	4718	36
	673	H20		IIIb3	石斧A2b	ホルンフェルス	9.41	5.26	2.75	223.90	95.89	1692	36
	674	H20		IIIb3	石斧A2c	ホルンフェルス	8.94	5.55	2.35	164.95	95.67	1925	36
第 154 図	675	H19		IIIb	石斧A2c	ホルンフェルス	11.33	5.22	3.08	242.25	99.72	11118	36
	676	G 20		IIIb	石斧A2b	ホルンフェルス	13.11	6.37	2.99	321.62	100.32	100	36
	677	G 19		IIIb	石斧A2a	ホルンフェルス	13.75	5.73	2.15	246.57	100.98	13289	36
	678	H20		IIIb3	石斧A2b	ホルンフェルス	11.49	6.34	2.73	268.92	96.92	1771	36
	679	D 18		IIIa	石斧A2b	ホルンフェルス	11.20	6.03	3.49	360.00	103.66	21923	36
	680	H20		IIIb1	石斧A2b	ホルンフェルス	9.89	5.58	2.69	212.10	97.51	1553	36
	681	H19		IIIa	石斧A2b	ホルンフェルス	11.65	4.89	2.74	213.33	100.34	7018	36
	682	F 21		IIIa	石斧B2b	ホルンフェルス	8.78	7.63	2.85	260.67	100.33	720	
	683	E 20	11住	IIIa	石斧B2b	蛇紋岩	6.02	4.56	1.51	57.96	101.10	3200	
	684	D 18	14住	IIIb	石斧B2c	ホルンフェルス	12.25	4.66	3.42	319.37	103.95	21859	37
第 155 図	685	H19		IIIb	石斧B2c	頁岩	12.08	7.57	2.59	340.00	99.11	13200	37
	686	H20		IIIb	石斧B2c	ホルンフェルス	9.48	6.76	4.17	380.00	97.48	1875	37
	687	-		-	石斧B2b	ホルンフェルス	8.32	5.08	3.09	194.47	-	-	37
	688	G 18		-	石斧C	ホルンフェルス	10.22	5.98	3.28	305.56	102.97	17505	37
	689	H20		IIIb	石斧B2c	ホルンフェルス	11.69	7.55	3.79	510.00	97.30	1420	37
	690	G 18		IIIb	石斧B2c	ホルンフェルス	9.26	5.61	2.81	250.51	101.43	17965	37
	691	H19		IIIa	石斧B2a	ホルンフェルス	11.48	6.67	3.76	460.00	100.36	13536	
	692	H20		IIIb2	石斧B2	ホルンフェルス	9.01	6.65	3.16	287.37	97.55	1895	37
	693	-	掘込7		石斧C2	ホルンフェルス	9.55	5.16	3.63	254.07	-	-	
第 156 図	694	H19		IIIb	石斧C2a	ホルンフェルス	10.28	5.31	3.15	178.12	98.11	15937	
	695	G 18		II	石斧C2	ホルンフェルス	10.68	5.12	3.92	245.61	102.31	9205	
	696	-		IIIa	石斧C2a	ホルンフェルス	11.77	5.78	3.91	340.00	-	-	
	697	G 20		IIIa	石斧C2	ホルンフェルス	13.64	4.51	2.00	192.07	97.77	1377	
	698	G 17	12坑	-	石斧C2a	ホルンフェルス	17.56	6.12	2.99	430.00	103.13	16420	
	699	H19		IIIb	石斧C2a	ホルンフェルス	8.03	5.16	2.98	118.84	101.02	13755	
	700	H19		IIIb	石斧C2a	砂岩	7.27	4.95	4.01	170.30	97.97	17717	
	701	H20		IIIb	石斧C2a	ホルンフェルス	7.69	3.66	2.01	80.63	97.00	975	
	702	H19		IIIb	石斧C2a	蛇紋岩	12.59	7.90	4.33	710.00	99.40	12971	
第 157 図	703	E 19		IIIa	石斧C2b	砂岩	11.17	6.57	2.97	270.80	101.63	21761	37
	704	F 21		II	石斧C2b	ホルンフェルス	10.94	6.01	2.91	286.62	98.64	1249	37
	705	D 21		II	石斧C	蛇紋岩	8.42	4.01	1.97	90.94	98.07	20019	
	706	E 20	1 住	IIIa	石斧D2b	ホルンフェルス	5.97	5.21	3.14	142.38	100.41	3619	
第 158 図	707	H19		IIIb	石斧C2b	砂岩	10.64	6.02	4.02	400.00	99.25	13194	37
	708	G 19		IIIb	石斧C2	砂岩	6.93	7.17	3.96	266.74	99.72	16649	37
	709	E 20		II	石斧C2	砂岩	8.59	5.75	4.39	370.00	97.98	2472	37

表16 出土石器観察表（4）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	レベル	取上番号	写真 図版
							(cm)	(cm)	(cm)	(g)	(m)		
第 158 図	710	-		-	石斧C2b	砂岩	8.36	5.42	3.32	225.82	-	-	37
	711	-		IIIb2	石斧C2	砂岩	5.55	4.92	4.11	185.44	-	-	37
	712	G19		IIIb	石斧C2	頁岩	7.44	5.11	3.62	193.00	99.76	13740	37
第 159 図	713	H20		IIIb2	敲石	石英	7.97	7.70	5.76	500.00	96.65	1739	38
	714	D19		IIIa	敲石	石英	7.59	7.27	4.99	350.00	102.36	20382	38
	715	-		-	敲石	石英	7.50	5.53	4.43	246.74	-	-	38
	716	F18		I	敲石	砂岩	5.88	5.43	3.42	163.92	103.59	16183	38
	717	G18		IIIa	敲石	石英	5.54	5.38	3.50	151.80	102.34	15364	38
	718	G20		IIIa	敲石	砂岩	6.08	5.43	5.14	205.40	100.11	1347	38
	719	F21		II	敲石	砂岩	7.04	4.08	2.77	112.78	99.11	1245	38
第 160 図	720	-		-	敲石	安山岩	8.78	3.32	1.99	78.56	-	-	38
	721	F20	2住	IIIa	敲石	安山岩	8.23	3.59	2.49	111.67	100.98	2707	38
	722	G18		IIIb	敲石	安山岩	10.48	6.77	2.82	300.10	101.76	17011	38
	723	E20		IIIa	敲石	砂岩	11.77	6.09	4.22	410.00	101.10	2931	38
	724	H19		IIIa	敲石	砂岩	9.40	5.85	2.08	178.85	99.08	5776	38
	725	-		-	敲石	安山岩	6.49	4.97	4.02	181.62	-	-	38
	726	E19	12住	-	敲石	安山岩	5.54	5.09	4.53	188.81	102.77	20645	38
	727	H20		IIIb3	敲石	砂岩	6.73	5.26	3.90	215.49	96.29	1836	38
	728	F18		I a	敲石	砂岩	7.56	5.88	3.25	217.34	103.46	16339	38
	729	-		-	磨石	砂岩	10.72	9.34	4.48	690.00	-	-	39
第 161 図	730	H19		IIIb	磨石	砂岩	9.45	9.21	4.19	540.00	98.97	15940	39
	731	H20		IIIb2	磨石	砂岩	11.19	9.63	4.52	810.00	96.29	1825	39
第 162 図	732	G18	5住	IIIb	磨石	砂岩	10.88	9.23	4.39	700.00	102.17	11646	39
	733	-		-	磨石	砂岩	8.79	8.51	5.12	570.00	-	-	39
	734	F16		IIIa	磨石	砂岩	7.94	7.59	3.83	350.00	107.77	6424	39
	735	H20		IIIb	磨石	砂岩	11.79	10.41	5.28	1060.00	95.72	1482	39
	736	H20		IIIb	磨石	安山岩	10.26	9.88	4.86	760.00	96.82	1944	40
第 163 図	737	H19		IIIb	磨石	安山岩	11.98	10.73	4.89	1010.00	98.83	15070	40
	738	-		-	磨石	安山岩	12.51	10.26	4.31	960.00	-	-	40
	739	G15		IIIa	磨石類	安山岩	11.82	10.39	4.99	990.00	110.76	5015	40
	740	D18	14住	IIIb	磨石	安山岩	13.32	11.35	6.92	1570.00	103.94	21863	40
第 164 図	741	H20		IIIb2	磨石類	砂岩	10.92	9.62	4.53	810.00	95.78	1866	40
	742	H19		IIIb	磨石	火成岩	10.77	10.46	4.73	830.00	99.75	14475	40
	743	E18		II	磨石	礫岩	8.75	8.28	4.89	520.00	103.35	19680	39
	744	G20		IIIb	磨石	安山岩	10.03	8.60	5.17	650.00	98.19	1820	39
	745	D18	14住	IIIb	磨石	安山岩	10.82	9.63	4.78	820.00	103.94	21862	39
第 165 図	746	H19		IIIb	磨石	安山岩	11.82	10.51	4.45	930.00	100.13	14100	39
	747	-		-	磨石	砂岩	12.12	10.93	4.48	950.00	-	-	39
	748	H20		IIIb1	磨石	安山岩	11.69	10.44	4.29	860.00	97.49	1551	40
第 166 図	749	F20	2住	IIIa	磨石	安山岩	10.35	9.30	4.37	690.00	101.06	3273	40
	750	H20		IIIb2	磨石	安山岩	10.53	9.18	4.56	590.00	96.93	1748	40
	751	H19		IIIb	磨石	安山岩	10.70	9.60	4.51	760.00	99.72	15472	40
	752	G18	5住	-	磨石	礫岩	11.92	10.29	4.98	1060.00	101.85	17417	41
第 167 図	753	G20	3住	-	磨石類	礫岩	9.37	7.71	5.17	580.00	99.17	9794	41
	754	H19		IIIb	磨石類	花崗岩	9.87	8.65	4.19	600.00	98.58	16872	41
	755	-		-	磨石	花崗岩	10.45	9.99	4.97	810.00	-	-	41
	756	G18		II	磨石	花崗岩	10.87	9.68	4.88	870.00	101.82	10186	41
	757	H20		IIIb2	磨石	花崗岩	10.22	9.45	4.61	750.00	96.61	1922	40
	758	E19		IIIa	磨石	花崗岩	10.49	9.64	5.09	770.00	103.47	6707	40
第 168 図	759	-		-	磨石	花崗岩	11.04	10.39	4.36	840.00	-	15026	41
	760	H18		IIIa	凹石	安山岩	8.96	5.57	3.88	300.61	101.87	11678	41
	761	-		-	磨石	凝灰岩	6.02	7.00	3.98	194.75	-	7864	41
	762	G20		IIIb	凹石	安山岩	9.28	7.39	3.52	336.40	97.65	1784	41
	763	I21		IIIa	石皿	安山岩	37.80	29.00	7.68	12100.00	99.60	1824	42
	764	H19		IIIb	石皿	安山岩	28.00	23.30	8.84	6100.00	100.48	14273	42
	765	F20	石組み炉	-	石皿	安山岩	22.90	20.00	9.10	5500.00	101.40	-	42
第 169 図	766	-		-	石皿	安山岩	38.50	25.30	11.60	8300.00	-	-	43
	767	-	2住	-	石皿	安山岩	31.20	19.30	8.40	5000.00	-	22008	43
	768	-		-	石皿	安山岩	19.40	29.10	10.10	9700.00	-	-	42
	769	-	4住	-	石皿	安山岩	29.60	19.20	7.50	4700.00	-	17801	42
	770	-		-	石皿	安山岩	41.70	29.20	9.00	13500.00	-	13700	43
第 170 図	771	-	3住	-	石皿	安山岩	32.70	23.90	11.60	12600.00	-	-	42
	772	-		-	石皿	安山岩	13.00	27.60	8.60	3700.00	-	13715	42
	773	-		-	石皿	安山岩	14.10	29.00	8.80	3900.00	-	-	43

表17 出土石器観察表（5）

挿図 番号	遺物 番号	出土区	遺構	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	レベル (m)	取上番号	写真 図版
第Ⅱ図	774	-		-	石皿	安山岩	12.30	11.90	5.10	1100.00	-	-	42
第 173 図	775	H20		Ⅲb	砥石	砂岩	8.89	7.54	4.39	410.00	97.20	1277	44
	776	H19		Ⅲb	砥石	砂岩	6.65	7.67	2.23	107.19	99.24	13555	44
	777	G19		Ⅲb	砥石	砂岩	9.16	8.66	3.98	275.34	99.33	13159	44
	778	-		-	砥石	砂岩	9.95	4.90	3.64	168.32	-	-	44
	779	-		Ⅲ	砥石	砂岩	6.48	7.26	4.28	201.00	-	-	44
	780	G18	5 住	-	砥石	砂岩	6.12	7.14	2.19	118.64	102.33	17446	44
第 174 図	781	H19		Ⅲb	砥石	砂岩	7.29	5.00	1.35	44.87	99.17	10638	44
	782	-		Ⅲ	砥石	砂岩	4.16	4.95	0.62	15.52	-	-	44
	783	-		-	擦切石器	砂岩	1.98	3.43	0.47	2.69	-	-	44
	784	-		-	擦切石器	砂岩	7.68	6.85	0.99	42.15	-	21597	44
	785	-		-	擦切石器	砂岩	2.13	3.39	0.61	6.15	-	-	44
	786	-		-	擦切石器	砂岩	4.18	4.58	0.66	14.59	-	-	44
	787	-		-	擦切石器	砂岩	3.16	7.29	0.59	15.50	-	717	44
	788	H19		Ⅲb	擦切石器	砂岩	2.85	4.64	0.49	5.83	99.17	10638	44
	789	D20		Ⅲa	擦切石器	砂岩	5.79	10.37	0.57	35.03	100.50	20739	44
	790	-		Ⅲb2	擦切石器	砂岩	3.56	3.04	0.88	17.38	-	-	44
第 175 図	791	-		-	軽石製品	軽石	6.39	3.49	1.56	7.08	-	-	45
	792	-		Ⅲ	軽石製品	軽石	5.57	3.60	1.49	7.47	-	-	45
	793	-		-	軽石製品	軽石	5.25	4.37	1.29	6.04	-	-	45
	794	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	4.76	3.65	1.47	6.94	99.17	14545	45
	795	-		-	軽石製品	軽石	7.98	3.59	1.26	6.23	-	-	45
	796	-		-	軽石製品	軽石	4.46	3.41	1.36	4.22	-	-	45
	797	H20		Ⅲb2	軽石製品	軽石	10.26	6.91	1.89	32.41	97.53	1828	45
	798	G19		Ⅲa	軽石製品	軽石	4.78	2.95	1.29	3.82	101.77	4170	
	799	-		-	軽石製品	軽石	3.11	3.83	1.19	4.24	-	-	
	800	-		Ⅲb2	軽石製品	軽石	3.29	3.08	1.04	2.13	-	-	
第 176 図	801	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	5.91	4.89	1.00	4.28	101.61	15772	
	802	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	8.87	6.05	2.19	32.35	99.34	14636	45
	803	-		Ⅲb3	軽石製品	軽石	8.51	5.68	2.17	35.58	-	-	45
	804	H20		Ⅲb	軽石製品	軽石	7.60	6.35	2.91	31.72	97.21	1280	45
	805	-		Ⅲ	軽石製品	軽石	9.27	5.88	2.39	30.98	-	-	45
	806	-		-	軽石製品	軽石	6.48	4.69	1.55	10.52	-	-	45
	807	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	1.16	4.49	1.79	7.23	99.64	16703	45
	808	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	9.14	5.04	2.05	24.39	99.75	14475	45
	809	-		-	軽石製品	軽石	8.85	4.88	1.95	22.32	-	-	45
	810	-		Ⅱ	軽石製品	軽石	11.72	6.73	2.37	34.53	-	11202	
第 177 図	811	G20		Ⅲa	軽石製品	軽石	11.40	10.94	5.03	181.77	99.34	1212	
	812	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	10.12	9.98	2.66	82.20	99.35	16700	46
	813	H20		Ⅲb	軽石製品	軽石	9.49	8.88	3.86	85.92	97.70	1850	46
	814	G20		Ⅲa	軽石製品	軽石	10.57	6.97	2.33	43.69	100.41	1217	
	815	-		-	軽石製品	軽石	9.41	7.91	3.56	64.69	-	-	
	816	E20		Ⅲa	軽石製品	軽石	8.26	6.40	2.12	23.91	100.37	3445	
第 178 図	817	-		Ⅲba	軽石製品	軽石	9.95	6.51	2.65	41.78	-	-	
	818	-		Ⅲ	軽石製品	軽石	11.78	9.15	4.11	149.91	-	-	
	819	F20	2 住	埋土①	軽石製品	軽石	12.93	6.80	4.15	93.85	100.99	3880	
	820	-		Ⅲ	軽石製品	軽石	7.14	4.76	3.07	26.04	-	-	
	821	G17		I	軽石製品	軽石	5.01	3.73	1.92	9.72	106.29	6086	
	822	-		-	軽石製品	軽石	5.28	2.90	3.09	10.01	-	-	
	823	F20	2 住	Ⅲa	軽石製品	軽石	6.16	5.99	3.62	21.49	100.93	3248	
	824	G19		Ⅲa	軽石製品	軽石	9.69	4.13	2.73	21.56	101.18	2011	
	825	-		-	軽石製品	軽石	6.38	4.58	2.97	14.64	-	-	
第 179 図	826	E20		Ⅲa	軽石製品	軽石	4.43	6.42	21.40	17.20	100.30	2174	
	827	F19	16住	Ⅱ	軽石製品	軽石	10.82	10.04	3.35	81.40	102.37	4242	
	828	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	8.08	5.52	3.04	24.81	99.92	17084	46
	829	G20		Ⅲa	軽石製品	軽石	6.26	8.37	4.81	39.49	101.51	2589	46
	830	G19		I a	軽石製品	軽石	5.16	6.46	2.58	15.40	99.28	11453	46
	831	E20		Ⅲa	軽石製品	軽石	9.15	5.65	4.38	30.98	100.29	3444	46
第Ⅳ図	832	H19		Ⅲb	軽石製品	軽石	13.92	12.41	6.42	284.61	98.82	17160	46
	833	-		-	軽石製品	軽石	17.56	15.39	6.72	460.00	-	-	46
	834	H19		Ⅲa	軽石製品	軽石	15.36	13.96	5.96	274.24	100.90	14209	46

第2節 弥生時代の成果

弥生時代に相当すると考えられる遺物は、甕形土器と壺形土器が、それぞれ2個体分と、磨製石鏃が1点である。土器については直接接合できたわけではないが、胎土や色調が共通する点や、底部がそれぞれ2種類あることから2個体分と判断した。この時期の遺構と考えられるものはなく、遺物のみの出土であった。最も安定した地形であるE・F-19区で集中して出土していることから、この地点に生活の拠点があったと考えられる。

甕形土器 835は胴部最大径が上位にあり、頸部で「く」の字状に外反して口縁部が開く。内外面とも板状工具によるハケ目での器面調整であり、胴部内面上位は右上方向に残す。肩部から口縁部にかけては、煤が付着している。836は胴部から脚部にかけてのものであり、底部くびれ部から大きく外開きする脚部をもつ。板状工具によるハケ目を残し、835と器面調整・胎土・色調ともよく似ている。直接接合はしなかったが、同一個体と思われる。837は胴上部に張りをもち、頸部で「く」の字状に外反して口縁部が開く。頸部内面にはわずかに稜を残している。胴部外面の器面調整は板状工具によるハケ目を残し、口縁部はタテ方向のハケ目の後ヨコナデしている。胴部内面の調整が左上方向へのヘラナデ状である点が835と異なる。838は底部と脚部のくびれ部分である。直径は6.5cmで、全体の雰囲気は837と類似している。

壺形土器 839は直径13cm、840は直径15cmに復元できる口縁部である。大きく外反するもので、口唇部はわずかに平に面とりする。外面は板状工具によるハケ目を右上方向に残す。843は胴部径26cmに復元でき、最大径部分に刻み目を入れた突帯を巡らす。底部はわずかに直径2cmほどの平らな面を残すものである。器面調整は板状工具によるハケ目で、内外面とも同様である。842は胴部最大径部分に突帯をめぐるすもので、浅い刻目を施す。841は直径2.5cmほどの平らな面をわずかにもつ底部である。

甕形土器および壺形土器は、色調や胎土とも共に類似しており、他に近い時期の遺物が出ていないことから、同時期のものであると考えられる。両者の特徴から中津野式土器に位置づけられるが、標式遺跡である南さつま市（旧金峰町）中津野遺跡出土資料と比較すると、若干古い様相を示す。中村直子氏によって、中津野式土器は、畿内第Ⅴ様式の比較的新しい段階から庄内式に併行することが明らかにされ(中村1987)、弥生時代終末期に位置づけられる。また、中村直子氏は中津野式土器が細分できる可能性があることを示唆しており(中村1997)、山ノ中遺跡出土資料もその一例に加わるものとする。

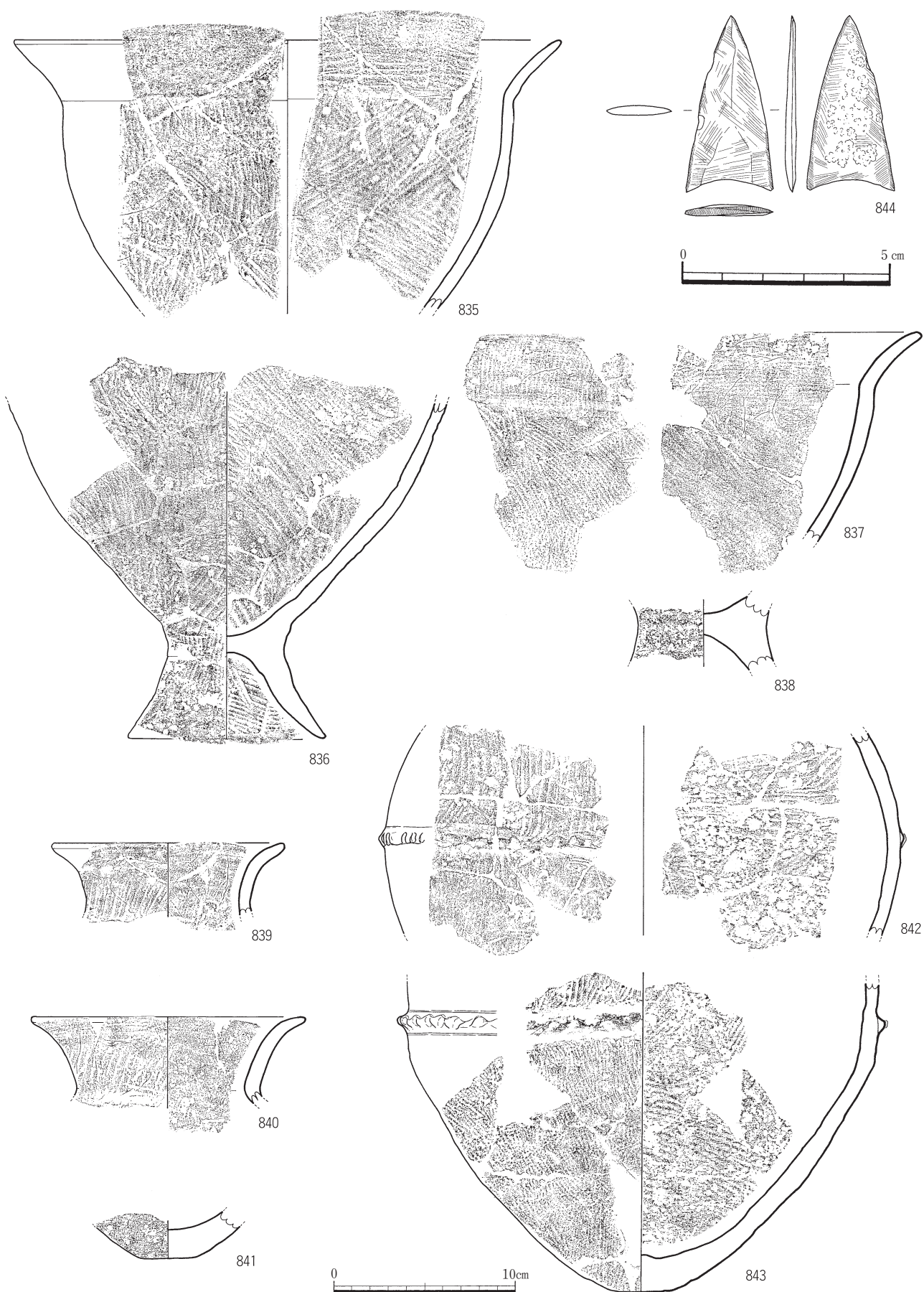
中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村直子 1997 「南限の古式土師器」『人類史研究』第9号 人類史研究会

表18 弥生時代遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	取り上 げ番号	出土区	遺構	層位	調整・文様・色調等		胎土								写真 図版	備考
						外面	内面	石英・ 長石	角閃石・ 輝石	金色 雲母	火山 ガラス	軽石	滑石	くさり礫	その他		
第 181 図	835	4749	G16		II	橙色・板状ハケ目	板状ハケ目	◎	○	×	◎	—	×	○		47	
	836	4790	G15		IIIa	橙色・板状ハケ目	板状ハケ目	◎	◎	×	◎	—	×			47	
	837	5057	G15		II	橙色・板状ハケ目	ヘラナデ	◎	○	×	◎	—	×	○		47	
	838	883	E21		IIIa	橙色・ナデ	ハケ目	◎	◎	×	◎	—	×			47	
	839	4431	E19		II	橙色・板状ハケ目	ハケ目	◎	○	×	◎	—	×			47	
	840	3748	F20		II	橙色・板状ハケ目	板状ハケ目	◎	○	×	◎	—	×			47	
	841	2159	E20		II	明赤褐色・ナデ	ナデ	◎	○	×	◎	—	×			47	
	842	4001	F19	4住	II	橙色・板状ハケ目	板状ハケ目	◎	○	×	◎	—	×			47	
	843	4251	F19		IIIb	にがい・橙色・板状ハケ目	板状ハケ目	◎	○	×	◎	—	×	○	小石	47	

挿図 番号	遺物 番号	取り上 げ番号	出土区	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	レベル (m)	写真 図版	備考
第181図	844	1381	G21	Ib	石鏃	チャート	4.37	2.19	0.24	2.29	97.06		



第181図 弥生時代の遺物

磨製石鏃 844は全面研磨された長身の磨製石鏃であり、基部も円弧状に研磨されている。1点だけの出土であるが、鹿屋市王子遺跡や鹿屋市（旧串良町）吉か崎遺跡例に類似することから弥生時代のものであると考えられる。中津野式土器の古いタイプまで磨製石鏃が残るのかどうかは、今後の課題である。

第3節 古代以降の成果

1. 検出遺構

（1）掘り込み

掘り込み3

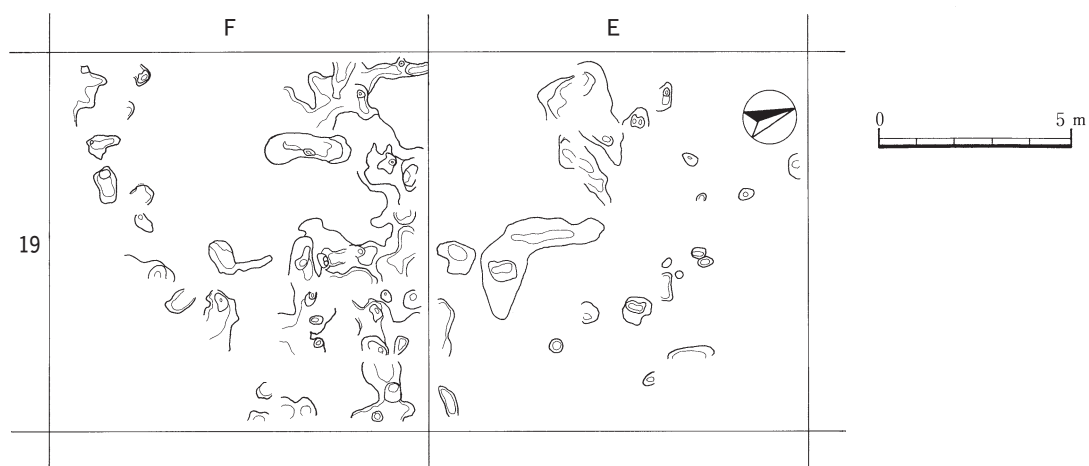
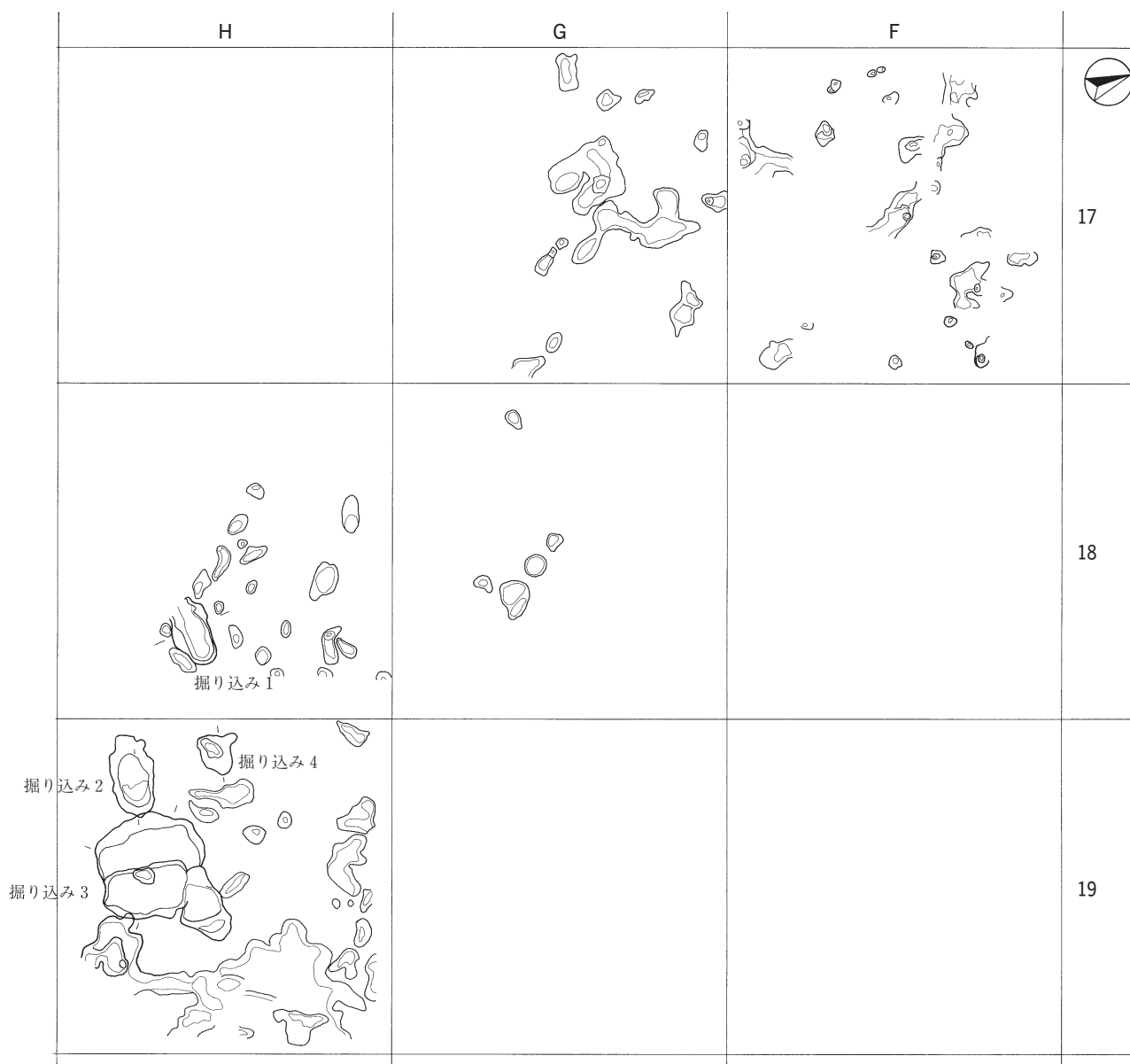
掘り込み3はI b層を剥ぎ終わった時点で検出した遺構である。300cm×320cmの隅丸方形を呈し、内部は二段に分かれ、中央には窪みがある。検出面からの深さは一段目が45cmを測る。埋土は「①II層と同じ黒茶褐色土で、粒子が細かくサラサラしている。②黄茶褐色土で、硬さも質も①に似るが、黒色が弱く黄色味を帯びる。③明黄茶褐色土で、粒子が細かい。しまりがあってやや硬い。④暗黄茶褐色土で、しまりがあって硬い。小さな炭化粒を含む。」である。II層が埋土の最上面にある点や古代の土師器（858・864・865・882）や墨書土器（846）が出土していることから、9世紀代の遺構であると考えられる。二段目の床面がほぼ水平である点や平面形から竪穴住居の可能性も考えられるが、柱穴や焼土等が確認できなかった点や当時の類例がないことから断定することはできない。今後、古代前半期の同様な遺構の類例を待って、性格等について検討することが課題である。

掘り込み1・2・4

III層上面で精査した時点でI層・I b層およびII層を埋土とする掘り込みが検出された。第183図に示した様に平面形にまともではなく、配置も不規則である。樹痕とするには理由もなく、掘れるところまで掘って平板実測した。4基については平面形及び断面形がしっかりしていたので、実測図を作成した。実測図以外の掘り込みについては古代以降現在に至るまで、この地に自生したヤマイモや葛根などの根茎植物を掘り出した痕跡ではないかと考える。掘り込み1は調査範囲外で全掘はできなかったが、200cm×115cmの楕円形で55cmである。長軸上の西側壁面に小穴があり、オーバーバンクしながら50cmほど掘り込まれている。埋土は「①灰褐色土。I a層と同質で、しまりがなくやわらかで、白色の軽石を含む。②黒褐色土まじりの灰褐色土。③III a層のブロック。④黒灰色土。」である。埋土自体がI a層であることから、遺物との直接的な関係はなさそうである。現代に近い頃の根茎植物の採掘痕ではないかと考える。掘り込み2は140cm×85cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは72cmを測る。埋土は「①I b層と同じ淡灰茶褐色土。②II層と同じ黒茶褐色土。」である。遺物の出土はなかったが、古代末から中世にかけての人工的な掘り込みであると考えられる。掘り込み4は不定形で、検出面からの深さは38cmを測る。埋土①・②は掘り込み3と同じであり、③は黄褐色土のブロックがみられる。時期や用途も掘り込み2に近いと考えるが、正確なところは分らない。

H20区の掘り込み

初年度の調査では、I・II層の黒色土を剥いで、III層の黄色い層の上面できれいに精査すると、H20区だけで17か所の黒っぽい土の色がでてきた。その黒っぽい土の部分だけを掘ってゆくと、たい

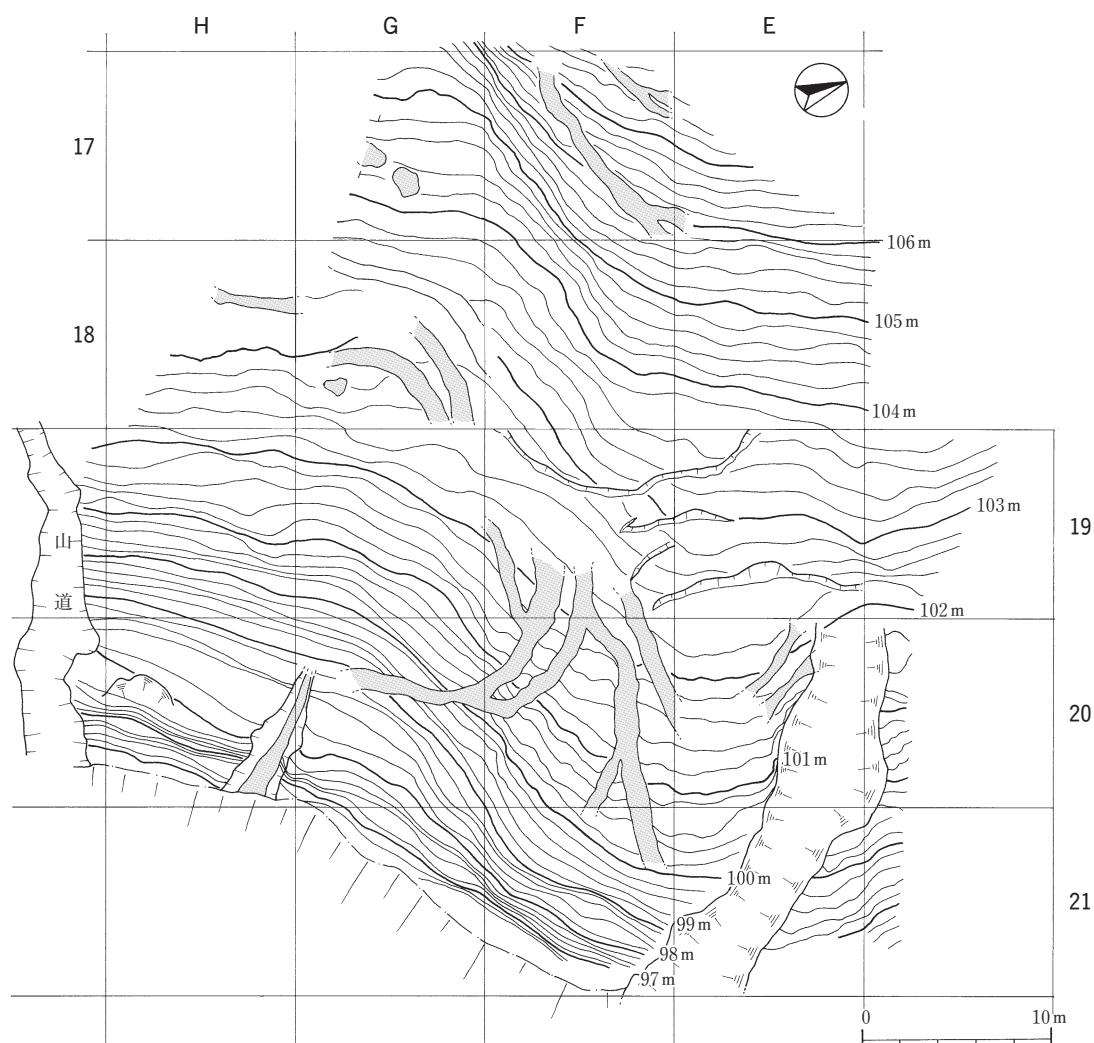


第183図 表土下の掘り込み

がい掘り込み1のような形の穴になった。埋土の中からは、縄文土器はもちろん平安時代の土師器・須恵器なども出てくるので、少なくとも平安時代以後に掘られたものであるのは確かである。I層の最近の土は全く入っていないし、中世の山城の頃の品物もみられないので、およそ1,000年前から600年前の間に掘られたものであると考えられる。掘られた穴の形は、現在も晩秋から冬にかけてヤマモを掘った時の穴に似ており、当時もヤマモや葛根などを掘っていたと考えられる。

H20区の掘り込みの図面については『上野原遺跡』を執筆する時点で存在したのは確かであるが、その後所在がわからなくなってしまった。同報告書で山ノ中遺跡の掘り込みについて、「掘り込みは平安時代前半と中世山城の時期に挟まれた地層内から検出された。埋土に縄文土器や平安時代の土器類が認められることから、平安時代前半以降に掘られたものであることは確かである。したがって平安時代後半の掘り込みである可能性は高い。掘り込みは全部で17基あり、上面長約1 m、小穴を含めた深さは80cmほどである。I a類と同様な形状であるが、上面形が卵形というよりも細長い形をしている。小穴のほとんどは地形的に高い方に掘り込まれている。」と記してある。大いに反省する次第である。

鹿児島県立文化財センター 2000 『上野原遺跡（第10地点）所在地 第1分冊』「鹿児島県立



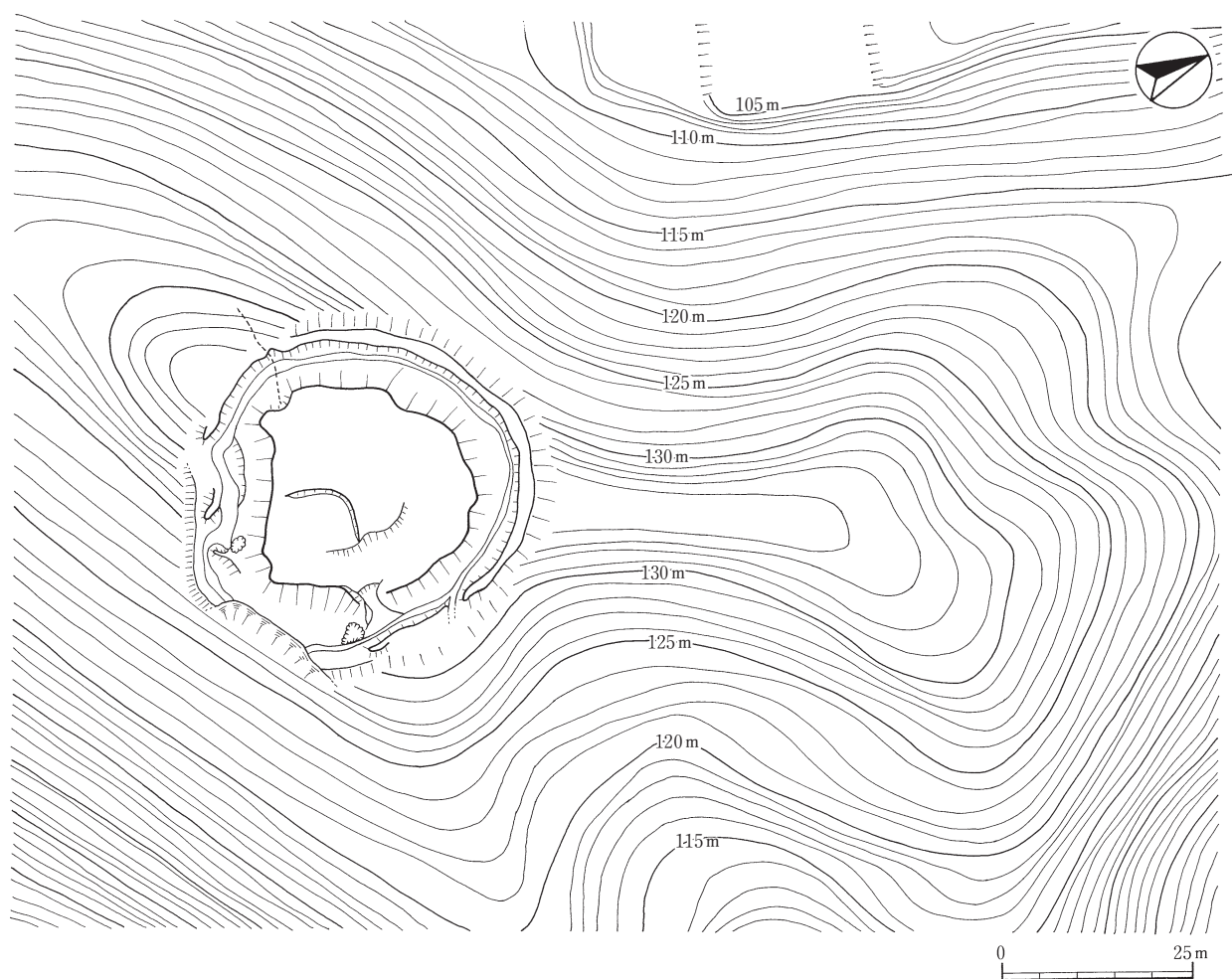
第184図 腐葉土除去後の道跡

(2) 道跡

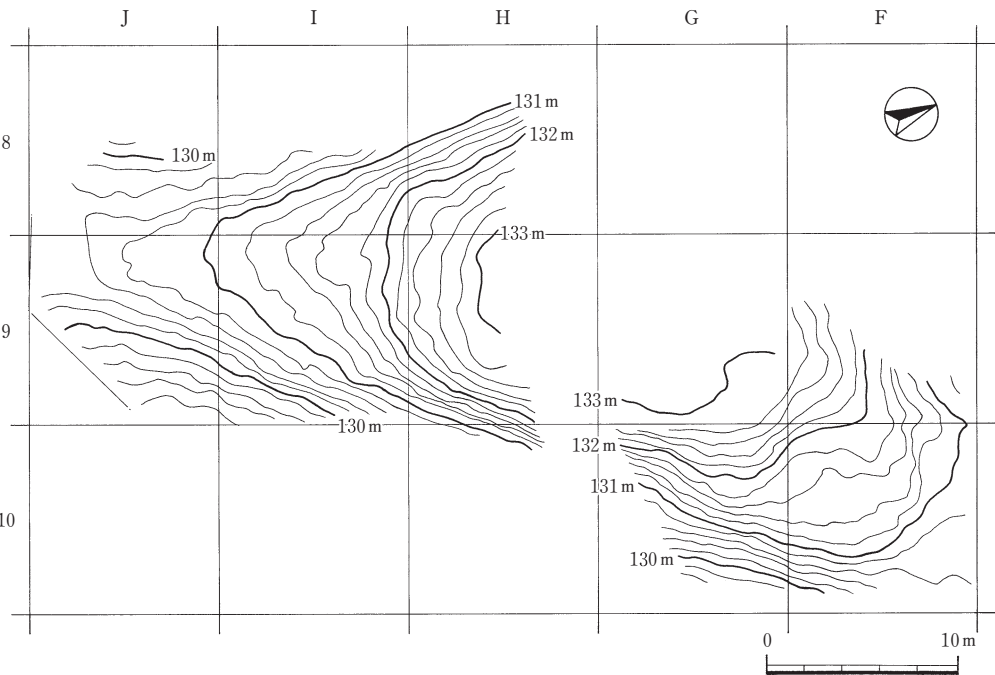
腐葉土およびI b層を剥いだ時点で、硬化した面や段差のある場所が数か所検出された。I19・20区には、平成7年時点も使われていた山道がある。H20区には溝状となった道跡があり、南東側は急崖となり途切れている。F21区にも下から登ってくる道跡があり、F19区に向かっている。これらの道跡は青灰褐色を呈し、硬くしまっている。図面で網掛けした部分が硬化面である。F19区でほとんどの道跡が集まり、再び上方へ枝分かれしている。段差と道跡の間も青灰色を呈し、他の場所よりも硬く、雨上がりに乾燥しにくい場所であり、道跡であった可能性が高い。段差の部分も同じ様な幅を保っていることから、道跡に伴うものであったと考えられる。どの時期までさかのぼれるか不明であるが、少なくとも近世には使われていたと考えられる。いつの時代にも下から急な山道を登ってきて、比較的ゆるやかなF19区で一息入れ、再びそれぞれのルートで上方へ向かった様子が髣髴する。

(3) 山頂部周辺

工事予定範囲内の山頂部分は、小田城跡に隣接する尾根であり、見晴らしも良いことから800㎡を



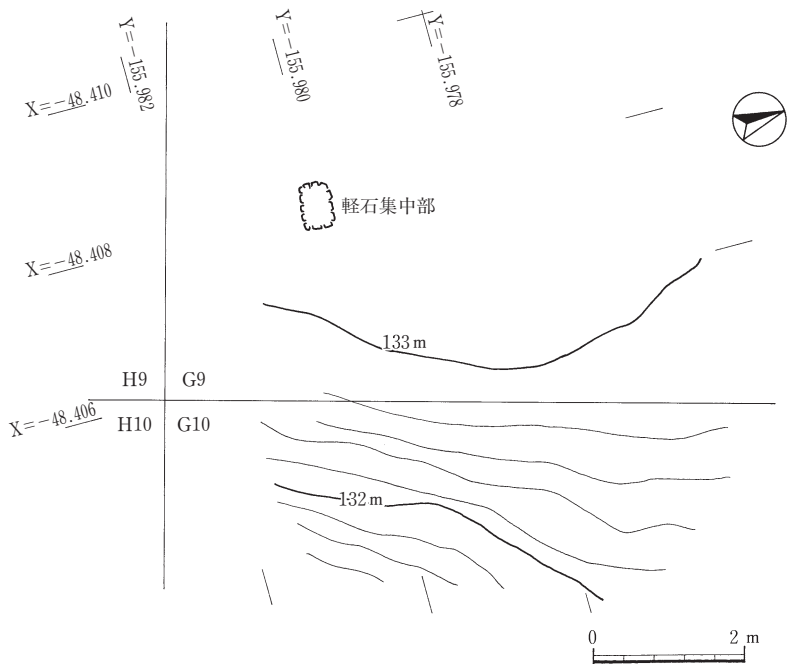
対象に発掘調査を実施した。腐葉土を剥がした時点でⅢ層が現れたので、20cmごとのコンタ図を作成した。中央部分は工事前の樹木伐採のために削平されており、シラスが剥き出しになっていた。出土遺物は砥石と軽石があり、年代を明らかに出来る



第186図 9区周辺の調査

ものはなかった。樹木の根元に20数個の軽石が40cm×50cmの範囲で集中しており、何らかの意図の基に集められたと考えられる。焼けた様子はみられず、遺物の出土もなかったことから、検出位置と写真図版11のような写真記録のみに留めた。当初小田城跡の付属施設を想定して調査に入ったが、通路や見張り場、烽火台などの関連施設は確認されなかった。

小田城跡主郭部については、範囲外であったため時間外に平板による測量を行った。トラバースを組まずに18か所を移動しての簡易な測量で誤差もあり、レベルも測っていないので、将来本格的な測量調査を望みたい。土塁を含めた直径は45m～48mのほぼ円形を成し、土塁と通路を兼ねる堀に囲まれた単郭の城である。主郭部は直径27mの略円形で、一部直角に折れる段差もみられるが、城使用時のものであるかどうかは不明である。南東側の一部が崩壊しているだけで、保存状態は良好である。現在出入りできる場所は2か所あり、南西側が集落へ通じる道として使われており、大手門もこちら側であったことが指摘されている。東側の出入り口は傾斜が比較的ゆるやかな尾根上にあると想定され、今回発掘調査したⅠ9区

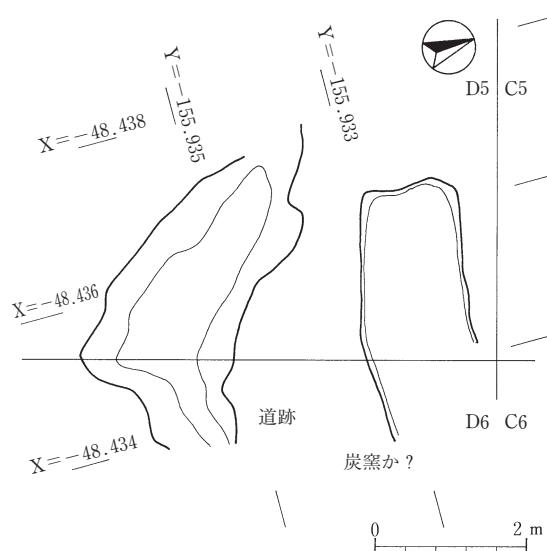


第187図 G9区軽石集中部の位置

周辺への通路は確認できなかった。三木靖先生の話によると、南九州に特有な知覧城や志布志城などとは性格が異なり、非常時に逃げ込むための「村の城」的なものであるとのことである。

(4) D5区周辺

山頂から東側の調査については、急傾斜ということもありトレンチを入れなかったが、D5区の一部だけは比較的緩い傾斜だったため調査した。南北方向に10m×4.5mのトレンチを設定して調査した結果、腐葉土の下から道跡と炭が堆積した場所が見つかった。道跡は最大幅が1m70cmであり、両端は1mと狭くなっている。まん中の部分が少し窪んでおり、雨天時には水溜まりとなったと思



第188図 D5区周辺の調査

われる。近世まで使われた山道と判断し、それ以上の追究はしなかった。炭が堆積した場所は道跡の北側であり、ほぼ平行している。35cmほどの厚さの腐葉土の下に、25cmの表土を固めた層があり、その下に20cmの厚さで炭が堆積していた。幅1m30cmで長さは3m以上はある。石や焼粘土などの構造物はなく、それほど古い時代ではない頃の炭を焼いた場所ではないかと判断し、平面図のみにとどめた。

2. 出土遺物

山ノ中遺跡で出土した古代の遺物は、パンケースにして4箱分で、土師器坏および椀が2箱、土師器甕と須恵器がそれぞれ1箱分出土した。全体量は少ないものの、墨書土器や内朱土器もあり、内容が濃い。また、量が少ない故に短期間で使用されたものと考えられ、一時期のセット関係を知る資料として有効である。

(1) 土師器

土師器坏

高台が無いものを坏として扱った。墨色が書かれた845の法量は、口縁部径15cm、器高6cm、底径6cmである。体部はほぼストレートに延びており、底部の切り離し方法は回転ヘラ切りによるものである。内外面にほのかに朱色となった部分が認められるが、故意に塗ったものであるかどうかはわからない。

土師器椀

高台が有るものを椀として扱った。864の法量は、口縁部径16.5cm、器高8cm、底径8.5cmである。体部はほぼストレートに延びており、坏よりも長い。高台には高いものと低いものがある。坏の863もそうであるが、865と877は他のものと違って橙色を呈し、くさり礫も目立つことから、違う場所で作られた可能性がある。

器種不明の土師器

882は通常の坏や碗と異なり、口縁端部のみが大きく外反するものである。胎土や器壁の薄さなどは、他の坏や碗と遜色ない。掘り込み3からの出土である。

墨書土器

5点の墨書が認められる土器が出土した。全て同じ一文字が書かれていると考えられ、「在」という文字が書かれている。坂本佳代子氏ほかによる鹿児島県内の墨書土器集成でも、同じ文字が出土した例はない。氏らによると、1遺跡内で同じ文字が複数出土する場合は、意味を推測することの困難な文字が多く、祭祀的な性格を指摘している。完形土器である845に書かれた「在」の文字の最後の一画が無いのも、故意にそうした可能性もある。

坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 2004 「墨書土器の性格 ―鹿児島を例として―」『縄文の森から』第4号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

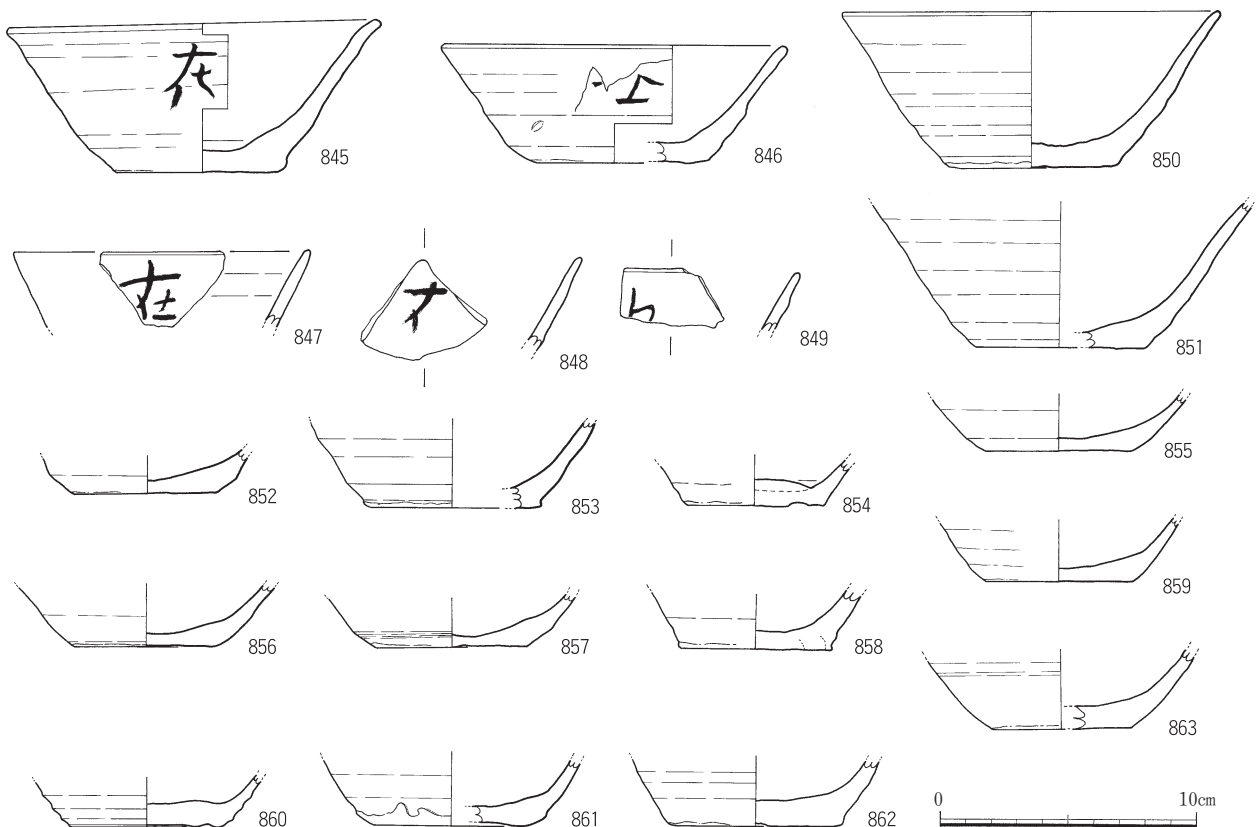
内朱土器

880の内外面にかすかに朱色が観察される以外に19点の小破片がみられるが、図化しなかった。器種は坏もしくは碗であると考えられる。内面のみのもの、外面のみのもの、両面とも朱く塗られるものがみられる。

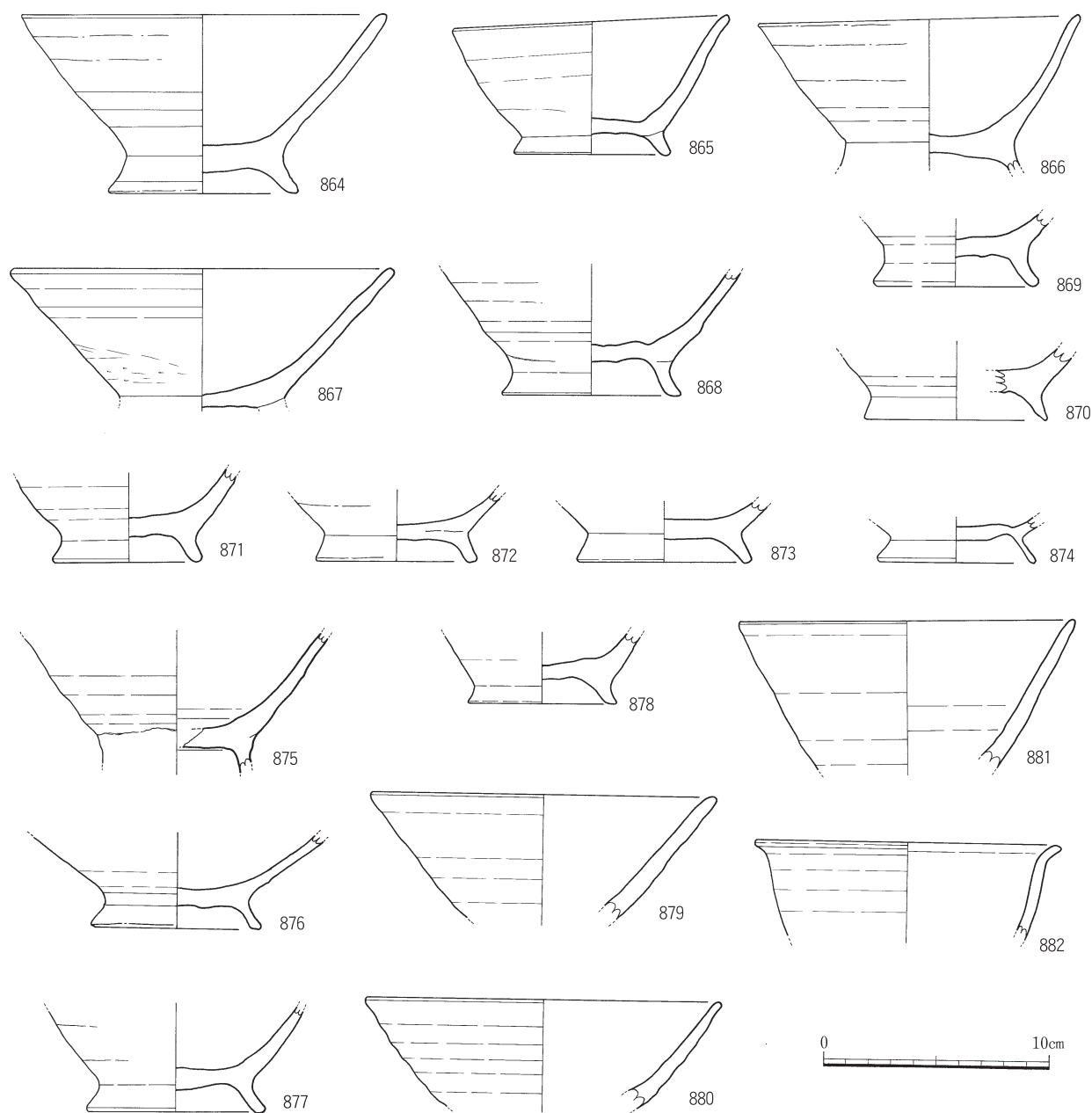
季節の行事や人生儀礼、あるいは来客など特別な時に使ったのではないかと想定される。

土師器甕

接合がうまくいかず全形を知ることができなかったが、恐らく口縁部径28cm、器高20cm程度にな



第189図 古代の遺物（1）



第190図 古代の遺物（2）

と考えられる。底部は丸く、ほぼ直立する胴部から大きく開く口縁部へ至る。口縁部の器厚は12mmと厚く、口唇部は丸くおさめる。胴部内面は右から左へヨコ方向のケズリによるもので、外面はナデによる。口縁部はヨコナデによる器面調整である。胎土には風化礫や石英を含み、色調はにぶい褐色系であり、土師器坏や土師器碗とは異なる。

土師器甕は煮炊き用に使われたもので、一昔前のハガマと同じ様な使い方をしたと考えられる。すなわち、竈（かまど）に据えて、上部には木製の蓋が被っていたと考えられる。土師器の坏や碗と比較すると、胎土も色調も異なるのでつくられた場所が違っていたのではないかと考えられる。

中世の土師器

888～890は底部の切り離し方法が糸切り離しによるものである。全形を知ることのできる資料はないが、浅い坏である。古代の坏と比較すると、赤味を帯びた色調であり。一目で区別できる。胎土の緻密さは共通するものの、鉄分などの成分の違いで異った発色をすると考えられる。

(2) 須恵器

全形がわかる資料はないが、4種類の器形がみられる。891は大甕の口縁部と考えられる。口径は20cmに復元でき、大きく外反する。口唇部は肥厚することなく、凹線が入る。口縁部内外面はヨコナデにより、叩目を消してあり、この部分には自然釉がかかる。胴部外面は平行叩きによるもので、途中に「井」の字状の圧痕がつく。内面はわずかにしかみえないが、青海波状の叩き目ではないかと思われる。892は直接接合するものではないが、内外面の叩き目が891に類似するもので、同一個体と考えられる。内面の叩き目は青海波状のものから、下部にいくにつれて、5mm幅の平行叩き目となる。かなり径の大きな胴部であると考えられる。

896と897は同一個体で、瓶形に復元できるものと思われる。胴部と肩部の境に稜があり、肩部は丸味を帯びている。胴部外面は平行叩き目で、内面は同心円状の叩きの後ヨコナデしている。外面には自然釉がかかる。894は壺形もしくは瓶形の容器と考えられる。胴部と肩部の境はなく、スムーズに内湾する。胴部外面は5mm四方の格子状の叩きであり、内面は同心円状の叩きの後をヨコナデしている。

山ノ中遺跡から出土した須恵器は、形状や叩き目の種類、あるいは自然釉のみの点から平安時代前半に該当するものと考えられる。窯跡までの特定はできないが、全体的な雰囲気は南さつま市(旧金峰町)に所在する荒平窯跡のものに似ている。今後、類例の比較や科学分析によって産地を特定することが課題である。本遺跡で出土した須恵器は、坏や碗などの小さな物はなく、大甕や瓶など液体を入れるのにふさわしい容器である。煮炊き具や食膳具は素焼きの土師器でも良いが、液体を入れるにはやはり須恵器の方が良かったと考えられる。水場から距離のある山ノ中遺跡では、特に水を入れる容器の重要度がどの時期にも高かったと考えられる。木製の桶などもあったかもしれないが、当時の状況に近づくことは今後の課題としたい。

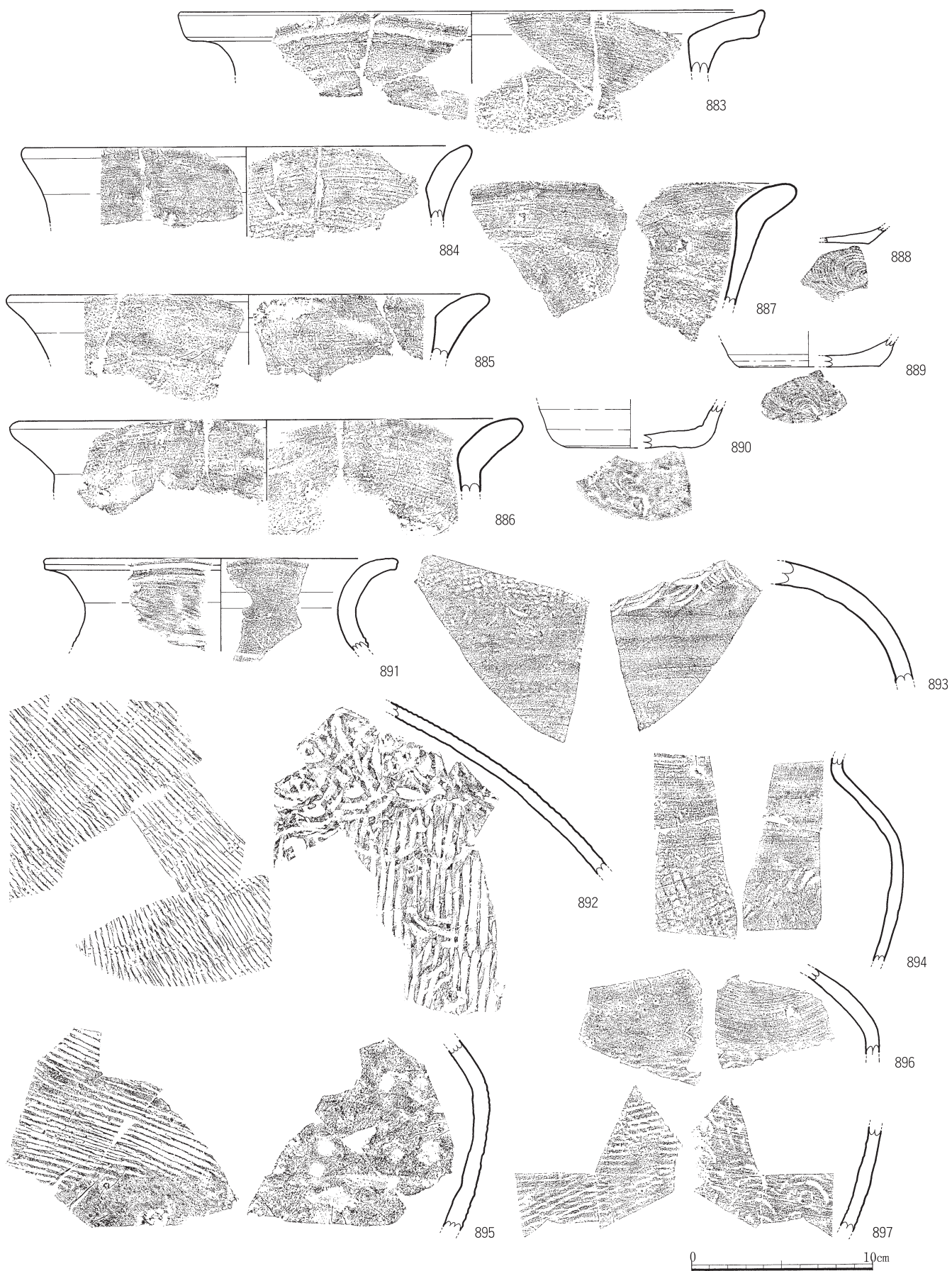
(3) 陶磁器

白磁

898は、口唇部の釉が削り取られる口禿げの皿である。899は、口縁部は欠損しているが、口禿げ皿の底部と考えられる。外底面の釉は、雑にふき取られている。900は、皿の底部である。高台内面には使用者のサインであろうか、墨書が記されている。901は、挟り高台を有する皿である。口唇部は面取りを行い、斜めに削り出している。902は、体部に八角の面取りが施される小坏で、高台は挟り高台となる。903は、やや厚めの白濁した釉に、細かい貫入が入る皿の口縁部である。

青磁

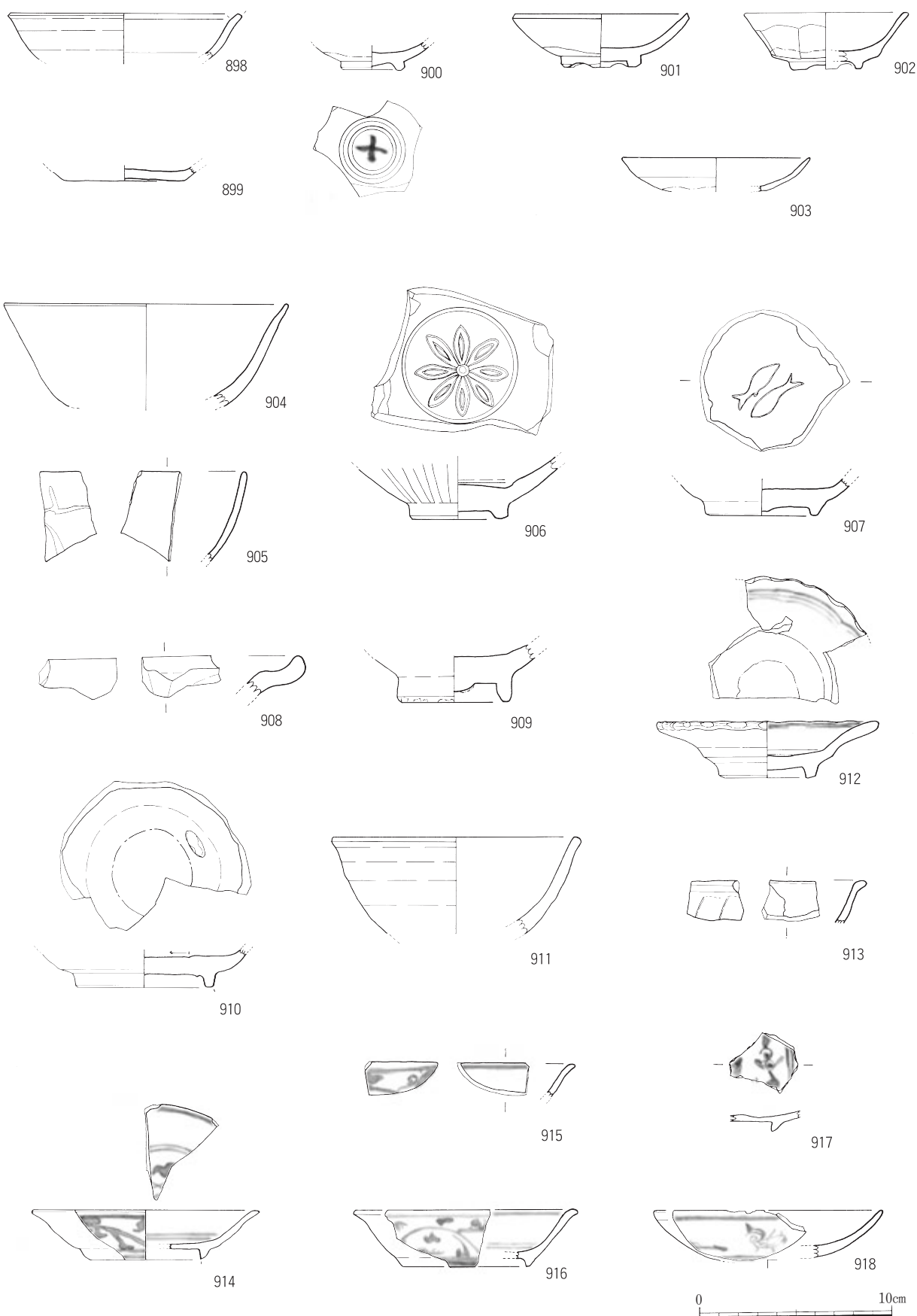
904～913は、龍泉窯系青磁である。904は碗で、体部の腰部から口縁部にかけてのラインが、逆「ハ」の字型に直線的にのびる。残存部は、内外面とも無文である。905は外面に片彫りの文様が施される



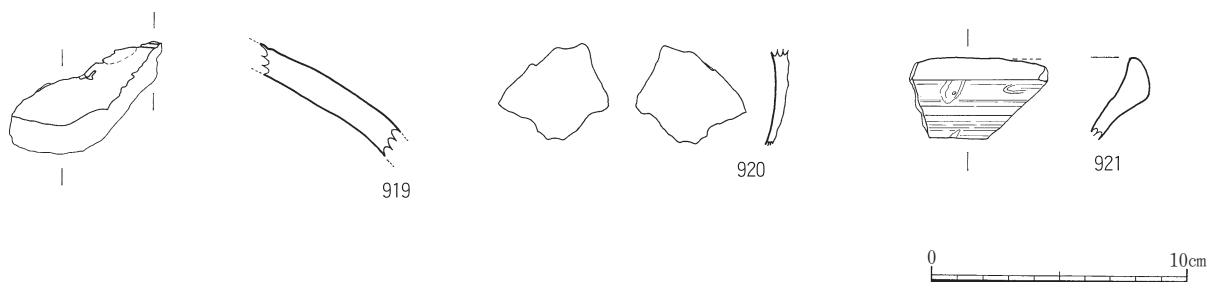
第191図 古代の遺物（3）

表19 古代遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	取り上げ 番号	出土区	遺構	層位	分類	調整・文様・色調等		胎土								写真 図版	接 合
							外面	内面	石英・長石・角閃石類	金雲母	火山ガラス	軽石	滑石	くさり礫	その他			
第 189 図	845	13979	H19		II	墨書土器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○		48	
	846	5755	H19		III	墨書土器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	847	0				墨書土器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○			
	848	0				墨書土器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	849	396	H19		II	墨書土器	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	850	9078	G18		I b	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	851	10685	H18		II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○			
	852	13305	H19		I b	土師器環	浅黄橙色・摩耗	摩耗	◎	◎	×	○	—	×	—			
	853	7504	H18		I b	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			○
	854	5125	H19		II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	○			
	855	8616	G19		I a	土師器環	にふい黄橙色・水ひき	水ひき	◎	○	×	○	—	×	○			
	856	8659	G19		I a	土師器環	浅黄橙色・摩耗	摩耗	◎	◎	×	○	—	×	○			
	857	8072	H18		II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			
	858	5602	H19	掘込3	II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			
	859	7953	G18		II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	◎	◎	×	○	—	×	—			
	860	0	H20		I b	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			
	861	898	H19		II	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	—	—	×	○	—	×	—			
	862	459	H20		IIIa	土師器環	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	○			
	863	356	H20		II	土師器環	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	○			
第 190 図	864	5606	H19	掘込3	I	土師器碗	にふい黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			○
	865	4050	H19		II	土師器碗	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○			
	866	7613	F16		I b	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			
	867	10553	G18		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	◎	◎	×	◎	—	×	○			○
	868	8050	H18		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			○
	869	408	H19		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	○	×	○			
	870	9128	G19		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	○	×	○			
	871	7622	H18		I b	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	872	3960	G19		II	土師器碗	黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	○			
	873	42	G19		IIIb	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○			
	874	8676	G19		I b	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	○			
	875	399	H19		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			○
	876	7318	G18		I a	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	◎	◎	×	◎	—	×	○			○
	877	8492	G19		I b	土師器碗	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	○			○
	878	391	H19		II	土師器碗	浅黄橙色・水ひき	水ひき	◎	○	×	◎	—	×	—			
	879	7717	H18		II	土師器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	◎	○	×	◎	—	×	—			
	880	5136	H19		II	土師器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			○
	881	438	H19		II	土師器	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			○
	882	5752	F21	掘込3	III	土師器	浅黄橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	○	×	—			
第 191 図	883	10395	H18		II	土師器甕	にふい黄橙色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	◎	—	×	—			○
	884	8067	H18		II	土師器甕	橙色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	◎	—	×	—	小石		
	885	7954	G18		I b	土師器甕	橙色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	◎	—	×	—			○
	886	4397	F17		II	土師器甕	にふい褐色・ナデ	ケズリ	◎	◎	×	◎	—	×	—	小石		○
	887	8737	H18		I b	土師器甕	にふい橙色・ナデ	ケズリ	◎	○	×	◎	—	×	—			
	888	0	H20		I b	土師器環	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	○	—	×	—			
	889	0	H20		I b	土師器環	橙色・水ひき	水ひき	○	○	×	◎	—	×	—			
	890	4901	G16		I	土師器環	橙色・摩耗	摩耗	○	○	×	◎	—	×	—			
	891	4228	F19		II	須恵器	にふい褐色・平行タタキ目	横ナデ	—	—	—	—	—	—	—			○
	892	9629	G20		I b	須恵器	にふい褐色・平行タタキ目	平行タタキ目・同心円状タタキ目	—	—	—	—	—	—	—			○
	893	903	H19		II	須恵器	灰色・格子状タタキ目	同心円状タタキ目→横ナデ	—	—	—	—	—	—	—			
	894	1048	H19		II	須恵器	黄灰色・格子状タタキ目	同心円状タタキ目→横ナデ	—	—	—	—	—	—	—			○
	895	8829	H18		I b	須恵器	にふい褐色・平行タタキ目	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	—			
	896	1233	G20		I b	須恵器	にふい褐色・平行タタキ目	同心円状タタキ目→横ナデ	—	—	—	—	—	—	—			
	897	4151	H19		I b	須恵器	にふい褐色・平行タタキ目	同心円状タタキ目→横ナデ	—	—	—	—	—	—	—			○



第192図 陶磁器 (1)



第193図 陶磁器（2）

碗である。906は、見込みにスタンプによる花文を有する碗である。907は、見込みにスタンプによる双魚文を有する皿である。908は、盤の口縁部である。909は碗である。底部が肉厚で、高台内面の釉は削り取られる。910は皿である。見込みの釉は円形に削り取られており、高台内面も削り取られる。911は碗である。口唇部が平坦につくられ、内外面とも残存部は無文である。912は、稜花皿である。見込みの釉は円形に削り取られる。913は碗である。口縁部端部が外側に屈曲するもので、外面には連弁文であろうと思われる文様を有する。

中国青花

914～918は、中国景德鎮窯系の青花皿である。914は、釉薬や呉須の発色等がやや悪く、粗製品である。皿付と高台内面は露胎する。915は、端反り皿である。916は、914と同様の端反り皿であるが、比較的良品である。やや平坦面を有する皿付以外、透明釉が総釉でかかる。917は、やや粗製の製品である。皿付と高台内面は露胎である。918は、口縁がかかるく内湾気味におさまるもので、底部は欠損しているが、碁笥底になるものと思われる。

その他の陶器

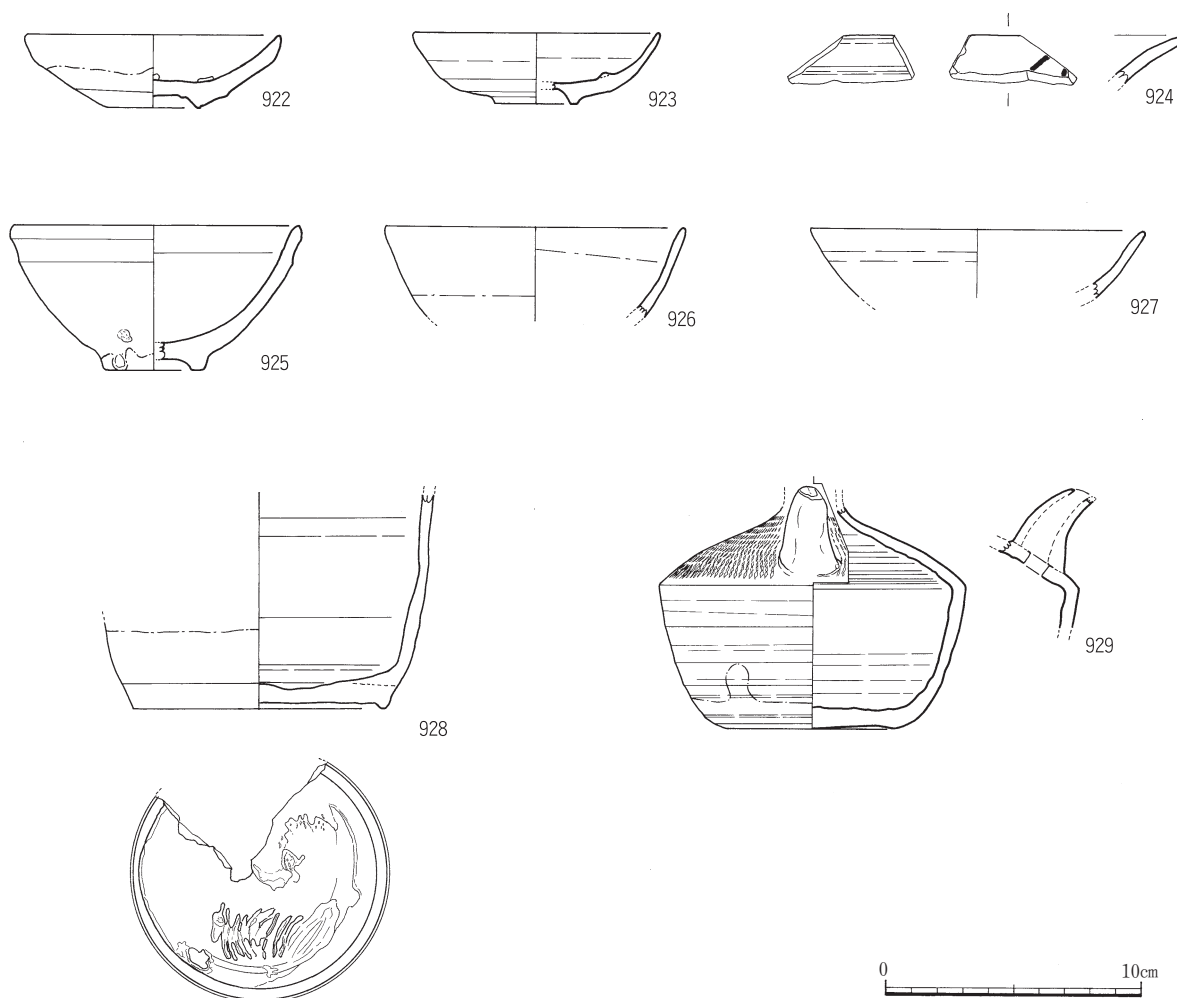
919は、タイ産と思われる壺である。鈍い灰褐色の胎土に、外面は黒色の鉄釉がかかり、内面は無釉である。920は、タイ又はベトナム産の壺と思われるもので、内面には褐釉がかかるが、外面は欠損していて詳細不明である。

921は、国内産東播系の播鉢である。内面の播り目が入らない口縁上部である。

近世の陶磁器

922～924は、肥前系陶器の皿である。922は、赤褐色の胎土に、灰色の灰釉が内面全体と外面中位までかかるものである。底部は碁笥底に削り出され、見込みには小さい胎土目痕が4か所見られる。923は、褐色の胎土に、緑褐色に発色した鉄釉が内面全体と外面上位までかかるものである。見込みには胎土目が看取される。924は、灰色の灰釉がかかり、内面には鉄絵が描かれる。925は、肥前系ではないかと思われる天目碗である。鈍い灰褐色の胎土で、黒釉が高台と高台内面を除き施釉される。

926・927は、加治木・始良系の陶器である。926は、白化粧土の上に褐釉がかかる二彩手の碗で、龍門司焼である。927は、鈍い灰褐色の胎土に、黒釉がかかる碗である。元立院窯の製品ではないかと思われる。



第194図 陶磁器（3）

928は、上部は欠損しているが、瀬戸焼の徳利である。黄白色のやや粗い胎土に、灰緑色に発色した釉が外面腰部まで施釉される。内面は露胎している。

929は、南九州で「からから」と呼ばれる、小型の酒注である。肩部の屈曲がシャープな器形を呈し、胎土は灰褐色で緻密である。外面肩部は白化粧土の上から飛び鉋をかけ、その上から褐釉を腰部まで施釉する。内面は露胎である。

中・近世の陶磁器についての小結

山ノ中遺跡から出土した中・近世陶磁器の出土量は少なく、その様相や遺跡の性格等をつかむことは難しいため、ここでは気付いたことをまとめておく程度としたい。

中世の陶磁器は、白磁約15点・青磁約60点・中国青花10点・東南アジア系陶器3点・国内産陶器1点が出土している。白磁は13世紀代～16世紀前半代の資料が出土しているが、挟り高台を有する15～16世紀前半代の小坏や小皿が目につく。青磁は数量的に一番多く出土しており、その年代も14～15世紀代の資料が中心である。中国青花は景德鎮窯系の16世紀代のものが主流である。小片だが、16世紀代の東南アジア系陶器の破片や国内産東播系播鉢も出土している。

表20 陶磁器観察表

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土 地点	層	取り上げ 番号	法量 (cm)			胎土	釉薬・釉調	施釉	備考
							口径	底径	器高				
第 192 図	898	白磁	皿	H-18	I a	6855	10.4	—	—	白色	白濁した半透明釉	口唇部の釉は削り取る	口禿げ
	899	白磁	皿			21934	—	6.2	—	灰白色	白濁した半透明釉	外底面の釉は拭き取る	
	900	白磁	皿				—	3.0	—	白色	白濁した半透明釉	外面腰部から高台内面は無釉	高台内面に「十」の墨書
	901	白磁	皿				8.8	3.6	3.0	黄白色	白濁した半透明釉	外面腰部から高台内面は無釉	挟り高台
	902	白磁	坏				8.4	3.6	3.0	黄白色	白濁した半透明釉	外面腰部から高台内面は無釉	体部外面八角面取り 挟り高台
	903	白磁	皿	G-17	I a	6316	10.0	—	—	灰白色	白濁した半透明釉	外面中位以下無釉	
	904	青磁	椀	F-18		16034	14.8	—	—	暗灰緑色	緑褐色の半透明釉	残存部は施釉	
	905	青磁	椀	H-18	I a	6902	—	—	—		淡緑色気味の透明釉	残存部は施釉	外面に片影の文様 見込みに花文のスタンプ
	906	青磁	椀	G-19	I a	11520	—	4.6	—	灰色	緑色気味の透明釉	畳付から高台内面は露胎	見込みに双魚文のスタンプ
	907	青磁	皿	F-18	I a	19648	—	5.6	—	灰色	緑色気味の透明釉	高台内面は露胎	
	908	青磁	盤	G-17	I a	6062	—	—	—	灰色	灰緑色気味の半透明釉	残存部は施釉	
	909	青磁	椀	F-21	I b	202	—	7.2	—	灰緑色	緑色気味の透明釉	畳付から高台内面は露胎	
	910	青磁	皿	F-21	I a	21933	—	5.8	—	黄白色	緑色気味の透明釉	畳付から高台内面は露胎 見込み中央は円形に釉剥ぎ	
	911	青磁	椀	H-20	I a	353	13.6	—	—	灰色	暗緑色気味の透明釉	残存部は施釉	
	912	青磁	皿				11.6	5.0	3.0	灰緑色	暗緑色気味の透明釉	畳付から高台内面は露胎 見込み中央は円形に釉剥ぎ	稜花皿
	913	青磁	椀	H-20	I b		—	—	—	灰白色	淡緑色気味の透明釉	残存部は総釉	外面蓮弁文か？
	914	青花	皿				—	7.4	—	灰褐色	透明釉	畳付きと高台内面露胎	景德鎮窯系
	915	青花	皿	H-20	I b		—	6.6	—	灰褐色	透明釉	残存部は施釉	景德鎮窯系
	916	青花	皿	H-20	I b		—	8.0	—	灰褐色	透明釉	畳付以外総釉	景德鎮窯系
	917	青花	皿	H-18	I a	6447	—	5.9	—	灰褐色	透明釉	畳付きと高台内面露胎	景德鎮窯系
第 193 図	918	青花	皿	H-20	I b		—	7.0	—	灰褐色	透明釉	残存部は内外面とも施釉	景德鎮窯系
	919	陶器	壺	H-20	I b		—	—	—	灰褐色	黒色 鉄釉	残存部は施釉	タイ産
	920	陶器	壺	G-20	I b		—	—	—	灰色	褐色 鉄釉	内面施釉 外面不明	タイ又はベトナム産？
第 194 図	921	陶器	播鉢				—	—	—	灰色	—	無釉	国内産系推定
	922	陶器	皿			1893	10.4	3.5	3.0	赤褐色	灰色 灰釉	外面中位から高台内面は無釉	肥前系陶器
	923	陶器	皿	G-20		8100	9.6	3.4	3.4	褐色	緑褐色 灰釉	外面上位から高台内面は無釉	肥前系陶器
	924	陶器	皿	H-19	I b		—	—	—	鈍い灰褐色	灰色 灰釉	残存部は内外面とも施釉	肥前系陶器（鉄絵唐津）
	925	陶器	碗	G-18	I a	8709	11.3	3.6	5.7	鈍い灰褐色	黒色 鉄釉	外面腰部から高台内面は無釉	天目碗 肥前か？
	926	陶器	碗	G-18	I a	7183	11.8	—	—	褐色	白化粧土・褐釉	口縁部に白化粧土 上から褐釉	龍門司焼
	927	陶器	碗	G-18	I a	6448	12.2	—	—	鈍い灰褐色	黒色 鉄釉	残存部は内外面とも施釉	元立院窯か？
	928	陶器	徳利	F-21	I b	1261	—	9.8	—	黄白色	灰緑色 灰釉	外面腰部 内面無釉	瀬戸焼
	929	陶器	酒注	F-19	I b	14・17 19・22	—	7.0	—	灰褐色	白化粧土・褐釉	外面肩部に白化粧土 上から褐釉	龍門司焼からから肩 部 飛び濱

近世の陶磁器については、肥前系陶器 5 点、瀬戸焼 1 点、加治木・始良系陶器 5 点、その他苗代川焼の土瓶の一部が出土している。図化できた資料のうち、肥前陶器は16世紀末～17世紀初頭のもので、瀬戸焼の徳利は18世紀後半のものと思われる。加治木・始良系の陶器については、詳細な年代は不明であるが、18～19世紀代のものと思われる。中でも929の飛び鉋の施された龍門司焼からから（酒注）は、肩部の張りがシャープで、よく水簀された緻密な胎土を使用しており、これは18世紀第4四半期代の弥勒窯跡（始良郡加治木町）から出土した資料（103）と類似している。この資料は現在のところ最古のからからと考えられており、龍門司焼における飛び鉋技法の初現を探る上で貴重な資料である。

本遺跡からは、中・近世に相当する遺構は検出されていないが、山頂部に、中世山城の小田城跡が存在することから、これらの遺物はこの山城からの流込品であろうと思われる。最初に述べたが、陶磁器の出土量が少ないため詳細をつかむことは難しいが、山ノ中遺跡出土の陶磁器は15～16世紀代のものが中心である。これは、小田城の活動時期を裏付ける参考になる貴重な資料となろう。

（４）その他の遺物

①古銭

古銭は 3 種類 7 枚が出土し、図化したのは 5 枚である。いずれも中国の銘文ではあるが、どこで鑄造されたかはわからない。初鑄年代は離れているものの、ほぼ同時に山ノ中遺跡に入ってきたものと考えられる。930は淳化元寶で初銭は990年である。931は元豐通寶で、初銭は1,078年である。932と933は洪武通寶で、初鑄は1,368年である。裏面に一文字書かれたような痕跡があり、加治木銭の可能性もあることから近世に下ることもあり得る。他に 3 枚の洪武通寶が出土しており、そのう

ちの1枚については鉄銭でX線撮影によって明らかとなった。残りの1枚については縁辺の破片のみであり、銭種は不明である。

② 鞆羽口

G・H20区のI b層から3点の破片が出土した。そのうち935と936の2点を図化した。内径が2.3cmと近いことから同一個体の可能性もある。6点の鉄滓が出土していることから、この地で鍛冶が行われていたことが窺える。量的にみても小規模のものであり、金属製品の修理など簡単な作業はできたのではないかと考えられる。G18区に焼土が検出されたが、鍛冶遺構と関係があるかどうかは確認されていない。時期は層位的な状況から中世頃のものではないかと考えられる。

③ 苧入り粘土塊

937は苧(すさ)の入った粘土のかたまりで、G15区II層で出土した。重さは53.56gで、ちょうど一握りの大きさである。鞆羽口にも苧はみられないので、土壁や竈などの一部ではないかと思われる。

④ 軽石製品

938は軽石製であり、14.8cm、10.5cm、5.7cmの直方体に加工し、一面を深さ4.3cmに刳り貫いている。縄文時代の軽石製品が黄色に風化しているのに対し、この遺物は白色を呈し硬さもある。用途については不明であるが、大分市羽田遺跡に類例がある。羽田遺跡出土品は長辺9cmと6cmの小ぶりの2点で、短辺に突起を造り出しているものと、長辺に2か所の穿孔をもつものがある。12世紀の遺構から出土しており、古代末から中世にかけて使われたもので、山ノ中遺跡と時間の大きな隔たりはない。類例の増加を期待したい。

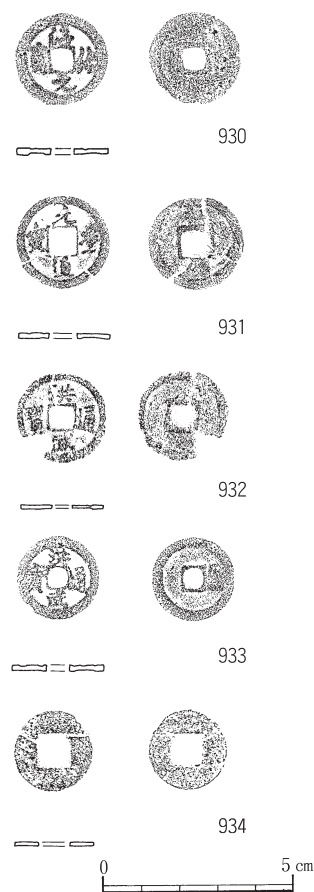
大分市教育委員会 1995 『羽田遺跡 II』

⑤ 砥石

939は天草石と考えられる砥石で、他に5点出土している。中世から近世にかけて、この地での刃物を用いた作業に使われていたと考えられる。

⑥ 煙管

940の3点は煙管(きせる)の一部であると考えられる。左側は吸口で、右側が雁首である。中央のものは内径が等しいことから中間に入るもので、吸口の方につく肩と呼ばれる部分であると考え



第195図 中世以降の遺物(1)

表21 その他の遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	取り上 げ番号	出土 区	層位	種類	写真 図版
195	930	19652	F19	I a	古銭	48
	931	347	H20	I b	古銭	48
	932	294	H19	I b	古銭	48

挿図 番号	遺物 番号	取り上 げ番号	出土 区	層位	種類	写真 図版
195	933	6896	H18	I a	古銭	48
	934	348	H20	I b	古銭	48
196	935				輪羽口	48
	936				輪羽口	48
	937	4764	G15	II	粘土塊	48

挿図 番号	遺物 番号	取り上 げ番号	出土 区	層位	種類	写真 図版
196	938				軽石製品	48
	939	22014			砥石	48
	940	8710	G18	I a	キセル	48
	941	16160	F18	I a	かんざし	48

られる。煙管はパイプと一緒に、刻み煙草を雁首に詰めて火を付け、喫煙するための道具である。日本へ煙草が伝播したのは1,590年頃と言われており、江戸時代には大流行した様である。古泉弘氏は煙管の形状を6段階に分類し、使われた年代を提示している。それによると本遺跡出土のものは火皿の形状や肩が吸口部分にしかないことから、Ⅲ段階とする1,700年～1,750年に相当すると考えられる。なお、鹿児島県内出土の煙管については、三垣恵一氏によってまとめられている。

古泉弘 1987 『江戸の考古学』

三垣恵一 2000 「鹿児島県内出土の煙管について」『大河』第7号 大河同人

⑦簪

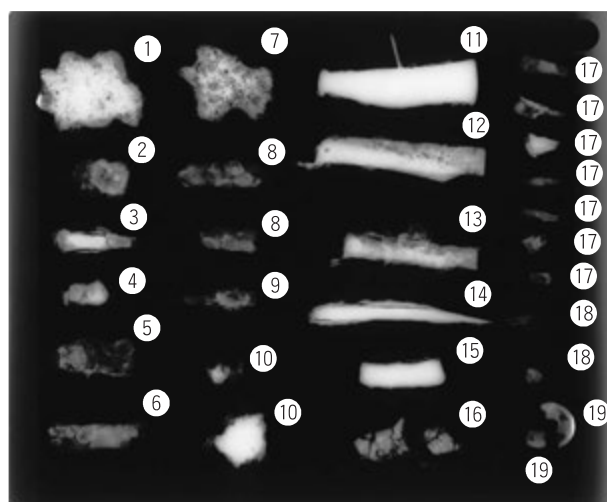
941は銅製と考えられる簪(かんざし)で、F18区I a層から出土した。2本の髪にさす部分ともう一方は耳搔きになっており、その間は梅の花をあしらったと考えられる装飾がある。一部に孔があいており、他の素材の飾りもついていたことが窺える。簪は18世紀前半の享保年間から流行したと考えられており、煙管の年代と一致するのは興味深い。

⑧その他の中世遺物

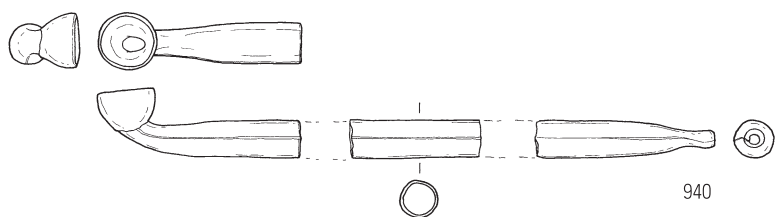
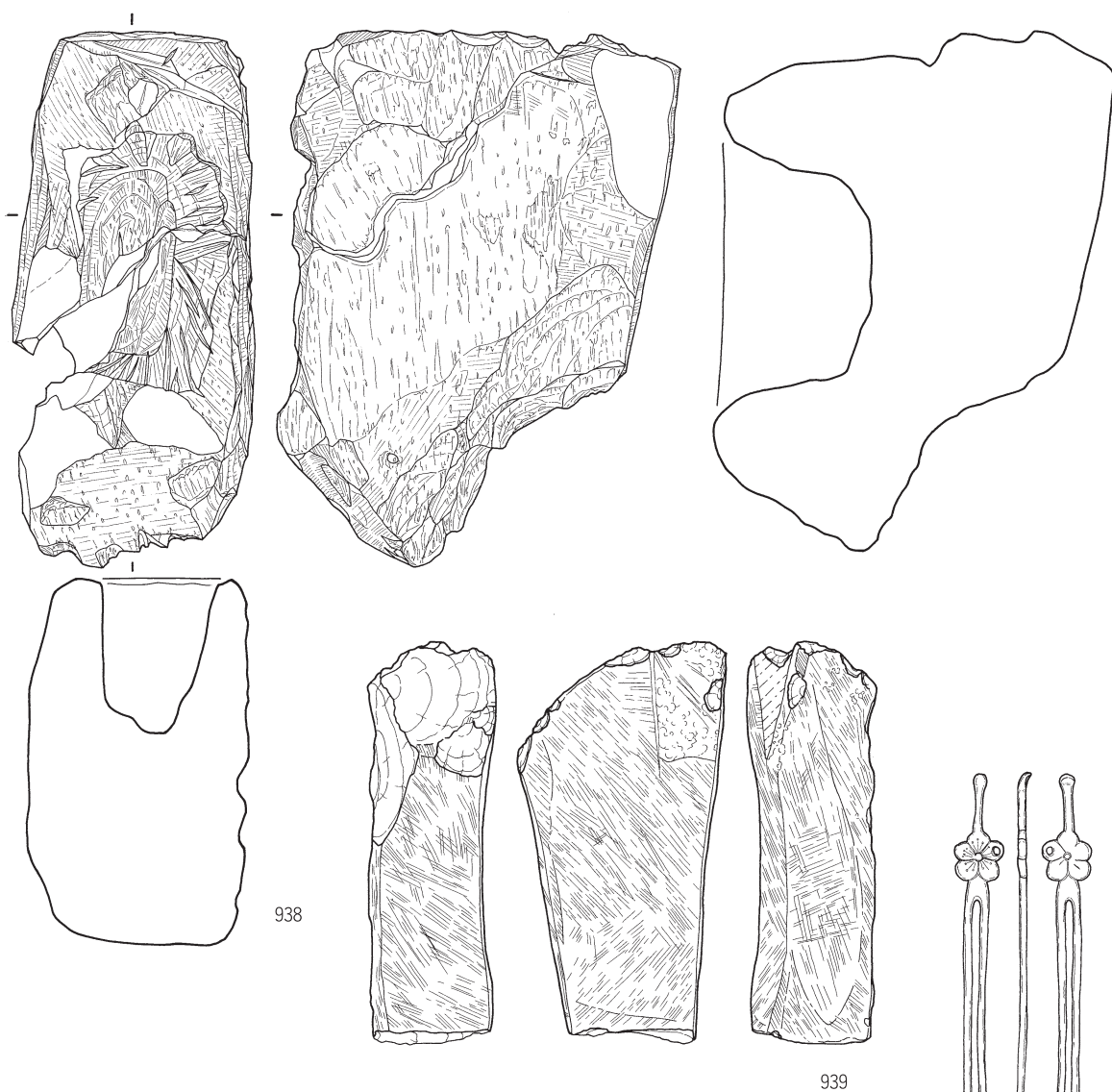
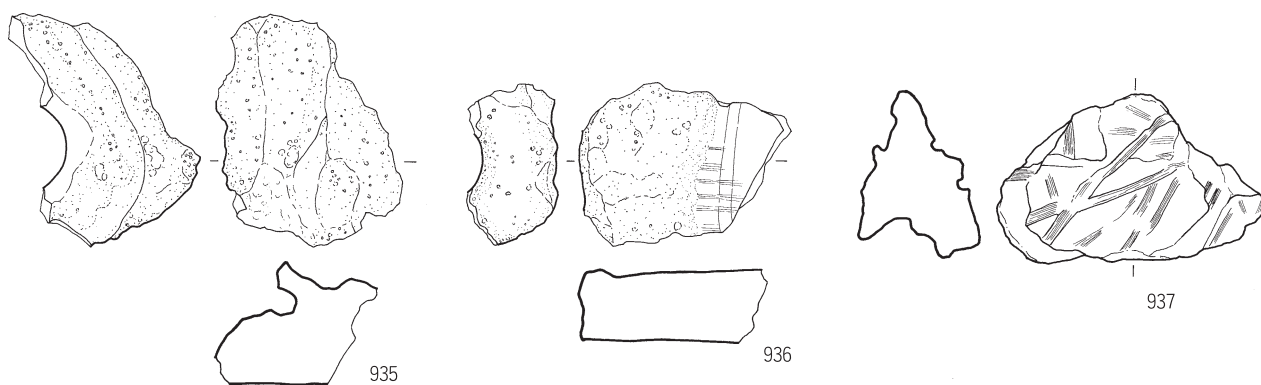
図化は出来なかったが、滑石製石鍋の破片が1点出土している。平安時代末から鎌倉時代に該当すると考えられる。

⑨その他の金属製品

鉄製品については全面が錆ついており、肉眼では形状を判別し難かったので、当センターのX線撮影装置を使ってエックス線写真撮影を行った。19点について撮影した結果、肥後の守(⑫)や金槌(⑪)など現代のものも含まれていたが、角クギ2点や断面が長方形の鉄製品もみられた。また、洪武通寶と判読できる鉄銭1点(⑲)や鉄滓と考えられる2点(①・⑦)も出土している。少なくとも中世まではさかのぼれるものから、最近のものまで含まれることが分かった。これらは、錆の付着が著しく図化するまでには至らなかった。



金属製品類のX線写真



第196図 中世以降の遺物（2）

第Ⅶ章 分析同定

(1) 山ノ中遺跡における自然科学分析

①放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

山ノ中遺跡の調査では、縄文時代後期前半の竪穴住居跡や土坑あるいは石組み遺構が複数検出された。この時期の竪穴住居跡がまとまって検出されたのは初めてである。

ここでは、これら遺構から検出された炭化種子や炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4425	遺構: 2号住居 その他: 9579	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4426	遺構: 2号土坑 その他: 18542	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4427	遺構: 4号土坑 その他: 11890	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄・酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4428	遺構: 5号住居 その他: 17497	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄・酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4429	遺構: 10号住居 その他: 20264	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4430	遺構: 12号住居 その他: 20656	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4431	遺構: 6号住居 その他: 17512	試料の種類: 炭化物・種子 試料の性状: コナラ属炭化子葉 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4432	遺構: 3号住居 その他: 9750	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: シイノキ属 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4433	遺構: 6号土坑 その他: 11959	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クワ属 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-4434	遺構: 8号住居 その他: 21621	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: サカキ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。

^{14}C 年代はAD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-4425	-27.01 $\pm$ 0.11	3775 $\pm$ 25	3774 $\pm$ 27	2280BC (15.5%) 2250BC 2230BC (2.0%) 2220BC 2210BC (50.7%) 2140BC	2290BC (93.0%) 2130BC 2080BC (2.4%) 2060BC
PLD-4426	-25.20 $\pm$ 0.11	3710 $\pm$ 25	3712 $\pm$ 26	2190BC (3.6%) 2180BC 2140BC (17.5%) 2110BC 2100BC (47.2%) 2030BC	2200BC (13.3%) 2160BC 2150BC (82.1%) 2020BC
PLD-4427	-24.64 $\pm$ 0.12	3780 $\pm$ 25	3780 $\pm$ 27	2280BC (20.9%) 2250BC 2230BC (5.3%) 2220BC 2210BC (13.8%) 2190BC 2180BC (28.2%) 2140BC	2300BC (95.4%) 2130BC
PLD-4428	-26.49 $\pm$ 0.12	3785 $\pm$ 30	3787 $\pm$ 28	2280BC (49.8%) 2190BC 2170BC (18.4%) 2140BC	2300BC (95.4%) 2130BC
PLD-4429	-25.01 $\pm$ 0.11	3720 $\pm$ 25	3718 $\pm$ 26	2200BC (9.6%) 2170BC 2150BC (15.8%) 2120BC 2100BC (42.9%) 2040BC	2200BC (95.4%) 2030BC
PLD-4430	-28.43 $\pm$ 0.12	3730 $\pm$ 25	3731 $\pm$ 27	2200BC (24.0%) 2160BC 2150BC (15.2%) 2120BC 2090BC (29.0%) 2040BC	2210BC (95.4%) 2030BC
PLD-4431	-26.83 $\pm$ 0.12	3740 $\pm$ 25	3742 $\pm$ 27	2200BC (54.5%) 2130BC 2090BC (13.7%) 2050BC	2280BC (3.3%) 2250BC 2210BC (92.1%) 2030BC
PLD-4432	-29.05 $\pm$ 0.13	3920 $\pm$ 25	3918 $\pm$ 26	2470BC (43.9%) 2400BC 2390BC (24.3%) 2340BC	2480BC (95.4%) 2300BC
PLD-4433	-31.27 $\pm$ 0.16	3935 $\pm$ 30	3936 $\pm$ 30	2480BC (48.1%) 2400BC 2390BC (20.1%) 2340BC	2570BC (6.5%) 2530BC 2500BC (88.9%) 2300BC
PLD-4434	-30.34 $\pm$ 0.12	3785 $\pm$ 30	3785 $\pm$ 28	2280BC (24.9%) 2240BC 2230BC (21.9%) 2190BC 2180BC (21.4%) 2140BC	2300BC (95.4%) 2130BC

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 $\pm$ 40年) を較正することである。

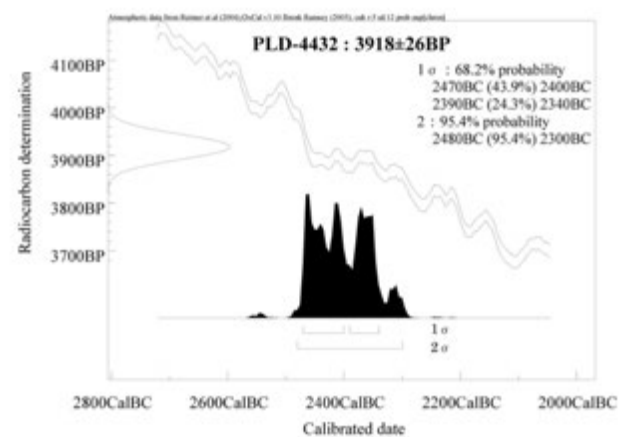
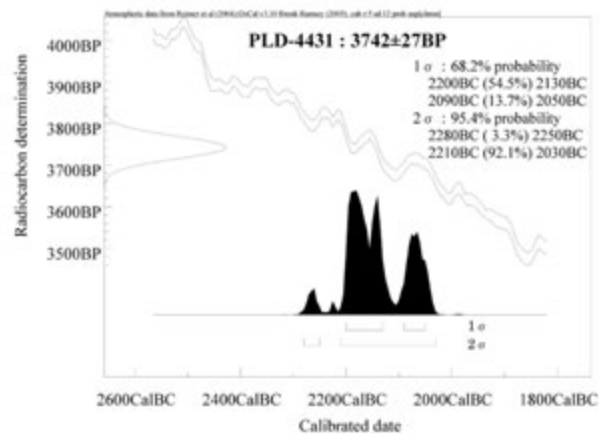
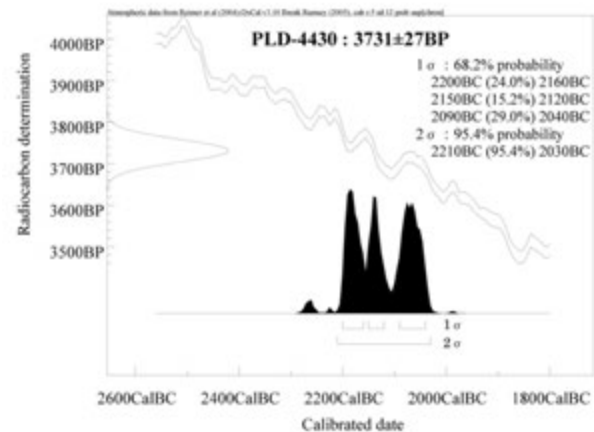
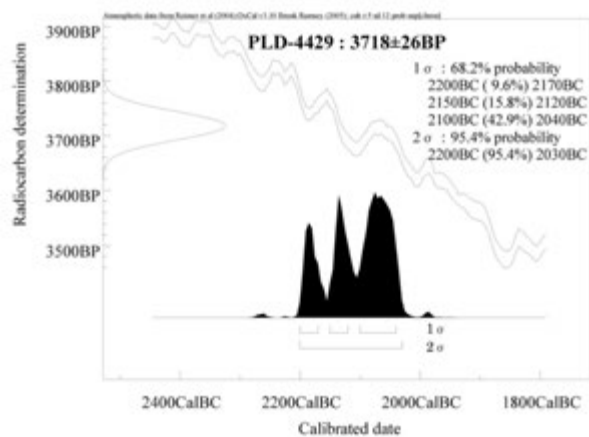
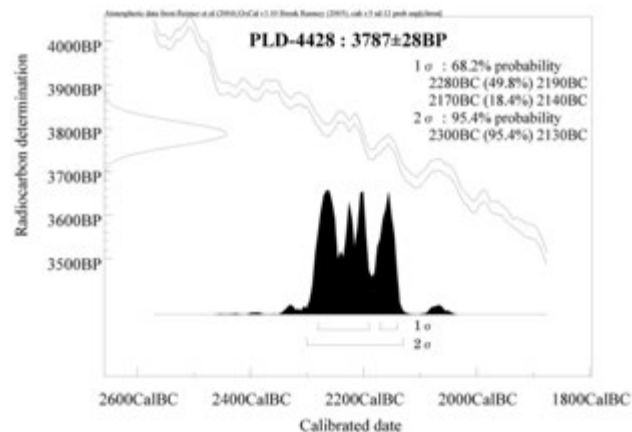
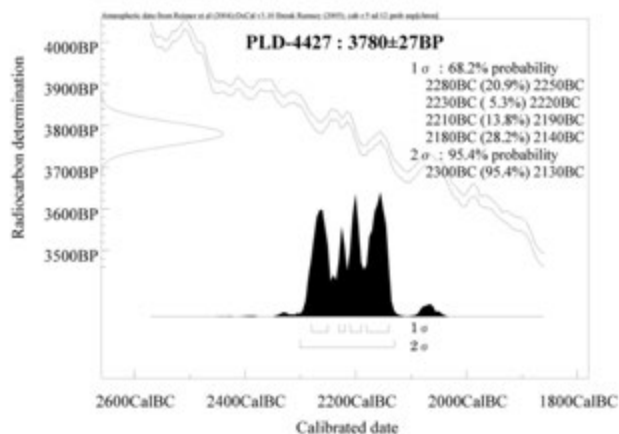
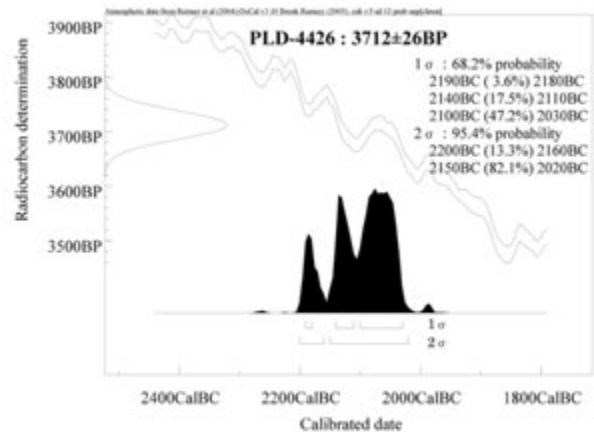
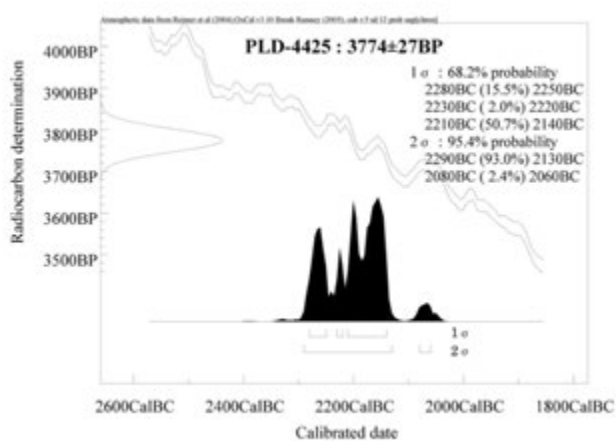


図 1. 暦年較正図その 1

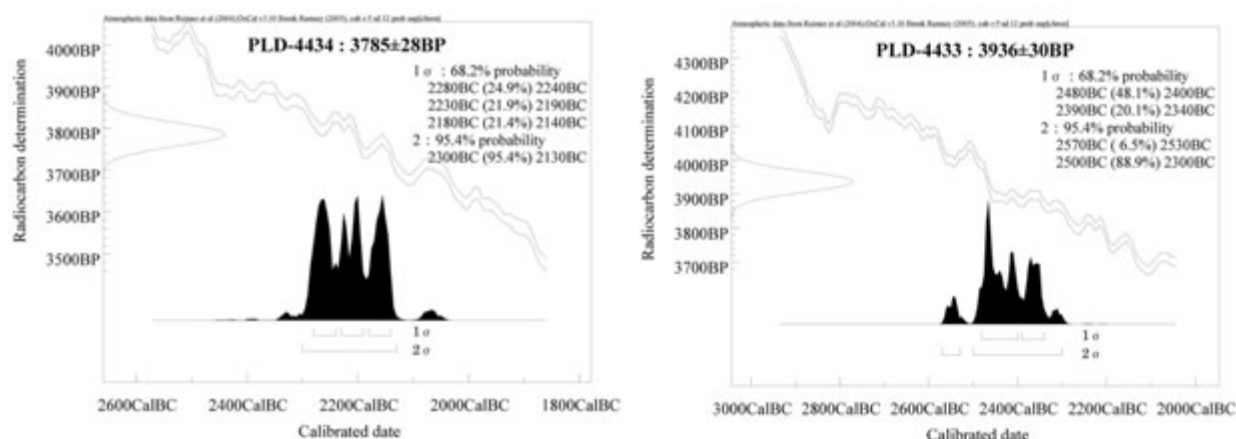


図2. 暦年較正図その2

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお, 1σ 暦年代範囲は, OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり, 同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は, その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し, 二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち, その確率が最も高い年代範囲については, 表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について, 同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち, その確率の最も高い年代範囲に着目すると, それぞれより確かな年代値の範囲 (アンダーライン部) が示される。

竪穴住居跡や土坑から検出された炭化物のうち, 炭化種子は当時食用として利用された一部であり, 生活していたいずれかの時期に収穫された食べ物残渣である。一方, 炭化材は, 複数年輪を形成することから, 最外年輪が少なくとも伐採年代を示すが, これ以外の年輪部は伐採以前の年代を示すこととなる。

住居跡あるいは土坑から出土した炭化種子の年代測定結果は, 概ね同様の年代値が求められ, いずれも確率の高い年代範囲に注目すると, 1σ 暦年代範囲ではBC2,280から2,030年の範囲, 2σ 暦年代範囲ではBC2,300から2,020年の範囲である。

一方, 8号住居 (No.21621; PLD-4434) の炭化材は同様の年代値が示されたが, 3号住居 (No.9750; PLD-4432) や6号土坑 (No.11959; PLD-4433) の炭化材の年代値はやや古い年代を示している。これは, 最外年輪以外の部分を測定したために起きる古木効果によるものと考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, *Radiocarbon*, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) *Development of the Radiocarbon Program OxCal*, *Radiocarbon*, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) *Radiocarbon* 46, 1029-1058.

②山ノ中遺跡から出土した炭化種実

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

山ノ中遺跡は、鹿児島県鹿児島市西別府町山ノ中に所在する。本遺跡は、縄文時代早期～近世以降にかけての遺跡であり、縄文時代後期前半の竪穴住居跡がまとまって検出された。ここでは、縄文時代後期前半の竪穴住居跡や土坑から出土した炭化種実を検討し、当時の利用植物の推定を試みた。

2. 試料と方法

炭化種実の検討は、2,5,10,12,6号住居および2,4号土坑の合計7試料について行った。各試料は、抽出済みでプラスチックケースに乾燥保存されており、肉眼および実体顕微鏡下で同定・計数を行った。なお、検討した7試料は、いずれも年代測定(AMS法)の試料として使用した。

3. 出土した炭化種実

検討した結果、同定されたのはいずれの試料もコナラ属炭化子葉であった。以下に、各試料の記載を示す。

2号住居(遺物取上げ番号9579)：1/2片(半割れ；2つ合わさった子葉が半分に割れた片方)が2個であった。1つは長さ13.0mm、幅8.0mm程度。もう1つは長さ11.3mm、幅7.0mm程度。

5号住居(遺物取上げ番号17497)：1/2片が1個であり、長さ15.0mm、幅11.1mm程度。

10号住居(遺物取上げ番号20264)：1/2片が1個と1/2片未満の破片が2個。1/2片のものは長さ12.2mm程度、幅9mm程度。なお、後2者は、本来同一のものが2つに割れたと考えられるので、2つ合わせて1/2片である。

12号住居(遺物取上げ番号20656)：1/2片が1個であり、長さ11.1mm、幅10.2mm程度。

6号住居(遺物取上げ番号17512)：当初、13号住居出土のNo.21058を分析した。No.21058は1/2片未満の破片(完形の1/4程度)が1個。本試料は、本来AMS用の試料であったが、処理段階で炭化物の回収ができず、測定不能であった。従って、代替試料の6号住居No.17512をAMS用の試料とした。No.17512には11個程の破片が含まれており、そのうち2個は完形の1/4程度を保つが、残りは小破片であった。大きさは、小さなもので2～3mm前後、大きなもので長径10mm程度である。全体では完

形換算して2個分以下と推定される。なお、2～3mm前後の破片は、微小過ぎて厳密には同定が困難であるが、大きな破片から欠け落ちたものと予想される。

2号土坑(遺物取上げ番号18542)：1/2片が1個であり、長さ12.0mm，幅9.9mm程度。

4号土坑(遺物取上げ番号11890)：1/2片が1個であり、長さ13.8mm，幅10.8mm程度。

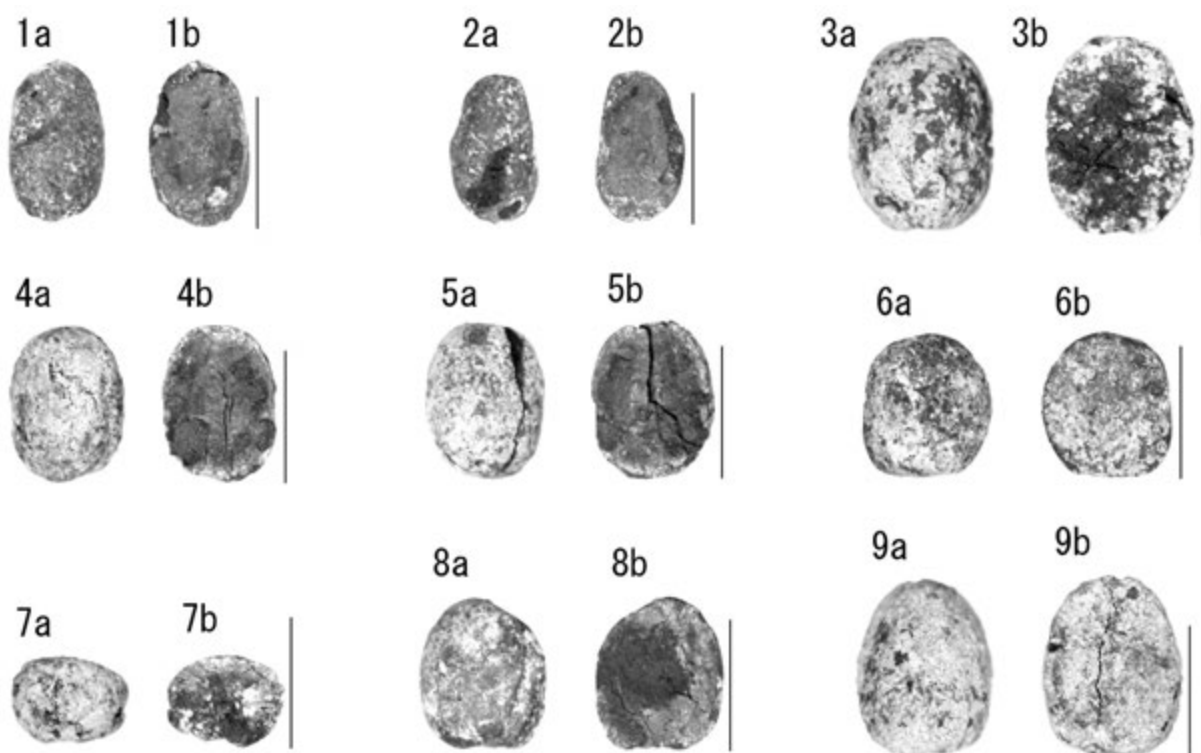
4. 形態記載

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉

側面観は卵形，卵状楕円形，楕円形などが含まれる。不明瞭であるが，表面には縦方向の低い皺がある。大きさは比較的まとまりがあるが，5号住居と4号土坑の子葉は他よりも大きく，複数種含まれる可能性がある。しかし，炭化子葉での種までの厳密な識別は困難である。

5. 考察

同定されたのは，コナラ属炭化子葉であった。コナラ属は落葉のコナラ亜属と常緑のアカガシ亜属を含み，いずれも果実は食用として有用である。まとまった出土量ではないが，複数の住居跡から出土しており，縄文時代後期前半の植物食糧の1つであったと考えて良いであろう。土坑から出



図版1 出土したコナラ属炭化子葉 (スケールは1cm)

1、2：2号住居 3：5号住居 4、5：10号住居 6：12号住居
7：6号住居 8：2号土坑 9：4号土坑

土したものは、貯蔵されていた可能性などが考えられる。

6. おわりに

縄文時代後期前半にはコナラ属が利用されていたと考えられ、当時の植物食糧の一端を知ることができた。

③山ノ中遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、縄文時代後期前半の竪穴住居跡（3号・8号住居）および土坑（6号）から出土し、年代測定が実施された炭化材の樹種同定結果を報告する。

2. 方法

同定は、炭化材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察して決定した。横断面は手で割り新鮮面を出し、接線断面と放射断面は片刃の剃刀を各方向に沿って軽く当て弾くように割り面を作成した。

走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

3号住居跡出土炭化材は常緑広葉樹のシイノキ属、8号住居跡出土炭化材は常緑広葉樹のサカキ、6号土坑出土炭化材は落葉広葉樹のクワ属であった（表1）。

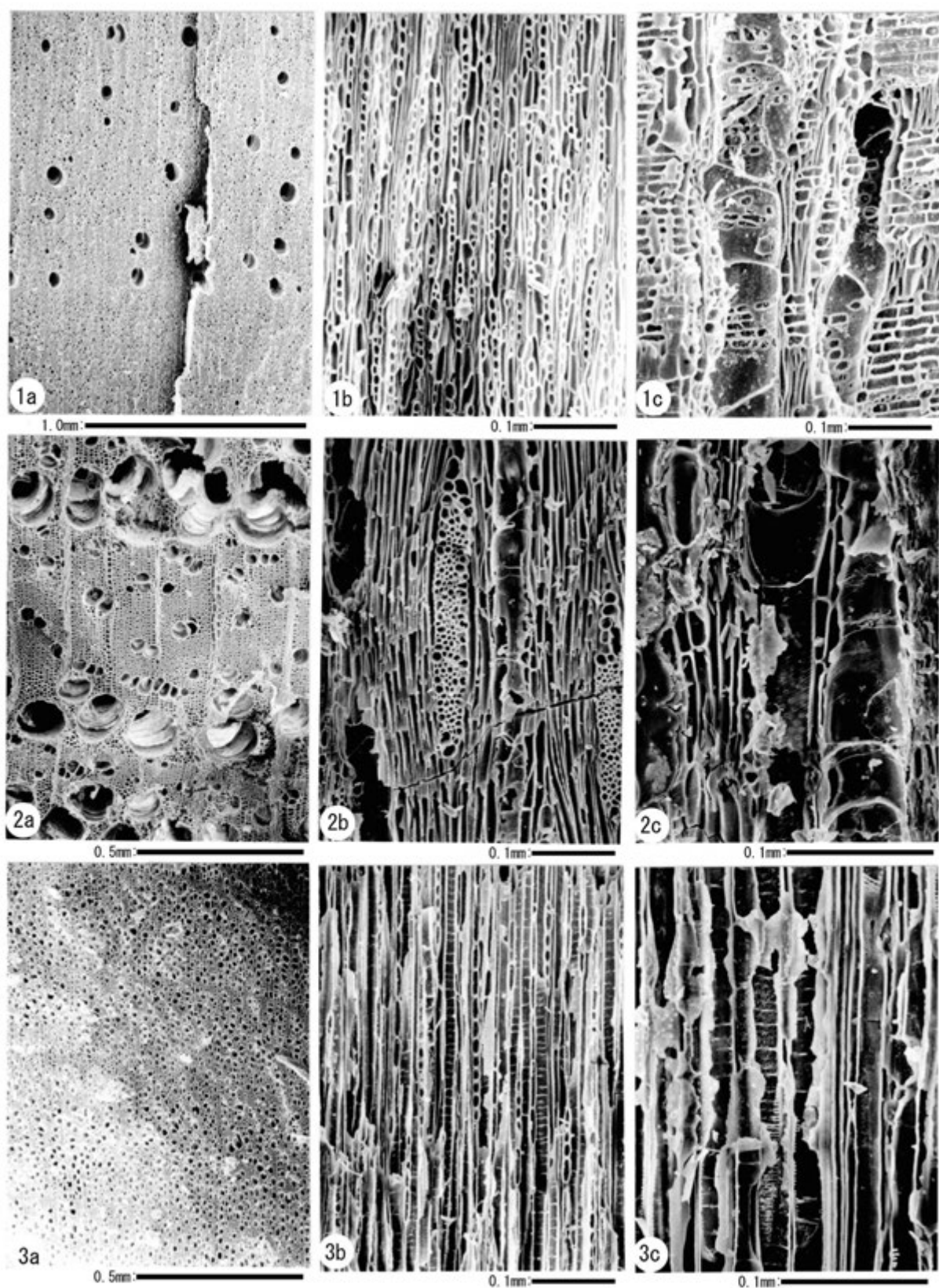
表1 炭化材樹種同定結果

遺構 遺物No.	樹 種	年代測定No.	備 考
3号住居 9750	シイノキ属	PLD-4432	破片，節部か？
6号土坑 11959	クワ属	PLD-4433	破片
8号住居 21621	サカキ	PLD-4434	破片

以下に同定根拠とした材組織と分類群の特徴を分類配列順に記載し、3方向の材組織の写真を提示した。

（1）シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図版1 1a-1c（3号住居 9750）

管孔は単独で分布し、やや小型の管孔が年輪の始めは間隔をあけて配列し、さらに数個が放射方向に分布し、年輪界では急に径を減じている。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。年輪始



図版1 山ノ中遺跡竪穴住居跡出土炭化木材組織の走査電子顕微鏡写真
 1a-1c：シイノキ属（3号住居 9750） 2a-2c：クワ属（6号土坑 11959）
 3a-3c：サカキ（8号住居 21621） a：横断面 b：接線断面 c：放射断面

めの管孔もやや小型で、典型的なシイノキ属のような環孔性は不明瞭であったことから、節部の材と思われる。

シイノキ属は暖帯に生育し高木となる常緑広葉樹で、照葉樹林の主要な構成樹種である。関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ(コジイ)と、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスタジイがある。材組織ではシイノキ属の放射組織は単列がほとんどであるが、スタジイは樹心部に限り集合放射組織が現れることがあり、ツブラジイは樹心以外でも現れる。当試料は小破片であるため、上記の識別はできないのでシイノキ属とした。

(2) クワ属 *Morus* クワ科 図版1 2a-2c (6号土坑 11959)

年輪の始めに大型～中型の管孔が1～2層配列し、その後は小型や非常に小型の管孔が集合し斜状・波状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞がある。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。果実は食用となり、材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高い有用材である。縄文時代の遺跡からクリと同様に出土頻度が高い樹種である。

(3) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版1 3a-3c (8号住居 21621)

非常に小型で多角形の管孔が密に分布する散孔材である。道管の壁孔は交互状～階段状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔、内腔には水平のらせん肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材は強靱・堅硬で割裂困難であり丈夫である。

4. 考察

当遺跡では縄文時代後期前半の竪穴住居跡がまとまって検出され、その2軒の炭化材2試料はいずれも常緑広葉樹のシイノキ属とサカキであった。炭化材は小さな破片で本来の用途は不明であるがその樹種は照葉樹林に普通に見られるシイノキ属とサカキであったことから、当時の遺跡周辺には当地域の自然植生である照葉樹林が広がっていた様子が想像される。

土坑から出土した炭化材は、落葉広葉樹のクワ属であった。縄文時代を代表する利用樹種としてクリは非常に有名であるが、クワ属の材もクリと同様に非常に耐久性に優れた有用材で出土事例も多く、その果実は食用になる。当遺跡においても、クワ属の材が利用されていた事が判り、果実は検出されていないが食用に利用されていた可能もあると考えられる。

(2) 胎土分析

京都大学大学院科学研究科 清水芳裕

(1) 1, 3, 5, 8, 162, 181, 188, 212, 256, 293の10点の土器の胎土

- 1 石英よりも長石とくに斜長石が多い——斜長石は異帯構造の結晶（火山性岩石の特徴）が多数を占める。
- 2 普通輝石、紫蘇輝石等の輝石類が多い。
- 3 溶結質の火山岩が比較的多い。
- 4 火山性のガラスが少量ずつ含まれる。

——以上4点の要素がほぼ共通しており、これらは火山性の岩石鉱物が堆積物の主体を占める地域の特徴といえる。

(2) 26と25の土器は、上記の10点とほぼ類似するが、以下のようなわずかな差が見られる

- 1 26の土器は、石英が長石より多く含まれる。
- 2 25の土器は、輝石をやや多く含む。

(3) 資料82の土器は、他の12点の土器と比較して全く異なる要素を持つ。

- 1 深成岩の岩片、深成岩の成因を示すパーサイト構造のカリ長石、黒雲母などを多く含む——これらは深成岩の堆積物に特徴的な要素
- 2 火山性の堆積物の特徴は、火山ガラスなどがわずかに認められるにすぎない。

(4) 田上川の砂

- 1 異帯構造の斜長石が多量で、石英よりも多いという特徴を持つ。
- 2 火山岩の岩片、火山性ガラス、輝石類が多く含まれ、火山性堆積物の特徴を示す。

——以上の2点は、1, 3, 5, 8, 162, 181, 188, 212, 256, 293の資料との共通性がきわめて強い。

詳細に比較すると、この10点の土器より川砂の方が、火山岩の岩片や輝石類の含有率が高いが、それは岩石中の砂のほうがより強く風化されている結果であろう。

(5) 26と25の2点の土器は、1, 3, 5, 8, 162, 181, 188, 212, 256, 293の10点の土器とわずかな差が認められるが、川砂の特徴と比較すると、地域差ではなく一群の要素の中での違いと考えておく方がよいといえる。

(6) 資料82の土器は、田上川の砂の要素とも異質で、製作地が異なることを示している。

(3) 鹿児島県山ノ中遺跡の ^{14}C 年代測定

学術創成研究グループ

鹿児島県鹿児島市山ノ中遺跡縄文後期土器付着物の ^{14}C 年代測定を試みた。試料は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて、藤尾慎一郎とともに、小林謙一が、他の遺跡とともに採取した。山ノ中遺跡からは土器8個体から採取した。前処理した結果、土器付着物の一部は、土壌等不純物の混入が多く、炭素量が十分ではないと判断され、結果的に土器付着物3点について結果を得ることができた。

測定できた土器は、以下の通りである。

KAMB-153は、縄文時代後期指宿式土器(遺物番号266注記No.6256)の口縁部外面の沈線内に付着していた煤状の炭化物である。KAMB-154は、同じく指宿式土器(遺物番号145注記No.19844)口縁部外面の付着物である。KAMB-156(遺物番号6)は、縄文後期前半の口縁部外面沈線内に付着している煤状炭化物である。

1 炭化物の処理

試料については、補注に示す手順で試料処理を行った。(1)前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において新免歳靖、(2)燃焼と(3)グラファイト化の作業は、(株)パレオ・ラボ社に委託した。

2 測定結果と暦年較正

AMSによる ^{14}C 測定(株)パレオ・ラボ社(機関番号P L D)へ委託した。測定結果については、補注2に示す方法で、補正し、較正年代を計算した。

3 測定結果について

暦年較正年代についてみると、較正年代で、266(KAMB-153)は、紀元前2290-2140年に含まれる可能性が95%で、145(KAMB-154)は紀元前2235-2135年に含まれる可能性が72%で、KAMB-156はやや新しく、紀元前2065-1920年に含まれる可能性が72%である。筆者のこれまでの測定(今村ほか2004)からみると、前者は縄文後期前葉ころ、6(KAMB-156)は後期中葉ころの時期ととらえられる。

この分析は、平成17年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」(研究代表今村峯雄)の成果である。

本稿を草するにあたり、暦年較正については今村峯雄氏のご教示を得た。感謝します。

(文責 国立歴史民俗博物館 小林謙一)

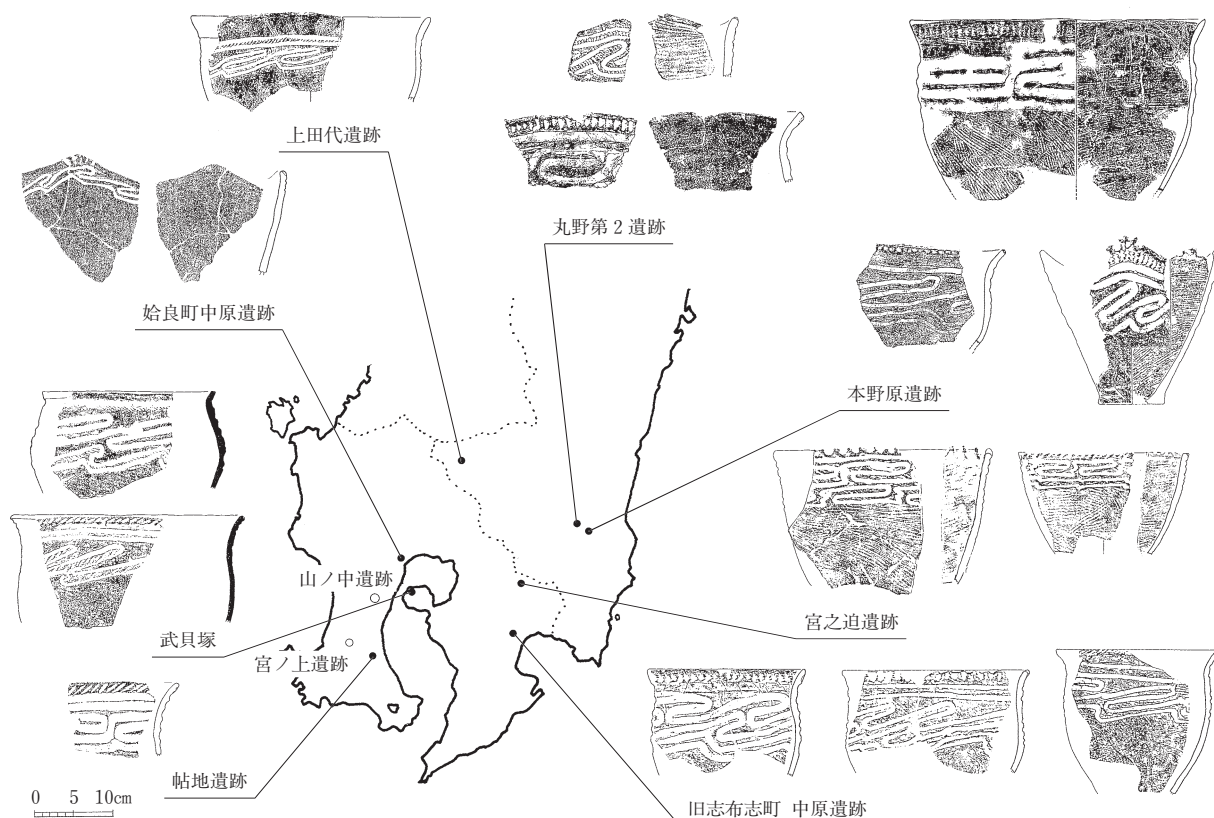
第七章 調査のまとめ

山ノ中遺跡の発掘調査成果については、本文および報告書抄録で提示してあるので、そちらを参照していただくこととして、ここでは特に課題となる出土土器を中心に記していきたい。なお、子どもたちに向けて山ノ中遺跡の概要を記すことによって、まとめに代えることとする。

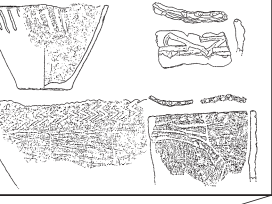
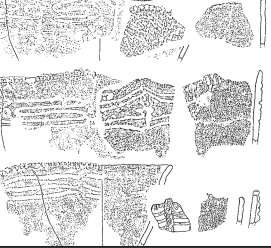
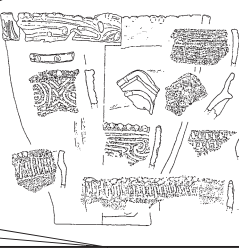
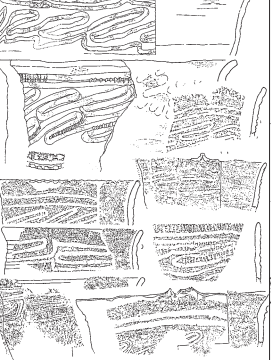
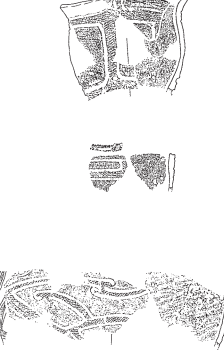
まず、土器についてみていくと、山ノ中遺跡出土土器をⅠ～Ⅴ類に分類した。Ⅴ類を除くそれぞれの類は、時間的な変遷を示すのではなく、系統を表している。すなわち、Ⅰ類は疑似縄文土器を含み、東側の影響が強い土器である。Ⅱ類は磨消縄文土器そのもの、もしくは、その影響の下に製作されたと考えられるものである。Ⅲ類が西海岸側の南福寺式土器や出水式土器の系譜を引くものであり、Ⅳ類は指宿式土器である。

先に、層位的な出土状況を紹介することとする。山ノ中遺跡の出土土器を層位的にみた場合、H-18～20区とG区の一部の層位が参考となる。Ⅲb2層が暗黒茶褐色を呈して鍵層となり、その下のⅢb3層と上位のⅢb層及びⅢa層に分けられる。第198図で示したものは、Ⅲb2層がはっきりする場所での層位と主な土器を示している。各層で各類の土器が出土していることが窺えるが、最下層のⅢb3層にはⅣ類の指宿式土器が出土していない点は指摘できる。指宿式土器が他の土器より新しいといえるのであるが、国立歴史民俗博物館で土器に付着した煤を用いて、年代測定を実施していただいた結果は前章のとおりであり、指宿式土器の方が古い値を示している。どの様に扱って良いか戸惑うが、年代値のデータを増やすことによって検討した方がよいと考える。

ⅠA類とした土器は、これまで志布志市（旧志布志町）中原遺跡・鹿児島市（旧桜島町）武貝塚・川辺町宮ノ上遺跡で出土していたものと同類である。また器面調整が貝殻条痕で異なるものの、曾



第197図 山ノ中タイプの文様分布図

IIIa 層	 I A類					
IIIb 層		 II類				
IIIb2 層						
IIIb3 層						
層位 類別	I A類	I B類	II類	III類	IV類	V類

第198図 出土層位ごとの縄文土器

於市（旧末吉町）宮之迫遺跡にも同じ構図の文様があり、J類としている。水平に近い文様配置と縦線を蛇行させる点が、宮之迫遺跡での特徴である。中原遺跡ではII A類とIIC類とされているものの中にあり、口唇端部に刻目を入れ凹線が若干細くなったIIC類は、金色雲母を多量に含んでいるという点が異なる。同じ遺跡の中で時期差と地域差を指摘できそうな資料である。武貝塚では第I群2類土器のb類として、入組状渦卷文の系譜を引くものとしている。武貝塚では最下層で出土しており、少なくとも橋牟礼川タイプの指宿式土器や出水式土器系統の土器よりは古いということが確かめられている。なお、武貝塚と始良町中原遺跡では指宿式土器と考えられる土器にも大波文と小波文が描かれており、同じ文様が長い期間の中で使われたことが窺える。第197図のように、宮崎県でもえびの市上田代遺跡や田野町丸野第2遺跡と本野原遺跡で大波文をモチーフとした文様の土器が出土しており、分布域が宮崎県南部に広がっていることがわかる。この文様を「山ノ中タイプの文様」と呼ぶことにして、今後の研究に供したい。山ノ中タイプの文様は一時期を画するようなものではなく、後期前半の土器の一部に現れる文様であり、この文様の土器だけで一遺跡を構成するというものではない。なぜ、この文様が時間的にも空間的にも広がりがあるのかという点が、最も大きな課題である。一つの考え方として、土器をつくる家系の人が集落を回りながら土器をつくり、世代を越えて同じ文様を採用し続けたということも想定できるが、大いに議論していきたい。

I B類土器は様々なタイプのものが含まれ、一つの名称で把握することはできない。これまで南九州の縄文時代後期前半の土器が、「岩崎上層式土器」や「綾式土器」としてひとくくりにできなかった状況を端的に示していると考えられる。すなわち、各土器の個性が強く、同じ時間枠の中で多種多様な形態や文様をもっていたことが窺えるのである。特徴的な文様に対しわかりやすい名称を与えることによって、もつれた糸を1本1本ほぐすように検討していくことが必要であると考えられる。

II類土器は回転施文の技法をもつものであり、南九州の伝統的な土器製作の中には無かった文様である。磨消縄文土器として瀬戸内地方および東九州地域の影響下にあるもので、福田K II式土器の次に位置づけられる成立期の縁帯文土器に相当する。幸泉満夫氏と幸泉文子氏は、これまで資料数の少なかった小池原下層式土器に置き換わるものとして、大分県日出町橋詰遺跡を標式とする「橋詰式土器」を提唱している。そして、九州島内で21遺跡を確認し、橋詰式土器の分布の中心が東九州および北九州にある点を指摘している。さらに、高知県松ノ木遺跡と山口県神田遺跡で橋詰式と松ノ木式土器が一緒に出てくることから、時間的な併行関係を明らかにしている。本遺跡でも松ノ木式土器に類似した土器が一緒に出土していることから、そのことを追認する資料となった。山ノ中遺跡で出土したII類土器も橋詰式土器や松ノ木式土器に該当するものと考えられるが、胎土に火山ガラスを含んでいる点や、ネジリ紐をもっている点など、南九州的な要素を持ち合わせていることから、名称については今後検討していかなければならない。山ノ中遺跡を含めた南九州の人々が、磨消縄文土器を模倣してこの様な土器をつくったとするには細部まで精巧にできており、磨消縄文土器のつくり手が南九州でつくった土器である可能性も含めて今後の課題としたい。

III類土器は南福寺式土器や出水式土器など、西海岸側の系譜を引く土器である。南福寺式土器は熊本県水俣市南福寺貝塚の下層から出土した土器を標式とするもので、中期の阿高式土器からの系譜が追えることは古くから言われてきた。また、南福寺式土器に続く出水市出水貝塚出土土器を標式とする出水式土器も同様である。これらの土器は九州西海岸側を主体に発達したものであり、初

期の段階では胎土に滑石を含む点が地域性を示している。南福寺式土器は瀬戸内地方の中津式土器と併行し、縄文時代後期初頭に位置づけられるということを田中良之氏が指摘している。一方、川崎保氏は南福寺式土器を1式・2式に細分し、それに続く出水式土器が瀬戸内地方の福田KⅡ式土器の影響を受けているということを指摘している。この様に南福寺式土器と出水式土器は瀬戸内地方の土器との関係が指摘されているが、山ノ中遺跡では中津式土器や福田KⅡ式土器はみられず、成立期の縁帯文土器と呼ばれる磨消縄文土器しかなく、課題として残った。

Ⅳ類土器は指宿式土器である。水ノ江和同氏は指宿式土器の研究史と課題を的確にまとめており、さらに細分と編年についても言及している。標式遺跡である橋牟礼川遺跡出土の指宿式土器は、いわゆる「人」の字形をモチーフとするものであり、志布志市（旧志布志町）中原遺跡で出土した指宿式土器に類する土器に初源を発するとする。それが二枚貝刺突の疑似縄文を施文するものから疑似縄文がなくなって平行沈線だけのものになり、ついに橋牟礼川タイプの指宿式土器が成立するとしている。この中には、靴形文様を基本とする成川タイプの土器が入る余地はなく、阿高式系の変遷上に位置づけられることから、指宿式土器とは別個のものと考えべきことを示唆している。なお、三輪晃三氏は水ノ江氏のいう「成川タイプ」を「成川K式」と一歩進めた形で表現し、宮之迫段階に後続するもので、綾村A式・B式や岩崎上層式に併行するものとしている。今回山ノ中遺跡で出土した指宿式土器は靴形文を主体とし、いわゆる「人」の字形のタイプは全くみられない。

胎土からみた山ノ中遺跡の土器

今回遺物指導をして下さった清水芳裕先生のご好意で、山ノ中遺跡出土土器13点と眼下に流れる田上川採集の砂を薄片にして偏光顕微鏡による鉱物分析をやっていただいた。結果は前章のとおりであり、大きく火山性の岩石鉱物が堆積物の主体を占める地域と、深成岩の堆積物に特徴のある地域の胎土が存在することが明らかとなった。田上川の川砂は火山性の堆積物であり、深成岩の鉱物を含む土器もしくは混和材が山ノ中遺跡に持ち込まれた可能性が高い。全ての土器を分析したわけではないが、肉眼による金色雲母を含む胎土が深成岩であるならば、全体の6%近くが山ノ中遺跡に持ち込まれた可能性があり、縄文土器は各集落でつくられたとするこれまでの見解に疑問を投げかけることとなった。鹿児島県内で深成岩に含まれる金色雲母が多量にみられる河川は限られており、本土では北薩地域の紫尾山系と大隅半島南部の国見山系しかなく、山ノ中遺跡出土の土器胎土もどちらかのものだと考えられる。本遺跡出土土器に金色の雲母が含まれるのは、Ⅰ類土器とⅢ類土器があり、金色雲母の粒子の大きさが違う点と、それぞれ系統が異なることから金色雲母の産出地も違うのではないかと考えられる。Ⅲ類土器の金色雲母は粒子が細かく、西海岸側の花崗岩産出地と関係があるのではないかと考えられる。一方、Ⅰ類土器については磨石の花崗岩も含め同じ場所から移入されたものと考えられ、花崗岩が土器胎土や磨石に使われる率が高い地域は大隅半島南部であるので、この地域から運ばれた可能性が高い。土器そのもの、もしくは混和材が運ばれたのが課題である。

南九州では、岩崎下層式土器→岩崎上層式土器→指宿式土器と型式変化する系統と、南福寺式土器→出水式土器と型式変化する系統とが、地域を異にして併存していたことは古くから知られていた(河口1957)。山ノ中遺跡は両地域の間地点に位置し、同じ遺跡の中で両方の系統をもつ土器が出土している。今回のまとめで、これらの課題を扱うにはあまりにも大きすぎる問題であり、今後

これまでの調査事例や資料の検討を踏まえた上で、縄文土器は何時、何処で、誰がつくったのかを明らかにしていきたい。

住居の変遷

住居跡内で出土した炭化物による年代測定値は、前章のとおりである。樹木の炭化物を用いた3号住居跡と6号住居跡、8号住居跡は、2,470B.C.と2,480B.C., 2,280B.C.という若干古い年代値であるが、木の実で測定した結果はほぼ安定している。木の実は1年ごとに落ちるのに対し、樹木は100年以上経つものもあることから、年代測定には木の実の方が有効であると考ええる。樹木で測定した3件を除くと、2,280B.C.から2,090B.C.というほぼ200年間の安定した数値が得られ、その中で3時期ほどのまとまりがある。最も古い数値が2,280B.C.であり、5号住居が該当する。次に古い年代が2,210B.C.から2,180B.C.であり、2号住居・6号住居・17号住居が該当する。最も新しい年代値は2,100B.C.から2,090B.C.であり、10号住居・12号住居・15号住居が該当する。これらの年代値に基づいて住居配置をみると、標高の低い方から次第に高い方へ移動していることが窺える。また、出土土器をみるとⅢ類土器の古手やⅠ類土器の貝殻刺突のものから、Ⅳ類に類似するもの、そしてⅣ類の指宿式土器へと推移している様子が窺える。山ノ中遺跡の存続期間は、年代値どおりそれぞれ70年間と80年間の断絶した期間があったのか、それとも他の住居跡がその期間を補っていたのかが残された課題である。このような問題点はあるが、出土土器と遺構配置を基に年代測定値のない住居跡をあてはめると、古い段階が1号・3号・8号住居跡、中頃の段階が7号・9号・11号住居跡、新しい段階が4号・13号・14号・16号・18号住居跡と想定される。第46図に示してある。

土器の推定個体数

山ノ中遺跡は独立した地形の傾斜面にあり、生活空間と考えられるほぼ全域を調査した。また、生活した時期も縄文時代後期前半の約200年に限られており、各遺物の出土点数から当時の実態を把握するには有効である。土器の推定個数については、須藤隆氏の方法を借用し、8分割した底部の残存点数を数え上げた。その点数は、8/8:33点、7/8:4点、6/8:17点、5/8:25点、4/8:51点、3/8:96点、2/8:728点、1/8:2,514点であり、それぞれを乗じると、246/8, 28/8, 102/8, 125/8, 204/8, 288/8, 1,456/8, 2,514/8となる。全部を足すと4,981/8になることから、分子÷分母で約622点という数字が導き出された。一見多い点数に見えるが、200年間という期間を考えると、1年間に3点程度ということとなり、さらに一時期に生活していた軒数を考えると、年間一家族あたり1個程度の土器消費量ということになる。

河口貞徳 1957 「南九州後期の縄文式土器―市来式土器―」『考古学雑誌』42巻 第2号

川崎保 1991 「九州縄文時代中期から後期の土器編年 ―「阿高式系土器」研究の方向性―」『信濃』第43巻 第4号 信濃史学会

幸泉満夫・幸泉文子 2005 「九州の成立期縁帯文土器」『山口県立山口博物館研究報告』第31号 山口県立山口博物館

田中良之 1979 「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会

水ノ江和同 1993 「九州の縁帯文土器―九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題―」『古文化談叢』30集(上) 九州古文化研究会

三輪晃三 1998 「第5章 南九州縄文後期再論―武貝塚出土土器の位置付け―」『鹿児島県桜島

町武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書第16集 奈良大学文学部考古学研究室

宮崎県田野町教育委員会 2005 『本野原遺跡二』田野町文化財調査報告書第52集

宮崎県田野町教育委員会 1990 『丸野第2遺跡』田野町文化財調査報告書第11集

宮崎県えびの市教育委員会 1997 『田代地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第20集

喜入町教育委員会 1999 『帖地遺跡（縄文編）』喜入町埋蔵文化財調査報告書（5）

志布志町教育委員会 1985 『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財調査報告書（9）

末吉町教育委員会 1981 『宮之迫遺跡』末吉町文化財調査報告書2

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『中原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）

奈良大学文学部考古学研究室 1998 『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学考古学研究室調査報告書第16集

一子どもたちへ向けて一

発掘調査のきっかけ

現在西回り自動車道が通っている山ノ中遺跡は、工事前に下の道路から眺めると、急斜面にあるただの雑木林（^{ぞう きばやし}）にしか見えませんでした。なぜここが遺跡であることがわかったのでしょうか。その一つは、20ページの地図にあるように「小田城」と記されているからです。皆さんが住んでいる土地もそうであるように、土地にはそれぞれ名前がつけられ、その名前には由来があります。「○○城」「城ノ○」「○○堀」「堀ノ○」「陣ヶ○」「○○屋敷」「○○馬場」「野久尾・野首」などは、城や館に関係のある地名だと言われています。皆さんの周辺にもこのような地名がないか探してみてください。歴史を研究する方法の一つに、昔の書物を調べる『文献史学的手法』があります。

さらに地元の方々からお話を伺（^{うかが}）いますと、おじいさんたちが頂上付近を「ダイワ」とか「ホリ」と呼び、「昔は馬が走り回っていた」という話や、「刀や銭が埋められている」という言い伝えもあるようです。昔の人の言い伝えや行事などから歴史を探る『民俗学的手法』によっても、この付近にお城があったことがわかります。

そして、本当にその場所がお城であるかどうかを確かめるために実際登ってみますと、頂上を取り囲むように空の堀（^{から ほり}）が巡（^{めぐ}）らされていることがわかります。現在の地表面からもよくわかりますので、発掘調査を行えば建物の跡やその他の施設がはっきり出てくると思います。現地で測量したり、発掘調査して過去のことを探る方法が、『考古学的手法』と呼ばれています。

以上、3つのことからこの場所が城跡であることがわかっていたのです。西回り自動車道自体は、小田城跡の中心部を通るわけではありませんが、周辺にもお城の関連施設があるのではないかと推測（^{おん かん ざい}）されたので、文化財が埋まっている場所として遺跡地図に掲載（^{けいさい}）されていました。埋蔵文化財（^{まいざうぶん かざい}）は一度壊（^{こわ}）してしまえば、二度と元にはもどりませんので、大切な地元の歴史が消えてしてしまうこととなります。そうならないように「文化財保護法（^{ぶん かん ざい ほ ぽう}）」という法律があって、どうしても工事しなければならぬ時は発掘調査を実施して記録し将来に伝えていかなければなりません。山ノ中遺跡も法律の手続をした上で、平成6年度と7年度に発掘調査を行いました。

発掘調査でわかったこと

小田城が使われなくなってから西回り自動車道ができるまでは、山道が通っていて、山仕事や畑仕事に使われたと思われます。小田城跡関係の施設（遺構）や使われた道具類（遺物）は少なく、600年前頃の中国の焼き物やお金がみつかりました。それ以前の800年間は雑木林だったらしく、食糧としてのヤマイモや葛の根を掘り出したのではないかとされる穴がみつかりました。9世紀前半の平安時代初め頃には、土師器（素焼きの器）や須恵器（高温で焼かれた硬い器）を使った人々が暮らしていたようで、「在」という文字が書かれた土師器もみつかりました。当時、文字が書かれた器はどこでもあるものではありませんので、特別な場所だったのかもしれませんが。それ以前は、しばらく人が生活したあとはなく、1,800年前の弥生時代のおわり頃に短期間暮らした人々がいたようです。山ノ中遺跡が、生活の舞台として最も利用されたのが約4,000年前の縄文時代後期前半で、当時の暮らしぶりがよくわかります。それより以前は、約8,000年前の人が立ち寄ったぐらいで、ずっと森の中だったようです。

縄文人の暮らしぶり

放射性炭素14年代測定法という科学的な方法で測定した結果、山ノ中遺跡の縄文人たちは今からさかのぼること、4,286年前から4,096年前の約200年間暮らしていたことがわかりました。この時期の土器や石器が大量にみつかった山ノ中遺跡では、人々はどこに寝泊まりしていたのでしょうか？縄文土器が出てくる地層（Ⅲ層）を掘り下げてゆくと、黄色い軽石の薩摩火山灰層の上面がみえてきます。この面まで達すると土器は出てこなくなるのですが、部分的に土器が出てきて、しかも土の色も上部のⅢ層と変わらない所がありました。そこを丁寧に掘ってゆくと、深さ40cm・直径3.5mぐらいの円形のくぼみになりました。これが堅穴住居と呼ばれるもので、小さな深い穴が柱の木を埋めた部分で、中央のくぼみがイロリとして使われたようです。半地下式の建物であり、屋根は地面まで達していたようです。斜面にありますので、床面が水平になるように工夫してつくられていたようです。山ノ中遺跡では、このような円形の堅穴住居が18軒もみつかりました。それに、石で囲った炉の跡や、目的はわかりませんが穴を掘った場所が7か所みつかりました。

この当時の人々は、様々な文様を施した縄文土器を使っていて、土器の形や文様の違い、あるいは材料となる粘土に含まれる砂粒の違いから、その土器が使われた時期や地域が明らかになっています。山ノ中遺跡は、第199図にあるようにいろんな地域の土器が集まっていて、まるで交流センターのようです。現在も、西回り自動車道や県道、それに近くをJR九州鹿児島本線や九州新幹線が走っているのをみると、人が行き交うのにちょうど良い場所だったのかもしれない。

石でつくられた道具も、いろいろな種類のものがありました。植物や動物の一部を材料としてつくられた道具は、腐ってしまっていて今まで残っていませんが、石器だけでもある程度暮らしの様子うかがえます。他の縄文時代の遺跡と比較した道具の数が、以下のとおりです。山ノ中遺跡では、動物よりも植物に重きのある生活が営まれていたようです。

〔動作〕	〔道具〕	〔山ノ中遺跡での量〕
動物を捕る	石鏃（弓矢に使う石の矢じり）	少量
動物を解体する	石匙（つまみの付いた鋭い刃物）・剥片石器（鋭い石のかげら）・石斧の一部	少量
魚を捕る	石錘（石のおもり）	無し
食べものを煮る	土器	多量
木の実を調理する	石皿（うすのうようなもの）・磨石（きねのうようなもの）	多量

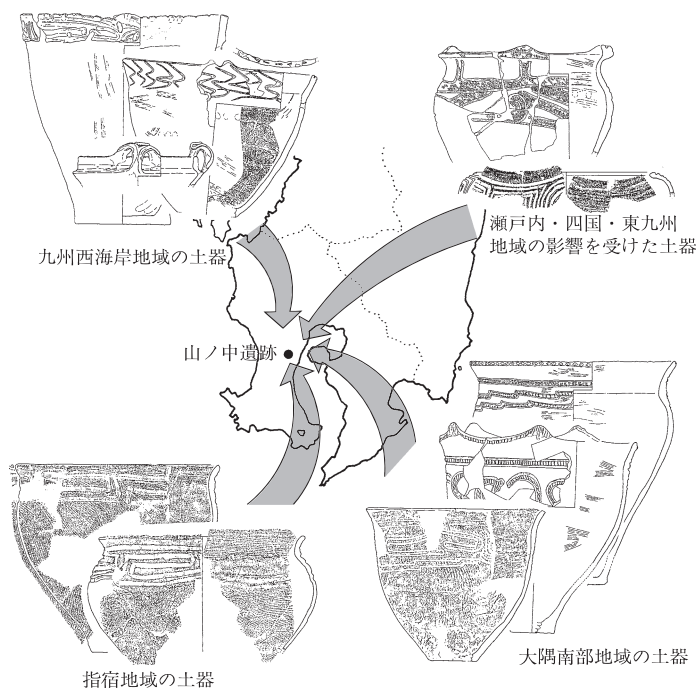
木を伐採する	磨製石斧（磨いてつくった石斧）	多量
木を加工する	ノミ形磨製石器（先の細い石ノミ）	多量
何かを敲く	敲石（トンカチみたいなもの）	多量
こする・磨く	砥石（磨くための石）・軽石	普通
石を切断する	擦切石器（こすったあとのある薄い石）	多量
おしゃれ	石製垂飾品（石のペンダント）・軽石製品	普通
何に使われたか不明なもの	円盤状土製加工品・安山岩の剥片	多量
祭祀的なもの	軽石加工品	普通

再利用の達人

山ノ中遺跡では多くの土器や石器が出土しましたが、その中には壊れたらすぐ捨ててしまうのではなく、何度も使用している例もいくつかみられます。77や250のように土器に孔が開けられたものは、ヒビが入った際にそれ以上壊れない様に2つの孔を開けて、ヒモでしばっていたと考えられます。また、壊れてしまった土器のかけらを加工して円盤状土製加工品をつくっていますが、何に使われたのかは解明されていません。一方、土器をつくる時の下敷きにしていたのが、カゴや敷物の廃品利用です。実物は残っていませんが、スタンプ状に土器の底に形が付いています。編み方を再現すると、デザインとしても優れていることがわかります。土器以外に目を向けると、割れた石皿を火をあつかう炉の枠に利用したり、使えなくなった石斧をトンカチのように何かを敲く道具として再利用したものが80点以上も出土しました。縄文人達は、まだまだ使える物は知恵や工夫をこらして、再利用していたことがうかがえます。限られた資源の中で暮らす私たちも、縄文人達の「もったいない」精神に学ぶことが多くありそうです。

山ノ中遺跡の発掘調査で明らかになったことは、以上のようなことですが、まだまだ解明できていない問題がたくさんあります。身近なところでは、服装についてもそうですし、トイレや風呂はどうしていたのかとか、けがや病気の時にはどのように治療していたのでしょうか。また、死を迎えた時はどこに葬られていたのかという問題も、今回の調査では明らかにできませんでした。さらに、なぜ山ノ中遺跡に住み始め、どのような理由で住むのをやめてしまったのかという大きな課題もあります。

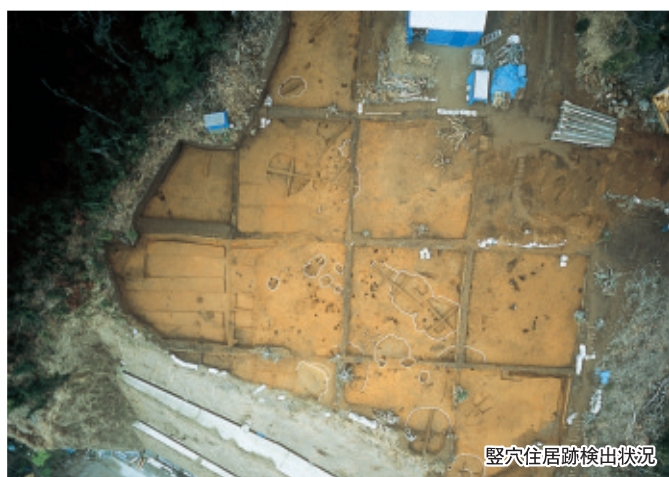
このように物言わぬ山ノ中遺跡ですが、みなさんが問いかけることによって、もっともっといろいろなことを教えてくれるような気がします。身近な遺跡や当時の人々に疑問点を投げかけることによって、皆さんの住む地域の歴史や当時の人々の考え方がどんどん解明され、これからどういう街づくりをするのか、どのような生き方をするのか考えるきっかけとなれば、素晴らしいことです。



第199図 山ノ中遺跡で出土した各地の土器

写真図版









2号住居跡の検出



2号住居跡埋土堆積状況



2号住居跡遺物出土状況



東側からみた2号住居跡



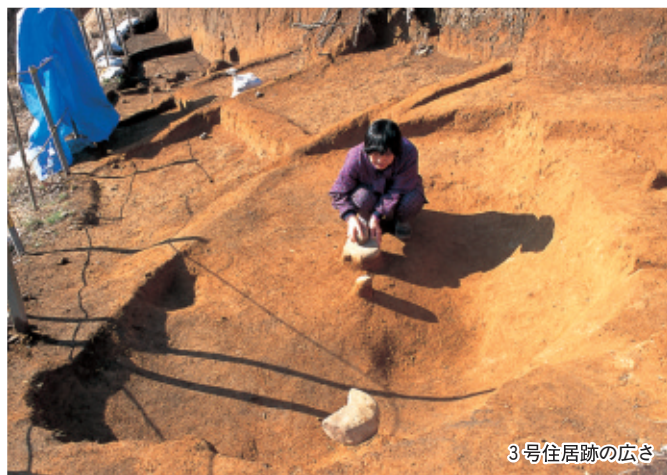
3号住居跡遺物出土状況



東側からみた3号住居跡埋土



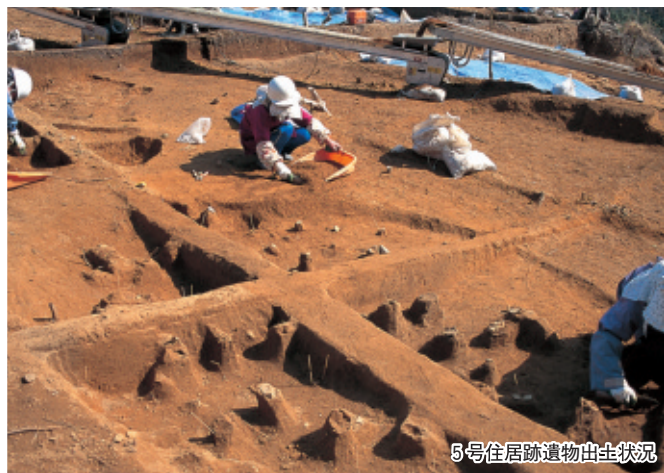
3号住居跡埋土堆積状況



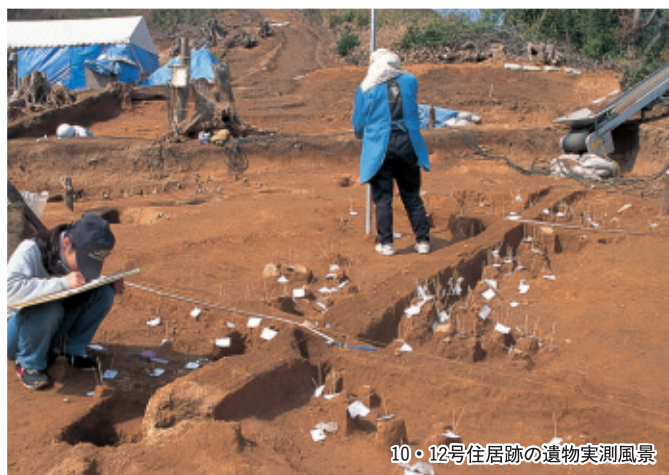
3号住居跡の広さ



北側からみた4・8号住居跡



5号住居跡遺物出土状況



10・12号住居跡の遺物実測風景



南側からみた10・12号住居跡



11号住居跡の清掃



南側からみた12号住居跡埋土



14号住居跡埋土堆積状況

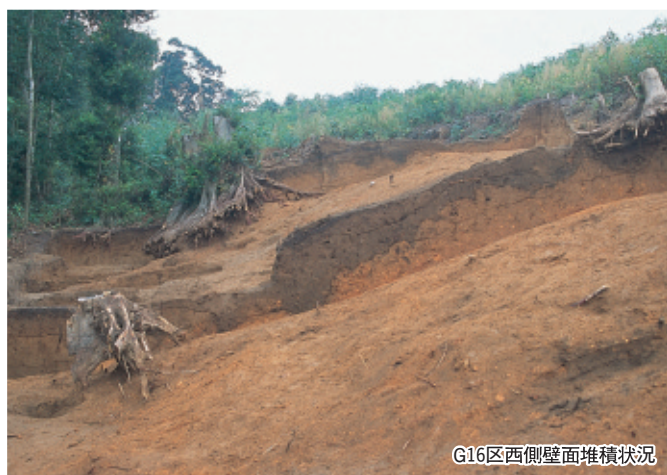
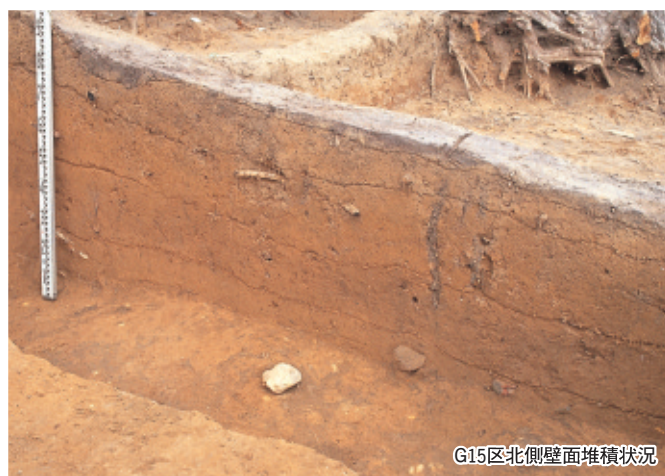


14号住居跡遺物出土状況











検出中のH20区掘り込み



H20区掘り込み埋土



H20区掘り込み検出状況



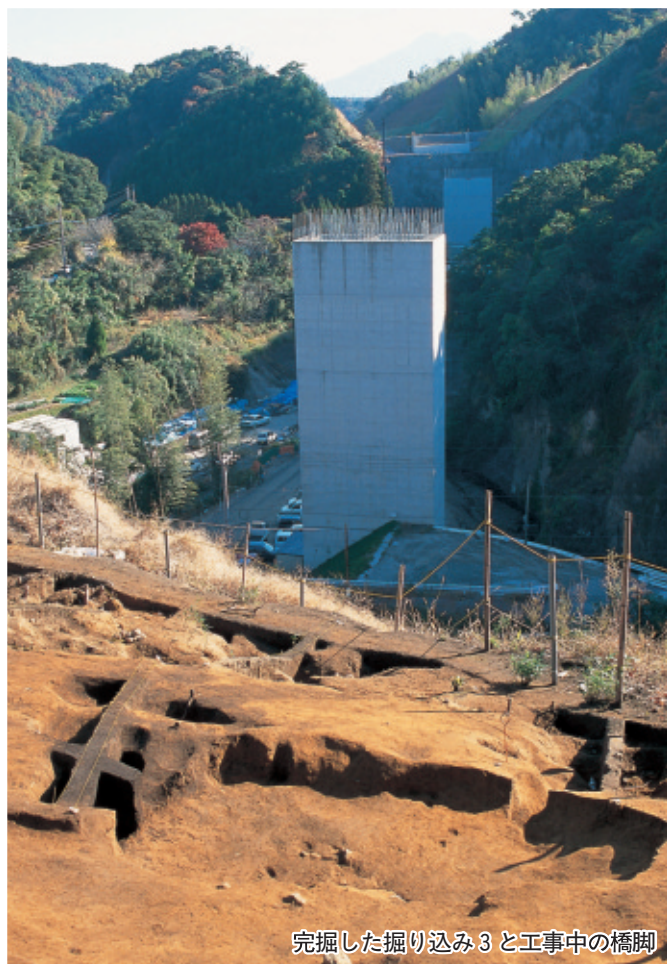
G17区III層上面の掘り込み



掘り込み3検出状況



掘り込み3埋土堆積状況



完掘した掘り込み3と工事中の橋脚



調査前のⅠ8区と小田城跡



Ⅰ8区調査風景



表土除去後のⅠ8区



自然地形のままのⅠ8区



軽石集中部と桜島



山頂の軽石集中部



東側からみたD5区調査風景



良好に残る小田城跡空堀



小田城跡の主郭部



雪の日の山ノ中遺跡



調査風景と生活環境



持って登ったペットボトルの水



調査区からみたブレハブ



加藤晋平先生を囲んでの調査スタッフ











I A類土器 5



I A類土器 21



I A類土器 25



II 類土器 181



I B類土器 82



IV 類土器 293



III類土器 247



IV類土器 273



I B類土器 156



I B類土器 235



V類土器 294



V類土器 295



V類土器 296





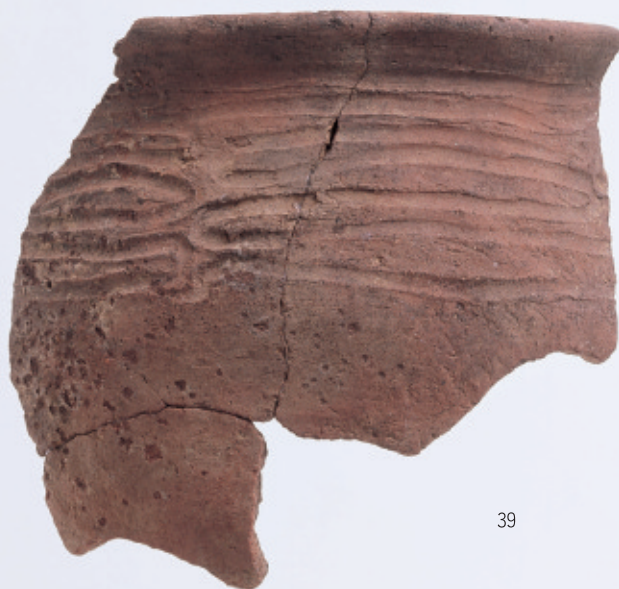
41



40



47



39



45



49

I B類土器





63



61



97



59



92



98



74

I B類土器









267



264



260



272



281



271



150



288



289

IV類土器



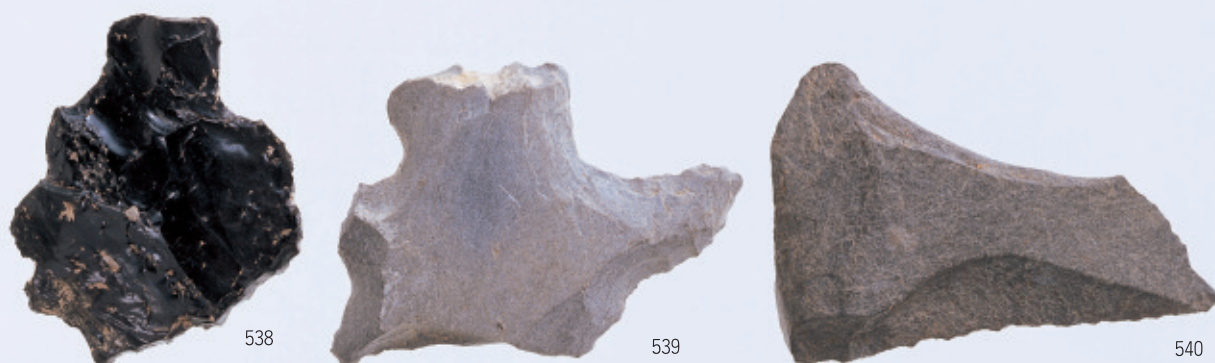
円盤状土製加工品



底部圧痕とモデリング，および白色付着物



石鏃と石製垂飾品



石匙























752



753



755



754



756



759



760



762



761



761の赤色顔料付着物

磨石類





石皿



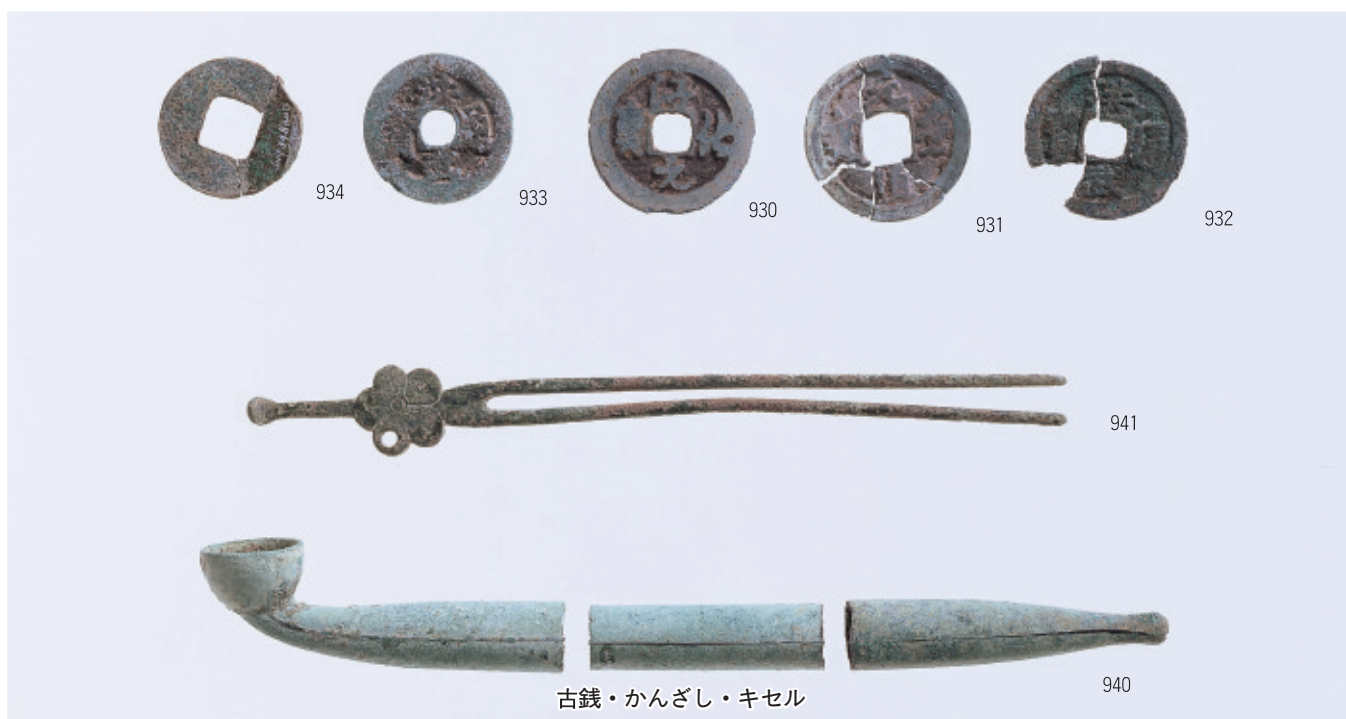
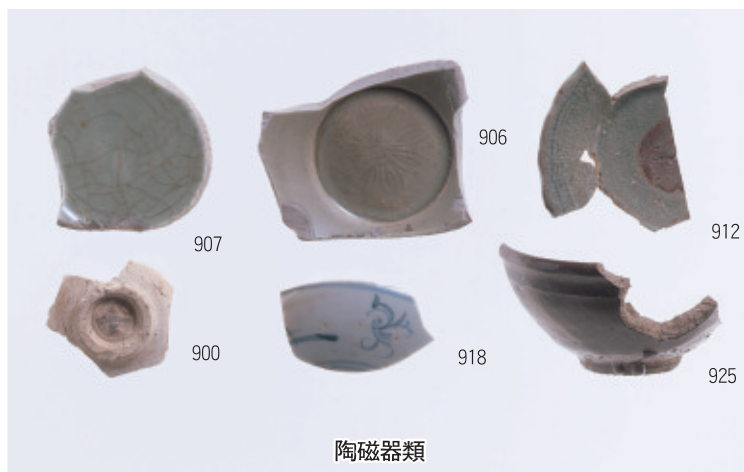
擦切石器および砥石







弥生時代終末の土器





毎日登り降りした108段の仮設階段

あ と が き

山ノ中遺跡の発掘調査から10年以上が過ぎ、今では立派な自動車道が通って多くの自動車が行き交っている。その名が示すとおり、本当に山の中での2年間にわたっての調査であった。108段の仮設階段を登りおえて、「まさかこんな所に…」という印象は、現地に立った誰もが抱いたことと思う。発掘現場に水も電気も無い状況は、全員で力を合わせてやらなければならないことも多く、いろいろな工夫と知恵を生み出し、かえって人と人との絆を強めたのではないと思う。ここで暮らした縄文人達の意識と、少しでも重なり合う部分を感じられたことがうれしい。

西回り自動車道関係の発掘現場としては、旧鹿児島市内で唯一ということもあり、多くのアルバイトの学生が参加してくれたし、見学して下さる方々也多士済々であった。二人の調査員はもとより、当時大学生であった何人かが遺跡に携わる仕事に就き、見学した小学生が大学で考古学を専攻していることも喜ばしい。

膨大な量で内容の濃い遺物の整理作業も、それぞれの能力を発揮して下さり、多くの方々の支えによって成された。ただただ感謝するのみである。私にとって山ノ中遺跡は「暖かい」という印象があり、私自身の幅を広げてもらったと実感している。北風を避けお日様を一身にあげる傾斜地形ということはもとより、携わって下さった方々の包み込んでくれるような心の暖かさである。理解ある上司や同僚、頼りになるスタッフ、見守ってくれた家族のお陰でここまでこれた。山ノ中遺跡が教えてくれることはまだまだこんなものではなく、より多くの方々に、「山ノ中」の名前を使っていただければ幸いである。

(文化財主事 東 和幸)

協力者

伊藤 充司	岩下 篤子	岩下フサ子	内 鈴子	大西 照子	大西 芳子	大保 裕子
大村ハツ子	大村ミツ子	大山カツ子	岡島 明子	奥 幸子	加藤 明子	神野ユキ子
家弓 慎介	勘場 聖子	木佐貫英治	黒木 弘海	久米村了子	小村 伊織	細田 保子
逆瀬川恵子	坂之上トシ子	坂之上レイ子	下野 市子	新田 洋美	新徳より子	末川七々恵
末吉 芳江	宗 達郎	早田 妙子	曾根崎かおり	竹下 淳子	立野 里沙	田中美恵子
田上 輝美	鶴丸 米子	寺園カズエ	寺本さつき	茶園 倫子	中園 良子	中野 智子
新穂 和子	新穂 春深	西 カズ子	西 カツエ	西 清子	野間 尚美	橋口そのみ
花園チエ子	林 由美子	東 一夫	東 香代子	東国原ゆかり	福永ヒロ子	福永ヨシエ
古川 陽子	別府 祐子	松平ひとみ	三谷加代子	南屋敷ムツ子	森園 キミ	森 敏子
山下 瑞恵	吉富 睦子	吉永エミ子	吉松 廣美	吉満ヒロ子	若松スズ子	和田 陽子

(五十音順・敬称略)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (103)

山ノ中遺跡

発行日 2006年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

印刷 凸版印刷株式会社 九州事業部

〒810-0022 福岡市中央区薬院1-17-28

TEL (092) 722-2000